

---

# 仮面ライダーディハーツ ~NINTH BIRTHDAY~

HUNGLY MIND

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディハーツ ～NINTH BIRTHDAY～

### 【Nコード】

N8665T

### 【作者名】

HUNGLEY MIND

### 【あらすじ】

“資質”を持つ少女がいた。世界に黄金のオーロラが現れ彼女は全てを失い、そして九年の時を経て物語は始まる。“最上の絆”・ディハーツ。それらを廻り、一人の少女は何を見、如何なる絆を繋ぐ……………？

## 第0 zero・話、レッツゴーライダーハート（前書き）

仮面ライダーディハーツ第0章となります。

舞台はあのレッツゴー仮面ライダーの世界に似た虚構の世界。全てのライダーが消えた世界に全てのライダーと最上の絆を結んだ主人公・ミナが訪れます。

時系列的にはメインとなる方舟の世界が終わって、終盤を迎えることですかね。（あと何年かかるかわからないけど）

では、最上の絆・仮面ライダーディハーツ始まります!!!

## 第0 zero・話、レッツゴーライダーハート

一つに思える世界は実は無数にある。

その中には仮面を被り悪と戦う“仮面ライダー”と呼ばれる戦士たちのいる世界がいくつ也存在していた。

仮面ライダーの敵は様々だ。例えば悪の秘密結社、例えば戦闘種族、例えば神様の軍団、例えば有り得ぬ世界に住む者達。

仮面ライダーの抱えるものも多岐にわたる。多くの苦難と葛藤を、仮面ライダーは味わってきた。

ただ、一つ言えること。それは……

「仮面ライダーは正義の味方!!」

ここは時の運行が変わり、悪の秘密結社ショッカーが世界を支配する世の中となってしまう世界。

『レッツゴー仮面ライダーの世界』によく似た、言うなれば『虚構のレッツゴー仮面ライダーの世界』だ。

今ある広場で残された仮面ライダーの最後の決戦が繰り広げられている。オーズ、NEW電王、そして一号と二号がショッカーの大手首領率いる怪人たちと戦っていた。

しかし、状況はマズイ。なんとと言っても数と規模が違う。相手は一

号・二号以降の仮面ライダーが生まれなかったせいで勢力を拡大させている。全ての悪が集結した大きな闇だった。

対する仮面ライダーはたった四人だけ。一号・二号の洗脳を心あるシヨツカーの科学者が解いてくれたとは言え、形勢逆転とまではいかなかった。

鳥類系グリード・アंकが落としたセルメダルとシヨツカーが開発したシヨツカーメダルにより誕生したシヨツカーグリードにより一号が、

死に神博士が変身するイカデビルの再生怪人により二号が手痛い攻撃を喰らう。

タトバコンボで戦うオーズとモモタロスを武器にして戦うNEW電王も背後からのシャドームーンとドラスの雷の攻撃を受けてしまった。

人々は今、仮面ライダーを守るために盾となろうとしている。仮面ライダーという希望をその手で守ろうと。

デルザー軍団に所属するジェネラルシャドウはそれを見て高らかに笑った。

「ふん、たった四人だけのライダーで何が出来る！」

「そうだ、仮面ライダーを守っても意味はないぞ！！ 貴様らをまた悪の前にひざまずかせてやる！！」

シヨツカーグリードも続いて勝ち目のない戦いをする仮面ライダー

を見下して嘲る。

「ら、ライダーたちは絶対にお前らなんかにはやられはしない!!  
俺達はライダーたちを守る!!」

四人の仮面ライダーの前に立ち、腕を広げて仮面ライダーを守る青年がそう宣言した。

周りにいる人々もそれに同調して「そうだそうだ!!」と叫び、ライダーたちを守る壁を強固にする。

「ありがとう、みんな……!! そうだ、ショットカーグリード!!  
四十年前も言ったな!? 私たちは決して悪には屈しない!!」

「どんな手を使っても、最後には悪に打ち勝つ!!」

一号・二号が立ち上がり、ショットカーグリードをキッと睨みつけて言い放つ。

オーズもNEW電王も、それに勇気付けられてなんとか立ち上がる  
ことが出来た。

「……仮面ライダーは正義の味方だ!! 必ず悪に勝つ!!」

四人の正義の味方、仮面ライダーはそう強く言って人々の支えを越えて、また戦場へ。

だが……

「いい言葉よね、私も全くその通りだと思っわ」

広場の怪人たちがいるところの真ん中あたり。そこに突然少女と少年が姿を現した。この台詞は少女のものだ。

そしてそれによるものかどうかはわからないが、その二人が現れた途端四人の仮面ライダーはロウソクの火が息で消えたようにフツ…と消える。

「……ツツ!？」

怪人たちは仮面ライダーが突然消えたことと、なんの前フリもなく自分たちのいると真ん中に人間が現れたことに動揺する。

その僅かな間に、少女は動く。手に持つ携帯端末に見えるものを指で押し操作した。

【ITEM TOOL・AKANE-TAKA!! TAKA  
- KANDOLOID!!-】

「さあっ、こっちはお願いね影虎！」

「はいはい……」

二人が現れた時のように現れた十枚ばかりのディスクのようなものをポケットから取り出したもので音を鳴らしながら少女は少女に役目を押し付ける。

少年は不承不承という感じで現れた缶のようなもののプルタブ部分を開く。

起動したディスクと缶はそれぞれ赤い鷹のような形態へと変わり怪人たちに突っ込む。

不意をつかれた少女達の周りにいた怪人たちはディスクと缶ディスクアニマル・茜鷹とタカカンドロイドに弾かれてしまった。

「だ、誰だ貴様ら！？ それに……何故仮面ライダーは消えた！？」

ショッカーグリードは動揺しながらも現れた少女と少年に高圧的に聞く。

だが、いくら高圧的に怒鳴っても二人の態度は余裕そのものだった。

少女 かくつか 赫塚ミナと少年

はるつめかげとら 春梅影虎は困り顔で話し合う。

「誰かってさ、ミナ。いい加減俺らもなんか作った方がいいんじゃないの？」

「うーん、魅力的な案なんだけど却下で。私にとっては仮面ライダーで充分なのよね」

「かあ、つまんねえなあ……。でもまあ、いいかそれで」

「いいのよ、『私は仮面ライダーだ』で……。……というかどいつもこいつも、事あるごとに聞いてきてなんなの？ 乙女にあんな台詞期待するもんじゃないの！！」



ビシッとミナは「何者か」と聞いてきたショッカーグリードに対して指さして怒鳴る。

怒鳴られたショッカーグリードは二人の会話が理解できず反応に困ったが、気を取り直して激昂した。

ミナはそれに露とも気圧されずに持つトランクボックスから何かを取り出す。

「私は仮面ライダーだ……うん、やっぱりこれで充分以上なのよね」それはベルトだった。仮面ライダーのベルト、変身のためのベルトだ。

「貴様、本当にライダーなのか!？」

ジエネラルシャドウが驚く。仮面ライダーは一号・二号が洗脳されたためV3も生まれなかったこととなり以降一人も生まれなかったことになっている。

何万年前もの昔にいたライダー、クウガや光の神の力をついでいるライダー、アギトなどさえも、この世界には存在しない。

しかも、ミナが腰に巻くベルトはどの仮面ライダーのものでもない。全く見たことがないものだ。

「仮面ライダーだって、それはなんとも言ってるでしょうに。みんな、安心して。この世界には……仮面ライダーがいる!！」

ミナは遠くで見ている人の耳まで届くように、高らかに誇るように言う。

あんな女の子本当に仮面ライダーなのかと訝しんでいた人々だが、その台詞を聞いて少しの間ザワザワとすると「仮面ライダー！ 仮面ライダー！ 仮面ライダー！」とコールを開始した。

「ミナ、こんだけ強けりやもう充分だと思っぜ？」

「私も、そう信じたいわね」

ミナは続けてディスクアニマル・茜鷹とタカカンドロイドを呼び出した携帯端末　　デイハーツールを右腕につけた腕時計に接続する。

またミナは時計につけたままでデイハーツールを操作しあるマークを浮かばせた。

それはディケイドのライダークレストに見られる縦の線とアンテナのようなものが作ったハートのライダークレストだ。

「変身！！」

胸の前で腕を交差させるかのような形をとりつつデイハーツールを殴ることでそのマークは押されミナはライダークレストを選択する。

【HENSIN!! RIDER DE-HEARTS!!】

ミナが腰に巻くベルトから光が。仮面ライダーを象徴する様々なライダークレストが光り輝く実像としてミナの周囲に浮かび、それは

上空に結集してアンテナの形をした光の塊となってミナに降臨する。頭部と胸部に金色のアンテナに似た物が形成され、携帯の電波状況を示すかのようにアンテナを軸にしてプレートが現れ、それに続く形でスーツがミナの身体を包む。

それはまさしく仮面ライダーの姿だった。

その面容や姿形は仮面ライダーディケイドやディエンドによく似ている。違うのは基本カラーが黄色で、いくつかのライドプレートが金色のアンテナに置き換えられていること。

頭部はディケイドに良く似ている。立つ二つのアンテナが触角のようにも見え、額にはハートマークの宝石のようなものがつけられている。その宝石はピンクダイヤモンドに輝いており、複眼の色は緑ではなく美しいシアン。

額にある宝石のようなものは胸部にもある。仮面ライダーディケイドのような十を意味するXの文字はなく、アンテナが中央にあり左右対照。ピンク色の宝石はアンテナが別れる部分の上にあった。

しかし、見た目こそ両ライダーを半分ずつぐらいとった形なのに、ディケイド系仮面ライダーが持つライドブッカーは何処にもない。

両腰に携帯しているのはアンテナ型のツールだった。この中にカードが納められているとは少し思えなかった。

「さあて、暴りたい気分よ。覚悟しておきなさい」

「仮面ライダーディケイド……いや、それに通じるライダーか……」

！？ 馬鹿な、この世界には来られないはずだ……！！」

大首領のある話を聞いていたシヨツカーグリードは当惑する。

仮面ライダーディケイドは世界を渡ることの出来る種類の仮面ライダーだ。この『レッツゴー仮面ライダーの世界』のライダーではない。

ただ、仮面ライダーディケイド・門矢士を知っていたシヨツカーの大首領はこの世界に来られないようにしていたはずだったのだ。

だから、他世界からの援軍などないと思っていたのだが、紛れもなくこの仮面ライダーは世界を渡るライダーだ。

「くっ、構わん！！ 殺せ、あの二人を殺せ！！」

イレギュラーな仮面ライダー。ただし、相手は一人だけ。シヨツカーグリードはシヨツカー戦闘員に攻撃命令を出す。

「コイ ツッ！！」

数を武器にミナが変身した得体の知れない仮面ライダーに向かうシヨツカー戦闘員。

ミナはこいつらの戦闘力は低いと知っており、冷静に対処。

両腰にある金色のアンテナ型ツール『レシーブレイガン』を組み替え変形させて、銃のような形にする。

最後にミナはレシーブレイガンのアンテナの枝分かれした部分を押

し込んだ。

【ATTACK TOOL・BLAST!!】

ディハーツールから電子音がなる。そのあとミナが引き金を引くと、銃口にあたるアンテナの先の部分が発光し、エネルギー弾が連射された。

エネルギー弾はさらに空中で分離してショットカー戦闘員に突き刺さる。針のような鋭さでもって、ショットカー戦闘員を全員返り討ちにした。

「うおおおおおおおッッ!!」

不死生命体・アンデッドのベルトをしたノギリクワガタの怪人が突進してくる。

スピードスートのカテゴリーキング、ギラファアンデッドだ。本来は知的で策略家なのだが、アンデッドは組織を作らない。おそらくはショットカーに操られているのだろう。

「強いのが、きたわね……………ッッ!!」

ミナは強豪怪人ギラファアンデッドの攻撃をなんとかかわしながら反撃を繰り返す。

だが、効いていないらしい。効いていたとしても今のミナの姿では残念ながらアンデッドを倒すことは出来ない。

「うッッ……………!!」

ガギンツッ!! とギラファアンデッドのハサミのような刃がミナの身体を切り裂く。

「ミナ!!」

戦いが始まると同時に怪人たちから逃げ惑っていた少年・影虎がアポロガイストから逃げながら、何かを投げる。

それはギラファアンデッドの右腕部分に当たると破裂し液体を撒き散らす。液体はギラファアンデッドの腕を包み、なんとみるみるうちに固まった。

「ナイス!!」

ミナは今のうちにもう一つのレシーブレイガンを手早く変形させる。今度はシンプルな剣の形だ。

【ATTACK TOOL・SLASH!!】

先程と同じく柄の部分のアンテナの先を押し込み、ミナは刃に赤いエネルギーを纏わせる。

「セエイツッ!!」

「ぐう……!!」

右腕を封じられたギラファアンデッド、その左腕の攻撃をくぐり抜けレシーブレイガン・ブレイドモードで突く。

「ふう……」

ギラファアンデッドは吹き飛ぶ。まだベルトも開いておらず倒せてはいないが、ミナはため息をついた。

「ナイスアシストだったろ？」

影虎がミナのところまでやって来て決め顔をつくる。

彼を追っていたアポロガイストはというと、数体の部下の怪人と共に意地汚そうな罠に引っかけられており「世界一迷惑な男である私がこんな迷惑な罠にかかるとは……!!」とか言っていた。

この罠、事前に影虎が仕掛けていたもので、それも込みで影虎は誇った。

「別に、あなたが助けなくてもなんとかなっただわよ……!!」

「冷てえ……!! けど、嫌いじゃないわって奴かな？」

敵軍団の真っ只中にいるというのに、ミナと影虎は談笑した。まるで、何かを強く信じているかのように。

それを狙う、ジェネラルシャドウ。トランプカードを取り出して、構える。

「トランプショット!!」

【ATTACK TOOL · RIDER JUMP!!】

ジェネラルシャドウの攻撃を事前に察知していたミナは機能を発動させる。レシーブレイガンが脚に瞬時に装着され、レシーブレイガンに宿っていた赤いエネルギーが脚に宿る。

その脚でミナは影虎を抱えて大きく跳躍し、ジェネラルシャドウの攻撃を避けてみせた。

六十メートルほど一気に飛び上がったミナは広場の一番高い地点に着地する。

「いってえよ、もう少し穏やかにやってくれって」

「ああ、ごめんなさい。痛かった？」

怪人たちから離れたミナと影虎はまたも会話する。ミナが影虎を掴んで跳んだ時、影虎の腕に相応の負担がかかったようだ。

「ふん、ちょこまかと……。無駄に足掻くな、世界にはもうお前しか仮面ライダーはいない！！ 皆、消えてしまった！！ 一号・二号などがまだいる時に渡ってくるべきだったな！！」

世界には仮面ライダーは一人だけ。どう足掻こうと勝ち目はない、如何に世界の破壊者であっても。

「それに貴様、ディケイド系ライダーにしては随分と弱いようだな！！」

シヨッカーグリードがアンデッド一体に手一杯となる仮面ライダーを嘲笑する。



ディケイド系ライダーならばカメンライドと呼ばれる力で様々なライダーに変身できるはずだ。だが、それをしようとするそぶりはない。

それに、ディケイド自体も並の仮面ライダー以上のスペックを持っているものだが、ミナが変身した仮面ライダーは攻撃をモロに喰らったキラファアンデッドが“破壊”されていないところを見ると大したことはないと推量出来る。

「う、毎度毎度厳しいな。ホントのことだけどもさあ」

正体不明の仮面ライダー・ミナに付く少年・影虎は言われ慣れていくように頬を掻く仕種をした。

自覚しているミナは「五月蠅いわね」と少し拗ねる。

「だけど、一つ間違いがあるな。ミナはディケイドと同じライダーじゃない。この仮面ライダーには、世界の思いが詰まってるんだ」

「なに……!?!」

「ミナの名前は仮面ライダーディハーツ。世界を旅し、世界を一つの世界に導く者……ってところか」

『仮面ライダーディハーツ』。それがミナが変身する仮面ライダーだ。

ショッカーグリードは大首領から聞いていた内容と状況との相違に動揺する。

『デイ』の文字が入っているというならデイケイドやデイエンドと同じく世界を渡るライダーだ。

しかし、この世界はその『デイ』の仮面ライダーにも干渉されないようにしている。つまりこの世界にやって来れたデイハーツという仮面ライダーはデイケイド・デイエンド両ライダーをある意味越えた仮面ライダーだということになる。

「あゝ、と。そういえばまだあるのよね、間違いが。仮面ライダーは全て消えた……………だったっけ？」

仮面ライダーデイハーツはまた腕時計につけている携帯端末に触れる。

「冗談！ 仮面ライダーは消えないわ。皆が彼らをヒーローだと信じている限り、彼らは蘇る。何度でも……………」

【KIZUNA RIDE】

「何で今更私は此処に立ってると思う？ ここは『仮面ライダー全員集合』って場面だからよー！」

【ICHI-GOU!! NI-GOU!!】

世界を繋ぐ仮面ライダー、仮面ライダーデイハーツの腕にする携帯端末・デイハーツルがその仮面ライダーの名前を叫ぶ。

広場にディケイドの物とは違う、黄金に揺らめく神秘的な二対のオーロラが差し込む。それは天から射す木漏れ日さのように優しく、煮えたぎるマグマのように強い。

黄金のオーロラに誰かが映った。その姿をみたショッカーグリードは「まさか……」と口に出す。

「とおうツッ!」「」

その二人の男たちは黄金のオーロラから飛び出す。

生身でありながら一応は改造を施され並の人間の身体能力を越えているショッカーの戦闘員に戦いを挑む、男二人。

信じ難いことに謎の男はショッカーの戦闘員をたちまちと薙ぎ払う。

「タアツッ!」「」

最後のショッカー戦闘員は二人同時のダブルキックにより「イッッ!」「と叫びながら吹き飛び、ショッカーグリードの足元まで転がる。

「まさか、貴様らは……本郷猛と一文字隼人!？」

ショッカーグリードは仮面ライダー一号・二号の正体、人間であった頃の名を信じられないと叫ぶ。

一号・本郷猛は不敵に笑う。

「その通りだ、シヨツカーの怪人……いやシヨツカーグリードよ！  
！」

シヨツカーグリードは「馬鹿な」と呟く。一号・二号は先程仮面ライダーデイハーツが現れた途端に消えてしまった。

しかも、目の前の本郷猛と一文字隼人は四十年の月日を感じさせない。シヨツカーと戦っていた若かりし時の顔をしている。

「ふん、シヨツカーグリードよ。貴様はまたライダーに対する人々の思いを甘く見たな！！人々が我々を信じてくれたおかげで我々はこの間に來ることができた！！」

「どづいつことだ……！？」

「我々は消えてなどいない！！この世界の使命、我々が受け継いだ！！」

「行くぞ」と一号・本郷猛と二号・一文字隼人のダブルライダーはシヨツカーグリードに挑戦状を叩きつけ、それぞれの変身ポーズを取る。

「「ライダー……変身！！」」

現れるベルト、タイフーンに風を送り込むべく、ダブルライダーは高く跳ぶ。

初代仮面ライダー、一号・二号へと変身した本郷猛と一文字隼人は  
“この世界の四十年前の自分”が敗北を喫した宿敵・ショッカーグ  
リードに突撃。

「な、なんだ、他の世界の一号と二号か……！？ いや、有り得ん  
！！」

必死に応戦しながら驚愕するショッカーグリード。

仮面ライダーディケイド・ディエンドでさえこの世界に来ることは  
不可能だ。仮面ライダーディハーツはともかく、一号・二号が世界  
を渡ってこの世界に来ることは不可能なはずだった。

「ぐあッッ！！」

一号のきりもみシュートをショッカーグリードは受ける。

四十年前は仮面ライダー一号・二号を圧倒することが出来たのだが、  
今ショッカーグリードはこのダブルライダーに押されてしまう。

明らかなパワーアップだ。ショッカーグリードは身構えて「何故だ」  
と唱える。

「くそ、一号二号め！！ どうやって蘇った！！」

ショッカーグリードではなく、後方で一号二号の戦いを見るブラッ  
ク將軍はイライラと疑問した。

それに、答える者が一人。

「一号二号は蘇ったわけではありません。絆によって……やって来たのです」

ステッキを持ち、ライダーを応援する観客の中を歩く紳士が一人。  
この世界のデンライナーのオーナー ……………

いや、“別の世界とこの世界”のオーナーだった。

「世界は一つに繋がるのです。絆のライダー・デイハーツによって……。この世界の仮面ライダーは、私たちの世界の仮面ライダーと一つになったのですよ」

そして、“一つとなった”デンライナーオーナーは続ける。

「この世界の人々の思いが“最上の絆”となって仮面ライダーをこの世界へと導いたのです。つまり！ 仮面ライダーは必ず現れる、人々が彼らをヒーローだと信じる限り……何度でも……！！」

デンライナーのオーナーのこの頼もしい台詞を受け、観客の人々の熱はさらに高まった。

ブラック将軍は「黙れ黙れ！」と吠えたが人々の仮面ライダーに対する信頼と希望の灯は消えることはない。

「なんだか……その、恥ずかしいわね……」

「いいんじゃないの？ たまにはこういうのも。しっかし、あのオッサンやっぱいいとこどりだなあ」

高台の上で仮面ライダーディハーツ・ミナと少年・影虎はゆつたりと話す。

暢気に、または余裕に見えるかも知れないが違う。彼らも、同様に信じているのだ。自らの仲間たちの力を、

仮面ライダーの絆を、

仮面ライダーは正義の味方であるという事を。

「さて、世界を救いましょう、みんな!!」

【KIZUNA RIDE・REKIDAI RIDER!!】

一号二号をこの世界へと導いた時と同じように、ミナの背後に黄金のオーロラが出現する。

オーロラに映る影は全て合わせて二十六。それぞれが戦旗のように自らを示すライダークレストを掲げていた。

一号二号も集合する。仮面ライダーディハーツ・赫塚ミナを“最上の絆”の導き手として偉大な戦士であり、なにより正義の味方である二十七の仮面ライダーが集まる。

一号、二号、V3、ライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー、スカイライダー、スーパー1、ZX、BLACK、BLACK R X、真、ZO、J、クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、剣、響鬼、カブト、電王、キバ、ダブル、オーズ、フォーゼ。

この世界の名の通り、仮面ライダーたちは戦いに挑んだ。

岩石大首領を原作よりも若干名多い人数での『オールライダーブレイク』で打倒し、この世界は平和を取り戻す。

あとはデンライナーでナオキを除いて時の運行を戻せば万事解決だ。そうなればこの世界も融合するだろう、みなたちのいるライダー学園の世界に。

虚構ライアーであったライダー学園の世界は、それによりまた一步確かな世界へと昇るはずだ。

「あと……少しね」

虚構が真実になる日も近い。

そうすれば、仮面ライダーディハーツの旅も終わりを迎える。みなの旅はもうすぐ終わるのだ。

ここまで、本当に長い道のりだった。みなはつらい経験をいっぱいしてきたし、それを見る機会もかなり多かった。

だが、虚構と呼ばれる仮面ライダーの世界を巡るその旅のおかげで、みなは何物にも変えられない“最上の絆”を手に入れることが出来



た。

この旅には、感謝をしている。

この旅があったから、ミナは生まれたての自分を成長させることができた。

この旅があったから、何もかも失ったミナはかけがえのないものをたくさん得られた。

ふっ、と思い出してしまふ長い長い始まりヒキンスナイトの夜。

全てはあの夜から始まった。九回目の誕生日とその前夜……ヒギンズバースデイから。

## 第0 zero・話、レッツゴーライダーハート（後書き）

この虚構のレッツゴー仮面ライダーの世界では全てのライダーが登場！

もつと書きたかったのですが（シャドームーンが…とか、アネクと翔太郎が…とか、電王が…とか）長くなりすぎるので大雑把に書きました。

では、次からは本編です！！

## Prologue【DE・HEARTS】(前書き)

さて、始まる前に忠告しておきます。

これは私の仮面ライダー愛が爆発した作品です。私は戦う理由や伏線を大事にするタイプでもありません。戦いよりもそういう所が好きです。

よって、これから読了時間三百分ほど変身は致しません。主人公たちの心の成長を描くのみとなります。

それでも読むという方はどうぞ読んでください。

敬愛する仮面ライダーにこの作品を送る

……

## Prologue【DE・HEARTS】

少女・赫塚ミナは裕福とは言えないが、それなりに幸せな家庭に生まれた。

父親は世界を放浪する旅人で会える機会こそ少ないが、ミナの誕生日や大切な出来事の前には決まってフラリと帰ってきて愛情を注いでくれる。

母親はミナの父と結婚する前は何処かの王女かなにかだったらしく今でも時折かつての従者がやってくる。とても慈しみ深い人で愛情を説いてくれた。

そんな二人の間に生まれたミナは容姿可憐でおっとりとした母親や内気な父親と違い少々刺のある性格で、気さくで明るく人当たりがよく、交友関係にも恵まれた今時の女子高生に成長した。

若い頃、内気で人の頼みは断れず友達もあまり出来なかった両親にとつてそれはなによりもうれしいことだ。

加えて幼き頃からあらゆる才能を開花させ文武両道。彼女を育て、導いてきた両親にとつてこれほど鼻が高い自慢の娘はいない。

だが、彼女は知らない。

彼女の中に眠る“資質”は何も勉強やスポーツなどといった一般的なものではないことを。

運命の悪戯か、神様の意思か。自分はこの世で最も人の枠から外

れた                   そして最も人らしい存在であることを。

数多の世界で悪と戦う正義の力を継ぐに足る“異形の素質”を持って生まれたことを。

それを求める膨大・莫大なる闇により彼女の全ては終わってしまうことを。

そして、世界を廻り自分の生きている意味を人々の繋がりの中に見つけていく終わりのない旅を経験していくことを。

彼女は                   知らないのだった。

数奇な運命・存在を負った少女が全てを統率する力を握りしめ、求めるは“最上の絆”。

世界の統率者・デイハーツ。

様々な虚構を廻り、その瞳は何を見る  
……………。

**Prologue【DE・HEARTS】（後書き）**

ディケイドのシステムとこのディハーツのシステムは全くの別物となります。真つ向から変身資質に立ち向かい、多くの困難に立ち向かっていきたいと思えます。

## WORLD END〜DREAM〜(前書き)

宣言。

女の子が主役仮面ライダーで何が悪い！！ぶつちやけ女の子の方がキャラ立ちしやすいんだ感情移入しやすいんだ書きやすいんだ！！

この作品で描くのは「成長・夢・絆」です。

ガチで行きます。これをテレビ放送しても恥ずかしくなくらいにマジに書いて行きます。

文句がある奴アバッチコーイ！！

しかし、多くのディケイド系二次作品はディケイド系ライダー主体で話を進めていきますが、このディハーツはそれをしません。主役はそれぞれの世界で異なります。

「ライダー全員が主人公」。デジモン無印と同じです。ウォーグレイモンとメタルガルルモンへのワープ進化のせいでそれは崩れましたが。(けど俺はホーリーエンジェモンが最強と信じてる)

赫塚ミナ。

彼女がどのような人物だとよく知る者に尋ねると大概「努力家」や「お人よし」「憧れる人」という答えが返ってくる。

生まれは名家でもなんでもない一般庶民で、通う学校や受ける教育も極々平凡。

だが、彼女は誰もが認める努力家であり才能も豊富な少女であったため、なんでもそつなくこなしてしまう。

所謂、天才肌だ。

さて、“天才”と“天才肌”の違いは調べて見ればわかるが、天才は須らく天才で、天才肌は努力などで天才的な所業を結果的に残してしまふ人物を言う。

当然、周囲が受ける好感度は後者の方が高い。

多くの人が前者はそれを鼻にかけているという先入観イメージを深層意識に隠し持っているのだ。

赫塚ミナは本来の才能もさることながら、目に見える努力の結果、



勉強でもスポーツでも校内、または学区内で高い成績を修めている。

よって、周りの人々に疎ましく思われることもなく親切で気立て良い性格、校内一と言われる美しい容姿も手伝って男女問わずに人気があるわけだ。

「つかちゃん、オハヨー」

学校への登校中、今日も早速声をかけられる。いや、見渡して見れば確かに声に出しているのは一人だが多くの人が会釈している。

彼女の認知度、人気度が窺い知れる。

後ろから駆け寄るクラスメイトに名を呼ばれ挨拶された赫塚ミナは振り返る。

学校No.1の美少女という評価に恐らく間違いはないだろう美を携えた少女だ。顔つきや目の色は日本人のものだが、腰まで伸ばされた長髪の色は金。ただし、金砂のようにサラサラと軽く、艶やかな髪は微塵も傷んでいないのでこれは自毛だろう。

体格は女性としては平均的な身長と凹凸がはつきりとする均整の取れたプロポーションをしていて、彼女の通う学校が指定するセーラー服を大きくやんわりと押し上げている。

“セーラー服を着た少女が振り返る動作”はなかなか絵になる。それが学園のアイドルクラスなら尚更だ。

が、これが彼女のベストショットとは少し言えない。振り返った彼女の表情は気だるそうで疲れたように目も細めていた。

「あのねえ。もうすぐ高校三年にもなるんだから、そのちゃん付けは止めてくれない？」

赫塚ミナは現在高校二年。もうすぐ年齢は十七になる。本人にして見ればこの年になるともう大人であると考えている。

つい一ヶ月前、自動二輪車の免許も取ったというのに「つかちゃん」だの「ミナちゃん」だのと呼ばれたくないのだ。

年頃の乙女はイロイロ考える。

「何言ってるの。ま〜だ〜ま〜だ高校二年生なんじゃん」

その逆も居ると言えば居るのであるが。

少し後退してその特に仲良くやっているクラスメートと歩調を合わせて並んで歩く。

歩く度、絹のように柔らかく金髪が揺れた。この金髪は祖母がイタリア人で、彼女が1/4イタリア人の血が混じったクウォーターであることから由来するものだ。

その荘厳とも言える域に達した美しさに道行く男たちは総じて心を奪われる。

この美女を手にする、つまりは彼氏彼女の関係になれば三日で破局しようが一生の自慢になるだろう。

だが、肝心の彼女は現状誰にも心奪われることはないかも知れな

い。

ミナは浴びせられるその好奇の目線の始末にほとほと手を焼き、多大に困っているのだ。

「ほい、今日の分」

クラスメートが二通の手紙をミナに軽い調子で手渡す。このクラスメートが書いたものではないようで、両方可愛いシールで便箋を閉じていた。

ミナは本日二度目の嫌な顔を作る。この手紙の内容はおおよそ見当がついている。否、それを察する能力をここ三年の間に植え付けられてしまった。

青春の証の一つ。体育倉庫裏または屋上への招待状。最適居住区は下駄箱の中の、世俗に言うラブレターである。

差出人は一人はラグビー部の一メンバー。もう一人は弓道部の部長候補。

「ヒュー、モツテモテエ!!! につくいねコノコノオ!!!」

クラスメートは大きな声で囁し立て、口笛を吹く。

ミナはギロツと睨んで朝っぱらから一際ハイテンションな友人を黙らせる。

自惚れるつもりはないが、このラブレターというものは彼女にとって相当の負担になっているのだ。

ラブレターを贈るといふことは赫塚ミナという女性を普段から恋い焦がれて見ているといふことだ。いつ誰が自分を見ているのか分からないので、全く気を抜けない。

嫌われないならそれなりの行動をすればいいのだが、それはプライドの問題で許せない。

あと、その実態がなんであれ、期待には応えたい。応えたいから勉強に勤しむし、女子高生としては嫌な運動も頑張るし、身嗜みにも気を配る。

それが彼女のファンの勢力を拡大させ、プロポーズをしてくる愚かな男が絶えないでいる要因であるのだが。

「断り入れてきてくれた？」

「多分来ないかもとは。弓道部の子はともかくとして、ラグビー部の子は私でも及第点いかなかったから適当に“鏡で釣り合うかどうか見てきたら？”って言ったら泣いて逃げてった。全く、最近の若者は根性というもんが足りんわい」

「……………貴方、あのラグビー部の筋肉髭ゴリラに向かって堂々言えるあたり将来大物になるわよ」

断るにしてももう少し言葉を抑えた方がいいと諭す腹積もりだったミナだが、クラスメートは「いやあ、やっぱりさそう思う？」と、一人で盛大に照れまくった。

能天気で無駄に明るくクルクルとよく動くのがこの友人の持ち味

なのだが、扱い方に参考書がない。<sup>マニュアル</sup>

ミナにはため息をつく以外の選択肢はなかった。

次。クラスメートの話だと弓道部の部長候補はかなりの美形だったらしいので断っていないそうさ。

弓道部は何と無く美形が揃っているイメージがある。多分、それなりの顔をしていないと入れないのだ。資格なら皆に平等にあるが世間の風当たりが入部可能者を限らせている。

「どうするどうする?」

「断るわよ。恋愛とか、よくわかんないし」

厳密に言くと、語弊はある。よく分からないのではなく、恋愛とはそんなものじゃないという決めつけの欲があるのだ。

どれだけ魅力的な男性がアプローチしてきても、彼女は自分の理想を優先する。

彼女の考える恋愛とはこうであるべきという指標は高い。ラブレターを貰ってそのままの流れで付き合うなんていうのは、あまりに彼女の恋愛像から掛け離れている。

流行りのドラマに影響されたのではなく、彼女の恋愛像を作ったのは両親の話だ。

両親の出会いはずきに運命的だったそうさ。会った頃の両親はどちらも内気でウジウジして人の頼みを断れない、そんな共通点を持

っていた。

出会いもまた衝撃的で、母親が家出してファミリーレストランで働いている時、父親に誤って杏仁豆腐をぶちまけてしまった。だが、それにより二人は関係を持ち、お互いに恋愛感情が芽生えるのはあつという間だったらしい。

それから先は教えてもらっていないがアバンチュールな恋だったらしく、いろんなことがあった後、父親は母親を実家から連れ出したそう。

出来ればそれくらいのインパクトは求めたいのである。

だが、それは。

「典型的なアラフォーの考えだね。」

「五月蠅いわね……………」

自分でもこのまま運命とやらを待っていても、行き遅れ（アラフォー・アラサー）になってしまいそうなことは理解しておいて、頬を膨らます。

2

屋上で待っていた弓道部の部長候補をつたつぎの時間の授業、

ミナは頭にある考えを抱きながら先生のながったるい講義聞いていた。

考えるのは恋とは如何なるものなのだろうかというもの。

弓道部の部長候補は確かに世間で言うイケメンだった。一つ下の学年だが、ミナよりもずっと背丈が高くて、脚は長く、顔の線が繊細で細い絵に描いたような美男子だ。

朝に一緒に登校したクラスメートやその男子からラブレターを貰ったことを聞き付けた何人かの友人によれば成績も学年トップを譲らないらしい。

ミナを想う気持ちも本物なようで入学して一目見たときからずっと好きで、ミナに見合う男になるよう努力を惜しまなかったそうだと「俺は本気です。きっと先輩を幸せにします！！俺と付き合ってください！！」という具合にミナの両手を握りしめての結婚まで念頭においた熱烈なプロポーズだった。

だが、違う。

しつくりとは来ない。来なさすぎる。自分がこの人と付き合い、やがて結ばれるとは到底思えないし、相手の男子には悪いが思いたくもない。

ミナは「ごめんなさい」と弓道部部长候補の手を振り払ってしまった。

(高望みにも程があるといやそうなのよね……………)

彼女にしては珍しく授業中に勉強以外のことを考える。

普通の女子高生なら喜んで承諾した場面だろう。弓道部部长候補も今までの相手と違って少し自信があったようだった。

相手に自分がわがままで高飛車で嫌な女だと思われるか不安でならない。しかし、譲歩する気にはなれないのだ。

どうなのだろう。自分は恋愛できるのだろうか。

今は授業中。しかし、頑張っていれば自ずと分かってくる自分の将来よりも、経験値がなく先も見えない恋愛の方がずっと気にかかる。

恋愛はしたい。両親を見るとその度に想えてしまう。あの二人には結婚生活22年目だというのに今だ初々しさが残っていて、本当に憧れる。

その前に、自分は一体どんな男性がタイプなのだろうか。

両親と同じなら自分を引っ張ってくれる人や自分と似た性格の気弱な人になるが、如何せんミナは二人の性格と違う。

好きな人のタイプも二人とは変わってくるだろう。

こういう時、一般の女子高生ならどここのアイドルグループの誰々とか月9の主演の誰々など例を出すのだが、それも出来ない。



テレビの中の人は住む世界が違うし、実際に会ってみなければ恋愛感情など起きはしないというのが彼女の考えだ。

(……………何か、あればな)

ミナの両親が結ばれ、お互いに愛し合うキツカケになったのは父親が旅人で、母親が何かを抱えていたことだ。

何かの縁があれば、自分も恋愛を経験できるのでは。

だが、この学校は公立高校で際だって特別な行事はなく、体育祭や文化祭も男女が完全に別けられる形式を取っている。かつて問題が起きて、不純性異性交遊を徹底して禁じているのだ。

これでは出会いも何も出来はしない。

よって、彼女・赫塚ミナはハプニングを求める。登校中ハンカチを拾うとか、角でぶつかるとか、なるべく止しておきたいが強姦にあいそうな場面に助けてもらおうとか。

ファンタジーな物ならなお良い。

自分に特別な力があつてそれを狙う悪党がいて、それを救つてくれる救世主様ヒーローがいて。

(あゝあ、とうとう夢物語に手が出たか……………)

現実では無理だから、人々は架空に夢を馳せる。そんなものに頼ってしまう時点で負け犬は確定だ。

いつの間にか授業を全く聞いていない。どうでも良くなって、ミナはうつうつとまどろみ始める。

せめて、夢の中では理想を描いてもいいだろう。真っ白なキャンパスに思い思いに……。

3

嵐だ。

これでもかという程殺風景で草の一本も生えず空白な平原に嵐が巻き起こっていた。

闘いの嵐だ。

空になにかが君臨している。

ひたすらに圧倒的な何かがただそこに存在しているだけで恐怖と絶望を振り撒いていた。悍ましく悍ましく、憎ましく憎ましく、悪しく悪しく。

それは、誰かが知っている

それを見つめるいくつもの戦士たち、総勢100人以上。

先頭には一段と偉大な風格を放つ二人組の戦士。その後方には2

4人の戦士。

その名は “ 一号 ” “ 二号 ”

“ V3 ”

“ ライダーマン ”

“ X ”

“ アマゾン ”

“ スترونガー ”

“ スカイライダー ”

“ スーパー1 ”

“ ZX ”

“ BLACK ”

“ BLACK RX ”

“ 真 ”

“ ZO ”

“ J ”

“ クウガ ”

“ アギト ”

“ 龍騎 ”

“ 555 ”

“ 剣 ”

“ 響鬼 ”

“ カブト ”

“ 電王 ”

“ キバ ”

“ W ”

“ OOO ”

数多の闘いをくぐり抜け、平和を守る全26の英雄たち。

その名は誰かが知っている

そして何かを賭けた頂上決戦の火蓋が切っておとされた。

その戦いの<sup>スケール</sup>の壮大感たるや、全知全能の神でも手を出すことは出来はしない。

“闇”に突撃するのは戦士たちだけではなく、彼らの力の一つである物たちもだ。

クワガタのような飛行物体、赤と黒の酷似した二体の龍、バイクが変形した大型のロボットと飛行する人型のロボット、宙を走る三つの列車、屋敷から長い首を突き出した飛竜<sup>ドラゴン</sup>とその上に爆発物を搭載したクレーン車のような機体、リボルバーのような物が後部にある大型車両、蠍のように見えるユニットが合体した兵器。

しかし、絶大な火力を発揮するそれらを“闇”は奈落より黒い波動で打ち払う。

戦力差は歴然だった。

“闇”の一振りには戦士たちを薙ぎ払い、一刀は戦士たちごと大地を切り裂いた。

だが、だからといって戦士たちは己のやるべき“正義”を譲らない。

何度くじかれようが、何度打ち負かされようが、自分には負けな

い。

「何度だって立ち上がるし、何度だって打ち勝っていく。」

“闇”に当惑が見えた。

“何故立つのか。何故諦めないのか。何故貫くのか。”

その答えは彼らが正義の味方だからである。救いたいものがあるのなら、彼らは絶対に負けはしない。

何度目か分からない闇の暴虐を受けて戦士たちはついに地に身体を倒してしまふ。

けれど一人の戦士がそれでも立ち上がる。戦士たちを“絆”で統率する最上の戦士は、見てきた幾千もの誓いに賭けて“闇”と真っ向から対峙した。戦士たちもその信念に沿うように再起する。

その名は他の誰でもない、誰かが知っている

「……………仮面ライダーディハーツ……………」

ミナの口が動き、その名をつぶやいた。

「つかちゃん!!」

呼ばれてミナの意識は現実に戻された。今居る場所は学校の校舎、自分の教室だった。

顔を上げてみると朝方一緒に登校したクラスメートをはじめ、多くの友人がミナの机を取り囲んでいた。取り分け親しいわけではないクラスメートも皆ミナを心配そうに見ている。

「どうかした？ ミナが授業中に居眠りするなんて珍しいと思ったら、苦しそうにうなされてるんですもの」

一人の友人が言う。

やはり、自分は眠っていたらしい。ミナらしくもなく授業の真っ最中に。

だが、押し止める。

本当に、今のは眠っていたのか？

ミナの頭の中でその考えが駆け巡り、パンクしそうなくらい満ち、注ぎ込まれる。

ついさっき見たものに見覚えはないはずだ。よって、夢に見る訳はない。知らないものはああまでハッキリと描けない。

なら逆に、何故描けた？

理性よりも深いところ。野性や本能……とは違う、血の脈動がザクメキ

あの戦士たちに反応していた。

戦え、と。その力を手にせよ、と。

その力というのは、あのひととき強烈な衝撃を感じたあの戦士の力なのか。

見覚えなどあるはずない。

だが、それならばあの時に受けた（特に腰のベルトと右腕に付けたプレスレットに感じた）既視感に説明がつかない。

そして、あの戦士の名は。

仮面ライダーディハーツ。

勝手に口に出た名前だ。その言葉には聞き覚えさえないが、凄く安心感がある。心強さがある。

仮面ライダー……。それが1000人を越える戦士たちの、彼らの総称のようだ。言われてみればほぼ全員バイクに乗っていた。

本当に、あの戦いは何だったのだったのだろう。仮面ライダーは一体何と戦っていたのだろう。何を守り、貫こうとしたのだろう。

いずれ、彼女もあの中の一員となる。それも仮面ライダーという

戦士たちを奮い立たせる存在として。

それは、まさに避けることの出来ない“運命”で。彼女の待ち望む燃え上がる熱き恋もその中に含まれる。

そしてその戦いにより、彼女は恒久の、最上の絆を勝ち取るのだ  
った。

ただし、

この先、多くのものを彼女はうしなうて ……。



## WORLD END〜DREAM〜（後書き）

仮面ライダーディハーツ。

多分、初期はディケイド系ライダーの中で最弱でしょう。しかし、終盤には最強クラスになります。カードは使いません。

多分、ディケイドが嫌いという方には嬉しい設定です。ちなみに、私もどちらかと言えば嫌いです。だからこのライダーを考案しました。

設定はまだ明かすわけにはいかないのでこのへんで口を閉ざします。

キバが重視なのは・・・

WORLD END〜COME BACK〜（前書き）

閑話『マツケン』

凧「今度のオーズの映画、『將軍と21のコアメダル』にあの！マツケンさんが出演してくれることが大けつて〜い！」

ミナ「で、貴方だれ？」

凧「時が来ればわかりゃんせ あれ、日本語おかしかったね。まあ何れ出てくるっさ！」

ミナ「まあいいが、マツケンってあの？」

凧「そう、あの有名な……………」

斬鬼・凍鬼・ガルル「……………」俺のことか「……………」

凧「……………」あー、もう分かったけど突つ込まない」

ミナ（次狼さんが……………三人……………！？）

マツケンとはサンバでお馴染み松平健さん。間違つても松田賢二さんじゃないよ。

閑話『死なせない』

オーズ本編……………

後藤「シュート!!」

【ブレストキャノン】

グリードたち「ぐあああああああ!!」「」

510(ごとう)はカザリ、メズール、ガメルをたおした。

510はれべるあつぶした。

くらすちえんじ。しょーごーが『GJマスター510』から『バー  
ス・510』にかわつた。(1)23、『ばずーか510』。24、  
『はりせん510』。25)38、『GJマスター510』。(

凧「いゝや、駄目だね!!」

510「なにがだ?」

凧「伊達さんを死なせないというなら、バース以外にも継がなきゃ  
いけないことがあるでしょうが!!」

510「・・・!?!」

凧「セルメダルキャッチだあ!! 張り切つてドゾ!!」

510「ふん、こんなもの……」

ピイー……ン、シュバツ!!

カスツ……!!

凧「510」……………」

閑話『ムラ』

ミナ「……というか、なんで出てきてない貴方を引っ張りだしてま  
で茶番やる必要があるの？」

凧「茶番ダアーツ！！マーーーーーンツ！！」

ミナ「……なにそれ？」

凧「分かる人だけ分かりやいだよ！！と作者は言っております」

ミナ「ややこしいわね（この子も作者も）……………」

凧「書きやすいんだよ、うちの作者表現力なくせて地の文で埋  
めようとすつから、書けるときは三時間くらいで書けるんだけど、  
書けないときは酷くて……。こついつ台詞オンリーはなにも考えず  
に書けるし」

ミナ「なるほど、ムラがあるのね」

凧「……いや、ミナちー……………それは言い過ぎだって……………／／／」

ミナ「ハイ？」

凧「だから……………む、ムラムラがあるって……………」

「ミナ」む、ムラを増やすなア~~~~~!!」

ハイ。始まります。

今回は少し短め。

夢らしき謎の戦いの光景の正体に疑問を覚えながらミナは珍しく一人で帰路についていた。彼女の申請によるものだ。

彼女の自宅は通う高校から徒歩で10分の、便利な位置にある。交通費などで両親に負担をかけたくはなかったので多少レベルが低くても最寄りの公立高校を選んだのだ。

家は西洋風な古い屋敷。屋敷と言っても祖々父の代からのもので遺産らしい遺産もないので家庭は裕福ではない。それにあちこちボロボロで近所の悪ガキはお化け屋敷とよんでいる。

郵便受けには新聞が五誌も突き刺さっている。父親も母親も若い頃は頼まれたら断れない困った性分をしていたので、それで良いようにされてしまったのだ。

しかし、今までに取ってきた五誌は「悪いから」とそのまま取っているが、今ではキツパリと断れるようになっていた。

その変化は何でなんだろうと思ってミナは母親に聞いたことがあるが、気恥ずかしそうに延々と惚気話をしてきたのでめんどくさくなって断念した。

ドアを開けると良い臭いが鼻先に抜ける。芳しいブラックコーヒー

ーの臭いだ。

コーヒー。

それで連想できる人物がいる。時々ここへ尋ねてきてくれるダンディーな男の人だ。

「次狼さん？」

ミナは革ジャンを着てサングラスをかけた男性の大きな背中に声をかける。

「ああ、お嬢ちゃん。学校はもう終わったのか」

ワイルドでハードボイルドな感じがする低く渋い声。人斬りナイフのような鋭い瞳孔。

煎れられたコーヒーを飲む男性の名前は次狼。血に餓えた狼をイメージさせる気迫を纏わせているが、実は優しい心の持ち主でミナの母親の従者だったらしい。何年間も試みているが未だフルネームは教えてもらっていない。

「随分、久しぶりですね」

次狼がどこに住んでいるのかは知らないが、ミナはイタリアで活動していたバイオリニストの祖父の子供である父親を古くから知っているようなので、欧州に居を構えていると勝手に解釈していた。

「ああ。しばらく見ないうちに大きくなったな。とても美しくなった」

「いやですよ、お世辞なんていいのに……」

「俺は昔から正直者だ。世辞など使ったことは……」

次狼はミナの母親が煎れたブレンドコーヒーの芳香を犬のように大袈裟に嗅ぎ、肺の中を満たし、高まりが頂点に達した瞬間にガブリと一気に飲み干す。

飲み干した後、上を向いたまま「ブハアッ」と感激に充ちた息を吐いた。

「ない。不味いコーヒーは飲まんがお嬢ちゃんのお母さんの煎れたブレンドは最高だ。俺が金を払ってもいいと思えたのは他にマスターとあのほんわかした女しかいない」

獰猛そうな顔立ちに一差しの笑顔。

次狼はかなりのコーヒー通で、辛口な審判を下し、そのマスターの経営する店と星の本がたくさん置かれている喫茶店以外では一円も払ったことがないらしい。……が、女の人が経営する所には喧しい客が多いらしく、ミナはよくその愚痴を聞かされる。

「……しかし、あのハナタレ小僧の娘とは思えんな。深央様と真夜様の血だな」

「次狼さん」

戒めるような声。この声はミナの母親、赫塚深央の声だった。



女性の年齢の話題をあげるのは失礼千万だが、もうすぐ17になるミナを娘に持つのだから年は四十前後のはずであるが、そうとは到底思えぬ程若々しく美しい人だった。

極端ではなく、ミナと同級生と言っても充分通用する若さを保っている。

次狼は気づいたように口を開けると、肩を竦める。深央が言いかった主張は「もう主従関係ではないから様をつけないで」というものか「夫を悪く言わないで」かの何れかだろう。

一方、ミナは首を捻っていた。

真夜というのはミナの祖母のことである。短い人生だったらしくミナがこの世に生を受けたときもうすでに他界していた。父親がまだ子供の時命を落としたのだそう。

ミナはよく父親から「母さんの血が濃く出ている」と言われてきた。だから次狼の言うのは正しいのだろうが、次狼はどうみても三十歳くらいだ。三十年前にはすでに祖母はこの世にはいなかった。

なら、何故次狼はまるで面識があるかのような口ぶりだったのだろう。

本当に謎の多い人だな、と考えてミナは話を展開する。

「次狼さん、今日は一体どういった用件で……？」

「なんだ主役のお前が忘れてどうする。もうすぐお前の誕生日だろう」

ミナは照れ臭くなって頬を掻いた。

もうすぐというか明日である。明日2月12日に赫塚ミナはまた一つ大人の階段を登り、17歳になる。

それ自体も嬉しいのだが、もうひとつミナが待ち望んでいることがある。

父親の帰還だ。

ミナの父親、赫塚渡<sup>かくつかわたる</sup>は世間では千年に一人の天才バイオリニストと名が通っているが、普段はあちこちを旅しながらチャリテイコンサートやバイオリンの“材料集め”をしている。

よって、ほとんど帰宅しないし家にいる時間は一年を通しても10日ほど。だが、毎年ミナの誕生日前になると材料を背負って帰ってくるのだ。

ミナの心を読んだのか、自身も百日ぶりに夫に会えるのが嬉しくて堪らないのか深央はニッコリとしてミナに話す。

「二時間後、お父さんが駅前に来て来て言ってきたから買い物した後にいきましょか」

普通、荷物になるので買い物は後回しにするのだが、父親が加わるとそうはいかない事情があるので深央はそう提案した。

一日早い誕生日プレゼントだ。明日は家族でゆったりと過ごしたのでミナは満面の笑みで「うんっ！」とうなずいた。

ミナたちがクラスこの街にある大型ショッピングモールをミナと深央は仲良く親子で歩いていった。

親に反抗的な子供が増えている昨今でこの連れだって歩く様子はかなり関係良好でなんとも見ていて心地好い。

ミナに言わせてみれば自分を生んでくれて愛情を注いでくれる両親に反抗するなんてする人の気がしれなかった。

「最近、学校はどう?」

「お母さん、それ昨日も聞いてきたよね?」

「え、そうだった?でもやっぱり自分の子供なんだから気になるのよ」

ミナは「ん~~~~」と下唇に指をあて上を向きつつ考える。

実のところ、今日はとりわけて妙なことがあったのだが、仮面ライダーとかいう戦士と正体不明の敵の戦いのことを母親に話したところはどうしようもないので伏せておく。

いや、邪険にあしらわれることはないと思うのだがこの母親の場

合こんな“ただの変な夢でしょう”と片付けられることでも大騒ぎ  
しかねない。

そんな時はミナがいくら「心配いらない」と言おうが深央は「親  
は子供のこととなると誰でも心配性になるの」と返ってきて、聞い  
てもくれないのだ。

有り難いし家族の絆が確かに見えることであるが、過剰な心配を  
かけるのは悪い。

あとは・・・少し話題にしたくないことが一つ。

「バイオリンは上手くいってるの?」

「えっと、うん。なんとか今度のソロコンサートには間に合っ  
かな」

正直、恋愛云々の話をしなくてはならないことから避けられてミナ  
はホッとしてつつバイオリンの話に乗っかる。

明日はミナの十六回目の誕生日であり、ミナがバイオリンをやり  
始めてから十三年が経つ日でもあった。

彼女の持つ“才能”で一際輝くものがバイオリニストとしての才  
能だ。祖父・祖母・父親の血を引く彼女は同じく“千年に一度の才  
能”“人類の宝”である。

しかも、これは何も強制されたものでも抑圧したものでなく、  
彼女は自分の“夢”ととらえている。

「早くお父さんみたいなバイオリニストになりたいなあ……」  
その道に立っていれば父親の演奏の中にある才能が、自分との差が分かる。ミナはそれが羨ましくて仕方がない。

早く、父親の演奏に近づきたい。

「駄目よ、ミナ」

「え？」

「お父さんの、渡の演奏を真似ちゃ駄目。あなたはあなたの音楽を奏でなさい」

深央にバイオリニストの才能はない。ミナが見ていた限りバイオリンを弾いていたことは一度もなかった。

だが、夫・赫塚渡と寄り添い歩んできた。その軌跡がある。だからこそ、精通しているわけではないバイオリンのこともミナにこんな言葉を残せる。

「人生は音楽と同じ」。渡がよく言っていた言葉だった。人の人生にはそれぞれの“祈り”があるの。その祈りをバイオリンに、演奏に込めるの。お父さんのまね事はしちや駄目」

バイオリニストでないのにその言葉には信憑性や重みというものが存在した。

(これが愛なんだな)

連れ添い歩くうち、その人の魂を知らず知らずに受け継ぎお互いを認め合う。ロマンチックに言えば『貴方色に染まる』とでも言うのか。

ますますミナはその魅力に惹かれてしまう。

しかし、ミナはやはり父親と母親の恋愛話を聞く気にはならなかった。ただし、理由だけは変わって惚気話が煩わしいからではなく、それは自分で見つけるべきことだと考えたからだ。

聞いてしまうと自分は絶対その話を参考資料としてしまう。その“旋律”<sup>メロディー</sup>に縛られてしまう。

それでは駄目だと母親に指摘されたばかりである。

目で見て、感じたことのみを信じよう。何れ答えは出る。

それより、今は誕生日プレゼントだ。考えてもみればたとえ恋を見つけられても、成就しなければ教訓は得られようとも充たされない。

惚れた相手に自分と同じ想いにさせるには内面も大事だが、見た目もやはり重要となるだろう。それはもうリアルな話で、「君の外<sup>ため</sup>面より君の内面<sup>こころ</sup>が好きだ」という告白が最近のドラマで見られるが見た目も良い方が結ばれやすいに決まっている。

それには手っ取り早い方法を取るのなら、まず服装だ。

誰かに好きになってもらうためにオシヤレをする。

今までの服を買う基準は「異性にモテる」ではなく「純粹に可愛い」かどうかだったから、そんな風に考えられたのは実は初めてで、ミナはなんだか自分でも可笑しく思えた。

だが、店に入ろうとした時。

【キイイイ……ン……キイイイ……ン……】

と、耳鳴りのような　しかし実在にはちがいない音が小さく聞こえた。

「……………!？」

ミナは自分の耳が変になってしまったのではと、突発的に耳を押さえた。

いや、聴覚がおかしくなってしまったわけじゃない。痛みを訴えてもないし、至って正常だ。

異常なのはこの音の方。

小さくともハッキリとミナの鼓膜を震わせるこの低周波の音はミナ以外に、誰も感知できていない。

こんな音は聞いたことがなく得体が知れないが、せめて音源は何処か、ミナは耳をすましてみる。

耳をすませばすますほど異種の怪音が耳につく。

【チャラ、チャラ、ン……チャラララ……チャラン……】

と、別種の音がミナの耳に忍び込む。耳鳴りの音と直接は関わらないが、モノ分類的には同じ存在。

硬貨だろうか      メダルだろうか      コインだろうか

。それが積もり積もって貯められていくような音だ。

「どいてー!!」

「キヤアツ!？」

ミナを半分弾き飛ばすようにして一人の女性が洋服店に駆け込んだ。

どうかしたのか、と店に入ってその女性の姿を目で追うと必死の形相で服を「あれも!!これも!!」と手にしていく。

やがて持ち切れなくなってもう買うのは終わりだろうかと思えばとんでもなく、レジにそれらを積むと、すぐにまた店内を漁りまくった。

総じてファッションとは金の掛かるものである。特に女性はそれがよく言えて、高級店でなくとも一着で万の大台を悠々と越えてしまっ。

その女性はもう百着はレジに運び、更にまだまだ購入するつもり



のようだ。試着さえしてはいない。

この店で少しでも気に入った服は全て買っつもりだ。

そういう“欲望”に塗<sup>まみ</sup>れている。

尋常ではない。あの必死さは普通じゃありえない。まるで、それ以外のことは全て頭の中から吹っ飛んでしまっているかのようだ。

沢山店内の商品が売れば良い目を見られるはずのこの店の従業員やオーナーもある種の恐怖を感じたらしい。女性を押さえ付け、大人しくさせようとした。

だが、女性は止まらない。

その“欲望”だけのため生きていくかのようだ。

ミナは母親を見る。

信じられないというような顔をして、首筋には珠のような汗が湧き、目は大きく見開かれていた。

その唇が震えたように動く。

ミナは確かに聞いた。

彼女の母親、赫塚深央の口から出た「グリード」と「ヤミー」という謎の単語を。

“グリード”。“ヤミー”。

その言葉は今日見た戦いの光景とは真逆の力でミナの心に働き掛ける。

“仮面ライダー”という戦士たち。その名はミナに絶大な安心感と勇気を与えてくれた。あの戦士たちは強き正義をもってミナの中の不安を消し去ってくれる。

それに反する“グリッド”と“ヤミー”。その言葉はミナの中の闘争心と 同時に恐怖心をも掻き立てる。

不気味だ。

あの洋服を買いまくる女性の表情もそうだし、その言葉もそうだし、それにこれだけの“意味”を感じ取ってしまう自分、赫塚ミナが不気味だ。

「お母さん、なんか……嫌……！！ 他の店、行こ……！！？」

硬直する母親を縋り付くように揺さぶり、ミナは「ね？ね！？」と呼び掛ける。

深央は一滴汗を垂らすと「え、ええそうね……」と同意してミナの腕を掴んで足早に店から去ろうとした。

だが、ミナの耳にまたキィィィン……という音が入ってくる。

今度は、かなり近い。

ミナは奇妙なことにその音が店の前にあるショーウィンドーのガ

ラスからのものの気がどうしようもなくして、そつとガラスを覗いた。

何もない。お伽話みたいにガラスの中に何かが潜んでいるわけでもなかった。

ただ、ガラスの中に“自分”が映っていた。

その様相は顔立ちよく珠玉のような綺麗な黒い瞳で可憐な少女…ではない。

金の二本角が生え、赤い大きな複眼を持ち、黒い体殻に覆われたドラゴンを想像させるような意匠のれっきとした“異形”だった。

「…………ツ!?」

ミナは息を呑んだ。この姿には見覚えがある。

何故か名前が浮かぶ。今日見た戦士たち、仮面ライダーの中の一人、“仮面ライダーアギト”だ。

しかし、まだ何かがある壊れたビデオテープが徐々に修復されるように、割り込んでくる。

ミナという存在が、“異形”に塗り潰される。

ミナは引き込まれるかのように無意識に、その姿を目視してしまおうとした。

だが、幸いに、

「見ちゃ駄目！！」

深央がミナの目を塞いだ。

おかげでミナは見ずに済んだのであった。比較的、マシンなところまで済んだのであった。

ショーウィンドーに映る自分の姿      ある死に絶えきれず世  
にヒツソリと生きる灰色の死徒の王と呼ばれる姿を      肉体を  
鍛え抜いた果てにたどり着く“鬼”という姿を      欲望の力を  
際限なく受け止める器たる怪人の姿を      見ずに済んだのであ  
った。

WORLD END〜COME BACK〜（後書き）

シャウタコンボのEDが公開されましたね！！良かった……ないのかと思った……。

後藤さん、バース変身おめでとー！！

……クラヒ・ノアを知っている人なら知ってますでしょうが、後藤さんをおんな風にしたくないなあ……。

2月11日。本日の赫塚家の食卓はいつもより四人多い人数で開かれた。

一人はサングラスの似合うかつての深央の従者の一人だというワイルドな男性、次狼。 Grillしたチキンを探查犬かというくらいに嗅ぎまくったあとにむしゃむしゃと食っていた。

あとの三人はミナたちが父親を迎えに行つたときにはいなかった人々だ。

一人はボーイスカウトのような格好をした可愛らしい顔立ちの少年、ラモン。名前からして生粋の日本人ではなく外国人の血が少し混ざっているようで、ミナにとっては深央方の遠い親戚なのだそう

だ。  
ラモンは来客と久しぶりの父親のために作つた豪華なメニューをパクパクと食べる。意外に食欲は旺盛ならしい。

残つた二人のうち、身体が大きく、男性にしてはロングな髪をした男性が力<sup>リキ</sup>。この人も次狼とともに深央に昔仕えていたという。屈強な偉丈夫なのでボディガードとかが似合いそうだ。

ただし、グズではないが物凄く動きがスローなのでこちらのペー

スは時々崩されてしまいがちだ。今も、見た目通りの大食漢なのに如何せん動きが遅いせいであまり食べれていない。

残った一人がミナの父親であり、深央の夫でこの家の大黒柱、赫塚渡だ。

ミナが金髪をしているように渡もミナの祖父の血を継ぎ金髪をしている。精悍な顔の造りをしていて、この父親と母親あってこの娘あり、といった感じである。

渡の座る椅子の横にはなにやら大きな　　そして若干異臭を放出する荷物がある。

渡の作るバイオリンのニスに使う材料が詰まった荷物だ。渡はチャリティーコンサートを開き世界を放浪してはこういった材料を探している。

ちなみに、今回渡が発掘してきたバイオリンのニスに使う材料は何処から採ってきたのか“カプトガニ”だった。生きた化石と呼ばれる太古から生き抜いてきた生物、それも何ダースもいる。

なんでもこの美しい茶色の光沢がバイオリンに合うのではと考えたのだという。

渡の作ったバイオリンはもはやイタリアの名匠・ストラディバリの作ったバイオリンに並ぶほどの一品になっている。

よって、その音色に魅了されバイオリンを譲って貰った人も多くいるのだが、その材料がこういう“ゲテモノ”じみたものばかりだとは夢にも思えない。知ればおそらく卒倒だ。

売ればかなりの金額になるのは間違いない。ストラディバリの傑作、ハンマーと呼ばれるバイオリンは日本円にして約4億円で落札された。

「そういえば、ニューヨークで見ましたよ。『天才バイオリニスト・赫塚渡のチャリティーコンサートに二万人の観客。募金総額120億円』って……相変わらず凄いです」

深央が渡の顔を見て褒めちぎる。まだ二人の間には初恋の甘酸っぱさがあつて、お互い口調が丁寧になつてしまう。

全く、妻に負担を掛けているというのにお熱い限りだ。これだけ“離婚”などの暗い単語から掛け離れた夫婦はいない。

「よして下さい、深央さん……。父さんに比べたら、まだまだです」  
「よ」

とか言つて照れる渡だった。

渡の父親、赫塚音也もイタリアで活躍したバイオリニストだ。それも渡と同じく天才で、彼の演奏は値段にすると1000万円の価値があつたという。

もはや世界一のバイオリニストの座にまで上り詰めた渡だが、未だ父親の影を追っている。

「……あのヘラヘラした男より、お前の方が謙遜がある分いくらか上手だと思つがな」



次狼が毒づく。

渡はそれも次狼なりの応援なのだと考えて偉大なる父親を批判されたことは笑って流した。

「オトヤ、ワタル……どっちも、上手い」

力が（やはりゆっくりと）オニオンスープをスプーンで口に運びながらいった。

「ソーソー。どっちが上手いかなんてわかんないよ」

とラモンも賛同して言う。

さつきから話が成立しているがよくよく考えたらおかしいことである。

渡の父、赫塚音也はまだ生きてはいるがもう年は七十近い。彼的全盛期は20代から40代までであり、その後は感覚も衰えて今はすっかり隠居生活だ。

次狼や力とはかくミナと同年代のラモンは赫塚音也全盛期の演奏を知るはずはないのだが……。

しかし、“事情”を知らないミナはとてもそのことに気づけるような状態ではなかった。

明日に誕生日を控えているのに、母親に奮発してもらい高い服も買って貰ったのに、年に数回しか会えない父親とこうして対面しているのに、その表情は優れない。

俯いてばかりで、時たまナイフとフォークに手が伸びてもすぐに置いてしまう。

「どうしたんだ、ミナ。……調子でも悪い？」

心配した渡がミナにそつと声をかける。その声の質はこの上なく娘を思う父のものだ。

「うっん、ちょっと……ちょっとダイエット中なだけ」

ミナはなんとかニツコリと笑って取り繕う。自分ではきちんと笑えているかどうかはわからなかった。

それを聞いて渡は予想外に驚き、真剣な眼差しに変わる。

「そ、それは……アレか。好きな人が出来たとか……」

基本旅に出ている娘との時間をあまり長く取ることができない渡だが、親は子供の問題になると馬鹿になる生き物だ。

渡は詳しく話を聞かせてくれ、と汗だくになってミナに迫ってきた。

「ち、違うよ!!そういうわけじゃなくて……好きな人とかはまだいなくて……」

尻すばみになってしまう。凶星であったわけではなく、またあの光景と鏡に映った自分の姿を思い出してしまったからだ。

「そうか……良かった。そんなかわいい服を着てるからそういってとかと……」

「あ……」

ミナが着ている服は今日深央から誕生日プレゼントとして買ったもらった服だ。せっかくお父さんと合うのだからと、店内の試着室で着替えていたのだ。

ミナの女性らしい見事なボディーラインを生かして、それでいて女子高生っぽい可愛さを前面に出しているが、これはミナのセンスではない。

いつもならミナは自分で着る服はアドバイスなどには揺れず自分で決めるのだが、今日はボーツとしてしまって店員さんの薦めるままとなってしまうた。

自分のセンスでない服を褒められるのは微妙な気分だ。店員さんの見立てが良かったというだけなのだから。

「……………」

自分のモノではないモノを纏っていると……まるで。

「渡」

渡の横の席に座る深央が急に自分の夫の名前を深刻な顔をして呼んだ。

渡はその小さな声を聞き逃さず、すぐに「何ですか？」と深央の

要件を聞いた。

深央はしばらく黙る。何を打ち明けるのか知らないが、相当に悩んでいるようだった。

その沈黙が永遠に達する一歩まえに深央は渡の耳元で“何か”を明かす。

呟きよりも小さく、極小の音量だったのでミナには聞こえないが、それを聞いた父親の表情は見たことがないくらいに険しくなっていた。

ミナと同じく、深央の声が聞こえないはずの次狼、ラモン、力の三人も渡に習うように思い詰めたような表情になる。

「深央、本当？」

夫の名前を普段から呼び捨てにしている深央とは違って、渡はさん付けをしていたのだが、それが吹っ飛んでいた。

相手の感情とか、自分の感情とか、そんなものはこの事態に於いては気にしている場合じゃないと言うように。

渡から確認された深央はゆっくりと頷く。

途端、渡の力が抜けて自墮落に手を重力に従わせ、目線も落とす、頭を下げる。

渡の悩み多き少年時代によく見られた行動だ。なにかあったら彼はこうしてうなだれ、気を沈めた。

しかし、今回のこの行動に秘められた意味は少し異なっている。  
例えるなら、

避けられないと知っていた運命を、避けようと試みて、やはり避けられなくて、それに向き合おうとするかのように。

「ね、一体何……？なんの……話……？」

ミナは両親に問いかけた。

第六感的に今日起こった奇怪な出来事 仮面ライダーの戦いの光景や謎の怪音、欲望に塗れた女性に自分の代わりに鏡に映った仮面ライダーアギトなどをまとめて解決させる一つの真実があるのだとミナは感じ取る。

それが渡が話そうとしていることなのだろう。深央が止めるほど重要な何かだ。

知りたい。知らなければならぬ。

しかし、返事は返ってきてくれなかった。さながらこの世に赫塚ミナがいないかのように。

ミナは目を泳がせて心の底から動揺した。昔から両親はミナが疑問におもったことを聞けばちゃんと答えてくれて、無視されるなどなかった。

ミナにとって、初めての“拒否”だった。

それは彼女にとっては「何故隠すのか」という疑問ではなく、ただただ衝撃だった。

「これも、運命サダメなんだ……」

渡が意を決したように椅子の背もたれから上体を持ち上げ、肘をつく。

運命を受け入れ、伝えると心に決めたらしい。

「ミナ、お前は……」

「待つて」

深央が渡の組んだ手を両手で押さえながら言った。まるで、破壊を撒き散らす拳銃を収めさせようとするかのように、しっかりと握り、説得すべく視線を捉えて放さない。

「ミナは女の子なのよ。貴方や貴方のお父様のようにはいかない」  
関係ない。

そんな風に反対したのは渡ではなくミナだった。「女の子だから」と特別な目で見られるのは前々から嫌だった。

親の期待なら自分が裏切るわけではない。どんな高いハードルだろうと親の喜ぶ姿を見られるなら、褒めてもらえるなら、と必死に乗り越えてきた。

今更、関係がない。

どんな衝撃の事実を告げられようとも、両親がミナにその事実を乗り越えてもらいたいと願うのなら自分は受け入れてみせてやる。

だから、もう解らないことは勘弁してくれ。

自分の歩むべき恋の道は何か

今日見た夢のような戦いの光景はなんだったのか

仮面ライダーとはなんなのか

グリードやヤミーとはなんなのか

自分を被い尽くしたあの姿はどういうことなのか

もう、解らないことはウンザリだ。

父親と母親に一生懸命聞いてみるが、二人は今ミナの言ったことが聞こえないかのように反応しなかった。

二人だけの世界で意思の疎通を延々と行っている。ミナが何をしようが、これを引きはがすことは出来ない。

「次狼さん！！ ラモン君！！ 力さん！！」

ミナは深央が渡に何か囁いたとき、この三人も緊張感を張り詰めさせたので父親が話そうとしていることの詳細を知っていると踏んで縋り付く。

次狼は知らぬ存ぜぬを貫いてコーヒーを啜った。腹にナイフでも刺さったような強烈な痛みを耐えているかのようにコーヒーカップを持つ手が震えている。

ラモンはわざとらしくソップを向いて、これまたわざとらしい口笛を吹いた。だが、時々ミナの方をチラッと見てくる。

力は「あの……」と口が滑ってその何かを告げてしまいそうになったが、次狼の一睨みとラモンの緊急口封じにより回避された。

叫んでも、叫んで叫んで叫んでも、誰も話してくれなかった。

「何よ……！？」

頼んでいるのに応えてくれない。自分がそれに負けると思われている。自分を信じてくれない。

努力しても上手くいかない。

上手くいかない上手くいかない上手くいかない上手くいかない上手くない上手くない上手くない上手くない上手くない上手くない

いかない、いかない、いかないいかない、いかないいかないいかないいかないいかないいかないいかない

ミナの  
パーソナリティ これまでの人生で自然と身についてしまった  
ある性質が悲鳴をあげた。



「何よ!? 何だつていうのよ!? こんなに頼んでるのよ!?  
こんなに必死なのよ!? こんなに努力してるのよ!? 何で……  
何で誰も教えてくれないのよ!」

それでも誰も応えてくれなくて、

「私がみんなの期待を裏切ったことなんてあつた!? 勉強も頑張  
つたし、スポーツだって頑張つたし、バイオリンだって頑張つたの  
よ!?! 私が期待に応えられないわけじゃない!」

それでも誰も心を動かしてくれなくて、

「私が応えなくちゃいけないの!! なんてことだってやってみせ  
るし、どんなことだって努力さえすればきつと上手くいく!! 上  
手くいくのよ!」

それでも誰も信じてくれなくて、

「だから、私に期待してよ……!! 私を信じてよ……!! 乗り  
越えてみせるから、お願いだから……私に託してよ……!!」

それでも誰も託してくれなかった。

「……もういい……!」

ミナは13年間使っている自分のバイオリンをケースから取り出  
し、仁王立ちする。

「信じてくれないなら、今までの私の努力は意味のなかったこと……  
……ってことよね。期待してくれないなら……頑張っても仕方ないわ



渡が深央から目を放さずに、そのままの位置で気が動転したミナの行動を止めていた。

「あ……う……」

ミナは気がつき、バイオリンを振り下ろす力を抜いてバイオリンを手放した。

この13年で「父親の作ったバイオリン」ではなく「バイオリンというものそのもの」を愛する心がミナの中に芽生えていたのだ。

それを壊そうとするなんて自分はなんと愚かだったんだろう。

「深央さん、やっぱりミナに全てを伝えるね」

ミナの方は向かないで、深央の瞳に語りかけるように渡は言う。

ただし、この答えとなったのはミナが錯乱して涙を流していたからではなかった。

深央も頷いた。

根負けしたのではなく、渡に説き伏せられた  
いや、踏ん切りをつけさせてもらったのだ。

それが正しい決断で、ミナにとっては避けて通れないことであると。そう分かっていながらも出せなかった勇気を渡からもらったのだ。

グスツ、とミナは鼻をすすって両目から流れた涙を拭う。

ミナはあまり意味を考えていなかった。その真実が、運命が、事実が、彼女の心に深く突き刺さり、抉り取られ、再起不能となるまで切り刻むだけでなく、彼女が彼女たる大前提まで破壊される危険性を孕んでいることを、考えもしていなかった。

「ミナ・・・お前は、」

【~~~~~】

僅かに聞こえる音が渡の告白を遮った。

何かが揺れる音 ……渡、ミナには聞き覚えが嫌というほどある音だ。

バイオリンの弦が振動する音だ。

しかし、今ここにバイオリンの奏者はいない。

この屋敷の奥の棚の中に飾られる一つのバイオリン……。それが誰も触れることなく鳴っていた。

WORLD END〜FANGIRER〜（前書き）

久しぶり過ぎる投稿となりました。理由は、ちょっと平成仮面ライダーを勉強し直していたからです。

クウガ……やっぱグッド。ファイズ……やっぱカッコイイ。ダブル……やっぱハーフボイルド。ブレイド……やっぱ「ダディバーナサンダゼビデルンデドウ、オンドウルラギツタンディスカ」。

キバは二年間やればかなりの良作品になったろうになあ、残念。電王はやっぱあんまり好きになれん。声優とかどうでもいいし、良作と呼ばれてるけどあんな作りやすいコンセプトだったらそりゃ良いのできて当然。現にオーズは……

やっぱ、クウガ、ファイズ、ブレイドみたいなシリーズが好きだ。

……って、私の個人的意見なんてどうでもいいか。

さて、始まり始まり〜〜

バイオリンが一人でに鳴っていた。

ミナが自宅でバイオリンの練習をする時と渡が帰還したとき彼が集めた材料からバイオリンを作るとき三日ほど使う屋根裏部屋。

そこにあるいくつもの試作品や保管品のバイオリンの中で、一つだけガラス棚の中に半ば封印されたようにあるバイオリンが音源だった。

『ブラッディローズ鮮血の薔薇』。渡の父、赫塚音也が今から約44年前に作った生涯使い、渡に託した最高の名器だ。

それが誰も弦に触れることなく鳴り響いている。

急激な強い突風に曝されたら微かに弦が震えるかも知れないが、棚の中は密室も同然。その内部で強い風など、到底起こりようがない。

だというのに、ブラッディローズはその美しい音色を奏で、人々の耳に焼き付かせる。

ミナが耳にしてきたどのバイオリンよりも、それこそ値もつけられないほどのストラディバリオスや如何なる名器でも到達出来はし

ない美しい音色。

だから、その音色は解りやすく意味を持つ。

怪奇現象。

しかし、悪意のあるようなものではなくむしる悪意をミナたち赫塚家の人間に伝令しているかのようにだった。

そう、『警鐘』と言う意味を秘める。

「……………  
「イアだ」

それが『何』なのかをこの世で一番思い知らされ、一番傷つけられ、一番に逃げ、一番に奮起した男はボソツと呟いた。

ミナはあの名を聞いたときに近い悪寒の前兆をピリリと味わう。

そして、

「ファンガイア”だ!!!!!!”」

赫塚渡はその名を今度は大声で叫ぶ。

その声に釣られたかのように、もしくはそれが封印を解除させる合言葉であったかのように、ブラッディローズがカタカタと揺れた。

ブラッディローズがこの音色を奏でる原因、とは違い、ナニカがブラッディローズの中で動いているようだ。

すると、弦と弦の隙間からヒュルツとナニカが外界へと飛び出す。

「渡!!！」

その声は渡のもでも、深央のもでも、次狼のもでも、力のもでも、ラモンのもでもなかった。

もつと特徴のあるような声。

この場において声を持つ者は渡、深央、次狼、力、ラモン、そしてミナの六人を除けばあとは一人。いや、一匹とも言えるのかも知れない。

「渡!!！ ファンガイアなんだな!？」

二枚と言うべきか、二個と言うべきか、生えた翼でパタパタと羽ばたくバイオリン（ブラッディローズ）から飛び出してきた者だった。

金色の身体、翼は青、大きな目の色は赤。

それは、実際のもののような不気味さや汚さはなく、デフォルト的な蝙蝠コウモリのように見えた。

「渡!!！」

長年の眠りから醒めたばかりで眠かろうが、そのデフォルトコウモリは叫びをあげる。

いや、この事態が彼の眠気など吹っ飛ばしているのかも知れない、



そんな感じを匂わせた。

「キバット!!」

渡がバイオリンの内部で長い期間眠っていたコウモリの名前を言う。

「渡!! 二十二年ぶりの感動の再会だが、こいつぁヤバイぜ!! どうなってやがんだ!? ファンガイアの奴らは ……!」

「僕にもよく分からないよ!! 僕らはあの時確かに ……!」

混乱、困惑。

何かを知っているこの二人でさえ今何か巻き起こっているらしい事態は手に余るようだ。

“何か”。

ブラッディローズがこの家にいる 渡が“キバット”と呼んだ妙ちくりんなコウモリも含めて 七人に対して鳴らす警鐘のことか。

それとも、そもそもに『ブラッディローズが鳴っている』という事態を引き起こしているモノがある』ということか。

或いは。

「お父さん……？ どういうこと……？」

一方のミナはほうけたかの如く意識の籠っていないような声色で尋ねた。

解る、解らないの問題ではなかった。一から十まで渡の説明を受けようがきつと彼女が納得し理解するのは不可能だ。

第一、渡さえ混乱している事態をミナが消化出来るわけではない。

だから、付いていけない。ミナはそうやって尋ねた質問はさつきまで喚きたてていたような知りたいたいという思いからの質問ではなく、出したいから出す謔言のようなものだった。

渡に対して問い掛けているのかも微妙なところだ。

「ミナ」

渡がミナの両肩を前からガツシリと掴み、膝を曲げ、視線をミナとピツタリ合わせた。

ミナは肩を掴まれた瞬間にビクツと震える。

この状況は全てが見えない。見通しが利かないとかじゃなく、もうすでに視界は漆黒に塗り消されてこの先からは更なる闇が拡がっている。

あんなにも待ち望み数ヶ月ぶりに再会した愛する父親でさえ、この場合ミナの心を傷つける絶対零度にまで凍てつかされた刃に成り得てしまうのだ。

しかし、渡はそんなミナの緊張を解きほぐすように、温めるようにそっと笑いかけた。

「大丈夫、僕らがついているよ」

「……………」

何が大丈夫なものか。ミナの頭の中でそう危険信号をけたたましく鳴らす者がいた。

先程渡が見せた焦燥にはハッキリとした恐怖があった。何か大事なものを失ってしまうかもというものだ。

だが、緊張感はゆっくりと緩和されていった。

父親の笑顔は苦しい事態なのにやたらと大きくて優しく、ミナの心に安らぎを与えて。

ミナは黙ったまま頷いた。

よし、いい子だね。と渡はミナの柔らかな金髪を撫でる。

「……………これから、ちょっといろいろある。ミナにも結構関係はあることだけど、それを今説明してあげる時間は……………悪いけど、無い」

ミナがまた暴れ回らないようにと渡は優しく念を押した。

「一段落ついたら全部話すよ。ミナは僕らの宝だ。ミナが知りたい

なら、辛いことになるかも知れないけど話す。だから、今は生き延びてほしいんだ」

ミナは 頷きかけた。

しかし、とてつもなく悲しい匂いを漂わせる言葉を聞いた気がして、引つ張られる。

生き延びてくれ。

それは、まるで覚悟しているかのようで。その覚悟とは、

「おと ……」

ミナが渡に“最後の質問”をしようとした時だった。

ガアシャアアンツッ！！

と、何かの破壊音が耳をつんざき、ビリビリとしたものが身体を駆け抜け、通過していった。

「なに……！！？」

父親がくれた安らぎは一瞬だった。

窓から外を見ると何が起こったのかは一目で解った。この赫塚家

の屋敷の前にある大きな鉄格子みたいな門が破壊されていた。

へしゃげられ、煉瓦部分は粉みじんに碎け散り、右半分は屋敷に突き刺さっている。ミナの力では大きく開け放つのも大変な重い鉄の塊が、だ。

それを行った犯人たちがいた。

門の前に佇んでいる。

それは、まさに怪物だった。

巨樹のように太い足、強力を秘めているだろうことが楽々と想像できる豪腕、獲物の命を刈り取る処刑鎌を連想させられる鋭利な牙を持つ。

体色は個体によってまちまちで、共通する物は少ない。しかし、アレは全て同族に位置するものだった。

先頭には一際大きな殺気を、まがまがしさを放つ二人の怪人がいた。

一人の体色は白。猫類のような顔に立派な鬣を生やし、頭部から左右に一本ずつ緑の旗フラッグを立てているのが何よりの特徴となるべきだが、その猛獣のような気迫がそれよりも屈強で堅牢な体軀を際立たせていた。

イメージ出来る動物は獅子ライオン。

もう一体は隣にいる怪人と比べると頭部は巨大であるが、スマー

トで可憐な印象を受ける。そして、なによりも屋敷の前に立つ怪人たちの中で随一な知性のようなものを感じ取ることが出来た。

イメージ出来る動物は揚羽蝶。スワローテイル

ミナの直感が告げている。あの怪人たち　異形の民たちは危険だ。そして、渡が危惧している“ファンガイア”とはあの影たちなのだ。

「この数……それにあれば、ライオンファンガイアにスワローテイルファンガイア……！？　なんで……チェックメイトフォーが……！！」

渡が眉間に皺を寄せ、なによりも脂汗をかきながらその軍団とも呼べそうな三十人を越える怪人たちを焦点の合わない目で見ていた。偉大で勇敢で尊敬する父親がここまで危機感を覚えている。それは、見たことがないものであり、その姿を見てしまったことによりミナの恐怖心は何割か増してしまった。

「う……！？」

それに加え、ミナの頭の中に不気味なまでに強烈で、悍ましいまでに意識の奥底から、ある幻想が沸く。

血液のように赤い頭部と胸部、大きな牙のような黄色い複眼、銀色の肩当て。

ファンガイア  
吸魂鬼と戦い、自分の運命と戦い、その鎖を解き放ってきた一人  
の戦士。

仮面ライダーキバ。

「いや……何よ、何なの……!?!」

吐き気がする。それは止まらない。ミナのどこからかから吹き  
上がるこのどうしようもない強大なイメージは振り払うことは到底  
できなさそうだった。

無駄な足掻きと知っておきながらミナは頭が割れるような痛みに  
襲われているように頭を抱えて必死に動かす。

渡はそんなミナの姿を横目でしかし脳裏に刻み込ませるように視  
界に映した。

「ミナ、深央さん逃げて!! ここは僕が……!!」

ミナはかなりの咄嗟な命令だったので言われるがままに、頭の中  
で逃避という選択肢を選び、組み立てる。

しかし、彼女の精神にとっては幸運なことにはいざ逃げんと脚部に  
力が入る寸前、渡に似た強い意思が彼女の行動を留めた。

「ダメです、戦っちゃ!! 今の渡が敵うわけがありませんよ!!  
それに……一体何が起こっているのかもわかりませんし……!!  
」

命を賭ける壮絶なる怪人との戦いにいざ出んとする愛する者を、  
深央は必死に止めた。

ミナもハツとなる。

この父親を置いて逃げるなどまともに考えたら有り得ないことだ。  
一瞬でもそれを考えてしまったことを激しく悔い、自らを叱責する  
ように父親へと叫ぶ。

「そつだよ、お父さん！！ そんなことしちゃ嫌だよ！！」

ミナはあの大量に佇む恐ろしい怪人たちを知らない。どういうわけ  
で父と母がああの怪人を知っているのかも、二人に以前何があった  
のかその過去も全く知らない。

だから、ミナの発言は深央の発言と比べると少々薄いものとなる  
かも知れなかった。

でも、ミナが出せる限度には到達した、今のミナが言葉にのせら  
れる最大の“父に生きてほしい”という思いの爆発だ。

「逃げるんだ」

されど渡は一步もそこから動かないし、譲りはしない。

そこにも、確かな思いがあるからだ。譲ってなるものかという確  
固たる決意が、渡の瞳の中で焰を燃やす。

その強い緋灯は実態を持つかのように明らかで、対抗を誰ひとり



として逃さんとばかり火花を撒き散らし、揺らめいている。

深央は一步、後ずさりした。

渡の囂々と燃える炎に包まれ灼熱し、太陽の色に輝いている決意の刃に気圧されたのではない。

いや、なさそうだったのであるが、だからと言って何かを言い当てると言われたら少々参ってしまう。

彼と彼女の稀有なる過去を知らぬ者が二人の間に繋がっているなによりも確かな“絆”<sup>絆</sup>の名を言い当て、唱えるのは土台無理であるのだ。

しかし、強いて言うなれば。

それは恐らく、過去の出来事と現在の出来事の酷似によるものであった。

二人は、過去にも同様に二人して生命の危機に見舞われたことがあり、同じように渡が己の命を懸けたのだ。

今のように、誰にも負けない、誰にも譲らない、誰にも汚させない真っ赤な決意の巨剣を大地に突き立てて。

「君達を死なせはしない。だから、生きるんだ!!」

「……分かった……!!」

深央は苦虫をかみつぶし、その苦汁を舌に擦り込ませるかのよう

な顔をし、血が僅かばかりだが出るくらい唇を噛む。

そして、怪人たちと渡の方と逆方向にミナを掴んで駆け出した。迷いを振り切らんとするような勢いだ。

「え……！？」

母に肩を掴まれ、裏口から外へ脱出させられながらミナは驚きで目を丸くした。

父親は別に非力で軟弱な体質ではない。昔は腹筋が三回ほどしか続けられなかったなど、目を疑うようなへろへろエピソードが幾つかあったそうだが、今はむしろ逞しい部類に入る。

だが、父は人間だ。

あんな怪人に敵うわけではない。どう考えてもあんな怪力を持っていて、オマケに悍ましい怪物に人間が敵える道理がない。どう考えてもだ。

父親だけここに残せば忽ち怪人たちの餌食だ。

母親はそんなことも分らないのか、とミナは考えたが、母自身も父親では敵わないと言っていたのだ。

「いやッ……！」

ミナは母親の腕を振り払おうとしたが上手くいかず、代わりに裏口のドアに食らいつくようにしがみつく。

母親と父親の間にある愛はそれはもう強いものだ。万物に均等に訪れる死さえ二人の愛を引き裂くことは不可能。

それに、例えその繋がりが詐りの物だと仮定しても、以前はどうだか判らないが少なくとも今の深央は他人の命を捨てて自分の命を取るような薄情者ではない。そんな冷酷さなど持ち合わせていない。

深央は「ミナ!!」と強く我が子の名前を呼び、手を放させようとす。

ミナには母が解らなかった。

まだまだ一緒にいたいはずだ。永久トウに共に連れ添い肩を並べていきたいはずだ。木漏れ日のような幸せを肌で感じて身を寄せ合っ

(私はまだそうしていたい。失うなんて嫌ッ!!)

そんな愛がただただミナの中に充満し狂乱し引つ掻き回し目を塞ぐ。

「お父さん!! お父さん!! いや、いやいやアッ!!」

母を傷つけてしまいかもしれなかったがミナは気にせず羽交い締められたまま暴れる。

失ってたまるものか。

ミナのその“必死”は今までの人生が特異であったために人よりも遥かに巨大だった。

そんなミナを見て、深央は悲しそうに目を細めた。

「ミナ ……」

母は娘の名を小さく呼んだ。

耳元で言われなかったら気づかなかったであろうほど小さくか細い声だったが、ミナにはやたらに大きな存在感だった。

深央はミナに語ろうとしていた 何かを。

それは一体なんだったのか。ミナの暴走を止め、渡の言う通りに動かせるだけの力を持っていたのか。

結局、ミナはその先を知ることにはかなわなかった。

突然、考えが反転したかのように口を接ぐんで、深央は動きを止めた。ミナを抑えるための力さえ抜けている。

「……………?」

どうしたのだろうか、とミナは深央の顔を振り返って見ようとする。

が見えるか見えないかというところで、深央は自分のかつての従者に最後の頼みを入れた。

「次狼さん!! ミナをお願いします!!」

「……了解だ」

渡や力、ラモンがそうしたように怪人たちを迎撃しようと上着を脱ぎ捨て、臨戦態勢を整えていた次狼は機敏に動いた。

まるで、深奥から声をかけられるのを薄々と予感していたかのよう  
うに。

ガッ、と

「へ ……！？」

ミナは無言を言わず次狼にかっさらわれた。一瞬でミナは担が  
れ次狼の肩の上。

「よろしくお願ひしますよ」と言うように深奥は次狼に優しく会釈  
する。

「お母さん！！ お母さん！！ お、お母さんッッ！！」

“別れ”。

それは、ミナにとって兇悪が過ぎる。

父に加わり、長く一緒にいた母までもが自分の背中を強く押し、  
打ち捨て、繋ぐうとする手を強引に引きちぎる。

家族の絆ならどんな家よりも強いつもりだった。渡と触れ合える  
時間は一年に僅か数日間と少ないがそれでも、負ける気はしなかつ  
た。

なんでも伝わっているかと思ってた。絶対に自分の心を  
何がなんでも両親と一緒にいたいという気持ちは伝わっている。

それなのに、何故 ……？

いいや。

そんなのは二の次で、ミナは受け付けなことに必死だった。

こんなのは間違いだ。間違っているに違いない。認めない、認め  
ない、認めない、何がどうであれ認めてなるものか。

次狼の肩の上で、ミナはありったけ手を伸ばした。

得られたのは母のいつもと変わらぬ優しい微笑み。ただし、それ  
は今生の別れとなるのを覚悟したような特大の思いが注ぎ込まれた  
ものだった。

違う。

自分が欲しいのはそんなものじゃない。ミナが命を賭してまで求  
めるのはすぐそばにいますという温もりだ。

次狼を跳ね退けて両親の所へ戻ろうとミナは考えたが、次狼の人  
間離れた怪力と野を駆る野犬のような速力が阻んだ。

女性にしては力があるほうだと自負しているのにまるで歯がたた  
なかった。

もう一度、母の名を叫んでみた。自分にこんな大きな声が出せる

ものかと驚くくらいに腹の底から叫んでみた。

しかし、深央は反応さえしてくれなかった。深央は黙って渡の側へ、肩を並べた。

そして、次狼は高く跳躍し、

ミナは二人と別れた。

WORLD END〜FANGIRER〜（後書き）

フォーゼ。

かつちよわるいと皆は言いますが、第一印象が悪かったファイズが  
あんなにもカッコイイんだから、カッコイイに決まってる。俺は東  
映を信じる。

でも、オーズは二年続けられると思うんだけどな。

……正直、終わって欲しくない。



WORLD END〜MAKAMOU〜(前書き)

両親たちを置いていく形で次狼に連れられ、屋敷から抜け出したミナ。

彼女に待つものとは ……………！？

とてつもない長さを誇る逃走編、スタートオツツ！！

## WORLD END〜MAKAMOU〜

日はとうに没して、月も頂点に近づいてきている。街灯がどうした訳なのかほぼ消えているせいで月明かりだけがまばゆかった。

時刻はだいたいの9時頃。ミナの誕生日まで残り三時間を切ったというところだ。

しかし、このままではミナの生涯における史上最悪の誕生日となってしまうのは必至だ。

このままでは、ミナの最愛なる二人の命が尽きてしまう、永遠に会えなくなってしまう。

そんなの、嫌だ。一人ぼっちになるなんて、真っ平御免だった。

なんとかしてでも取り戻したい。失って溜まるものか。

が、それを遮るのは次狼だ。

次狼のスピードは世界陸上に出場するトップアスリートも真っ青なものだった。時速三十キロは出ているかもしれない。これが人間の出せる限りの域にあるのか大いに疑問だ。

それによって、父や母などがいるミナの自宅からグングンと離れていって、屋敷の姿はどんどん小さくなっていく。

「降ろして!!」とミナはわめき立て、抱え上げられながら次狼の身体をめちやくちやに叩いてみるが次狼の脚は止まらなかった。

今からでも折り返せば間に合うかもしれない。どうにかして父たちはあの怪人たちに食い下がっていてくれるかもしれない。

なのに、次狼は望みを叶えてくれず、希望はみるみる小さくなっていく。

「降ろしてよ!! ねえ、降ろして!!」

「喧しい……」

何度目かのミナの喚きに次狼の我慢が臨界点を越えて、彼は唸るようにそう言った。

ミナの目に映った次狼の顔には自分を恨むほどの悔しさがあり、獵場を睨む一匹狼のような荒まじい形相だった。

この選択肢に喜べずにいるのはミナだけではない。次狼はずっと昔から深央に仕えていたし、渡とも古くからの仲だ。

あの二人を死なせていいなどとは思ってははいないだろう。出来ることなら渡や深央を置いて自分だけ逃げ延びるような真似などしたくなかったはずなのだ。

「泣くな、安心しろ……といっても無駄か……」

ボソツと次狼は言う。

不安。哀しみ。怒り。それらを理解しているのは紛れも無い自分だった。

「……ん？」

次狼は道の真ん中で、唐突に立ち止まった。

ミナの主張が通り、次狼がその考えに同調し、ミナの屋敷に戻ることにした……

のでは、当然ない。

車が二台通れるくらいの大きな道を巨大な岩石が完全に塞いでしまっていた。

「岩………?」

ミナはこの場違いすぎるものを目を凝らしてよく見てみる。しかしどうみても、これは岩以外の何物にも見えなかった。

高い山の道路でこれを見たら落石で片付けられよう。

だが、ここは都会の住宅地の真っ只中。こんな巨岩があるような山など天気がいい時に北方に微かに見えるくらいだ。

だから、岩などではなかった。もっと珍しい……百年に一度のものだった。

光栄に思え、お前は百年に一度の幸運だ

ミナの頭の中でそうやって不気味に囁きかける古風な着物をきた男女たちがいた。

『ノオオオオオオオオオオオオオオオオ……ン……！！』

何処からかの、この声。

「これは …… “オトロシ” かー!!」

次狼はこの巨岩のような物体とこの特徴的な低音の“泣き声”から判断を下すと後ろ跳びで慌ててその場から離れる。

それと同時に一歩遅いくらいにその“巨岩に見えるモノ”がグワツと浮き上がった。

そして、何十トンという莫大な質量でズズウウン!!と地面に重くのしかかり、半径十メートル級のクレーターを残す。

二秒前、次狼とミナがいた位置は出来たクレーターの範囲内で、今の巨岩の真下だった。

次狼の緊急回避がなければ、二人して下敷きでぐちゃぐちゃの肉塊だったろう。

ミナは身を掠めた“死”にゾツとなった。

次狼はこの“巨岩に見えるモノ”を“オトロシ”と呼んだ。動いてミナたちの命を奪おうとした以上、これは生物で“岩”ではなく“岩に擬態し捕食するモノ”である。

ミナの知る限り、地上最大の動物はアフリカゾウで、体長は大きな個体で750センチメートル。しかし、目の前にいる生物は明ら

かにそれを凌駕している。

ミナの頭にまた、イメージが摩り込まれる。

鍛えに鍛えた努力の結果、人間の域を越えた“鬼”。

誰よりも逞しい隆々たる肉体と大きく穏やかで優しい精神を秘め、巨大な生物に挑んできた太古からの戦士。

仮面ライダー響鬼。

「くっ、しっかり掴まれ」

次狼はそうミナに忠告するとオトロシに遮られている道ではなく横の道を選んで走った。

オトロシがいる限り塞がれて、この道を進むのは不可能だったからだ。

だが、その道さえ阻むものたちがいた。実際にいる動物の縮尺を間違えたようなものが、全部で三体。

ゴツゴツした堅い体殻に包まれ、両腕にはキラリと光る殺人具があり、残る六本の脚で塀やら家やらに立っていた。

化け物サイズの蟹だ。何よりの武器であるハサミの大きさだけでもミナの身長を越える。

「この時期」に“化け蟹”が三体か……これは相当イカしてる……！！」

まいったように次狼は笑う。

問答無用、と三匹の化け蟹の内の一体が次狼に向かってハサミを振りかざしてきたので次狼はこれを高く跳躍して避けた。

「こっちだ」

ミナを抱えたままだとかえって化け蟹の攻撃からミナを守るのが難しかったからか次狼はミナを肩から降ろして、引っ張る。

選んだのは巨大な怪物たちが通ることの出来ないような小さな小道だ。

狙い通り、化け蟹たちはその入り口で立ち往生してミナたちは三匹の化け蟹たちを振り切ることができた。

「……………」

危機を辛くも脱して次狼に手を引かれながら、しかしミナの心中は穏やかではなく、むしろ不安は増大した。

出没した異形の怪物はミナの屋敷を襲ってきたファンガイアとか言う怪人だけではなかった。

自分たちだけではない。父や母たちの危機の度合いまで跳ね上がった。もし、ファンガイアの脅威から逃れられたとしてもまだ危機は迫るのだ。

こうしてはいられない。今すぐに両親の元へ駆け付けなければ。

怪物に襲われ命の危機にひんしたが、命を捨てたのと次狼の肩の上から脱せたのは運がよかった。

あんな怪物たちが街中に現れているのだ。もっと広い道を行けばあわてふためき大パニックで逃げ惑っているに違いない。

次狼の速度を振り切ることはかなり骨が折れるだろうが、そのどさくさに紛れてしまえば問題ない。

我ながら最低な算段をしていることはミナにも分かった。自分の望みを叶えるために他者の不幸を望むのだから。

けど、やってやる。

ミナはそう心に決めた。

「……………行くぞ、用心しろ」

次狼とミナの二人は巨大な怪物たちを引きはがすために選んだ小道を抜けた。

抜けた先にはちょうどミナの期待した通りの光景が広がっていた。

何百人という人々が皆一様に何かから逃げ延びようと躍起になって必死に走っている。その勢いはミナたちが見た怪人たちと代わるくらいに激しく圧倒で、大津波のような荒波を形作っていた。



怪人たちに追われているらしい。この人々たちもミナと同じように何気ない日常を生きていただろうに、訳も分からず命を危険に晒されている。

それは理不尽だ。自分たちが何をしたというのだろう。

しかし、ミナにとっては悪いが望んだ光景だった。これだけの人々がごった返しているのだ。次狼から離れ、人込みに紛れるのはたやすい。

「……ッ??」

願ってもない好機<sup>チャンス</sup>。

だが、脚も腕も頭も、ミナの身体がブレーキを踏んで凍りついたかのようになった。

確かにミナは次狼の手を振りほどくため、早く別れるため、父と母のもとへいくために胸を痛めながらもこの悲惨な光景を望んでいた。

ただ、“今すぐ”には期待を寄せてはいなかった。

別に近所を根城に走り回るワンパクな悪童のようなことをした経験はミナにはないが、それでも近所の地形くらい知っている。

あの小道を抜けてもまだまだ住宅地が広がっているはずだ。と言うのは、あの小道自体二つの小さなアパートが作っているものだからだ。

しかし、ミナが現在いるのは渡を迎えに行く前に母と一緒に行ったシヨップینگモールだ。まるで逆方向であるし、ミナの家からは1キロほど歩く必要がある。

さらに …… 沈んだはずの太陽が復活してさながら昼下がりのようだった。

どうなっているのか不思議過ぎてミナは通ってきたはずの背後に口を開ける小道を見てみたかった。

だが、その小道が消えていた。ミナの後ろには客が一人もいない。普段は盛況しているオシャレなブティックが放棄されているのみ。

そういえば、小道を抜ける瞬間に何かをくぐり抜けた気がした。

その何かをくぐり抜けたことによりこんな滅裂としたようなことになったのか。

いや、解析なんて後に回せばいい。

どうせ今まで起こってきたことを冷静にまとめて斬新な切り口で見ても判断ができる材料が皆無な今では分からないだろう。

今出来ることは気丈に順応することで、求められるのはずばり柔軟性。

何が起きて自分がここにいるのかは分からないが、次狼から離れるための材料なら揃ってくれている。

呆然としてはいけない。そんな時間は残されていない。なんにせ

よこれを利用しない手はないんだ。

「……………!!」

ミナは危険だというのにわざと百人を越える人の波の中に飛び込んだ。次狼は「何を考えているんだ」とばかり手の力を強めたがもう遅い。

迫り来る死に神のような強大な力を持つ怪人には遙かに劣るが人間がこれだけ束になって死に物狂いだと、生まれるパワーは壮絶だ。

密集度なら満員電車の方が上。速度ならベテランランナーのフル馬拉ソンの方が上。

されど、生命の危機というものがあるとそれらの何千倍も熾烈だった。

だれもがみな自分の命を最優先として残酷に他者を蔑ろにしている。自分だけが助かれればいいという風に、邪魔者を踏み付け飛び越えていく。しかも、それには一切の罪悪感もないようだった。

自分の命が一番大事。その“死に物狂い”はそう声に出して言っているようだった。

その中にあるミナも幾度となく後ろからの逃走者に跳ね飛ばされた。その都度地面に倒れてしまいそうになったが、そうなれば踏み潰されてしまうのでなんとか堪えた。

揉みくちやにされて我慢だった綺麗な髪も面影なく乱れてしまう。

だが、これだけ凄絶なのだから次狼から離れてしまうのはとても容易なことだ。

「退け退けエツ！！ 殺されなくなかったらどけエエツ！！ あいつらがきちまうだろうがアアアツ！？」

後ろからガラの悪い太ったサングラスを着用した男が実に自分勝手なことを言っつてミナを突き飛ばそうとしてきた。

(今だ……！！)

ミナは次狼の手を握る力を一気に緩めた。次狼もさすがに乙女の手を潰れるくらい力強く握ってはいない。跳ね飛ばされる時の力も動員させればミナの力でも振り払うのは難しくない。

その一瞬に希望をかけた。

「早く！！ 早 ……！！」

しかし、ミナが期待したその衝突はいつまで待とうが来ないものだった。

フシュッ！！と細い管の中をを突発的な強風が突き抜け通過したような音がした。その音が為<sup>な</sup>り、目で見るより、考えるより早くミナは思わず目を閉じてしまう。

ミナは薄く目を開く。

何故、ミナが目を無意識に閉じてしまったのか。見れないものであるからだ。通過したのは細い管ではなく、突き抜けたのも風

ではない。

ブシイイアアアアツ!!

と、ミナを突き飛ばそうとしてきた太ったガラの悪い男性は脳天から体内なかに詰まっているものがドロドロに混ざりあった赤橙色の液体を噴水のようにふいた。

男性はグラリと真後ろに倒れた。

傷は脳天に始まって、真つすぐ足の踵まで。男性の足裏が置かれていた地面には直径五センチ大という大きな風穴が開けられていた。

通過したのは細い管ではなく“人間の体内”。突き抜けたのは風ではなく命を穿つ鋭利な長槍。

これだけ大きな穴が空いたのにコンクリートの穴の周りには亀裂一つなかった。しかも、突き抜けた槍が深く刺さりすぎて地上から見えない。

人間の骨と肉だけではなくコンクリートをもやすやすと貫く、脅威の貫通力だった。

「ひ……ッツツ!!?」

あまりの衝撃的光景にミナは意識を失いかけた。

しかも、被害者それは一人の男性に留まらなかった。ミナの周りの人々が次々に同様に殺されていった。

“殺されていく”。

こんなにも惨<sup>むご</sup>たらしい死を振り撒く犯人がいる。

ミナはいつそのこと気を失ってしまえばこの凄惨な場景からは逃れられるのだが、防衛本能から頭上を見上げた。

何も無いように見える、が。

晴れた青空となった、夜のはずの空に胡麻つぶのように小さな点がある。ミナの目にはそれが映った。

何も聞こえないように思われる、が。

耳を澄ませば微かに鳥の羽ばたく音のような振動が聞こえる。ミナの耳にはそれが伝わった。

目をさらに凝らしてみるとその狙撃手の姿が詳細にわたり見えた。

狙撃手の容貌はまるでハゲタカのように、腕部にボウガンのようなものを付けていた。

きつとあのボウガンのように見えるものから射出された凶器が人間を正確に撃ち抜いているのだろう。

その禿鷹男はこちらを見上げ、さらに姿を把握するミナに気が付いたらしい。

ミナにしか聞こえないこんな台詞をつぶやいた。

『リズベダゾ、ボソギデジャス“クウガ”』

理解の出来ない言語だ。英語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、スワヒリ語、モンゴル語、世界数百ある言語のいずれにも見られない。

多分、これは“人間の言語”ではない。

そして、意味は。

(見つけたぞ、殺してやる“クウガ”)

「……ッ!」

ミナはその意味を生存本能で感じ取って、次狼を振り回すかのようにして身を翻した。

その回避はミナの命を救う。正確無比の狙撃はそれによつて的外し、地面に穴を開けた。

「う……!」

だが、まだまだ。ミナが逃げ続けてもミナの身体を貫くまであの怪人は狙撃の手を緩めはしない。

どこかの建物の中に逃げ込まなければならぬ。そうするしか方法がない。

だがそれで完全にあの怪人の攻撃をしのごうが出来るとは思えない。あの貫通力なら建物内に逃げたところで意味はなさそうだ。

優秀なハンターに狙われた愚かな獲物に先はない。

しかし、ハゲタカ怪人はミナの後方を見て攻撃の手を止めた。

そして、何故なのかは不明だがミナの命を奪うのを諦めてどこかに飛び去ってしまう。

「なんだったの……!？」

何故、あの禿鷹の姿をした怪人は簡単に奪えるだろうミナの命を諦めてくれたのか。

いや、そもそもアレはなんだったのか。

そして、ミナの耳には届いたあの禿鷹の怪人が飛び去り際に残した言葉だ。

『ギボチチソギギダバ。ラガ、ゾグゼゴラゲパギプガ』

これは一体なんだ。

さつき怪人の攻撃から逃げられた時と同じく状況から察することにしてしよう。

あの怪人はミナの命をターゲットにして攻撃してきた。が、何故か退散した。恐らくなにか理由があったのだ。

が、そうアツサリと諦めたわけじゃないだろう。サクッと命を奪ってやりたかったのに、“理由”があつて。



とすると、この言葉は、意味は。

(命拾いしたな。まあ、どうせお前は死ぬが)

危機管理能力がミナの顔を真後ろへ向けさせた。反応が急なものだったもので、首を違えそうだった。

だが、そんな痛みも消し飛んでしまう。

ミナはあの禿鷹怪人と渡り合い、頭の中で解析している内にはしか逃げる人々の最後尾にいた。

いや、語弊はある。

“逃げている人間”の中では最後尾。“逃げていた人間”ではなく。

あの何百人もの人々はこれから逃げていたのだ。そして、ミナより後ろにいた人々は残らず殺されてしまった。

ミナが見たのは“黄金のオーロラ”。そして、二百を越す数の怪人の姿だった。

WORLD END〜GURONGI〜(前書き)

おっひさ〜!!!( )

三週間ぶりの投稿となっていました。いや、グロンギ語めんどくせえ……

あと遅れた理由として、キャラクターデザイン制作があります。え、何素人のくせにマジになってんの?とかどうせ下手くそなんだろと思うでしょうが、

俺はマジだぜ(キリッ)

ああ、後者の方は合ってますよ。俺は生まれてこのかた絵を褒められたことが一度もありません。

一応、八月七日に今描いてある分をまとめて掲載する予定です。是非とも見てください下手くそで笑えますww

俺の(高校の通知表では2だった)画力が火を噴くぜ!

まあ、ともかく本編です。

## WORLD END〜GURONGI〜

黄金のオーロラ。それがミナの前方二十メートルくらいのところに現れている。一直線に降りたそれは通常に見られるそれにある美を忘れさせるくらいに神々し過ぎる光で存在した。

オーロラの語源はローマ神話の暁の女神「アウレラ」。日本では古来「赤気<sup>せつき</sup>」と呼ばれ、北欧神話ではワルキューレの甲冑の輝きと称されていた。このオーロラはその評価を塗り潰すほどに美しい。

しかし、オーロラとは自然現象だ。

夜にしかオーロラは現れないというのを忘れるとしてもまだまだおかしな点がある。

オーロラがどのように出来るかを説明させてもらうと太陽風がどうたら、プラズマがどうたら、地球の磁場がどうたらとキリがない。それほどに多数の条件がそろわなければ現れるものではない。

オゾン層の破壊などで太陽風が大量に降り注ぐような異常事態でもなければ日本の都会のご真ん中で見られるはずがない。

それに条件を揃えたところで地表にオーロラが降りるほどのプラズマ粒子をプラズマシートに蓄積させるなど実現不可能だ。

それに「黄」のオーロラなど自然界には存在しない。

オーロラが緑、赤、ピンクなどに見える原因はプラズマ粒子と物質、高度の三つだ。プラズマシートに蓄えられたプラズマ粒子が高

速で降下し窒素や酸素などの大気物質に衝突することでその物質が励起状態になる。それが元に戻るときあのように発光するのだ。

因みに赤や緑に見えるのは酸素で色の差は高度によって起きるものだ。稀に地表近くで見られるピンクや紫は窒素である。

つまり、この怪奇は自然現象ではない。

ミナの目には越えようがない「境界」に見えた。

荘厳な景観、しかしその裏……先に人知を越えたものがある。嘲笑うかのようにただただ幻想的ただけで、所詮人間ごときが触れて良いものではない。

黄金のオーロラは“世界”をろくに知らぬ人類に身の程を弁えさせようとするかのように正体不明、解析不可能の極みを域いっていた。

そして、何よりもこれは“神ミチからの天罰”。何故、何故とろくに考えず繰り返す愚者を永遠に葬る神判。

オーロラの向こうから二百体を越える怪人が現れ、こちらに睨みを効かせていた。

その怪人たちは統一して体表が黒色に近い色で、同じベルトが腰部にある。

沢山の人々を槍で惨たらしく射ぬき殺し、ミナたちを狙ってきたあのハゲタカの怪人がしていたベルトと同じだ。

「ラダ、ギパザガン、ゲバガ（また、ゲバガの仕業か）」

怪人の中の一人 ……いや、怪人の中にいる一人がそう言った。

怪人の中に入った二人、人間の姿をしたものがいた。

ミナは何故怪物の中に人がいるのかと驚き助け出そうとかを考える、ということもなく瞬時にあの二人を人外の者であると判別した。

逆にあれだけの存在感を有する者たちを人間と呼ぶのは無理がある。人間なんだと言い聞かされたって絶対に素直に割り切れない。

おそらく、あの二人がこの怪人たちの首領。または統治する者だ。

一人はまだまだ肌寒いこの季節にはかなり浮いてみえる肩まで露出させた赤いドレスを着た女性……に見える者。額には薔薇のタトゥーが刻まれている。

もう一人は対照的にもうさすがに暑すぎるのではというような厚い白の服を着た男性……に見える者。黒のニット帽を半分目が隠れるくらい深く被っている。

「ギツロギツロ、バデデピ、ザジレデ、ゾ、ゲゲル（いつもいつも、勝手にゲームを始めて）。バラダダジャツザ（困った奴だ）」

これは女が言った言葉で、先程のも女の方が言ったのだろう。女の方が何を言っているのかはミナには皆自分からないがきつとさっきのハゲタカの怪人はあの二人に見られたことが理由でミナの命を諦めたのだろう。

この二人が現れてくれたことでミナは辛くも助かった。

だが。

『命拾いしたな。まあどうせお前は死ぬが』

そうなのだ、ミナは助かったのではあるが。

自らに降り懸かる避けきれなかった恐怖を理解して、ゾツとミナは全身を縮こませた。

「ラザ、ゴザ ゲゲルン ドギデザバギ（まだ、ゴはゲームの時ではない）。ギラザラザ ジバンザン 『ベ』ジャ『ズ』（今はまだ『ベ』や『ズ』の時間だ）」

今度は白い服を着た男性にみえる者が言った。

その者は懐から壁に掛ける伝言ボードくらいのやたらと巨大なソロバンのようなものを取り出す。

玉の数は一桁につき9だがニケースあり、“彼らの数え方で”9億まで数えられるようにされてある。

「『ベ』ザ ジドシビツビ ギチジバンゼ バギングドグダドグダ ビン（『ベ』は一人につき一時間で20人）。『ズ』ザ ジドシビツ ビギビジバンゼ バギングズゴゴドズゴゴ（『ズ』は一人につき一時間で40人）・・・」

パチパチと男に見える異形の民は数を計算する。そして、ブツブ

ツと言っている言葉が計算式を構成するものであるらしい。

数を数えるくらいの知力は備わっているようだ。

パチツと最後の玉が弾かれて異形の民の計算は完了する。

「グデデガパゲデ ゲギドグズガキグズガキグズゴゴビ  
ンザバ（すべて合わせて4000人だな）」

その弾き出された数とは。

（ に、人間を殺す ……！？）

そう。圧倒的な力を持つ者がその力を誇示して振るい、力なき者を蹂躪しつくす、その虐殺の数である。

「ザガ、ザジレソ ソ ゲゲル（さあ、ゲームを始めろ）！！」

女の姿をした者が何かの号令のように叫ぶと、二百人強のうちおよそ三分の二ほどの怪人の腹部にある装飾品が光り輝く。

開戦の印。殺戮の遊戯の開幕……。

ミナが駆け出すために、逃げるために足に力をいれたのと同時に怪人たちは一番近くの獲物 ミナを我先に殺そうと襲い掛かる。

「……………ギイガガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！  
！！……………」

殺人への雄叫び。

幾つもの吠え声が合わさり一つの爆音と化す。何体もの怪人が揃って出された声ではあれど、全てに狂気が溢れ出しておりそれがぶつかり合い凄まじい脅威となっていた。

「ひ……い……!？」

ミナはがむしゃらに逃げようと走り出す。あんなものに追いつかれたら何人もの怪人の牙にかかりずたずたにされ、合挽肉ミンチにされてしまう。一切の骨片さえ残らないだろう。

だが、ミナをぐいつと引き止める腕があつた。次狼の腕だ。

「おい、死にたくなかったら俺から離れるな……!!」

まるで脅迫のような忠告だ。勝手に離れば逆に次狼に食い殺されそうな気迫がある。

ミナも幼い時分から徒競走では負けた試しがなく自分の足には自信があるが、あんな怪人たちに比べれば断然に遅いに違いない。

しかし、次狼が先程ミナを担いだ状態で発揮した速力は怪人たちにも負けないのではと思えるほどのものだった。

確かに次狼についていた方が一人で逃げるより遙かに逃走成功の可能性は上がるだろう。

だが、残念ながらミナにはその僅かばかりの算段をつけるための判断力は残されてはいなかった。



「いやよ！！ 知らない、知らない、知らない！！ 手、放してよ！！」

ミナは動転して「今、走り出す」という目的しか見えなくなつて次狼の腕を振りほどこうと手を目茶苦茶に振った。

ミナは渾身を出したが、次狼には通じない。さっきまでと同じ、ミナの限界など悠々と越える力で抑えられてしまう。

いくら命令しても次狼はミナの命を最優先としてミナの頼みを耳に入らないように頑として断った。

ミナは泣き叫ぶ。

ミナは精神は今、極度に不安定だ。訳も分からぬ夢を見て、訳も分からぬ名前を知っていて、訳も分からぬ音を聞いて、訳も分からぬ欲望を見て、訳も分からぬ自分の姿を見て、訳も分からぬ怪人を見て、訳も分からぬ景色を見て。

ミナが今まで生きてきたことで獲てしまった性質上、いつ精神が張り裂けてしまつてもおかしくはない状態だ。

叫喚は呼び覚ます。多くの相互するものに長きにわたる抑圧されていた“異形の存在”が現出してくる。

「この……放せて言ってるのが……！！」

……ミナの身体が変身する。

「その姿は……!?!」

次狼はミナの姿に驚愕した。

殺戮を繰り返す者たちから愛する者たちを守りたいと、その者たちと同じ修羅に落ちた者。

みんなに笑顔でいてほしい。その信念を貫き、絶対の闇さえ跳ね退けた青空を見上げる自由の旅人。

仮面ライダークウガ。

その変化は僅かの間だけだった。その一秒にも満たない時間でミナは傷つけてはならない力で望みを叶えてしまう。

「聞こえないのかアアアアアアアアアアアア!!」

グワツとミナは自分ではない自分の腕を振る。

ミナより数段体重のある男性でミナを楽々と担いだまま高く跳躍したりしてしまう逞しい肉体をもつ次狼を超越する力が、彼の身体を強く投げ飛ばした。

「うぐ……ッ!?!」

次狼は身体の側面を硬いコンクリートの壁にぶつけ、血を吹いて

地面に落下した。

「え……!?!」

手から次狼が握りしめてくる感触が消え目を開けてみると次狼が身悶えていて、ミナは正気に返る。

ミナにさっきの現象に対する自覚はない。だから、次狼が何メートルも離れたところで怪我を負って倒れている理由が分からなかった。

ただ、『傷』はあった。

思いがけず人を傷つけたときに生じる心の傷だ。それだけが心に灼熱に染まった銛に突かれたかのように空いていた。

彼女には身体が変化したという記憶はない。次狼を投げ飛ばしてしまった自覚はない。彼女の中に自分が次狼を傷つけてしまった事実はない。

自分に次狼をこうまで傷つけられる力があるとは思えない。後ろに迫って来ていたあの怪人たちにやられてしまったとするのが普通だ。

しかし、彼女にはこの心の痛みを無視は出来なかった。心の叫ぶまま、彼女は動く。

「次狼さん……!! 次狼さん!! ごめんなさい、ゴメンツツ!!」

駆け寄ろうとした。

「来るなア！！ 嬢ちゃん逃げろおおおおお！！」

それを、次狼は声を張って止めた。

ミナの口から嗚咽が飛び出た。

背後から迫っていた怪人のうちの一体が追いついて、回り込んだのちに強烈な拳をミナに見舞ったのだ。

骨を砕きそうな鉄拳、それがミナの身体にめり込む。

「う……！！ げ、ぼえッ！！」

数歩千鳥足でなんとか怪人に距離を取ろうと後退したものの、ミナは膝が砕けてしまい倒れる。

パタツパタツと逆流した胃液を地面に。口の中が酸っぱい。しかも、吐いた胃液には血が混じっていた。

「ザビビシド リダ、ゴラゲガ バ クウガ（ハッキリと見た、お前がクウガか）」

ミナを襲った雌豹の怪人が倒れ込むミナを見下ろして言う。

これで二度目だ。自分を指して言ったかのような“クウガ”という名前を聞いたのは。

口ぶりから言葉は分からないものの偶然じゃないということぐら

いは分かる。“クウガ”という固有名詞が“ただの人間”を指すベ  
きものでもないのも。

『お前は“ただの人間”ではない。お前は“クウガ”だ』

冗談じゃない。自分は赫塚ミナだ。ただの人間だ。

ただの人間だから生んでくれた父や母を愛してる。だから、二人  
をこのまま死なせはしない。二人を助けるためにこんなところで死  
んでたまるものか。

だが、ミナには取るべき最善の道がもはやなかった。

雌豹の姿をした怪人の強烈な一撃をまともに喰らって力が入らな  
い、身体を動かすことが出来ない。出来ることといえば、ミナの前  
に仁王立ち、嘲笑いながら見下げる怪人を思いつきりしかし意味も  
なく睨みつけてやることだけだ。

雌豹の怪人はミナの命など一秒もあれば刈り取ることが可能だろ  
うし、もしこのままこの怪人がミナに手を下さずとも直に他の怪人、  
若干150体がミナを囲う。

相手は人を殺すことを遊戯ゲームとするかのような悪魔の軍団。

自分は動くこともままならない哀しき獲物。

これらを考慮してミナのたどるであろう道はただ一つだけ。それ  
が“最悪”である以上、ミナには取るべき最善の道はない。

(嫌……早く逃げ……!!)

ミナはゆっくり上体を持ち上げようとするが上手くいかない。手をついて頭を上げるぐらいのところまで終わってしまう。起き上がるには下半身がどうにかしてくれないといけないのに、踏ん張ることが出来なかった。

雌豹の怪人はそれを見て更に不様に思ったのか鼻を鳴らした。

が、そのみつともない有様を見るのにも飽きたのだろう。起き上がろうとするミナの頭部の真上に足を乗せる。

「ジベ、クウガ（死ぬ、クウガ）！！！」

雌豹の怪人は殺人を施す。

ミナは ……

2

ミナの住む街に続く公道。白線が削れてほとんど見えなくなってしまうほどに車の往来が多い道路だが、今はただ一台の大型のバイクが走っているだけである。

その道の周囲も気味が悪いくらいに静かで走るバイクのエンジン

音がドルルンと鳴るのみ。

バイクはもう何十年とまえに造られたヴィンテージ物だが、ボディはピカピカに磨きあげられてエンジンも交換されているので問題なく軽快な調子で公道をいつていた。

ヴィンテージ物というだけあって現代のものよりも重厚な渋味があった。

「oh~~~~、今旅は終わるんだ~~~~、薔薇色の生活送るため~~~~、っと。」

鼻歌まじりに運転している搭乗者と対比にするとさらに良き古さが際だった。

運転するのはまだ自動二輪車の免許を取ったばかりだと考えられるまだ若い、少年の域を出ていないような男。

髪の色は少し煤こけた茶色。着ているのは淡い空色をしたデニムのジャンパーだが、ところどころ・・・特に袖の付近が他の色で汚されていた。

少年の名は春梅影寅<sup>はるつめかげとむ</sup>。バイクの免許を取る以前からあらゆる場所を巡り、旅し、自分の景色をキャンパスに描き続けていた旅人兼画家である。

歳はミナと同じくらいでまだ高校生だ。そして、彼の“里帰り”はずばり高校生活に戻るためのものであった。

バイクの後部には彼の命とも言えるキャンパスを始めとした画材

セットが積載されている。これで彼は彼の景色を思い思いに描いてきたわけだが、まだ自分がそれを描ききれているとは思えない。

そこで、彼は手に職をつけることも含めて有名美術大学に進学することにしたのだ。

春からはこの先にある街の高校に通い、学生として新生活を送る。

今日は実家のない彼に一年間部屋を貸してくれることになっていくる親切な家族に挨拶するために帰郷した。なんでも大きな屋敷に住んでいるのだが普段父親が不在で母親と娘の二人暮らしであるそう

だ。  
(…………可愛いのかねえ…………？可愛かったらいいよなあ…………)

この約束は彼が旅の途中で出会ったバイオリンの材料を探しているという男性と結んだものだ。

男性はそのとき、どういう用途で使うのか分からないが大量の工具カギを携えていて、故郷がこの先にある街だと言うと部屋を貸してあげようと言ってくれたのだった。

男としては夢のような展開だ。まるで王道をいくラブコメのようで、信じられなくて何度も確認したがその快い返事は変わらなかった。

まだその娘さんと会ったことはないし顔も知らないのだが、その男性が美形だったのと、延々と続く惚気話の最中に見せられた写真の彼の妻の綺麗な顔立ちを考えればどう転んだって美人に違いない。



旅を止め、一つ所に留まること事態は彼の生き方に反するのだが、単純な彼はその手の条件があるのならドンと来いだった。

「梅の花言葉は『忍耐』。苦節17年、やっと俺にも春がやって来たんだなあ。よし、待ってる俺の春！！」

影寅は目一杯ギアを踏みアクセルをかける。

彼は気づかなかった。彼が走る公道の近くに誰も、何もなかったのはすでに消し去られた後であるということ。

彼は目に入らなかつた。彼が行こうとしている街の上空に奇怪な黄金のオーロラが差しているのを。

彼は知らなかつた。彼の待ち望むその生活はもうすでに実現不可能となつていていることを。

## WORLD END〜GURONGI〜（後書き）

新キャラクター、春梅影寅登場！！

このキャラクター……絵に描いたようなお調子者っぽい、ですが芯のある奴なんでよろしくお願いします。

実は結構名前は適当だったりします。影寅しか名前が決まっておらず、夏みかんポジションなんで、春梅はるつめ 春雨はるさめってな感じ。

影寅……普通の作品なら主役だったろうに。しかも各ライダーの話ではディハーツですら脇役となるので……凄く不幸な立ち位置。

次回、絶体絶命のミナは ……？

## WORLD END〜UNKNOWN〜(前書き)

あ、ライダージェネレーションを買ったので感想言っていていいですか？

ああいう格闘系ゲームってコレクション性があるもんじゃないですか？隠しキャラが十人くらいいたり、ライダーがなかなか仲間にならないかったりするじゃん。

一切なし。

あとストーリーが単調で短い。三時間で全クリアできて、「え………！！？」と思った。

まあ、評価できる部分もありますよ。ファイズが使いやすいかったとかファイズが使いやすいかったとかファイズが使いやすいかったとか。

ファイズ×カブトのマシン系ライダーでダブル必殺技なのは嬉しかった！！

え？一番使ったキャラは？

勿論、BLACK×RXですよ。当然じゃないですか。声が似てないのとリボルクラッシュの演出がイマイチでしたが、そこは愛で乗り越えましたよ。

俺のてつを好きをナメるな！

他によく使ったのはダブル、ファイズ×カブト、アギト×クウガ、一号×二号(一番使いやすいかった)

………アングのナビゲートがうざくなったのはここだけの話。 煩いな、コイン拾ってたよ!! もう45話に差し掛かってんのか!!

## WORLD END UNKNOWN

絶体絶命、のはずだった。

ミナはまだ高校2年生の少女。ミナを襲うのは人間の命など虫けら以下とする人外が存在、強靱なる肉体を持つ怪物。ミナは腹部を殴られて動けない。雌豹の怪人はいつでもミナを殺せるほど近くに迫り、総勢150体を越える殺人集団はミナを取り囲む。

これだけのこの状況の条件を考えればミナの命は風前の灯であることは誰にだって判断出来てしまう。

ただ、“これだけ”の条件をみてみればである。

雌豹の脚はミナの頭を踏み潰すべく降ろされていた。この一撃を浴びれば頭蓋骨は砕け散り、辺りに血飛沫を撒き散らす惨い死に様を曝したろう。

が、その未来からは外れる。横からの三又槍が雌豹を弾き飛ばしたのだ。

「ぐぎい!？」

雌豹の怪人はミナの側から吹き飛んで怪人たち150人の軍団に激突した。

ミナは顔を上げる。

あの殺人集団の怪人とは違う新たなる勢力の一派がこのシヨッピ

ングモールに姿を現していた。

雌豹の怪人を三支槍で突き飛ばしたのはまるで神話に登場するミノタウロスが現出してきたのかというバッファローの怪人だった。

「グロンギよ。神が生み出した愛すべき人間をいたずらに殺すのは赦さん。よって、神の裁きを下す」

先頭にいる怪人が三つの槍先を                   この怪人はグロンギと呼んだ                   殺人集団にギリリと光らせて向ける。

その怪人たちはグロンギという怪人たちと同じく動物をモチーフとした姿をしていたが、グロンギより弱冠カラフルであった。

腹部の装飾品もない。

風貌といい、言っていることといい、使っている言語といい、明らかにあのグロンギとは違い、二つの睨み合う勢力は別種のものだと分かった。

ミナはまずその牛の怪人が宣言したことの内容ではなく、扱われている言語に驚いた。

人間の言葉、それも日本語だ。

その次に考えるのはその内容だ。あの怪人は「神が作った人間を殺すのは許さない」と確かに言った。

神。全知全能の存在で全ての創造主。

あの怪人たちはまるでその代弁者、もしくは代行者のようであった。あんななりをしているが、俗に言う“天使”という奴なのだろう。

よく観察してみれば全員の何処かに天使の羽を模した装飾品があり、背中には羽のような突起がある。

「ガガ（ああ）？　ゴボゴンバザ　クウガ　デ　ゲボボザ　ン　パ　ダガサ（その女はクウガでわたしらの標的だ）……！」

突き飛ばされたグロンギ側に属する雌豹の怪人がブチ切れたように彼らの言語で吠える。

雌豹の怪人はその衝動の赴くままに圧巻のスピードで主導者の牛の怪人に接近した。

しかし、

「ふんツ……！」

バカみたいに一直線に飛び掛かってくる雌豹の怪人を牛の怪人がウンターの要領で持つ三支槍で突き貫く。

「ア、ギィ……ツ……！」

雌豹の怪人は槍で貫かれた箇所を起点とした“輝”を身体に作り、それが腹部の装飾品にまで達したとき。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ……！」

断末魔の叫び声を上げて巨大に爆発した。何故か、あの腹部にあ

るベルトは起爆機能を持っているらしい。

爆発音の後は空虚がさ迷った。牛の怪人はなんの躊躇もなく、あのグロンギを断罪したのだった。

グロンギ側の怪人150名が同胞を殺されたことに怒り、『未確認の存在』アンノウンを敵と定めて臨戦態勢を取る。

“神の代行者”たる側の怪人は頭上に現れた天国の住人にも見られるような光のリングから各々の武器を取り出した。

(た、助かった ……………?)

ミナは対立する二種類の怪人を見て、安堵により顔の力を緩めた。

よくは分からないけれど、あの後から現れた怪人たちは人間を生み出した“神”とやらの使者であるらしく、人間のことを「愛すべき」と言った。

言っていることが本当のことならば、彼らは決して人間を傷つけないし、人間を襲うあのグロンギたちを許さない。

きっと、今に戦いが始まる。

その隙に倒れる次狼を連れてここから脱出することが出来るだろう、とミナは考えた。

多分、それは成功していたことだろう。

気づく者が現れなければ。



「待て。その女だけは逃がしてはならない」

“天使”側の怪人の奥の方からそんな命令が出る。ヴァッフアロ  
ーの怪人が持つ三又槍に似た槍を持つ、クジラをイメージさせる頭  
部の怪人だ。

彼の名は、エル。守護するは水のエレメント。この“天使”達  
の中では最も高位の階級である“エルロード”。持つ槍の名は怨嗟の  
ドウ・サンガ。

「その女は“アギト”だ。すでに覚醒しかけている」

グロンギが言う“クウガ”に続き、水を守護する天使は“アギト  
”とミナを呼んだ。

“クウガ”と“アギト”。

どこかで聞いた名前だ。ミナが学校で見た不可思議な夢に登場し  
た“仮面ライダー”の中でそういった名の戦士たちがいた。

仮面ライダークウガと仮面ライダーアギト　。

「馬鹿な。もしこの人間がアギトだとしてこの私からわかんはずが  
ない」

「この人間の中には数多くの“異能”が秘められている。数え切れ  
ないほどの数の“神に反する力”だ」

異能。それは本来ただの人間には存在しない能力のこと。

異能者。人とは異なる能力を持つもの。そういえばまだ聞こえはいいが、“異端”ともいえる人から外れた者。

違う。私はただの人間だ。

そうミナは心の中でなかば恨めしく呟いたが、今回気にかけるべきなのはそこじゃない。

神を何よりも信仰する彼ら“天使”がミナのことを“神に反する力を持つ者”と判別し、“決して逃がしてはならない”と決定したことだ。

「アギト……貴様はそれだけで罪深い。だが、お前は死んだはずだった。十二年前、“記憶の泉”に落ちて」

(記憶の泉? ……死んだ?)

今度こそ、今度の今度こそ、ミナは告げられた言葉を馬鹿馬鹿しいと鼻で笑うことに成功した。

十二年前というミナはまだ五歳。しかし、何処かの泉にいった記憶など確実にないと言い切れる。

しかも、死んだなどと。そんなわけは絶対に有るはずはない。死んで蘇ったというなら自分<sup>ミナ</sup>はゾンビか何かということになる。

悪いがその十二年間で受けた身体検査の結果には何もおかしい点はなかった。まるで健康体だ。冷血人間でもないし、腐ってもない。

だから今度こそ、今度の今度こそ、ミナは怪人たちの言ったことを跳ね退け、耳を貸さない。

……………それはある種の防衛本能のようなものだった。その証に、ミナの身体からは同じく防衛本能からの汗が流れ出ていた。

「結果、貴様は神が管理すべき“地球の本棚”<sup>ほし</sup>さえ手に入れ、灰色の死徒の方舟<sup>オルフェノク</sup>としても覚醒してしまった……………！！ そんな貴様は生かしては置けない！！」

ここまで来れば、嫌でも分かった。

この“天使”も自分にとっては悪魔なのだ。グロンギたちとは目的は違えどミナを抹殺しようとする敵という意味では両者は同じだ。

「人が神を越えようとするな！！」

バッファローの怪人。その役はバッファローロード、名はタウルス・バリスタ。手に持つ槍は「至高のトリアンナ」。

槍先にミナの身体を焼き尽くすべく高エネルギーのプラズマが集束した。

その一撃は永劫に焉に終す神代の裁きの十字架。

だが、避けることもしのぐことも不可能なその攻撃から意外なものがミナの命を救った。

「ガザザザザザザツ（ガハハハハハハハハハハツ）！！」

「ムオツ!？」

あのグロンギの一団がやって来る前に先攻して人の命を奪うゲームを楽しんで、ミナの命を狙ってきた禿鷹の怪人が急に空高くから飛来して、タウルスを搔つ攫う。

助かったが、あの禿鷹の怪人はミナを助けてくれたのではない。あの笑い声には渴いた狂喜が含有されていた。

「何をする!? 邪魔をするな!!」

掴まれ急上昇させられていながらもタウルスは禿鷹の怪人を落とそうと槍を短く持つて禿鷹の怪人を刺す。

禿鷹の怪人の表皮に浮き上がる“天使たちの紋章”。だが、雌豹の時のように輝が拡がらず、吸い込まれたかのように紋章は消える。

「ズン、ゴラゲザ バガバガ ゴソジガギガ ガシゾゲザ（ふん、お前は中々殺しがいいがそうだ）!!」

命を落とすような重傷は負っていないとはいえ槍先に身体を刺されているのだから痛みはずなのに、禿鷹の怪人はそれが嬉しくて堪らないかのようになお笑う。

二人の違った種族の怪人は空中で凌ぎを削りながら飛んで行ってしまった。

「おのれグロンギ……!! その人間は我々が殺してこそ意味がある!! 邪魔だてするのは許さん!!」

クジラの怪人がいなくなったバッファローの怪人に代わりミナを狙う。

危機などいくら去ろうがキリがない。ミナの命を狙う悪魔はあと何十体といるのだ。

「ゴセザ　ゴチサロ　ゴバジザ（それはこちらも同じだ）。パセパ  
セン　ゲロボバボザ　ザ　クウガ（クウガは我々の獲物なのだ）  
！！」

クジラの怪人はグロンギの奥の方から割り込んできた紫色の瞳をしたカブトムシの怪人がとめた。

この怪人は全200体強のうち先だつて人間を殺すゲームに参加した150体のうちの一体ではない。まだゲームをするのには早いが“天使”たちの出現に合わせて出てきたのだ。

周りのグロンギは天使たちとは違って武器を持たないが、このカブトムシの怪人はグロンギの中でよほど高位の存在なのか大剣を持っている。

「ムウ……………！！」

二体は鏝ぜり合いとなった。両者の実力はそう変わらないものであるらしい。

ミナは今のうちにと次狼に肩を貸してこの場からの脱出を計る。

このままここに居たらどちらが勝利してもミナは殺される。何よりあの天使が勝利すれば次狼は助かるが、グロンギが勝てば次狼も

殺されてしまう。

「ビザグバ（逃がすな）！！」

「逃がすな！！」

カブトムシのグロンギとクジラの天使は自分の部下にミナの命を奪えと命じた。

グロンギと天使はお互いに争いながら一斉にミナと次狼を追う。

ただし、両者は対照的だった。

縦社会ではないらしいグロンギたちはカブトムシの怪人の命令など関係なしに純粹に“殺したいから殺す”。

神という共通の信仰を持つ天使は自分たちより高位の存在の言葉は神の言葉に近い。彼らは“望まれるままに殺す”。

ミナはものの数秒で追いつかれそうになった。天使たちの中には雌豹のグロンギと同等以上の速度を持つ豹、カラス、ジャガーなどの怪人がいた。グロンギの中にもまだ動きの早い怪人はおり赤いマフラーをしたバッタの怪人はバイクに乗ってミナを追った。

無理だ、逃げられない。逃げようがない。

「降ろせ……！！ 俺を捨てて行け……！！ このままじゃ殺されるぞ！！」

次狼の速さはかなりのものだが、こうなっては足手まとい以外のなにものではない。

彼は自分の命をなげうつてあの怪人たちに挑み、あくまでも自分のかつての主である深央の娘、ミナを救おうとした。

その諦めにミナは激昂して言い返す。

「何よ、勝手なことばかり言つて！！ 死にたくなければ離れるなつて言つたのは貴方でしょう!？」

そんな悲しいことなんて聞きたくはなかった。この状況はどうあつても覆らない、と嫌でも悟つてしまう。

父を守りたい。母を守りたい。次狼を守りたい。

本気で望んでいるというのに、叶えられるわけがない。次狼は自分の命を捧げるつもりだろうが、こっちの方がそう強く望んでいる。

みんなを守るためならば、この命を捨てることで多くの愛する人を救えるというのなら、こんな命などくれてやりたかつた。

が、直ぐさま消える命の灯にそんな価値はない。すぐ後ろに赤いマフラーをしたバツタの怪人のバイクが迫り、カラスの怪人が上空からミナに狙いを定めていた。

助けになるものなど、ない。

『オスクイイタシマス』

そう、諦めを付けかけた時にその声は聞こえた。初めは次狼の声だと勘違いしたが、次狼が発した声ではないとばかりに彼は上にあ

る“何か”を目を丸めて見ていた。

確かに人間の出せるような音ではなく、少し聞こえづらいような機械音声だ。例えばつい最近日本語を学んだというような、たどたどしい発音だった。

上を向くだけの時間はなかった。ミナに迫るスピードのある怪人の一団はミナが頭を上げようとしたときにはまとめて薙ぎ払われていた。

「え……………!？」

助けてくれたものは人間ではなかった。生物とも言い難い。それは鋼鉄の装甲を持つ黒い空飛ぶ鋏形虫の形をしたマシン。羽根の付け根辺りにはなんらかの宝玉が飾られている。

『ゴブジデスカ？』

あんまりにもいきなり現れ、あんまりにも奇妙である救世主に驚いていたミナは機械と分かっているながら敬語でなんともないことを言う。

正体は分からない。なんとなく“仮面ライダークウガ”に関連するイメージが浮かんだが実態はよく分からなかった。

とにかく、助けてくれたのは間違いない。

多分、警察が極秘裏に開発していた人民救助システムかなにかなのだろうとミナはあてずっぽうに解釈した。



『ツカマツテクダサイ』

相変わらずモゴモゴして何を言っているのか分かりづらい。しかし、この場から脱出するにあたってこれを利用しない手はなかった。

実を言うとあまり虫が好きじゃないという女の子らしい事情がミナにはあったのだが、この際機械相手に言えることではない。

このロボットは“乗れ”じゃなく“掴め”と言った。

その言葉に従ってミナは次狼をしっかりと持ってその鍬形虫型ロボットの鋼の足を掴んだ。素直にそうしたのは上に乗るよりもその方が正しいような気がしたからだ。

フワリと浮き上がる。鍬形虫のくせに羽根で羽ばたくのではなく何か不思議な力で浮遊しているようだ。

この鍬形虫型ロボットはなかなか速い。人間二人分の質量がぶら下がっているのに時速200キロは出せている。

だが、そう長い間こうやって飛んでいくことは出来ない。ミナの腕には自分と次狼の二人の負担がかかっているのだ。ミナの細腕で長時間続けられる負担ではない。ぶら下がっているだけで肩が外れそうだった。

「つつ……くう……ッ!」

ミナは歯を食いしばって耐えた。安全な場所に着くまでの辛抱だ、と叱咤激励する。

しかし、

「……って!? ちょ、ちょっと待ちなさいよ!?!」

頑張っているところだったのだが、ミナは鍬形虫ロボットの行き先を見て驚愕した。

鍬形虫型ロボットの行き先はなんとグロンギたちが現れたオーロラの方だった。いや、これは完全にオーロラへと向かって飛んでいる。

ただのオーロラじゃないことはもう分析されている。まだあのオーロラから怪人が出てきそうだった。

「ねえ、分かる!? アレはやばいんだって………ッ!」

ミナは方向転換を要求するがロボットは全く聞く耳持たず一直線にオーロラへ向かう。

しかも、そうも言ってもらえないことになってきた。グロンギと天使のうち飛行できるタイプの怪人が追ってきた。ミナと次狼の重みがない分なのか、このロボットより速い。

「クウガアアアアッ!」と好戦的なグロンギは吠え、「アギトオオオオッ!」と使命感に燃える天使は叫び、ミナを追い立てる。

(……………ええい、もお!!)

このロボットにこのままぶら下がっていったってどうせ追いつかれ

てしまう。

ならばこの鍬形虫のロボットの判断を信じるしかミナには道はなかった。オーロラのところまでいけば助かると強引に方程式に組み込む。

オーロラまで残り三十メートル。天使の中には時速400キロを越える速度を持つ怪人がいてすぐ後ろにまでその怪人は迫ってきていた。

逃げ切れるかどうかかなり微妙だが、可能性がゼロであるわけじゃない。

『イキマスヨ』

鍬形虫ロボットがミナにそう忠告した。

(……………いく?)

ミナは鍬形虫ロボットが具体的に何をしようとしているのかわからず、頭の中で疑問符を踊らせた。

オーロラの中突っ込むということだろうかと考えたが、それは違った。

鍬形虫型のマシンが急旋回……………いや、もうこれは回転の域にあるような動きを取った。

「ふえ……………?」

ぼーん、

とミナの手がマシンの足を放してしまい、回転によって生まれ  
た遠心力がミナと次狼の身体を放り投げた。

「エエエエエエエエエエエエエエエエ〜〜〜〜ツ!？」

鍬形虫型マシンが回転しながらすぐ背後まで迫りこのままでは  
オーロラにたどり着くまでにミナたちを叩き落としていただろうカ  
ラスの怪人に激突しているのを見送って、

ミナたちはオーロラの向こうへと消えた。

WORLD END〜UNKNOWN〜(後書き)

ゴウラム登場！！トルネーダーも出したかったけどアレは自意識があるわけじゃないからな……………

クロウロード、コルウス・コレツキオって時速440キロで飛ぶんですね。

……………逃げようがないじゃん

ディケイドって、そこらへん適当だったな……………

個人的にビートルロード、スカラベウス・フォルティスVSゴ・ガドル・バのカブトムシ対決がしたかったけどそれだと水のエルを止めれる奴がない……………。

スカラベウス・フォルティスはTVSPの怪人だし、いいか……………  
となってしまうてすいませんでした。

WORLD END〜NEVER〜(前書き)

すいません、手違いがありました6日に投稿する予定だったのに遅れてしまいましたm(´`m

それではドゾ。

## WORLD END〜NEVER

「んにやるツツ！！ いい加減しつけ〜〜つてんだよ！？ ついでくんなああああああ〜〜……………！！」

と“訳が分からないが不幸には違いな事態”に追い回されている少年の乗るバイクはとある街のとある通りを交通法に完全に反した速度で突き抜けていった。

時速150キロ。この車体が出せる最高速度だった。街中を走るには馬鹿過ぎる速度で、どんな熱血な走り屋でもなかなか出せないデッドオアアライブに行く数字である。

そんな速度を出しておいて、少年は急激なカーブも悠々曲がってみせたり沢山ある障害物を見事に避けたりと全く危なっかしさがないドライビングテクニクを見せていた。

まだ免許を取ったばかりだろうに、少年のそれは一流のレーサーと比べても遜色ないほどであった。

その技術により、彼はこの街に入ってからというもの次々に迫り来る“訳の分からないモノ”の追撃を唯一かわし続けていた。

見事なものだ。実際に今もまた彼を叩き潰そうとする5人の“訳の分からないモノ”からの逃避行を続けている。

彼を追う5人はそれぞれ何かを象徴するかの姿をしていた。

緑色の風に包まれながら空を飛び回って執拗に突風を起こし彼の

バイクのバランスを崩そうとするモノは“風”を。

彼の乗るバイクよりも高馬力のエンジンを持つバイクを操りカーチエイスを仕掛けてくる女性的なモノは“熱”を。

時速150キロもの高速を出しているバイクに乗っている彼の命をターゲットに銃弾を撃ち込んでくるモノは“銃士”を。

時折彼の選ぶ道に先回りして奇襲攻撃してくる鋼の肉体を持った筋肉隆々としたモノは“闘士”を。

雑魚そうな妙な覆面集団を生み出したり腕を伸縮自在の鞭に変えたり、カマ口調で強烈なキャラクターだったりするモノは“幻想”を。

彼……春梅影虎は脳内で便宜上この五体を順に“サイクロン”  
“ヒート” “トリガー” “メタル” “ルナ”と呼んでいた。

「……はっ!!」

影虎の言う“サイクロン”が彼の乗るバイクのバランスを崩し横転させようと緑色の竜巻を発生させる。

「……ッッ!!」

影虎は重心を左に落とし、目の前十メートルほどに現れた巨大な竜巻をギリギリにかわす。

もう勘弁してくれと彼は堪らない感じに思った。



この“訳の分からないモノ”からはもうかれこれ二十分くらいの間逃げ続けているのだが、ずっと相手が同じだったわけじゃなかった。

彼の命を狙ってきたのは残念ながらこの五体だけではないのだ。一度逃げるくらいで助かるのならまだ易いものである。

逃げられないのではない、この絶対絶命が終わらないのであった。

影虎はこの街に入ってからというもの、もう何体もの怪物に追い回されている。

この街に来て最初に影虎を出迎えるかのように現れたのは様々な動物の姿を象徴するかのような怪人だった。その怪人たちは全部で四体おり、人々、または自分自身に何かを投げ入れ怪物を何体も作り出したり怪物に変化させたりしていた。

これは単なる彼が感じ受けたことだったが、その人間から生み出された怪物というのは人間の汚い部分を抽出したものであるようでそれがなんとなく気味が悪い。

なんとか緑色の昆虫怪人をバイクで弾き飛ばして逃げたが、危うく影虎も怪物を生み出してしまいそうだった。

命を取られたりするわけではないが……自分からあの怪物を生み出してしまつと自分が許せなくなりそうだと思えた。

危機を脱したかと安堵する間もなく、次の敵は現れた。……信じがたいことに、“鏡の中”から。

幸い始めに飛び出してきたシマウマのような姿をした怪物は脊髄反射的に蹴り飛ばすことに成功し、鏡の近く……いや“モノが写る物”の中なら全てが彼らのテリトリーのようにだったので水場やガラスから急ぎ速やかに離れた。

そしてようやく、怪物が散々暴れたからなのかガラスが全て割れゴーストタウンのようになっていて、なおかつ水場もない場所へ逃げ延びたところにあの五体が現れて現在に至る。

こんなはずじゃなかった。彼はこの街に将来へ向けての新たな生活を求めて期待を込めてやってきたのだ。

(くっそ、本当なら今頃お世話になる赫塚さんの屋敷に着いて飛びつきり可愛い娘さんと運命的な出会いしてるのに……!!)

一緒に学校に一緒に登校して「もしかして付き合ってるんですか？」と(まだ)あらぬ誤解をされて焦って否定したり、

親御さんから「こうして見るとカップルのようだな」とか言われて二人して照れたり、

そうしているうちに相思相愛になって、家族公認になって……

と、そんな男なら誰でも夢見る健全な……しかし同時に儂く悲しい妄想めいている……ことを期待していたのだ。

間違っても妙な怪人たちに追い回されることではない。そんな期待は一ミリグラムだって抱いていない。

大体、これらの怪物は一体全体なんだと言うのだろう。断言できるが一般常識で説明できるような生易しいものじゃない。人に理解を求めない非常識極まりなさすぎな存在なのである。

人間の中の“何か”から怪物を生み出す怪物。架空の生物さえ見られた鏡の中に存在する怪物。

そんなものが真つ当な世界に存在するわけない。

いいや、正直そんなことはどうでもいいとするしかないのかも知れない。有り得るはずのないことを、旅しながら絵を描いてますという他に特筆することが見当たらない平々凡々な、つまり、極々ありきたりな自分が解析できはしないのだから。

そう影虎は考えてそれから考えるのを止めた。

圧倒的命の危機に瀕している今、出来ないことなどすべきじゃないし、考える余裕なんてものもない。

逃げる、逃げ続ける。助かりそうな道はそれしかない。

ゾクツと、まだまだ冬の気配が残る2月の冷たい外気による物ではない別種の寒気が影虎の背を舐めあげた。

“この先に危険が待ち構えている”。

そんな“勘”に瞬時に支配されることに成功した彼は減速もせず無茶なスピードのまま幽霊街の角を曲がる。  
サーキット コーナー

「ハッハア~~~~ツツ!!」

また“メタル”の奇襲だ。どういうわけだかこちらの逃走ルート  
を、相手は手に取るように予測しておりこうして先回りしてくるの  
だ。

その一撃は辛うじて避けることに成功した。勘を働かしていたお  
陰であった。

彼は自分を凡人と評価するが実のところなかなか才能に恵まれた  
男だった。まず絵描きであるので“画力”。運転技術ならびに整備  
技術。運動部のキャプテンには今すぐ成れるくらいの運動神経。そ  
してなんととっても超人的な程の“勘”である。

以前、彼が旅先で滞在したレストハウスが火災に見舞われたこと  
がある。原因は落雷によるもので予測するのは不可能だった。

突然の雨に溜まらずレストハウスに飛び込み腰を下ろしていたた  
だ一人の利用者、春梅影虎は炎に巻かれ逃げることも出来ずに焼か  
れてしまったと誰もが思った。

ところが彼はケロッとした顔で帰ってきた。死の淵からではなく、  
燃え盛る業火の中からでもなく、普通に道からバイクに乗ってつい  
でにレインコートを纏って。

最後にレストハウスで彼を見かけた者は彼はしばらくレストハウ  
スから出ないだろうと思っていた。その雨はその地域でよく見られ  
る通り雨で、ものの数分で降り止む。レストハウスには雨具が自動  
販売しているが買う程ではない。

その時に、彼の“勘”は働いた。“嫌な予感がする、そこから離

れる”と。

言っておくが彼は超能力者あるいは予知能力者ではない。注意力が優れていたり天才的頭脳があるわけではない。

野性的な部分が他の者より強く“鼻”が効くのだ。しぶとさ、とも言うのかも知れない。

しかし、この奇襲攻撃はまたもギリギリの瀬戸際だった。もう少しバイクの角度が甘く浅かったならば、伏せていなかったならば、彼の頭は潰され首から先が千切れてしまっただろう。

素人の勘が完璧に通じる相手ではないらしい。

チユンツ！と“トリガー”の銃撃も飛んできた。一発の銃弾が頬と肩を掠める。これもなんとか直撃はしていない。

怪物というだけで十分だと言うのに、とんでも無い連中だ。時速百キロ以上で走行するバイクを追い越し待ち構えておくには影虎が進む逃走ルートを読みショートカットしなければならない。影虎も待ち伏せを想定して馬鹿正直に道を選んではいないのだが……それでも看過されている。

怪物なのに『スペシャリスト専門家』然としているのだ。まるでそうだった戦闘のプロが怪物に自発的に変身しているかのよう。

しかし、そうだとしても疑問が残る。

とにかく、甘い。

戦場に生きる人々……軍人はもちろんゲリラ、偏った考えの教徒、行き場を失った難民もだ……は容赦を知らない。

軍人なら殲滅に力を抜くことはなく、ゲリラは抗うこと以外を選ばず、教徒はそれ以外の思想を黙殺させ、難民はただ唯一ある命をひたすら尊重する。イスラエル、東ティモールなどの紛争地帯を歩いた彼はそれをよく見てきた。

それを考えれば甘すぎる。

例えば、“サイクロン”。

あの怪物には迷いがある。竜巻を発生させるタイミングが一拍遅い。逡巡が混じっている証拠だった。

例えば“トリガー”。

あの怪物が腕に古臭い漫画のキャラクターが装備するサイコガンか何かのように銃器を右腕につけているのだがその種類はどう見ても銃身の長い狙撃銃タイプじゃなく掃射も可能な散弾銃タイプだ。それなのに撃ち込んでくる銃弾はいつも一発だけ。辺り一面を掃射してしまえば楽なのに。

“ヒート”も“メタル”も“ルナ”もそうだ。あと一押しすれば必ず影虎を殺せるという場面でそれ以上手を出さない。

あと……単にもう殺し尽くして影虎以外に標的がないからなのかもだが……彼だけを執拗に追い続けるのも妙だ。

『狩り（ハンターゲーム）』を興じているわけでもなさそうである。

「そおれッッ!!」

“ルナ”の攻撃。手段はコンクリート片をその鞭のような腕で掴んでの投擲。

影虎は投げつけられるコンクリートをよく見て勘を駆使してルートを選ぶ。

一つ目・・・問題なく避ける。

二つ目・・・てんで違う所に衝突。

三つ目と四つ目・・・同時に降ってきたがその合間を抜ける。

最後になる五つ目・・・一番大きくて影虎の行く手を阻むように倒れたが、先に落ちていた小さなコンクリート片を利用して……それを飛び越えた。

これには見ていた“ヒート”“トリガー”“ルナ”も驚き、「ほう」と漏らした。

影虎の操るバイクが大ジャンプの後再びアスファルトの地面にタイヤを乗せる。

「お……やりや出来るもんなのか……」

と自分でも感心する影虎。

出来るどころかなんて判断できていなかった。出来ればいいなと思いい、勘が「出来るんじゃないかねーの」と言ってくれてそれを信じてみただけだ。勘がそう囁かなければ二度と出来ないに違いない。

しかし、具体性のない“勘”をそこまで全面的に信用できるとい  
うのはそれだけで非凡だ。

「これも避けちゃう？良いわ、なかなかイイコが見つかったわね？  
この子なら良い仲間になれそう」

“ルナ”が（やはりオカマ口調で）そんな評価を下す。

すると、影虎の後方で「ヴァ〜〜ン！！」という音がした。バ  
イクのエンジン音だ、それもアクセルを一気に踏んだ時の。

サイドミラーで後ろを見たかったがさっきの鏡の中から現れる怪  
物を危惧して叩き割っていたので振り向いて確認する。

影虎は「な……！？」と絶句した。後ろから追ってきていた“ヒ  
ート”の乗るバイクがさっきまでとは段違いの速度を出して迫っ  
てきていた。グングンと距離が詰まってくる、時速三百キロに届こう  
かという猛烈なスピードだ。

時速三百キロというたとつもないGがかかり、普通の人間では  
耐えられない速度だ。今影虎が走らせるバイクの二倍のスピードで  
もある。

状況はもつと悪い。これから先の道に分かれ道がない。しばらく  
の間一本道なのだ。

影虎が“メタル”に待ち伏せされる危険性もあるのに曲がり道を  
選んだのは“ヒート”相手に純粋な速度だけで逃げても逃げ切れな  
いのを悟っていたからだ。だから減速する必要のある入り込んだ道  
を選んでいった。



これではどう転んでも追いつかれてしまう。

やはり“ヒート”も本気を出していなかった。最初からこんな速度で追われていたら絶対に逃げられないに決まってる。

だとしたら、何故最初から“ヒート”は全力をあげてさっさと影虎を仕留めなかったのか。

それについては彼は薄々感じていた。ヒントとなるのは先ほどの“ルナ”の台詞だ。

カマ口調を直すと『いい人間が見つかった』。これはつまり『良い人間を探していた』ことを示す。

多分、この逃走の期間は影虎の力量を試す試験だったのだ。だから力量を試しきるまで本気で手を下そうとはしなかった。

どうも成り行きで影虎はあの五体のお眼鏡にかなってしまっただよ  
うだ。

そして、そのさきは何なのかも自然予想がつく。“お仲間”とやらにされてしまうのだ。この予想も“ルナ”の台詞から裏付けされている。

逃げてでも逃げ切れない。

ヒートはすぐ後ろにまで迫ってきている。距離にして10メートルもない。影虎はもてる全ての力を――この状況で“出来る勘”を呼ぶ。

影虎はブレーキを軽く踏んだ。このスピードでブレーキをかけること自体が自殺行為だが、すぐ後ろに彼を求める敵がいるというのにスピードを落とすのは一見すると酔狂を通り過ぎて単なる馬鹿のようだ。

が、この行動こそが弾き出された“出来る勘”だった。

「~~~~ツツ!?」

彼の一連の行動を見て“ヒート”は慌ててハンドルを切った。

ブレーキを踏んだことにより、影虎のバイクの後輪が路面からフワリと浮き上がった。そのまま力の方向ベクトルが変えられなかったら慣性の法則により影虎の身体が投げ出されるか影虎ごと車体が部品を撒き散らしながら派手に破壊される。そこに影虎は自前のテクニクを駆使して前へ倒れようとするのを強引に横へ。

ギャガガガガツツ!と耳をつんざくようなブレーキの音。

“ヒート”の進行方向を遮るようにくっきりとしたブレーキ後を残し影虎のバイクが鋭いようなビタツという静止をしたのだ。

当然“ヒート”は避けようとする。

しかし、影虎をサクツと捉えようとして曲がるつもりもなくフルスロットルを出していたバイクは“ヒート”が思うような回避を取ってくれなかった。

ガンツツ!!と影虎のバイクの後輪と“ヒート”のバイクの前輪

が接触した。

メンテナンスを欠かすことなく愛情を注いできた愛車のナンバープレートや幾つかのパーツが砕けて吹き飛んだが、影虎は“ヒート”のバイクのバランスを大きく崩すことに成功する。

“ヒート”はバランスを取り戻そうとしたが無理だった。ハンドルをきっていたおかげでかすったくらいだったが、速度が速度なので衝突事故程度の衝撃がバイクを揺らがしていた。

バイクの操縦を諦めて“ヒート”は脱出し地面にゴロゴロと吹っ飛ばされているかのように転がった。

運転手を失ったバイクはすぐに横転する。かなりのスピードを出してのそれだったので倒れた後も何メートルも横滑りした。20メートルもそうして、生まれた火花がガソリンに触れ………着火。

ドオオオオオオオオオオウンツツツツ！

周りには幸運にも多くの無人となった車体がひっくり返ったりした状態で多くあった。バイクの爆発に続いて連続で火を噴いた。一つの爆発が望みうる最大級に巨大に拡大する。

影虎はこれのことなんだったんだなと理解してペットボトルに入れた蒸留水を頭から被る。

エンジンをふかし、進路へバイクを向けた。

突入。

炎を吸って火傷しないように呼吸を止めて、出来上がった炎に向かってバイクを突っ込ませた。

轟々と燃える炎に飛び込む人間一人。

炎の中は暑い。更に、熱い。当然なのだが、それを無視してここは突っ切る。

熱いし焼ける。だから追ってくる怪物はいなくて済んだ。“トリガー”も流石に手出し出来なかったらしい。

天晴れ、と言うかのように“トリガー”が肩をすぼめたのを知らずに影虎はただバイクを直進させる。

2

炎を突き抜けてしばらくして影虎は振り返る。五体の怪物たちの姿は喜ばしいことになかった。

ようやく、影虎は敵の追跡を振り切ったようだった。

「ふ……………」

溜め息にしても呼吸にしても奇妙な、存在意味があつたのかなかつたのかかなり中途半端な息が影虎の１ミリくらい開いた唇から垂れ出た。意識はしていない無自覚なものだった。

こうでもしなかったら引き剥がすことなど出来なかつただろうが、こうなってくれるとは本人自身分かつていなかった。

これすらもただの勘だ。

全く、勘というのは無責任にもほどがあるもんだ……お陰で服が焦げくさい……と影虎は心中でばやいた。

バイクの傷を見るより先に影虎はまず積載されている商売道具でありパートナーである物の無事を確認する。

筆記体のアルファベットで「art box」と書かれたアタッシユケース大の入れ物だ。中には彼にとっては自分の命よりも大切な画材が詰められている。

どうやら砕けたコンクリートを被っているが無傷であるようだ。影虎は何よりも安堵した。

さて、こう休んではいられない。またいつ新手の化け物が現れて追い回されるか分かつたもんじゃない。

影虎はそう考え、急いでバイクのエンジンをかける。あれだけのチエイスの後なので少し音がおかしいが走れないことはないと彼は樂觀視した。

少し傷ついてしまったバイクを山の方面へ走らせる。近くに一際高い山があり、それが目印になっていた。

進む先に学校があった。大きさからして大学のキャンパスなどではない。多分、あれが影虎が通う予定だった高校だ。

そうだと分かると、なんとなく苦々しかった。

(……………あの学校まで行ったら助かる。……………多分)

彼は優れた勘の持ち主だったが、今考えてそう思い込んだことはただの希望だった。

WORLD END〜ORPHENOC〜(前書き)

フォーゼが思ったより面白くて安心。けど、オンドウル星人再来な気がする……

『横文字使ったりや頭いいと思うな!』

……横文字って、要するにカタカナってことですよな。つーことは、  
ダディバーナダン、ダデビデルンデドウ!?オンドウルラギッタン  
ディスクア!?

頭良かったんだ、剣崎……( 違う

WORLD END ~ ORPHENS ~

「ん……んう……」

もぞもぞ、と。気分はよく干されたぬくぬくの布団にくるまって  
いる感じだった。

夢も心地よい。例え起きた時に内容を忘れていたとしても充実感  
がある。奇妙な夢ではなかった。それに絶大に安心できた。

その世界はまともなのだ。どんなことがあると“虚構”と片付  
けることが出来る。悪と戦う正義の味方も……得体のしれない怪物  
も抜きで。

「……むう？」

寝返りをうつと頬にぴとっ、と床が触れた。石が混ざったアスフ  
ルトでもなければ気泡の入ったコンクリートの物でもなかった。

(……冷たい?)

と不自然に冷静に考え、

「……ひゃッッ!？」

目の前に羽虫が飛んできたかのようにビクツと床から跳び退く。  
横になっていたのはつるつるした石ダイルの床だった。ただのタイ  
ルと思うなかれ、この時期なら氷みたいに冷えている。



この床の冷たさが意識を呼び覚ます。暖かい布団の中で寝ていたつもりだったのでまた眠りにつきたいところだったが冷たい床で寝なくてはいけないとなるとその気も失せた。

「……んー……？」

まだ覚醒しきっていなくてなかなか焦点の合わない目で周囲を見ている。确实、自分は寝ぼけている。さっきまで何があったかもどこかに置き忘れてしまっていた。

十数秒間そうやって、そして気がつく。

ない。

自分を掴み決して放さなかったミナの母親のかつての従者だった次狼の無骨な手。みんなを助けに向かうためその手を振りほどきたかったけれど次狼という命も見捨てることが出来なくて握りしめた手。

あの手がどこにもない。次狼の姿がどこにもなかった。

「……つつっ……！！」

その事実を認識するとボクシングのジャブかというくらいに先ほどまでの出来事が頭の中で殴り掛かってきた。

一人で鳴りはじめた『鮮血の薔薇』  
ブラッディ・ローズ

自宅前に現れたファンガイアとかいう怪人集団。

次狼と自分だけを逃がし、その場に残った両親とラモン、力。

逃げる自分たちの前に立ち塞がった巨大な怪物。

幻想的だが有るはずのない黄金一色のオーロラ。

まるでゲームかのように平気で人間を殺しそれを楽しむ戦闘集団・  
グロンギ。

たとえ振り払われても拒絶しても、命を賭して守ってくれた次狼。

神を尊び、自分たちを神の使いだと名乗り人を愛するくせに自分のことを“異端”と呼んだ天使。

あと、自分を助けてくれた鋏形虫型のメカと逃げ惑う人達の必死の形相……………。

嫌と言うほどに思い出す。これだけ脳裏に焼き付いていれば忘れてくても忘れることはもう不可能だ。

それはそれとする。

そんなことより、次狼はどうしてしまったのか。ミナがいる周辺には次狼の姿はない。

まだまだ危機的状况は続いているというのに暢気にも居眠りをこいてしまった自分に呆れてどこかへ行ってしまったのか。

そうすまない気持ちで考えたミナだったが即座にその考えを捨てる。

こんな場面で眠ってしまったのはどう見ても悪かったが、次狼がそんなことで腹を立て、自分を見捨てていくなどとは思えない。そんなに頻繁に会っているわけじゃなかったが、どんな事情があれどもそんな薄情なことが出来る人となりはしていないことぐらい分かっている。

だったらどうしてか。

(……あの時 ……)

ミナには心当たりがあった。頭に残っている最後の記憶だ。鋏形虫型のロボットが現れて助けくれたその後の出来事。

怪人に追われたミナと次狼はあの不可思議なる黄金のオーロラに突入したのだった。まあ突入したというより鋏形虫型ロボットに放り投げられたというのが合っている気もするが。

その時、絶対に放すまいと心に決めていた次狼の手をうっかり放してしまったのだ。

それが原因で、自分と次狼は離れ離れになってしまったのか。

いや、そもそも ……

(……一体どこ……?)

今自分がいる場所には“風が吹いていない”。つまり、屋外ではなく屋内。

しかも、気のせいとかではなくて間違えなく、こここの光景には見覚えがあった。それも、ほとんど毎日のように見ているものだ。長い廊下、その所々に設置された黒い塗装がされた鉄製の傘立て、それにさされたいい加減な男子の物と思われる数本の置き傘、部屋の入り口にはその役割を示すプレートが突き出ている。

ここは、ミナが通っている高校だった。特に秀でたところも特徴らしい特徴もないごく普通の学校。一年生から二年生まで、約六百人余りが使っているこの校舎はよく見られるL字型の物で老朽化が著しく、近々建て直すことが決まっている。そんな学校だった。

ここに“来る”前、自分と次狼はシヨッピングモールにいた。だが、シヨッピングモールからこの学校まではあまりに距離が離れている。鋏形虫ロボットに弾き飛ばされた方向ともまるで違う。

随分と遠回りしてしまったが……とどのつまり、シヨッピングモールから飛ばされてここへ落ちてくるというのは通常考えられない。

(大体、屋内だしね……)

至極冷静沈着に、ミナはもしそうだとしたら必ずあるものがないことを確認する。やはり、どこにも穴は空いていない。

よって、則ちまた“有り得ない”だ。

「成る程ね。理解、理解……」

あの黄金のオーロラが原因だ。あれは恐らく『どこでもドア』み

たいなもので、あのオーロラを通過すると何処か別の場所に飛ばされるというカラクリなのだろう。

何か突き抜けた気はしていたが、家の近くの細い道からいきなりシヨッピングモールに出た時も、あの黄金のオーロラを通過していたのか。

(……どこに繋がっているか分からないってことは“どこでも”じやなくて『どこだかドア』ね。……て、何考えてるんだる私……)

幼稚な発想をミナは恥ずかしく思う。

……物凄く余計な知識だが、『あべこべの星』という話で『タケノコプター』などと同時にこの道具は登場している。ミナにはそんなことを知るよしもないし、知ったところでリアクションは微々たる物だが。

兎にも角にも、今は次狼だ。

自分より一瞬早くに次狼の身体がオーロラへ入っていったのは確認出来ている。この場にはいないが天使やグロンギのいたあの場所から逃げられたのは間違いない。

しかしだからといって、安心なんてミナには到底できない。次狼は怪我を負っているのだ。命に関わる大怪我であるわけではないが、次に怪物に襲われたら彼には逃げるできない。

襲われたが最後、彼には逃げ延びる術がなくなる。自分が次狼を傷つけたせいで。自分が次狼の手を放してしまったせいで……

(どっしり……!!)

焦る。次狼まで死んでしまったら自分のせいだ、とミナは自責をせき立てる。

自分を逃がすためにラモンと力、そして父親と母親はあの怪人たちが迫る屋敷に残った。そして今度は次狼までも……

急げ、急げ、急げ。もしそんなことになったら身が張り裂けるように痛い。

今度は油断なく注意深く周囲に目を配る。

2-Aとプレートに書かれた教室の窓から外の様子が見えた。鋏形虫ロボットに吹き飛ばされた時はまだ昼すぎくらいだったが窓から見える外は暗い。

まさかそんなにも長い間眠っていたのか、とひやりと背筋が凍えたが、また“時が動き”、戻ったのだと理解した。

最初にオーロラをくぐった時も夜だったのに昼に逆戻りしていた。オーロラによって 或はそれ以上の異変により 空間だけじゃなく時間さえ狂ってしまったのだろうか。

(きっと、寝ていたのは数分間くらいなものに違いないわ……。大丈夫、大丈夫……。まだ助けられる……。まだ……。まだ……。まだ!!)

気休めにもなっていないかったが焦る気持ちはどっしりようもなくミナはそう心の中で繰り返し続けた。

学校は静かなものだった。津波や地震など何かしらの天災があった時の避難所に設定されてはいたものの、こんなにも未曾有な事態に直面してわざわざやって来る人もいないだろう。

この異変が起き出したのはミナたちが食事を始めた頃、つまりは晩の七時半頃だと思われる。いや、ブラッディ・ローズが鳴りはじめた時間、というのが正確か。

その時間帯ならもう部活動も終わって、先生など職員も多分帰路についている。

この校内に何かいるとしたらそれは人間ではなく、怪人か怪物だ  
け。

そう思っていたが ……違った。

通り掛かった二年D組の教室。そのまま気づかずに過ぎ去ってしま  
いそうになったが、机や椅子がめちゃくちゃになっていたのが目  
に入ってきて、ミナは注意を向けた。

何人かの生徒の姿が見えた。部活中だったのだろう。ただ、全員  
が地面に力無く倒れていて、気がなくもう息がないようだった。

「…………ツツ!」

教室のドアは何者かの侵入を阻止できず、破壊されていた。ミナ  
は床に倒れている生徒たちのもとへ走る。手近にいる一人の首筋に  
触れてみるとやはり…………冷たい、血の脈動も感じられなかった。

死んでいる。

いつ殺されたのかは判断が及ばないが、とにかく、今は息絶えている。

数にして十五人。まさに死肢累々といった光景だ。襲われて逃げて、結局は追い詰められて殺されたことを物語るように角に多く積み重なっている。

(凄惨、その一言がこんなにも合うものが他にあるの?)

ミナは吐き気を堪えながら目を伏せてそう思った。シヨップینگモールで禿鷹の怪人に射抜かれていた人々など、死体ならここへ到るまでもいくつか見てきたはずだったが、こうやって改めて見ると平気でそれを見過ごしてきた自分が信じられなかった。

顔を逸らしたい。けれどそれは死んでしまった彼らにとってはあんまりなのではないかと思えてしまってどっちつかずに目を泳がす。

死体の幾つかは角から数歩歩いたかのような場所にあった。その死体は揃って焼け崩れたかのように白い灰を噴いている。

こういった殺人を行う怪人がこの学校に来たのだろう。もしかしたら、まだ校内に潜んでいるかもしれない。

次狼やラモンや力を、両親をこの光景と重ね合わせてしまう。自分が助けられなかったら、こうやって灰となって朽ちる。

その虚ろな眼がミナを映している。反射された自分の姿が見える。

「嫌よ!!!そんなの!!!」



ヒステリックに顔面蒼白となって叫ぶ。

すくつと立つ。体中震えているが、言うことは聞いてくれたことには感謝する。力強いものとは違うだろうがなんだったよかった。

ミナはどこに行くべきだろうかと考えた。

やはり両親たちと別れた屋敷に戻るべき？いくら力があるといってもあの数を相手にどれだけ太刀打ちできると言うのか。

いや、もうあれから数十分は経っているんだからさすがにもういない。行きそうな場所も思い浮かばない。

まずは次狼を助けるべき？自分が傷つけてしまい手も放してしまつた、すぐに助けないと危ない。

けれど、次狼もまたどこにいるのかわからない。コーヒーが好きでよくCafe mald'amourカフェ・マル・ダムールという喫茶店にいることは知っているが、こんな場面にそんな所へ行くなど馬鹿げている。

ならば、ならばだ。

自分に何ができる？

「……………ッッ！！」

どうすればいい？なにをすれば助けられる？どこへいけば助けられる？

何も浮かばない。何も浮かばない。何も浮かばない。

頭の奥底に封じ込めた弱い自分が、弱いくせに意地汚さそうな顔でニタニタ笑っていた。酷く不細工に見える、何日もなにも食べていないかのようにガリガリとやせ細っている、服も汚くて髪もだし無くグシャグシャになっている。

だけど完膚なきまでに叩きのめして鼻柱を折ってやりたいのに今自分が勝てないのはこいつだった。

それを弱い自分は知っていて腹立たしく笑っている。いつもなら楽々と追い払えるのに今日ばかりはあちらが優位だった。

自分の拳が空振りに終わる。弱い自分は得体の知れない怪人や怪物の脅威を武器にとっているのだ。

滑稽な自分に弱い自分がケタケタ笑いながらこう囁く。

『ナニモデキナイワヨ』

ゾワツと全身の毛穴が開いた。

「違う！！ 何か出来るはずなんだ！！ 私はずっとそつやっってきたんだから！！」

何も出来はしない。そんなのはただの諦めに過ぎない。手を伸ば

せば届くはずだ、それに対する熱意と努力さえあれば。

か。 だいたい、もし本当にそうだとして ……嫌だ、認めるものか。

何も出来なかったら救えない。救えなかったら……

そう思うと息苦しい。吐き出そうとする息が喉に引っ掛かって、肺の中で鉛の塊がゴロゴロと転がり、胃に生のコンクリートが流し込まれているような感覚に襲われる。

ミナは動けないでいた。もはや動くことに意味を感じられない、自分に出来そうなが見つからないから。

何でもいいからせめてそれが欲しい。そう切に願っているとなにかがミナの耳に転がり込んでくる。

「……か……だ……」

いきなり耳に入ってきたのでミナはビクツと震えた。しかし、「人の声だ！」と気がつく顔に明るい色が射す。

出来ることはある。

何も出来ない、なんてことは有り得ない。確たる自信を持ってこれを言えることがこれほど幸福とは！

(私には出来ることがあるんだ！！ いつもと同じよー！！)

ミナは嬉しくなっていていつの間にか自然と駆け出していた。

ミナが去った二年D組の教室。

動いた。もう動くはずがなかったものがモゾモゾと動く。その数は十。

動き出したモノの内の一つは自分の身になにが起こったのかよく分かっていなかった。

部活をしていて……一段落ついたし下校時間も過ぎていたから「もうそろそろ帰ろう」とみんなで話していたことは覚えていた。

それから、二人の見知ったクラスメイトがやって来て、その二人の瞳が濁ったような灰色に変わった。そのことがものすごく目に焼き付いている。

ただし、それから先になにがあったかがどうしても思い出せない。何かに襲われた気がするがその何かという奴を全く覚えていない。

死んだ気がするが、なにが失われたのか全く覚えていない。

( それ なんだら して  
だ?)

ああそうだそうだ。俺は死んだんだ。だったらどうして生きてるんだ？

特に深く考えるつもりもないくせに二度と起き上がるはずのなかったモノは考えた。

さらあぁ〜〜……

その一人の横にいたモノが頭から灰になって膝を地面に落とした。といつても、その膝もつくまでに灰と化していた。

(は　ズレ、ズズレ、ズ　　ハズレ　　ハズズズ  
フス?)

ハズレ。このモノの横にいたモノはくじ引きで言えばハズレだった。

何がハズレで何が当たりなのか、このモノは把握していなかったしどうでもいいとさえ思った。

欠落して今、その“思考”さえ失われる。存在が灰色を越えたに虚無へ移行する。

十あつた動き出したモノはその数をかなり減らす。このモノは当たりで　……………ハズレだった。

(ファイ　　オルフ?オルフェノ、ククキク?チガ　　コレ、  
ブ、ラン　　ニ、ニニニ、ニンギョ、オオウ　　)

空白だった。プラスでもマイナスでもない、虚無<sup>ゼロ</sup>という意味での負。

もうひとつ、これはいた。このモノと同じく底のない無限大の無

に突き落とされていいる存在でさえない存在。

「カク、ミ                      ガコウ                      イナ、ナイナナイナイイ                      サ  
ササ、イイ                      ハコブネノハネ、オウベベルト                      カンセ、ト  
？」

何もない。

だが、やるべきことは入ってきていた。

WORLD END〜ORPHENOC〜（後書き）

一人称書きずらいよマジで。三人称で書いてたんですが、ミナの足がついてない感じとイイますが、そういうのが出てない気がして文体も崩してます。

今回のでミナの心の問題、というか情緒不安定な所（？）が分かってくれたかどうかかなり不安です（-.-.;）

前々から思っていたんですが、デイケイドの一話で出たオルフェノクってなんで夏美を襲ったんですかね？スマートブレイン社の奴らならともかく、あの時攻撃してきたのは使徒再生で覚醒した奴らですし。

あ、大丈夫。デイハーツではこの問題をなんとかクリアしてますから。フフフ……

クラヒ・ノアを知っている人は今回のあの謔言のような台詞から彼らの正体などが分かったかな？

さて、次回でいよいよ影虎と運命……なのかどうかは置いてとにかく出会います。

投稿早くね？いやあ、今回の話で一先ず“WORLD END”とさよなら出来ると思ったたら執筆が進むわ進むわ。

あと、ゴークライダーの感想も言いたかったしね。今回は(あ、もう前回に近いのか)アバレンジャーの回。

アバレ、アバレ、アバレまくれ！！ アバレた数だけ強くなれる〜

アバレた〜数だけ〜優しさを知る〜

ん〜、最高！

確かにアバレンジャーは数が特殊でアイルのがないなあと思ったら、

アバレピンク(笑)

まさかの、まさかのピンクか……！！あれはエスパー能力でなったときはモノホンの豚になったんですがね。しかもしばらくそのまんまというww

CM前のあれもアバレンジャーばかりだし、ファンにとっては最高のプレゼントでした(o^ ^o)

あと、アイルカワエエ……。ナースはやっぱりデックカイ注射器がデフォルトだよな！



ミナは注意深く廊下を歩いていった。当然だ、自分が死んでしまつたら誰も助けられないのだから。

旧校舎から三年生が使う一回り小さな新校舎へと移つても相変わらず静かだった。まだ怪物が潜んでいるのかも知れないのだが、もうこの学校に人は残っていないと判断して立ち去つた後である線も強くなつてきた。

(いや、油断大敵よ……!! 私が死んだらもう何も救えない……私には出来ることがあるんだから……!!)

いないかも知れない、けれどいるかも知れない。

そんな緊張状態が続くが、ミナの精神は依然気丈さを保っていた。

ミナには怪人・怪物に遭遇したときに立ち向かえるような武器は何一つとしてない。一目散に逃げるといのがもつとも有効で、唯一の案である。

が、ミナは自分がどんな怪物が現れても一撃で屠ることが出来る銀の銃弾シルバーブレットが込められた銃を持っているかのように思っていた。

過信。自惚れ。それらとは違うものが今の彼女を動かす原動力だった。

新校舎へ入つて八分が経過してミナは最上階に到達する。この階は建築の設計上ほかの階より小さく、クラスの教室がなくて視聴覚

室や第二音楽室など副教科で使用する部屋が割り当てられていた。

多くの部屋にさっきのような死体があったがよく目を凝らして探してもこれまででは生き残りが見つけれなかった。誰か生き残りがいるのならこの階の何処かにいるはずだ。

キツ、と意思の籠った瞳で睨むように周囲を見渡し、生き残りを探す。

両親たちを助けることに繋がらないかも知れないが、自分には出来ることがあると確信を持ちたかった。

それこそ、狂おしく。狂おしい程の希望だった。

視聴覚室、には誰もいなかった。家庭科室 料理をする所ではなく裁縫を学ぶ部屋でミシンが大量に並んでいる にもいない。

最後に、第二音楽室。結構大きな教室でこの階の面積の半分を占めている。この部屋はバイオリン部の部室として使われておりミナがよく使っている教室だ。

残るはこの教室しかない。いなかったらそれは困る。またどうすればいいのかわからなくなってしまふ。

希望を抱いてその入り口を通ると、ようやく見つかった。学校にいきなり現れ殺戮の限りを尽くした怪人たち、それから運よく逃れられた生き残りだ。

「ミナ!」

先頭にいた女生徒がミナの名前を呼んだ。濃いベージュ色でリボンはくすんだ青、スカートは黒のプリーツ、カーディガンのように山吹色の布が一見地味な冬服を優雅に装飾している。この学校の制服だ。

その女生徒の顔もミナはよく知っている。ミナと同じバイオリン部で小さい頃から習っているおかげでミナには及ばないが相当に上手く、副部長を勤めている。ミナの特に親しい友人の一人に数え上げられ、今日彼女が妙な夢に苦しんだ時に心配の言葉をかけてくれた者の一人である。

良かった、と心の底から嬉しさが沸きだす。

「無事で良かった！　生きててくれて本当に良かった……！！」

涙ながらに歓喜する。彼女も大切な人の一人で、決して失いたくはなかったのだ。

「ありがとうミナ。私もあなたが生きててくれてとても嬉しいわ」

女生徒は言う。とても冷静でニコツとは微笑むもののミナのように泣きじゃくることはなかった。

いつもの調子だった。こんな場面においても自分よりずっと冷静でなおかつ優雅で。

ミナはそれも嬉しかった。いつも通りの平穏が続いているかのよう  
に錯覚するからだ。

「でも大丈夫？ 怪我とか痛いところとかない？」

「はい……ありません。ありがとうございます」

副部長ではなく後ろにいた線の細い整った顔立ちの男子生徒が言う。

敬語を使っているがこの生徒はミナと同学年で背丈などもミナよりもある男だった。何故敬語かというと単純な話、ミナがバイオリン部の部長をやっているからである。

さらに後ろに控えていた生徒から話を聞くと、

どうやらミナが家族とディナーを食べていた七時半頃ではなくもっと早い時間帯 六時前くらいにあの化け物がこの学校へやって来たらしい。

まず立ち向かった勇敢な男性教師が殺され、次々と殺されてしまった。副部長含めバイオリン部はこの第二音楽にじっと潜んでどうにかやり過ごしたのだそうだ。

ミナは軽く自己嫌悪した。

今日の練習にミナがいなかったのは誕生日を明日に控え、それを祝うために帰ってくる父親に一刻も早く会うために休んでいたからだ。

自分が暢気なことをしている間に学校のみんなが襲われて酷い目に逢って そう考えるとすまない気持ちでいっぱいになった。

しかし、これからは違う。

自分がこのバイオリン部の皆を助けることが出来る。同じ恐怖を共有してあげられなかった分までしっかりと救う。

「じゃあ逃げましょう。大丈夫、一通り見て回ったけどあの怪人や怪物はもういなかった。多分、他の場所に人間を殺しにいったのよ」  
だから、大丈夫。

ミナは勇気付けるため、やたらにハイな調子で握り拳を二つ作って言う。

正直言えばこの話は半分嘘だった。

校舎内はあらかた見たというのは事実だが、それでもいないという確証はない。体育館かどこかにまだ潜んでいる可能性も否めない。  
だが、それでもミナはなんとかなる、出来ると思っていた。もし怪人や怪物たちに出くわしても、自分なら彼女たちを逃がすことが出来る。

そう思い込むことに根拠などいらなかった。

まずはプランを立てる。

怪人・怪物たちは殺人を求めている。当然、街にいる人間を狙い、一人残らず無慈悲に殺す。が、反面人の余り集まらない場所は後回しになるはず。山にまで行けば一先ず安心となるだろう。

しかし　それだけではおざなりだ。あの怪人たちは街の間人をあらかた殺し終えたら新たな標的を求めて動くに決まっている。

それまでにどうにかして救助を呼びたい。山道にはすぐに怪人たちの手が伸びるだろうから使えない。だからといって、山の中を地図やコンパスもなく闇雲に進むのも危険だ。

自分たちの力だけで逃げるのはいくらなんでも困難だというくらいはミナも分かっていた。

なにしろ実際に目の当たりにしている、彼ら怪人たちの殺人に対する狂気を。知能レベルは知らないが腕力も脚の速さも人間を軽く凌ぐ奴らから逃げるのはそれは大変なことだ。

なら、唯一対抗できるかも知れない知能で勝負をかけてみるしかない。

連絡手段があればいいんだけど、と思ってミナはポケットの中からスマートフォンを取り出す。やはりというか、アンテナは一本たりとも立っていない。サイトビューアを使ってみても『電波状況の良い場所ですべてください』の一点張りだ。『海外からも家族と楽々連絡！』が売りの一つだった最新機器が今は役立たずだった。

バイオリン部の携帯も残らず使えないだろう。そうできたらとっくに試しているはずだ。

なら、音信不通をあらかじめ見越しているものならばどうだろう……？

そうミナは閃き、スラスラと自分のプランを話し出す。

「学校の裏手に雑木林があるわ。真つすぐ進めば山の麓のロープウェイ入口辺りに出るはず。そこに確か通信機があったと思うの。普通の連絡手段は使えないけど、ロープウェイの通信機は何かあった時のために頂上と山の向こうの駅と直接連絡がとれるようにしてあるはずよ。」

山の天気は変わりやすい。急激に気候が悪化した場合、ロープウェイは急遽停止させる必要があるが、山頂や山の向こうまでは電波が届きにくい。だから迅速で確実な対応を取るために特別で独自の連絡手段がある。

それを利用すれば山頂と山の向こうの駅に救助を訴えられるのではないかというのがミナの考えだった。

それに、あわよくばロープウェイを使って逃げることも出来る。

「……確かにそうかも知れないけど　　本当に大丈夫？」

これは多くの危険を孕んだ計画だった。怪人たちはもう学校内には人間がいらないと思っっている可能性がある、副部長は正直ここでは息を潜めていた方が安心だと考えているのかも知れない。

動けば動くだけ怪人・怪物たちに遭遇する危険性が上がる。これだけの事態だ、電話などが通じないとはいえ国も衛星カメラなどで何が起きているかくらいすぐに分かるだろう。

それを待つている方がいいのではないか？下手に動くより国が救助してくれるのを待つておく方が得策ではないか？

気を落ち着かせて、冷静になりさえすればここは待つ方が良いと答えがでる。

ただし、それは国がすぐにでも動いてくれたらの話だ。

百パーセントの自信を持ってミナは言えるのだが、国が今すぐ、自分たちを助けるために動くことはない。

衛星映像で人間が怪人に襲われているのは確認出来ているだろうが………その場合あの悍ましい人知を越えた怪人の姿もしかと見ているだろう。

それは余りに手に余る。

まず“アレ”は何なのだと議論に上がる。答えは絶対に出ようがないのにやれ生物学的にはどうこうだとか物理学的にはどうこうだとかを延々と繰り返す。

それが早期に修まったとしても次は状況確認作業に没頭される。この手の確認というのは得てして遅い。現地との連絡が取れないのだから尚更。

全ての作業が“もし”終わったとして必要戦力を揃えるのにも随分もたつくだらう。あんな化け物たちが相手なのだ、温室で育てられたような日本の自衛隊の中で志願するような勇氣と度胸のある者はなかなかいないに違いない。

恐らく………然るべき作戦が立てられて、然るべき戦力が整えられるのは早くても二週間後。食料がないこの学校内にずっとこもっていたら一週間と持たないのは明白だった。



それに最悪の場合、自分たちは『更に多くの人民の安全のための忘れ難き犠牲』と片付けられて無視され、生き残った人間ごと怪人たちが葬り去るためにミサイルがこの街に雨霰と降る。

さすがに核ミサイルまでは使われなだろうが、そうなら助からない。

ミナが聞くだけで憂鬱になるその可能性の話をする、バイオリン部員はみな閉口した。

そうとなれば決断は早い方がいい。

「……やるしかないわ。大丈夫よ、私がみんなを守るから……!!」  
それが袋小路の決意だった。

その言葉を聞いて副部長の少女はうつすらと笑みを浮かべて、こつ話した。

「見所があるわね、やっぱり。でも、“たまには自分の身の安全も考えたらどうかしら”？」

ミナにとっては何故そんなことを言うのかが分からないものだった。自分には残された物がある、それがみんなを助けるといふことなのだから。

まあ、彼女なりに自分の事を心配してくれているんだろうなと判断してミナは笑う。

ミナは彼女の手を掴み取りながら「みんなの方が大切よ。当然で

しよ」と応えようとした。

「みんなの方がたい ……………」

『たまには自分の身の安全も考えたらどうかしら？』

(……………???)

何故、こんな言葉が出るんだろうか。さっきと違った意味でそれが気になった。

違和感だ。

普通『自分のことも考えたらどうかしら』だ。何故“身の安全”などという言葉がくつついたのだ？

まるで、今まさに命の危険に曝されているかのような言葉だった。

(ア…………レ……………?)

おかしい、おかしい、おかしい、おかしい。

ミナは入り口を“通って”ここへ入ってきた。何故、入り口の“ドアを開いて”ではないのか。何故、ドアがないのか。何故、バイオリン部員たちは見つけられなかったのに破壊の痕跡があるのか。

ミナが今掴んでいるのは“人間”の手だ。なのに、何故こんなにも冷たいのか。

この部屋は元々音楽室、防音材が張られて中の音が漏れにくい。何故それでも聞こえたのか。

いや、これは分かった。大声で叫んだからだ。しかし、怪人から隠れていた彼女らが何故大声を出すなどしたのか。

聞こえてきた叫び声。よく聞こえなかったが、考えてみるとこうではないだろうかというのがある。

『誰か……ツツ!! 誰か……ツツ!!』だ。

何故無事だったのにもかかわらずそんなことを大声で叫んだのか。

そして ……動揺して恐怖に震えていてもおかしくないのに  
何故“いつも通り”なのか。

まるで、他人事のように。

「…………ツツ!？」

後ずさると踵にナニカがコツツと当たった。いや、音の割に柔らかい。木や鉄じゃない。

“後頭部”だった。

このバイオリン部が使う第二音楽室に来るまでの間生き残りがいないかどうか隈なく探していたミナは様々な死体を見た。

その中でも一番多かったのは角に追い詰められ、まとめて殺されて山積みのように連なっていた死体だ。

これも同じだった。山積みになって伏せている。よく見知った顔、今さっきまでまともに見ていた顔の数々だ。

副部長がいた。その顔には今まで見てきていた死体と同じように生気がなかった。

いやいや、それよりも。

ミナも同じだった。いつの間にか角に追い詰められている。

「人間にははなかなか見所があるね、ただかせてもらうよ」

今“在る”副部長の顔が歪んだ。いや、顔だけじゃなく全身が歪んでいる。後ろに“在る”部員もそうだった。

変身 ……いや変体か。正体を明かしたというべきか。

ここにいたバイオリン部員全八人がずんぐりした緑色の虫怪人と化した。背丈はミナより三十センチ以上高く、体積は五倍ちかい。虫というよりも成虫に至るまでの蛹のようだった。

ミナは叫びたかったが、声が出ない。絶体絶命を喉元に突き付けられ息が上手くできない。

蛇に睨まれた蛙のように身体が強張って全く動けない。それには仮にも知人の顔をしたモノがこんな化け物に変化したというショックも大きく影響していた。

だからだろうか。

『川の……ッッ……!』

とっ、

怒りの台詞は肺の奥で自然消滅した。

もちろん、怒りはあった。『よくもみんなを……!!』という怒りは胸の内で燃えている。の、ではあるが。

「ひ……………!!」

虫の怪人の顔がすぐそばにある。相手が呼吸をすれば息がかかるような近さだった。

顔はどれも個性のないのっぺらぼう。しかし、『カロロロロ……………』と唸るように鳴く彼らはミナにしてみれば百鬼夜行の鬼に睨まれるほどに恐ろしかった。

化け物だ。こいつらは恐ろしい化け物なのだ。

「……………けて……………ツツ!!」

ガタガタという震えがミナの身体をうめつくす。これらは“自分に対しても”脅威で恐ろしい存在なのだ、滑稽な話ながら初めて気がついた。

“怖い、こわ恐い”。

ファンガイア、グロンギ、天使、虫の怪人。それらが唐突に恐ろしくて堪らなくなった。どうしてまともに見れていたのか、立ち向かおうとしていたのか、自分が自分で分からない。

「誰か……………ツツ!! 誰か……………ツツ!!」

それはバイオリン部員たちがこの虫の怪人に襲われたときに放った断末魔の叫びと同じ言葉。

出来るはずなかった。

身体の震えが大きくなって普通に立つのもままならなくなっている。腰が砕けていないのが不思議でならない。

出来るはずなかったのだ。

自分がみんなを助けるなど。

「ガッツ!?!」

鞭を振るうかのようなビュルツという音がした。鋭い音だった、まるで人一人の命を奪えるような尖った音だ。

虫の怪人八体は凧げ飛ばされて机や椅子、グラントピアノなどをひっくり返して壁に激突していた。恐らくさっきの音が関係しているのだろう。何らかの攻撃があつた重い巨体を弾き飛ばしたらしい。

ミナにとってはなんだったいい。倒れている友人たちの亡きがらには目もやらずミナはドアが破壊された入口から急いで脱出する。

「ハアハアハア……………!!」

ジャンプして上ってきた階段を可能な限り早く下る。着地するたび頭までビリビリとした衝撃が走ったが意識には入って来なかった。

校庭へ出る。あの虫の怪人は追ってこなかった。あの凧ぐ一撃でまとめてノックアウトされたのだろうか。

「ハア……………!! ハア……………!! ハア……………!!」

ミナは肩で息をしつつ混乱する頭で、それでもこれからのことを

必死に考える。

このまま雑木林を越えてロープウェイ入口へ、と考えたが駄目だ、敵にそのプランを発表してしまった。あの虫の怪人たちが無事だったら先回りされてしまう。

どこへ逃げようだとか、もう良かった。一分一秒でも長くあの怪人たちに出会わなければ。

「……………！！」

と、考えていたのに。

後ろに気配。それも一つや二つではない。

校舎の窓際に人が十数人くらい見えていた。それらはミナが見てきた“死体”の内の一割ほどだった。

実は生きていた、ならどれだけ良かったことか。生きていたのではない。最高でも“生き返った”だ。

その中にもミナがよく知る顔が混じっていた。旧校舎の3階、右端の窓に見える少女。これは一番と言っていていくらい特に仲良くしていた親友だった。登下校も一緒に自分も経験したことがなくせに恋愛についてのイロハを語ってきたりしてきた少女だ。

ユニークでやたらと明るく、能天気は何よりの長所な子だった。だが、今は違っている。それらは残らず失われていた。

「……………  
ク　　ミナ。フネノ　　ハ　　ネ　　ヒツヨ



ダ  
「  
」

飛び降りて校庭へ落ちた彼らの口から出たのは多分彼らの言葉ではなかった。強いて言うなら、“彼ら全体”の言葉のような気がした。

「  
」  
オウ                    ムリハ                    ケタ                    アトハ                    ノアト  
ン                    ハネ                    「  
」

ギョロツツ！と、彼らの瞳が反転したかのように灰色に変わる。身体に異形の紋を巡らせて、変質した。

グロンギや天使たちと同じくそれぞれが動物を模した姿。あとこれまでの怪人は少なからず色を持っていたが、この怪人たちには全く色素がなく全て統一して純白だった。

そして、この真っ白な肉体に習って、見えない消しゴムで消されたように、個々の意識という物が完全に失われている。

今までの怪人たちとは根本的になにかが異なっていた。力や姿形云々じゃなく、なにかが……足りない感じだ。否、全てが足らなくされているような、奪われているような。

極めつけだった。それらの怪人が余りにも“何もない”せいで「死にたくなかった」という悲痛な咽び声が聞こえてくるようで。

ミナは死んだらああいう風になってしまうのだと考えてしまう。死んだら何もないのだ、人を救えないとかそんなのはオマケみたいな物だ。

死の本質は果てしない無。

「来ないで……！！ いや……来ないで……！！」

後ずさりするが、後退できたのはせいぜい十センチだった。身体が恐怖でがんじがらめにされてしまっていて、それ以上は無理だった。

先頭に立っていたタランチュラ姿の怪人 奇しくもミナの親友の姿をとっていたモノが腹部にある突起を急速に伸ばす。

第二音楽室で虫の怪人を凪いだのはきつとこの触手のような物体だったのだろう。それはミナの両手両足に一瞬で巻き付き、瞬く間にミナの身体を空中ではりつけにする。

「う……く……ッッ！！」

これ自体で死ぬようなものではなかったがそれでも凄い力だ。とても振りほどけない、もう抵抗することさえ適わなかった。

死ぬ、間違いなく。

それは自分の力でどうこう出来るものではない、絶対の運命で変えることなど不可能だ。

ミナは今までの生き方に反した思いに飲み込まれた。絶対にそれを信じて、疑うことがないどころか疑うことに必要性があるとも思っていないかった生き方。それに今初めて反する。

当たり前だといつの間にか享受していた一つの信条。それが根っ

このところからポロポロに粉碎され、上の方からドロドロに熔解する。今ではそれを鼻で笑いたいとも思えてきた。

出来ないことはある。頑張れば上手くいく、などは挫折を知らず恐れてもいない者から出る戯れ事だ。

今、ミナは挫折に打ちのめされ、恐怖した。人を救うとは立派なことだ、それは否定できない。だが、その引き換えに命を落とすかもしれない。死んだら一人だ、暗く、何もなくて一人ぼっち。

ミナにはその恐怖に勝てる勇氣はなかった。

それを思い知って、そのうえで願う。

身勝手に我が儘、そんな権利はないのかもしれない。虫が良すぎる、自分に渡せるものなど何一つない。自分のことしか考えていない。

それでも。

「誰か……！！ ……けてエ……ッッ！！」

その願いを全てに向けて叫ぶ。

生きたかった。死にたくなかった。助けてほしかった。

『自分に特別な力があつてそれを狙う悪党がいて、それを救ってくれる救世主様がいて』

自分には特別な力はないけれど、この化け物たちは自分を狙って

いるわけではないだろうけれど、なんとかなってくれないだろうか。

「誰か！！ 助けてッッ！！」

オートバイの「ブアアアアアン！！」という音が彼女の願いにこたえた。

一台の大きなオートバイ。黒塗りでピカピカに磨かれて光沢を保持していたが後ろの方が壊れている。

乗っていたのは若い男性。多分、ミナと同年代くらいだと予想された。少し焦げてしまったような黒に近い茶髪で、ヘルメットをしているので顔の作りは分からない。

「ギ、ガッッ!?!」

それらがタランチュラの怪人をタイヤの前輪で跳ね飛ばした。百キロはありそうオートバイを使つてのこの行動。とんでもないテクニクだ。

触手が引っ込んでミナはドサッと地面に落ちる。落ちるときに膝を打って痛かった。が。

オートバイの少年はミナの所まで走らせて、ミナに手を伸ばした。

「乗れ!!」

もちろんだ。ミナはその手をがっしり掴み、少年にしがみつくようにバイクに乗る。

少年は「しっかり掴まってる！！」とミナに忠告した。ミナもより強い力で少年の身体を掴んだ。

前を睨むと少年はスロットルを絞る。ギャラララッ！とアクセル全開でオートバイは疾走。タイヤがよく滑いた校庭の土や砂を巻き上げ、ミナたちを隠した。

追ってこようという怪人もいたが、こちらもスピードを上げてそれを振り切った。

校庭を出て校門を出て、学校の周囲に広がる雑木林へダイブする。校門を越えた辺りで追ってくる怪人たちは見えなくなった。

雑木林の中程でオートバイは停車した。

もう怪人たちの姿は見えない。恐らくはもう大丈夫だ。

オートバイに乗ってミナを助けた少年は下りるやいなや、すぐさま車体の点検に移った。ここまで逃げて来るまでに何度も先ほどのような無茶をしてきたのだろう。

「うっわ……これはひでえ……。こりゃまた部品換えねえとなあ〜」

ずいぶんと落胆のご様子。

しかし、そのあと少年は何かの箱が傷一つなく無事だったのを確認して嬉しそうに微笑む。

ミナはそんな少年をなにか珍しいものを見るような目で見てしまった。

あんな怪人たちに襲われてようやく逃げてきたのだから、普通安堵で脱力するとかだ。それなのに彼はそうせず真っ先にそんなことに気をかける。

どうしても少年のことが気になってミナは感謝の言葉を伝えるべきだったのに「あなた……誰？」と尋ねた。

「影虎。上の名前は恥ずかしいけど言わないわけにもいかないのかね……」

少年はヘルメットを脱ぐ。

少年の容姿は優れていた。日本人の顔立ちなのに瞳の色はミナのお金髪よりも明るい金。眉は細く長く八の字型で目の形は猫をイメージさせるつり目だった。いたずらっぽい表情がよく似合っている。

「春梅影虎。上の名前は忘れてくれよ」

少年

春梅影虎はおどけて指をパチンと鳴らした。

ようやく会ったよこの二人。

え？オルフェノクだけ扱いが良すぎるんじゃないかって？仕方ないだろ、ファイズが好きなんだから！！

さて、これでひとまず逃走劇は終わり、次からいよいよディハーツに変身する流れに入っていきます。

なげえよ、例がないよ！！なんで変身までにこんなかかってんだよ！？個人記録のダブルを余裕で越えたよ！！

しかし、今回ミナは心に大きな揺らぎがありました。

『失敗と“出来ない”は怖い』。出来て当然、挫折も知らなかった彼女にとってはこんな当たり前なことも今まで感じたことがなかったんですね。

しかし、彼女はこれで他人の命だけじゃなく自分とも向き合えるわけです。

恐怖を乗り越えられるかどうかは彼女しだい……



## CHANGEBOY MEETS GIRL (前書き)

閑話『ある日のライダーテスト・超基本(昭和)編』

問一、1971年から放送された特撮番組といえは？

解答⇒マクドナルド

コメント⇒確かに銀座店が開いたのは同じ年ですね。けどよく問題を  
を読むように

問二、一号、二号から改造手術を受けて誕生した仮面ライダーは？

問三、海底開発用に作られた仮面ライダーは誰？

問四、国際宇宙研究所で自ら改造され生まれた赤心少林拳を駆使し  
て戦う仮面ライダーは？

解答⇒メカニック遭難者ABC

コメント⇒SDライダーは忘れましょう。このネタは分からない人  
が多すぎます。

問五、デストロンの科学者だったが裏切られ、ライダーと共にデス  
トロンと戦った戦士は？

解答⇒フック船……ハンガーマン

コメント＝直したのは正しい。いくらなんでもそれはやり過ぎですね。

問六、カブトムシがモチーフで様々な電撃技をもつ六人目の仮面ライダーは？

解答＝ゴ・ガドル・バ（先生、ライダーマンも仮面ライダーだよ！）

コメント＝“仮面ライダー”はです。ライダーマンについてはいいません。でも、分かっているってことじゃないですか！？

問六、一話限り放送されたパーフェクトサイボーグの仮面ライダーは？

解答＝ミスターダイヤモンド～ダイヤモンドは傷ついて～

コメント＝よりによってダブルの42話のサブタイトルを付けなくても

問七、仮面ライダーブラックのライバルで、秋月信彦が改造された敵の名は？

解答＝ぶ ぶりザエモン～私はいつも強い者の味方だ～

コメント＝だからSDライダーは忘れるように！ダブルでネタがわかりずらいですー！

平成編は次回で。

CHANGEBOY MEETS GIRL

影虎と彼が助けた少女が黒のオートバイに乗って雑木林の半分程まで逃げてきた。

この林はかなり広く、背の低い木や草が多くて身を隠すのにはうってつけだった。あの少人数で人間二人をこんな鬱蒼とした雑木林にわざわざ探しにはこないだろうと影虎は考えて停車する。

まず無茶をし通した愛車の状態が気になって座席から下りて様子を見る。

「うっわ……これはひでえ……。こりやまた部品換えねえとなあ」

金属疲労でいくつかの部品が悲鳴をあげていた。特にエンジン部分がマズイ。百キロ以上の高速で走り続けていたので影虎自身その予想はしていたが。

整備すれば走れないことはないが、完全に直すのは手持ちの道具では残念ながら出来そうになかった。

しかし、命を拾ったのだからこれ以上我が儘もない。

次に画材ケースの無事を確認する。これがもし傷ついていたのなら影虎のシヨックはなかなか大きかったろうがこれには傷一つついていない。

（……とりあえず運はかなり良かった方、か……）

影虎はホッと溜め息をついて相棒を愛でるように撫でた。

(あ……そういや)

影虎は思い出す。そういえば自分は人を一人助けていた。彼は愛車と相棒の状態が気になるあまり“すっかり忘れていた”。

少女は影虎を見ていた。まるで立ち上がるどころか逆立ちまでし始めた芸達者なレッサーパンダでも見るかのような目だ。

不思議がられている。彼は「やばい。やっぱし『怖かったな、もう大丈夫』とかフォロースべきだったかな」と思ってバツが悪くなり頭を掻いた。

女性の扱いには自信がない。一処に長く留まったこともないのであまり触れ合いがなかったのだ。『美少女と同棲の薔薇色の生活』などを考えていた彼だったが、あまり実感はなかったのが本当のところだった。

影虎はとにかく最低限の慰めの言葉はかけてあげようと必死にボキャブラリーを漁る。

しかし、少女は彼がなにかを言うより早く尋ねてきた。

「あなた……誰？」

影虎はヘルメットの中でポカンとした表情を浮かべる。

なんとなく、記憶喪失の友人や恋人に自分を忘れられた  
み

たいに衝撃だったがおそらく錯覚だった。なにしろ

……………

（ああそうかそうか。考えてみりやお互いに知らないんだよね……………）  
きつと少女は影虎を知人の誰かなのではないかと考えたのだろう。  
まあ、あの場面で普通見ず知らずの人を助けたりはしないのでそう  
思うのは自然だ。

大体、影虎自身にも何故助けたのかよく分かっていない。今まで  
見てきた助けを乞う人々のなかで何が特別で助けたのが疑問だっ  
た。なにしろ彼女以外の人々はみな見捨ててここまで来たのだ。

彼女を助けたのは僅かながらの良心とまた“勘”だ。なんとして  
でも彼女を救わなければいけない気がしたというだけの話。

「影虎。上の名前は恥ずかしいけど言わないわけにもいかないのか  
ね……………」

ヘルメットを脱ぎ、影虎は憂鬱に溜め息を漏らす。

自分の苗字はハッキリ言っ嫌いだっ。ちよつと旅先で会った  
人に自己紹介したとき『梅干し』という光栄なあだ名を貰ったりし  
ている。こんな苗字を認めた国にちよつと苛立つてもいる。

「春梅影虎。上の名前は忘れてくれよ」

出来るだけ名前のインパクトが少なくて済むようにとわざとおど  
けてキツと少女の方を向いて決めて、指も鳴らしたりしてみる。

「……………」

みるみると、それは猛烈な恥ずかしさに転じた。

ヘルメットを脱いで、救った少女を初めて見て、固まった。別にじっくりと見たわけではなく、それは彼の中を駆け巡る。

雷撃を身に受けたようでもあったし、鈍器で後頭部をガツンと撲打されたようでもあった。無論、それ自体を彼が経験したことはなかった。

だから、初めての衝撃。

真つ白な空間に放り込められ、自分の鼓動だけが大きく鳴っている。無限の引力を持つなにかがあつて、それに対して反抗する力も気力も浮かばなくてそこへ向かおうとしてもそこには何も無い。

そんな感覚だった。

「……………どうかしたの？ え、やっぱり貴方も怪我してるんじゃない………！！ 大変………！！」

少女が影虎がずっと沈黙したままでいるのをどこかに怪我を負つて、苦しんでいるからだと解釈してしまつて慌てた。

いや、確かに痛いくらいにズツシリと重いなにかが影虎の身体に飛び込んできたが、目に見える外傷は何処にもない。

（え、あ………！！）

とにかく誤解を解かなくては。女性を困らせるのはいけないこと

だと影虎は誰かから聞いていた。誰かは分からない、顔は思い浮かべることができなかった。

この少女があまりに大きく占めるので、他の人々がどうでもいように潰されたのだ。

多少乱れてしまっているが髪は美しいブロードで、こうして普通に立っているだけで小さく吹く風によって髪がサラサラとなびいている。

目は大きく卵型で、長い睫毛がよりいっそう大きく見せている。瞳の色は日本人によく見られる黒で、髪が黒茶で瞳が金の影虎とは真逆の取り合わせ。綺麗なその瞳は優しげな光を宿していた。

胸はかなり大きい。下着が見えそうな際どいところまで大胆に四角く開かれた服を着ているせいで谷間が大きく見られてより大きさが強調されている。影虎の目測だとサイズにして八十七、カップはE……いや、Fという領域まで踏み込んでいそうだった。

ウエストは当然のように細い。水着姿などを拝める機会があったなら、まず間違いなく最高の起伏がそこにある。

腕と脚は両方長くてすらりと細い。特に脚は黒のスカートとニーソックスが俗に言う絶対領域を絶妙に作りだし、見える太ももの白さが眩しい。

可愛いし、綺麗な。それもとびつきりに。

(……………って違う違う……………!!!)



少女になんともないから気にしないで欲しい旨を伝える場面だった。影虎は思い切り脱線して少女の困惑する姿をじっくり見てしまっていた。

なんでもいいから何か言えと舌に命令するがそれは可能範囲を越えた注文だったようで全く回ってくれなかった。

女の子の姿を見る時だけ妙に冷静で細かい部分まで観察できるくせにその少女に話し掛けるにあたっては何も言葉が出せないとは。影虎は自分の男の部分に恨めしく思い、同時に自分が世界で一番情けないのではと思えた。

『いや大丈夫問題ない、さ！　ハハハ、実は君の美しさに見とれてしまっただけ。本当さ！　とにかく僕はなんともないから心配しないでくれたまえ、ハッハッハ！』

などと爽やかに、何の考えもなしにバカっぽく決められるものなら（例えウザがられたとしても）どれだけ良いか。影虎にはそんなスキルはない。

「しし心配はあすんな。大丈夫問題ない。ちよつとその……あれで……あれであれなだけだから、うん。あ、あはははは……」

なんとか搾り出してこんな調子だった。『大丈夫問題ない』だけまともに言えたのが影虎にとって何だか笑えた。

どこが大丈夫なんだ？　という話だった。

幸い、『大丈夫問題ない』は伝えられたので少女はホッと安心したようだった。もう少し黙りくさっていたら彼女は自分のスカート

などを破って手当に役立てようとかしたかも知れない、良かったのもあるし残念だったのもあった。

次に、優しい言葉をかけなければ。女性に気を回すのは紳士の嗜みだというのも影虎は聞いていた。また誰なのは分からない、きつと影虎に『女性を困らせてはならない』と教えたのと同じ人物だ。

「え〜〜〜〜……君は、ど、どっか怪我とかないか？ 頭とか打つてえない？」

少女は力ない笑みをして頭を横に振った。

それはいろいろなものが零落した死の笑みだった。だが、影虎は少女の拳動の一つ一つがある種麻薬のようだった。この笑みも天使の微笑みのように見て取れている。

「そうか。うん、それは良かった。ほ、他にないのか？ あいや、他に痛むところはないです？ 脚とか手とか肩とか、胸とかお尻とか……」

少女がカアツと赤面して胸や股を手で隠した。それはもうマツハの速度だった。

どうしてそんな行動をしたのか影虎は最初分からなくて呆けたが、数秒後自分がどんな台詞を言ったかに思い当たる。

(……………！！……………！！っ！！っ！！)

言葉に表せぬ激しい後悔と自分に対する憎悪にも変貌しうる怒り。彼の胸中を手っ取り早く言葉で表すなら「俺のバツキャロオオオオ

オオオオ！！」といったところか。

女性の前で胸だのお尻だのと。こんなのはまるでセクハラ親父のセリフだ。彼女の中の影虎の評価はただ滑りしたのは確定だろう。

『女性に対して最もしてはいけないのは恥をかかせることだ。そんなことをする奴は俺は男とは認めない』

誰なのかを影虎は思い出した。日本のある街で弟子とともに探偵業を営んでいたハードボイルドな男性だ。ちよつとした事で知り合い、女性の扱い方だけでなく“男”とはなんなのかのイロハを教えてもらっていた。

その男の一言一言が重みを持っており、影虎は分かっていたつもりでいた。しかし、実践してみるとなるとこも難しいことだったとは同じく“ハードボイルド”を分かっているつもりでいながらで決まっていなかった“半熟卵”<sup>ハーフボイルド</sup>の青年の気持ちに共感する。

あの青年もこう思っていたのだろう。『あつれえ！？ んなつもりなかったのに！』と。

「あ、うん……。怪我がなかったらいいんだ、うん」

気を落とす。二度とかえってこれないくらいに深く。

おしまいだ、格好良く窮地から救ったまではよかったのにこれでは台なしだった。

だがそんな影虎を見て少女は笑った。どういうことなのか、その

笑みには先程はなかったものが少しだけだが入っている。

「ありがとう。優しいのね」

「はい？」

「助けてくれて、その上気までかけてくれた。私だったら……多分、出来ないわ」

影虎はまた呆然とする形になった。終わりだと思っていたのに、この天使はまだ見離してはくれなかったようだ。

「私、赫塚ミナ。フフ、ちょっと変わった名前でしょ？ 貴方の名前を笑ったり出来ないわ」

赫塚ミナは目を伏せる。

（かくつか……？ どっかで聞いたような気が……。まあいいか。成る程……“ミナ”……かあ……）

絶対にどこかで聞いた名前だったし“春梅”ほどおかしくはないがかなり珍しい苗字だ。だが、今はこの美のうえに超が付きそうな少女のことで手一杯で記憶と結び付けられなかった。

赤を二つ並べて赫、貝塚の塚、ミナはカタカナで漢字はないことを少女はわざわざ補足してくれたが、影虎は何も気がつかない。

どんな運命の巡り合わせか、この少女が今日から居候させてもらう予定だったら赫塚家の一人娘で、何事もなかったら同棲生活が始まり、一緒に同じ学校に通うはずだった。

それに気が付かないどころか、あれだけ夢見たのにサツパリと忘れ去っていた。

「えつと、じゃあ赫塚ちゃん……いや赫塚さん？ いやいや赫塚様？ 赫塚伯爵？ …… Mrs・KAKUTSUKA…… Mrs・Red Hill？」

「ミナで良いわよ。あ、呼び捨てでね、ややこしいから」

少女は最後の呼び方の案で噴き出しそうになりながらそう言った。

呼び捨て。それもまた恥ずかしいし緊張する。確かにさん付けや様付けだと「皆さん」や「皆様」となってしまっただけでややこしいというのも分かるが、ハードルは高い。

「え、ええ……、み、みみみ、みみみみ……」

言うのに、やたらともたついた。鳴くのがかなり下手くそなモテない蝉みたいだった。

しかし、彼の瞳孔が唐突に開くと彼は打って変わる。

「……ミナ。早くここを離れた方が良い見たいだぜ」

あれだけ苦戦していたのが嘘のようにミナの名をあっさり呼び捨てにして、影虎はミナに警戒を呼び掛けるかのようにそう言った。

ミナは「どうして？」と問う。これだけ言葉にキレが生まれたり

オドオドした態度が消えたのに彼女は彼の様子が変わったと別段気がついていないようだった。

「わっかんねえ。けど何となくヤバい。ここも安全とは言えなくなってきた……ってことなのかな」

どうしてそう思うのかと突き詰められると影虎は答えることが出来ない。いつも通りに勘だからだ。

影虎を襲ったのは危機が徐々に近づいてきている、という類の勘だった。即座に動かないとならないという物ではなかったが、このままここに留まっておくのはマズイと出ている。

もしも彼が常人離れた聴覚をもっているのなら、雑木林に踏み込み影虎とミナを探す怪人たちの唸り声と足音が耳に入ってきているだろう。

正し、影虎たちがいる場所と怪人たちの距離はまだ一キロはある。かなり茂ったこの雑木林ではそこまで離れている相手の姿を確認する手だてはない。彼の“勘”という物はやはり並外れているものがあった。

「ミナ、ここらで身を隠せそうな場所は？ 食料や水もあって出るだけ人里離れたところだ」

影虎は知ってて当然だろうという感じでミナに聞いた。旅人ならば山中の休めそうな小屋や村の所在をあらかじめ調べて知っておくのは常識的なことであるからだ。

そんな常識を一般の女の子に押し付けるのはかなり酷だった。案

の定、彼女は困惑する。

「ねえ、山を越えたところにも町があるけど、そこにいくわけには行かないの？」

「駄目だ。この街を抜けれたら助かる、とは思いたいところだが“この街は特殊なのか？”って話になると微妙だろ。何処へ行こうがきつと同じだぜ」

この街が特殊な霊力場や龍脈の集まっている地点であるの化け物を生み出しているという“オカルト説”とか、この街にある超お金持ちあるいはさる国の要人はたまた世界を揺るがしかねない特殊な力を持つ人物がいてそれを抹殺するためにあの怪物たちが送り込まれたという“陰謀説”とかならばこの街を脱出してしまえば話は簡単なのだが、そうではないと影虎は考えていた。

怪人にも色々グループがあった。影虎が見た物だけでもメダルを人の身体に入れ怪物を生み出す物、鏡の中に存在し人を鏡の中に引きずり込む物、それぞれが固有で特別な力を持つ物、あと先ほどミナを助けた時に見た純白の怪人。これで四つのグループだが、きつと、もつとあるだろう。

しかし、それらは皆自分勝手に行動しており、一致団結して共通の目的に挑もうという形ではなかったようだった。

まるで放り込むだけ放り込んで、あとは好きなように暴れてくれとでも言われているように……。

ミナはあからさまに元気を無くした。絶望とまではいかないが、彼女はこの街を脱出すれば助かるという短絡的な考えだったのだろ

う。

しかし、そうではない。いや、悪い場合も考えなければならぬ。だからこそ、遠くへではなく身を隠せる場所なのだ。

影虎もこの街の生まれだったが、まだ中学生にもなっていない時にとある事情でこの街を去った。ので、この街の周辺情報についてはミナを頼るしかない。

「家」

「家？ 帰りたいたってのは……まあ、分かるけどそんなもん……」

「違うわ、おじいちゃんの家よ」

ぼつりと漏れた言葉に影虎が反対すると、更にミナは付け足して言った。

「おじいちゃん？」

「うん、会ったことはないけど。昔は物凄いバイオリニストで……“赫塚音也”その名を知らない人はいない。伝説よ。両親や次狼さんたちにも教えて貰ったことないけど教科書にも載ってるくらいだからおじいちゃんの凄さだけは知ってる」

「……うひゃあ、それは凄いな……それで、そのおじいちゃんがどうかした？」

「今はもう引退してこの近くの山で暮らしてるって聞いてる。多分、身を隠せる場所もあると思う。……人の目から避けるために作った



家だから」

成る程、隠れ家という物だ。この話からは音也なる老人がどんな人物なのかまでは分からないが名声高めた天才が老後に人目を忍んでひっそりと隠居生活をするというのはよくある。

大層山の奥深くに建てているだろうし、見つかりずらいだろうのも確かだ。

だが、影虎は乗り気ではなかった。十数年間会ったこともない祖父に、行ったことのない山奥の家、かなり確実性がない。

だが、それ以外に寄り辺はないだろう。老人の一人暮らしと云えど人との接触を避けるため食料などを多く貯めておいてあるはずだ。もし無事ならこれ以上望ましい隠れ家はない。

「仕方がねえな……。ミナ、悪いけどまた移動だ。俺のバイクに……」

その時、影虎の視界にミナの胸が映る。

やはりデカイ。影虎がつけた目測のサイズ87、D\Fカップと一つのもあまり大袈裟にも思えない。むしろ、多いに有り得ると言えるだろう。

で、問題はだ。

ミナが影虎のバイクの後ろに乗って運転する影虎を後ろから手を回したとすると……もしかして“当たる”のではないだろうかという事。

いや絶対に当たる。それどころか押し付けられる形になるだろう。先ほどはあまり気にも止めていなかったが、影虎の背中に密着していたのはそれだったのかもしれない。

(もったいないことした~~~~…!!)

柔らかいだとか温かいだとかバイクがちょっとした障害物に乗り上げた時に揺れたとか全く覚えていなかった。

しかし、これからがある。もうそう考えてしまったら男の欲望全開だった。

「よ、よよよし、早くいついくつ、行くぜ!!」

鼻の下を伸ばし、“駄目駄目”にシフトチェンジして、影虎は天に握り拳を掲げた。

ミナは不思議そうに見ているだけで影虎が今悪しき欲望に囚われていることなどこれっぽっちも気づいていなかった。

CHANGEBOY MEETS GIRL (後書き)

ミナと影虎。この作品は基本ダブル主人公形式ですね。にしても男が片思いで、ヒロインが鈍感って今時珍しい。

あとここで閑話。こつ聞こえなかった?と思ったので書いてみた。

閑話『フォーゼ第一話』

弦太郎「俺の名前は如月弦太郎!この学校全員と友達になる男だ!  
」!

凧「俺の名前は如月……“ゲッーロボ”!?’

雄佐「……ある意味ロボットみたいなもんだがな……」

まじでこつ聞こえた俺って何?

閑話『ある日のライダーテスト・超基本（平成）編』

問一、未確認生命体・グロンギと戦った平成の仮面ライダーは？

解答〓仮面ライダークウガ

コメント〓正解。BLACK RXと書くだろうと書いていませんでした。

問二、光の神の力が覚醒して誕生した戦士たちの総称は？

解答〓神様のちよっぴりお茶目な嫌がらせ

コメント〓確かに、闇の神からしたら嫌がらせ以外のなにものでもないですが……

問三、ライダー同士で殺し合うバトルロワイヤルを描いた作品は？

解答〓仮面ライダーアサクラ

コメント〓実際にオルタナティブを除けば、人を殺したのは本編では朝倉だけです……（シザースは自滅、タイガは事故死、龍騎は子供を庇って）

問四、初めて人間と怪人の共存が主軸にされたこの作者が大好きな作品は？

解答〓 仮面ライダー 誤誤誤〓 誤報告（乾巧って奴の仕業なんだ）・誤情報（奴が真理を手にかけたんだ）・誤解（言わずもがな）

コメント〓 『乾巧って奴の仕業なんだ』って本編では一度も出なかつたんですよ。

問五、アンデッドが封印されたカードを用い、戦った仮面ライダーは？

解答〓 ヴぁめんダイダーウレイツ

コメント〓 もう良いです、正解で。

問六、細川茂樹主演作の肉体と精神を鍛え抜くことで変身できるようになった『鬼』たちの活躍を描いた作品は？

解答〓 仮面ライダー 停車は出来ない

コメント〓 威吹鬼さん、ご愁傷様です。

問七、クロックアップシステムを使って超高速で戦う仮面ライダーの原点回帰となったライダーは？

解答〓 仮面ライ（速く書きすぎて紙がやぶれちゃいました

コメント〓 クロックアップでごまかさないうちに。

問八、電車がモチーフの仮面ライダーといえは？

解答〓 仮面ライダー 困った時は子役でごまかそ王

コメント〓大人の事情というものがありませんよ

問九、現在と22年前が同時に描かれる異質のストーリーとなった作品は？

解答〓仮面ライダーキ待ちなさい私は常に正しい名護と書いて『主人』……おおっと待った俺が俺と書いて『主役』だなんだ貴様その命神にかえしな貴様こそなんだよし俺が黙らせて

コメント〓キバのタイトルは753と0108に破壊されたようです

問十、平成仮面ライダー十周年を記念して制作された全ての仮面ライダーの世界を巡った仮面ライダーは？

解答〓先生もうそろそろ文字数の限界だよ？

コメント〓何を言って……

次回へ

CHANGE I'M NOT ABLE TO BE MYSELF

「次の道は左折してね。右折したら山に入っちゃうから」

「……うーい、分かりました……」

ミナのバイクが山道の分かれ道で左側を選び進む。続く影虎のバイクもそれに習う。

ミナが乗るバイクは雑木林に隠していた自分の物だ。学生でありながら一流のバイオリン奏者であり、更に部活動をこなしているミナのスケジュールはいつもいっぱいだ。学校が終わって部活動も終えたらすぐにコンサートが控えているなんてことはざらにある。だから、学校にバイクの駐輪を認めてもらっている。色々問題があるので雑木林の中に隠してはあるが。

このバイクは影虎の黒のオートバイとは違い、女性でも楽に乗りこなせる小型のミニバイクだった。けれど出力的には問題はないらしく、最高速度は百六十キロで結構速い。

しかし、なんの間違いかメーターには“500”の文字が書かれている。時速五百キロなんてこんな小さな小さなエンジンでは出せようがないし、人間に耐えられる速度ではないので洒落のようなものだともミナは解釈していた。

特徴はところどころに見られる大きいライトと金の装飾だ。金の装飾といってもアクセントで基本カラーは白だったが、とにかく絶妙にマッチしており、その模様は風を彷彿させる。

市場には全く見られない機体だ。それもそのはずだった。これは去年のクリスマスに渡からプレゼントされたもので完全なオーダーメイドらしい。

赫塚家の屋敷を見ただけの者ならどこにそんな金かと思うだろうが、一回の演奏に何千万という価値をつけられている天才である渡には使おうと思えばいくらでも金がある。

このバイクは父親からの妙な愛情だった。

(…………お父さん…………)

ただ、その父はもういない。

生きていても知れないし死んでいるかも知れない。この状況ではそれだけしか言えなかった。それを確認するために回れ右をする勇氣は、残念ながらミナにはなかった。

だから、もういない。ミナは父親を、母親を裏切ってミナは逃げている。

あと、ミナの心に深く傷をつけたのは意外に、“どこへ逃げたって結局同じだ”という事実だった。

影虎からそのことを話されたミナはつい俯いてしまった。それは自らの危機は去ることはないと知ったためのものではなく『ああ、どっちにしろ自分は誰も救えなかったんだ』と打ちのめされてしまったことからだ。

今までミナはなんだってやってのけていた。望まれたらなんだっ



てやっていた。勉強も頑張った、スポーツも頑張った、身嗜みも頑張った、全て頑張った。そしてそれらは全て優良な結果を残してきた。

そのせいで自分に出来ないことはない信じ込み、出来ないなんて認めなくなってしまうた。本当は誰よりも弱いくせにそれを忘却し、“敵”とした。

でもその分厚い殻を打ち砕いてしまえばミナは自分でも笑ってしまっう程弱かった。

きつと、あれだけみんなを救わなければならぬと強く使命感に燃えていたのは、そういうことなんだ。内心では誰よりも怯えていたから、それが真逆に働いたんだ。

ミナは自嘲する。

きつと自分はこれから先、ずっと何も得られない、得ることができない。そんな生きている意味のないような空虚な人生を歩んでいくだろう。そうミナは考えに沈む。

何かを得ようとする度、あの怪人の姿がああ恐怖が呪縛のように蘇ってくるに違いない。そうなったらその都度発狂しそうになる。耐えられはしない。

だが、そんな気持ちは彼の前では浮かばなかった。

ミナを助けた少年、春梅影虎。

今はミナのバイクに続く黒のオートバイを走らせながらなにやら不満そうにぶつくさ言っている。ミナには詳しく聞き耳を立ててみる気はないが少し漏れて聞こえるのは『せめて後ろから……』とか何とか。

ミナと同じ年くらいに見える風貌だ。恐らくまだ成人には至っていない。ミナと同じようにどこかの高校に通っていたのだろうと想像される。

顔はかなり整っている方だった。ただ、女性にキヤーキヤー言われるようなタイプではない。何人かの女性に影から好感を持たれているのにいつもは囲まれたりしていなくて淋しい思いをしていそうなタイプだ。

ミナの目から見てこの少年はかなり変わっているように見えていた。

彼に助けられた時、ミナは絶望していた。自分には誰も救えない、そんな力はない。いや、自分は誰一人救えなくていいから自分を助けてくれ、と願った時に彼は颯爽と現れてミナを救った。

しかも、絶望する前の希望に満ちあふれたミナならば喜びに奮えるであろう場面において、彼が真っ先にしたことと言えば愛車の点検だった。

人を救うのは勇気と覚悟のいることだ。なのに彼は人一人救い上げた自分の行動に誇りを感じているそぶりもない。まるで、その場

の気まぐれであんなことをやってのけたというように。

( 凄いな…… )

彼の行動は自由気まま。確信のない直感のようなものに身を委ね生きているのだ。それは着の身着のまま旅をする旅人に通じたところがある。

ミナはこういう生き方を今まで一度もやってこなかった。いつもいつも自分に限界を付けずに縛られて生きてきたのがミナだったからだ。

( ………………? )

なにに縛られて生きてきたのだろう。こんな事態に陥ってようやくそれは分かったが、その正体が分からなかった。

きつとそれが元凶だ。

自分は何でも出来ると思いついてしまったそもその原因。そんな訳がなかったのに長らく　それこそ生きてきた全ての時間信じ込ませていた一つの要素。

とてつもない大きさのものに違いないのに、それが分かればなにかが得られる気がするのに、その正体は不明だった。

ミナに連れて来られたのは本当にすごい山の中だった。どこを見ても木しか見えない。といっても、人が手を加えてきた植林のような小綺麗さはまるでない。本当に手付かずの場所だった。

途中からは明らかに道じゃなかったような道を通った。嘘じゃなく藪などを踏み固めた単なる獣道のような道だった。確かにこんな場所まで怪人たちがわざわざやって来ることもない。

だが、人もだ。来る者を拒むかのようにこの山は険し過ぎる。こんな場所に住むなど常軌を逸していた。

なぜこうまでして人との接触を避けるのが影虎にはどうしても分からなかった。

「ここからは徒歩ね……」

前を慎重に走っていたミナがそう判断する。

これからの道は更に細く険しい。マウンテンバイク並にスラッとしたミナのバイクなら進むのも無理ではなかったが、影虎の大きなオートバイでは入ることさえ困難だった。

影虎のことを配慮してのことでもあったし、ミナは影虎ほど運転が上手いわけでもないようだったのでそれもあるだろう。

本当に、どうしてこんな場所にすんでいるのか。そう影虎は愚痴りそうになった。

しかし、それよりもふと気になったことがあってそれに対する不平は出てこなかった。

「なあ、ミナ？」

その疑問を解消させるために影虎はミナの名を呼ぶ。

幸か不幸か、（ミナにはそんな気はなかったが）悪い扱いを受けていたせいで雑木林の時のような極度の緊張は消えていた。

「なあに？」

とミナ。

「よくこんな複雑な道覚えてるな。来たこともないんだろ？」

「うん、でも前々から何度も場所と行き方はお父さんから聞いていたから」

「何度も聞いてた？ 一度も会わせてくれなかったのに？」

考えにくい話だった。例えば両親と祖父との間でなにかいざこざがあり、それで勘当させられているとかならミナに会わせないのも分かる。が、そうではないそうだ。

いや、まるでドラマのような奥の深い事情があるかも知れないのでそれは無理に詮索することもないのだが、問題はミナの方にある。

「何でこんなにハッキリと道を覚えるくらいに会いたかったのに、会いに行かなかったんだよ？」

影虎は物心ついた時にはすでに天涯孤独の身だった。両親はいただろうが、顔も覚えていない。親戚だと名乗ってきてくれる者もいなかった。

だから彼は正直分らないのだが、世間一般的には家族というもののは掛け替えのない物のはずだ。実際、よく分からない影虎でも今になって祖父あたりが現れたらどんな顔をしているのかくらい気になる。

彼女だって気になっていたからこうやって来たことのない道にもかかわらず迷いなく進めるくらいに暗記していたのではないだろうか。

「何でって……お父さんがあんまり会わせたくなさそうだったから……その、何か重い病気なのかなって」

なるほど、それが一番納得がいく理由だ。感染する病にかかっていて、それで他人に移さないためにもこんな山奥に住んで、孫娘にも自分の話を聞かせないようにした。

だが、それではミナの父親がミナに祖父の家までの詳しい道筋を教えたのが説明できない。

まるで、いつか来るだろうミナが祖父の家に自分の意思で行こうとする日を待望するかのようだった。

「そう言われたのか？ おじいちゃんは病気でミナに移ったら悪いから会わせるわけにはいかないって。」

影虎にして見れば行きたいのに行かないというのはよく分からない心境だ。これまで義務教育である中学校にも行かずに、行きたいと思ったところは迷わず行っていた。無理を通して危険な紛争地域にまで足を運んだくらいだ。

親が会ってほしく“なさそう”だからなんてのは行くという気持を留めさせるには足らなさ過ぎる。

「会うなと言われたって、何か方法ってもんがあるだろ。ガラス越しに見るとか」

「だ、だって……お父さんいつも旅に出てて、帰ってくるのはちょっとした間だけだし。そんなしつこく聞いたらお父さんに……!!」

ヒートアップしそうなところでミナは言葉を切って口を手で押さえた。

このままでは怒鳴り声を上げるくらいに熱くなってしまつと自分を抑えた、というより『あ、』と何かに気づいたかのようだった。

とんでもない失言をすでに言ってしまった、というようにミナは見るからにしゅんと落ち込み、拳を握った。

「……ごめんなさい」

「いやいや、こっちこそ悪かったよ」

数秒間の静寂の後に唐突に出た謝罪に影虎は乗っかって自分も謝る。

自分にとっては当然のことが相手にとってはそうではない。人のコミュニケーションを構成する際にいつも心に留めておかなければならない鉄則だ。

これを忘れるとつまらないことが争いの火種になる。これは紛争地域よりも、平和な一般社会によく言えること。

「何言ってるの。あなたはすぐまともなことを言ってくれただけじゃない」

「正しいことが正しいとは限らないってね。女の子にあんなにずばずば言うのは我ながら酷かったさ」

「いいえ、私がおかしかったのよ」

ミナは今まででよりかなり小さい声でそう呟くと立ち止まり、近くに生える巨木に手を添える。

影虎は片足を前にして頭だけ振り返る格好でミナのこれから話を聞いた。

「私、おかしいのよ。すつごく変で……どうかしてた。普通いからお父さんが会わせたがっついていなかったといっても会いたいのが大きいに決まってるわよね、なんで大人しく従うしかなかったんだろう？」

ねえ影虎くん。そう彼女は影虎の名前を初めて呼んだ。

「影虎くんはなんで私を助けたの？ めっちゃめっちゃ危険だったでしょ？」



なんで私なんかを助けてくれたの？

影虎は返答を渋る。

本当は見捨てる方が賢明だと頭の中で結論付けていた。けれども彼女を助けたのは理屈に出来ない直感が働いたからに過ぎない。それが来なければ影虎はきつとミナを囮に自分だけで逃げていた。

自分は聖人君子にはなれない男だと影虎は人生の比較的早い段階で気づいた。

それは何故か。答えとしては簡単で、影虎自身が何もかもを完璧にこなす一貫した人間ではないからだ。

例え、人を助けることが出来たってその人と揃ってまた危機に陥ったら再びその人を守りきれぬ保証がない。そうなると怖い。

もつと怖いのは自分が恐怖に負けてその人を生け贄としてしまいかも知れないことだ。助けるなら助けるで、それを貫けばいいのだが、その行為を誓えない。自分が曲げられるのは嫌だから影虎は逃げてきた。

しかし、それはまだ小さな理屈で、まずは自分が生き残らなければという思いがあるから。自分が助けた人と死んでしまったら誰がその人を最後までこの世に繋ぎ止めるのだ、と。

そう想っからだ。

だが、これはただ自分が死にたくないと思っていることをさも高

尚なことのように置き換えるためにある。

とどのつまり、“全部引ってくるめた命”が愛おしいから。だから、救えるかもしれない人々を見捨ててここへ至っている。

これを正直に話せば春梅影虎という人間は破滅する。ミナを助けたのも気まぐれという使命感からは遠く離れた物が原因とは、彼女が影虎のことを幻滅するのは間違いない。

だというのに、嘘はつけなかった。彼女の沈んだ瞳がそうさせる。

半ば自分の行動に後悔と疑問を持ち合わせながら、それでも影虎はミナを助けたのは気まぐれで、今まで何人も見殺しにしてきたことを打ち明けた。

驚くことに……全て聞き終えた彼女の口から出た素直な感想は「やっぱり凄い」というもの。

「はあ??？」

影虎は予想の百八十度違ったミナの態度と感想に開いた口が閉まらない。人で無しとけなされるか、自分を助けた理由がその程度のことだったのかと嘆くかのどちらかと思っていたのに「ありがとう」の言葉まで出てきた。

「……とっても人間くさい。私にはないものよ。私はそういうものを見下して、無視して、押し殺すことしかやってこなかったから」

彼女は天を見上げる、曇っているの今星の姿も見えない。黒に薄く白色がかかった陰鬱な空だ。

「私は人間じゃなくて神様にでもなってるつもりだった。そう思い込んでた。何でもかんでも上手くいったから。今思えば私って凄いやつだった。こう見えても勉強も、スポーツも、やること成すこと何もかも、人よりもずっと良かった」

自信過剰に自画自賛、自惚れにナルシスト的発言。人によってはそう捉らえられるのかも知れない。

けれど、彼女が自らの優秀さを直視し誇るのではなく口に出すのに、影虎は違和感を感じた。

ミナの容姿は優等生めいたものがあつた。勉強は普通によく出来そうだし、運動オンチにもあまり見えない。あと誰にでも通じそうな類の優しさと美貌の二物も持っている。

だが、影虎とミナは出会ったばかりだ。まだ一時間も経っていない。影虎は自分が旅人で画家であるという基本的なことも伝えられておらずミナのこと知らない、何一つとして。

だというのに感じる違和感。彼女は彼女についてほとんど知らない他人でも感じれる位、そうとは自覚していなかったという事だった。

心が純粹過ぎて、真っさら過ぎて、無垢過ぎて、順応し過ぎて特別を当然としていた。それは広義では良いことだが狭義では危険な発想。

多分、彼女はそれに気づきつつあるのだ。

「やっと、その思い込みが馬鹿げた妄想だつて気づいた。私の中にナニカがいるんだ。それが私を縛ってたんだ」

きつと、ミナは怪人たちの手から人々を救おうとしていたのだろう。いや、出来ると信じこんでた。だが現実の違い、彼女はようやく気がついた。

ナニカがいる。優しい顔した怪物が、彼女を蝕んでいる。

「自分が自分でわかんないよ。なんで私はそんなことを本気で信じこんでたんだろ？ 何で私は自由じゃなかったの？ 何に縛られてたの？」

深呼吸を一つ。きつと、これが一番言いたかったことなんだろう事を口に出すために。

「私はどうして“私”じゃないの？」

それこそが、狭義による危険の兆候。彼女はそれに嵌まり、抜け出せずにいた。それは媚薬だった、それがもたらす高揚が“彼女”にとってのドラッグで、彼女は自分を殺していた。

彼女は正しいと思っていた。なにしろそれは広義においては好ましいことであるから。

「私、学校の皆が私のことをどう思ってるか言ってるのを聞いたこ

とがある。『凄いね』とか『尊敬しちゃうね』とか……。私はそれを聞いて嬉しかった。……。でも、気づくべきだったんだ。だれも“私”に触れてないって……！ 誰も……私がどんなことをやってきたかにしか触れてない……！！ 私、気づけばなんにもなかった！！」

影虎もそのことについて気がついてきていた。『優し過ぎるだけで彼女の思いがない』と。『個性がない』と。『彼女には“色”がない』と。

十人十色という言葉がある。影虎はこの四字熟語が好きだった。人間は自分の欲望<sup>キモチ</sup>によってこれに差が出ている。だから面白い。

が、ミナには色がなかった。純白より白く、宇宙より広大だった。“優秀”や“優しい”といったテンプレートだけ入口に貼付けられている。

“優しい”のは彼女の色ではなかった。これは単なる記号で、色にはなりえない。最初から優しい者なんていやしない。

影虎は知っている。優しい者にだって求めるものがあるのだ。彼女だって求めていた物があつた。無自覚のそれが逆に彼女の気持ち<sup>キモチ</sup>を殺した。

「私、あなたが羨ましい。自由なあなたが羨ましい。ちゃんと人間らしいあなたが……羨ましい……」

「……………」

「ごめんなさい、とだけでミナは話を切って影虎の横を通りすぎて先へと進む。」

『無自覚の欲望ほど恐ろしいものはない。それはきつと自分を怪物にするよ』

そう影虎に言ってくれた旅人がいた。棒つきれにパンツだけぶら下げて旅していた青年。名前は聞いていない。

彼は今どこにいるだろう、と影虎は思う。今の彼女にこそ彼が必要だった。

影虎でも言えるのは彼女はもっと早くにこの場所へ来るべきだったということだけだ。

だが、今の彼女には影虎しかない。影虎はあの白い怪人たちに襲われているミナを見た時に起こった勘を正しく解釈する。

彼女を救おう。

本当の意味で彼女を救い出す。それが影虎がやりたいことだ。

CHANGE I'M NOT ABLE TO BE MYSELF (後書)

最近凄く投稿が早いなあ

やっぱり早くディハーツに変身させたいというのもありますが、それよりも早く彼女の問題を解決させてあげたいのが大きいです。

次回、いよいよ……いよいよ……いよいよ……!

変身ベルトが……!

## CHANGE↷CASTLE DORAN↷（前書き）

時間の都合でライダーテスト（映画編）は延期します。あと、キリのいいところまでとしたらベルト登場までいきませんでした。予告までしててすいません。

なぜ時間がないかと言うと、また絵を書いていたからです。路線変更で、ヒロインが一人増えたのと影虎のイラストが適当でかわいそうだったので書き直しです。なんか、影虎がやたらとB-1チックにかっこよくなつてしまいました。下手くそなので総合すると駄目なんです。

あと、凧です。彼女自身が言っていた「気合が入るとハチマキ絞める」という設定から全開モードの絵も書いてます。

俺は絵は最低点ですが、上達だけは早いらしく前よりはずっとマシになってます。

では、本編！



もうそろそろのはずだ。

ミナは確信を持って歩を早める。渡の話が本当ならばこの獣道のような悪路を二十分くらい進めばだいたいの山の中腹くらいたどり着く。そこにミナの祖父、赫塚音也の自宅がある。

不思議なことに初めて祖父に直面するといつのにミナは緊張感を一切感じていない。なぜなら、本当ならずと前に会いに行くべきだったからだ。

すまない想いがある。ミナが祖父に会いたい思いを感じているのと同じように、音也も孫娘に会いたいと思っっているだろうから。

何故、行かなかったのか。影虎に言われてからずっと、ミナは考えている。

ものすごく、答えは簡単な気がしていた。誰にだって分かるくらいに単純明解なものでありそうだった。第三者が自分を見ていたら『何故分らない？』とヤキモキするか呆れるかするのだろうか。その予想は容易なくらいだ。

だが、それで自分にどうしろと言っの？ とミナはそうやって名も無い者に聞きたかった。

出来ないものは出来ない。それをただ冷淡にやれと命じるのは、酷と言うか、不条理だ。

考えても見てほしい。

例えるなら誰も考えたことがない、誰も手がかりを得たこともない世界の法則があったとして、それを何の取り柄もないような普通の人間がある日ふと気づくことがあるだろうか。

解析というのは難しい。それは偉大な先人たちの重い足踏みを見れば分かること。

それなのに、解析対象というのが自分というなら尚更ではないか？ 元から“そう”と定まっているものの矛盾点を解き、新たな定義を打ち立てる。それは誰も触れたことのない新たなジャンルの物に挑戦するより苛酷な道だ。

更に、否定的な自分ネガティブもいる。ようやくの思いでその解答に辿り着けたとしても、変化を恐れて直視できず取るに足らない愚問だと棄てる者がいるのだ。

それはちょうど数多の真定義を発見し名声を高めながら、プロレマイオスの天動説を否定し地動説を提唱するとたちまち反感を買い宗教裁判にかけられたガリレオ・ガリレイのように。

彼の敵は世界を支配する宗教だった。ミナの敵は外ならぬ自身、自分という世界を永遠に支配するつもりだった傲慢さ、プライド……強い自分だ。

ミナがイメージした弱い自分。髪はしつちやかめつちやかのボサボサで、服は薄汚れ、肌はカサカサ、浮浪者のような体臭に、崩れた顔。あれはどうしてなのかわかった。

強い自分にいつもいつもなぶられていたのだ。

『アンタハマチガツテルンダカラ、ダマツテナサイヨ』

『ヨワインダカラ、イキテルイミガナイジャナイノ?』

などと中傷を浴びせ続け、好き勝手に蹂躪し好き勝手に略奪した。強い自分はその肥大した醜いプライドをそうやって保っていたのだ。

何が弱いだ、ある意味では自分の方が脆いくせに。もう一人の自分から奪い、黙らせることで、ぶくぶくと肥え太っていったただのくせに。

何も出来ないわよ、と弱い自分が言ってきたのは今までの報復か、それとも違うものか。

違ったものだとしたら多分、哀れみだ。もうとつくに強い自分の支配は終わりをつけておくべき状況なのに、なおしがみつき権限を守ろうとした愚かな行為を、弱い自分は見透かし哀れんだ。

自分は確かに他人には優しく接せられていたのかもしれない。だが、自分に対してはとんでもなくきつくあたっていた。

まず、やらないといけないこと。それくらいは分かったような気がした。

「おい、開けた場所だぞ！」

前方からの影虎の声。

獣道が狭くなつてからはライトを持った影虎が先導していた。影虎のライトが先を照らしている。ここだけ人の手がかかっているように、不自然に林が途中で途切れていた。

息はとつくの昔に切れ切れになっていたが、ミナは自分に鞭打つて厳しい斜面を登る。折れた枝や鋭い葉などで踝辺りが傷ついたが気には留めない。

何か鈍い音が聞こえてきた。ミナは先をいていた影虎も追い越し、林を出る。

山の中腹、拓けた場所。そこにあつたのは……

「……………!？」

黒い体肢に大きな翼、煩く寝息をたてる伝説上、空想上の代表格とも言える巨大な生物。

ドラゴンだ。

「うお……………!! なんだこりゃあ……………!？」

ミナに遅れて到達した影虎もこの黒いドラゴンを見て仰天した。

ミナは急いで影虎の口を塞ぐ。運良く、今は寝ているらしいが起こしてしまつたら大変だ。

どのファンタジー物のゲームや漫画、その他の物語内でもドラゴンというのは強大な力を持つ物として描かれている。たくさんの怪物・怪人を見てきたがこれの力は恐らく別格だ。

「……OKOK……なんてことねえ、ただのドラゴンだ。さっきは龍も見たんだ、ビビることねえさ」

気を落ち着かせるためそんなことを小声で呟く影虎。ただのドラゴンなんてこの世のどこにもいない、と思ったミナだが余計なので口には出さなかった。

どうでもいいことかもしれないが、影虎はこのドラゴンとは違う龍を見たらしい。この少年も数々の危機をくぐり抜けてきたんだなとミナは感心する。

さて、このドラゴンだ。

ミナは自分の記憶に間違いがあるとは思えなかった。地図まで書き出してもらい覚えたのだから、正しい道は選んできた。

なのに、祖父の家はなく有るのはこのいびきをかくドラゴンだけ。これでは速やかにここから離れる必要がある。

いや、あの街に襲来してきた怪人たちとこのドラゴンはどうも違うような気がした。怪人たちは呑気に眠ったりなどしていない。なにしろ呑気や平和という言葉とは真逆の存在だったからだ。

しかし、このドラゴンはあまり危険性が見られない、比較的に大人しそうだ。もし起き上がったとしても襲い掛かってきそうになく、逆に甘えてきたりじゃれついてきたりしそうだった。

「う……………」

「おい、ミナー！」

意を決する。影虎の制止も振り切ってミナは黒いドラゴンへと近づいた。

この黒いドラゴンは胴体部分が見当たらなかった。このドラゴンを武装するように建物、否屋敷が建てられているのだ。

ミナには父親・渡が嘘について全然違った場所を自分に教えろとは思えない。だから、きつとこのドラゴンは祖父に関係するものなのだ。ちよつと信じられないが、このドラゴンに建てられた屋敷の中に住んでいるのかもしれない。

それに近づくとつれてミナの警戒心は反対に解かれていった。

感じたのは懐かしさ。記憶が曖昧になるくらいに昔、ミナはこのドラゴンと共にいた気がした。その時はもう一回り、一メートルくらい小さくて、顔を優しく撫でてやるとつとりしたように目を細めて。

「……キャッスルドラゴン？」

頭にふと浮かんだ単語でドラゴンを呼ぶ。

このドラゴンはキャッスルドラゴン。とても大人しくて優しいドラゴン。

『しゅじゅつ』が嫌な時はいつもいつも私を慰めてくれたよね

……？

キャツスルドランは目を覚ます。後ろでミナをハラハラした顔持ちで見っていた影虎は飛び上がったが、ミナはまるで動じずにドランの顔を撫でる。

ドランは喜んで、ミナに頬すりしてきた。その様は、数日ぶりに愛する主人に会い喜ぶ忠犬のようだった。

「中よ、おじいちゃんは」

呆然としている影虎にミナは呼び掛ける。影虎の表情ときたら最高で、ライオンとハムスターが戯れるのを実際に見ているかのようだ。いや、力関係でいえばそれ以上なのだから間違っではないか。

「おい、大丈夫なのかこいつ？ 急に狂暴になって襲い掛かってきたりしねえ？」

「大丈夫よ」

本当におかしなことを言うな、とミナは思う。

「このキャツスルドランは元々はグレートワイバーンっていう竜族最強の怪物をファンガイアが捕らえて、移動戦闘拠点としてその身体に城を築城したものよ。キャツスルドランとなった後はかつての獰猛さは失われ、その見上げるばかりの巨体には似合わず温厚な性

格となってしまうてるの。というのもドランのウィークポイントである角を拘束する「枷」であるホーンロックがあつてね。そのホーンロックにキバットによる封印の呪術がかけられていて、城主はドランを意のままに操ることができただけで副作用として、本来凶暴であるドランの性格が温厚な性格に変化しているの。だから、襲い掛かってきたりしないわ。シールドランの合身時とかに、一時的にホーンにかけられた呪術がとれて、凶暴化する場合もあるけどね」

「ちよっ!! ちよっと待てよッ!？」

堪らず、といった感じで影虎が口を挟む。

「何よ?」

説明に熱が入っていたミナは引き戻されたような感覚がして、それが凄く不快で彼女にしては珍しく嫌悪感を前に出して返事する。

「いや……最初から最後まで、何言ってたんだ?」

「え……………?」

「グレートワイバーンだとか、キバットだとか……あとシールドラとか、封印の呪術とか……!! そんな訳わからねえことだよ!」



「グレ……なんですって？ 私、そんな……そんなことなんにも言  
ってないわよ!？」

言ったなら最低聞き覚えくらいはあるはずだ。だが、“グレー  
トワイバーン”“シュードラン”“封印の呪術”、この三つに関し  
ては全くそれがない。

「いや、確かに言ったよ!! 凄く“饒舌”だったよ……まるで…  
…まるで……」

有り難くも言ってくれなかったが、その続きはミナにも分かった。

まるで、この世の人間じゃないかのように。

そう、ミナが感じた空白。影虎がこのドラゴンは襲い掛かっては  
こないかと聞いた後、しばらくの間、ミナの意識はこの世にはな  
かった。少なくとも、見て取れるところには収まっていなかった。

膨大なものの海に浮かんでいた感覚があった。いきなりそこへ突  
き落とされた感じではなく、じんわりと足から浸かっていったよう  
な。

馬鹿馬鹿しい。危機的状况がずっと続いていたせいで精神が変調  
して一時的におかしくなっていただけだ。

そう思い込みたかったが、そうにもいかないことが一つだけあっ  
た。

“キバット”。影虎の言った四つの単語の中でこの単語だけは知

っているのだ。

聞いたのは今日。ミナの屋敷で誕生日前夜祭をやっていたところにブラッディ・ローズが鳴り、そこから奇妙な蝙蝠が飛び出してきた。ミナの父はそれを“キバット”と呼んだのだ。

一つ、確かなものがあるとなると認めざるを得なくなってくる。影虎の言う“別の世界にいたかのようなミナ”の発言は正しい。ミナは正しいことを言った、全く知らないような単語を混じらせて。

自分に特別な力があってそれを狙う悪党がいて、それを救ってくれる救世主様がいて。

まさかとは思うが自分に本当に特別な力があって、それを狙ってあの怪人たちはこの平和な世界に現れたのだろうか？

だとしたら、影虎が自分を救う英雄か。確かに危ない所で助けてくれて新しい道を示してくれた。とても頼りがいがあるし、もしかすると恋心の芽はもう芽生えているのかもしれない。

だが、足りない。感じる絶望の予感は大きすぎる、彼の力だけでは足らなすぎる。

別に影虎が駄目だとかではない。ただ、これに勝てるような光をもたらししてくれる人がいるとは思えないのだ。

「……とにかく入ろう、考えてもラチがあかねえことだ。そんなの、さっきからずっと起こりっぱなしだしな」

影虎の前向きさが有り難い。自分のことだが、ミナはこの議題に

対して謎を追究する気にはならない。弱い自分がそれを全力で拒否している。

ミナは心中で影虎に謝罪しながらうなづいた。

「……守るからな」

そう言った彼の決意はミナにはまだとどかなかつた。

CHANGE↷CASTLE DORAN↷(後書き)

今回のキャッスルドランの説明は公式サイトからの引用です、すいません。

あと、地球の本棚を無意識発動させたミナのある感じ、なにかに似てるなと思ったら、「フルメタル・パニック！戦うボーイミーツガール」でカナメがECSの理論的欠点などを無意識に言ったシーンとそっくり……………( . . . ; )

CHANGE♡HEARTS SYSTEM♡(前書き)

連日投稿♡♡！

あの人が！あの人が！あの人が！登場！！

ようやく変身シーンが見えてきた……！！

## CHANGE{HEARTS SYSTEM}

初代仮面ライダー、一号……つまり、本郷猛をサポートし、続く二号と三号ライダーV3からもずっと見守ってきたという奇妙な職業柄か、その老人は今までに何人もの仮面ライダーを見てきた。

五代雄介という男がいた、彼は本来争い事には向かないたちをしていて、人間の命をいたずらに奪う怪人たちを相手にしても暴力を振るうのを内心嫌がっていた。

津上翔一……いや、沢木哲也という男がいた、彼は自分の運命をなにか巨大なものに握られていて、自分の居場所をずっと探していた。

城戸真司という男がいた、彼はひょんなことから戦いに巻き込まれて、その戦いを止めるために動いては拒絶されていた。

乾巧という男がいた、彼は自分自身を一番に恐怖し他人を裏切ってしまうことを恐れて一匹狼を演じ、その恐怖を振り払うために戦っていた。

剣崎一真という男がいた、彼は世界と人間の運命という大きなものに翻弄され、大切な友人を殺すか殺さないかという選択を突き付けられた。

響鬼と名乗る男が古代からいた、人を守りながらも遙かにしえからの肉体を有したことより人に「鬼」と呼ばれ蔑まれた歴史を背負う。

天道総司てんどうそうじという男がいた、彼は天の道を行き総てを司る男だった。がたつた二人の妹を守るためなら世界を敵に回すような者だった。

野上良太郎のがみりょうたろうという少年がいた、抜群に不運で脆弱だったがやるべきことはやってみると傷つきながら戦っていた。

左翔太郎ひだりしょうたろうとフィリップという二人の探偵がいた、彼らはお互いに異なる性分を持ち、一時は仲たがいはしたりもした。

火野映司ひのえいじという男がいた、彼は「どこまでも届く腕、力」を欲しながらそれを枯らし、戦う意味さえ、自分の命の価値さえ忘れていた。

……紅渡という男がいた。今は父の奏名をかりて赫塚と名前を変えている。天才バイオリニスト紅音也の息子で愛に生き戦った男だった。この老人もその戦いを傍観していた。

もうかなり昔の話もある。本郷猛の戦いは今から四十年以上も前になる。

だからこの老人は誰よりも苦悩の色は知っている。多くの者もはや人間とは呼べない怪物じみた力を持った存在となったことにシヨックを受けていた。

最たる例が本郷猛や南光太郎といった者たちで、彼らはもう普通に愛する者の手を握ることも適わない。必ず一歩引いたところになければならない、そうでないと逆にその人を傷つけてしまう。

ライダーだけではなく怪人となった立場の者も数多くいた。乾巧、紅渡などがそれだ。彼らは人と接することが出来なくなったわけ

はないが人を傷つけてしまいかもしれない自分に怯えていた。

もうすぐでおそらくある少女がこのキャッスルドランの中へ入ってくる。その少女が今回仮面ライダーに選ばれた存在だ。

誕生日を明日に控えたまだ十六歳の少女だ。青春を謳歌しておくべき可憐な少女で、学校ではとてもモテているのだと言う。なかなか優秀な人物でスポーツ万能でもあるそうだ。

戦士としては理想的だ。それに、今から誕生しなければならぬ力は特殊過ぎる。彼女以外にその力を使いこなせる者はいないだろう。

彼女は特別なのだ。特別すぎてそれが偶然に生まれたものではないと分かる。それこそ神の意思が込められているように。

ただ、嗚呼、神よ。

何故それほどまでに異端の力を彼女に押し付けたのか。これではいやがおうにも不条理なことしか言えず、嘘でも“託した”とは言えない。無責任で邪悪な行いだ。

十年前、老人たちは彼女の体をいじくり回したが、あれはそうしなければ彼女が生きられなかったから。

けれど、きっとその善意の行動もナニカの手の上で操られていたことになるのだろう。

戦士の道は等しく険しいと言うが、彼女が進む道は桁違いに厳険としている。なにしろ、数多の戦士たちが受けてきた試練の全てを



一身に受けなければいけないのだ。

まだまだ未熟さが残るいたいけな少女に耐えられる望みはかなり薄い。

だが、同時に信じてもいる。人は決して一人ではない。

本郷猛と十文字隼人、風見士郎にこの老人がついていたように、

南光太郎に敵となっても繋がっている兄弟がいたように、

五代雄介に頼れる協力者がいたように、

城戸真司に共感はずとも認め合った仲間がいたように、

響鬼に自らを慕ってついてきてくれた少年がいたように、

二人の探偵になんだかんだ言っても頼れる相棒おたがいがいたように、

火野映司に自分の欲望を思い出させてくれた赤い腕の怪人がいたように。

潰れてしまいそうになろうとも、支えてくれる一緒に居てくれる、戦ってくれる。そんな頼もしい者は必ず現れる。

そして、その者たちのため自分の夢のため、戦い続けられる。それがどんなに長い年月が過ぎようとも、いつまでも変わらない仮面ライダーなのだから。

キャットスルドランの内部は本当に屋敷だった。天井は高く、巨大なシャンデリアが飾られている。壁にはタペストリーがかけられ、その下には立派な暖炉。ミナの自宅である赫塚家の屋敷よりずっとずっとピカピカで綺麗だ。

が、入ったミナと影虎を出迎えたのはそんな豪華な空間の景色ではなく、

「HAPPY BIRTHDAY!!!!」

という、大きな大きな祝福だった。

ミナはあっけらかんとした、影虎は反射的に両耳をおさえた。両方に共通したのは驚きのあまり飛び上がったことだ。

この広い空間を狭苦しいと感じさせるくらい多くの人間が集合している。数にして約百人強。何人かの仲が良いというか、まるで“派閥”という形のグループを作っている。一見ただけでは共通点がないような人々だ。上は八十くらいの老人から下は十代に見えるような少年少女。当然性別もバラバラで、日本人じゃないような容姿の者も数人いる。

入ってきた二人をいきなり歓迎したのは最前列にいる人物だ。高そうなスーツを着てロングヘアの秘書らしい美女を引き連れていく。手には真っ白なホイップクリームがタップリかけられたホール

ケーキがあつた。

他にも声をかけようとした者は何人もいたようだが、この男の声は全てを掻き消すくらいに大きなものだった。

「おつと、そういたい所なんだが……厳密に言つとまだ少し早いのかな、里中君!!」

「はい、現在二十時四十八分。あと三時間と十二分ほど早いですね」

腕時計で確認をとつたりはしていない。ただし、適当なのではなく適確な時間なのだろう。この話の流れを予測して事前に時間をチエックしていたのだ。

有能な補佐であるらしい。が、どうしてなのかそれに皮肉っぽい響きが織り交ぜられているようだった。

「結構！　しかし、“誕生”には違いない！」

何百人も入ることが出来る大ホールの舞台でオペラを披露するような絶大な音量。

年は陽気な行動のせいでいくらとでも取れそうだが、シワや白髪の数から大体五十後半から六十前半といったところ。ミナが高校二年の十六歳なので、祖父と父親が二十歳くらいで子を成したというなら考えられる。

「おい、おつさ……!!」

この屋敷には他にもたくさんの人がいるがこの豪快な偉丈夫がミ

ナの祖父なのか。そう影虎が耳から手を放して詰問しようとする。

だが、一步踏み出した影虎をミナは止めた。ミナは祖父に会ったことはないが音楽の教科書等で顔は知っている、目の前にいるこの男はそれと合致するものがなかった。祖父ではないことは最初から分かっていてる。

ミナは祖父に会いたかった。そして、聞きたいことが今浮かんだ。

「おじいちゃんは、どこ？」

彼に変わってミナは聞く。

ここに集まっている人々はミナがシヨッピングモールで見た人々のように怯えている様子ではない。

つまり、ミナや影虎のようにあの怪人たちから逃げるためにここに集まったのではないようだ。

ということは何か目的がある。逃げるのではなく、抗うためにこの人々はここへ集まっているのだ。

この人々は……推測だが、あの怪人たちがどうして現れたのかを知っている。知った上でこの場所へ集結している。

ただの人々じゃない。ミナの祖父、赫塚音也も。

この場所……もっと詳しく言えばこのキャッスルドランを提供しているのだから恐らく、この百人を越える人々のなかでも権力がある者。そして、この緊急事態下でこうやって動いているというのが

考えるとただ者ではないはずだった。

この人々はなんでこんな場所に集まっているのか、それを知っている。

もつと言えは……抗うための術を知っている。

ミナには抗う気はもう失せていた。だが、どうということなのか、何が起こってみんなが殺されてしまったのか、その原因は知りたかった。

「おおう、よくぞ言った。流石、わが息子の娘だ。おい少しどいていろ、ミナはこの俺に会いに来たんだからな」

奥の方から声がした。そして、人の海がぱっくりと割れて道が出た。発言力はとりわけ高いらしい。

ただ、その発言に少しおかしいところがあった。内容ではない、「誕生日おめでとう（ハッピーバースデー）」と言った男のような大きな声でもない。

声質だ。おじいちゃんと呼ばれるような年になった男のものにしてはどう考えてもおかしいものだった。

「さあ、あとは俺に任せろ。これから先は九年間の空白を埋めるための愛の時間だ」

「ハハハッ！これはこれは。年配者の言うことなら従わなければ」

やはり生まれる違和感。あの大声の男が赫塚音也を年配者と呼ぶ

のを聞くとどうしても違和感を拭えない。

大声の男が下がり、ミナと音也の二人は対面する。

「さあ会いたかったろうミナ！俺もお前に会いたかったぞ。俺の胸に飛び込んでこい！」

羽ばたかんとする天使かのように手を大きく広げる音也。

ラテン的なその誘いにミナはどうすることも出来ず、固まった。血の巡りさえも止まったかのような感覚だ。当然、そんなアクティブな真似は出来ない。

赫塚音也。全盛期は二十数年前でミナが生まれるより前にバイオリニストの世界から姿を消した。実年齢は誰も知らないが、最低五十歳にはなっている。

だが目の前に現れたこの男はどうみてもそんな年には見えない。その容姿はまるで若々しさが爆発している青年だ。冗談抜きで、二十歳過ぎくらいにしか見えない。

影虎はよく分からない表情だ。もうなにがどうなっているかさッパリ分からないから好きにやっつけていてくれと理解を諦めているよう……そういう比喻がピッタリだった。

だが、質の悪いドッキリではない。「ネタバラシ」と書かれたボードを持った老人が控えていたりはしない。

正真正銘、この青年に見える男がミナの祖父、赫塚音也だ。

なぜなら、その若さに溢れた顔が音楽の教科書に載っている白黒ではなく綺麗なカラーの写真と全く一緒なのだ。

だが、その写真が撮られたのは赫塚音也がバイオリニストの世界から去る直前、凡そ22年前だ。それから全く風貌が変わらないなど、普通は考えられない。

「ん？ どうしたんだ？ 遠慮はいらないぞ、思い切り抱きしめてこい！」

更に手を大きく広げる音也。もはやYの字になっていた。

「え、あの、おじい……ちゃん……なのよね？」

ミナは奇妙な話を思い出していた。ネットで見つけた話で赫塚音也は世間に姿を現していた十年間くらいの期間全くと言っていい程風貌に変化がなかったという話だ。

と言うことは赫塚音也という男は32年間まるで歳をとっていない計算となる。

その異様とも言える事実気づいたのか直感的に感じとったのか、ミナの横で影虎が妙な表情を作るのをやめて警戒する。

その動きに気づいたのか、

「なんだ、知らない顔があるな。ひょっとして……ミナの“奴隷”か何かか？」

今になってようやく影虎の存在を視認したような口ぶりで音也は言う。いや、本気で今気がついたようだった。

「せめて、せめてクラスメートと言ってくれえ!!」

反論する影虎の言葉は夢が一つ砕け散ったかのようながっくりした言い方だった。

「お前、男だろう？　なんだミナの身体、ボロボロでついになかなかエロいぞ。男ならきちんと女の子を守れ、『女性に気を回すのは紳士の嗜みだ』、分かってるか？」

「こ、これは違う！　さつき山を進んでる時についた怪我で、確かにエロいけど……!!」

そこまで言ったところで影虎はフリーズした。顔をしかめ、眉間にシワを寄せ、腕組みをして何かを考え始めた。

既視感があり、それがなんであったか思いだそうとしているような。

「女性に対して一番やってはいけないことは？」

頭の傾きを元に戻して、影虎は音也に突然の問い掛けをした。ミナには全く理解できない行為だった。

答えはすぐに返ってきた。

「恥をかかすこと。そんなことをする奴は俺は男とは認めないな」



返答した後になって音也は驚く。

「坊主、どこでその言葉を聞いた？」

「……いや、風都って街の探偵が……ちやらんぼらんだが芯のある男からって……」

「……あの坊主か。生意気な、誰がちやらんぼらんなんだ、誰が」

影虎は“坊主”という単語を聞くと音也との会話を打ち切った。どういった訳かは知らないが、この青年のような男を赫塚音也と納得したようだった。

それが謎で、ミナは首を傾げる。

大きな「ううん！」という咳ばらいがあった。またあの大声の男だ。

「すまないね。積もる話もあるだろう。しかあし！！今は残念ながらそう長い間戯れているわけにもいかない！！」

里中君！！と大声の男は再び秘書の名前を呼ぶ。

「はい、鴻上会長」

里中と呼ばれた秘書が応じ、何かを準備し始める。

しかし、ミナと影虎の注意は『鴻上会長』という名前のほつに向けられた。

鴻上。有名な名前だ、およそ日本で暮らしている人間でこの名前を聞いたことがないという者はいないくらいに。日本を支える二つの巨大な会社、その内の一つが『鴻上ファウンデーション』。あの大声の男はその会長、鴻上光生こうがみ こうせいなのだと言う。

確かによくみたらミナにとっては見慣れた顔だった。学校の帰り道にこの鴻上会長が「素晴らしい！」と連呼しまくるCMがかかっているテレビジョンがあるのだ。

「はい、社長・副社長のお出ましです！キャハッ」

まずは青いピニル生地の素肌を多く露出させた服とチョココンと可愛い帽子を被った女性が踊り出る。

「さて、ビジネスの話しましょうか」

里中が何かしている間に二人の男が前へ出た。一人は敏腕営業マンという感じの青年で、もう一人はラーメン屋がよく似合いそうな中年だった。

「こつこついうものです」

自分よりもずっと経験の少なそうな少女に、まるでかしづくかのようにして丁寧の名刺を差し出す若い男。

ミナは「はあ……」と生返事してそれを受け取る。その名刺にはこう書かれていた。

『スマートブレイン社 副社長 村上峽児』

ミナはまたも驚きで目が点になる。スマートブレイン社。スマートブレイン社だ。

鴻上ファウンデーションは確かに日本を代表する大会社だ。しかし、海外まで手広い経営をしているのがスマートブレイン社。二大会社のもう片方。世界一の規模を持ちエリートとある素質を持つ者でしか入社できないという。

その副社長。奮える経済力は一国の軍事予算を軽く凌ぐ。

あの明るいキャラクターの女性は一万人の応募のなかから選ばれる社長補佐、スマートレディーだ。スマートブレイン社のイメージキャラクターでもある。

隣にいる男は名刺を出さなかったが、おおよそ見当がつく。世界一の大企業を支配するトップ、花形社長だ。

「そう、畏まらないでください。弊社にとって貴方が唯一の頼りな人ですから」

頷くが、身体の強張りは取れなかった。何か粗相でもやらかしたら恐持てのSPが現れて殺されそうだった。

「話を進めさせてもらおう、いいね？」

次に現れたのも同じような組み合わせの男二人だった。

若い方の男は滑舌がひどく悪くてよく聞き取りずらかったのだが、人類基盤史研究所、英語に直したのを略して『BOARD』という通称の民間研究機関に所属する研究員らしい。

スマートブレイン社や鴻上ファウンデーションと比べるのはかわいそうだが、これまた有名で、テレビで特集が組まれていたのを見たりしている。

人間が発展してきたのはダーウィンが掲げる進化論だけでは説明できない部分があるとして、人間のみならず様々な動植物の進化のメカニズムを研究しているのだという。

「今から君に渡したいものがある。我々の九年間の全てを結集させたものだ」

烏丸という研究者が言う『我々』とはBOARDだけを表すものではなさそうだった。BOARD含めスマートブレイン社、鴻上ファウンデーション、その他にも沢山の人の力が何かに結集されてきたらしい。

(それを……くれる？　なんで私なんかに？)

以前の自分は凄い奴だった、と認めたミナだったがさすがにスマートブレイン社などの大きな力が頼ってくるなどおかしいと思う。

勉強は出来るが、難関大学に楽に通れるかと聞かれたら結構厳しい。スポーツも同じようなものだ、一つを極めるとするならそこそこのレベルになるという程度。

大体、この状況でどんなことが“抗い”になるのか。

「出来るかどうかは貴方次第。私たちは貴方に賭けるしかない」

現れたのは女性。女性、としか言えないのはその人物が顔や腕などを包帯でグルグルにまいて隠しているからで、強いて言える特徴はサングラスと帽子を被っていてくろずくめであることくらいか。

包帯の女はスマートブレイン社やBOARDの人々と違い、名乗り出たり名刺をくれたりはしなかった。謎と知的な香りだけを放っている。

この女性はミナよりもむしろ影虎のことが気になったらしい。包帯に隠された瞳がじつと影虎を見ていた。

「春梅影虎。風都に行ったのね？」

「え、まあ旅の途中でふら〜と……一週間くらいで出たけどなあ……」

「鳴海探偵事務所、そこにいる来人……フィリップという探偵は元気にやっていたかしら」

疑問形ではない問い掛け。努めて何気ないように包帯の女は下を向きながら聞く。

「え？ いや、鳴海探偵事務所には行ったけど……師匠とそのお弟子さんがいるだけでそんな人いなかったと思いますけど」

「そう」

もう違っていたのね、と包帯の女は呟き、それから沈黙した。影虎の不思議そうな顔を見るに彼は嘘はついていない。鳴海探偵事務所とやらにそのフィリップという探偵はいなかったのは事実だった

のだろう。

それを知って、包帯の女は悲しそうだった。フィリップという人物と関係があるのは分かるが、どうしてそれで悲しむのかまではわからない。

すると、包帯の女性の後ろからもぐらたたきのモグラみたいに二人の男性がニユツ！！と登場した。

「「ど〜も〜」」

いや、二人というよりは一人の男性が影分身でも使っているかのようなだった。それほどまでにこの二人は似すぎている。

片方は落ち着きのある茶色のスーツを纏い、もう片方は明るさを描く白いスーツを纏っている。白いスーツを着た方は電車の運転手が被るような帽子も被っていた。

「この発端は特異点である良太郎くんが世界の歪みに気づいたことから、始まったんですねえ」

と茶色い方。

「調べてみると、新たな世界がいきなりいくつも生まれ、この世界の記録、とりわけ仮面ライダーに関する世界の記録がその世界になだれ込む事態が発生していたんですねえ」

と白い方。

「電王の記録も失われ、程なくほぼ全ての仮面ライダーの力やシス

テムが脱落<sup>ダウン</sup>。更にある占い師の占いで、なだれ込んだ情報の内怪人たちの情報がこの世界に襲い掛かってくると出まして、さあ大変」

と茶色い方。

「そこで世界の記憶を永遠に記録する『地球<sup>ほし</sup>の記憶』から仮面ライダーのデータをダウンロードし、仮面ライダーの記録を黄泉返させる『ハーツシステム』が開発されたんですねえ」

と白い方。

「ですが、それには“記憶が失われる前の地球の本棚”にリンクする人物が必要……しかも、“時”も変わっているのでそれに影響を受けない“特異点”である必要もあつたんです」

と茶色い方。

「そして、その条件を満たしていたのが貴方。貴方だけが『ハーツシステム』を完全に使いこなすことが出来るんです」

と白い方。

「お分かりいただけましたか？」

最後は白い方と茶色い方同時に確認を取る。

「……………」

ミナの意識がこの世から飛んでいっていた。

分からないなんてものじゃない、仮面ライダーという単語以外は  
全て理解不能だ。

「……分からなくて結構。私としてはこの世界が終焉するといふな  
ら望ましい。世界は美しいうちに終わりを迎えなければ」

ミナの後ろに人が立っていた。どことなく研究者のようだったが  
黒のスーツを着ていて、肩には彼に似せた不気味な人形が乗っかっ  
ている。

ミナはまずは後ろに人がいたのと、その人形と目があったしまっ  
たのとで二回驚く。

「しかしね、ドクター真木。ゼロから始まる命もある。それを君は  
見たはずだ!!」

宥めるように（それにしても熱かったが）、鴻上会長が言う。こ  
の真木という研究者は鴻上ファウンデーションに所属しているらし  
い。

「分かっていますよ。終わりは素晴らしいものですが、まだ始まっ  
てもいないものを終わらせるのは最も美しくありませんね……」

ドクター真木は眼鏡をくいつと持ち上げて、次いで人形の眼鏡も  
持ち上げた。

「会長、終わりました。最終メンテナンス、オールグリーンです」

作業は終わったらしく里中が戻ってきた。手には大きなトランク  
ボックスがある。



鴻上会長はそれに微笑みながら触れる。

「さて、そうやって開発されたのが、君を含めた『ハーツシステム』！しかし、全ての仮面ライダーの力を復活させることはできなかった！そこで君だ！我々は君に全てを賭けた！！『ハーツシステム』を見直し、『戦う力』と『世界を渡る力』、そして“繋げる力”を備えた！！」

会長は「それが……！！」と勿体振った。そのせいで、ヒラリと華麗な身のこなしをする者にそのトランクボックスを奪われる。

奪い取ったのは音也だった。里中は警戒心が意外にあつたので鴻上会長の手に渡るのをじっと待ち伏せていた節がある。

この役は俺にやらせろ、とでも言う笑みをする。鴻上会長は肩を竦めて、それを許した。

ゴホンゴホンと、音也も勿体振る。かねてからこうしようと思っていたかのように。

「ミナ、誕生日プレゼントだ。一日早いけど、細かいことは気にするな」

パチンツとロックを外してトランクボックスを開く。

中にあつたのは一本のベルトと腕時計、アンテナの形をした物。ベルトのバックル部分には最新型のスマートフォンを少々大きくしたようなものがある、それには何かの紋章が表と側面と裏、合わせで百以上描かれていた。そのバックルの横には金のアンテナが立つ

ている。

「『ディハーツール』はもう渡してあるはずだ。それとこのDウオッチとレシーブレイガン、ライダーライバツクル。この四つを合わせて……」

音也には悪かったが、音也の説明はいらなかった。

ディハーツール、Dウオッチ、レシーブレイガン、ライダーライバツクル。この四つを総称して、『ディハーツドライダー』。

そして、その力を借りて変身し、戦うのが他にもない“あの戦士”だった。

「仮面……ライダー、ディハーツ……」

CHANGE♡HEARTS SYSTEM♡(後書き)

今回、描写をこれでもかとおつける私にしては珍しく、控えてある部分があります。

「一気にまくし立てるようにつることぞ」「どついうこと?」「と考えてもらいたかったから……ですが、あまり上手くいかなかったなあ……」

もっと上手くなりたいなあ……他にもいろいろ技を入れているつもりなんですが、誰も分かってくれてないんだろーな……はあ……」

## CHANGE FOR MINA (前書き)

延期していたライダーテスト（超初級編・映画編）を開催したいと思います。

問一、仮面ライダー初の劇場版のタイトルは？

解答〓あれだ、馬だ馬。馬が確かに出てきたんだよ。いや、その前の馬のない奴か。なんだっけ、凄い馬……じゃなくて簡単な名前なんだけど、馬が出てないのは分かってるんだけとなあ、馬が出てない方って分かってるんで正解ってことでもいいんじゃないでしょうか。

コメント〓駄目

問二、バツタの

は？

解答〓すいません、昨日見たばかりなんです、例のシーンは思い出したくありません

コメント〓……………正解扱いにしておきます。

問三、仮面ライダー二十周年を記念して制作された仮面ライダーのタイトルは？

解答〓仮面ライダーZZ〓究極なだけで原点には還れない〓

コメント〓詳細はツツコミません。何故そこまで分かっているかが出ない言うのは後日話し合います。

問四、仮面ライダーシリーズ初の巨大化した仮面ライダーは？

解答＝一号。そのあとにコピー仮面ライダー

コメント＝正解です。あと、「J」についてはHERO SAGAを読むように。あながち間違いではありません。

問五、映画版仮面ライダーアギトのタイトルは？

解答＝シャイニングとエクシードに「持っていかれたあああああ  
！！！」

コメント＝ギルスが切られたのは右腕。左足が先で右腕は弟のためです。

問六、映画版仮面ライダーファイズのタイトルは？

解答＝PARADISE TEN THOUSANT（首だけライ  
オは何を思う？）

コメント＝それ、見たいです

問七、映画版仮面ライダーブレイドのタイトルは？

解答＝あまつ、天音ちゃああああんっ！！

コメント＝始さんの叫びですね、わかります。

問八、3D公開もされた映画版仮面ライダーダブルのタイトルは？

解答〓 ルナジョーカーは狙い過ぎました、すみません。

コメント〓 何故タイトルが謝罪になっているんですか。

以上！

## CHANGE FOR MINA

ミナの夢に出てきた戦士たち、『仮面ライダー』。その中でも最も鮮やかに存在を感じられたのが、『ディハーツ』という名の戦士だった。

『仮面ライダーディハーツ』。その名はミナが知っていた。巡り会うべき力、自分の中の欠けた部分にピッタリと嵌まる欠片

ミナの口角が徐々に上がっていく。ミナの意味ではない、ミナの意識は残らず、『仮面ライダーディハーツ』の力を生み出すものに向いていた。

自分のなかのナニカが、長年の間何もせずに居座っていただけだったのについてその重い腰を上げ、動き出したような。その感覚がミナの存在を震わしている。

傲慢も傲慢にならず、憤怒も憤怒にならず、怠惰も怠惰にならず、嫉妬も嫉妬にならず、強欲も強欲にならず、暴食も暴食にならず、色欲も色欲とならない。七ツの大罪をもそれは正当化させる。

『コレゾ モトメテイタ チカラ ヨ。ヨクヤツタ ナ、セカイ  
”ドモ ヨ”』

強いミナの発言でも、弱いミナの発言でもない。ただただ大きい、世界よりも大きい。そんな膨大という言葉の器を満たし充たし、溢れに愛触れる破壊的なまでの意思のカタマリ。

それがミナに偽りの充実をもたらして、ゾクゾクとミナの心を震

えさせた。

誰も逆らえず、世界さえも抗えない巨大な意思。実質的に、総ての支配者であるその事実の名は『運命』。

運命がミナが存在を引き寄せる。このディハートドライバーが自ら引力を発揮しているかのように。『私はこのために生まれてきたんだ』と刷り込ませるかのように、運命というものはミナを丸呑みにする。

運命という漠然としたものはそのうえで命令する。

さあ、この力を握め。それ以上の価値などさっさと捨ててしまえ。この力はお前のためだけにある。さあ、早く 救うためにお前は生まれてきたのだろう ……？

「ッ……！！！」

が、そんな大きなモノが『ライダーバクセル』に触れる直前、ミナに敗北した。すんでのところでミナが自分の身体を取り戻したのだ。

強いミナではなく、弱いミナが。ただし、彼女の力だけではない、強いミナも弱いミナに力を貸したのだった。

そのうえで、影虎だ。

「いたッ！イタッ！！痛いじゃないか、いきなりなにをするんだ坊主」



音也がトランクボックスに挟まれた左手の中指を息を吹きかけて冷やした。影虎がトランクボックスを唐突にボタンと閉じたのだ。

「るっせえよ。何もかもが足りないんだよ！ 説明くらいしてやれねえのか？ こっちはもう驚きすぎていい加減にしてくれってこまできてんだ！」

言葉とは裏腹に影虎は至極落ち着いていた。声を荒げているのも混乱して動転してという直線的攻撃性ではなく、犬の威嚇や唸り声といった類の静かな敵意のものであった。

茶色と白のそっくりな二人の説明。ミナはまあ理解しようと思っていたが、影虎はまともに聞いてもいなかった。

きつとめんどくさくなった、理解するのを投げ出したという理由からではない。あの二人が真剣に理解させようとしていなかったからだ。

ちゃんと真摯に取り組んでくれなければ、分かるうとする努力を見せてやるものか、と影虎は意固地に態度に表す。

ミナは沢山の怪人・怪物たちに遭遇したり、不思議な超常現象を目の当たりにしたが、おんなじような状況下に容れられたのだ。影虎も一体全体何がどうなっているのか分からないだろうし知りたい気持ちもあるに違いない。

ただし、これは我を無理矢理に通そうとしている我が儘じゃない。この口調はどこか別のところに思いがかかっているようなものだ。

ミナはそれについてと、影虎の性格ならもっと熱が籠っていても

おかしくないのに冷静でいるのは何故なのか、この二つが分からなかった。

「だが、いくらなんでもいきなり閉めるな。びっくりしたぞ」

「話はまだ始まってもしないのにこんな訳わからねえもん持ってくんなんてことだよ！」

ダンダンツとトランクボックスを平手で叩く影虎。行動自体は親が欲しい物を買ってくれなくて地団駄を踏む子供のようにだったが、それは成熟した冷静さからの物。

「ふむ。オーオー、成る程俺は分かったぞ、『説明くらいしてやれねえのか』か。いやあ、おじいちゃんとしては複雑だ」

「は……話の腰を折るんじゃないやねえよ糞野郎！」

揺らぎようがないと思われた、影虎が（ミナにとってはだが）何故か一旦赤くなってぐらつく。しかし、なんとか堪えて体勢を立て直す。

「こら、“頑張って報われた”としたら御祖父様になる俺に対して糞だのなんだの言っな、家庭が荒れるぞ？」

あんよを始めた赤ん坊が転んでしまったのを見るかのようにクスクス笑う。それは音也の見た目の年齢がたとえ青年くらいにしか見えなくても、経験を重ね年を重ねた老人が若者をからかうようであった。

「それだ！ それだよ、それ！ あんたどう見たってあの人を坊主

と言えるような、ミナのおじいちゃんだった年には見えねえんだよ  
！」

今回は特に揺らぐ、証拠物件を突き付ける検察官のようなズバ  
ツとした言い方で影虎は指摘する。

影虎の言う通り、音也は六十くらいの年になっているはずなのに  
この男は若すぎる。人気タレント事務所の最前線で働けるような若  
さとフレッシユさがあった。

それなのに自信満々でミナの祖父をやり、後ろめいたものなど一  
つもない。赫塚音也の名を語る偽者ならば、もう少し老けたメイク  
や行動をとる。

だからミナは、恐らく影虎も今更この青年が赫塚音也であると疑  
うことはなかった。よって、この問いだ、何故赫塚音也の見た目は  
青年のそれと変わらないように見えるのか。

まるで、その命が普通よりも遙かに長命で、真つ当な人間ではな  
いかのよう。その例えが出るのだ。

「……………まさか、何も知らないってわけなのか？」

赫塚音也が声の色をガラリと変えてそう質問する。今までの会話  
の相手であった影虎に向けたものではなく、そのやり取りを見てい  
たミナに。

目的語のない曖昧な問いだったが、ミナは首を縦に振る。この人  
々に比べたら自分は何を知っているのかという自信の無さからくる  
ものだ。

「馬鹿な、だったら何故ここへ来た。十年分の想いを、デイハーツの力を受け取りに来たんじゃないのか？ 戦うため、ここへ来たんじゃないのか？」

「ち、違い……ます」

とても申し訳なく、ミナは謝罪する。戦いに来たなどと嘘でも言えない、ここへ来たのはその真逆、恐怖に負けたからなのだから。

「私、逃げてきたんです。怪人たちが怖くて、誰も救えなくて、足がすくんで。それで安全な場所までいこうとお父さんから教えてもらっていたおじいちゃんの家……」

「……一つ分からないな。何故お前は俺の家の場所を知っていてやって来なかった」

その最後に疑問符はくつついていなかった。ただの作業のように、さっきまでの愛すべき孫に話すような愛の情熱もなく。

計測器の値を見るかのような目に一気に覚めていた。

ミナは考える、がそんなに簡単に出るのであれば悩んでいない。これは今のミナに与えられていた命を賭してでも解くべき難解な命題なのだ。

十秒、答えが出なかったというだけで、赫塚音也はその会話を打ち切った。

「がっかりだな。渡おれのむすこに九年間も育てられていて“この程度の進歩”  
と言うのは。こんなつまらないのが俺の孫ってのは」

何処だろう。

頭だろうか、頭蓋骨だろうか、顔だろうか、肩だろうか、胸だろ  
うか、心臓だろうか、肺だろうか、臓物だろうか、腹だろうか、足  
だろうか。

何処にこの槍は突き刺さったのだろうか。

頭はクラクラする。脳はガンガン響いている。鼻柱を折られた感  
じがある。叩かれたように体は斜めに。ナニカが突き抜けていった。  
吸い込んでも吸い込んでも足りない。身体の中に鉛の塊が投入され  
たよう。拳で殴られたように胃液が喉まで逆流する。真っ直ぐに立  
てない。

その槍は一撃で赫塚ミナの命を脅かす。

「

」

ああ、音也が何か言っている。ミナの耳にはまるで入ってこない  
けれども。

待つて、私はここにいるの …… ここにいるの、ここに、ここに ……

違うわ、何かの間違いなのよ …… 幻滅しないで、見捨てないでよ、目を逸らさないで ……

頑張るから、頑張ってきつと出来るから、みんなの期待を私は裏切らないわ、お願い、嫌いにならないで ……

嫌われたら、私にはどうすることも出来ないの …… みんなにもとめることしか、私は出来ないのよ ……

わ、私が死んじゃう …… ヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダ …… 私を殺さないで、私に興味を持って私を見て ……

私は …… みんなの中でしか生きていられないの、それが最高なの、それ以外に価値なんかないのよ ……

私には目を逢わせられないんだ、自分から動くなんて全然出来ないんだ、だからみんな私を見てよ …… !!

好きになつてよ …… !!

「俺はこいつが“気になる”んだよ!!」

影虎はそう叫ぶ。ミナはその言葉に導かれ、現界した。

赫塚音也が数メートル向こうで振り返ってこっちを見ていた。遊びあきた玩具にまた違った遊び方があると気づいたような目をしてこちらを見ていた。

影虎がミナの前にいる。体勢は自然体のままなのに右手だけ前に突き出したポーズだ。

「会ったばかりだけど分かるよ。ミナはこんなんじゃ駄目だって。このままじゃ、こいつは“自分”を楽しめねえ」

「だけどな、と影虎はミナに視線を一瞬だけ向けて、“たたき付けた”。

「だから“俺の勘”は告げたんだけ、こいつを助けてやれって。単に助かるためじゃねえ、“俺は俺を楽しむために”ミナを助けると告げたんだけ。それは一番に俺を“生かす”ってことだからな」

更にその発言はここにいる全ての人間に向けられる。

「同じだろう、あんたらも。つまらない？ そうかもしれない。けど、このままで終わらせていいわけねえから俺たちはいるんじゃないか。人は一人じゃねえ、分かりきったことだろ」

「……………」

赫塚音也は初めて影虎をまじまじと見つめた。影虎はそんなことはどうでもいいとばかりにこうしめくくる。

「俺はこいつを救ってみたいと決めたんだけ」

ミナの口から「影虎……」と出た。意外に、彼女が彼の名前を喚んだのはこれが初めてだった。

初めての物が心の中から沸きだしてくる。今まで怪人やオーロラなどの初めて見た未確認の物を見たときに浮かんだのは恐怖だけだったが、今あるこれは暖かくて心地好い。

恋心、とまではいかない。けれどこれが自分に足りないものだったんだとミナは気づいた。

音也もその気持ちを抱いたのだろう、影虎を見る目が変わる。取るに足らない一般人で、ミナにとってはそう必要としないという見方からミナという存在を語る上で決して省くことができないという目に。

「そついや名前を聞いてなかったな。なんて名前だ？」

問う必要を感じたという調子で、赫塚音也は影虎の名前を聞く、確認する。

「影虎。……上の字は教える気はねえよ」

ミナに名乗ったときと同じ理由だっただろうが、ひそかに反抗の



色も含んでいる。

「成る程、お前が春梅影虎だったか……渡が気に入るわけだ」

音也は陶然と自然にさらりと伏せていた影虎の本名を言うてのける。

「……………?？」

どうしてその恥ずかしい名前を知っているのかと影虎は言葉に出さなかったものの疑問なようだった。

音也は妙に納得したような 僅かに清々しさを混じらせた顔をして「何でもない、ただの超能力だと思ってくれ」と断った。

「渡が……ミナに何も話さなかったわけだ。あいつはあいつで父親となろうとしたんだな、生意気に。参った、これはミナにとってはかなり辛い。“あと一年”がなかったってのは予想外にでかかったな」

「あと一年?」

ミナはそれに引つ掛かりを感じた。“あと一年”がなかったというのは、裏を返してみれば“予想ではあと一年後だった”ということだ。

もしかして、この人々はこういう事態を何年か前に予測していたのかもしれない。

そういえば、とミナは思い出す。あの茶色と白色のそっくりな二

人が言っていたことの中で「ある占い師が怪人たちがこの世界に襲い掛かってくると予言した」というのがあった。

その占いの結果をこの人々は信じたのか。それでそれに備えて今まで準備を整えてきたのか。

そして、その“準備”にはミナも含められていたのだ。来たるべきその時に人類が光を失わないように残しておこうと決めた希望にミナがなるべきなのだった。

それをそうと決めるのは増長ではなく、ミナの「そうしたい、そうだったらいいのにな」という思いからだった。

『失望』の逆は『期待』や『希望』ではない。望みを絶たれたと書く『絶望』だ。

音也に「つまらない」と言われてミナがショックを受けたこと、これは揺らがない事実だが、同時にそれは揺らがしてはいけないことだった。ミナはその失望の中にある希望や期待に応えなければ、いや応えたいと切に願った。

そのためには、

自分はもっと違う自分になっておくべきだった。

ミナはもっと早くにこの若い若いおじいちゃんに会いに行くべきだったし、そう思うべきだった。

理屈たにんじゃない理屈わたしで。

自分わたしは自分わたしと戦っておくべきだったんだ。強く強く、激しく激しく、一直線に一直線に、ひたむきにひたむきに、何があっても終わらせられないくらいに。誰わたしよりも自分で。

自分は自分を持っていいんだ！ 他人のことを自分があれこれ考えるのはおかしかったんだ！！ 他人が私を好きに思つか思わないかというのは他人が決めること ……！

（私も、決められるんだ！）

そうミナが“心”を巡らせていると音也は少々彼よりは背の低いミナの目線に自分のそれを合わせるため腰を下げる。

おじいちゃんだ。音也はミナの祖父にあたる人物だった。

今までミナを支配してきたものはすっかり鳴りを潜める。今までミナの生き方で生まれた矛盾から逃れられたのを喜び、肩の荷が下りたというように満足した退幕だった

新たに決まった主役フシバケンミナはその独壇場で羽根を広げ、踊り狂う。

「ミナ、影虎に礼だ。“相手に悪いとか嫌われるかもとか”は無しだ。そんなもん考えるな、邪魔なだけだ」

言われるまでもない。

相手を思うのは自分だ。それ以外の何者でもない。相手がどう思うのかばかり気にしていたらキリがないし、臆病になってしまつて全然自分が出せない。

相手を思うからこそできることだつてある。信頼したいと願うから相手を振り回してやりたいとも思う。

そこに障害などはない。

「……………」

何を考えているのだろう、自分は。ミナはボンヤリとそう考える。

なんで数十秒前には大きなショックを受け、生きていたという実感さえ失っていたというのに何故今となつてはどのでもいいと言えてしまえそうなのか。

このキャツスルドランの中に逃げ込んできたと言つてもまだまだ安心の出来ない絶望的状况には違いないのに、何故悲観的な見方が出来ないのか、輝いてしか見えないのか。

ああ、何故。あんなちつぽけな理由でしか人を助けようと思えなかったのか。“良いように思われたい”だなんて、からっぽにもほどがある。自分になんにもないものだから、他人に欲を求めらだなんて、

(つまらない！)

(ああもー！ つまらないつまらないつまらない！！)

何なの私、つまらないにもほどがあるってもんよ！！ 求めるなら他人の中にじゃなくて、自分の中に求めてしつかりとそれを刻みなさいよ！！

一発ぶん殴ってあげましようか？

まあ、自分自身を殴りつけるだなんてなんだか変な性癖があるみたいだから実際にはやらないけど。それくらい今の自分はちよっと前までの自分にムカツ腹たててるってことだ。

何？ よくもまあそんなからっぽでヘナチヨコでデカイ顔が出来ていたものね。ある意味感心だわ。

寄越しなさいよ、支配権。これからは私の番よ。あなたなんかのメンツなんて守ってやったりはしないから。ポッコボコに叩きのめしたあとで盛大に鼻柱を折ってあげる。

そんなくらい、これからは思いつきり笑って思いつきり泣いて思いつきり叫んで、思いつきり自分自身をたのしんでやるだから！！  
わたしはわたし

変わってしまえば、なんともない感じにミナは思えた。変わってしまえば、なんともあっけない。味気無いわけではないが、すこぶ

る変わった。

弱い自分も正しく自分なんだと思い知らされたあの恐怖。音也から言われた生まれて初めて受けたような強烈な非難の言葉。そして、影虎の言葉で生まれた熱い心。

それらがこれから何事も起きなければ永遠に続くと思われた強いミナの支配を打ち滅ぼした。本来は長い時を経てようやく変わるものなのに、僅かな時間でやってのけてみせた。

それはきつと、ミナの心の中にあつた正しい強い自分が強大であつたからだ。芽生えてしまえば、負けはしないものだったのだ。

そして、影虎だ。

ミナにこの変化を結果的にもたらしてくれたのは紛れも無く、この影虎だ。

世界で一番ありがたかつた。溢れる感謝と好意を抑える術をミナはまだ持っていなかったし、そうして抑える意味がわからなかつた。

「影虎……………ッッ!」

ヒシツと彼に抱きつく。ミナが感じる影虎の体温は暖かかつた。これが人の暖かさなのだと、ミナはある意味初めて知つた。

「……………ッ!? !? !?」

影虎はフリーズ。

だが暖かい。ああ、暖かい。太陽の恵みよりも心地好い。

後ろでギャラリーの立場にある百人を越える人々の内の何人かが冷やかすような声を上げる。抱き着く影虎の身体が瞬間接着剤もかくやというほどに急激に固くなる。

ただし、構うもんか。

「ありがとう……!!」

こうやって近くで見ると、なかなか影虎も捨てたものじゃないことにミナは気づく。格好よいと評価してあげるべきなのだろう。

「う……うん、アハハアハ……」

ええい、とミナは力を更に強めた。いつもミナは抱きしめられる立場だった。初めてなのだから、存分にやっついていい、それくらいの権利は認めてもらおうと、我が儘。

それを受けて影虎に変化があった。

「み、ミナ……ちょ……!!え……意が……バ、ぢがら……!!」

何か苦しげに言っている。そこはかたなく何故か苦しそうだ。

こんなに彼の目は飛び出していたらどうか、とミナは力を強めながら記憶を辿る。ミナの耳には同時に「ミシミシミシッ!」という音が届いている。

ああ、そうかとミナは自分なりの解答を得る。

彼は優しいから、これ以上“受け取るだけ”というのは嫌なんだろう。ちょうど今までの私のように。

だが、それは間違いだ。これは後ろに在るべきものなのだから、自分は影虎に並々ならぬ恩があるんだから、彼には甘んじて受けさせなくちゃいけない。

恩返しされておけばいいんだから、泡を吹く必要なんてない。

分からないようならば、一発ぶん殴ってあげようか。

「ミナ……ギ、ブ……」

カクンツと影虎の頭が真横に落ちた。といっても座ったまま急速な眠りについたようになってしまったというだけで、リアルに首が落ちたわけじゃない。

断っておくが、だ。

それに気づけば、後ろのギャラリーの声も黄色いものから白いものへと変わっていた気がした。ミナには最初の冷やかすかのようなものもなにゆえだったのか判別できなかったのだが、この変化も理解できなかった。

「あれ？」

抱く力を弱めると、影虎は糸の切れた操り人形のように、床へと



脱落した。

ベクトルは間違いなく下を向いたものであるのに、物質とは反した何かは上へと上っていったようである。

ミナは訳も分からず呆然と「なんでだろ」と考えるばかりであるが、その何かというのが影虎の意識であるのは言つまでもないことだろう。

CHANGE FOR MINA (後書き)

断っておきますが、ミナはまだ影虎にまっつたく惚れてはいません。彼女と彼は結ばれるとしてもそれは遙か先のことでしょう。

ミナはハーレム系ラブコメの主人公並に鈍感ですから。これも一種の行き過ぎた友情行為なんですよ、多分。シャチパンダヤミーかつ！！ まあ、三角関係以上にはなりません。

さて、次回いよいよミナは真相を知ることになります。

何が世界で起こっているのか、どうすればいいのか、ディハーツとはなんなのか……！！

乞うご期待！

CHANGE〜LEGEND of RIDER〜（前書き）

長いよ？言っておくけど一万六千文字以上だからね。自分の記録更新だ〜〜！！

だが、これでも押さえた方さヤツホウ！！一日で書いたぜヤツホウ！！

目が疲れたぜヤツホウ！！

今さらだけどf a t e / z e r o面白かったぜヤツホウ！！雁夜おじさん、殺し潰せ！！

ではでは……始まりだヤツホウ！！

ミナの背後にはあわれ犠牲となったというべきか、いい思いが出来たその対価を払ったというべきか判断に迷う事態の……やはり餌食となったというべき影虎が横たわっている。

確実に言えることは影虎は不運だったということだ。それだけの言葉で済ますのは少々かわいそうな気もするが、それ以外にはなんとも言えないのだから仕方あるまい。

女の子の握力と腕力で、世界中を旅してそこそこ丈夫に鍛えられている男を昏倒させるまでいくものだろうかと音也は考えるが、渡や深央からミナはスポーツもよく出来ると話で聞いていたの思い出す。

音也は影虎へ合掌。

ミナは気づいたことは気づいたのだろう。初めてミナの好意を受けたのがあの春梅影虎というのは音也にとっては複雑な心境だった。

音也もスキンシップは激しい面がある。しかしだからといって、あの強烈な締め技を目の辺りにしても挑むようなことは出来なくて、音也はミナを丁寧にかわした。

そして、音也はミナに誰彼構わずに抱き着くのは止めるように釘を刺した。ミナのような美少女に抱き着かれたら相手が「もしかして気があるんじゃないか」と勘違いしてしまうかもしれないからだ。音也はもっぱらその逆で物理的なダメージを度々負っていたが。

ミナは今ようやく生まれたに等しい。自分の中に初めて生まれた本来前に在るべき物をどうやって扱えばいいのかについての知識は赤ん坊のようなものだ。これから、沢山学ばなければならぬ。

もし一人では無理だったとしても、ミナには影虎がいる。

音也が持った影虎の第一印象は失礼な話で“空気”だった。ミナは渡から全てを聞いていて、それでもなお恐れを振り切ってやって来たのだと思っていたから、音也の視線に影虎が映っても音也はまるで気にしなかったのだ。

だが、ミナがまだまだ不完全な状態であることに幻滅し立ち去ろうとした時に音也の評価がガラリと変わった。

この影虎が持っている考えは、まさに自分たち 仮面ライダーを助け導いてくれた頼もしい友人や協力者たちのものと同じものだった。

ヒーローも完全じゃない。音也自身はそうでもなかったが、彼の息子の渡についてはこれが強く言えた。

倒せない敵がいる。敵わない問題がある。越えることの出来ないような壁がある。

仮面ライダーという戦士が幾度も衝突したこの困難。戦っているのが本当に仮面ライダー一人だけであったなら、幾つか……いや、全ての物語が最悪の終わりで幕を閉じていたろう。

だが、どの戦士も最悪などという終わりを迎えてなどない。それは彼らの回りに彼らを支えるものがいたから。

『人は決して一人じゃない、それは当たり前のことだ』

そう影虎は言った。

影虎は見るにまだ十七くらい。音也の“十分の一も”生きていない。

まだまだうまれたての赤ん坊であるくせして生意気に、と音也は苦々しく笑う。影虎の言うことは全く持って正しいことであるのだ。

更に『あんたならもそうなんだろ』ときたものだ。率直に言えば正にその通りなのだから、音也にはなお一層影虎がおもしろく思えてきた。

今ここに集まっている者の多くは歴代の仮面ライダーを支えてきた協力者……或いは仮面ライダー本人だ。その弟子であったり親戚縁者だという者もちらほらという。

音也は影虎の名前を尋ねたが、本当はその必要はなく音也には彼の名前が半ばわかっていた。

『春梅影虎』

その名前を音也は息子・渡から聞いていた。渡がバイオリン作りの材料探し……を名目とした世界中の仮面ライダーに関係するあらゆる人々を探し出す召集運動をしているときに出会った少年だ。

まだ若いのに学校にもいかずに、その時は仮面ライダーオーズ・火野映司を探していた渡と出会った場所が当時内乱が勃発していた

紛争地帯だ。

何人もの無関係な人達 時には自分をも巻き込んでまで要人を殺すという狂信的かつ狭心的な爆破・自爆テロなどあたりまえ日常茶飯事。

普通に国民が暮らしている市街地にまでライフルやら自動拳銃、バズーカ、ミサイルランチャーなどで武装した兵隊が徘徊し、巨大かつ高火力の砲身を持つ戦車のキャタピラの音がキュラキュラと脅迫文のように続いている。

ただでさえ気の休まることがないのにそれに加えての食糧難。酷いレベルでいうと、僅かな小麦粉に大量な泥を混ぜて焼いただけの世辞にも人の食べるものとは言えないようなもの、そんな物を貴重な食糧として食べるしかない、そうしないと生きてはいけない貧しい人々がいる国もあるのだ。

そんな場所、まともな思考をしているものが飛び込むところではない。行こうとするのは、そう火野映司のような変わり者だけだ。

渡の話だと影虎がそこに来たのはその景色を目に刻み込むためなのだという。影虎は少年であり旅人であり、画家だった。

渡は「こういふ場所の風景が好きなのか」と尋ねた。返ってきた答えは「どっちか言っていると嫌い」で、本当は一目散にここから逃げたいと影虎は言った。

ならば何故危険で嫌いな場所と承知してこんな場所にわざわざ足を向けたのかと渡が問うと意外な答えが帰ってきた。

『自分はちっぽけだけど、腐りたくはない。こういう景色を見て、

ちゃんと怒れるか不安なんだ』

それはこう続く。

『だから来た。こんな場所でも何時かは好きになれる景色が広がる  
って願っていたから』

その台詞を聞いた時、渡は直感したんだろう、音也は共感を含めて考える。

きつと、ミナに足りなかったのは影虎だったのだ。影虎のような  
『好きになるための生き方』をミナは歩んでいかなければならな  
った。

ミナはそう、自分<sup>ミナ</sup>になるべきだったのだ。

最初に音也と渡でよく話し合って決めた予定ではミナが高校生に  
までなったとき、全てを話すはずだった。

しかし、渡がそうしなかったのはミナに自分も経験した燃え上が  
るような恋も経験してほしいと願ったからだろう。

ミナに足りない物を言葉にして言ってやるのは簡単だ。だが、簡  
単であるがゆえ心の奥底まで届かない。いざという時、こぼれ落ち  
てしまう。

きつと、渡はミナには影虎と共に乗り越えて欲しかったのだ。ミ  
ナが影虎と触れ合ううちに彼の心情や生き方に触れて、今までの自  
分がいかに自分でなかったのかを心の奥底から気づいて欲しかった  
のだろう。



それに、ミナの背負っている重圧は今までは均衡を保って実感して来なかっただろうが本来は特大のものだ。何しろ“全部”なのだから。その一つ一つがこれまで仮面ライダーたちを大いに悩ませたことなのに。

渡から全てを教えてもらっていたら、ミナは絶対に辛い思いをし  
ていたろう。

下手をすれば、それに堪えられなくなって、自暴自棄に走って自殺を試みたりするかも知れない。

しかし、そうならないための春梅影虎。

彼の人柄ならミナを支えてくれる、好きになってくれると渡は信じた。ミナもいつかそんな影虎に惹かれて恋心を抱き、それを支えにしてその冷たい事実を直視して立ち向かうだろうと渡は信じた。

だから、渡はミナには黙って影虎を赫塚家の屋敷に招待して彼女と彼を引き合わせようとしたのだ。

あと一年でミナは旅立たなければならぬといふのになぜよく分からなくて仮面ライダーと何ら関係のないようなごく普通の少年を屋敷に同居させようと考えたのか音也にはどうしても分からなかったが、これで合点がいった。

ただ、その“あと一年”が欲しかった。

十年間の九年目。それでミナの“準備”をするつもりだったのに、怪人たちの襲来は予想よりも早かった。計算上、どんなには

やくても“大進攻”は十年後と出ていたのに、これは大きな障害だった。

『仮面ライダーディハーツ』はまだ試験段階だ。

未確認生命体対策班実働部隊G3運用チーム・スマートブレイン社・鴻上フアウンデーション・BOARD・ZECT・ある組織が運営する月面基地ラビットハッチなどの経済力・技術力を投入し、天才・小沢澄子、烏丸啓、橘朔也、花形、シユラウド、真木清人、更には初代仮面ライダーの生みの親である緑川博士の孫にあたる緑川女史もこのプロジェクトに参加しているが、制作は難航している。

全ての仮面ライダーの力を百パーセント引き出す器となる仮面ライダーを作るというのがそもそも不可能に近いのだ。

九年で形に出来ている彼らは、本当に天才である。

ただ、もう少しで完成というところだったのは惜しい。メインプログラム・サブプログラムは見事完成しているが“ディハーツ自体”の調整がまだだった。

けれど、ミナの方はそんなものではない。ミナはこれからだというところだったのに、もう彼女は走りださなければ。

現実とはなんとなくうまくいかないものだろうか。あと一年、あと一年だけでもいいから全て遅くあつて欲しかった。その一年がミナにとって全てだっただろうと言うのに。

だが、“最悪”ではない。この状況は悲観するものしかないわけではなかった。

ミナと影虎は出会った。運命というものが全力でミナを踏み潰しにかかっているなら、この二人が出会うことはなかったはずだ。

まだ最悪ではない、最良とはなれなくても良い方向へ向かわせることは出来る。

音也はそれらに気がついた。だから、音也は後悔をもってミナに臨む。

「ミナ、本当に済まなかった。俺としたことがそんなことを忘れていたとはな。こんな坊主に問答されるとは、参った！ 殴りたければ殴れ！ さあ！」

渡がそんなことを考えていて何も知らなかったくせに“つまらない”などは。音也にとってそれは人生で一番の罪だった。

おじいちゃん失格もいいところだぞ、と心の中で音也は自身を強く責め立てる。

「いいわよ。目が醒めたし」

ミナの顔は笑顔さえしていないもののハツラツとしていた。今までのしがらみから抜け出し、暗澹たる思いが吹っ切れた、ということなのだ。

これは影虎の魔力のようなものだろう。この少年に触れ合うと思いがけずに気づかされるのだ。音也もそうだったし、ミナもそうだった。

ミナに何故個性がなく“つまらなかつた”かと言えば単純な話、彼女が求めるものが破綻または矛盾したものだ。だからというのが第一の元凶だ。

人にはそれぞれに求めるものがある。それは人によって違っていて、その種類とそれが満たされたか否かで、決まる。

求めるものが変わったり、満たされたり奪われたりで人の性格は変わるのだ。これは大人になっても同じこと……現に仮面ライダーの中には性格上の問題を持つ者も多くいたが、多くがそれを解消したり生き方を変えたりしている。鳥系グリード・アंकや園咲家、仮面ライダーサガ・大牙、スマートブレイン社員や真木清人など、逆の立場に居た者たちもわかりだ。

しかしミナの求めてきたものは矛盾し破綻したものだ。それを得るためには本当ならば自分も同じものを持たなくてはならなかつたのに、彼女にはそれがなかつた。

いや、それがないことでまず満たされるということがなかつたのだ。

ミナの存在がどのようにして生まれたかを考えればそれも仕方ないことだったが、影虎の言う通り、それでは彼女は彼女を楽しめない。

狂った歯車はいつまでたっても噛み合わず働かない。ミナという人間が動き出したことは一度もなかつたのだ。

そして、ミナは求めるものを一新した。正しく求めるというのがどういふことなのかを理解した。

求める心と恐怖する心を競わせることが出来る。ミナは……やはり強い性分らしい。

「お願いします。」

ミナは音也に深く頭を下げる。

「何が起こっているのか教えてください。沢山の大切な人達が死にました。なんでそんな目に遭わなくちゃならなかったのか、私は知りたいんです」

彼らのために、とは言わなかった。ミナはただそのことに腹を立て、自分が知りたいから聞いたのだ。

弔いなどではなく復讐のため。今のミナにとっては前者よりも後者の方が美しく聞こえるだろう。

戦うという意思の炎。全てを燃やし尽くしてでもやってやると強く聞こえるから。

「知れば戻れなくなるぞ、いいのか」

ガタガタツとミナの身体は震えた。きっとさっきまで体験していた恐怖を思い出してしまったねだろう。

三原修二という男は戦いに巻き込まれてもその事実から目を逸らし、仮面ライダーの力を手に入れてもその力を逆に捨てようとしたくらいだ。

仮面ライダーギャレンの力を得た橘朔也はそれでも戦うことに無意識の恐怖を抱いて戦うたびに身体がボロボロになっていった時期もあった。

戻れなくなるぞ、という脅迫は高校生の少女に対してあんまりなものだ。彼女の恐怖心は小さくはないみたいであると分かる。

けれども、

新たに生まれた求める心はそれだけに大きく膨れ上がっていく。それこそ恐怖を上回るくらいに。

彼女は一段と大きく　これが最後だというくらいに決定的に震えた後、声を張り上げて宣言する。

望みを　……。

「……戻るくらいなら進むわよッ！」

やっと手に入れた求めたいもの。それを捨てるなんて選択肢、考えられない。

恐怖を理解したうえで、平等な立場で擦じ伏せる。しかし、力任せに擦じ伏せても決して無視などはしない。片方が弱いからといって奪ったりしない辱めない、それももつともなことだと尊重する。

やるべきことをミナはついにやった。

もうこれで充分だ、充分過ぎるくらいだ。この赫塚ミナを孫にし

たことは十分に幸福だったということになった。

音也はそれを嘔み締める。

「……だそうだが、立花藤兵衛。あとは宜しく頼む」

ミナに全てを話すのは紅渡のはずだった。ミナを九年間育てていた渡こそ、それをミナに話す権利と義務があった。

だが、渡はここにはいない。

音也は自分の口から詳しく話したかったのだが、音也自身はそんなに戦ってきたわけではなく、見守ってきたわけでもない。自分では役不足だと音也は知っていた。

ミナに全てを伝えるのに一番適任なのはこの人物をおいて他にはいない。

初代仮面ライダー一号から今まで全ての戦いを四十余年に渡って見守ってきた“おやつさん”立花藤兵衛だ。

2

音也に呼ばれて出てきたのは音也とは違い明らかに歳をめした老人だった。

とはいってもヨボヨボとしてはいない。髪は全て色を失って白くなっており、深いシワが目立っているが生氣は微塵も失っていないかった。

「赫塚ミナ、直接会うのは初めてだね。私は立花藤兵衛という者だ、もうおじいさんの年齢だがやっぱりしっくりくるから“おやっさん”と呼んでくれ」

立花という老人は両手でミナに握手を求める。ミナも両手でそれに応じた。

老人の手は今だ強く血が流れているようでとても熱かった。八十歳くらいの老人のものとは思えないくらい。

“おやっさん”はミナと握手をした後に、確認するかのようになだ床に倒れている影虎を見た。

「今から全てを話すけれど、影虎君は気絶してて良かったかも知れないな……」

「え、なんでですか？」

ミナは反論する。『怪人にやられたダメージが今になってきいてきて気絶してしまった”影虎に対してそれはないのではないか？”というのがミナの主張だった。

おやっさんはなんとも言えないように「う、う……ん……」と唸った。

「あー……ここからは真面目な話なんだが……私は君のような困難



や問題を持っていた人間を多く知っている。君の父親をやってくれた、くれな……おつと赫塚渡もその一人なんだ」

「お父さんも!？」

「ああそうだ。彼らは弱かったわけじゃなかったんだが、それを周りの人間に明かすのは極力避けた……なんで分かるかい？」

「話したくないから」と………相手がショックを受けるから？」

今までのミナならばこの質問に対する解答は間違いなく『嫌われしてしまうから』だ。それも迷いなく答えるだろう。

渡も困難や問題を持っていて、それをミナに隠していた。そう聞いたミナ自身がショックを受けたから答えられた。

ショックこそ受けたが、それで嫌いになるかと言えばとんでもない。ミナの渡が、父親が好きだという想いに変わりはなかった。

あと話したくなかったについては言わずもなかも知れない。そういった困難や問題を抱えていた人々がそれに全幅なる誇りを持っていたとはミナには思えなかった。

「そうだ。影虎君も同じだ。ミナちゃんがそういった困難を持っていると知って動揺しないわけがない。……一人、そういった物を持つと知られ拒絶され……事実には押し潰されて死のうと考えた者もいたんだ」

結果誤解だと分かり立ち直れたんだがな、とおやつさんは補足する。

動揺するなど言い聞かせるのは時間の無駄だ。それを影虎に強制するのは酷である。

「だから、影虎君に伝えるかどうかは君が聞いた後で……」

「流されんなよ、ミナ」

ミナの後ろから影虎の声。影虎が気絶から立ち直って、起きていた。そこはかとなく、背中を労っているが、苦痛を顔に出すことなく立ち塞がる。

ほほう、と立花籐兵衛は感心を口にした。まるで頑張る子供たちを長年見てきているかのように慣れた賞賛。

「教える、最初にいったろ。こっちはもう訳が分からなすぎていい加減にしてくれてレベルまできてんだ。女の子の絞め技で伸びてる間に聞き逃すとか、ふざけんな」

強大な知りたいたいという欲望を丸裸にした言葉だった。

ミナは「技なんかかけたっけ？」とボケ倒す。ミナは母親の奨めで柔道もやっており基本は抑えている。だが、彼女にしてみれば絞め技などかけた覚えがないのだ。

とうとうミナは「抱きしめられたのを大袈裟に言っているだけだろう」と片付けてしまう。

「いい加減にしるよな。ここまで来といて、そっちがミナに教えるのを迷ってんじゃねえよ。」

「……………」

立花籐兵衛は凶星で痛いところを突かれたという表情を見せた。

ミナの抱えているものはそこまで大きいものであるらしい。そして、それには立花籐兵衛らここに集まっているものたちも少なからず関与しており、伝えることに罪悪感を感じているのだ。

影虎の、これは洞察力ではない。何となくなのдарう。言いたいことは**ずばずば**言うのは彼の美德だった。

「渡君が言ってた通り、面白い奴だな、君は。しかし……ミナちゃん、それでいいのかね」

ミナは別に影虎を見て確認したりすることや問いただすようなことを言ったりすることはなかった。

じつとミナを見つめる影虎の視線。プレッシャーに似たものが込められており、「当然だよな」とでも言外に含める影虎。

自分に特別な力があってそれを狙う悪党がいて、それを救ってくれる**救世主様**がいて。

さあ、ここまで来たんだから逃げるなどとは言ってくれないでしょうね、救世主様？

私は**姫**で貴方は**騎士**なのよ。そんな勇敢な戦士が特別な力に立ち

向かわなくてどうするの。守るべきお姫様に怯えていてどうするのよ。

助けてくれたんだから、ちゃんと責任は取ってよね

双方の返事は同一だった。

「ついて来なさい」

これがミナの。

「ついて来いよ」

これが影虎の。

「なんで影虎がついて来いなんて言うのよ。どう考えたってそれ、私の台詞でしょ」

つんけんと言う。ただし、ミナの口元は確かに緩み、笑みを作っていた。

ミナが言う通り、この場の主導権は完全にミナにあるべきだった。曰くミナには本人さえ知らない秘密がある。それを影虎にも聞かせていいのか、と立花藤兵衛は聞いているのだ。

影虎の答えは当然「ついていくぜ」だとミナは思っていたのだが。何故か影虎は真逆のことを言ってきた。

まあ悪い気はしなかったけれども、ミナは影虎が生意気に思えてきた。

影虎は「言ってみたかった」と言っていてふて腐れる。ミナは自分が影虎の立場ならそう言うだろうと何となく同意するが、表面上は呆れたようにため息をついてやった。

「いい？ 支えなさい、全力で。私が沈みそうになったら引き上げて、優しい言葉の一つや二つかけてやるのよ、拒否権はないから。分かった？」

そんなことにならないように強くあろうと腹をくくるあまりミナは必要以上に要求する。

以前の自分じゃ考えられないような暴言をスラスラと言ってしまうっているな、とミナは自覚して、おかしくて堪らなくなった。

酷いことを言っているとは分かっている。これから話してもらったことがとんでもなくぶっ飛んだ話である予想はついているのに、ミナは動揺するなその上で私を守って信じておけと命令しているのだ。

とんだ我が儘だ。

けれど、きつく言ったたびにミナの欲望は満たされていく。言葉にある信頼のさらにその中に含まれるものがとても清々しくって充実している。

影虎は裏切らない。裏切るわけがない。そう当たり前前に思えていた。

「仮面ライダー。その言葉に聞き覚えは……」

「あるわ」

ミナは呼吸するかのように自然に答えてのけた。

影虎はずっと黙って聞いておくだけだろうと思っていたのか横でビククリ仰天している。まだ「世界にシヨツカーという悪の秘密結社が誕生した」というくだりまでしか説明されていないし、質問もするようなタイミングでもなかったので驚いたのだろう。

333

長い付き合いなのだからそれくらい知っているでしょ、とミナは影虎を小突くがその後になって影虎と自分は実は会って間もないことを思い出した。

ミナは文句を垂れる影虎を「ごめん、ごめんってばッ！」と宥めて、立花に続きを頼む。

「いや……仮面ライダーを知っているとは思わなかった。渡君から聞いたのかい？」

「え……あー……その……」

ミナは口ぐもる。仮面ライダーという戦士たちは夢で確認してい

る。あれは予知夢のようなものだったのだろうか、その後も仮面ライダーに関連するような物を見るたびイメージは浮かんできていた。

立花は察したのか、この話題を早急に切り上げて本命へ。

「シヨツカーは強大な力を持つ悪の組織で、改造人間を次々に生み出し日本を征服しようとしていたんだ」

「おい、なんだかテレビ番組みてえな話だな」

「まあそうだな。しかし、シヨツカーには本当にそれだけの力があつたんだ。そして強い改造人間を生み出すには強い肉体を持つ人間が必要で……本郷猛という男もその実験体にさせられた。そうして本郷が改造され生まれたのが、始まりの仮面ライダー、一号だ。ふむ……まあ一部を除けばだが」

シヨツカーという悪の秘密結社というのは大分胡散臭いが、事実あつたのだろう。

そのシヨツカーが作った改造人間の内の一人が、仮面ライダー一号……人間のころは本郷猛という男だった。

「じゃあ、仮面ライダーって元々は敵の手下の改造人間だったってこと？」

「いや、改造手術の最中にシヨツカーの科学者だった緑川博士が本郷を助けてくれたんだ。……命懸けでね。」

「それで助かった本郷猛ってのはシヨツカー打倒に燃えて正義の味方・仮面ライダーとなって戦った……ってわけか」

影虎はこたつに入ってテレビをノンビリと見ているかのような調子で立花の言うであろうことを言う。

立花は朗らかに笑って頷いたが、ミナは責めるようにキツ！と影虎を睨む。

「ちょっと！ 何他人事みたいに言ってるのよ！」

「いやいや、誤解しないでくれよ。俺は冷静に聞いているだけだから！」

冷や汗をかいて首と手もブンブンと振って否定する影虎。ミナが「本当でしょうね」と詰め寄ると、影虎は高速で頷きまくる。

ミナには聞こえなかったが、彼女が引っ込んだ際に影虎はため息まじりに「良かったよーな……悪かったよーな……」ともらした。

「それが四十年前以上前。君達が生まれるよりも前から仮面ライダーの戦いは始まったんだな」

と立花。

「あの、仮面ライダーってみんな改造人間……なの？」

どうしても気になったミナは小さく拳手して質問する。

ミナが見た仮面ライダーたちの数は代表格と言える者達だけで二十人以上。総数は百人を越えていた。



だが、その中にはどうにも改造人間だとは思えない者たちも混じっていた。仮面ライダーファイズ・仮面ライダーカブトなどがそうだ。それらは完全に機械仕掛だったのだ。

「仮面ライダーは全て改造人間であつたわけじゃない。仮面を被り戦う者、それは全て仮面ライダーと呼ばれたんだ」

「……だー。やっぱ、よく聞いてもテレビの特撮番組にしか思えねえなあ……」

頭を掻きながらばやくように影虎は言う。

そんなことが自分たちが暮らしていた世界の片隅で起こっていたといつても悪いが具体性がない。曖昧なのでイメージができない。大体、四十年以上前の科学技術で人間を超人的力を持つ改造人間に作り変えられるというのはちょっと信じられることではない。

影虎に怒つたミナもそこは彼と同意見だった。

「君達に襲い掛かってきた怪人達が全て仮面ライダーたちと戦ってきた怪人たちだとしてもかい？」

ああそういうことなら、信じられるかもしれないな、とミナは考える。

あの怪人たちはどうみても普通じゃなかった。あんなものたちが実際に存在したのなら、世界はとっくに終わっている。

それは“立ち向かえる者”がいなければ、の話だが。

「……知っているだろう例を出してみよう。君達は一年と数ヶ月前ビルなどが突如消えた街『夢見町』を知っているか？」

影虎は申し訳なさそうに肩をすぼめたがミナは知っている。

ニユースで広くやっていったのだ。『夢見町』という街で車や建物、ビルなどが僅かの間消えうせたらしい。原因は解明されていないとのことだ。あと夢見町には確か鴻上ファウンダーシヨンの本社ビルもあつたとミナは記憶していた。

「あれは仮面ライダーの戦いによって起きたことなんだ。“オーズ”という仮面ライダーとグリードという怪人との戦いの」

「……あれが？」

俄かには信じられない。だが、ここに外ならぬ鴻上ファウンダーシヨンの会長である鴻上光生がいること、その説明が出来てしまう。

鴻上ファウンダーシヨンもその仮面ライダーの戦いに一枚噛んでいたと考えるなら、ここで『仮面ライダーディハーツ』の開発を手がけているのも分かる話だった。

「まだまだある。影虎君にも分かるなら『風都』だな。あそこには街を象徴する『風都タワー』がある」

「ああ、あつたがどっかの馬鹿がぶつ壊したらしいな」

風都。この日本で東京・大阪・名古屋などの大都市と匹敵するくらい有名な街。風と共生する街で、至るところに風車があり、その

街を象徴する巨大な風車が『風都タワー』だ。

まさか、と影虎は呟く。

立花はウンウンと頷いて影虎が予感した答えを言う。

「あれもだ。もっともアレは仮面ライダー同士の戦いの爪痕だったが」

ここまで具体的な例を言われたら何も言うことができない。風都タワー倒壊のニュースもミナの記憶上また“原因不明”だったのが何よりとなる。

イメージせざるを得ないだろう。

仮面ライダーと悪の組織たちの戦いは自分たちの知らないところで四十年以上も続けられていたのだ。

「成る程、理解理解……」

「で、だ。仮面ライダーってのがいたってのは分かったよ。まだまだわからねえことはごまんとあるぜ」

「そうだ、なんでも聞いてくれ。全て答えよう」

つまり、質問は自分で出せということだ。この立花という老人はミナと影虎がどれくらい知りたいと思っているのか推し量っているのだろう。

さて、いくらでもある。

「これらからどう選べばいいのかミナは数秒間迷ったが、まずはこれにすることにした。」

運命とかじゃなく、知りたいと思ったことをミナは聞く。

「おじいちゃんはなんであんなに若いの？」

自分に襲い掛かってきた怪人が一体どういうものだったのか、それは別に関わりがない。今の内は“そういう化け物たちなのだ”で処理することが出来る。

仮面ライダーデイハーツについては事の深層にある単語であると判断して今はまだ聞けない。今はまだ、聞く気にもならなかった。

「これは……仮面ライダーキバに関係する。君のおじいちゃんとお父さんはキバというライダーだったんだ」

「おじいちゃんと……お父さんが……仮面ライダー!？」

ミナの驚きは大きかった。自分の身内がまさに今話に出ている戦士だというのだから。

しかし、思いのほか早くその驚きは鎮まる。家族と屋敷で別れたとき、二人の様子はあからさまに妙だった。突然現れた怪人たちに驚きはしていたのだが、それは見慣れていたものが唐突に現れたというようだった。

それと、キバットとかいう変な蝙蝠と渡がファンガイアと呼んだ怪人たちを見た時……ミナの脳裏に仮面ライダーキバの姿が浮かん

だのだ。

「じゃあ、お父さんもおじいちゃんも改造人間に……!!？」

だとすれば、音也の異常な若さを説明することができる。音也だけではない。渡も年にしたら若すぎるのだ。

「いや違う。キバは改造人間の類じゃない。君は吸血鬼ヴァンパイアを知っているか？ キバに変身するにはファンガイアという種族である必要があるんだが、それがそういうものなんだ」

「ヴァ、ヴァンパイア!？」

ミナと影虎は飛び上がって驚いた。

なにしろ、出てきたのが吸血鬼ヴァンパイアである。“得体の知れない怪物”と言われるよりもこの伝説上の生物の名前は説得力がありインパクトが大きかった。

ヴァンパイア。有名なのはドラキュラ伯爵の話だ。人間の生き血を好み首筋に噛み付いて吸血する。弱点は意外に多く、ニンニク、太陽光、聖水、十字架など。あと不老不死であるという設定がくつつく場合もある。

嘘だと言いたいところだが、音也と渡の若すぎる容姿はそれで片付く。あと、渡の名を知るキバットというのもヴァンパイアを連想させる蝙蝠だ。

「まあ、ミナちゃんには半分くらいしかその血は入っていないようだが……」

立花は語るが、それだけではミナの気は落ち着かなかった。

吸血鬼の祖父と父親を持つということはつまりミナにも吸血鬼の血が混じっているということだ。それがどれくらい濃さであったとしても関係ない。僅かでもそういう血がミナの中に流れてる、それだけでミナは“異端”であるのだ。

確かにちよつと八重歯になっているかもとか、すぐ日焼けしてしまうのでUV対策は万全にしておかないといけないとか、臭いがキツイからニンニクは嫌いだとか、これといって信仰している神はないとか。

あれやこれや。

そんな、手鏡で歯を見たりしたりするミナを影虎はジッと見つめていた。

見苦しい様を見られたミナは恥ずかしさで赤面して尻すぼみぎみに「な、何よ……?」と問う。

「いや、俺結構潔癖症で、食事の栄養バランスとかもしっかり計算したり、身体を鍛えたりもしてんだよ」

「はい?」

いきなりの告白だ。しかも、かなりどうでもいいような部類に入る。

そんなことを突然言われてもミナには「へえ、ちよつと意外ね」

くらいしか言えない。それ以外になにがあるのかという話であった。

ほんのちょっと気になった、という感じで影虎は呟く。

「俺の血って旨いのかな？」

「吸わないわよッ!!」

助走も引きもなく突き出したミナの拳がミシリと影虎の顔面に減り込む。K-1屈指のパワーファイターも真つ青な極悪非道の一撃だ。

「グギユルツッ!？」と出そうとしても二度と出すことは叶わなそうな声を出して倒れる影虎。

再び倒れた影虎を今度は心配をかけることなくミナは「馬鹿!

KY! 最低! 死んじゃえ馬鹿!」と罵倒しつつガシガシ蹴る。

この様を見ていると忘れそうになるので念のため言うておくが、今蹴られているボロ雑巾のようになっていいる少年は春梅影虎。今「死ね死ね死ね死ねえ!」と叫んで影虎を蹴り続けている少女赫塚ミナに数分前は抱きしめられていたのである。

この光景、三時間くらい前のミナ（じぶん）が見たら夢だと思っか卒倒するかしそだった。まず間違いなく止めようとはする。

ミナに訪れたこの変化は急激過ぎて本当に影虎の言う通り「良かったよーな悪かったよーな」であった。

影虎も「ミ、ミナ、ゴベンツ!」と謝ったのだが、止まるミナで

はなかった。

だが、影虎の言ったこと。ストレートに考えるなら自分がヴァンパイアのような存在だと知ったミナのことを考えない無責任で許されない物だ。

しかし……ミナにとっては良い影響を一つもたらしていた。自分が人間ではないと悲愴する気持ちが怒りでやわらいでいるのだ。

「……………!!」

そのことに蹴っている最中に気がついたミナは蹴る脚を止めて、影虎のその優しさに涙腺を緩ませた。

が、影虎のその不器用な優しさの形と自己犠牲に酔ったような満げな目と、あとちよっとスカートの中を見られたのが合わさってなんだか腹が立ったので、

「うううううう………ツツツ!!」

影虎を蹴るのを再開し、更に力も強めてやる。

強まったのは「ありがとう」と新たな気持ちに加わったのをミナなりに表してみた結果だったりする。蹴りながら、ミナの目から涙も出てきたし。

ただ、影虎にとってそれは暴力以外の何物でもなく、最後の腹へのキックを受けた影虎はピクピクと痙攣した。

「……………はあ。まあ、スッキリとはしたわよ」



影虎のおかげでミナにかかったショックも最小限に留まったし、これから知るであろうことに対しての恐怖も薄らいだ。

頼りになるじゃないの、救世主様<sup>ヒーロー</sup>。

それが素直なミナの心境だった。

「なんか、おかしい……」

床に寝転んだまま一番キックがクリティカルヒットした腹を押さえて呻く影虎。アレだけ人ならぬ扱いをされても喋れているのでどうやら相当タフネスであるらしい。

「仲が……いいんだな」

立花が引き攣った口元をヒクヒクとさせて評価する。

ああ、そうだとミナは思い出す。まだまだ聞かなくてはいけないことがある。ミナについてもそうだし、仮面ライダーについても、何故皆がここに集まっているかも、仮面ライダーディハーツについても。

「づぎ……俺……!!」

転がって身体を反転させ影虎は力無く拳手。

ミナは酷いことを重ねてしまったし、さっきは自分が質問したのだから今度は影虎に、と彼にそれを譲った。

「仮面ライダー……そんなご立派な奴らがいんなら……どうして、あんなひでえことがおきてんのに出てこなかった……!?」

それは怒りをこれでもかと含めながらそれを隠そうとしている。だが、それはただ漏れになっているというような質問の形をしていた。

ミナは「あ……」と気づかされる。影虎はなんとなく冷めたような感じで仮面ライダーのことを話していた。

きつと、この疑問がとぐるを巻いていたのだ。

影虎はミナを助けたのは気分だと言ったが、それだけじゃない。同時に誰も救えなかった自分を責めてもいた。

影虎は人間くさいが、議論するまでもなく善人だ。百パーセント救える命があの場合で用意されていたなら、影虎はその命を助けただろう。

だからこそ、怒っている。いや、単なる怒りとも何か違っていたが。

四十年以上もあの怪人・怪物たちと戦っておいて、何故颯爽と登場して人々を守らなかつたのかについて影虎は気になっている。

確かに気になることだ。恐らく、これが今起きている現象に繋がっている。

立花は重い口を開き、今世界で何が起こっているのかを二人に話す。

それはミナと影虎、ただの少年と少女が知るにはあまりに不可解  
で …… 衝撃的な内容だった ……

CHANGE〜LEGEND of RIDER〜(後書き)

次回、世界になにが起きているか明らかに〜

でも、ちょっとその前に。

CHANGE〜AUTO DE・HEADER〜（前書き）

今回は二話同時投稿となります。ちょっと前回の投稿の内容が薄かったので、それを補う形の二話となります。

さて、平成仮面ライダーシリーズをよく見ている人なら ……

“もう一人”に気づいているでしょう。

影虎！ そういうことだからスマン！！ お前は永遠に仮面ライダーにする気ないから〜！！

ん？ 影ってついてるからシャドームーンになれるかと思ってた？  
なれるか阿呆、シャドームーンは全世界に一人だけ……信彦だけだあ〜！！

歩いていた。これはかなり険しい山道だ、と少女は認識する。明らかに人の手はかかっていない。国内でも有数の人口を有した街があるのなら国は土砂崩れを防ぐために、任意に山に手を加える。それを保安林と呼ぶのだが、この山が万が一崩れても土砂に飲まれる人が住む街や村はない。

加えて登山家の中で密かに語られている隠れた名山というわけでもなく、このおざなりな道も一応に作られたものだ。段となる木や岩もおかれていない。獣道とは僅かに違うものだ。判断できる材料は百メートルに一本の間隔である赤いビニールテープが張られた木くらいしかない。しかもそれはかなり色が薄れてきている。

遭難するかも知れないので危ないし、何処かに絶景が広がっているわけでもない。誰も入ることはない。

それ程までに人里から離れている場所だった、ここは。

そんな道に今宵だけで三人も通行者がいた。

“例の二人”は途中まで自分のバイクを使っていたのだろうが、ここまでずっと徒歩で来ている少女には辛いものだった。

辛いものであったし、彼女自体も「肉体に大きな負担がかかる」と認識していたのだが、しかし山を上る少女は一滴の汗もかかず息もあがっていないかった。

息が上がるのも、汗を流すのも自分にはできないし、できても仕

方がないことだと少女は思っているのだ。

少女は金髪に黒い瞳をして、女性としては平均的な身長と、豊満な体躯をしていた。

ただし、その金髪は腰に及ぶまで長くされたロングヘアではなく、肩にもかかっていないショートカット、いやオカッパ頭だった。前髪が右のほうだけ長くて少女の右目を完璧に隠している。

瞳や目についてもただしはついてくる。漆黒の陶器のような艶やかさ、丸く優しい光沢を放ってはいない。確かに黒いが、その光はどんよりとしており、雨が降りそうで降らない微妙な曇天を表しているようだ。目の形も少し俯いていて、感情がない。

今年流行りのグリーンティの緑を明るくしたような美しい色のセーターを着て、膝が隠れるくらいの長さだが大きく広がる仕様の黒いスカート、音楽は聞いていないようだが可愛いデザインのヘッドフォンをしているのだが、それが事務員の制服に見えてしまうくらい底無し無感動。

「……………」

少女はただ黙々と山道を上るのみ。その様子は「本当に感情がないのでは」と錯覚してしまうくらい空恐ろしいものがあつた。

大体山の三合目くらいに差し掛かって、少女はあるものを発見する。

“例の二人”が乗っていたであろうオートバイとミニバイクだ。それが何もないところにぽつんと止められている。

これからは更に道も険しくなるし、狭くなるのでバイクで進むのは困難だと判断しここへ置いていったのだろう。

黒い大型のオートバイは通常のものだ。七十年代のアンティークバイクを綺麗に直し、部品を変えてカスタマイズしている少々珍しいバイク好きには堪らない一品だったが、これはそれ以外には特にあげるものがない凡庸な機体。

特殊なのはそれよりかなり小さくスマートなミニバイクだ。黒い大型オートバイと比較するとまるで小さな子供とその親といった感じだが、このバイクには信じられないくらいの技術が盛り込まれている。

機体ナンバー【MKDH-01（エムケイディーエイチ・ゼロワン）ADR20XX（エーディーアール・20XX）】。

車体愛称は【オートディハーダー】。

スマートブレイン社の子会社（とはいっても業界では並ぶものがないくらいに巨大である）スマートブレインモーターズが主に制作を手がけた最高の変型バリアブルビークルだ。最高時速は五百キロオーバー。

更に仮面ライダーダブルのリボルギャリーを基にした母艦機【MKDH-X】通称【リボルハーツ】に搭載された仮面ライダーファイズのジェットスライガーを基にした加速ユニット【MKDH-02】通称【ハーツデイルイガー】と結合するとその最高速度は脅威の時速2000キロに到達。時速が二千だ。これはおよそ一周四万キロある地球を僅か二十時間で制覇できる計算になる。



更に更に、仮面ライダーダブルのハードタービュラーを基にした【MKDH-03】通称【ハーツタービュラー】や仮面ライダーフオーゼのパワーダイザーと仮面ライダーダブルのハードスプラッシュヤーを基にした【MKDH-04】通称【ハーツダイバー】を使用することで水中・空中・宇宙空間の走行をも可能にしている。

しかも、それだけではない。カブトエクステンダーの技術を応用し仮面ライダーディハーツの力である世界干渉能力を用いて世界を自由に行き来することが可能なのだ。

マシン技術に秀でたフオーゼ・ダブル・カブト・ファイズのマシンを参考にすることで実現できた、これは現人類が作り得る最高のマシンだった。

少女は初めて感情らしい感情を見せる。興味深そうにオートディハーダーの各部を観察し始めた。

この機体は仮面ライダーファイズのオートバジンをモデルにしており、それだけに軽量でスマートなシルエットだ。扱うのが女性なのでそこも配慮したのだろう。

仮面ライダーを象徴する風を表現しつつ、ディハーツを象徴するハートマークとアンテナを示すデザインは嘆息が出るくらい、美しい一言だ。

だが、少女が求めるのはその美しさではなかった。

速度メーターの下にカーナビが備え付けられている。最新機種のように見えて、少女が電源に触れて起動させると画面にはこんな道でもしっかりと書いてある。

ただし、この道は本来忘れられたものであるべきで、どんなカーナビにもあるはずのない道だった。

これは単なるカーナビではない。そんな日常に出回っているものではない。第一、このオートデイハーダーには技術の粋を集めたものと高度なものが備わられるべきなのだ。

無慈悲にバキッ！！と少女はオートデイハーダーからその機器を引きはがす。

すると、

『イタイデス。 ホンキ ハ カナリ デリケート ナ マシン  
デスノデ モット テイチヨウニ アツカッテ クダサイ』

機械音声がオートデイハーダーから流れた。オートデイハーダーの本体とも言うべき次世代型A Iだ。

人間の喜怒哀楽を理解し、また自身を人間に近づけようとするように開発された人工知能。もとは真木清人が自分の人形に組み込むために開発したものであるらしいが、完成には至らず変わりにこれを開発したのがオートデイハーダーを手がけた天才科学者だった。

「機械は心を持たない」

少女がこの山に来て初めて話した内容はそんな否定だった。

『イイエ、ハカセハ オシエテ クダサイ マシタ。キカイ モ  
ココロヲ モツコト ガデキル、ト』

「黙って」

バシリ、と問答無用。

バイクの言う高説を少女は徹底的に心にとめないようにして、少女は剥ぎ取ったカーナビを更に分解する。

いや、分解ではない。

余計な部品を引きはがしているのだ。カーナビは元々の大きさの約半分にまで小さくなる。

金色のフレームをした液晶機器で最新鋭のスマートフォンのように見える。

『デイハーツール』。

仮面ライダーデイハーツの四つの変身ツールの内の一つ。もっと詳しく言うなら『根源記憶受信具現化システム』の操作端末だ。ここには全ての仮面ライダーの“機能”<sup>ツール</sup>が記録されており、それを入力 スマートフォンなどと同じくツールを選びタッチすると、地球の本棚から記憶を引き出しそれを具現化する。

“仮面ライダーデイケイド”のクラインの壺を『地球の本棚』<sup>ほし</sup>で代用するわけだ。

一番難しい具現化には独自の『ダウンリライト技術』を使っている。仮面ライダーダブルのサイクロンジョーカーエクストリームが自身の武器・プリズムビッカーを取り出す理論を応用したものだ。

それらより、仮面ライダーディケイドの世界を破壊する力に全く頼ることなく、まるで違った理論と法則で全てのライダーたちの力を引き出すことが可能となっているのだ。

ディケイドの方程式を利用できないのは少女にとっては苦痛だった。それがどんな力であろうが、そっちの方が合理的ならば迷わずそちらを選ぶべきなのに。少女はほんの少し悔しい思いを抱きながら考えていた。

しかしその分メリットもある。例えばこのオートディハーダーだ。備えられた万能AIによってディハーツールが挿入された状態で“どちらか二人”の任意さえあればオートディハーダーの自力でディハーツの力を使用できる。

そのおかげで少女とは違う“オリジナル”がグロンギとアンノウンの二怪人たちに襲われたときにゴウラムとなって“オリジナル”を救うことができた。

あと、ここへ来るまでの道中も“例の二人”に『隠匿』の機能<sup>ツール</sup>を使って二人の存在が見えないように怪人たちの目も欺いてきたのだ。勿論、“オリジナル”と春梅影虎は自分たちが恵まれていたとは知らない。特に“オリジナル”の方は自分が二分の一の確率を勝ち取った幸運な方であるということも知らない。

「……………」

少女は九年感、無為な人生を歩んできた。少女は少女で“オリジナル”とは違う二分の一の可能性を手に入れて一応は恵まれていた。

いや、二分の一でもあつたし奇跡的な確率でもあるらしいので、文句はない。

だが、自分の人生はあの始まりの瞬間からこのデイハーツールを制作するための助力となるために費やされた。そうでないたくさんの世界が終わってしまうと言われたら、断ることなどできなかった。

少女を守ろうとするものは多かった。いや、ほとんどの人が彼女の人生を縛ることを止めようとした。まあ、それでこそ、彼らは彼らだったのだが。

しかし、少女はあえて聞き耳を持たなかった。自ら進んでこの身データベースを差し出した。

猛烈にやらなくてはいけないような気がした。なにかが少女にその道を進めと囁いたのだ。

『さあ、そのために人生を捧げる。お前が生き返った意味はそれだけしかない。他の生き方など捨ててしまえ、それを欲しようとする心も不要だ。さあ、早く……。そのためだけにお前は生まれてきたのだらう。…………？』

その正体は多分『運命』という奴だった。それにかかれば無欲も無欲にならない。人間を捨てるのも問題にならない。どんなものでも、正当化されてしまう。

運命に少女は負けた。

だから少女は心を消そうと努力してきた。誰も自分に触れないよ

うにもした。

後悔はない、後悔というのも感情だから。

「……………」

そろそろ、“例の二人”が真相を知るところ。

“オリジナル”は運命に勝てるだろうか。いや多分負ける。勝てるわけがない、運命というのはそれだけに強大だ。

負ける。

負けてしまえ、それで初めて同列だ。自分だけ負けて、何もなくなつて、卑怯だ。こんなの不平等だ。運が良かったというだけで“オリジナル”と甘やかされて、何も知らずにあの人たちと暮らして。

どっちも同じ赫塚ミナなのに、あつちはこちらを道具みたいに見える。今日など向こうは無意識だろうが勝手に記憶を引っ張りだされた。『クウガ』と『アギト』と『響鬼』と『グリード』の記憶だ。きつとその力の片鱗を見せたのだろう。『ゴウラム』の記憶はこちらが任意に貸したから良いが、記憶を取られるというのは部屋に勝手に上がり込まれたに等しい。

殺したいくらいに憎らしい……………。

……少女はそう思ってもいけないのだ。それもやはり感情だから。普通ならそう考え、怒りで煮えたぎるのだが、少女は平然とする。

少女はディハーツールを見る。このディハーツールには生きたガイメモリ・エクストリームメモリと同じく空白のデータ領域があった。

それは少女が自ら作った自分の椅子だった。

あの“オリジナル”は少女を見たらまず百パーセントの確率で驚いてしまうだろう。そうなったら説明に時間がかかってしまう。

少女はそうならないために『入っておこう』と判断。

少女は自らの存在にまったくの疑問や反発も持ち寄せないで、その空白に飛び込んだ。

CHANGE↷AUTO DE・HEADER↷(後書き)

オートデイハーダーってw

え、皆さん。正直「どんだけファイズが好きなのよ」と思っているでしょうが……

大好きだ、コンニャロー

オレも猫舌だかね！ 猫舌には猫舌の気持ちわかるのさ。湯豆腐とか、マジでやめろって話だよな！（天道ゴメン……

もうね、設定を見た友人がね「これの何処がディケイドなんだ、万能なファイズだろ」と。

良いね、それ……



CHANGE HIS QUESTION (前書き)

ライスピ読むと、平成仮面ライダーが弱く見える。原作見ると、平成仮面ライダーが強く見える。

……不思議。

さて、今回の話は世界に訪れている崩壊の話を影虎視点で書き換えているだけの話です。バトルには入りません……前回予告しましたが、これは番外編扱いでよろしく願います。

## CHANGE HIS QUESTION

ミナが影虎を不安げに見る。「なぜ仮面ライダーは現れなかったのかについて憤怒している」と思われているのだろう。

だが、影虎は許せないというよりか、ただただ強く疑問であるという思いが強かった。

なにを、とは仮面ライダーたちの矛盾を、仮面ライダーたちが貫けなかったということ。その二つを影虎はどうしたって理解ができず、その訳が分からなかった。

ヒーロー。その響きは誰だつて一度は魅了される理想だ。この世にはそれ以上の数の“悪役”もいるが純粋な時代は、「こうなりたい」と思っていただろう。

まだ幼い時分、影虎もそれを信じて憧れてきていた。そんな英雄を夢に描いていた時期も確かにあった。

とんでもない力を持っていて、敵に立ち向かう。何度やられたつて立ち上がってまた戦う。かつこよくて、熱くて、正義にひたむきだ。

それなのに決まって「私の強さはみんなの心の強さだ！」だとか言つてバシリと決める。

だが影虎はそんなのは嘘だと早期に知った。なにも「小さな女の子を救おうとして救えなかった」とかの感動エピソードがあるわけじゃない。

俺達が束になったって、大した力にはならない。あのヒーローが言っていたことは嘘っぱちだ。心にパワーなんてない。

それを知るのは、見るだけで十分だった。

平和を望まず戦争を望む人と戦争を望まず平和を求める人。この二極がある。どちらが多いだろうかと考えれば、戦いを望まない者の数の方が圧倒的に多いに決まってる。誰もが“死にたくはない”から。

なのに、世界から戦争がなくなりほしくない。心に大きなパワーがあるなら、もとより戦争など始まらないはずなのだ。

ヒーローの言う「君たちの心が俺たちに力をくれる」というのは単に応援されるとやる気が出るという普通な理屈だ。

自分たちの力はちっぽけだし、身を守るには強い者を盾にしていかなければならない。正しい正しくない関係なく。

別に、「おい正義の味方なら戦えよ！俺たちを守れよ！」と影虎は言いたいわけではない。自分にそんな力があつたとして、絶対に人々を助けるために戦えるかと言われればかなり自信がない。だから、そんなことは言えない。

ただ、立花老人が「仮面ライダー」をあまりに美化するのはなんとなく良く分らない。

四十年以上もずっと戦ってきたというのはご立派なことだが、肝心の今戦えていない。

貫き続けている者たちのみ美化は許される。今この瞬間戦えていないのに、どういう訳で誇れるものだろうと影虎は疑問だった。

影虎は多くの助けを乞う人々を見捨ててきたが、それは絶対に助けられる保証がどこにもないから。助けようとしたりして、自分も死んでしまうのがオチだ。なら、自分は生きて助けられなかったその十字架を背負う方がまだ“残る”。

だが、影虎は腐ってはいない。そうではないという確認はいつもしてきたから、彼は自分の口でそう言える。

助けられる命があったら助けたい。命懸けはつかない、自分の命の方が大事なだから。それじゃあ思いが弱すぎるのかも知れないが、善意ではあるはずなので勘弁してもらいたいところであった。

逆に自分の命と名前も知らない赤の他人の命を天秤にかけるような奴はとんだ偽善者だ、死ぬって言うのは物凄く恐ろしい。実態が掴めないからなおさら恐ろしいのだ。

あの感覚を知らない奴がなにを言ったって軽すぎて耳には残らない。本気で言う者がいたら、影虎は食ってかかる腹積もりをしている。

形にならない、重みにもならない、目にも残らない。だからこそその死なのだから、等号式には画けない。

その偽善を抱いていたのが、ちょっと前までのミナであったというのが、影虎にとって歯痒いものだったが。

だが、仮面ライダーは知らないわけじゃなかったのだろう。恐怖を認めてそれでもなお戦えられた。強い正義の心が等号式を成り立たせていた。

それは幻想じゃない。テレビのアニメ・特撮番組みたいに綺麗事ばかり並べた単なる強さではない。現実になんかを経験し、力を持つ者としての苦悩や葛藤を味わいつくしている。

その上での闘志。

夢のような話という例えは正しくない、嘘のような厳しさというのが、正しいのだ。

しかし。なのに、仮面ライダーは現れなかった。

あれだけの量の怪人たちを全て倒せとは注文しない。ただ、何人かはその力を使えば助け上げることくらいできたはず。彼らも人を助けたいとも思っていただろうに、何故無視出来た。

影虎はこの怪人たちの侵攻がミナの街に限ったことではないとは予想していた。なら、仮面ライダーたちは単に世界中にバラバラに散っているのかも知れないという考え方もある。

しかし、そうとも思えない。影虎は直感でそれを判断する。仮面ライダーが世界中で今も戦っているのなら、怪人たちにもっと警戒心がないとおかしかったのだ。

更に、このキャットスルドランとか言うドラゴンは仮面ライダーに関与する者たちを守るための物だ。そして、その持ち主はミナの祖父赫塚音也のもの。ならば、ミナの住む街は優先的に守るはずだ。

「…………それが…………一番、説明しにくいことだ」

立花は苦虫を煎じたマズイだけの茶を啜ったように眉間にシワをよせた。

「…………本郷たちの誇りのために言わせてもらう。仮面ライダーたちは逃げたわけじゃない。彼らの殆どは戦いたいと願っているだろう」

「だったらどうして？」

「本郷たちは…………仮面ライダーとしての力を失ったんだ。九年前から今に掛けて、ゆっくりと…………下の段階の世界で」

「失った？…………九年前？」

気のせいかこのキャットスルドランの中に入ってからというもの、何度も“九年”という単語を聞いているようだった。

この九年という単語をもう三人も口に出しているのだ。回数だけならこれは四回目である。

一回目は音也の言った『さあ、あとは俺に任せろ。これから先は九年間の空白を埋めるための愛の時間だ』という言葉の中にあつた。

二回目はBOARDとかいう研究機関の研究者である烏丸という男が言った、『今から君に渡したいものがある。我々の九年間の全てを結集させたものだ』という台詞。

三回目は影虎にとって余り思い出したくはない音也のミナへ向け

られた厳しい言葉、ずばり『がっかりだな。おれのむすこ 渡に九年間も育てられていて“この程度の進歩”と言うのは。こんなつまらないのが俺の孫つてのは』である。

九年。今から九年前に仮面ライダーの力が失われてしまうくらい劇的な変化が世の中で起きていたと考えるのが妥当。

だが、誰もが知っているくらいにデカイものでもなさそうだった。その年は特に物騒だったわけではなく何とかという組織が台頭して人々を恐怖に陥れたわけではない。景気が悪化した大国が弱小国に難癖つけて起こした得るものも何もなかった迷惑な戦争も終焉していた。

あと音也の台詞から察すると、ミナと音也は以前……“九年前”に会っているらしい。

誰も知らない、しかし大きな確変が世界で巻きおこり、仮面ライダーの力はそれ以後徐々に失われていった。それには……ミナも関わっている。

「野上良太郎という少年がまずそれに気づいた。彼も仮面ライダーの一人で……人々の記憶を辿って時間を越える怪人・イマジンに対して仮面ライダー電王として戦っていた」

「時間を……越えられるの……!？」

ミナがそうやって驚き、影虎は彼女の驚きに便乗する形で「おいおい、タイムマシンかよ」と発言する。

立花老人はこの「タイムマシン」という言葉がツボだったらし

い、クスクスと笑う。

「そうだな、仮面ライダー電王とは『時の守人』。時を越える列車、デンライナーで時間を越え、時を変えようとする時間犯罪者を倒していた」

「ほ、本当に時間旅行タイムトラベルなのね……」

「その仮面ライダー電王……野上良太郎が九年前、西暦2005年の2月12日に異常が発生していることに気がついた。うん……厳密に言くと八年と三百六十四日前、か」

2月12日……。やはり、誰もが知るような大事件が発生したよ  
うな日ではない。

影虎は分からずに首を傾げたが、ミナは違った。その日に何か心当たりがあるようで、目が大きく見開かれている。

ボソボソと何かを言って首を振り、それを繰り返す。影虎は気になってミナに聞くと「なんでもない、気にしないで」と返ってきた。

「なんでもないなら言えるぜ、本当にそうなら考えすぎだって笑ってやるから」

と影虎は励ます。

すると、ミナは目線を落として数秒間逡巡し、影虎をチラッと見て言う。

「に、2月12日……その日って……わ、私の……誕生日だ……ッ



「！」

影虎も気づかされる。今日は2月11日今の時間は夜の8時過ぎ。その2月12日まであと三時間ちよつとだ。

整理する。

ミナの誕生日は2月12日で、立花の話によれば2005年の2月12日に仮面ライダー電王・野上良太郎が時間の異変に気づき、その九年後にあたる2014年の2月12日を前に怪人の軍団が攻めてきた。

(……………これは偶然か……………?)

「立花さん、これって……………ッッ!?!」

立花老人は返答に困っているようだった。一度眉間にシワを寄せたあと「しまった」とばかりの顔を作って俯いた。「……………君は……………そう言ったのか」とそれだけ聞いてもサッパリ分からない呟きをしながら。

ミナの問いは割と核心をつく、しかも残酷な事実に関与することだったらしい。

「あー、うん……………。それは……………後で話す。今君が聞いたら……………きっとパニックになって、そのあとの話を聞ける状態じゃなくなっ

まっ

「……………わかった」

思いの外、ミナはあっさりと承諾した。

空白の期間は数秒間だった。その数秒の間にミナは何度も抗議しようとして口を開いたがその度に閉じた。

まだまだ知らねばならないことがたくさんあるのだから、ここで立花老人の言う通りパニック状態になってしまつのは困るという気持ちと単純な聞きたいという気持ちがあり、葛藤したのだろう。

「話を進めよう。その2005年の2月12日に起きた異常はイマジンが引き起こすものとは明らかに違っていた。野上良太郎の言葉を借りるなら、“時が揺らいでいた” そうだ」

「「時が……………揺らぐう??」」

影虎とミナは二人して特大の疑問符を頭の上に浮かべる。時というものに、実体があるかさえよく分からない上にそんなことを言われても混乱するばかりである。

「詳しく言えば、『2005年2月12日を境に時間が極端に不安定になっている』状態だったそうだ。時の砂漠も荒れ、本来の時間を除きデンライナーでも時を越えそれ以後の時間へ行くことができなくなった」

「それは……………どついつ訳で?」

「いや、時を渡れなくなっただこと自体は大した問題じゃなかった。デンライナーのオーナーや少年ライダー隊が調べてくれたところ、2005年2月12日から同年3月までの期間で、アギト・ギルス・アナザーアギト・ミラージュアギト……四人のライダーたちの力が使えなくなっていたことが明らかになった。奪われたりしたわけじゃない。突然になくなったんだ」

一ヶ月弱で四人ものライダーの力がなんの理由もなく失われた。立花老人はその後の“消失”の経緯を教えてくれなかったが、立花老人が最初に言ったことを考えれば自ずと分かる。

それからの九年間で、その前に生まれたライダーもその後生まれたライダーも徐々に消えていったのだ。

覚悟を込めて戦った歴史の聖遺物とも言えるその力が失われてしまった。それは仮面ライダーが怪人たちに立ち向かうことが出来なかった理由となる。

戦わなかったのではない、戦えなかったのだ。自分たちが仮面ライダーであるという証を彼らは失ってしまったのだ。

その判明により、影虎の第一の疑問は解消された。しかし、また新たな疑問が間髪入れずに浮かぶ。少々いたたまれない気持ちも。

「その世界の喪失はどうして生まれたんだ？」

「突然のことだが、君達はパラレルワールドというものを知っているか？」

こちらが質問をしたというのに逆に向こうから聞かれる本当にいきなりの問いかけだった。

とは言え真剣な話だったので影虎は黙って肯定しておいた。

パラレルワールド、この横文字を日本語に直すなら『平行世界』というのが正しいか。自分たちの住むこの世界とはまた違った世界があつて、その世界の自分は全く違った人生を歩んでいるというやつ。

影虎は強烈な程にそれを信じ通す気にはならなかったが、そんなものがあるなら夢があるな〜程度には思っている。

「もし信じていないなら今から信じてくれ、話が進まないからな」

影虎の横でミナが「う〜〜〜……ッ」とあからさまに気にいらな  
いと言うようすで白い歯を軽く見せて唸っていた。

それは鼻肩のスポーツチームが惜しくも優勝を逃したと聞いたときの様だ。ミナはパラレルワールド否定派ならしい。

ミナ曰く「パラレルワールドなんて現実に満足していない人が妄想した架空」<sup>バーチャル</sup>であるらしく、そんな考えを抱くくらいなら現実に生きる自分を変えるための努力をしると彼女は言う。

かなり夢のない現実的な発想だ。ミナは“あらゆる物を愛した経験”がないのだから、フィクション相手だと尚更だろう。

影虎は自由になったこれからでもう少し柔らかくなってくれたらそれでいいと目標をもう一つ加え、ミナに今持論を貫いても仕方な

いと諭す。ミナは渋々と納得した。

「パラレルワールドは数多く存在する。多すぎて大まかな数も見当がつかんくらいな。この世界も客観的に見ればその中の一つに過ぎないのかもしれない」

「他世界解釈……ですか」

「よく知っているね。そう、世界は数多くあり、更に増え続けている、今こうしている間にも……。そして、今から九年前にも世界が生まれた。それが……全ての始まりだと言える」

かい摘まむと、世界が生まれたことが仮面ライダーたちを世界から消し去ったことに繋がったのだと言う。

しかし、立花の説明ではこのパラレルワールドは常に増え続けており、新たに世界が生まれてもなにもおかしいことではない。普通の現象だ。

つまり、生み出された世界が異常に多かったのか特殊な性質を抱えている物であったのか、あるいはその両方か。

なんにしても、この世界から仮面ライダーの存在を失わせてしまふくらいパラレルワールド群全体のバランスを崩すものだったのは間違いない。

「新たに生まれた世界はとてつもない数だった。普通では考えられないくらいだ。しかし……同時にかなり脆くはかないものだった。世界の中でも特に弱い世界……それが偽りの空想『虚構の世界』と呼ばれるものだ。新しく生まれた世界はみなそれに該当されるもの

だった」

虚構世界。

影虎はそれに関する都市伝説的な話を何度か聞いたことがあった。人間の強い想像力がそういった物を形作り、世界として成り立たせるというのだ。

まあ、パラレルワールド自体が凄く曖昧なものであるので、ひよつとしたら世界というのはそんなくらい簡単に作れてしまうのかも知れないなと影虎はぼんやり考える。

が、そんな世界があったとして、それはとても脆弱で吹けば飛んでしまう、衝けば割れてしまうシャボン玉のようなものだ。何しろ思い描いた本人一人が死んでしまえばその虚構はないことになるのだから。

それがパラレルワールド全体に悪影響を及ぼす程に強大な力を持つとは少し思えなかったのだが。

「虚構世界はすぐに消えてしまうはずだった。……しかし信じられないことにその生まれた世界には共通の“意志”を持っていた」

「意志……って？」

「完全な世界になりたいと願う意志だよ。“虚構”<sup>ライアー</sup>のまま終わらない“完全”<sup>コスモ</sup>になりたい……というようなね」

「……そりゃごもつとも。それが“世界”なんて馬鹿デカイもんじやなけりゃな」

世界の意志とまで来ると影虎には荷が重すぎる。それこそSF作品やアニメの領域だ。

ただ、現実にかけているというのとその洒落にならない緊迫感が影虎の笑い飛ばそうとするのを邪魔していた。

「複数で一つの意志を持つ世界は足りない部分、不完全な部分を補うためにお互いに結合しあった。それが野上良太郎の言う時の揺らぎを引き起こしたのだろっ」

例えば、水面に出来た二つの波紋がぶつかり合いお互いに影響しあつて、より大きな紋を刻むように。

虚構世界同士の結合はパラレルワールド全体を揺るがしたのだ。時が揺らいでいたのは時単体がそうであったのではなく、世界そのものが揺れる船頭の上に立っていたからだ。

ただ、それはおまけ……いや、前兆のようなものに過ぎなかったのだ。

「だが、世界の融合は“普通に考えるなら”そんなに簡単なものではない。まだ世界の“質量”<sup>そんりょう</sup>が軽い時分はそうでもないが、世界としてある程度の“重み（リアリティ）”になると世界の融合には巨大な引き合う力が必要になってくる」

それだけでは不十分で、いまずぐにも確かなものとなりたかった。だから……

「だから……もう一つの方法も同時に取ってきたんだな？」

単純な話、何か巨大な物を作るプロジェクトがあつてそれを構成するために皆が持つているものを持ち寄つてくるとする。しかし、なかなか集まらない。完成には全てを投入しないとイケないのに、彼らの規模は大きすぎた。

そこで可能性だ。

例えばその近くに使われていない宝の山が打ち捨てられていたら、人々はどうするだろう。

立花老人は自嘲げみに笑う。

当然、その方が楽なのだから人々はその宝の山から“存在”を切り崩し、自分のものとするだろう。

「影虎君の言う通り。虚構世界は世界としてより安定するため確かになるために、手っ取り早く世界としてはとっくに成立している我々の世界から存在を奪い取ったのだ」

「存在を奪い取ったって……つまり……？」

「うむ、『仮面ライダー』の記録”だ。より確かな世界になるために一番近くに存在していたこの世界から“仮面ライダーの記録”を奪っていった。程なくほとんどの仮面ライダーの記録が奪われ、猛たちは変身することができなくなった」

「記録が奪われるって……どういうことだ……？」

世界などという莫大なものだ。影虎には少しイメージできない。



ミナも腕を組んで「あーうー？」と唸っているところをみると同じなようだ。

「それがあつたのは分かっている。しかし、“同じ瞬間”にそれがない。理由付けもなく、消されるんだ。世界の情報が“段階”ごとに欠落していく」

理由付けもなく。それは仮面ライダーの変身能力になにか決定的な異常が起きたわけではないということ。

変身するためのアイテムが壊されたり、自分の肉体におかしな点が見受けられたり。そんなことはなく、純粹すぎるくらいに消える。

なら“その他”は？

影虎は立花にいくつか例えを出すのでそれがどうなるのか答えてくれと要求する。きっとこれは深く知っておかなければならないのだと直感したのだ。

「人だ。例えば一人がそれに巻き込まれたとしたら……その人はどうなる？ 最初からいなかったことにされるのか？ それとも……」

「いや、いなかったことにはならない。虚構世界は世界の存在を喰らうが、それはかなり粗いものだ。記録は消えても……記憶は消えない」

ガリガリと平面的に広がるものを歯でかじりつき削り取るような拙さ。

虚構であるが故にそれは不器用だ。綺麗に存在を食すことは出来ない。理由付けがないのもそのためだ。

だから、表面上の記録レコードは腹の中に納めることが出来ても、記憶リカスは食うことが出来ない。

だが ……それがいいことであるはずがないと影虎は考える。

なぜなら、かじり取られなかった部分にもしつかりと歯でつけられたギザギザとした傷が残るのだから。

「いなかったことにはならないが……残された者にとってはもつと辛い。ついさつきまで一緒に居たのに唐突に消える、理由もなく。それに“理由付け”がされない」

戦争に巻き込まれて、衝突事故にあつて、寿命を真つ当して、何か辛いことがあり耐えられなくなって自分から。

人間にとってこの世からの喪失には必ず理由がある。

だが、それが無い。残された者はいかなる思いを抱けばいいのかわか、世界というものに対してどれだけの憎しみを込めればいいのか。

色々例えを出すと影虎は言ったが、影虎は自分であれこれと考えてしまう。

例えば“戦争というカテゴリー”が丸ごと突然になくなったら？

普通に考えれば戦争とはなくなるべきものであるが、この場合違

う。

それを乗り越えることも、それに夢を馳せることもできない。死んでしまった者達　　全世界全時代を合わせると十億以上にも達する人々が皆“原因不明”となる。

そういえば、風都もそうだ。

立花老人の話に寄ると風都タワーで仮面ライダー同士の戦いが起こったのだが、それも“原因不明”だった。

あれだけ目立つ風都タワーで仮面ライダー同士がフィールドを破壊するくらいの派手なバトルを繰り広げたなら、絶対に目撃者の一人や二人はいるはずなのに。

矛盾、矛盾、矛盾。一つを拙く引き抜いてしまつと世界に綻びが生じ、矛盾が続く。

それはまるで空に浮かぶジェンガゲーム。どこを抜いてもどれだけ汚く抜いても、永遠にジェンガは倒れない。もうその遊戯は意味のないものである。だというのにルールだけは厳格で、ゲームはいつまでも続いていく。

たとえ破綻したものであっても、ゲームプレイヤーが嫌になつて放棄したがつても、どんどん積み重なつていく。

世界がどんどんと虫食われたような穴だらけになっているのだ。矛盾が発生しようが世界は黙殺する。崩壊しそうなまでにボロボロになろうとも、決して崩壊はさせない。永遠の袋小路。どこまでも続いていく反則。プレイヤーが胸を痛めようが嫌になろうが続く矛盾。

盾という名のゲーム。

それはすぐに破綻する。面白みがどんどん欠落していく。世界が意味を失い、

やがて奪われつくして消える。

やったはずの記録が消える。それはちょうどゲームを途中でリセットするように。ただし、その時に味わったはずの感動も実感も忘れさって。ただ“やった”というのだけは覚えていて。

それでもまたやってみようとする気丈な人物はいる。もう一度ゲームクリアを目指そうとする。しかし、それは不可能だ、どこかでバグが発生してエンディングなど拝めない。

だからといって、ハイスコアを更新したりする新たな目標を抱いても無駄だ。それすらもまた不可能になる。

絶対に、ゲームプレイしようとするものはいなくなる。

そんなことが世界で起こっている。

影虎は蒼白する。ミナも。

「そ、それって、仮面ライダーだけに限った話なのか!? 普通の  
人達にも……影響はあるのか!？」

「ないとは言えない。性質が性質だけに、如何せん対象が多すぎる  
んだな。デンライナーのオーナーによれば人間の記憶こそが時であ  
るはずなんだが、こりゃ逆だな」

理屈はいい。有り得ないということさえ分かればそこで充分すぎ  
る。

有り得ないから、如何に仮面ライダーといえども有り得る存在な  
らば敵わない。世界をどうこうしなければ、自分たちではどうする  
ことも出来ない。

世界を、どうこうする。つまりは世界を自分たちの手で変えなけ  
れば……だ。

それこそが希望。

それこそが……ミナ。

「このキャットスルドランの中ならば、世界の喪失の影響が少々和ら  
ぐ。次元の扉があって体内の時間が曖昧になっているおかげかな。  
デンライナーはもう“ない”からここが唯一最後の砦だ。我々はこ  
こで九年間に渡り、“希望”を作っていた。それこそが……」

影虎は直感する。

きつとそれが ……

『ビビビビビ〜〜ッッ！！ ビビビビビ〜〜ッッ！！…』

突如けたたましく鋭く鳴る警告を告げる音。

「な、なんだ……！？」

この場でこれがなんなのか知らない影虎とミナはキョロキョロと周りを見る。

『キャッスルドランに敵勢力接近！ 数は……二百！ カテゴリーは恐らく未来人……イマジン！ しかも、これは……やばいわよ……！…』

キャッスルドランに響く女性の声。それによると、怪人がここへ二百体もやって来ているというのだ。

『ザザ……た、助けてくれ……降ろしてくれえ！…』

アナウンスする女性の声ではない。恐怖におののく中年の男性の声だ。きつとキャッスルドランの外の音声をマイクが拾っているのだ。

ドサツ、と音がしてから中年男性のものではないモノの声がする。

『うるっせえなあ！ だから、安全な場所まで運んでやったんだろ  
うがア！ これで……契約完了だあ！！』

怪人だ。恐らくはこの声は怪人のものなのだろう。狼のような荒  
々しさ粗暴さがセリフと声からとれる。

『ま、といつてもすぐに危なくなるがなアツ！！』

中年の男性は一言「ヒィ……ッ！」と短く叫ぶとそれきり喋ら  
なくなつた。察するにはたつと気絶してしまつたのだ。

すると、また別の声がする。

『あゝ、苦勞してこいつら引つ張つてきたのに……よりによつてこ  
いつかあ……めんどいなあ、これじゃ過去からはどうせいたぶれな  
かつたんじゃない……』

チンピラの少年のような声で気落ちした、と取れるはずのこえと  
内容だつたが……そうは言えないものがあつた。

これは、怪人の声ではない。少なくとも、今は『人間』の声だつ  
た。

『面倒臭いなあ……』

一拍措いて。

『なあ、俺今そんな顔してるだろお？』





CHANGE HIS QUESTION (後書き)

さて、これが投稿されると読了時間は270分くらいになるのかな？

すごいや！ 4時間半ってネクサスどころの話じゃないね！ 未だ変身出来てないなんて、能無しなんだねお兄さん！

あとミナの言った「他世界解釈」はウルトラマンガイア参照。ちょうどその時、映画版を見てましたから。合成怪獣って良いよねえ、タイラントとかグランドキングとか。ベリアル(初)の最後のあれって入るのかな。

キングオブモンスの声は怪獣の中で一番好きだなあ。なんて言ってるんだろ、「ろろろあろろろあああああ！」かな。

ガリバー……アドベンチャー号……いやいや、流石にそれはないか。

CHANGE↪BATTLE OH RIDER↪(前書き)

前書きはほとんど無しで。

ええ！？ こいつがこの仮面ライダーに！？

と批判される気はしています。

## CHANGE BATTLE OH RIDER

敵はイマジン二百体……こちらの戦力は僅か。いかに時間移動以外にこれといった特殊能力を持たず強敵も少ないイマジンと言えど、この数の差はいかんとも出来ない。

「これは参ったわね……」

イマジンたちが居る位置とはキャットスルドランの後ろにあたる位置に陣取らせている大型車両・Gトレーラー内で小沢澄子は苦悩する。

このGトレーラーは特殊な迷彩が施されており、半径五メートル以内に近づかない限り目視することは出来ないようにされている。

しかし、このチームの要であるシステムが虚構世界の出現に伴う「『仮面ライダー』の記憶」の喪失により失われてしまっている。

Gシリーズ。Gはジェネレーション（GENERATION）の頭文字で、別名は仮面ライダーG3並びに仮面ライダーG3-X。正式名は「第3世代型・対未確認生命体強化外骨格及び強化外筋システム（GENERATION-3）」。

仮面ライダーの中では少々異端で改造人間の力であったり超能力的なもので進化するものでもない。科学技術の結晶であるG3システムを“装備”する形となる。

これの正式装着員は氷川誠ひかわ まことという男だ。一応任務は完遂し、今は普通の刑事として警察の本庁で活躍していると聞いている。

しかし、小沢澄子は彼を今日は呼んでいなかった。来たるべきその日まであと一年を切る重要な日で多くの関係者がデイハーツシステムの完成度を見に来ていたにも関わらずだ。

理由は簡単。仮面ライダーG3-Xの力は失われてしまったからだ。

彼と津上翔一らがアンノウンの神を倒しアンノウンが出現しなくなり彼がユニットを去った後、G3-Xは原因不明のシステムロスを起こした。

どう調整しても動かず、どこが悪いのかもサツパリわからない。それに続いてファイズの技術も組み込んだG3-Xの強化改良型、G5や改良前のG3もシステムダウンした。

このG3ユニットが使える『仮面ライダー』はG4とG3の量産型、G3-MILDのみだ。

G3-MILDは量産型である分コストダウンを目指して各ツールや機能がオミットされており、その性能はG3よりも劣る。単体で出しても足でまとい以外の何物でもない。

G4も駄目だ。ベースをそのままに、カブトの技術を導入しG5以上の性能に強化することには成功したが、肝心の部分がどうしようもなかった。

搭載されているAIはG3-Xの最初期につけていたものの強化版AIチップで、“装着員の負担を考慮せず”その場で最善の行動を取りつづける。

よって、使用を続ければいつかは負荷で装着員を死に至らしめる悪魔のシステムなのだ。

AIチップを抜き、G3-Xの物が別の物に変えれば使用できるはずだったが、どういうわけかチップを抜いた途端システムがダウンする。

打つ手なし、だ。

このキャツスルドランに集結しているまだ喪失していない『仮面ライダー』は僅か三人だ。それもプロトタイプばかり。

真木清人、スマートブレイン社、緑川女史が新たな仮面ライダーを開発しているらしいが、それに期待をかけるわけにもいかない。

三人の仮面ライダーで怪人二百体を相手にしなければならない。それは、とても厳しい状態だった。

何も良い策が浮かんでこない。十年前は警視庁未確認生命体対策班SAULの実働部隊G3運用チーム、通称《G3ユニット》の班長をやっていたというのに。

すると、

「三人じゃありません。それに、もう二人加えて下さい」

後ろから声がした。小沢澄子にとってはとても懐かしい声、でも少し渋くなっているような気もした。

振り返るとそこにいたのは、かつてのG3正式装着員  
……  
氷川誠だった。

「氷川くんツツ!? どうしてここに……!?!」

「お久しぶりです、小沢さん」

小沢澄子の問いを無視するかのように氷川はかつての上司に深く一礼する。

澄子は彼の復帰に驚く。

この場所は極秘なのだ。この氷川誠にとっては、ここはもう一度踏み込んではいけない領域……怪人たちとの戦いに赴くための領域なのだ。

澄子は彼にこの場所を伝えてはいない。彼にはアンノウンだとかオルフェノクだとかを忘れて、仮面ライダーではなく警察として職務に励んでもらいたかったから。

加えて、キャッスルドランは“ただの人間”には見えない。怪人たちと幾度も戦った氷川誠なら話は違うのかもしれないが、衛星映像にはこのキャッスルドランは映らない。

彼がここに来るわけがないのだ。

だとしたら ……だれかが氷川誠に「戦いはまだ終わっていない」ということを伝え、この場所を教えたのだ。

そんなことをしそうな人物、それに澄子は心当たりがある。

かつて彼女の因縁の相手とも言える同僚に、「可愛いげがあるだのないだの」と告げ口した、可愛い可愛い部下一匹。

「尾室くん!!」

氷川の背に隠れている小柄でモブ顔な男性がビクツと震えあがった。

おむろ たかひろ  
尾室隆弘。これでも一応はG3運用チームの一員だった男。とにかく影が薄くて氷川誠同様ちよつと鈍い。まあ、G3マイルドの装着員になった時は氷川をフォローしたり活躍もあったが。

縁の下の住人であるのは認めるが、力持ちではないタイプ。究極の凡人。

この男は澄子とは違い、まだ警察に所属している。氷川誠と顔を合わせる機会も多いし、それで話してしまったのだろう。

戦いは終わっていない、世界には仮面ライダーが必要なのだ、と。

「だって、何が起こってるか話したら、氷川さん戦いたいって言って、詰め寄られたんですよ。教えないわけにもなんかいかなくて…」

「あなた……まず！ 第一に！ そんなこと教えるんじゃないの！」

澄子はそこらに置いておいた書類の束で尾室を叩く。尾室は「やめてください」とヒィヒィ言って逃げ回った。

その怒りが沈静すると、次は彼らの服装に気がつく。

氷川誠も尾室隆弘も黒いタンクトップを着ている。これはG3システムを着用する際に着る戦闘服だ。

けれど、G3システムはもうない。あるのは……G3マイルドと使用すれば負荷で死に至るG4のみだ。

氷川は「二人加えて下さい」と言った。尾室はG3マイルドを使うのだから、氷川は……もうひとつを使う気だ。

「駄目よ、氷川くん。G4システムは危険だわ……!」

「分かっています!! でも、G4が無茶でもG3-Xが無理でも、他に方法があるでしょう!?!」

そうだ。

あるにはある。G3-Xは幾つかのパーツが駆動しないだけで、システムの鍵であるAETCHIPは生きている。

G4システムも、AETCHIPさえなければまだまだ駆動することができる。

ならば……G3-Xをベースに喪失により駆動出来ないパーツをG4システムのパーツと交換すれば。つまり、ニコイチの要



領でG3ーXを補強できれば良い。

氷川は苦勞して運んできたものを見せる。

ベースはもちろんG3ーXだが、所々のパーツがG4のものでアンテナ部分は角状となり目もG4の青い目だ。

以前も破損したG3ーXシステムをG4のパーツで急ごしらえしたことがあったが、何故かこれは“最初からそういう風に”作られている。

尾室が澄子の知らない間に強化したG3ーXとG4のデータをちよるまかし、誰かに制作を頼んだ……そうと考えられる。

これが仮面ライダーG4-X……とでも言えるか。

ただし、死ぬほどのものではないとは言え、やはりG4システムのパワーは装着員に負担をかける。

氷川はその覚悟を決めている。尾室も、それを全力でサポートするため危険と知りながらG3マイルドを装着する覚悟をもってここに来たのだろう。

「にしてもよくここまで来れたわね……」

警察は今てんやわんやの大騒ぎとなっているか、怪人たちに襲われているかだろう。怪人たちが道を塞ぐので、東京を抜けるだけでも至難の技だ。

尾室から場所は聞いていただろうが、今日なにかが起きるとは知

らなかっただろうのに。

「ああ、それは彼が」

氷川が外を指差す。

そこにいたのも元仮面ライダーの一人だった男だ。普通のバイクに乗りヘルメットを被っている。

かつての“仮面ライダーギルス”・あしはら芦原涼りょう。ギルスとはアギトの一種であるらしく、アギトとG3とは時には共に戦い時にはぶつかり合ってきた。

アギトやギルスといったライダーは怪人たちが現れると察知する力があるのだ。

だが、彼もまた仮面ライダーギルスとしての力は失ってしまったはずなのだ。

「なんの因果だろうな、ギルスの力を失っても俺の“野性の勘”とやらは失わなかったらしい」

「彼に連れられて僕はここに来たんです。“何かマズイ事が起きる”と言われて……初めは驚いたんですけど」

「なるほど……」

アギト・ギルス・ミラージュアギト・アナザーアギトの四人のライダーの力は確かに失われている。一番最初に失われたライダーたちが彼らだった。

しかし、“超能力”は未だ確認されているのだ。

“アギト・ギルス”の存在が消えただけで光のオーヴァーロードの力自体は残っているのかも知れない。

彼の超能力が今回の“大進攻”を事前に察知し、氷川をここへ連れてきたのだ。

「……なんとも微妙な心境だ。一時期はあのギルスの力を持った運命を呪った。だが、ギルスの力を失った今……俺はまた戦いたいと思っっている」

芦原涼はそう言ってキャッスルドランと襲い掛かってくる怪人たちを見る。

彼は望んで仮面ライダーギルスの力を手に入れたわけではなかった。仮面ライダーになってしまった男、というのが芦原涼には合っている。

その力、姿により彼は自分が信頼する水泳のコーチや恋人からも拒絶され、力を使うたび体が悲鳴をあげた。

だが、アナザーアギトである木野薫きの かあるに出会い、彼の闘志に火が燈った。

「あいつの……津上のようにはいかないな」

津上翔一。本名を沢木哲也と言い、仮面ライダーアギトだった男だ。

彼の証言が“世界から仮面ライダーが失われていっている”という  
ことを知る最初のきっかけだったのだが……

『何か変わったこと……ですか？』

うーん、伯父さんとこの菜園もよく育ってきてるし……。

今年は寒さが厳しかったんで、レタスとか絶品なんですよ。

いいじゃないですか、食べていって下さいよ。

同じ仮面ライダー仲間じゃないですか。

あ………すみません。

そういえば、もう俺仮面ライダーじゃありませんでした。

アギトの力、なんか失っちゃったみたいなんですよね……

あ、ほうれん草もあるんですよ。

食べます？』

脳天気な彼らしいといえば彼らしい。

今、彼の名はレストラン業界でちょっとした有名人となっている。  
彼の持つ店『AGIT』はかなり盛況しているそうで、常連客も  
多く獲得している。

彼は仮面ライダーとしての役割を真つ当しても次は日常で新たな  
目標を持てている。

そこが芦原涼はうらやましいのだろう。

「頼む、戦えるならこいつを戦わせてやってくれ。今はもう戦えな  
い、俺の分まで」

澄子は返答に困る。

というより、自分のなかで氷川誠をもう一度戦いに巻き込み、かつ危険と分かっている仮面ライダーの力を使わせることがいいことなのか。

氷川は戦うことを望んでいる。死ぬかも知れない戦いだっただが、彼には死ぬつもりはなく戦い通して生きるために力を奮う覚悟があった。

理屈は戦わせてはいけないと言っているが、気持ちは戦ってもらおうと思っていた。

「ああ、そつだ。伝言を頼まれていたんでした」

「伝言？」

「ええ、北條さんから。『天才小沢澄子さんによろしく』と」

警視庁本部きつてのエリートと名高かったのが北條透だ。

G3システムの装着員に真つ先に志願し、自分ではなく氷川誠に決定したことから度々G3システムを自分の物にしようと画策してきた澄子にとっては因縁の相手だった。

非常に皮肉家で、澄子は何度かムキになって食ってかかったことがある。

さて、そんな北條透が今の小沢澄子を見たらどんな嫌みったらしいことを言っただろう。

作戦を立てるべきリーダーが自分のチームを信じずに何も出来ない  
いと歎いているなどと知られたら、どんなことを生意気なあの口で  
言われるか。

気持ちが理屈を捻曲げるのには十分な腹立たしさとするとした気  
持ちは生まれた。

「キャツスルドランから救急指令！！ …… G3ユニット、出動よ  
！！ 氷川くん、尾室くん、準備しなさい！！ 敵は多いわよ！！」

その敵には彼女の言う“エセエリート”の馬鹿面”も含めていた

……

2055（二十時五十五分）、G4システム並びにG3ユニット、  
十年ぶりに戦闘オペレーション開始 ……！！

2

Gトレーラーがキャツスルドランの後ろから現れて、現れたイマ  
ジンの軍団へと突っ込む。

いきなりのその巨大な影に度肝を抜かれたイマジンたちは成す術  
なく轢き飛ばされ、Gトレーラーの突撃はイマジンの軍団の陣形を  
大きく崩した。

Gトレイラーはサイレンを鳴らしながら走行を続け、後ろのハッチを開き、タラップが展開しG3の専用ビークル『ガードチェイサー』を離脱させる。

ただし、もうG3ユニットは警視庁お抱えの組織ではないため、ガードチェイサーの『POLICE』の文字は消され、『RIDER』と書かれていた。

ガードチェイサーに乗るのはG3システムでもG4システムでもない。以前緊急の時に使ったG4-Xの強化正式版とも言える仮面ライダーだった。

恐らく、あれを開発したのは小沢澄子とは犬猿の仲であるはずの高村教授だ。かつてV-1システムを開発したあの教授なら参考データさえあれば作り上げられる。

仮面ライダーG4-Xはガードチェイサーを走らせながらGM-01『スコープイオン』をイマジンたちに撃った。

「ハアッ!!!」

G4-Xを装着していないと耐え切れず大怪我を負ってしまうほどの反動を生む銃撃。

強化前のスコープイオンの威力はせいぜいアンノウンの足止めくらいしかなかったが、劇的にパワーアップしているらしく数発命中したイマジンは叫び声を上げて爆砕した。

G4-Xはスコープイオンの72発全弾撃ち終わると、ガードチェイサーをおりて搭載されているGX-05『ケルベロス』に三桁の

暗証番号を入力、アクティブにさせる。

アタツシユモードからガトリングモードへ変形。その凄まじい反動に備えてG4-Xは身構え、トリガーを引く。

ガガガガッ！！ とG4-Xの腕で暴れるケルベロス。その反動をなんとか受け切るG4-X。

秒間三十発以上の特殊徹甲弾がイマジンの群れへと突き刺さり、命を刈り取っていく。

このケルベロスもG4のケルベロス改以上の威力に改良されているのは明らかな圧倒的な大火力だった。

「やるな、ポリ公たちも」

合図も待たずイマジンたちに突撃していったG3ユニットの活躍をキャツスルドランの中で音也は賞賛する。

普通に見ればこの行動は高ぶる闘志を抑え切れなかったと取れるが、そこは天才小沢澄子だ、先に火力が大きく単体相手よりも複数体相手で本領を発揮するG4-Xで攪乱した方がいいと判断した。

その策は功を制していた。

G4-Xが先に飛び出していったお陰でイジンたちに動揺と混乱が走っている。

「おい、お仲間がやらてるぞ、モモ」



「けっ！！ あんな野郎たちと一緒にすんじゃねえよっ！！」

音也の言葉に反応したのは髪を荒々しくアップにしている男性だ。髪の一部に赤のメッシュが入っており、胸にあるプレートには「山城」とある。

「が、羨ましくはあるんじゃないか？ “イメージの肉体”が失われてるから、適当な奴に入ってなきゃいけないんだっただか？」

「まあ、居心地わりいのは確かだけだよ」

「んじゃ、これ使え」

音也は『山城』に何かを投げ渡す。それはベルトと、ナックルのようだった。

四十四年前。

ファンガイアのキングであった音也がなんの因果か押し付けられてしまった、“ファンガイア殺し”の力。

仮面ライダーイクサのベルトとナックルだ。

「なんだ、コレ」

「俺は“別の”があるからな。これはお前が使え」

仮面ライダーイクサのプロトタイプ。

ライジングイクサを含めた強化版は消えてしまったが、プロトタ

イプであるがゆえ、これは残っていた。

「おい、いいのか？ これはあの『その命神になんとかかんとか』  
って奴にやるべきじゃないか？」

何となく要領を得ないが『山城』の言うのは二十二年前改良版の  
イクサを使っていた名護啓介なご けいすけのことだ。

「あいつも“人間”だ、寄る年波には逆らえない。それに、パワー  
だけは上げてあるから人間じゃ使えないらしい」

「ふーん……ってオイ！！ それって使ったらヤベーンじゃねえか  
！！」

このイクサのプロトタイプは脆刃の剣だ。その負荷は半端ではな  
く、ファンガイア四強に数えられるチエックメイトフォーの一人・  
ルークもそれで昏倒し、倒された。

また、キングである音也でさえ、そうだったのだ。

「なんだ“電王”もなくなつて役立たずになつたんだから、ちつと  
は喜んだらどうなんだ。んん？」

『山城』の正体は人間・山城に憑依したイメージン、モモタロスだ。

モモタロスは仲間のイメージンと共に野上良太郎に力を貸して、仮  
面ライダー電王として戦っていた。

しかし、“電王の記録”は失われ、“イメージンの肉体”も失われ  
たのでモモタロスには戦う術がなかった。

挑戦的に音也は『山城』に詰め寄りイエスカノーかの選択を迫った。

「て、てめえ……ッ！！ 分かったよ！！ やりやいいんだろ、やりやあー！！」

「うぐぐ……」と歯を食いしばって音也を睨みつけた後、モモタロスはやけくそぎみにそう吠えろと、イクサベルトを腰に巻いた。

ふふん、と音也は「してやったり」と鼻をならして笑顔を作った。

だが、

「それはお前もそうだろう、キングよ」

音也の頭上でそんなことを言う者がいた。

パタパタと小さな羽で羽ばたく丸みを帯びた奇妙な蝙蝠。

誇り高きキバツト族の王、キバツトバツト？世だ。息子のキバツトバツト？世と比べると黒と赤色が基調で目も緑色をしている。

『仮面ライダーダークキバ』への変身には欠かすことの出来ない存在だ。

「お前も“ファンガイアの肉体”は失われている。その状態でダークキバに変身したら、ただじゃ済まんぞ」

そう。

今から八年前と三百六十四日前だ。

ちょうど、ミナが誕生し数多の虚構の世界が誕生した日を境に、ファンガイアの肉体は失われていた。

ファンガイアの特徴の一つ、人間の三倍以上の長命は失われていないものの、怪人態への変身は出来ないようになった。

そんな状態でダークキバの力を使えば、果たして音也の体がどうなるか。音也は知らないわけではなかった。

「やらないわけにもいかないだろう、皆頑張ってる」

音也はらしくもなく静かに言った。

ダークキバになれば、イクサプロトタイプとは比較にならないほどの負荷が襲い掛かってくる。

確実に寿命は大きく削られるだろうし、使いすぎれば死んでしまいかも知れない。

だが、それでも構わない。

何もせずに死ぬのは音也の信条に反しているというのが大きい理由だったが、それだけではなかった。

ミナ。

九年前に孫としたときから、音也に取っては掛け替えのない存在

だ。守りきれなければ、紅音也の名が泣くという物。

世界で一番に強く、一番に人間らしく、一番に外れた者で、一番悲しい存在だからこそ、音也は守ると決めていた。

「ふうん、熱くなってるじゃないの」

音也の横にヒゲを少し生やし、牛乳を入れるタンク　ただし入っているのは牛乳ではないらしく、ガシヤガシヤと音をたてている　を持つ男が現れる。

この男の名は伊達明<sup>だて あきら</sup>。仮面ライダーオーズ・火野映司と一緒にグリードと戦った男で初代『仮面ライダーバース』だ。

このタンクに入っているのはきつとセルメダルだ。

オーズの喪失は“コアメダル”と“バース”のみ。よって“セルメダル”と“プロトタイプバース”は残っている。

「……なんだか、ギリギリの戦いだな」

残っている仮面ライダーはプロトタイプイクサ、プロトタイプバース、ダークキバのみ。

二つが試作段階の物を強引にパワーアップさせたもので、二つが使えば強い負荷がかかる代物だった。

「ま、そりゃそうだけだな。その分、報酬は弾んで貰うとしますか」

報酬とは命と希望。

彼等にとっては十分なご褒美だった。

「さあ、半世紀ぶりくらいか。いくぞ、黒いのー!」

「OK、絶滅タイムだ」

音也が右腕を差し出すと、キバツバット？世は親指と人差し指の間あたりに噛み付く。

そこから、ダークキバの力が音也の肉体に注入されて、身体に痣のような紋が浮かぶ。

「変……身……ッ!」

ファンガイアの肉体を失っている音也はそれだけで身体に焼けるような痛みが走るが、鎖と共に現れたベルトにキバツバット？世をセツトした。

「行くぜ行くぜ行くぜ……ッ!」

モモタロスは山城の身体でハイテンションに叫ぶと、拳と拳をぶつけるようにしてイクサナックルを起動。

【レ・デ・イー】

モモタロスを「変身資質あり」と判断するイクサナツクル。

「変身!!!」

モモタロスは仮面ライダー電王時代のようにポーズを決めながら、イクサナツクルをベルトへ押し込む。

【フ・イ・ス・ト・オ・ン】

「さあて、稼ぎますか」

ピンツとセルメダルタンクから取り出したセルメダルを一枚空へ弾く。

伊達はそれを肩の高さ辺りでパシッとキャッチするとバースドレイバーのバースロットにセルメダルを投入。

グループアクセラレーターを回してセルリアクターを解放。生体強化スーツが転送され、伊達を包んだ。

仮面ライダーダークキバ、仮面ライダーイクサ、仮面ライダーバース。カテゴリーも違う三人の仮面ライダーがここに集結する。

三人の仮面ライダーはそれぞれの戦う意思を持ち、いざ戦場へと向かった。

キャツスルドランにイマジンたちが襲撃してくるよりも少し時を  
遡り  
……

ここは赫塚ミナが暮らしていた街から少し離れたとある街。

この街にも怪人たちはやって来ていた。

ここに送り込まれた理由は怪人たちは知らなかったが、各々に好きなことをして破壊を撒き散らしている。

多くいるのはグロンギと呼ばれる怪人とファンガイアと呼ばれる  
怪人、この二種類。

両者の行動目的は同じで、“人を殺す”それだけだった。

グロンギたちは自らの称号を引き上げるために“ゲゲル”と言う  
ものを行っている。これは彼らの言葉で「ゲーム」を表し、その内  
容は与えられた制限時間の中で決められた人数を殺すというもの。

ファンガイアたちは殺人自体が目的ではなく、人の持つ“魂”が  
目的だ。彼らはそれを欲し、人間に牙を突き立ててそれを吸い上げ  
る。ライフエナジーを吸われた人間は皆、半透明の死体となって朽  
ちていた。



だが、お互いの目的が人間であることが衝突を生んでいた。

グロンギからしてみれば、ファンガイアが人のライフエナジーを吸う度に人間の数が減って、ゲゲルの成功率が小さくなっていく。

ファンガイアからしてみれば、グロンギたちがゲゲルで人間を殺せば殺すほどライフエナジーの総量はどんどん減っていつてしまう。

両者はお互いにかなり邪魔な存在だった。

グロンギとファンガイアの間で戦いが起こっていた。グロンギ側は『ゴ』の称号を持つ者が、ファンガイア側は『チエックメイトフオー』に宛てがわれた怪人がいないので、両者の戦力は五分五分だ。

ビルを崩し、アスファルトを叩き割り、コンクリートを砕き、植えられた木々を薙ぎ倒し、家を焼き払う。

破壊行為に徹しているわけじゃなかったが、彼らの戦いにより街は見る影がなくなるくらい蹂躪されていた。

すると、一体のファンガイアのグロンギを狙った一撃が外れて、大地を大きく削る。

それ自体はありふれたとばっちりの破壊だったが、

「……………??？」

地表が削り取られて、新たに外気に触れた地面になにかが埋められていた。

いや、埋葬という形が近い。

人の顔と腕と思わしきものだった。服装などを見ると二、三年じやきかない結構の人物のようだったが……

地面に埋められて、息を引き取って、なお朽ちていない。隠れた生気があり、白骨化したり腐ったりもしていなかった。

普通ではない。

地面にじかに埋められているというに、エジプトのピラミッドのミイラを守り貫こうとする棺桶のようなものに入れられているようだった。

まるで……再び自分の力が必要となるのを待ち侘びている英雄のようだ。

さて、この者が眠りについてから三十年が過ぎている。

世界は今仮面ライダーを必要としているのだ。

きらびやかな月光が彼の肉体に触れる。それを受けて彼の体内で、滅びさつたはずの“創世王の力”が目を覚まし、その力を新たに示した。

影の王子シャドームーンから、月光の子シャドールXへ。

バチバチツツ！！と

地面へ突き出た彼の腕が拳を作り、王の力である霊石・キングストーンが生み出すエネルギーが緑色の雷となり、地面からその身を起こすと共に広げた手のさきから放射され、周囲に降り注ぐ。

「「ギイツツ！？」」

グロンギ、ファンガイア、両者はまとめてその緑の雷に身を焼かれて身を倒す。

「……………」

カシャ、カシャ……と静かだが何処か威圧的な足音たて、再びその者は君臨する。

地に転がり、身もだえするグロンギとファンガイアの群れが強大

な力を持つ“王”に与する民の姿にしか見えなくなるほど、

彼は君臨した。

三十年前とその姿はほとんど代わっていない。

以前と変わらぬ銀の鎧・シルバーガードに緑色の複眼・マイティアイ、肘には黒い刃エルボートリガー、足にはレッグトリガー。

ただ、腹部に二対の三日月状のエネルギー吸収生産機構『ムーンバスク』が出来ている。

彼は記憶が定かではないように見えた。苦しそうに呻き、発狂しそうな危うさも秘めている。

グロンギとファンガイアは唐突に現れたこの相手に当惑していたが、それも振り切り、襲い掛かった。

それは愚かな抵抗だった。

彼は一旦自分のことに対する混乱を捨て去り、目の前にいる怪人たちを殲滅することだけを考える。

襲い来る怪人たちを彼は一閃で切り捨てる。

彼の手に持つ赤き双剣・シャドーセイバーはその凄まじき切れ味

を持って、一刀両断。

時空間さえ切り裂きそうな鋭利な斬撃を受けた怪人たちはたった一撃でその命を奪われた。

グロンギは爆発し、ファンガイアはステンドグラス状となり砕け散った。

あつという間の戦闘だった。もはや殺陣ではなく、王の制裁とでも言うような。

切り捨て終わり、彼には虚しさが募った。

『俺は一体だれなんだ？ 何をすればいい。何をすべきなんだ。』

答える者はいなかった。

ただし ……

夜の向こう側。朝日がさしている次元の異なっている黄金のオーロラの向こう側に。

黒い鎧と真っ赤な目をした勇者は立っていた。

## CHANGE↷BATTLE OH RIDER↷(後書き)

今回現れた仮面ライダーは全部で六人。

まずはG4-X。これはG4を改良したのではなく、G3-XをG4の部品で手当したものです。これはHERO SAGAでも登場しています。氷川さん、もう年でしょうに……

次にダークキバ。この世界は原作と違い“音也側がファンガイア”です(キバ編で詳しくやります)。深央が渡を止めたのはキバの力もファンガイアの“力”のない渡には危険だから。なお、次狼たちも変身出来ないので、クウガの力にやられた次狼はあんなに大ダメージだったんですね。

次にプロトイクサ。変身するのはなあんとモモタロスイン俺？山城イマジンに憑依されている間は身体能力も上がるので変身可能とされています。かわいそうっす、山城さん。“イクサカリバー”も残っているんでそれを使います。

次にプロトバース。これは“下手に強化すると『バース』と判断され世界に消される”という理由でプロトタイプのままです。ややこしいですねえ。

最後はシャドームーン！正直言うと彼を復活するのは気が進まないところもありました。あれは手を加えちゃいけない涙の回でしたからけど……やっぱりキチンと“英雄”としてあげたかった。

最後の最後に、黒い鎧に真っ赤の目の勇者。これは……分かるでしょう。ヒント、てつを。ヒント2、ブアアックツツ！！



今回のタイトルは「ライダー、ユアザファイター」。知ってる人は知ってる、知らない人は覚えてね。

バトルって書きやすいね、マジで。けど「このライダーのここんこの部品の名前ってなんだっけ？」となって調べ回らなくちゃいけないんだな。

……トランサーシールドって、どのライダーのどの部分分かる人います？

あ！！ 本編見ずにお答え下さい！！



「く……………」

G4-Xを装着した氷川は腕に痛みを覚える。ケルベロスを改良しグレードアップした『ヤマタノオロチ』が原因だった。

ケルベロス改よりも数段強力となっているこのヤマタノオロチは最大で秒間五十発の特殊徹甲弾を吐き出し、その弾数は千発。

一つの弾倉で二十秒間撃ちっぱなしでいられるが、これはもはや対軍兵器の域にある。

本来は生身で扱える代物ではなく、地面に堅牢にボルトで固定し、その上衝撃吸収剤なども併用しなければならない。

そのヤマタノオロチの反動を見事に押さえているG4-Xだったが、氷川にやって来る負荷は大きい。

ヤマタノオロチが弾を出さなくなり、やっとの思いで全弾を撃ち終えた氷川。

だが、その分イメージ側に与えた損害は大きく、このガトリング掃射だけで三十体あまりのイメージンを駆逐出来ていた。

アギトたちとアンノウンと戦っていたところと比べると技術力と機動力、パワーは飛躍的に上がっており、桁違いの戦果だ。

十年前は上級のアンノウンを相手にするといつも劣勢に立たされ

たものだが、今のG4-Xならば、話は違ってくるだろう。

『GX-05はしばらくの間使えないわ。GS-03アクティブ！』

ガードチェイサーに搭載されているGS-03『デストロイヤー』を右腕に装着。

といつても、これももう十年前までのGS-03ではなく、同様に改良されている。

ファイズの“ファイズエッジ”の技術を参考にして、超高周波ブレードにダイヤモンドの粒子を纏わせているのだ。

そのため、刃が月光を反射して白銀に薄く煌めく。

相応しい改名をするならばGSX-03『ジェノサイダー』とでも言えるだろうか。

氷川は立つ巨木を使って、その切れ味をイメージたちの目に焼き付けさせた。

チェーンソーを使っても切るのに数十分は掛かりそうな幅九十センチもある巨木がクリーム菓子にフォークを入れるかのように滑らかに斬られる。

巨木は他の木の枝などを巻き込みながらメキメキと倒れた。

イメージたちの何体かは下敷きになってたまるかと逃げ、同時にG4-Xからも距離を取っていく。

改良したとは言え、このジェノサイダーは対低級怪人用の武装ではない。

威力がありすぎ、また巨大であるので小回りが生かなさすぎる。そのため、複数体を相手にするには不向きなのだ。

これは超重量級の怪人を相手にした場合、Gシリーズが太刀打ちできないのを想定して作られたもの。

鈍重だが、装甲は堅い怪人との戦闘のための装備だった。

だから、氷川は ……あるいは小沢澄子はこれを実際に使って戦う気はない。

イマジンの軍団もジェノサイダーがいかにか鋭い切れ味を持っているても、小回りが利かず、大群を相手にするのは不向きと知っている。

よって、ジェノサイダーの攻撃で一網打尽にならないようにバラけていたのがまた陣形を整え始めた。

小沢澄子の作戦通りだ。

イマジンはG4-Xに一齐に飛び掛かる態勢を整えた。

ノルマは達成している。

だから、あとは他の仮面ライダーに任せられる。

【セル・バースト】

微かにイマジンのもとに届いたその機械音声。それが鳴ったのはイマジンたちの頭上。

「OK、プレストキャノン乱れ撃ち~~~~ツツ!~!」

イマジンたちの頭上の木の太い枝にいつの間にか仮面ライダーバース・伊達明が控えていた。

伊達はプレストキャノンをしっかりと両手で支え、標準をイマジンたちに向ける。

それを受けて、G4-Xは合図されたようなタイミングの良さで余波を受けないようにしゃがみ込む。

ゴオオオオツツ!! と

仮面ライダーバースの胸部ユニット『プレストキャノン』が機動し、セルメダルの最大パワーがサラマンダラツシャーに充填され、一気に放射。

赤い光線に見える『欲望』というエネルギーの奔流がG4-Xを



だが、真木清人はその代わり、この二つを徹底的に強化したそう  
だ。

「お、おのれ……ッッ!!」

「おのれだよ!!? 仮面ライダーたちまとめてやっっちゃうよ!?  
やっっちゃうってばよう!?!?」

バースの強化された最大出力ブレストキャノンを受けてもまだ立  
ち上がれているイマジンが、二体。

ヤモリとイモリを意匠とした対になるかのような二体。仮面ライ  
ダー電王も苦戦を強いられたゲッコイマジンとニユートイマジン。

これは仮面ライダー電王が戦ったイマジンの黒幕<sup>ボス</sup>、特異点の少年・  
カイのイメージしたイマジン。

つまり、直属の部下。

他の低級イマジンとは比べものにならない強敵だ。現に電王も散  
々苦戦を強いられ、一度敗走もしていた。

が……

「ウラアアアアアッ!!」

「グハッ!?!」

G4-Xでもプロトタイプバースでもない新たな仮面ライダーが

降ってきて、ゲッコイマジンを持つ剣で着地ざまに切り付ける。

仮面ライダーイクサ。これも試作段階のもののパワーアップバージョンだったが、紛れもなく仮面ライダーだ。

金のクロスシールドはクローズし、バーストモードと比べると出力は60%程しかなく、完全な力を出すことは出来ないセーフモード。

だが、完成版VER・11の装備した物を強化したイクサカリバーを持っている。

「くうくうッッ！！ 俺！ すんごく久々に、参上！！」

ただし、その力を使っているのは四十四年前の正規装着者の紅音也でも、二十二年前の正規装着者の名護啓介でもない。

紅音也旧知の山城という男に憑依するイマジン、モモタロスだった。

これは何故かというと、“完成版イクサ”は失われており、プロトタイプしか残っていなかった。

それでもなんとか負荷を取り除き、パワーを引き上げようとした結果、力の全てを使うことの出来ないセーフモードでもライジング並に強力となった。

しかし、負荷も軽減化されたものの、反動で怪人並の肉体を持つ者にしか扱えないようになったのだ。

イマジンに憑依された者は例え野上良太郎のような軟弱な者でもコンクリート塊を叩き割るくらいに強化される。

よって、山城に憑依したモモタロスのみがイクサへの変身資質を持っていた。

ちなみに変身した後、「モモタロスだけ戦えてずるい」と仲間内で言い争い（山城の身体の奪い合い）が起こったらしい。

結局ジャンケンでモモタロスに決められたらしいが。

「やっちゃうよ!？ イクサやっちゃうってばア!!」

ニユートイマジンが反撃に出る。持つ鎌で、モモタロスイクサの首を刈り取りにかかった。

「おおっと、オイタはするなイモリちゃん」

が、横からの蹴りがニユートイマジンの鋭利な鎌の刃を押さえ、蹴りあげる。

「あれえ……ツツ!? ゲハアアアツツ!!」

ア然、そして攻撃を受ける。

武装解除されたニユートイマジンはモモタロスイクサの突きと新たな仮面ライダーの拳を浴びせられる。

新たな仮面ライダーの名はダークキバ。仮面ライダーキバの『黄金のキバ』と呼ばれるエンペラーフォームと互角以上のスペックを



持つ。

その姿は蝙蝠というよりヴァンパイアに近い意匠で、身体の一部は血のような赤黒さを持っている。

タツロツトなどの覚醒魔獣を必要とせず、魔皇力を抑制する力テナも見られずキバよりもより使用者の力を引き出す。

通称、『闇のキバ』。

まさに、これは王のために作られた鎧だった。

その力は世界を終焉に導く程に巨大。

キバツトバット？世がフェッスルを三度吹いて発動するウェイクアップ3『キングスワールドエンド』はファンガイアの上位種であるレジエンドルガ族をまとめて滅ぼしたという。

「決めるぞ、モモ」

「へっ、言われるまでもなく俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

「ウェイクアップは1でいい。絶滅タイムの……カウントダウンだ」

「闇に染めるか……」

【~~~~~】

キバツトバット？世がウェイクアップフェッスルを一度だけ吹い

た。

発動するウエイクアップ！『ダークネスクラッシュ』

「見せてやるよ、特別なスペシャルだ。行くな、俺の必殺技……戦<sup>イクサ</sup>バーション！」

【イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ライ・イズ・アツ・プ】

モモタロスがイクサベルトにナツクルフェッスルを読み込ませると、この電子コールは鳴った。

ブシュッと煙を吹いてイクサナツクルに全エネルギーが集められる。

発動する『ブロウクン・ファンク』

両者は一歩踏み込んで拳を固く握る。

「ダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！」

仮面ライダーダークキバの魔皇力の集中した拳がゲッコイマシンに、

仮面ライダーイクサのイクサナツクルがニユートイマジンに、

思いつき叩きこまれる。

強大なる魔皇力と膨大なエネルギー。それを受けた二体のイマジンそれぞれ身体に風穴をあけた。

「が、ゴオ……ウ……ツッ!!」

意識も魂も失い、ゲッコイマジンとニョートイマジンはバツタリと倒れ、大爆発という形で果てる。

「ツシャア~~~~!! 見たかよ、俺の必殺技戦バージョン!!」

「ああああ、見た見た」

勝利に酔って雄叫びをあげるモモタロスに、音也は適当な生返事を返す。

とはいえ、このパワー。

仮面ライダー電王はあのゲッコイマジンとニョートイマジンを倒すのにモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスの四人のイマジンたちの力が集まったクライマックスフォームを要した。

仮面ライダーゼロノスもゲッコイマジンにトドメをさせたが、それはかなりギリギリの戦いだった。

それに対して仮面ライダーイクサのプロトタイプは低級のファンガイアには勝ちを取れるのだが、『チエックメイトフォー』のルーク、ライオンファンガイアなどを相手にすると、まるで歯がたたなかった。

変身できる仮面ライダーの数が残り十人を切っているというのは深刻な現状だが、仮面ライダーが力を結集するところまで強力になるとは。

音也は内心で舌を巻いた。

だが……

「う……ぐお……ッッ！」

「な、なんだってんだ……ッッ!?」

音也とモモタロスの身体に焼けるような痛みが走り、両者は膝をついてしまう。

負荷だ。

仮面ライダーダークキバはファンガイアの王のために作られた。よって、資格なき者が使用すればたちまち使用者に死をもたらす。

音也は紛れも無いファンガイアのキングだったが、ファンガイアの肉体は“喪失”により失われてしまっている。

仮面ライダーイクサのプロトタイプはまだまだ安定していないシステムであるので、誰が使用しても相応の負担がかかってくるのだ。

「ぐ……くそ……!!　おい、へばってんじゃない、ぞ、モモタロス……!!」

「こつちの……台詞だ、そりゃあ……!!　こんなもん、屁でもねえ、んだよ……!!」

なんとかお互いを叱咤激励する悪態を吐きながら、音也とモモタ

ロスは立ち上がる。

限界に近い状態だったろうに、それでも。

「まずいな……!!」

巨木の枝に立つ伊達はその様子を見て仮面ライダーバースのプロトタイプのマスクの下で苦い顔を作る。

仮面ライダーダークキバと仮面ライダーイクサはその負荷により、長い間戦うのは好ましくない。

出来れば短期間で畳み掛けるようにしたくて、たてられたのが小沢澄子のこの作戦だ。

これによって、素早く敵の数を半分以下までに減らすことが出来たが、それでも足りない。

「ん……?」

森の奥から何者かが歩いて来ている。

高校生くらいに見える少年だ。カレンダーのように見える紙を抱え、危機感も持たずにいる。

その容貌はイメージたちを率いていた特異点の少年・カイに似通っている。というか、瓜二つだった。

分岐点の鍵を手に入れられなかったせいでイメージのいる未来ごと消えたはずだが、モモタロスたちのように時を手に入れたとも考

えられない。

電王の物語が終わったのは今から五年前、イマジンたちのいる未来へと続かせようとした陰謀が潰えた時、不完全な特異点であるカイはイマジンたちとともに消滅した。

かりにカイがこの時代に時を手に入れられたのなら、もっと早くに復活していたはずだ。

もうほとんどの仮面ライダーの物語は終わっている。怪人たちによるこれは、間違いなく他世界からの進攻だ。

だから、あのカイに見える少年は異世界の同一人物……またはこの怪人たちと同様に記憶から作られた存在。

「あゝあ、派手にやられちゃって、まあ……。ほんとに揃いも揃って使えないなあ……」

カイに似た少年は夢遊病患者のような覚束ない動きをとった。生きていて、その動きが“ものすごくいい加減”だった。

「……………??？」

伊達は違和感を感じて首を捻る。それは間違い探しで難題をぶつけられたよう……ではなく、

どう見ても間違えなどないのに、ピッタリと一致することが証明されているのに、それでも間違えがあると言われた時のようで。

問題にではなくて、質題自体に疑問を持った時。その瞬間に通じるもの。

あの少年はカイではない、この世界の住民とも違はずだ。

だが、だがしかし、あえて言わせてもらおうとだ。

なら、人間か。なら、真つ当な生物か？

「……おいおい、まさか、な……」

伊達はこれによく似た感覚を何度か味わっている。仮面ライダー  
オーズ・火野映司と共に戦っていた時期にだ。

敵はグリードという種族だった。いや、敵だけではなく、仮面ラ  
イダー側にいた“二人”もこれに属していた。

人間の姿をしているのに、そうじゃない。生物として生きている  
のに、そうじゃない。

人間、生物と言い切れないある種の不安定さ・イレギュラーさがあるのだ。そして、あの少年からもそんな感じがする。

変身のためのアイテムを使わないで人間の姿をした、または人間

の姿に化けている怪人は他にも沢山いる。

グロンギ、オルフェノク、上級のアンデッド、魔化魍の童子と姫、ワーム、ファンガイア。2000年を境にそういった怪人が多く現れていた。

だから、人間ではない人間などはよく居る。

それなのに、あの少年に関しては少々それが強く言えてしまう。

“人間ではない”という判断に歯止めが利かない。

それは“生物か生物でないか”というレベルに達してしまうくらい段違いだった。

一度だけ、伊達は同じように言える存在を見たことがある。仮面ライダーオーズが鳥系グリード・アंकと臨んだ全てを賭けた最終決戦。

あの時、バイクを車をビルを街を、大量のセルメダルに分解して世界を破滅に導こうとしたグリードの“完全暴走態”だ。

余りにも“生物が持っているいい領域”から外れすぎているのだ、グリードもあの少年も。

相手が人間の姿をしていることを伊達は意識してから忘れさせた。



擒賊擒王だ。  
きんぞくきんおう

これは三十六計の第十八計で、杜甫の「人を射んとすれば先ず馬を射よ、敵を擒えんとすれば先ず王を擒えよ」という言葉からきている。

つまり、敵の主導者を先に攻略しておくことで相手の弱体化を計れというもの。

イマジンに置き換えると、

イマジンを討たんと欲するならばボスを討て、となるのだろうか。

ただし、あくまでも牽制。相手は人間の姿をしている、直撃させるわけにはいかない。少し余波の風の煽りを受ける程度に……

伊達はバースロットにセルメダルを二枚チャリンチャリンと投げし、グランプアクセラレーターを回す。

【セル・バースト】

トランサーシールドが展開、セルリアクターが解放されてセルメダルのエネルギーが砲撃エネルギーへと変換される。

「ブレストキャノン、ハアツツ!!」

しっかりと上体を支え、ブレストキャノンを放つ。

単発のセルバーストとは言え、威力は充分。狙いはカイの真横、アルビノレオイマジンがいる辺り……



ならば、何が？

それは、ほとんど決まっているような物。

カイに似た少年がこのプレストキャノンの攻撃を擦曲げた。

ただの人間に見える少年が、『欲望』という人間の持つ底知れぬ  
パワーを、

超科学で作られた“兵器”の一撃を凌いでみせた。

そう見解して構わないだろう。

「あ、そうか、アレだ。アレがあいつら沢山ぶつ殺したんだ……」

カイに似た少年は木の枝の上にいる仮面ライダーバース・伊達明  
を「やっと見つけた」という風に指さして言う。

「スツゴい……腹立つなあ……。なあ、俺今そんな顔してるだろう  
？」

少年の顔は言っていることとそぐわない満面の笑みだった。

笑み、その後ろに冷たい怒りとイマジンのものとは全く異なった  
異形を抱えこんでいた。



今回は“敵”の片鱗にちょっと触れました。

敵は……カイ似た少年だけじゃないんだな、これが……

でも、カイって不思議な奴だったよね、私はなぜ特異点である彼が最後に消えてしまったのが今だよくわかってない……分岐点は別なのか……？

自分の身体をこじ開けてって……今思つと……

べるぜ   ブのアランドロンw

CHANGE TO FOREVER AND YOU (前書き)

タグとかあわせると一万六千九百文字！

……わけた方がいいのかな？

ちなみにこの世界は「仮面ライダーSPIRITS」通称ライスピ  
やHERO SAGAからもとっています。

といつてもバダンシンドロームや四国月面へとかはなかった設定。  
怪人たちが世界に知れ渡ることなく、あくまで表明上は平和な世界  
です。

けど……HERO SAGA読めてない……。パソコンがないから  
注文も出来ない……。

誰か売つてるところ教えてくれえ……

CHANGE TO FOREVER AND YOU

「なあ、俺今そんな顔をしてるだろう？」

キヤッスルドランと少し離れた傾斜の厳しい山の斜面にバース、イクサ、ダークキバ、G4-Xの四人の仮面ライダーがおり、イメージンたちと激闘を繰り広げていた。

この台詞を言ったのはイメージンを率いる少年のもので、少年の今の表情は笑顔だ。

「へ……どこが……!!」

伊達は確信を持って再び攻撃に移る。

強化されたバースのブレストキャノンの光線を捻曲げるなど、最強クラスにいる怪人にすら難しいことだ。

あれは怪物、一切の手加減は出来ない。

伊達はブレストキャノンの攻撃は通用しないと悟り、バースバスターを構えた。

もう当たらないようにしようだとかいう遠慮は無用だ。

イグニッショントリガーを引き、セルメダルからパワーを抽出したエネルギー弾を連射。

「ふんッ……!!」

が、そのセルメダルエネルギー弾をカイに似た少年の横にいるイマジン、アルビノレオイマジンがロッドで弾く。

あのアルビノレオイマジンもカイ自らがイメージして生み出されたイマジン。

つまり、ゲッコイマジン・ニョートイマジンと同様にカイ直属のイマジンだった。その実力はゲッコイマジン・ニョートイマジンよりも更に高く、ゼロノスを敗走させるくらいに強力な力を持つイマジンだ。

伊達の放ったバースバスターの攻撃はいとも簡単にアルビノレオイマジンに防ぎきられてしまった。

「あんのホワイトライオンちゃん、なかなかやるね。じゃあ、これならどうだ!？」

伊達はくじけずに次の行動へ移る。

セルバレットポッドを銃口部分、フラッシュャーマズルにセット。これにより、バースバスターの威力は更に上がる。

「おら、シュートツツ!」

【セル・バースト】

バースバスターの最高火力で伊達は勝負をかける。これはブレストキャノンのセル・バーストほどの威力はないが、強化されているので強力には違いない。



流石のアルビノレイマジンもこれをカイに被害を出さないように防ぎきめることは出来ないはずだ。

標準を示す光のリングが強化版バースバスターの銃口のあたりに現れて、密度の高いエネルギーの塊が発射される。

サッカーボール大のエネルギー弾は今度は屈折したりはせず、真っすぐカイに見える少年へ向かって飛んでいつている。

よし、イケる …… そう伊達は思ったのだが。

「面倒臭いぞ」

カイに見える少年はこんどこそ怒りを現にして自分のところへ飛んでくる光球を睨みつけた。

ポアツ!!! と突如カイに見える少年の腕が燃えだしたかのように見えた。

しかし、違う。

その少年の腕に纏わる炎は冷たさを感じるくらいに澄んだ青色をしていて、少年の自由自在であるかのようだった。

「消える」

少年はその青い炎を同じようにサッカーボール大の塊に変え、ブンツと放り投げた。

バースバスターのエネルギー弾と少年が操る青い色をした炎球は空中で激突する。

勝者は、少年の炎球の方だった。

青い炎の玉がバースバスター最大出力のエネルギー弾を打ち破って、伊達のいる木の枝の上へと突っ切る。

「うおツツ!!」

伊達はなんとか身を捻ってそれを避けるが、そのかわり高い木の枝の上からバランスを崩して落ちてしまう。

「いつつってえええええ〜……………」

背中を打ち、軽い呼吸困難になりながらも伊達は立ち上がる。

「おい、大丈夫かおでん!」

自分の身体も仮面ライダーイクサの負荷によって悲鳴を上げているのにモモタロスは落ちてきた伊達に声をかけた。

「ああ、落っこちただけだ……………心配ご無用、赤鬼ちゃん。だが……………」



少年は本当になにもしてはいなかった。

なのに、モモタロスの拳とイクサカリバーは止められていた。

止まってしまっただけのものがあつたのだ。

カイに似た少年の周りに黄金のシールドのようなものが展開されていたのだった。

得体の知れない未知なるエネルギーが形を持ち、モモタロスの拳とイクサカリバーの斬撃を受け止めている。

それを見て一番驚いたのは少し離れたところでその力を見ていたG4-Xを装着する氷川だった。

前に一度、あのシールドのようなものを見たことがある。

津上翔一、芦原涼、木野薫の三人がアギトの力を失っていたときの話だ。

「貴方たちの命を奪わなければならない」と言って現れた闇のオーヴァーロードがああシールドに似た力を使って、ケルベロスの攻撃を完全に防いでいた。

だが、信じられない。

あれは神の力、力そのものの力だ。

バースバスターの攻撃を破ってみせた青い炎の攻撃はオルフェノクの力。ラッキークローバークラスの強力な個体はしばしばあの力を使っていた。

そのオルフェノクの力だけでも持っているのが謎であるのに、神の力まで。

普通ありえない。絶対にありえない。

つまりは、

「まさか……!?!」

そう、

赫塚ミナのような存在を生みだそうとしたのはなにもこの世界だけじゃなかったということだった。

「ぐあッッ!!」

モモタロスはその「神の力」のシールドに弾かれて吹き飛ばす。

かろうじて耐え、変身解除はされなかったが、受けたダメージは大きそうだった。

「ホントにめんどくさい。なんでこんなことしなくちゃならないかなあ？ まとめて踏み潰しちゃうかおうか」

音也、モモタロス、伊達、氷川。四人に悪寒が走った。

踏み潰す。

それは巨大な者、絶対的に相手よりも上位にいる者、圧倒的な力を持つ者が使うような言い回しだ。

バース、G4-X、イクサのマシン系ライダーは改良を重ね、そのパワーや性能を上げている。ダークキバは各主役ライダーの最強フォームにも匹敵する力を持ったライダーだ。

現に、低級とはいえイマジンを百体、イマジンの中で上位に君臨するゲッコイマジンとニユートイマジンをあつという間に倒してみせた。

その四人の仮面ライダーに向かつての、余裕。これは自分の実力が四人の仮面ライダーを合わせたものよりも大きいと自負しているということ。

だが、それ以上に……四人は思い知らされた。

人の命を守るため、世界を守るために戦ってはいるが実のところ、自分たちは相手の目的や正体を知らない。

今から九年前仮面ライダーライアだった手塚海之の占いにより、  
“遠くない未来、怪人たちの大進攻がある”と判明した。

所詮ただの占いだとするのは簡単だが、彼の占いの的中率というのは無視出来ないものだった。

更に、仮面ライダーアギトに連なる超能力者たちもその未来を予知していたのだ。

これはただ事ではない。確かに超能力者には過去の映像を透視したりする能力があるので、未来を読んでしまうというのも十分に考えられることだ。

そして、その時偶然この世界を訪れていた『世界の破壊者』・仮面ライダーディケイドの門矢士<sup>かじやつかさ</sup>。

彼らの調べで早くも十年後怪人たちがこの世界に押し寄せると分かった。

だから仮面ライダーは九年間に渡り準備を固めてきた。それがハーツシステム・仮面ライダーディハーツだった。

しかし、仮面ライダーたちはどういった理由で怪人たちがこの世界にやって来るのかは知らなかった。

今までは単純な破壊衝動かと考えられてきたのだが、どうにも違いそうだった。

単なる“世界の破壊”が目的ならば、あの“カイに似た少年”のようないリーダー格など必要としない。

軍があって、それを率いているリーダー格がいて……それではまる

で“ちゃんとした組織”である。

かつての悪の秘密結社・シヨツカーのように。

いや、複数の怪人たちを束ねているとなるとその規模はもっともつと大きい。

十号仮面ライダー、仮面ライダーZ<sup>セクロス</sup>X・<sup>むらやめ</sup>村雨良<sup>りょう</sup>。

そのゼクロスに一号や二号、V3ら、合わせて十人の仮面ライダーが戦った最大の規模を持つ秘密結社『<sup>バタン</sup>BADAN』。

世界を一呑みにしてしまえそうな……そのような、とてつもない規模だ。

そんな強大な力を持つ組織が、一体なんのためになにを求めて、わざわざこの世界を襲う必要があったのか。

「何もするな」とか言われてるけどさあ……ぶつちゃけ言つとどつでもいいんだわ……。暇だからさ、適当にアレとか潰そつ……」

ククツ、と“強大な組織”に属するカイトに似た少年は下を向いて笑う。

「仮面ライダーとか……あと“赫塚ミナ”とか」



少年の存在感が周囲を覆いつくす。まるで、カイに似た少年から爆風が吹いたようだった。

今までの青い炎球による攻撃や闇のオーヴァーロードの黄金のシールドに似た力などはまだまだ序ノ口。

より攻撃的に、より破壊的に、より完成された存在へと上昇する。<sup>ソフト</sup>

「少し、待ちたまえ」

だが、それは留められた。カイに似た少年がその本領を發揮しようとしたとき、誰かが少年の腕を握ったことにより。

新たな登場人物。

少年よりも遥かに年をくっついて、きらびやかな装飾品を身につけ、高級そうなスーツを着ている老人。

その老人が不可侵の領域に悠々と入り込み、少年の暴走とも言える行動を抑えつけた。

「あまり、仮面ライダーと“カクツカミナ”に干渉するな。計画にどんな障害が起きるか分からん」

「うるっさいなあ……！！ 邪魔するなよ」

カイに似た少年はその老人の手を少々強引に振りほどく。

老人へのいたわりだとかは全くないものだったが、その老人はそれを責めることなく何事もなかったように振る舞う。

老人は冷静にサングラスの位置を直す。押し上げられたサングラスがキラリと光った。

あの老人も、カイの所属する“強大な組織”の一員であるらしい。老人の後ろには怪人が現れた街に射した黄金のオーロラが出現している。

このオーロラはディケイドのものとは少し異なってはいるものの、彼らの存在する世界へと繋がっているらしい。

「君は些か軽率に動きすぎる。ここへ来ること自体禁じられているということをおぼれたか。それにこつても大量にやられて。素体はいくらでもあるが、損害は損害だぞ」

「仕方がないだろ……？ こいつら本当にムカツクんだから。なあ、今俺そんな顔してるだろう？」

「フン、そうは見えない……」

ガガガガガガガガッ！という音がその後の台詞を掻き消した。

二人の会話に水を差すようなタイミングでG4-X、氷川は冷却が終了し使用可能となったGX-05『ヤマタノオロチ』を両者に向けて放ったのだ。

かつて、オーヴァーロードに津上翔一とともに戦ったときの経験。

オーヴァーロードの黄金のシールドはケルベロスの掃射でもびくともしなかったが、津上翔一の拳はオーヴァーロードの顔面を殴った。

あの黄金のシールドは複数を手には使えず、かつ不意の攻撃には対処できないことを氷川は知っていたのだ。

ヤマタノオロチの放つ弾丸の速度はライフル銃のそれよりも早く、オルフェノクの力も間に合わないはずだ。

しかし、この二人以外の者がヤマタノオロチの攻撃を防いでしまった。

黒い頑強そうな身体の至るところに機械の部品やコードなどが見られる。マスクは白く、一つ目で、ゲルショッカーの首領のような姿。

これは改造実験体『トライアルシリーズ』の一体。トライアルBだった。

仮面ライダー剣の敵の一人で広瀬博士の記憶を継ぎ自分を広瀬博士だと思いついていた悲しい存在。

もう、この世にはいないはずの存在だった。

「……一つだけ、君に同感しておこう。やはり、仮面ライダーというのは、腹の立つ存在であるな」

「やっぱりそう思うよな？」

ヤマタノオロチの攻撃をトライアルBに受け止めさせてリーダー格の二人は平然と話を進めていった。

この老人。

この場にはその老人の顔を知る者がいなかったが、BOARDの職員ならば大きな反応が見られるだろう。

かつて、BOARDを組織させた理事長、天王寺博史てんのうじ ひろしにまったくの瓜二つなのだ。

天王寺博史とはBOARDを組織しライダーシステムを開発するが、同時に生物の王と支配権を決める『バトルファイト』を始めさせ、ケルベロス？として参戦し自らが世界を支配しようと画策した恐ろしい男だ。

その天王寺博史に似た老人は無価値を見るような目で四人の仮面ライダーを見る。

「私たちが出るまでもない。なあと、奴らならやられることなく片付くだろう」

「……………」

少年の方も気に食わなさそうな顔を作りながらも頷いた。

どうやら、この二人が所属する“強大な組織”は仮面ライダーを倒すことを目的としているわけではないらしい。

仮面ライダーに用はないとばかりに二人は背を向けた。

「く……ッッ!!」

四人の仮面ライダー、音也・モモタロス・伊達・氷川は攻撃するな  
ら今しかない絶好のチャンスだったが、手を出すことが出来ない。

カイに似た少年と天王寺博史に似た老人の二人は黄金のオーロラの中へと消えていった。

あの二人はこの怪人たちを束にするより強大な力を秘めていると思われる。だから二人が去ったこと自体は……良いことだった。

ただ、二人は残り百体あまりいるイマジンの軍団ともうひとつ別に置き土産を残す。

それが、とても問題だった。

黄金のオーロラから二人に代わるように新たな勢力が飛び出してきた。

数はだいたい二十体前後というところ。二百体のイマジンを相手にしなくてはいけなかった今の状況から考えるとそれほどの数じゃない。

だが、それらの種類カテゴリーがとても問題だった。

「……ッッ！！ いやいや、よりによってこいつらとくるか……ッッ！！」

音也は歯ぎしりする。

遙か昔、闇のオーヴァーロードがノアという人が作った方舟に全ての生物を乗せた後、世界を一旦終わらせた“大洪水”。

その時代よりも前、始原の時代に行われた支配者を決める戦い・バトルファイト。

それに参加したのが各種族の祖となる存在・アンデッドだ。

今、音也たちの目の前に現れた彼らはハッキリと言葉にすると『不死身』だ。

彼らを倒すにはBOARDの開発したライダーシステムで封印するしかない。あるいは仮面ライダーディケイドの力で“破壊”するからだ。

それはとても困る。なぜならば、BOARDのライダーシステムはもう一つも残されていない。

仮面ライダーではないところに“もう一つ”があるが、それも駄目だ。あいかわ はじめ相川始も剣崎一真もここにはいない。

あの二人はもう決して合わせてはならなかった。だから、呼んではいけない。

残された仮面ライダーにこの怪人を倒す術はなかった

……

2

「おかしいですね……」

真木清人はキャッスルドラン内に作られた研究スペースでぽつりと言う。

新しい仮面ライダーの開発のための参考<sup>サンプル</sup>としていたものが一つなくなっているのだ。

もう使える者がいないと判断されて、この研究スペースに飾られるように置かれていたのだが、いつの間になくなっていく。

まあデータはもう取れているので必要はない、と真木清人は判断して作業に戻る。

すると、誰かがこの研究スペースに無断で入ってきた。

「真木博士！！ 出来ているだろう、『仮面ライダーサーズ』だ！！」

鴻上フアウンデーシヨンに所属する戦闘部隊『ライドベンダー隊』の第一小隊隊長を務める青年・後藤慎太郎<sup>こうとう しんたろう</sup>。

彼は同じく鴻上フアウンデーションに属する『鴻上生体研究所』の責任者・真木清人に迫った。

世界中で仮面ライダーの記憶が次々に消えていく事態が今発生している。

今存在が確認できているのは“キバ”“ダークキバ”“G4”“プロトタイプイクサ”“プロトタイプバース”のたったの五人だけだった。

五人の仮面ライダーだけで迫り来る怪人の軍団を相手にするのはどう考えても無茶だ。

更に、戦っている最中にでも“記憶”がなくなったら大変だ。丸裸も同然の生身で怪人たちにいたぶられる。

それを危惧して、慎太郎は二ヶ月くらい前から全く新しい仮面ライダーの制作を依頼していた。

プロトタイプバースを複数個作って、戦力として投入する案を真木は出したが、慎太郎は拒否した。

それなら確かに戦力の増強になるが、それでもし戦闘中に“プロトタイプバース”が消えたりしたら、それは最悪だ。

よって、新たな仮面ライダーが必要だった。

これは慎太郎の勝手な予想だが、数多の虚構世界が求めるのは仮面ライダー自体ではなく、“仮面ライダーの物語”だ。



虚構世界が求めるものは“存在”よりもおそらく“歴史”。だから、普通の記憶ではなく重厚な仮面ライダーという歴史エピソードを求めたのだ。

だから、ストーリーのない新たな仮面ライダーならば、“喪失”を遅らせられる。

しかし、“大進攻”はいくらなんでも早過ぎた。

真木は鴻上会長も認めるまごうことなき天才だったが、僅か二ヶ月、しかも仮面ライダーディハーツと平行しての開発はさすがに厳しい。まだ肝心の部分が終わっていなくて、真木は慎太郎に渡すのをかなり渋っていた。

「お願いだ、真木博士!!」

「いい加減しつこいですよ。まだ、肝心の強大な負荷をどうするかを変えていないんです。このままではあなたは暴走します。……火野映司くんのようにね……」

仮面ライダーオーズとして戦っていた青年・火野映司。

彼が一番の障害としていたのが自分自身の暴走だ。

欲望を持たずオーズの力を使っても暴走することはなかった火野映司だが、紫のメダルが体内に入り込んでからはしばしば暴走してしまっていたのだ。

真木清人が依頼を受けて開発している『仮面ライダーサーズ』は仮面ライダーバースと同じく“セルメダル”を力の源とするが、システム的にはオーズと同じだった。

バースよりも遥かに強大な力を振るえる分、肉体的負担と暴走の危険性はハンパない。

何しろ、常時仮面ライダーオーズの“コンボ”に匹敵するパワーを発揮し続けるのだ。

「今戦えなくてどうする……！！ 火野も同じ物を背負って戦っていた、ここで逃げるわけにはいかない！！」

「……………」

慎太郎はそう言うが、火野映司は背負ってきたといっても、後藤慎太郎がそれを背負うのは話が違う。

火野映司はある意味選ばれた存在だった。大きな欲望を持てる環境に生まれ、その上で欲望を枯らしてしまっていた。

それにより、800年前のオーズにはない欲望を受け止める器として彼は完成していた。

後藤慎太郎は欲望を枯らしていない。サーズの力を使えばたちまち器から溢れてしまうだろう。

そうなつては後藤慎太郎の精神力の強さにかけるしかない。

最悪、仮面ライダーと怪人関係なし、見境なしに暴れ回り、手が付けられなくなる。

それほどまでに強大な力を持つのが仮面ライダーサーズだった。

「まあ、渡してやれよ。こいつ、あんたが何を言っただって聞きゃしねえよ」

後ろから誰かが現れ、頭を下げる慎太郎の頭をぽんと叩く。

それはスマートブレイン社の研究者が着る白い白衣を来た青年だった。

腕には……仮面ライダーへ変身するためのベルト、しかも見たことがないようなベルトがあった。

真木清人は身を引いた。

この人物は真木清人も敵わないくらいに優れた「超」がつく天才科学者だ。

機械工学に特に優れ、真木清人が放棄した万能AIチップを完成させたりしている。

「その力は、オーズのだったか？　なら……あんた、なんのために戦うんだ？　照れることない、いいから言ってみ？」

慎太郎はわずかに狼狽した。

こんな風にならずばと自分のペース、マイペースに話を進めていく人物を慎太郎は一人知っていたからだ。

何のために戦うのか。

伊達明に出会う前、もっと言えば火野映司を「呑気だ、緊張感がない」などと少し見下して頃の慎太郎。

その時なら間違はなく、しかもなんの躊躇もなく「世界を守るためだ」と言っていた。

だが、今はちよつと違う気がした。

世界を自分の手で守りたいという意思は確かにあり、どちらかと言えば、昔よりも大きくなつたくらいに考えられた。

だが、その前になにかがあった。それは余計なことであるわけではなく、慎太郎の欲望の幅を大いに広げていた。

視野は多少なりとも小さくなってしまったのかもしれないが、慎太郎の欲望に真の充実をもたらしてくれた。

それがあつたから、慎太郎はより強く欲することが出来た。

ある人の言葉を借りるならば「欲望まみれ」になれたのだ。

「理由なんていくらでもあります。ただ、放つておけない人たちがいる。だから俺もそれに飛び込んでいきたいんです」

火野映司は力を欲した。

どんな場所にも届く自分の腕、力。この世全ての助けを乞うか弱い腕を全部全部、掴みとれるように。

だから、彼は危険だと知りながらも一人の人間が持つには強大過ぎる力を手に入れた。

が、最後に相棒と呼べる存在が消えてしまったとき。彼は考えを改

めた。

自分だけでやるってことが強いというわけじゃない。一人の力はちっぽけであるべきで、大切なのは、自分がみんなの腕を掴むということ。

それだけで、その欲望は満たされる。

後藤慎太郎の「世界を守りたい」という欲望だってそうだ。自分一人でそんな大層な夢を抱えていても、叶いはしない。

みんなの手で。

放っておけないと思っただけならば、すぐに手を差し延べる。ただし、自分の力だけじゃなく力を合わせて。

「いい返事だな、惚れ惚れするわ。そんだけしっかりわかってたら、欲望を履き違えやしないだろ」

この博士はとても情に厚いらしい。慎太郎の欲望を聞いて鼻を噉った。

博士はまるで自分のことを見えていないかのように振る舞いパソコンと人形に向かっている真木清人のところへ足を運ばせ、街中で知人に会ったというような調子で肩を叩く。

「だ・か・ら、ドクター真木。こいつに渡してやれって」

「ですから、まだ仮面ライダーサーズは未完成で……」

「いいのいいの、なんとかしてくれるし、なんとかするからさあ……」

詳しい話は一切抜きにして博士は真木清人からサーズのベルト、『サーズドライバー』を受け取る。

といっても、真木清人は博士に頭が上がらない様子で受け取るというより中年男性が路地裏で不良少年に絡まれ、カツアゲにあっているようだった。

「ンンンン~~~~」

博士は陽気なハミングをしながらサーズドライバーを慎太郎に渡さずに、なにやらいじくり回し始める。

特別な工具も使わずに、強引にこじ開けたりで一見するとたんにめちゃくちゃやっているだけに見える。

が、真木清人はその手際に驚いていた。

部品を他のものと交換したり、より効率的な配置にしたりして、サーズドライバーの中にスペースを作っている。

ポケットからカプセルを取り出し、博士はその開いたスペースに、そのカプセルに入っているチップを埋め込んだ。

「ほい、これで負荷の方はなんとかなったから」

「……何故、貴方がそんな物を持っているんです？」

仮面ライダーサーズは真木清人による完全なるオリジナルで、そのプログラミングと設計データは秘匿していたのだ。

この博士はなぜサーズドライバーを“以前に触れたことがあるように”扱えたのか。如何なる天才でも、そんなことは出来ないはずなのに。

「ん？ これ？ あゝ違う違う、俺もさすがにオーズについては専門外だから。これを作ったのは俺じゃないよ」

「では、一体……？」

「それは、企業秘密で。言ったらおつそろしいから」

追求は止してもらおう、と博士は口の前に指でバツテンを作った。

慎太郎はますますそんな博士を怪しむ。

この博士の発明は確かに画期的で強力。四つのディハードドライバーも基礎となる“メインプログラム”を開発したのもこの博士だった。

しかし、あまりに発明が順調過ぎる。普通、こういった兵器や精密機械の制作においては真木清人のようにそれを制御するプログラムの開発に一番時間を費やすものだ。

だが、この博士は制御プログラムも何から何までスラスラとこなしてしまふ。

天才は一の才能と九十九の努力から生まれるもので、失敗は成功の

母という言葉もある。なのに、この博士には試行錯誤がない。

まるで、元からある物を再現しているだけかのように。

「ういゝゝゝ……みんな、準備はできたからゝゝゝ？」

どう聞いても泥酔したような女性の声でした。

十代の後半くらい、または二十代前半くらいに見える女性だ。まだまだ寒いというのに、夏祭にでも行くこうというような浴衣姿でフラフラ歩いてきた。

完全に目が据わっており、これは水をぶっかけようとなにをしようと易々酔いが覚めそうにはない。

この女性は浴衣姿以外にも特徴の多い美女だった。

胸にかかるくらいの艶やかな黒髪をサイドポニーにして、更にワックスかヘアスプレーかで髪をフンワリとさせている。

頭にはかんざしがいくつも刺さっており、フワフワの毛玉が付いたものや桜・ハイビスカスの造花がついたものまでバリエーションは豊か。

他に特徴をあげるとすると、胸元や太ももが大胆に露出していることや着る浴衣には沢山のファンシーな動物のピンが付けられていること……などなどだ。

とにかく、派手な姿だった。



この女性の名は緑川みどりかわ絵美梨えみり。

本人は仮面ライダー一号の生みの親、緑川博士の曾孫にあたると言っている。

仮面ライダーを知る者にとって緑川博士と言えば超有名人物だった。なので余りにこの女性はイメージと掛け離れていた。緑川博士の曾孫というと本郷猛をサポートした緑川ルリ子の親戚ということになるからだ。

だが、この女性は仮面ライダー一号・二号・V3に関して本当に些細なことを含めた詳細を知っていた、そのことから皆はこの女性を緑川絵美梨と認めざるを得なかった。

ただし、その実態は誰も知らない……まさに謎の人物だ。

「そろそろ、やばいんじゃないからあ、れろちゃん？」

「そうだな、いい加減出なきゃまずいわなあ……」

二人に神妙さが入る。

戦況は今、不利に回っていた。

ブレイド・ギャレン・レンゲル・グレイブ・ランス・ラルクの記憶は失われているのに、アンデッドが参戦してきたのだから。

魔化魍なら最悪だったが、アンデッドも十分最悪だ。倒す手段が何も残っていない。

ただ、これから戦場へ、というのに二人は妙に落ち着いてリラックスしていた。

これから起こること、その全てを把握しているかのような異様な冷静さだった。

ハラリと緑川絵美梨は浴衣の帯を脱ぐ。だが、それで浴衣がはだけたりはしなかった。

浴衣の帯の下に仮面ライダーへ変身するための変身ベルトが巻かれていたからだ。

続いて博士も上着を脱ぎ、自分の変身ベルトを腰に。

「え〜と、ごろちゃんは今、僕のひんれ〜ジが芳醇ほーしゅんの時を迎へる……だったれかな？」

緑川絵美梨は浴衣の袖から小さなガラス瓶に見えるボトルを取り出した。

それは、緑川絵美梨が着る浴衣から連想されるものに関係している飲料に酷似していた。

「い〜や、面倒だし……。変……身……」

眠りに向かうかのようなボヤツとした手つきで緑川絵美梨はその瓶をベルトにセットする。

「チエック」

博士は変身ベルトの無線機に見えるツールに音声認識をおこなった。

【ザザ……！ VOICE CODE CLEAR！ STAND  
ING BY！！】

無線機によく似たツールが少しノイズを混じらせて『適合者』と判断する。機械音声にしては熱のあるものだった。

「……変身……！」

博士はそう叫び、そのツールを右脇の部分へ差し込む。

【COMPLETE！！】

どちらも両博士が発明したシステムであるらしいが、あまりシステムや原理などは公表しなかった。

ただ、名前だけは知られていた。

『仮面ライダー祭歌』と『仮面ライダーゼダ』。

どちらも『仮面ライダーサーズ』と同じく全く新しい仮面ライダーだった。

キヤツスルドランがいる場所から遠くはない山の中。

ここはかつて「鬼」と呼ばれる人々が鍛練を積み、その力と精神をより高めていくための場所だった。

だが、今はもう使われていない。

「鬼」と呼ばれる仮面ライダーは皆“喪失”によりその力を失い、戦えなくなっていた。

運よく彼らが戦う魔化魍と呼ばれる敵も喪失により姿を消していたので、鬼たちはその役目を完全に終える形になっていたのだ。

だから、この山を使っているのは一人だけ。まだ鬼の力を一度も使っておらず喪失しておらず、魔化魍を倒すことを目的としていない彼だけだった。

いや ……実はもう一人、“もう二度とあつてはならない、触れ合つてはいけない者がいる”とここに籠っているものがいた。

「おい、返事しろ」

剣崎一真の籠る洞窟の入り口で桐谷京介きりざ ぎょうすけは呼び掛けた。

「……なんだ」

「今、街がマズイことになっているらしい。話に聞いてた“大進攻”って奴だろうな」

「それが、どうしたんだ」

「戦わないのか？」

回りくどいことは面倒だったので、京介は一真の考えているであろうことをズバリと言い当てる。

いつの間にかこの山に入り込み、この洞窟に住み込み始めた青年。

名前は剣崎一真で、その名前を京介はキャッスルドランの中にいる人から聞いていた。

この剣崎一真も昔仮面ライダーだったらしい。アンデッドという不死身の生物と戦っていて、その時の名は仮面ライダー<sup>ブレイト</sup>剣。

その名前がばれると一真はこの山から去ろうとした。

京介は経歴や過去も聞いていた。親友が世界を滅ぼしかねない存在で、この剣崎一真はわざと同じ場所へと身を落とした。

“あつてはならない人物”というのはアンデッドの内の一体・ジョーカーの相川始だ。剣崎一真は相川始と会うことは許されない。

出会えば最後の一人を決めるために強制的に戦ってしまうから。

京介は決してこの場所と一真のことを話さない約束し、一真は以

来ここに隠れている。

「……………」

と一真は無言だった。

「黙って見ておく気か？」

「俺は……あいつと会っちゃいけない。会えば……殺しあってしまった」

一真はこのセリフをこの洞窟の中で、最低でも百回は言っていた。

ここはもう相川始が暮らしていた場所から遠く離れた場所であるらしいが、それでも一真は外に出ようとしない。

それほどまでにもう一体のジョーカー……相川始と会うのを避けたがっている。

「俺には分からないな、そうまでしてなんになるんだ？」

「あいつが……人間でいられるため……。あいつの居場所を守るため……………」

「居場所……居場所か」

京介は居場所というものを嘲笑っていたことがあった。自分に覚悟がない奴がそれを失っても大丈夫なようにかけている保険だと。

だが、京介もそれを失っていた。

響鬼という偉大な男の後ろ姿だ。父親と重ね合わせたあの男のそばこそ、自分の居場所だった。

だが、響鬼の力と魔化魍の存在が消えてしまつて、京介はその力を継ぐことが出来ず、宙ぶらりんになってしまった。

「……………」

居場所を失うのは辛い。だから、この一真は親友のそれを必死に守っている。

それが、京介にとって

「あー、馬鹿らし……………」

つまらないことこの上ないように思えた。

「……………??」

一真は京介がそう発言したことに対して怒るのでもなく、悲しむのでもなく、不思議そうにした。

「確かにさあ、お互い会わなきゃ一番いいけどよく考えるよ。それで自分の居場所なくしてたら、意味ないって」

「俺は別に……………」

「俺は別にいいって？ それ、すんごく偽善だ。相川始つて奴つて、お前が不幸にならないと何にもできないような奴なのか？」

「そんなことは……」

「俺は大切な人を二回失ったんだよね。まあ一人はまだ生きているけど、俺はあの人と同じ道を進めなくなった。居場所を失ったんだ」  
いつもいつも憧れていた。自分はダメダメだったから余計に響鬼という男がうらやましく思っていた。輝いて見えていた。

だが、“響鬼”の力と“魔化魍”が失われて、あの男が所属していた魔化魍退治の組織「たけし猛士」は解散され、元「鬼」たちも鬼を育てることを禁じられてしまった。

京介はあの男と引きはがされてしまったのだ。

京介はまだ鬼となるための修業を始めたばかり、もっと響鬼に教えて貰わなければいけないことがあると断固抗議した。

弟子を持つことに最初は消極的だった響鬼も納得がいかないと賛同してくれた。

だが魔化魍がこの世から消え去り、あらゆる悪も消えていつているこの世に鬼の力が必要ない、むしろその力を悪用されたり人前で使われたりしないように封印すべき。

猛士の上層部の人間はそう判断し、響鬼が京介に鬼の修業を教えることを禁止するだけに留まらず、会うことも禁じられてしまった。

そういう点では京介も一真と同じ境遇を味わっていると言えるだろう。



が、居場所なんて人に作ってもらうものじゃない。

京介は響鬼と別れた後も「鬼」となるための修業を続け、ようやくその力を手にいれた。

自分もあの男のようにになりたい、自分のような弱い人間を鍛えられるような存在になりたい。

その希望が京介の居場所だった。居場所を求めるための居場所。そんなものだってある。

「あんたは自分が惨めになればなるほどそいつが幸せになれると思ってる。バカバカしい、そんな訳ないって」

自分の居場所を守るために一真は惨めな人生を送っている、そう知られてしまう方がよっぽど相川始にとっては辛い。

この剣崎一真がそうまでして守りたいと思うのだから、優しい人物にちがいないだろうから。

「犠牲になるなんて、俺は御免だ。響鬼は……俺が継ぐ」

京介は機械仕掛けの剣を虚空に向ける。

自分のやりたいようにやってみろ、それが居場所だ。そうやっている内に、人に囲まれ笑顔に囲まれる。

……あの、響鬼と名乗っていた男のように。

そして、剣崎一真にもかつて望んだことがあるはずだ。相川始のこととは一度忘れてそのために生きてみるべきだ。

京介は自分の意志を込めた刃を一真に向けることでそれを一真に伝えようとした。

単純な善意は一欠けくらいで、残りはその男になりたいという気持ちから。

「……………ん？」

京介の鍛えられた聴力が何かを捉えた。

車とバイクの音だ。こんな山奥に車がやって来ること自体少ないのに、この音からすると、その車とバイクは尋常じゃないくらいになり早い。

車とバイクに乗る人物はこの山に京介や一真、人間がいてこの洞窟にいることをどういうわけか気づいたらしい。

車とバイクは洞窟前で停車させられた。

車の方は赤く、なんとも奇妙な形をしていて爬虫類の鱗のようなものが車体にあった。あと、蟻などのような“顎”が車体の先端にある。

バイクの方も変わっていてライト部分が赤く目のようで、その姿はまるでカラフルなバッタだった。

車のドアが上に開き、中から人が出てくる。白いジャンパーと黒い

手袋をしている五十歳くらいに見える男性だ。

「……この山はもう使われていないと聞いていたんだが、君達は……？」

京介はこの人物の顔は知らなかった。キャツスルドランの中にいるかつて仮面ライダーに関わっていた人達と何度か会話したことはあるが、京介の目標はあくまでも『仮面ライダー響鬼』。それほど詳しく話を聞いたことはなかった。

だが、後ろの車とバイクは知っている。『霞のジョー』という人物が話してくれたもので、『アクロバッター』と『ライドロン』だ。

車に乗る仮面ライダーというのは珍しくて、それで京介も覚えている。

名は『仮面ライダーBLACK RX』・南光太郎だ。

『一号』『二号』『V3』『ライダーマン』『X』『ストロンガー』  
『スカイライダー』『スーパー1』『ZX』<sup>ゼクロス</sup>の十人に続く最も偉大なる一次世代のライダー。

猛士の中にもその名は轟き、響鬼も敬愛した英雄の一人だった。

「俺は……」

一真はまごついてるくに返事ができなかった。人に見つかってしまったというシヨックが大きいのだろう。

素直に『仮面ライダーブレイドだ』と言えがいいのに、と京介は思

う。

以前はその名に誇りを持ち、やりたいようにやって戦ってこれたのに。今の一真はそれどころか、願いのために戦うという居場所を失うことに満足しようとも考えている。

もしかしたら、『世界を滅ぼすかもしれない化け物だ』とか言うつもりなのかもしれない。

見てられなくなって京介は変わりに答える。

「仮面ライダーだ。俺も、あいつも」

一真は京介に「話しが違う」と訴えた。一真は京介に自分が仮面ライダーブレイドだったということは黙っておくように頼んでいた。

京介も一応はそれを承諾していたはずだった。

が、京介は急にそれを守る気にはならなくなったのだ。そんな約束を取り付けた剣崎一真は間違っていると思った。

『仮面ライダー』の名は恥じるものではなく誇るもの、誇るからこそ救えたときは心から笑えて、救えなかったときは心から泣ける。

響鬼たちはずっと昔からどんなに蔑まれても「鬼」となった自分の姿を誇り、魔化魍を退治してきた。

「そうか、なら共に行こう。仮面ライダーに危機が迫っている」

南光太郎は手招きし、ライドロンへと誘う。

京介はもちろん行くつもりだった、こうやって迎えが来なくなったら  
仮面ライダーとして戦うつもりだった。

一真の口から「俺も戦う」という言葉を引き出せなかったのは残念  
だったが、仕方ない。

人には他人からでは決して変えることが出来ない部分が、譲ること  
の出来ない部分がある。

一真にとってのそれは「親友への思い」であり、曲げるわけにはい  
かないものでもあるのだろうし。

少し苦い顔をして京介は光の車・ライドロンに乗り込 ……

「……も……く……」

乗り込むよりも先に京介の背後にいる一真がぶつぶつと何かを言っ  
た。

一真という男は少し滑舌が悪いところがあつたのだが、これは音量  
の関係で何を言ったのか分からないものだ。

ただ“言った”と……それは分かる強い言葉だ。

「俺も……いく」

一真は思いの外京介の近くまでやって来ていて、そのあとは何も言  
わずに京介よりも先にライドロンに乗り込む。

『行く』か……と京介は感慨深げになった。

期待していた『俺も戦う』という言葉よりは大分弱い意味の発言だったが、京介は今はこれでよしとする。

もう十分強いから、今の時点で親友への思いを傷つけない限りに大きいから。

それに、きつと一真は助けを求める人や人を襲う怪人たちを目の当たりにしたらいてもたっても居られなくなる。絶対にそれから目を逸らすなんて真似はできない。

一真もれっきとした仮面ライダーなのだ。

落ち着いて京介は自分がやっていることがとても自分らしくないとだと気づいて驚いた。以前の自分なら絶対にやらないような反吐ヘナゲがでるようなセリフや行動だ。

響鬼に会ったばかりの時の京介は「強くなるには全てを捨てなければ、鬼にならなくては」という偏った考えをしていた。

そして、響鬼たちもそうやって強くなっていたのだと思い込み、履き違えていた。

響鬼たちは真逆だった。

人の心を捨てるだなんて、あの鬼たちに限ってありえない。人の心を高く清く保っているからこそ鬼たちは鬼でいられた。

一真に向けて言った京介のセリフはどこと無くあの響鬼たちに近い

ものがあつた。

もしかしたら、鬼になるための鍛練を積む間に自分もあの響鬼たちのような人間に近づけたのかもしれない。

会えはしていないが、自分の中に響鬼が息ずいているのかもしれない。

そう考えると京介は照れ臭く思えた。

世界を超越する運命という物があるのなら、京介はこう言いたかった。

奪うだけ奪ってみろ、奪い切れはしないが、それでも好きなだけ奪え。

ただし、そろそろこちらも嘔み付かせて貰おうか。

「……………」

京介は刃を携帯して光の車・ライドロンへ乗り込む。

CHANGE TO FOREVER AND YOU (後書き)

GX-05の名前を変えたのはケルベロスと区別がつかないからでした。余計だったかな？

今回のタイトルは日本語に直すと「永遠のために、君のために」となります。

これはBLACK RXの挿入歌の一つであり、結構気に入っています。

永遠のため……始が永遠に人間として生きていけるために。君のため……後藤さんの世界を、ではなく一人一人を守ろうとする気持ち……みたいな。

京介さあ、書きづらい……。ケンジャキ、叫び声がね、悩む……(ウエイで行きたいがギャグにしか聞こえない)。



## CHANGE〜REASON〜(前書き)

久しぶりの投稿だあ！

何故遅れたかって？五日ぶりだからねえ。

「ラ アーゲーム見てました」と「ストック貯めてました」と「ダブル見直しました」と「絵、描いてました」が原因かな？

松田翔太くんがかつけえよお……。女性俳優でそんなに好きな人がいないのに、男性俳優は好きな人いっぱいって……。ヤウ、アクね？

絵はライダー学園編に入ったら人物紹介の会で載せます。前に描いたミナは「変化前」なので、今のミナ「ツンデレver.」を。

ライダー学園の制服を着てます。いいね、やっぱり制服って……。自分で描いておいて、下手なだけ……。グツと来る。

影虎も、制服ver.描いてあげてもいいけど……。やっぱり野郎だからパス。

あ？なんでって、いいかまず書く前に裸体をベースにしないといけねえんだよ、詳細にじゃねえけど誰が野郎の裸書きたいっつう話だ！

え……。？ミナとかもまず裸から描いてるかって？

……。描いて……。るけど？



## CHANGE〜REASON〜

仮面ライダーたちがイマジンたちと戦っている頃、キャットスルドラン内、モニター前。

ミナは啞然とそれを目に映していた。

ミナの隣では影虎がキャットスルドランの外で起きている戦闘を『G3ユニット』という元警察の本庁に所属していたらしい組織が設置したカメラで映している映像を食い入るように見ていた。

影虎はあまりに異常なまでののめり込みを見せていた。

まるで、今まで仮面ライダー以外の弱きを助け悪をくじくという英雄、正義の味方の戦う勇姿を見たことがなかったかのように。

「スゲー……」

これで五回目となる。影虎が自分でも気づいていないような無意識の発言をしたのは。

影虎はミナを見限ろうとした音也に挑戦するかのような言葉を言ったり少しおかしな「ついてこい」という宣言をしたりと熱い部分がある。

しかし、同時に正義の味方などはこの世にいないと軽蔑にも似た思いを持っていそうな現実的・悲観的な一面もあった。

だからミナは影虎は『仮面ライダー』について否定的であると思

っていたのだが、どうも当てが外れたらしい。

影虎の今の姿はちょっと失礼な例えとなってしまうが、おもちゃ売り場でおもちゃを熱心に見続ける子供そのものだ。

ミナは変わらなくちゃいけないと音也に挑戦した影虎、

ミナの正体がファンガイアと呼ばれる怪人であると知らされた時わざと無神経な言葉を選んだ影虎、

心を大きく傷つけながらも自分には救う力がないと悟って逃げたという影虎。

その時の影虎は年不相応なくらいに多くを知っていた。

現実を知り、出来ること出来ないことを知り、普通よりも早い段階で影虎の精神は成熟してきたのだろう。

だが、しっかりと少年らしい心も残されているようだ。

しかし、ミナも同じように目を輝かせて …… とはいかない。

ミナと影虎は真逆の人間だ。自分自身を矛盾した鎖で拘束してきた少女とやりたいように人間くさく自由でいた少年、更に言えばまともに世界を見れていなかった無知な少女と広く世界を見渡してきた少年とでは価値感が全く異なる。

今戦う仮面ライダー！。

少し前まで、ミナは当然だと思っていた。他人のためなら自分に

出来ることを全てやってあげるのは当然だと思っていたのだった。

だから、変わった今は全てが新鮮に見えて …… その微かなものまで見えた。

仮面ライダーと怪人軍団      イマジンという種類らしい  
の間で巻き起こる戦いは今のところ仮面ライダーの方がかなり優勢  
だった。

仮面ライダーはその圧倒的な力で怪人軍団を引つ掻き回し、奇襲  
攻撃を仕掛けたりで怪人の数を約半数まで減らしている。

このままいけば確実に勝てるはずだった。

だが、ミナにはとてもそんな楽な戦いであるように見えなかった  
のだ。少なくとも実況解説ができるような生温い戦いではない……  
そう思った。

仮面ライダー陣は優勢こそ保っていたが、青と黒の仮面ライダー  
やミナの祖父が変身したというものと白い仮面ライダーの動きが少  
しギクシャクとしてきていた。

まるで、痛みが全身を駆け巡っているのに無理を押しして戦ってい  
るように …… いや、そうにしか見えない。

今にも膝から崩れてしまいたいそうなのに、そのたんびに無茶をして  
虚勢を張って、戦い続けるために戦っている。

そして、何よりも全ての仮面ライダーが“必死”だった。必ず勝  
てる戦いをしているのならそこまで出すことはないというくらい“

本気”だった。

ミナは今だあの虫のように見える緑色の怪人や全てを失ったように真っ白な怪人たちに追われたときの恐怖を引きずっている。

だから、思うという形で疑問してみた。

あの仮面ライダーたちも怖いはずなのに、痛いはずなのに、どうしてそれでも戦うのか。

分からない。だから、聞かなければならない、問わなければならぬ。言葉ではなく、彼らの勇姿から。

戦うことで自分を表してきたのが彼ら、仮面ライダーなのだろうから。

すると、仮面ライダーVS怪人軍団の戦局がいきなり大きく変わった。

有利から不利へとだ。

怪人軍団を指揮していると思われる人間の姿をした少年の他に黄金のオーロラを伴って老人が現れる。

その老人は少年と共にすぐにまた黄金のオーロラを通って去ってくれたが、その変わりとして、新たに二十匹くらいの怪人が黄金の

オーロラから飛び出してきた。

ミナは勘で黄金のオーロラはどこか違う場所に通じているのだろうと予想していたが、それで間違いはなさそうだ。

そしてその繋がっている場所の一つにこの世界ではない別の世界が、あの怪人たちが待機している世界がある。

だが、たかが二十匹くらいどうってことはないのか、とミナは思ったが、あの新たな怪人の姿を見た途端、キャツスルドラン内の人々があわてふためき出した。

確かに新しく黄金のオーロラから出てきた怪人はイマジンとは

……… ついでにミナが見てきた全ての怪人たちとは異なっていた。

しかし、どうしてこうまで皆が慌てるのか、それがミナは不思議だった。

「ミナちゃん、影虎くん、マズイことになった……。はつきり言って最悪の事態だ。君達は早くここから出た方がいい」

立花老人がミナと影虎を並ばせて話す。やはりこの老人もあの怪人たちの登場でかなり焦っているようだ。

「なんでだよ、たったの二十体だろ？」

影虎はテレビドラマの良いところで母親に勉強しなさいと叱られた子供のように文句言う。

よほど仮面ライダーたちの戦いを熱心に見ていたらしい。

だが、ミナも正直影虎と同じ心境だった。自分もあの仮面ライダーたちの戦いの中に秘められたメッセージを受け取らなければならぬのだ。

それに、影虎の言う通りたったの二十体だ。

仮面ライダーたちは戦い始めてわずか10分くらいの間に百体を越える数を倒したのだから、警戒することもないのでとミナは不満のように思う。

もっと仮面ライダーたちの戦いを見て、学びたいことがたくさんあるのだからもっと見ておきたい……という不満だ。

だが、立花老人はそんな二人の本音を見透かせてか「駄目だ」と首を振る。

「あの新しく現れた奴らがそんなに強いのかよ」

「いや、そうじゃない。ただそれよりもずっと厄介極まりない。奴らはアンデッド……不死生命体だよ」

『不死』。アンデッドという名前も英語で死なないと表している。

ミナと影虎にもようやくキャッスルドラン内に蔓延する焦りと恐怖が伝播する。

死なないというのはつまり倒すことが出来ないということ。殺しても殺しても死なず、永久に追い詰めにかかってくるのだ。



「おい、どうしようもないだろソレ!？」

影虎はサア〜と血の気が引いた青白い顔をしたまま叫ぶ。ミナと同じように死んだはずなのに人に襲い掛かってくるゾンビなどを想像したのだろう。

「そつだ……あのアンデッドはどうしようもない」

「そつじゃねえッ!! あれも怪人で敵だったってんなら、仮面ライダーがいるだろうが!!」

そつだ。

絶対に倒せないなら本当にどうしようもない。あの怪人が人類の敵だったというなら、仮面ライダーは彼らを倒す術を持っていたはずだった。

不死身の怪物と戦うための力が仮面ライダーにはあったはずなのだ。

「ああ居たよ。仮面ライダー 剣・剣崎一真という男を始めとした仮面ライダーが七人……いや、六人と言った方がいいのか……」

「だったら……!?!」

「だが、その六人の仮面ライダーはもう一人も残っていないんだ。今から何年前、“ライダーシステム”ごと喪失で失って……」

「……………ッッ!?!」



仮面ライダーイクサの赤い刀身の剣がアンデッドたちを深く切り付ける。

死なないとわかっているはずなのに …… 彼らは挑む。

勝てないとわかっているはずなのに …… 彼らは戦う。

ダークキバとイクサの攻撃は強烈。拳を受けた怪人は例外なく吹き飛び、剣撃を受けた怪人は切り捨てられ地面に倒れる。

二人の仮面ライダーは死にもしない不死身の怪人集団に突撃し、果敢に挑む。

だが、やはりアンデッドという怪人たちはその名の通り不死身であるらしい。吹き飛びベルトの装飾品が開いてしばらくの間動けないものの、しばらくすると装飾品が閉じ、普通なら立っていられないくらいのダメージを受けたのに立ち上がる。

ダークキバとイクサはそれでもなお戦いに向かうが …… 無理がたたり、ガツクリと身体が倒れそうになる。

そこにアンデッドたちの攻撃が襲い掛かった。動きの早いジャガーの怪人がダークキバを切り裂き、巨漢をしたゾウの怪人がイクサをそのパワーで殴り高く吹き飛ばす。

だが、仮面ライダーはそれでも戦うことをやめなかった。

ダークキバはジャガーの怪人に、イクサはゾウの怪人に反撃する。効きやしないのに倍返しだと言うくらい猛攻する。

そんな二人の仮面ライダーに触発されたのか残りの仮面ライダーもアンデッドに対して攻撃を開始する。

二人が戦いやすいようにと二人に攻撃しようとする怪人があればそれを打ち抜き、かつ自分達はイマジンの方をしっかりと片付けておく。

どうしようもないというのに、それだけでは自分達を止める材料にはなりやしないとでも言うような全力あげての戦いだ。

ただし、全力をあげようがアンデッドたちには通じない。

やっても意味がない、出来ないことはやる価値がないのに。出来なかつたら ……

「……あ……」

ミナは自分の悪い癖に気づく。

今までミナは何でもかんでも上手くやってきたといったが、実はそうじゃない。出来ないことを徹底的に避け、そのかわり出来ることを突き詰めてやってきていただけだったのだ。

勉強、スポーツ、バイオリン。それらにおいてミナは今まで優秀だったが、それ以外はどうか ……？

それが本人でも分からなかった。

自分が出るもの、自信のあるものにしか手を出すことができなかった。みんなの期待を裏切ることが怖くて怖くて、新たなものに

試みることがなかったのだ。

出来ないことはやるもんじゃない、ただ絶対に出来ることをやっていたらみんなは自分のことを認めてくれる。

だから、私はこのままでいい。

それがミナが生まれてから今日までずっと引きずってきたことで、その考え方こそがミナの中から“ミナ”を失わせる原因の一つだった。

出来ることだけをやっておくだなんて、単純計算をする機械よりもつまらない。

仮面ライダーはそうじゃない。

仮面ライダーは「出来るからやる」のではない、「出来なくともやってみる」だ。

誰もがみな、必ず出来ると考えているから戦っているのではなく、どうなるか分からない宙ぶらりんの弥次郎兵衛ヤジロウなのだ。

だけれども、その状態だからこそ思いに左右されて大きく揺らぐ戦いと決め、全力を出している間は倒れるとしても前へ前へ、思いを前に向ける。

怖さや痛みは重しだ。決して無視出来るものではなく無視してはいけないもの。無視してしまえば、倒れてしまう方向は後ろだから。

彼らの勇姿は語る。

「譲れないもののために、負けてなるものか」と。

影虎だつてそうだった。

影虎は街をバイクで逃げ惑っている間に多くの人々を見捨ててきた。薄情に見える行動だが、それには彼の譲れないものがあるのだ。

彼もユラユラと揺れるヤジロベエだ。思いは揺らぐ。現に影虎は直感という不確かな要素一つで揺らぎ、ミナの命を助けてくれた。

この時、ミナの心もようやくヤジロベエになれた。

「『デイハードライダー』を下さい！ 私たち、用事が出来ました！！」

揺らいだそのままの勢いでミナはそう立花老人に頼み込む。

あまりに突然にミナがデイハードの力を受け取ると宣言したことにより、立花老人はショック死しているのではと思わせるくらいに目を開く。

まだミナは聞かなくてはならないことがある。デイハードライダーのこと、仮面ライダーデイハードのこと、そして自分について知らなければならぬ。

だが、ミナ自身が知りたいと思っていたのに、それが揺らいで第一目標がすり代わる。

「どんな用事だ？」

「お父さんとお母さんです。私は二人を助けないといけません」

「……………正気か？」

数秒の沈黙のあと立花老人はミナを問いたただす。ミナの肩を持って、言外に「考え直せ」と言っているようだった。

だが、ミナは正気だった。重しに負けないように踏ん張って踏ん張ってようやく直立した強い望みがそれだった。

「おい、考え直せってミナ。両親はそりゃ、大事だろうけどさ、こんな状況下で生きてるわけがねえだろ？」

影虎も「馬鹿なことを言って」とミナを説き伏せるかのように言った。

ちよつと優越感がある上から目線　　ただし、影虎自身はそんなつもりは全くなかった　　がなんか腹がたつたので、影虎の腹部を彼が悶絶しない程度にミナは殴っておく。

確かに、影虎の言う通り普通に考えればミナの両親がまだ生きているという可能性は天文学的数字級に低い。

街に襲来する一匹一匹が人知を越えた存在である怪人、少なく考

えても千体以上。逃げてても逃げてても次々に怪人たちは襲い掛かってくる。

電車やバス、高速道路なども当然のごとく封じられ、携帯の電波も繋がらない。人間が束になって挑んでもあの怪人たちには歯が立たない。

ミナと影虎はとびっきりの幸運だった。なにしろ、こうやってちゃんと生きているのだから。

ミナと影虎の二人のようになんとか街から抜け出し、怪人たちがやって来ないような場所まで逃げてこられた人間は全世界合わせても一握りほどしかないだろうと予想される。

だが、それは普通の場合だ。

ミナの祖父赫塚音也と、ミナの父親赫塚渡はファンガイアと呼ばれる怪人で、しかも仮面ライダーだ。

渡の仮面ライダーもブレイドなどと同じように喪失で消えてしまっているのかもしれないが、少なくとも音也の仮面ライダーはまだ存在している。

そしてなにより、ミナは家から次狼とともに逃げる前に「キバット」という奇妙な生き物をみた。

キバットは渡を知り、渡はキバットを知っていた。

あのキバットというものは仮面ライダーに関係するものに違いない。



ミナは渡と深央……父親と母親の恋愛が「アバンチュール危険性恋愛」だったらしいと聞いていた。

もしかすると、その危険というのは仮面ライダーに関することだった可能性がある。

ならば、渡は深央を守ると決め仮面ライダーとして戦っていたのではないか。

ならば、渡は二十二年経った今も深央を守るために仮面ライダーとなって、襲来する怪人たちと戦っているのではないか。

おざなりな予想だったが可能性は可能性だ。それがあろうちはミナはそれを求める、理屈や確証などはいらない。

自分自身に纏わる謎や仮面ライダーディハーツについてを聞きたい思いもある。

またあの街へ戻らなければならぬのは怖くて仕方がないし、一度は父親と母親を見捨ててここまで逃げてきてしまったという罪悪感がある。確かにしつかりとある。

だから、ミナはそれを重しとして競わせる。競わせるから思いは強く深く固く重く伸びる。

仮面ライダーたちと同じ。

それにミナの思いを受けて沸き上がり、生まれた強い心も彼女の背中を押す。

ミナの望みは矛盾性を取り払い、不安定さを手に入れることが出来た。

その上でミナは未知を選ぶ。

仮面ライダーたちが持っている“勇気”を味方につけて。

CHANGE〜REASON〜（後書き）

ようやくライダーたちと同じ土俵（女の子にこの表現は些かですが）  
立てたミナ！

変身がもうすぐそこまで迫って参りました〜〜！！ あと三話で  
変身します（予定では）

さて、次回バトルの方が大盛り上がりです！

CHANGE↷Re: BIRTH↷(前書き)

今回のタイトルは剣の挿入歌「rebirth」とバースのテーマ  
「Reverse / Re:birth」から。

断っておきますが仮面ライダーサーズを作ったのは今年の1月です。  
今更「オオカミウオ」なんて出てこられたら困るよ……!! カン  
ガルもね!!

どういふことなのかは、本編で確認下さい。

## CHANGE〜Re: BIRTH〜

不死生命体・アンデッドが参戦することで仮面ライダーたちは窮地に立たされていた。

単純にアンデッドは倒すことが出来ないから慎重に戦わなければならなくなったからではない。

頭の大きな角から雷を出したり、空を飛んだり、分裂したり、毒を吐いたり、アンデッドたちはイメージンたちよりも特殊な力を持つ個体が多い。

しかも、ただでさえ死なないというのに上級アンデッドや改造実験体トリアルシリーズなどイメージンたちよりも強力な個体が多いのも特徴だ。

それに便乗する形でイメージンたちも多く仲間を失って欠けていた戦意と勢いを取り戻してかかってくる。

しかも、四人の仮面ライダーの内の三人が強い負荷のかかるもので、相手が何もしなくても体力を削られ、ダメージは蓄積されていく。

じり貧だ。

このままではラチが明かない。戦闘自体は優位に進めていても、勝負を短くしなければ。

(……………!! く、バッテリーが……………!!)

G4-Xを操る氷川がガツクリと膝をついた。負荷やダメージによるものではなく、バッテリーの問題だった。

G4-Xのバッテリー残量を示すベルトのバックルのバッテリーメーターがもう僅かしか表していない。

G4-Xだけではなく、全てのGシリーズの機体は全てバッテリーによる電力供給により稼動している。Gシリーズは仮面ライダーの中でも特に堅牢な鎧であったが、その分重くて電力による助力なしではほとんど動けないのだ。

アンデッドが一体、イマジンが三体うずくまり、動けなくなってしまう氷川に迫る。

GM-01スコープIONで応戦したかった氷川だが、バッテリーがとうとう底をつき、腕が上がってくれなかった。

「くう……………!!」

氷川はやってくるだろう衝撃に備えようとした。

だが、後ろから援護。

新たな仮面ライダーが氷川に襲い掛かってくるアンデッドやイマジンたちを攻撃し、見事撃退させた。

見ると氷川の後ろにいたのはG3-マイルドを使う尾室だった。彼はどこかビクビクとした感じでG3-マイルド仕様に改良されたスコープIONを構えている。

「尾室さん、ありがとうございます。助かりました。」

氷川は礼を言う。

尾室が扱うG3・マイルドは誰でも扱えるようにコストを抑えながらも使用者の体長や体格などに合わせるオートフィット機能が搭載された量産型G3であり、顔の側部などが銀色となっている。

しかし、性能自体はやはりG3よりも劣る。彼が氷川よりも遅い出陣となったのはそんな状態で出しても足手まといになる、と緊急で（無理矢理）改良を施していたからだろう。

「や、やった……俺、やったよ……」

氷川が礼をしたというのに尾室は反応もせず自分が怪人を撃退したことに感動して動けないようだった。

無理もないかも知れない。

尾室はアンノウンが滅び、氷川が刑事に、小沢澄子が大学に戻ったあとはG5ユニットの隊長に任命されたものの、新たな脅威・オルフェノクと戦う前にG5が喪失してしまったのだから。

カブトムシ型アンノウン・ビートルロード スカラベウス・フォルティスと戦ったときも、あっという間にノックダウンさせられていた。

『ハイハイ、良かったわね。それより早く予備のバッテリーと交換なさい』

Gシリーズの回線を使ってGトレーラー内で指示をする小沢澄子がバシリと命令する。

尾室は氷川の後ろに回り、赤いパッケージのバッテリーを新しいものに変えた。たちまち電力が再びG4-Xに供給され、バツクルのバッテリーメーターも満タンとなった。

『それと、氷川くん。相手はアンデッドよ、倒すことは出来ないわ』  
「はい、ですが……」

『氷川くん、私が誰だか分かってる？ G3ユニットの班長よ、しつかりと対策は練ってあるわ』

氷川の心が弾む。

そうだった、この人は頼りになる上司で優秀なオペレーターだった。

ブレイドなどのBOARD製ライダーが軒並みシステムダウンしたのだから、この小沢澄子が何の対策も施していないわけがなかった。

澄子は回線でまた『早く出しなさい』と尾室を叱ると、尾室はGXランチャーの弾に似たものを取り出す。

弾数は少ないものの、何かを仕込んでいるらしい。

氷川はGX-05をランチャーモードに移行させ、GM-01を



セットしそれを先端に取り付ける。

GM-01とGM-01をガツシリと持ち、氷川はトリガーを引いて発射させた。狙いはもちろんアンデッドの軍団だ。

ミサイルは死なないと安心しきっているアンデッドに衝突するまえに炸裂する。

といつても、爆発はしない。ミサイルから飛び出したのは白い“硬化剤”だ。

その硬化剤は七体ばかりのアンデッドの全身にふりかかり、瞬間接着剤の何倍も早く、硬く固まってしまふ。

その効果たるや凄まじいもので、低級だが決して殺すことの出来ないアンデッドの動きを完全に止めることに成功していた。

『倒せないのなら動きを封じてしまえばいいのよ』

これはバダンに属するデストロンのヨロイ族の怪人と戦う際にライダーマンが使った特殊弾を改良したものだ。

ライダーマンは完全な改造人間ではなく、その力は他の仮面ライダーと比べ劣っている。固い身体のヨロイ族にはライダーマンの攻撃が通じないのだ。

だからライダーマン・結城丈二はこの硬化剤入りの特殊弾を使い、数多のヨロイ族の怪人の動きを止めることに成功した。

これならば……と氷川は期待する。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

その時、木々が薙ぎ倒されるメキメキという音がして、それに遅れて仮面ライダーダークキバと仮面ライダーイクサが何処からか吹き飛ばされてきた。

「……………!! またまた、よりもよってだな……………!! 笑えてきちまう……………!!」

仮面ライダーダークキバ・紅音也がゼエゼエと苦しそうにしてゆつくりと起き上がりながら言った。

「け……………!! 全く、笑えねえよ……………!!」

仮面ライダーイクサ・山城に憑依するモモタロスはイクサカリバーを杖代わりにして、こちらも息切れしながら立つ。

どちらも消耗は激しい。スペック的にはどちらも優れているので敵からの攻撃はあまり喰らっていないが、やはり、負荷が深刻なだろう。

そして、彼らは尋常じゃないくらい遠くから吹き飛ばされてきていたようだった。

高スペックとなっている彼らをこうまで吹き飛ばすとは並の相手ではなく、イマジンたちにもアンデッドたちにも該当するものはない。

新手か、と氷川は緊張感を高めさせ、ヤマタノオロチをギシッと

強く構える。

来襲は突然に、だった。

灰色の巨体が現れて、その怪物は腕にあるハサミを武器に仮面ライダーたちを襲う。音也、モモタロス、氷川、尾室、伊達はなんとか初撃を回避することができた。

だが……全員が血の気が引いた顔でその新たに現れた怪物を見上げる。それは音也の言う通り、アンデッドに続き「よりもよって」というような最悪の相手だった。

仮面ライダー響鬼を初めとした「鬼」と呼ばれる仮面ライダーが戦った怪物・魔化魍だ。

「鬼」と呼ばれる仮面ライダーは皆肉体・精神を鍛え上げることで鬼への変身能力を得る。そして、響鬼たちは「猛士」という魔化魍退治の組織を作り上げ、全国に現れる魔化魍たちと戦ったのだ。

何故そうまでして鬼となって戦うかというと、この魔化魍、刀や銃やミサイルなどでは倒すことが不可能なのだ。倒す術はただひとつ。響鬼たちの『音撃』という浄化の音ねしかない。

つまりはいかに強大な力をぶつけても“浄化”にはならず、倒すことが出来ない。

「鬼」と呼ばれる仮面ライダーは全国に出現する魔化魍をその土地を担当する鬼が倒す、という組織化をしているため、その数はどのカテゴリのライダーよりも多い。関東地区を担当する鬼だけでも十人ほどいたらしい。

だが、なんの因果か二、三年前に全ての鬼と全ての魔化魍が喪失にあり、魔化魍は出現しなくなり、鬼たちは鬼の姿になることが出来なくなってしまうのだ。

「どうやら『人間は鍛えると鬼になれる』というのは無事であるらしいが、『各々の鬼』がまとめて消されてしまったらしい。

よって、新たな鬼を生み出すことは出来るらしいが鬼の修業は何年もかかるし猛士も解散してしまったため 新たな鬼を育てることは禁止されたそうだ。

長くなってしまったが、結論から言うと『魔化魍を倒せる者も一人もいない』という絶望的な話だ。

更に、これだけでも悪い話だというのに現れたのは『ノツゴ』だった。

ノツゴは日本の昔話にも登場するあやかしで、目の前のノツゴは体長凡そ七メートルで蠍のような尾と、巨大なハサミ、クワガタ虫のような頭部をしている。十年に一度姿を現すノツゴは“日本で最も狂暴な魔化魍”として恐れられていた。

戦闘の音につられてやって来たように魔化魍はこのノツゴ一匹だけだが、それでもかなり手にあまる。

仮面ライダーたちはノツゴから逃れるために急いでバラけた。

ノツゴの攻撃が木々を薙ぎ倒し、地表を大きく耕す。たった数秒で山で木々が多く生えている森だったのに、更地に変えられてしま

った。

氷川は必死に散開しながら悔しむ。せっかくアンデッド対策の硬化剤入りミサイル弾を貰い、光明が見えてきたというのにこれではるくに狙えなかった。

魔化魍たちは怪人たちは襲うなど学習させられているらしく、アンデッドもイマジンも完全にノツゴを味方につけていた。

これは、反撃さえ許されない一方通行の猛攻。

「このツツ！！ 怪物にモテたってしかたないだろ、うつつしいぞー！！」

「てめえらあ！！ そんなに俺様の超必殺技が見てえのかツツ！！」  
イマジンたちは音也とモモタロスに狙いを定め、集中的に襲い掛かっていった。

氷川はまだG4-Xの負荷を抑えられていた。やはり久しぶりにGシリーズを装着したとは言え、何年も前からこの日のために鍛えていたのだらう。

だが、音也とモモタロスの使うダークキバとイクサは下手をすれば死んでしまうような代物であり、基本的に銃を使って戦うG4-Xよりもずっと動かなければならない。

先に負荷の大きなダークキバとイクサを片付けた方がいいと、イマジンとアンデッドはそう分析したらしい。

「ち……ッッ！！ キリがない、黒いの！！ ウェイクアップ2だ  
！！」

「分かった、虫ケラの駆除だな？」

【ウェイクアップ2、　　〳〳〳　　〳〳〳】

キバツトバツト？世が同意し、ウェイクアップフェッスルを二度  
ふく。

周囲が闇のキバの魔皇力によって、闇に、夜に染め上げられ赤い  
月の虚像が浮かんだ。

ウェイクアップ1、ダークネスクラッシュよりも強大なまがまが  
しい魔皇力がダークキバから放たれていく。

ウェイクアップ2、『キングスバーストエンド』。

「ハッ！！」

音也は空へ大きく跳躍する。マントを翻して、眼下のイマジン・  
アンデッドたちを見据え、

放つ、ライダーキック。

ダークキバの体内に宿る闇の魔皇力が集束したキックが、象の祖  
先であるアンデッド、クラブスートのカテゴリーJ・エレファント  
アンデッドに深く突き刺さった。ジャック

ノーマルフォームのブレイドやカリスなど追い詰めた強力なアン



を半分に割ったのではと思えるくらいのヒビを大地に刻みつけた。

強大な魔皇力の余波は近くにいた怪人たちをも巻き込む。アンデッドを吹き飛ばし、イマジンを消し去り尽くした。

ブレイドはトライアルシリーズと対峙した時、封印もできない相手に初めはどうしようもなかった。しかし、キングフォームの力を得たブレイドはロイヤルストレートフラッシュにより、トライアルを完全消滅させることで撃破したのだ。

音也がやったのは同じこと。ダークキバは最高峰のキングである音也の力によって、ブレイドキングフォームと同等以上の破壊力を持っていた。

「く……なんとか潰せは、したか。手間かせてくれた……な……！！」

余りに桁違いの攻撃力と破壊力。だったが、やはり音也にやってきた負荷は相当に大きい。

ダークキバのウエイクアップ2『キングスバーストエンド』ならばアンデッドを消し潰すことが可能と分かったのだが、アンデッドは硬化剤入りミサイル弾で無力化させたのは除いてもあと十二体。

十二体全員にこの必殺技を放つのは厳しい。この一撃だけで脚が強い魔皇力に堪えられずに悲鳴を上げた。これ以上の使用は筋肉を破断させかねない。

「う……！！」



脚が自重を支えきれずに音也は倒れる。言うことを聞いてくれなくなつたまではいけないが、ウェイクアップ2の負荷は音也の自由をしばらく奪う。

「おいこら！！　へばってんじゃねえよ、若ジジイ！！」

モモタロスが動けずに地に伏せる音也を援護しに回る。

ただし、今回に限ってはその行動は大いに災いする。

キングスバーストエンドで舞い上がった土や落ち葉の段幕の向こうから灰色で巨大なハサミが、ノツゴのハサミが助けに行こうとするモモタロスに急速に迫っていたのだ。

「んガッツ！！」

真つ正面からその暴虐なる一撃を喰らつたモモタロスは吹き飛ばされ、木々に衝突。その勢いというのが、細い幹の木を数本折ってしまうくらいのもので、壮絶なものだった。

何十メートルもある巨人が地面を踏み付けたような音がして、モモタロスは巨樹に背中から身体を打ち、音也同様地に身体を倒してしまつた。

「ぐ、ぐが……負けて、たまるかよ……！！　わりいな、もうちょっと……やらせて、くれや……！！」

モモタロスは巨大なダメージを負い負荷も肉体を襲っているが、それでも踏ん張る。



ち上がったところでどうしようもないのが現状。

ダークキバのスペックは全ライダーの中でも最高級に優れている。というのには間違いないが、パワーでは響鬼たち「鬼」の方が上を行っている。

その鬼たちの中でも特に優れ、響鬼・斬鬼などの師匠でもあった朱鬼さえも単独で倒すことは敵わず、斬鬼や我が身を犠牲にしてようやく倒せたのがこのノツゴだ。

鬼でも手がつけられないくらい強力であるのだ、いかにダークキバでも歯がたたない。

(やるっきゃないか ……………!?)

音也でもモモタロスを救え、このノツゴに一泡噴かせられるらるかもしれないものが一つだけある。

ダークキバ、究極の破壊。全身の魔皇力を身体を中心に集め、放つ超必殺技、ウェイクアップ3『キングスワールドエンド』だ。

何百年も昔、レジエンドルガ族と戦った当時のファンガイアたちのキングはこの技を使い、レジエンドルガ族を一瞬の下に滅びさせた。

これを使えばノツゴには少しダメージを与えるにとどまるくらいだろうが、まず間違いないイマジジン・アンデッドたちをまとめて消し去ることが出来るだろう。

だが、キングスワールドエンドは捨て身の大技。これを使った当

時のキングはその強大な力で我が身さえ滅ぼし、レジエンドルガ族のみならず、仲間のファンガイアまで大量に死なせてしまった。

「くそ……!!」

だから、使えない。

使えば敵を一網打尽にすることが出来るが、ここには多くの仲間がいる。キングスワールドエンドはそんな逸話が残されているが、実際どれほどのものは音也も知らないのだ。

『世界を滅ぼす力』、もしその話が本当ならば決して使ってはならない。ここにいる仮面ライダーやキャッツルドランを巻き込んでしまつ。

音也には打つ手がまるでなかった。

ただ、

「はいよオ……!!」

この場に似つかわしくないその間抜けそうな、気の抜けた炭酸水のようなしゃんとしない声が山の中でやたら良く響いた。

「……………?」

音也はダークキバの仮面の下で目をパチクリさせる。モモタロスがピンチだとか、最悪の状況であるということが吹き飛んで、頭が真っ白になった。

とりあえず、音也がその声に気を取られている間に何か起きたらしい。

「イヤア~~~~~アッツ!？」

スポン、とノツゴの顎からモモタロスが弾かれたパチンコ玉のように吹き出し、音也の横に頭から着地した。

どうにかモモタロスは助かったらしい、だが音也にとってはそれはわりかしどうともよく。

これはどういう事態があつてこんなことになっているんだ、と音也は冷えたものでもあり、熱いものでもある汗を流しつつ考える。

ただ、顔は言いよのない高揚によりにやけていた。

ノツゴのセメートルある巨体が“何者か”にひっくり返されていたのだ。

「ギ、ギィィ……!？」

ノツゴがうめき声を上げる。それは大ダメージを受けて身もだえしている、と言うより自分がこんなことになっているのに驚いているような。

ノツゴはそれほど巨大で重量級である訳ではなく、むしろ大型の

魔化魍の中ではスリムな方だったが、その分パワーやスピードは  
線画している。

響鬼の強化形態、アームド響鬼と朱鬼の二人掛かりでも容易には  
いかなかったものだ。

それをこのようにまるで投げ飛ばしたかのようにひっくり返すこ  
とが出来る者など。

今までにいなかった。

「ひっく、ノツロらあ、ほれまは大物だんねえ……」

酔っ払いみたいな口調だったが、確かにそこに。立っていた、こ  
のノツゴを転倒させてのけた者が。

新たな仮面ライダーが。

「れるちゃん、ちよ〜つと、手え貸してふれるかなあ〜〜!？」

酔っ払いのような新たな仮面ライダーは仮面ライダーG4-X・  
氷川がG3ーマイルド・尾室とイマジンの応戦をしているあたりに  
向かって言う。

「え……?? ぼ、僕……ですか……??」

あの新しい仮面ライダーに見覚えが全くないのだが、氷川は自分  
が呼ばれたのかと勘違いしてしまい、返事する。

が、やはり、氷川とは違うみたいである。

「うわッッ!？」

それは結構命取りなタイミングだったので、氷川はイマジンにGM-01改良スコープイオンを叩き落とされ、武装解除された状態でイマジンの攻撃を受けてしまった。

『氷川くん、しっかりしなさい!! よそ見は禁物よ!!』

Gシリーズの回線を通じて小沢澄子が目の前の敵にだけ注目しなさいと叱り付ける。

また、澄子の声色から察するに、作戦を立てる立場の彼女でさえあの仮面ライダーは知らない風だった。

氷川は急ぎ叩き落とされたGM-01を回収しようとする。G4-Xを使う上で負荷を抑えるため銃器は不可欠だ。

だが、回収した時、氷川はイマジンに狙われる。さっきはバッテリーが切れていたが、今度は……

「へへ、悪いねえ……。あの人いつもああだからさ、許してくれよ」

G4-Xを飛び越えて現れた仮面ライダーがイマジンたちを蹴り飛ばしたせいで氷川は射撃を阻止された。

これも、新たな仮面ライダーだ。特徴的なラインが見られるのでカテゴリーこそは分かるが、存在しなかったライダーであるのは間違いない。

新たな仮面ライダーは腰にあるツールを二つに分け、拳に装着させる。ちょうど、メリケンサックのようだった。

「決めるぜ」

【OK！ EXCEED CHARGE！！】

ベルトからエネルギーが両腕に送り届けられ、拳につけたツールに力が充填される。

「うっうっうっうっうっうっうっ！！」

G4-XとG3-マイルドが迎撃を担当していたイマジン十体ばかりに向かって拳一つでライダーは挑む。

イマジンの攻撃をヒラリヒラリとかわしながら、必ず胸……心臓のある部分を狙撃するかのようには鉄拳を打ち噛みます。

決して、相手の攻撃を受け止めたり破ったりはせず蝶の軽やかさで攻撃をかわし、急に蜂が刺すようなストレートを叩き込んでいった。

イマジンが全くついていけないくらいのスピードだ。カブトのクロックアップ、アクセルのトライアルほどではないが、敵の攻撃が来た瞬間だけ異様に速くなっているように見える。

【3 (THREE)！ 2 (TWO)！ 1 (ONE)……！！】

ベルトの無線器に見えるツールが秒読みを開始する。しかし、そ



の時にはすでに勝負はつけられていた。

ライダーのパンチがイマジン十体すべての身体を貫いてしまっていたのだ。

「鉄拳過制裁、クルセイド・オーバー……!!」

【TIME!! OUT!!!】

新たな仮面ライダーの技名らしき決め台詞と、ベルトの電子音のあとにイマジンたちの爆発音が続く。

「こんなもんか、ん？」

それに更に続いたのは、バギンツという殴りつける音。それも何度も何度も。

「ガハア……!!」

仮面ライダーバース・伊達が山の斜面を転んで落ちてきた。プロタイプだとはいえ、強化されているバースを圧倒するようなものが上にいるらしい。

見ると、そこにいたのは凶暴そうなワニの意匠を持つイマジン、アリゲーターイマジンだった。

あのアリゲーターイマジンの戦闘力は確かに高く、ディケイドと電王の両ライダーを追い詰め、ライオトルーパー部隊も破っている。

伊達がやられてしまうというのもまだ分かった。

しかし、こちらを勝ち誇ったような目で見るアリゲーターイマジンは後ろからの攻撃で伊達同様に斜面を転がり落ちる。

「ああ、なんだ。俺の出番じゃなかったか、慎太郎くん」

新しい仮面ライダーは肩をすくめて退散し、さっき自分を呼んだ一番目の仮面ライダーの下へいった。

さて、なぜ“一番目”という数え方をしたのか。それは、アリゲーターイマジンを攻撃した者の腕に“三番目のベルト”があるからだ。

「後藤ちゃん……。ククツ、やっぱり根性あるねえ……」

伊達は後藤の覚悟を指差して賞賛する。

「……伊達さん、行きましょう!!」

現れた慎太郎はベルトをしめ、必要な“セルメダル計九枚”が入ったホルダーをベルトに装着、回す。

「変身!!」

【オオカミ!! ドーベル!! ジャツカル!! GINGING  
IN CELL-THREE!!】

スキャナーが回りながら、セルメダルをスキャンする。

【オオ~~~~ドーカルルルル!!】

オオカミが遠吠えするかのように、ドーベルマンが敵意を燃やすかのように、ジャツカルが唸り声を轟かせるように。

慎太郎は変身する。三人目の新たな仮面ライダーへ。

未知の仮面ライダーへと変身した慎太郎はアリゲーターイマジンのみを狙い、出陣する。

凄い肉薄だった。

慎太郎がいるところからアリゲーターイマジンがいるところまでは十メートルは離れていた。

その距離が一秒にも満たない刹那で詰められたのだ。

ドーベルマンの爪がアリゲーターイマジンを何度も何度も襲い掛かり、反撃をさせない。

「はあ！！！」

上から両腕の爪を使ってアリゲーターイマジンの身体を上から切り裂く慎太郎。

必殺技ではなく、まだまだこの三人目の新たな仮面ライダーの可能性を隠したままだったが、アリゲーターイマジンはこれだけで屈し、

大きく爆発

……。

ドオオオン、と大きく立ち上がる火柱をバツクにして慎太郎は伊達と向き合った。

「……立派になっちゃったじゃないの、後藤ちゃん！」

「いえ、伊達さんのおかげです」

伊達はいろいろな意味で強くたくましく成長した慎太郎を我が子のように褒めて、慎太郎は照れ臭くなった。

さて、これでイマジン部隊は大方片付いたはずだった。あとは決して死ぬことはなく、完全消滅させなければならぬアンデッドだ。

すると、伊達と慎太郎、氷川と尾室の下で何かがあったのか大きな音がした。

そう、まだアンデッド以外にも問題はあつた。

山を登ってやってきた魔化魍の中でも最強の座に近いとも呼ばれるノツゴがまだいるのだ。

一番目に現れた仮面ライダーにどういう力で、またはどういうトリックを使ったのかはわからないが、転倒させられひっくり返された態勢でもがいてノツゴがようやく身を返し、また暴れだしていた。

どうやら転倒させたことにより相当な怒りを買ってしまったらしい。

ノツゴの暴れっぷりは壮絶なものでもし仮に「鬼」たちが残っていて、猛士もまだあつたとしても……何人もの鬼が総出でかかった

としても、このノツゴは止められないだろう。

振り下ろされ、地が割れる。振り回され、木々が薙ぎ倒される。突き刺され、大穴が空く。

この巨体ではただちよつと動くだけで何かを巻き添えにするというのに、そんなノツゴが本気で破壊を撒き散らす。

「ありゃあ、ずいぶんまあ……怒り狂ってるみたいだに……」

「あなたのせいだけだな、七十パーセントくらいは」

「あつれえ？ れろちゃん、なんれそんなこというかつなあ？ わらひの心は今の言葉ことばに傷つけられて、もふめちゃくちゃらよ……」

「あんたが一撃で仕留めないからだろう？ やろつと思えば出来た  
くせに」

「え〜〜〜……でもね、れろちゃん。あそこはさあ、空気読むところよお？ 空気読めないって書いてAYエア（読めない）って言うらしいけどなあ……」

「一ミリも心に来ない。どうしてそんな覚え方するかな？ 酔っ払いはこれだから……」

「らによあ〜！？ 酔っ払いにも人権があるのら〜〜！ うぶ、やば……吐きそう」

「吐くなよ。酔っ払いライダー以外に、嘔吐ライダーのレジェンドまで打ち立てるな」

「ちえ、つれらいなあれるちゃんは」

「んな飴みたいな名前は止してくれつての。ちなみに俺はその名は嫌いだから」

「カカカカカ……ッ！！ ウケルウなあ……」

……この三分強に置ける会話、安全圏でノツゴの暴れっぷりを遠くから眺めている間の物、ではない。

新たな仮面ライダー、名を祭歌とゼダという二人の仮面ライダーは未だノツゴの攻撃範囲にいるのだ。もっと詳しく言えば、ノツゴから五メートルも離れていない地点での会話だった。

全長七メートルあるノツゴ。それが、ほんの少し動いただけでダメージを喰らうという危なっかしい位置にて二人の仮面ライダーは会話を交わしていたのだ。

そこにあるべきなのは無謀・馬鹿・危険という三つの文字。だが、二人にはそれがなくなただあるのは「余裕」・「凌駕」という二つだけ。

百万人に聞いて見ても、「危険」の文字をいれられる人物はいないというくらい、

彼らは優雅に余裕だった。

たわいもない話に傾いていたって、うつつを抜かしているとはとうてい言えない。

「けど、そろそろ決めないとさあ、かなりまずいでしょうが、博士」

「まあまあ、後一秒待ってみほうよ……」

二人の仮面ライダーは一所に固まって初めてノツゴにも把握できないくらいの素早い動きを止め話し込む。

まだ、そこはノツゴの攻撃範囲から脱せられているわけではない。ノツゴの目と鼻の先である真つ正面だった。

これをチャンスと捉えたノツゴは二人に向かって大きな大きなハサミを振り下ろす。

二人の仮面ライダーは幾度となく迫ったノツゴの攻撃を平然と避けていた。カブトなどのクロックアップが使えないライダーの中ではありえないくらいのスピードと反射神経だ。

だが、通常秀でた能力もあればそのかわり劣ってしまう能力がある。例えば響鬼はパワーは段違いだが、防御力・ジャンプ力は劣るように。

クウガなどならもつとわかりやすい。ドラゴンフォームはジャンプ力に秀でる代わりにパワー面に劣り、タイタンフォームは防御力に秀でる代わりに瞬発力に劣るといっように。

そう、通常ならスピードに秀でていてもどれかが劣っている。祭歌・ゼダは防御面はどうなのか。

ノツゴの攻撃に耐えられるのか。

「ギ……ッッ!？」

否。

二人の仮面ライダーが急に立ち止まり、ノツゴの前に攻撃してみると言うかのように立ったのは、

パワーにとりわけ優れている響鬼ですらでんで敵わない、強大な攻撃が破壊を伴おうとしているのに全く動かなかつたのは、

絶対的防御力に期待していたからでも、実はすんでのところで避けられる自信があつたからでもない。

聞いていたのだ、遙か遠くからここへものすごいスピードでやって来るマシンの出す音を。

ノツゴの攻撃を弾く赤い車体、それからノツゴのハサミを弾くとともに、誰かが出てくる。

白い身体に四つの角。ベルト部分にはその武器が。

それは地面に降り立つと、すぐに身を翻し持っている刃を構える。

「百鬼<sup>ひゃくおに</sup>、装甲<sup>さくけい</sup>」



白い身体に蒼が入り、彼が携帯する『ディスクアニマル』が彼の身体に装着され、彼に“更なる変身”をもたらす。

彼が持つ刃、音撃増幅剣・アームドセイバーは使い手にさえ噛み付くような扱いすらさを持っている。

これで強化を試みた響鬼や轟鬼、実験台として使った弾鬼、裁鬼はアームドセイバーのあまりの取り扱いの難しさにより、最初は失敗してしまい、しばらくの間　弾鬼や裁鬼は一ヶ月もの間　鬼に変身出来なくなったという。

せつかく一から三年間も山に籠って鬼になるための修行をし、ようやく念願の鬼への変身を成し遂げたというのに、変身出来なくなるなど。

彼にとってはこの上ない屈辱と悔しさだ。

だが、彼にそれに対する恐怖よりも大きなものがあつた。

それは彼の言った名前にかけたことにある強靱な思い。

彼は誰よりも響鬼という偉大な男の背中……いや全てに憧れていた。彼が名乗るのならば当然『響鬼』の名前だつたらうと考えられる。

だが、響鬼のみならず、全ての鬼がその力を失ってしまっていて………継ぐ者もない。彼は響鬼だけじゃない、他の鬼たちにも大きな影響を受けていたのだ。

きつとここへ来るまでにそれに気がついたのだらう。そして、名

を変えた。

鬼はここにいるぞ、と。

よって、彼は『百鬼夜行』から名を『百鬼』と取ったのだ。響鬼だけじゃなく全ての鬼たちの雄姿を受け継ぐために。

だから、傍から見ればまるで臆していないかのようにその力を試してみる。

絶対零度の風と雪、驚愕するくらい凍てついた吹雪を纏って、彼の身体は更に高みへと上り詰める。

全ての鬼を継いでみせる男、百鬼。“仮面ライダー百鬼”の装甲形態・アームド百鬼。

「これで、全員集合……だな、博士」

「だつから言ったらよおう、空気を読んらって……さて、決めるかねえい……」

アームド百鬼の登場を心待ちにしていたかのように、仮面ライダーゼダと仮面ライダー祭歌はようやく動き出す。

ひらりとかわし続けるだけだった二人の仮面ライダーはノツゴへ反撃に出る。

「さて、祭らあ……！！ デツカイ花火をあげましょおつと……！！」

仮面ライダー祭歌はウクレレや三味線に似た楽器を背中から取り出しながら、右腰に携帯している物を空に投げる。

それは爆弾……いや、火薬があることには違いないが花火の玉のように見えるものだった。

「やて……これ一曲をら……」

【~~~~~】

仮面ライダー祭歌が楽器の弦を緩やかになぞるかのように弾いて音を鳴らす。

結論から言うと、仮面ライダー祭歌が放りなげた花火の玉に詰まっていたのは、世間一般的な考えである火薬などというものではなく、最初から色を持つ特別な粒子だった。

それは仮面ライダー祭歌が鳴らした弦の音色に込められている呪術に影響されて、玉の中から漏れだし仮面ライダー祭歌の式神となる。

飲料水でいえばソーダやラムネのような透明だがどこか青が入った色をした粒子が結集し、形となる。それはまるで、青く燃え上がる鷹のように。

澄んだ青の燃える鷹は仮面ライダー祭歌の「たまや~~~~」という掛け声と共に飛び立ち、ノツゴの右ハサミに激突する。

激突した燃える鷹の大きさは全長十五センチほど。

だが、そんな物質ですらない不確かな物であり本物の五分の一の大きさの鷹は思わぬ大打撃をノツゴに与えた。

爆裂。ノツゴに爆裂の刃が襲い掛かる。

青く燃え上がる鷹はノツゴの右ハサミにぶつかった瞬間にとてつもない爆発を遂げたのだ。

音撃での攻撃でしかダメージを負わないはずである魔化魍・ノツゴ。だが、その青き爆裂はしっかりと爪痕を残す。ノツゴの右ハサミは綺麗さっぱり跡形もなく、木っ端みじんに吹き飛んでしまっていた。

右ハサミは封じられた。だが、被害はそれだけとは限っていないかった。

仮面ライダー祭歌がノツゴに攻撃を仕掛けるために動き出したちよつどその時、もうひとりの仮面ライダーも動いていた。

「チエック」

【OK！ THE DA MAGNAM READY！！】

仮面ライダーゼダはもつ拳銃のようなツールに何か特殊な弾丸を装填し、ノツゴの左ハサミに撃ち込む。

ダメージは全くないようだが、しっかりとノツゴの左ハサミに数発撃ち込むと、仮面ライダーゼダは拳銃のツールをしまい、新たなツールを取り出す。

「チエツクだ」

【OK! THE DA SOUNDER READY!!】

仮面ライダーゼダが取り出したのはラジカセのようなツールだ。それは、仮面ライダーファイズが使用した『ファイズサウンダー』に酷似している。カラーリングが白と黒になっているくらいの差だ。

【~~~~~】

レディー  
始動されたラジカセのようなツールはやはり音を鳴らす。おそらく何処かの電波情報ではなく録音された物。

その録音されていた音は金属製の笛、ラッパなどの吹奏楽器を鳴らしたような音で、それは単数ではなく複数が重なった音楽だ。

といっても、楽器の数は四つほどだが、オーケストラのような荘厳さをも内包している。

ノツゴの肉体の一部が炎症を起こしたよりも顕著に赤くなる。場所は仮面ライダーゼダが撃ち込んだ銃弾が埋まっているあたり。

楽器の演奏がクライマックスを迎える頃。

つまり録音された音撃武器の音色が強まっていった時、呼応するかのようにノツゴの肉体に埋め込んだ『鬼石』がその録音音撃を補強し、増幅させて内部から働き掛ける。

【~~~~~!】

ツールから発せられる録音音撃が最大の威力を発揮、鬼石がそれを強化させて、ノツゴの肉体で猛威を振るった。

ノツゴの左ハサミが音撃に耐えられず中から風船が破けるように粉みじんに吹っ飛んだ。

ノツゴは喘ぐようにもう存在しない両ハサミを見る。

仮面ライダーゼダ・仮面ライダー祭歌の攻撃が、ノツゴの主要攻撃手段であった二つのハサミを消し去ったのだ。

仮面ライダーの攻撃はそれだけに留まらない。畳み掛ける、仮面ライダー百鬼・装甲、アームド百鬼。

「ハア~~~~…!!」

アームドセイバーを両手で上段に構え、力を練る。百鬼の闘志が練り上げられるのと平行して、アームドセイバーに視認できるくらいの強烈な冷気が宿っていった。

気合いで振り切る。

「ハアツツ!!」

冷気を帯びたアームドセイバーを仮面ライダー百鬼はノツゴを真つ二つにするイメージを持って振るう。

冷気はそれに応えるかのようにマイナス何百度という凍てついた剣閃を生み出す。

そして、ノツゴは仮面ライダー百鬼がイメージした通りに真つ二つに断たれ、仮面ライダーゼダと仮面ライダー祭歌に負わされた傷と合わせて、耐えられず爆砕された。

「ふ……ッ！」

最強クラスの狂暴な魔化魍・ノツゴを倒して、百鬼はアームドセイバーで虚空を切り捨てる。

すると、赤い車体からまた誰かが出てきた。百鬼のような颯爽とした登場ではなく、さまよつかのように。

だが、歩みには確かに、

「京介、俺も戦うよ。……やっぱり目を逸らすのは、俺らしくない……！」

確たる決意があった。迷いを断ち切るだけの、強い“自分らしさ”があった。

京介はそれを見て聞いて感じて、ほくそ笑みを浮かべた。

「フッフーン、そうそう。やっぱり来ると思ってたよ。ほい！ これ、ブレヘ（ゼ）ント……！！！」

仮面ライダー祭歌が現れた人物に何かを投げ渡す。それを驚きながらも地面に落ちるまえにキャッチする。

だが、キャッチしたあとにその現れた人物は更に大きく驚くことになった。

仮面ライダー祭歌が投げ渡した物、それは十三枚のカードをデッキに束ねたものだ。それにはトランプのカードのように一から十三までの数字があり、モンスターの絵柄もあった。

仮面ライダーブレイドの敵怪人・アンデッドが封印されているカード、ラウズカード。その中の十三枚だ。

ハートスートの<sup>十ス</sup>Aから<sup>ジャッククイーンキング</sup>J、Q、Kまで、ハートのラウズカードが全て揃っている。

「おいこれって……………!? 始は!?!」

現れた人物・剣崎一真は十三枚のラウズカードを見て驚愕を隠せずに仮面ライダー祭歌に強く尋ねる。

「んん?? 良くはしらないけどない……………伝言はあるだな、これが」  
剣崎一真が何故こんなにも慌てたかはよく知っている調子で祭歌は遠い過去思い出すかのようにして伝言する。

伝言を頼み、自らを嫌悪する存在に変えてしまっても、彼にそれを託した人物。

その男の名は相川始。

「『お前は戦うだろう、使え』ってね。うん、クールだに……」

剣崎一真はかけがえのない友人からの“戦う力”を見て、なんだ



かおかしく思っただらしい。

腹を抱えはしなかったが、吹っ切れたように堪えながら笑いはじめた。

「く、させるかあ~~~~ツツ!!」

すると ……そんな剣崎一真に一直線に迫ってくる怪人がいた。先程、仮面ライダーバースのバースバスターによる攻撃からカイに似た少年を守ったアルビノレオイマジンだ。

きっと、アルビノレオイマジンは剣崎一真……いや、ジョーカーの力を危惧したのだろう。

怪人たちが有利に仮面ライダーと戦えるどうかは魔化魍・ノツゴが倒された今、不死生命体・アンデッドの存在が握っている。アンデッドが不死身である限り、怪人たちに負けはないのだから。

よって、剣崎一真は危険だ。怪人にとっては唯一の生命線であるアンデッドを倒すことの出来る“カリス”という仮面ライダーの再登場は、危険だ。

だが、アルビノレオイマジンの必死の攻撃は遮られてしまう。現れた赤い車体とバツタのようなバイクの持ち主が後ろで控えていたのだ。

「トウアツツ!!」

アルビノレオイマジンの後ろに控えていた黒き光の勇者は空中でアルビノレオイマジンの頭部を強力に蹴って、身を捻りながら着地

し、剣崎一真を守るように立ち塞がる。

「うっ……おのれ、誰だ……!?!」

アルビノレオイマジンはその戦士に見覚えがなく、その名前を悪態ずいて聞く。

「俺は太陽の子！ 仮面ライダーブラック！！  
アールエックス RX!!!!」

仮面ライダーBLACK RX……南光太郎はその名を誇り、声高く名乗り、腕の動きでもそのRXの名を表す。

「む……トゥエルブ十二人ライダーの一人か……面白い!!」

アルビノレオイマジンはロッドを上からRXに向かって振り下ろす。

その一撃を腕を交差させて挟むように受け止めた南光太郎はロッドを引き寄せ、アルビノレオイマジンがバランスを崩して倒れそうになったところに、その腹部に膝を叩き込む。

「ハアッ!!」

ロッドを放さないアルビノレオイマジン。それを利用して南光太郎はロッドごとアルビノレオイマジンを振り回し、遠くへ投げ飛ばした。

「グアッ!?!」

投げられたアルビノレオイマジンは地面に。

南光太郎は「今だ!」と叫ぶとその跳躍力を持って高くジャンプする。

「RXキック!」

身を振りながら両足で成されるRXのライダーキック。キングストーンのエネルギーにより足裏が赤く発光する。

「げ、ギアアアアアアアアアアア~~~~~ツツツ!  
!」

その蹴りはアルビノレオイマジンの胸部分に命中し、振り回されて投げられたアルビノレオイマジンは更に吹き飛んだ。

「う~~~~~う~~~~~くそお~~~~~!!」

アルビノレオイマジンは受けたダメージによる胸から白い煙を上げ、フラフラになる。

今が必殺の時。

「リボルケイン!!」

南光太郎は変身ベルト『サンライザー』に手を添えると、月で反射された太陽光とキングストーンが生み出すハイブリットエネルギーが光子剣・リボルケインを生み出す。

「1、2、3……!!」

「ハア!!!」

RX・南光太郎は最後の足掻きと立ち上がったアルビノレオイマジンのロッドを弾き、無防備となったその白きライオンの怪人の腹部をリボルケインで貫く。

「う……うぐ……!!!」

リボルケインからアルビノレオイマジンの身体に流れ込む光のエネルギー。RXの必殺技・『リボルクラッシュ』だ。

このリボルクラッシュを凌いでみせた怪人はたった一人だけ。クライシス皇帝が派遣した最強怪人・グランザイラスだけであった。

これに敗れた怪人は数知れず、クライシス帝国作戦指揮官ジャーク將軍を改造し生み出された最強怪人・ジャークミドラやクライシス皇帝さえ耐えることはできなかった最強の技だ。

アルビノレオイマシンへ流されているエネルギーがどれだけ強大であるかが見て取れるように、貫いた身体からは光の火花が激しく噴いていた。

だが、いつもよりエネルギーは少ないらしい。

アルビノレオイマシンはRX必殺のリボルクラッシュを喰らいながらも、RXの腕をガツシリと掴んできた。

「RX、技の威力が落ちているぞ」

非難するかのような声。



「ッッッッッ！！」

その後に来るリボルクラッシュにより流し込まれた強大なエネルギーの暴走。

光の火花を貫かれた場所から噴かせ、踊り狂ったように倒れるアルビノレオイマジンは、南光太郎がリボルケインで「R」の文字を示す後ろで爆発した。

「信彦……」

倒した後、すぐに南光太郎は秋月信彦の名をつぶやく。

「ふん、RX……恩を着せるつもりなどはないぞ」

南光太郎はシャドームーン……いや秋月信彦・仮面ライダーシャドールXと向き合ったが、シャドールXは目を逸らす。

それを受けて、南光太郎はしばらく黙っていたが、転換し前向きに考え直したのか、彼の姿からはさすががしささえ取れた。

南光太郎は振り返り、今度は剣崎一真を見る。

「一真くん、今のうちだ」

剣崎一真はゆっくりと深く礼するように頷くと、下腹部にジョーカーである印、ジョーカーラウザーを出現させる。

取り出したのは「ハートのA」<sup>キース</sup>。カマキリの祖・マンティスアンデッド＝カリスが封印されているカードだ。

数年前は剣崎一真ではなくもうひとりのジョーカー・相川始が使用し、仮面ライダーカリスに変身していた。

ジョーカーラウザーにそのカードを通し、読み込み（ラウズ）させる。

ベルトの緑のジョーカーラウザーが赤いカリスラウザーへ変化する。黒いアンデッドの情報が剣崎一真の肉体を侵食し、剣崎一真は変身する。

（いこうぜ、始）

今、自分が心置きなく戦えるようにするため忌み嫌っていた姿になっているのである。かつての親友に、遠いこの地から剣崎一真は言葉を送る。

続いてラウズさせるのは「ハートのK」。ハートのカテゴリーでは最強の強さだったのだからパラドキサアンデッドの封印されているカード。

【EVOLUTION】

黒い仮面ライダーカリスの肉体が全体的に赤が多くなる。複眼の色も赤から緑へ。

仮面ライダーブレイドのキングフォームよりも高いスペックを持つ仮面ライダー。ワールドカリスだ。

「おっほー……こりやまた豪華なメンツになっちゃったねえ、後藤

ちゃん」

「はい……！！ ワイルドカリスに鬼、ブラックRX……それに、シャドームーン……！？」

「あの、状況がよく飲み込めないんですが……」

斜面を滑り降りるようにして仮面ライダーがまた三人、ここに集まる。

仮面ライダーバースに変身する伊達と仮面ライダーサーズに変身する慎太郎、仮面ライダーG4-Xを装着する氷川の三人だった。

さて、と仮面ライダーゼダは話を進めさせる。とにかく、これで全員集まったことになる、この世界に残された仮面ライダーは。

足りなくなったとは言え、十分に心強いとこの場にいる全員が思う。

仮面ライダーブラックRX・南光太郎、

仮面ライダーシャドールX・秋月信彦、

仮面ライダーG4-X・氷川誠、

仮面ライダーゼダ、

仮面ライダーカリス・剣崎一真、

仮面ライダー百鬼・桐谷京介、

仮面ライダーイクサ・モモタロス、

仮面ライダーダークキバ・紅音也、

仮面ライダー祭歌・緑川江美梨。



九人の仮面ライダーは一致団結して残る怪人たちに戦いを仕掛ける。

CHANGE〜Re: BIRTH〜(後書き)

今回、描写が結構適当なのは仕方ないことなんです。まだ祭歌とゼダとサーズは詳しく書けないんです、予告みたいなものなんです、すいません!!

あと、仮面ライダーナスカも出そうと思ったんだけど、出せなかった……

オリジナルライダーはまだまだたくさんいるので楽しみにして下さい!

CHANGE THE PEOPLE WITH NO NAME (前書き)

今回のタイトルはもちろん！ 仮面ライダーファイズの挿入歌から  
です。かつこよさなら全仮面ライダーの中でファイズアクセルフォ  
ームが断トツだと私は思います。

さて、変身までのカウントはとうとうあと1！！ その時の読了時  
間はあ、多分440分！！

……普通のディケイド系二次作品ならとっくに二〜三個の世界を回  
ってるかなあ……。。

CHANGE THE PEOPLE WITH NO NAME

「……あれ？」

仮面ライダー対怪人の戦いを見てミナの口から出た第一声はこれだった。

キャットスルドランでミナと影虎は仮面ライダーと怪人が戦っている様子を映した映像を設置されたモニターで見っていた。

仮面ライダーは二百体のイマジンと呼ばれる怪人を相手にして、全く怖じけた様子もなく獅子奮闘し奇襲を仕掛けたりで数の差を感じさせないくらいに有利に戦いを進めていた。

仮面ライダーG4-Xが持ち前の高火力で敵を引き付けながら攪乱し、

仮面ライダーバースが隙を見てまぜっ返すような攻撃を繰り返す、

仮面ライダーイクサと仮面ライダーダークキバが二人の強力な攻撃にも耐えてみせた怪人たちの中でも強力と言える個体を出た杭を打つように倒す。

連携もしっかりとしており、イマジンたちの過半数を仮面ライダーG4-Xが出撃してからのものの十分で片付けてみせた。

だが、このままの勢いでイマジン軍団を蹴散らせるかと思いきや、

新たな戦力不死生命体・アンデッドが怪人側に付き、状況は一気に仮面ライダーたちにとっては不利になった。

数こそ二十体と最初のイマジンの十分の一ほどの数で大したことなかったのだがアンデッドという怪人は名前の通り不死身であった。

倒しても倒してもすぐに起き上がり、死ぬほどの傷を負っても決して死ぬことはない。彼らを倒し、封印することが出来る仮面ライダーも昔いたらしいのだが、今はもういないという。

よって、仮面ライダーたちにはどうすることも出来ず、こちらが消耗させられるだけの戦いとなってしまったのだ。

ミナと影虎は立花という老人に早くここを離れると言われた。

仮面ライダーたちは頑張って戦ってくれているが、相手が悪すぎる。確実な勝利はないだろう、最大限望めるのは倒せはせずとも粘りに粘ることで、相手が業を煮やして引き上げてくれるのを待つ粘り勝ちくらいなものだった。

ただ、仮面ライダーは戦うためにある一定の負荷を抱えている。

仮面ライダーバースは特にこれといった負荷は抱えていないらしいが、仮面ライダーイクサとG4-X、とりわけダークキバは変身の代償として肉体に強い負荷を受けている。

粘り勝ちどころか本来ならすぐに勝負を決めなければならぬくらいであり、そうしないと例え一方的な勝負が出来ても身体にかかる負担によりダウンしてしまう。

この事態を立花老人始め、ここに集まっている人々は考えなかつたわけではない。“最悪のシナリオ”として、前々から対策していたようだ。

よって、キャッスルドランは勝利を諦めて一か八かここを離脱する。

キャッスルドランに怪人が、しかも現在残っている仮面ライダーのいずれも倒すことが出来ない怪人が襲来してきたという“最悪のシナリオ”に対して彼らが立てた対策は概要だけを簡略的に言うと、“逃げるが勝ち”だった。

詳細は鳥系の動物の姿をした怪人など、飛行能力を持つ怪人を優先的に倒すか無力化　それも出来ないならせめて動きを一時的にでも止め　キャッスルドランで仮面ライダーを含めた全員で脱出する。

しかし、それはあくまで囿で、“本命”のミナと影虎はキャッスルドランを降りて逃げてもらうというもの。

キャッスルドランは大きすぎる。たとえこの場を逃げ切ることが出来たとしてもまたすぐに発見されてしまうだろう。“倒すことが出来ない”アンデッドから逃げられるだけまだマシだが、根本解決には至らない。

だから、ミナと影虎はそうならないためにディハートドライバーを持って脱出する。

なんでも、ミナの乗ってきたバイクのあるところまで逃げ延びた

どり着くことが出来れば“ミナと影虎の二人なら”あとはどうにかなるらしい。

ミナと影虎はそれしかないのなら……と承諾し、キャッスルドラ  
ンから出た ……。

……のだが。

目に入ってくる“現在”の状況がキャッスルドラ内で見ている  
“さっきまで”の状況とは真逆に変化していた。

この囷逃走作戦は“さっきまで”の状況下では最善の策だったの  
には違いないが、最高とは言い難いもの。

必ず成功して上手くいく保証はどこにもない、いわば苦肉の策だ  
った。

この打開しがたい状況においては、少々の足掻きにはなるだろう  
かといういっばいっばいの作戦だ。

つまり、状況はそれほどまでに切羽詰まっているものだったのだ、  
確かに。

確、かに ……。

だが、ミナと影虎の目の前に広がったのは切羽詰まったギリギリ  
な戦い・その状況ではなく、どう見ても。

「オラアッ!! どうしたどうしたア!! へんツツ俺にかかって  
くんのは一万光年早えんだよツツ!!」

「ハッ、どうしたベイビーたち。なんだが、急に元気なくしちゃっ  
たなあ」

「さあ闇を崇めろ、絶滅タイムだ」

『氷川くん!! あと一息よ、一気に片をつけちゃいなさい!!』

「わかりました!!」

「ありやりやあ、こりやわたしらの出番らっしんぐかもね〜」

…

「サボるなよ、こうなったのは半分俺達のせいなんだから」

「後藤ちゃん! 一気にいくよ〜〜?」

「はいツツ!!」

「ウェイツツ!!」

という感じで、

状況は仮面ライダーたちの方が圧倒的なる優位に立っているよう  
な状態に変化していた。

仮面ライダーは見えない敵に翻弄されている風ではなく、傷つい  
て満身創痍となっているわけでもなく、破れかぶれに猪突猛進とな  
っているわけでもない。

希望というものをしかと見つめてつかみ取っている、傷つしてい  
るのにも関わらず自分を取り戻している、そしてなによりあらゆる  
ものと戦い勝っている。



アンデッドという怪人は立花老人の話では殺したり倒したりすることが出来ず、それと戦う仮面ライダーは一人も残っていないいなかった。

だが、仮面ライダーが必殺技や決め技をアンデッドに繰り出しアンデッドが倒れてベルトの装飾バックルが開くと、すかさず何処からかカードのようなものが投げ込まれ、アンデッドはそのカードに吸い込まれるかのように消えてしまう。

要するに、倒せないはずなのに倒しているのだ。

それだけではない。キャットスルドランから出るまでは姿の見えなかった仮面ライダーが何人かいる。その人数は七人と一人。

カマキリのようなイメージの何処ワイルドか野性的な臭いを放っている赤い身体をした仮面ライダー、

鬼のような角を六本生やし、白く筋肉隆々としたたくましい身体に蒼の鎧で身を固めた仮面ライダー、

野を駆け獲物を狩る野犬のように鋭く尖った戦意を有し、素早い動きで一瞬の内に敵を倒す仮面ライダー、

ギリシャ文字の「シータ」と「ラムダ」を合わせたようなマスクの仮面ライダー、

まるで阿波踊りでも踊っているかのようにお気楽な、しかし動きが全く掴めない重装備の仮面ライダー、

黒い身体に真っ赤な目をして太陽光に似た光を強烈に放っている剣に見えるものを振るい戦っている仮面ライダー、

白銀の身体に緑色の目をして夜空に浮かび上がる赤い月のような妖艶さを持つ剣で敵を切る仮面ライダー、

この七人の他にも、今はどうやら待避しているようだがガトリング砲で戦っている青と黒の仮面ライダーをいくらか簡略化させたような青い仮面ライダーもいる。

対する怪人軍団は逆にその数を極端に減らしている。

イマジン ……に見える怪人は仮面ライダーイクサとバース、犬の仮面ライダーが戦っている死に神のような様相を纏う強豪怪人を筆頭にあと残り十五体ほど。

アンデッド ……に見える怪人は仮面ライダーG4-X、ギリシャ文字の仮面ライダーが戦っている架空上の生物、地獄の番犬・ケルベロスに似た強豪怪人を筆頭にあとたったの七体。

イマジンとアンデッドを合わせてもあと二十二体くらいしか残っていない。始めはイマジン二百体、アンデッド二十体の計二百二十体だったのに。

二十二体と言えば仮面ライダー怪人の比率が1:3くらいになる。仮面ライダーの戦闘力を考えれば、充分以上になんとかなる数だ。

すべて引つくるめると、要するに圧倒的優位に転じているわけだ。

「おう、ミナ。影虎と一緒に夜のお散歩か？」

音也がイメージを一体倒し終えて落ち着いたころ、もう自分がいなくてもなんとかなるだろうと考えたのか音也は変身を解除してミナと影虎の場所まで華麗な調子でいく。

「え、ああまあ、そんなと　　ゲフウアツツ！」

ミナからして見ればはほんのジョークに過ぎないように聞こえた音也の台詞に過剰な反応をし、照れまくった影虎をミナはツッコミがわりに一発みぞうちをミナは殴る。

殴った後でふと、ミナは自分でもこの自分が板についてきたと思えた。

「おじいちゃん、ピンチじゃなかったの？　これは一体　　……？」

「どうもどうも、見ての通りだ」

次の演技次の演技と司会と盛り上げを計るサーカスの団長のような動作で、音也は仮面ライダーたちの戦いを見せる。

数分前までここは鬱蒼とした深い森だったが何か巨大な生物が暴れ回っていたかのように木々は薙ぎ倒され、その上で踏み潰されていたのですっかり見晴らしが良くなっていた。

そのおかげで、よく見える。仮面ライダーが怪人と戦っている様子子が。

仮面ライダーは手を抜いて戦ってはいないが、先程までのいっば

いっっぱいな感じが消え、むしろ自由に伸び伸びとユーモラスな空気を混じらせて自分の力をすべて出しきっている。

残る怪人たちはどれも特別な力を持っていたり強力そうなものばかりだったが、仮面ライダーはそんな怪人たちにももろともせず立ち向かい、ペースは完全にこちらが掴んでいた。

イマジンを相手にする攻勢では動きがあった。

「決めちゃうよ、後藤ちゃん……！！ブレストキャノン、シュート！！！」

【ブレストキャノン セルバースト】

「はい！！！」

【TRIANGLE SCANNING CHANGE!!】

「決めてやるぜ、俺達の必殺技……トリプルライダーバージョン！！！」

【イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ】

残ったイマジンの中で一番強そうな死に神のイマジン、名があるならデスイマジンとも言えそうな個体に三人の仮面ライダーは止めをさす。

三人の仮面ライダーはそれぞれの“砲”　イクサは手につけるナツクル、ペースは胸部ユニットの砲台、犬のライダーは手に持つ銃　でデスイマジンに向かって出力全開のエネルギー波を放

った

デスイマジンにこの攻撃を凌ぐような方法はなく、エネルギーの激流を浴びて「ぐあああああ~~~~~!!」と叫んで爆死する。

一方のアンデッドを相手にしている方でも同様に動きが見られた。

こちらは二体のアンデッドに対して四人の仮面ライダーが止めを刺しにいつている。一体は白い顔に一つ目の不気味なメカニカルな怪人、もう一体は黄金と黒の身体で、ケルベロスのように顔が両肩に埋め込まれたかのような、こちらもやはり不気味な怪人だ。

決めるのはカマキリの仮面ライダー、仮面ライダーG4-X、浴衣姿を彷彿させるライダー、ギリシャ文字のライダー。

「広瀬さん……ゴメン!」

【WILD!!】

『GX-05ランチャーモード、アクティブ!』

「はあッッ!」

「さて、景気いいのいつくよおっ……?」

【RIDER BURST!!】

「決まりだ」

【OK!! THE DA POINTER EXCEED CHA  
RGE!!】

カマキリのような仮面ライダーの豪華な弓から放たれた最強の“矢”が一つ目の怪人を飲み込み、消失させる。

ケルベロスの方はG4-Xのガトリング攻撃を受けたあと、浴衣姿を彷彿させるライダーの肩の砲台から放たれた粒子砲で上空へと弾き飛ばされ、それにギリシャ文字のライダーのキックが続けて身体を貫く。

「仮面の正義、ジャツチナイト・アロー……!!」

ギリシャ文字のライダーが地面に着地した後前を向いて必殺技名らしき言葉を口に出す。一拍遅れて地面に落ちたケルベロスはまさにその言葉が真の止めだったかのように後ろで大爆発をした。

だが、これでもまだ生きている。三人の仮面ライダーの攻撃を喰らっても身体が消し飛んでおらず、随分と頑丈な身体をしているようだ。

が、しかし。

「一真くん、こっちもいっちょ頼みますわ」

ギリシャ文字のライダーが立ち上がり振り向きざまに、倒れるケルベロスを指さして言う。

カマキリの仮面ライダーは頷いて空のカードを投げ、ケルベロスを封印する。

これでイマジンは残り14体、アンデッドは五体。合わせて全部で十九体。

パチンツッ!!

ミナの目の前で音也の指がなつて、ミナはびっくりして我にかえる。あんまりにも仮面ライダーの力が凄まじくて、心強くて、ポーンとしてしまっていたのだ。

「うん、見ての通り絶好調にピンチからはエスケープだ。心配いらない。ハッ、まさか俺の身を案じてくれたのか？ うん、おじいちゃんは……嬉しいぞ……!!」

「違う、そうじゃなくて」

「おっと……あれ、違うのか……」

音也はミナストレートのド直球な「違う」という発言に調子を狂わせて昭和の芸人もかくやというずっこけをする。

ミナはもう一度正直に「違うわ」と言ったあと、好転これによって浮かんだ疑問をおずおずと質問した。

「あの、立花さんに聞いた話だとおじいちゃんたちは空を飛べる怪人を優先的に倒してその間にキャッスルドランと私たちは逃げる…

…って作戦だったんだけど」

しかし、それはあとから来たアンデッドが「倒せない敵」であったときの作戦だ。今はまるつきり違う。なにしろ、実際に倒せている。

この場合は……………。

「……………あつたかなあ？ そんな作戦なんて……………。あつたようななかつたような、やはりあつたような、なかつたような気もするんだがなあ……………」

「おい、適当かよ」

ミナに殴られた影虎がようやく傷を癒して音也に文句を叩く。

「待て待て待て、ちょっとした冗談だそんなに噛み付くな」

「アンタが言つと冗談には聞こえないんだよ！」

影虎は不機嫌そうに腕を組んで、鼻をならして余所を見る。

怒っている原因は本当は音也ではなく、まるで本当の原因に対して文句が言えないから転嫁して音也にぶつけている感じがしていた。

ミナはそれには思い当たったが、“本当の原因”は分からなかった。自分にあるというのに

「アンデッドもなんとかなる。だから、リスクを冒してまで逃げることはないな。あのジジイも『本来ここは禁じられた場所だ』とか



なんとか言つてたわけだし ……」

ミナは音也の冷静な分析を聞いてしよげる。

「じゃ、じゃあ……」

「おおつと『戻らなきゃダメ?』とかはなしだ、ミナ。お前はもうなりふり構うな」

ミナの弱気な発言を見越して音也は逃げ道を封じる。

迫りくる怪人たちから逃げるためにここから離れなければならぬ切羽詰まった状況ではなくなって、ミナには猶予が与えられたことになる。

立花老人の話はまだ終わっていない。貰ったディハートドライブ  
― 影虎に持たせている も使い方さえ知らされていない。

普通なら逃げなくていいとなれば、キャッスルドランに戻り説明を受けるべきだ。

だが、ミナにはしばらくの間キャッスルドランに戻りたくはなかった。

ミナには、やりたいことがある。

「渡と深央を迎えにいつてやれ。俺からも頼む、あいつらは必ず生きてくる」

今から言おうとしていたことを先に言われ、ミナはほんのちよっ

ぴり言葉を失った。

だが、その開いた口はそのまま笑みへと移る。ミナはお父さんとお母さんが必ず生きていると信じている。それと同じく音也もまたそう思っている、と分かったから。

「ついて来い、男は女の子をエスコートするもんだ」

音也はミナたちの前に出て先導する。あうんの呼吸で戦っている仮面ライダーもミナのために道を作った。

「うん!!」

ミナは仮面ライダーの一人一人、そしてもちろん音也に心からお礼を言って駆け出す。

なんだかよく分からないが、とにかくミナはなぜだか上機嫌になっていた。仮面ライダーの勇姿を見て、何かを受けとったからだ。ミナは自分自身で思ったが、その受けとったものは具体的な名前がないものだった。

危険な戦場だというのに若干スキップ気味になる歩調にミナは笑えた。

「おい、エスコートって男もいんだぞ」

「お前をエスコートなんてするつもりはないがな。不満なら、ここでお留守番しとくか？」

「そうよ、文句なんかつくんじゃないの!!」

不満を持っている影虎はさらに不平を言うかとおもいきや、影虎は何かを見ると「まあいいか」と落ち着き、黙って音也に従った。

それを見て、音也は歩を進めながらミナに話す。ただし、影虎にも聞こえる大きさで。

「ミナ、多分これでひとまずはお別れだ。お前はもう後戻りはしちやいけない」

「え、なんで？ まだ立花さんから色々と話が聞かなきゃ

…」

「ああ、それはもういい。立花のおっさんの代わりに話してくれるやつが、いるからな」

音也は倒れた横幅七十センチもある大木を大股で乗り越えながら話す。

「え？」

続くミナはスカートを穿いているために後ろの影虎を「見たら殺す」とばかり睨みつけ、座る形で乗り越える。

影虎がげんなりとした感じでミナの後で木を乗り越えたとき、ミナは思い当たる。

「お父さんとお母さん？」

ミナの祖父である音也ですらキャッスルドランを絶好の隠れ家・

研究所として差し出すことでミナや仮面ライダーディハーツのことをしっていた。

ミナの両親である渡と深央はそのふたつについてもっと深いところまでしっけていても不思議じゃなかった。

これから二人を助けに行くのだからそのときに落ち着いて聞ける。危険を承知でキャッスルドランまでUターンしてくることはない。

だが、音也の返事は少々時間を置いてから来た。

「……違う」

音也は邪魔な石を蹴飛ばしてぽつりと言う。その動作には悔しさと悲しさが同時に込められているように見えた。

「じゃあ誰？」

渡や深央も絶対知っているはずだ。それでも違うということもミナが渡や深央を探し出す前に、ミナに教えてくれる人物がいるという事だった。

となると、一番怪しいのは次狼や力、ラモンだ。彼らも実は仮面ライダーに關係する人物で、ミナと仮面ライダーディハーツのことを知っているのだ。

だがしかしよく考えてみれば、力とラモンは渡と深央のところに残っており、次狼はあのクワガタのロボットにより何処かに飛ばされてしまった。

「あいつらじゃないぞ」

音也はミナの考えるように先取りしていう。

渡でも深央でも次狼でも力でもラモンでもない。

もう親戚・知り合いでこれはという怪しい人物がいない。だとすれば、一体……………

「どづいつたらいいんだろーな……………くそ……………」

音也は頭を掻いて三分ほど黙っていた。ミナと影虎はどちらも声を出さずにしばらく音也の答えを待ち続ける。

音也の口ぶりと沈黙から、何となくミナの知っている人物ではなさそうだった。

知っている人物ならばその名前を言ってそのあとでどうして仮面ライダーに關係するのかを説明するだけでいいからだ。

説明も困難ならば、きつと複雑な事情を抱えた人物である。

しかし、それでいながら音也の沈黙は……………ミナを極力動揺させないように、傷つけないように言葉を選んでいるようでもあった。

「……………!!」

言葉を選んでる内に、音也からそれを聞けなくなってしまった。その状況になってしまった。

音也がミナと影虎を守るように腕を上げて、構える。

クワガタ虫に似た怪人を頭領にして、何体かの怪人が物陰から飛び出してきたのだ。

しかも、その内の一体　妖艶で女性的なカマキリの怪人はミナのすぐ側に現れて持つ鎌でミナを狙っている。

「ミナ！！」

影虎はミナを押し倒すようにして伏せさせ、自分も含めてなんとかカマキリ怪人の攻撃を避ける。

「可愛い孫と婿候補に何してやがんだ！！」

音也は激昂し、カマキリ怪人の持っている鎌を回し蹴りで宙高く蹴飛ばす。

「うっんっ、格好いいのね。惚れ惚れしちゃっわぁん……」

カマキリ怪人は後ずさりながら色っぽく音也を誘惑するように腰をくねらせやらしく手を動かして言う。

「で・も、邪魔しないでもらいたいわね、坊や」

カマキリ怪人は今度は挑戦的に物騒な鎌を音也に向けた。

ハハハ……と感情を込めていない笑い。

「俺は坊やじゃない、大じい様だ。……年齢的にはな。お前は化け物だが、一応女だ。いきなりの無礼謝っておこう」

「あら紳士なのね」

「いや、もう違うな。……俺は、怒ったぞ」

音也は「黒いの、もう一度だ！」と叫んでキバツトバツト？世を呼ぶ。

怪人はクワガタの怪人と女性のカマキリ怪人を合わせて五体。腰の装飾品からアンデッドはリーダー格らしいクワガタの怪人ただ一人だ。

どうやら、状況が仮面ライダーに有利になった途端に仲間を裏切り逃げてきた怪人たちであるようだった。

行動自体は敵前逃亡。しかし、ここにいる怪人はみなそんなに弱そうなものではなかった。

どちらかと言えば、どの怪人も強い部類に入っていそうなくらい。敵前逃亡をするというのは裏を返せばそれだけの知力があるということなのだ。

「ミナ、本当にお別れだ。俺が戦っている間に逃げろ。あと三十メートルくらいで構わない」

「さ、三十メートル??」

「それで、なんとななる。行けッッ!!」

音也はそうミナに怒鳴りつけるように言うとキバットバット?世に腕を噛ませ現れたベルトにキバットを装着して、

「……変、身ア……!!」

変身。音也は仮面ライダーダークキバに変身した。

マントを羽織った偉大な仮面ライダーの、祖父の背中がミナの視界いっぱい映る。

バサツ、とマントをはためかせ音也は激痛に耐えながらミナと影虎を横目を見た。

望みのある目だった。仮面<sup>マスク</sup>で隠れてしまっている音也の顔だが、ミナと影虎の目にはしっかりとうつる。

希望を、自分たちに懸けている……………。懸けてくれている……………。

「影虎、男なら女の子を守れ。ミナを泣かしたら俺は許さないぞ」

影虎は「…………分かってらあ」と返事する。

音也に対する対抗心からか、さもやる気なさげに言っているようだったが、ミナは自分の手を影虎がそつと握ったことに気がついた。



「そして、ミナ」

ミナは影虎の手をガツシリと握り返しながら音也を見た。

そこにあつたのは、笑顔、この二文字。

「お前が孫で、俺は幸せ者だったよ」

なんの混じり気のない、祖父としての幸福を表した笑顔だった。良かったと、心の底から思えている笑顔だった。

飛び起きたように瞬間的にミナはうごいた。

掴んだ影虎の手をそのまま引きちぎれるそうなくらい急激に力強く引つ張る。倒れていた身体を起こし、仮面ライダーダークキバ…音也の横を通りすぎて、前へ。

「誰が行っていいと？」

クワガタの怪人…いや黄金のノギリクワガタのような怪人が立ち塞がる。多分、この怪人は現れた全怪人の中でも一二を争う強力な個体だ。

口調がとても知性的だったのでほぼ間違いなくこの怪人が主導者だ。

だが、立ち塞がる怪人の強さを肌で感じておきながらミナの脚は止まらなかった。

恐怖をすてたわけじゃない、もっと大きな信頼と勇気を、ミナは持つことができた。ただ、それだけの話だ。

「やらせないな!!」

音也がミナたちを襲おうとするノコギリクワガタの怪人を遠くから刹那に肉薄し激突する。

その間に、ミナと影虎はその横を通りすぎる。

予想した通り、ここに集まっている怪人たちは戦いに恐れを為して逃げてきたというような弱者ではなかった。

ノコギリクワガタの怪人は何体もの怪人を倒したダークキバに食い下がり、他の怪人も徒党を組めばダークキバと互角に戦っていた。

だが、ミナと影虎は逃げ切れていた。音也が二人を狙う怪人を執念でブロックしているおかげで、後ろを振り返ることなく二人は進めた。

前へ、前へ、前へと。

「逃がさないわよおツツ!!」「待て、人間風情がツツ!!」

ノコギリクワガタの怪人と女性的なカマキリの怪人が同時にミナと影虎に迫る。

ダークキバ・音也は他の怪人・三体を同時に相手しているので、間に合わない。

ミナと影虎は初めて後ろを見た。

逃げるのを諦めたのではない。ミナと影虎は音也が言った三十メートルを逃げきったのだ。

#### 【BATTLE MODE】

後ろでそんな機械音声になったのがかすかに耳に入り、その一秒後には二人の間を何かが超高速で突き抜けていった。

「くっ!?」

宙に跳ぶ二人を捉えたダブルリアット。

唐突に現れたマシンロボットがノギリクワガタのアンデッドとカマキリの女性イマジンの二人を薙ぎ倒したのだ。

マシンロボットは宙を枯れ葉がすべて舞い上がるくらいのジェット噴射でホバリングし、バイクのタイヤに見える盾で、G4-Xのガトリング砲のように銃撃する。

音也にいくらか攻撃されていたからかアンデッドは倒れてバックルを開き、イマジンはそのまま妙に色っぽく絶叫して爆発した。

現れたマシンロボットはホバリングを緩め、緩やかに着地。

すると、ミナの方を向き主人を崇める兵士のように傅き頭を下げた。

【アリガトウゴザイマス、マスター。ホンキハマスターノ  
ユウコウハンイガイ デハ ジリツウンテン ガ デキマセン ノ  
デ】

「は、はい？」

このロボットはミナのことをマスターと呼んでいる。影虎ではなく、ミナを。

すると、今度は違う声で。

【オリジナル。あまり話している時間はありません。ここは危険です、一刻も早く待避を】

発音やイントネーションが正しく引つ掛かりもない人間の声だ。

だが、どうにも抑揚というものがなく無機質なものだった。まだ先程の機械音声の方が人間みがある気がする。

いや、それよりもこの無感動な人間の声の言う通りだ。

イマジンの方は倒すことが出来たが、アンデッドの方はまたすぐに起き上がってくる。

ミナと影虎がいることで、音也にも負担をかけてしまうので、なおのこと早くここを脱出しなければ。

ただ、ミナはどうしても“引き合う感じ”がして、質問する。

「貴方たちって……一体……？」

機械音声の方はその質問を待っていたかのようにズバツと答えた。

【ホンキ ハ 『仮面ライダーディハーツ』ヨウ ニ ツクラレタ  
マシーン デス。キタイメイ DH-01ADR2014 アイ  
シヨウ ハ 『オートディハーダー』デス】

ミナは生返事で返した。機械とかコンピューターとか、そういうデジタル関連はあまりよく知らないのだ。

『仮面ライダーディハーツ用に作られた』ということはこのロボツトはディハーッドドライバーと共にミナのために作られていたらしい。それだけ分かった。

【……………】

一方の人間の声の方は“オートディハーダー”の説明が終わった後もしばらく黙りこくっていた。

それは先程の音也のように、言葉を選んでいる風な。ミナを動揺させないように、ミナを傷つけないように……………。そして、これにはもう一つ何かがあった。

選び終えたらしい。

“人間”は言う。

【強いて言うなら、私は十二年前に生み出された貴方のコピーです  
よ、オリジナル・ミナ】

CHANGE THE PEOPLE WITH NO NAME (後書き)

変身シーンが近づいてきたんですが……週間アクセス数が増えねえよお!!

原因が何かはわかっています。俺の力量不足、ただ一つ!!

さっさと変身しろやあ!!!! 予定では読了時間二百分で旅立つ予定だったのに、五百分はかかるよ!!

さて、次回はいよいよラスト辺りに変身シーンが……入ればいいな。

CHANGE〜WAKE UP!〜 (前書き)

とうとう変身のとかがやってまいりました……長かったような短か  
ったような……うん、どう考えても長かったね!!

では、渾身の变身回をどうぞ!



## CHANGE WAKE UP!!!

世界は無数にある。それこそ無限大なくらいに。

いくつかの世界に“仮面ライダー”と呼ばれる戦士たちがいた。仮面ライダーは悪と戦いこの世に平和をもたらす存在。

そのいくつかの世界の内にすべての仮面ライダーが集結する世界があった。その世界は多くの悪により幾度も脅かされたが、その度仮面ライダーは現れ、平和を保ってきた。

そんな勇ましくも平和な世界に突如異変が起きる。仮面ライダーの力がなんの前フリも理由もなく失われ始めたのだ。

理由は世界。

世界は一つじゃない。更に付け加えると、世界という物は次々と生み出されていくものだ。

そして、ある日世界が生み出された。但し、それは通常では考えられないくらいに膨大な数で同時に生み出された世界は不確かではかないものだった。

普通ならそのまま消滅してしまう世界はお互いに庇い合うように融合を始めた。それと同時に……一番近くに存在する世界から世界の情報を盗み出しながら。

それが始まったのが、西暦2005年の二月十二日。

更に当時偶然世界を訪れていた『世界の破壊者』・仮面ライダー  
ディケイドの協力もあり、早くて十年後、ある程度の存在へと確立  
した世界から怪人の軍団が押し寄せてくることが分かった。

しかし、仮面ライダーディケイドにはその世界に渡ることは出来  
ず、次々と仮面ライダーたちはその力を失っていく。

どうすることもできなかった。

だが、世界には希望も生み出されていた。虚構を巡り、すべてを  
繋ぐことが出来る者がたった一人だけいた。

その者の名は ……

2

「私ってわけ？」

ミナが聞くと機械音声と“人間”は同時に肯定した。

正直言っつて半信半疑だった、すべてを聞いても。

いや、違うか。半分は信じてしまうしかないのだと理解している  
が、もう半分はついていけないと理解を拒もうとしている形だった。

「なんで、私なわけ？」

【オリジナルと私、リクリエイティブはほぼすべての仮面ライダーに変身できる資質を持っているからです。例を挙げると仮面ライダーブレイド系ライダーに必要なアンデッドとの高い融合係数や仮面ライダー電王に必要な特異点、仮面ライダーアギト系ライダーに必要な光の神の力ですね】

「……そうやって聞くとなんだか凄そうだけど、実際にそれって、凄いの？」

【凄いの定義が分かりませんが、オリジナルが考えているよりずっと稀少です。一つを取ってみてもとんでもない可能性なのに、それらが全て揃うなど普通有り得ません】

まあ、有り得ているわけだから自分を密かに取り巻いていたあんなに凄いものだったんだろうけど。

ミナは今になって「鴻上ファウンデーション」「スマートブレイン社」「BOARD」とあの場にいた大物を再確認してしまう。

再確認してしまうのは名前の大きさだけではなく、それらの組織や企業が一堂に会して作ったという機械についても。

音也はデイハードドライバーをミナに渡した時「デイハードツールはもう渡してあるはずだ」と言っていたが、ミナはそんなものを貰った覚えがまるでなかった。

去年の暮れに買ってもらったスマートフォンがそうかと思ったが、よくよく考えて見るとミナがカタログを見て自分で決めたものだったので違う。学校の友人の何人かもミナと同じ機種だと話題にした

くらいだ。

ミナに分かるわけがなかった。オーダーメイドで作られたミナのバイクに取り付けられていたカーナビが、デイハーツールだったのだ。

バイクにカーナビなんておかしいと思っていたのだが、そんな身近にそんな凄いものがあつたとはミナも驚きだった。

今、ミナと影虎は元いた街に戻ってバイクを走らせている。街は未だ怪人がウジャウジャと蔓延るように街を我が物顔で徘徊していた。

数はミナと影虎がこれまで通ってきた道で見られたものの累計だけで実に三百体にはのぼっている。三百体の怪人は皆、それぞれの目的のために人間を探している。草の根掻き分けてもというような貪欲さがあつた。

しかし、ミナと影虎は構わずバイクを走らせている。それも堂々と道の真ん中を通して。

デイハーツールの恩恵だった。このデイハーツールは仮面ライダーデイハーツに変身する上でも重要な物だが、それ以外にもあらゆる場面で使える機能が付随されていた。

実際のスマートフォンのように変身以外にも様々な機能が登録されている。といっても それらもあるにはあるのだが ナビウォークや電卓などというものではない。

今使っている【CONCEAL】というのがその最たる例だ。こ

れを使用している間、使用者と半径三メートル内にある任意のものの存在を隠匿する機能らしい。

スマートブレイン社が何年前か前に何も無い場所に本物のような像を浮かび上がらせるホログラム技術を開発したと話題になったがこれはその応用らしく、それに加えてなんと隠匿対象の出す音や熱さえも隠してしまうという。

他にも色々なツールがあり、これだけでも充分にものすごい。この世界にこんな技術があったものかと思える。

ミナの乗るバイクも実はとんでもないマシンだった。

機体ナンバーはDH-01ADDR2014、これは『デイハーツ専用ビークル一号機“オートデイハーダー”2014年モデル』という意味らしい。通称は『オートデイハーダー』でいいそうだ。

何かの冗談だと思っていた時速五百キロの表記は本当のものであるらしく、ミナがデイハーツに変身するとリミッターが解除される仕様であるらしい。

また、このバイクは超未来的なテクノロジーを導入していて、漫画とかアニメの中だけのものと思える変形をやったのけるのだ。

ミナと影虎を救い、アンデッドとイマジンを撃退した戦闘ロボットのこのオートデイハーダーが変形したものだ。

また高性能AIが搭載されており、ミナが有効範囲（半径五百メートル）内にいる時に限り、ある程度の自律運転をすることが可能であるそうだ。

全く、ディハーツールにもオートディハーダーにも言えることだが、こんな小さなものに一体どれほどの科学技術が導入されているのだろうとミナはボンヤリと思う。

自分たちの生きる現代のものとはちよっと思えないくらいだった。とりあえず、これのおかげで怪人に見つかることなくミナは渡たちを探すことが出来ていた。

「影虎、ちゃんとして来なきゃ駄目よ？」

「分かってるよ……。こ、こんなところで出てたまるか……!!」

影虎はそう言ってお化け屋敷に入ったときみたいになんげと怯えながら周りを見た。

隠匿機能【CONCEAL TOOL】は便利だが、色々制限があると説明された。一つは有効範囲は使用者の半径三メートル内であること。二つは変身中には使えないこと。

まだ変身はしないので、二つは置いて構わなかったが一つ目は影虎の命運を握っている。

影虎はミナにピッタリ張り付くように黒のバイクを走らせているのだが、もし操縦ミスをして三メートル以上離れてしまったら怪人たちがわんさかといえるなかで影虎は姿を現してしまう。

そうなったら死へと急降下だ。まっさか

「え〜と、“ナビ”でいいかしら？」

ミナはディハーツールからミナと影虎に話しかけてくる正体不明の人物　　なんとなく何処かで聞いた声である気はするがの呼び名に困っていた。

“ナビ”と便宜上そう呼んでも構わないか聞く。

【構いません、現在の私の役割はナビゲートですので。ですが、正しくはリクリエイティブ・ミナです】

「あの、リクリエイティブって再創造的になって意味なの？」

それが聞きたかったわけではなかったのだが、ミナはそれも気になっていたので脱線して聞く。

「再創造ってどういうこと？　私のことをオリジナルって呼んでるけど、それと関係したりするの？」

【肯定します。私は再創造された貴方、もう一人のミナです。貴方は私というデータを作った情報源……つまりはオリジナルなのです】

「コピーってわけ？　いくらなんでも、人間はパソコンとかのデータじゃないんだし」

イマジンとアンデッドから逃げていたときにこのオートディハーターとナビが助けてくれたのだが、その時も自分はミナのコピーだと言った。

ミナはゲームの類をやったことがなかったのだが、それでもゲー

ムデータのコピーを連想してしまう。

【いいえ、地球という世界サーバーからしてみれば全てが情報データの塊なのです】  
地球というサーバー。

またも大きな話だった。平々凡々と女子高生だったミナだったのに、今日一日で随分と大きな話題を続けられている。

一応はそういう考え方もあるかとミナは譲る。自分を含めた世界が全てデータであるという考え方は少タイタイ気がしたのだが、仕方ない。

「クローンってわけなの？」

【いいえ。それよりも遥かに精巧です。何しろ記憶の泉による複製コピーなので】

「……泉？」

謔言のように無意識にミナは頭を傾げて咳く。

何時だったか。ミナは今日の何時だったかに「泉」という単語を聞いたことがある。

確実に、だ。ミナの背中に無自覚に吹き出た汗がそう物語っている。

そう前のことじゃないはずだったのだが、何せ今日という日は様々なことが次々次々と起こり過ぎていた。アルバムにとじていけば、



あつと言つ間にいっばいになる。

今日の思い出は多過ぎて、もう一生分の恐怖やら感動やらを味わっているのだ。

どうにも思い出せないまま、ナビは続ける。どれだけショックな内容であろうと、抑揚のない声で。

【オリジナルは十二年前に記憶の泉に落ちて一度死んだのですよ】

ミナは「なんですって!？」と叫んでオートディハーダーのブレーキを踏む。

叫喚とブレーキ音がやかましく響くことになったが、ディハーダーの隠匿機能によりその音は消され、怪人たちはミナに気づくとはなかった。

だが、深刻な被害を伴ったのはミナよりもむしろ影虎の方だったりする。

ミナがあんまりにも突然に急ブレーキをかけるものだから、影虎はそれに遅れた。脊髄反射的にブレーキを思い切り踏む影虎だったが、ほんの僅かにオーバーしてしまう。

止まったのはミナのバイクの四メートル前。隠匿機能の有効範囲“外”だ。

怪人たちが現れた影虎に気づき、ギョロリと睨みつける。いきなり現れたのだから動揺とかしてくれたら幸いだったのだが、あいにくなかった。

影虎は「わったたたつたアツツ!?」と地面を足で蹴って大慌てでバツク。

「あぶねえだろ!? 急に止まらなくてくれよ〜〜!! いや、マジで止まる時は言っておさいツツ!!」

なんとか有効範囲内へ戻って怪人たちの目と鼻を騙した影虎はミナに全力で文句する。

「分かった分かった、だから、もうっさい!!」

だが、ミナはパカントと影虎を殴って黙らせた。結構ひどい扱いである。

だが、ミナはいつ何処で「泉」という単語を聞いたのかを思い出して、考えている最中だったのだった。

今日の夜、屋敷を出て大きな岩の怪物と巨大蟹の怪物に襲われて、グロンギに狙われたあと。グロンギと敵対した“天使”たちの内の一体が放った言葉にあったのだ。

曰くミナは十二年前に記憶の泉という所に落ちて死んでしまったのだと言う。あと、それで何かに覚醒したとも。

「え? やっぱり私、死んで……? で、でも私は今ここに生きて

いて、そんな昔に泉になんて行ってないはずだし……！？ う、嘘よ……！？」

十二年前と言えばミナは四歳かそこらあたりだ。そんな昔の記憶はないが、泉になんて行ったことはないとだけは言える。何故か言える。

自分にどんな秘密があったとしても一度死んだ、という話だけではどうしても信用できない。死んだ気が全くしないのだ。

そういえば、そんなことがあったかも……とフラッシュバックすることもない。

影虎も全身蒼白となって「おい、ふざけたこと言うんじゃない！」「とナビが言うその事実に向かう。

その強力な助っ人の力も借りてミナは動揺するのではなく、真っ向から反抗した。

すると、ナビは「あっ」と始めて感情がちょっとこもった声を出す。

【ああ、すいません。死にはしていませんでした】

その訂正はまた抑揚や起伏のない平坦な言葉だった。

「「ビツクリさせる言い間違いするなあ……ッッ！」「」

ミナはオートディハーダーを影虎は大事にしているバイクを殴るわけにもいかなかったのでやはりオートディハーダーを殴る。

【イタイ デス。ナゼ ミナサン ハ ワタシ ヲ ナグル ノデ スカ？】

機械音声ながらちよつと泣き声になっているように聞こえるオトデイハーダー。しかし、ミナと影虎は「ちよつと黙れ」と揃って言う。

【失礼。ですが、普通なら貴方は死んでいるはずだったのです。過去に一人例があるのですが、そのケースでは死んでしまいましたから】

“記憶の泉”とやらに落ちてしまったのはミナだけではないらしい。ミナの横で影虎が何か思い当たりがあつたのか「ん？」と口に出した。

影虎の話を聞いてみると以前訪れた風都という街の探偵事務所でそれによく似た話を聞いたらしいのだ。

ナビは【園咲来人そのおれですこいね】と影虎の話が正しいことを言う。

とは言え、『死には至らずとも四歳の時にその記憶の泉に落ちた』というのはどうしても思えないミナだったが、割り切つて考える。

「……だから、あの“天使”たちは私が死んだって言ったのか……。あれ？ じゃあ、なんで私の場合生きていられたの？」

新たな問題はそこ。といつても、別に死にたいわけではなかったからあまり突き詰める気はなかったが。

【オリジナルは……“選ばれるために生み出された存在”でありますから。世界は貴方を消すわけにはいかなかったのでしょうか。世界は貴方にやるべきことをやってもらわなければなりませんから】  
やるべきこと。

そうだった。壮大かつ心臓に悪い言い間違いにより思わぬくらい脱線をしていたが、ミナが最初に聞いたかったことはそれだったのだ。

「……お父さんとお母さんを助けたら、私は仮面ライダーディハーツになってどうすればいいの？」

仮面ライダーディハーツの存在はまあまあ分かった。

世界がピンチで、全ての仮面ライダーに変身することができる自分<sup>ナ</sup>に世界中の仮面ライダーに関する人々が希望を掛けて九年の間作っていたのがディハーツドライバー、仮面ライダーディハーツ。

それに变身して戦わなくちゃいけないと世界の方がガミガミと言っているというのも分かる。

ならば、方向性はどういったものなのだろうか。

この異変　世界に消えたはずの怪人が何千体何万體と襲来し、世界中で好き勝手やっているこの状況は突然生まれたたくさんの世界が原因だという。

多分その世界をどうにかこうにかしない限りはこの状況を変えることは出来ないだろう。

さて、どうやればいいのか。それらがこの世界にとって有害なのだと言うなら、やはりその世界を壊さなければならぬのだろうか。

その世界がこの世界の仮面ライダーに関係する情報を奪っていったせいでこうなっているのだから、この世界にとってその世界はやはり有害だと言える。

手っ取り早く諸悪の根源を断つというのが一番分かりやすい解決法だ。

だが、ミナはそうしなければならぬのだとしても気が進まない。世界をどう壊すのか分からないからでもあったが、その世界にも住んでいる人々がいる、仮面ライダーがいる。

それを壊すことが果たして本当に解決に繋がるのだろうか。

いや、そんなのはこっちが勝手に決めつけた一方的で最悪な暴力だ。生きたいという意味は世界にもある、住んでいる人々にもある。

だとしたら、何か他にあるはずなのだ。

その希望に満ちた解決法をミナは期待する。だが、ナビはため息をついた。

【……………。私も紅…………。いえ、赫塚渡と赫塚深央を助けたいとは思っています】

「…………?？」

ミナはこれからやるべきことを聞いていたのに、ナビが話した内容にポカンとしてしまう。

ただ …………… “ 助けたいと思う ” と、初めて明確な彼女<sup>ナビ</sup>の意思がちゃんと入っている言葉だった。人間のものであるとわかる “ 色 ” もついている。

しかし、質問と返答が食い違いすぎている。

【でも……………まだ、貴方には何も出来ないんです】

「何も出来ない？」

【仮面ライダーディハーツに変身するにあたって、オリジナルはあの一つだけやらなければならないことがあるのです】

それを聞いているのだけれど、と反論するのは何故か憚られた。聞いてしまうといけないように思えたのだ。

聞く、ということが今までの積み重ねを台なしにしてしまうような気がして。

聞いたところで、きっと「察することが大事です」と返ってきてそうだった。

「おいおい、それをミナは聞いているんだろ？」

一方、言うては何だが、他人事である影虎はミナのためを思って安易に聞く。

【……大した壁ではありませんよ。そうですね、もう壁でもなく、境界線に過ぎないかも知れません。飛び越えたことがあるのかも知れませんが。もう乗り越えることもないくらい高い場所に立っているのかも知れません】

「え？ ちいと待てよ。どういう意味だ？」

【とりあえず、もう一息です。……オリジナルは仮面ライダーに關係した人々や赫塚音也、そして貴方に出会い、変わりましたから】

「そして貴方……って、俺？」

仮面ライダーに關係した人々 中にはスマートブレイン社長・副社長や鴻上フアンデーション会長などという大物までいた一団とミナの祖父と並ばされた影虎は自分を指差す。

【理解力のない方ですね、決まっているでしょう】

「……あれ？ 謙遜とは受け取ってくれないんだ……」

影虎は「このザッパリとした毒のあるところ、やっぱり誰かに似てる……」と言っつてうなだれる。

ナビはクスリとも笑わず、話した。

【オリジナル。ヒントだけ言っておきましょう。それは春梅影虎です】

「影虎……?? 影虎がどうしたの？ 影虎をぶん殴ったりすれば



いいのかしら」

ミナは握り拳を軽く作りながら真剣に考える。その後ろで影虎は「もつすでに殴られまくっている気がしますが!？」と主張する。

ミナは殴るのは不満だそうなのでチョップして黙らせた。

【貴方を最初に変えた春梅影虎の行動です】

ミナは考えて、今日一日のことを考える。

ミナはこの始まりビギンズナイトの夜で大きく変わったのだ。

初めて変わったのは、ずんぐりむっくりとした虫の怪人に襲われた時、親友とも言える友人が恐ろしい怪人に変わった時、親友の亡きがらを見てしまった時……………。

いや、違う。

あれは気づいただけだ。みなぎっていた自信が根拠のないからっぽのものであると。強い自分は弱い自分をいたぶりつくしていただけだったのだと。

強い自分は強くもなんともない。弱い自分を虐げ略奪し支配者として君臨していても実態のない偽りの栄華……………虚栄だった。

初めて変わったのはそう、影虎に救われた時だ。

影虎は何体もの怪人が集まっている学校の校庭からミナを助け出してくれた。しかも、そんな勇気のいる勇敢な行動をしたというのに、誇りもせず真つ先に愛車の点検に向かったのだ。

直感だと影虎は言ったが、それだけで動くほど人間は単純な動物ではない。

逃げたいから逃げた。助けたいから助けた。

そういう欲求や欲望・希望が根幹にあるから、それは決して一つじゃないから、理由などいくらでもあるから、大きさなどすぐ変わるから。

影虎は人間くさく揺れ動く。

先にしなければ。

きつと、揺らぎ（それ）をミナはあるものに向けなければならぬ。その一步を踏み出さなければ。

「そうか……うん、そうよね、私は」

ミナは“仮面ライダーとしての答え”を出して、オートディハーダーのハンドルを掴んだ。

影虎に三度目のありがとうを心の底から贈る。一度目は助けてく

れたこと、きっかけをくれたこと。二度目はしっかり自分を変えてくれたこと。

そして、三度目の今回は“自分を仮面ライダーにしてくれたこと”だった……

足りないな、とシミジミと思う。このままお父さんとお母さんに会っても足りないなとミナは考えた。

変わらないと。

「何をすべきかは……」

ミナは途中でふと言葉を止めた。

突如、何か音が聞こえたのだ。

「……………」

見上げると月が消えている。いや、月が覆い隠されて見えなくなっていた。

ミナが耳にした音というのは何かによる破壊の音と空を巨大なものが往く音。

上空を蟻の化け物が緩やかに飛んでいた。度を越えた巨大さで、全容はよく見えないがいくつもある足を不気味にカサカサと動かしながら飛行している。推進力によるものではないらしく、その飛行は静かだった。

巨大蟻の飛行物体は頭部や足の部分から光線を放射し、レーザーのようにビルを真っ二つにしたり、コンクリートの地面を粉々に砕いたりしている。

やりたい放題だ、ここはミナたちの街なのに。

「うっわぁ……！！ なんじゃありゃあ、めっちゃくちゃ過ぎんぞオイ……」

開いた口が塞がらない、その言い回しよりも今の影虎を表す言葉として相応しいものは恐らくない。

【クライシス要塞ですね。いえ、それにしても大きすぎるので、ハイパークライシス要塞、というところでしょうか】

ナビが至極冷静沈着に解析する。ハイパーだかスーパーだかどちらかは知らないが。

クライシス要塞は破壊の限りを尽くす。攻撃した辺りはすぐ火の海に変わり、クライシス要塞通り過ぎた後には草一本も残らない。

クライシス要塞が山の麓辺りにある建造物を攻撃した。ミナの通っていた学校だ。友達はみんな死んでしまったかもしれないが、思いがたくさん詰まっている。もうすぐで三年生にあがり、まだまだ沢山思い出を作ろうとしていたのに。

次にクライシス要塞が攻撃したのは川沿いにある繁華街。今日ミナが誕生日プレゼントとして服を買ったショッピンングモールだ。やっぱり他人に決めてもらった服はどうも気に入らないので渡と深央にまた選んでもらいたかったのに。

愛している、いや愛することが出来るようになったのは人だけじゃない。その人々とともに思い出を刻んだこの街の全てもだ。

それなのに、好き勝手に破壊されていく。街にはまだ生き残っている人々がいるかもしれないのに、破壊しつくされていく。

こんなものから自分を好いてくれる大勢の人間を助けようとして、また助けられるとなんの証拠もなくただただ自信満々で信じていたなんて。

「馬鹿げてるわよね」

これで裏付けとしては完璧だ、ミナには成す術がない。

いや

……………

今は成す術ないことはない……………のではないのか。

ミナの手には今仮面ライダーディハーツの力、仮面ライダーとしての自分の力がある。強い自分が弱い自分を支配している気味であの時にはなかったものが、自分にはあった。

もし仮にあの時のミナにこの力があつたなら、まず飛びつくかのようにこの仮面ライダーへの切符を掴みとるだろう。

自分にはみんなを助けられるとのめり込み前にはかり傾いた状態で仮面ライダーディハーツとなってしまう。

だが、今のミナにはそれがいけないことだと分かった。仮面ライ

ダーに関係する人々と祖父・赫塚音也、そしてミナを助けてくれた人間くさい少年・影虎にあって、ミナは知ったのだ。

本当に強く、本当の意味で強くみんなを守ってきた人々はそうじゃない。前だけに傾いたりはしていない。見えなくなってしまうなどいない。

恐怖も絶望も欲望も、“負”と呼ばれるかもしれない全てのもので、捨て去り忘れ去ろうなどしていないのだ。

絶対に絶対に絶対に、忘れてはいけない。もし恐怖や絶望や欲望といったものを捨て、自分の弱いと言えるかもしれない全てを忘れたら、“人々を助ける”という高尚な使命を抱いて戦い続け前へ進んでいるつもりであったとしても。

……やはり、倒れるのは後ろだ。恐怖などを忘れてしまつたら、前に傾いているつもりだったとしても、後ろに倒れてしまふ。

虫の怪人・灰色の怪人と会ったときのミナはちょうど後ろ向きに倒れてしまいそうになっていたのだ。

だが、

かと言ってここで立ち上がるという案もミナには笑って却下することは出来ない。

いやむしろ、強烈な誘惑の香を放ちミナを誘惑する。

仮面ライダーディハーツの力があるというのは事実。この仮面ライダーの力があれば怪人たちを倒すことができる可能性があるというも事実。

しかし、仮面ライダーディハーツに変身し怪人たちをたおすことが出来るかも知れないが、それは同時に家族を、父親と母親を見捨てる行為にもなる。

もし、ミナが仮面ライダーディハーツとして戦っている間に父親と母親が怪人たちに襲われ、万が一にも手遅れにでもなったりしたら。

そうなれば、ミナは間違いなく苦しむことになる。自分には父親と母親を見捨てるつもりなど全くなかったというのに、それでも自分のせいだと自らを責めることで傷口に悔やみの塩を擦り込み続ける。

永遠に癒えぬ傷がこれからのミナを縛り上げるだろう。

「……………ッッー！」

遠くでまた大きな音がしたハイパークライシス要塞が頭部の主砲とも呼べるビーム砲でどこかを攻撃したのだろう。

(「ッ、のオ……………ッッー！ やめな……………さい……………ッッー！)

愛する人々と共に過ごしてきた街がまたしても壊された。

そう思ったらミナは歯をギリリと鳴らし心の中で怪人たちへの憎しみを唱えていた。

憎しみ。

耳にいい言葉じゃない。“負”の感情というもので、一般的には捨て去るべきものだとなるのだろう。正義という耳に心地好い誰もが羨望する言葉には相性が悪く見える。

仮面ライダーは正義を貫くうえでこの“負”を全て捨て去ったのか。

いいや、何度となく記したがそれはない。仮面ライダーは正義の戦士でありながら一人の人間、この憎しみの心から始まった仮面ライダーもいるはずだ。

ミナは「やめてよ」という懇願に近い言葉じゃなく、「やめなさい」という命令を使った。

仮面ライダーディハーツの力を持っているとはいえ、その力で果たして本当に怪人たちを倒せるかわからないのに。

この憎しみの感情は、逃がっている間にも似たような思いを抱いていた。だが、以前は今それに比べれば出来損ないもいいところだった。

今の憎しみは強く芯がしっかりと通ったものだ、正しいとはいえないがそうやすやすと止めてはいけないものとなっている。以前と今、両者の違いは思いの根っこのところに愛があるか、ないかだった。



「嗚呼、どうしてくれましょうか……」

ミナは今自分が悩んでいる迷っていると自覚した。

以前なら時間の無駄だと吐き捨てたであろう迷い、突き貫くには邪魔な心。だが、それが今ではちゃんと必要性を持てている。

街を守りたい、街にいるみんなを守りたい、仮面ライダーデイハーツとなってみんなを守りたい。

いますぐ両親たちを助けに向かいたい、両親に変わった自分を見てもらいたい、その上で自分の変身を見届けてもらいたい。

怪人たちが憎い、この街を自分たちの好き勝手に破壊している怪人たちが憎い、愛する人々をその命を無視して奪った怪人たちが憎い。

二人を信じたい、たとえ助けるのが遅れてしまったとしてもお父さんとお母さんは笑って許してくれると信じたい、自分のやったこととはいいことだといってくれろと信じたい。怪人たちに襲われていても迎えにいくまで無事であると信じたい。

怪人たちが怖い、当たり前前に怖い、人間の理解を越えている怪人たちが怖い、人間の命を簡単に奪ってしまう怪人たちが怖い。

自分が望ましい、仮面ライダーデイハーツとなって戦う自分が望ましい、人々を愛することが出来るようになった新しい自分が望ましい。

自分を認めたくない、まだまだ秘密が隠されているだろう自分を認めたくない、仮面ライダーとして戦う自分を認めたくない、自分が自分でない自分を認めたくない。

理由なんていくらでもある。

戦いたい理由も戦いたくない理由も、どちらもいくらでもある。

仮面ライダーは葛藤に生きて戦い抜いてきた。ミナもそれを体験しているのだ。揺らいでいるのだ、大きく大きく。

ここで、答えを出さなければ駄目だ。自分の思いと戦わなければ生き残れない。

ここで、答えを出すのがミナにとっての始まりヒキンスナイトの夜。

勇気を振り絞って考えるのだ、自分の中には、きっとヒーローがいる。

「……やるぞ……!!」

選り抜いてとうとう目を覚ます新たな戦士の新たな伝説（A New Hero・A New Legend）。

目が覚めたミナは内に秘めていたものを全て爆発したかのように

さらけ出し、目覚めるその魂。

その力は目の前にある、だからつかんでみせる。運命の切札をつかみ取るのだ。

誰かがやってくれるとか打算はいらない、やりたいからやってみせると欲望のままに今ミナは変身する。

自分の心はどうしようもなく高ぶって選んでみせたらもうそこからはクライマックスが続く、どこまでも。

高ぶった心は止まることを知らない。自分にとっては自分が正義。自分にとっての天の道を往き総てを司る。

その物語は灰色でもなんでもいい、汚くとも咲き誇れる花でありたい。アクセルを踏み、本能は疾走する。

自分の可能性を信じて全開にスイッチを入れ、止めることは誰にも出来ない。輝く星を掴もうと飛び立つ。

ウエイクアップ  
覚醒！ サダメ 運命の鎖を解き放て！

今始まる …………… 仮面ライダーディハーツの物語。

「ついて来なさい、影虎！」

ミナがデイハーツールを持ち影虎に持たせていたデイハーツドライバーを引つたくりながら叫ぶ。

影虎はハイパークライシス要塞を悔しそうに見ていたのだが、ミナにデイハーツドライバーを取られてハツと我にかえる。

「お、おいッッ！！ ちょっと待てよ、何する気だ！？」

ミナを身を案じて声をかけてくれる影虎。

また、デイハーツールの隠匿機能の有効範囲は使用者の半径メートル以内。影虎はそこから再び出てしまったたまるかとミナを追いかける。

「戦うのよ、仮面ライダーとして、デイハーツとして！ 私として！！！」

ミナは最寄のビルの中で一番高いビルを選ぶ。自動ドアが開かなかったのでガラスをデイハーツドライバーのトランクボックスで叩き割って。

「はぁッッ！？」

影虎はミナの「戦う」という発言とガラスを叩き割るというアクティブな行動の両方に驚愕して叫ぶ。

ミナは叩き割った自動ドアをジャンプして飛び越え、飛び散って散らばるガラス片にもろともせず走る。

「正気かよッッ!？」

「正気よ!! すんごい悩んだんだからッッ!!」

影虎が恐々と自動ドアをくぐり爪先立ちで走りながら言った言葉にミナはすぐさま返事をする。

ミナは一階のフロントをグルグル回る。エレベーターはすぐに見つけたのだが、動いていなかったなので階段を探したのだ。

階段を見つけたミナは一段飛ばしどころか三段飛ばしくらいする勢いで猛然と階段を上る。

「ちょ、ちょちょちょ……ッッ!!」

影虎はミナから引き離されないためにも同じく全力疾走で階段を駆け上がった。

もう屋内で怪人に見つかからないので三メートル以上離されても大丈夫だったのだが、影虎はそれでもミナから離れてはいけなかつたのだ。

「戦うって、両親どうするんだよ!!? 先に両親を助けるんじゃないのかよ!？」

「助けるわよ、馬鹿言わないで!! 順番が前から後に変わっただけよ!! 一発殴ってあげましょうか!？」

影虎の上から声。離れてなるものかと影虎は加速。

「仮面ライダーつつたって、あの数の怪人を相手に出来るかどうか  
わからないんだぞ！！ 怖くないのか！！」

「怖、いわよ！！」

「ダァンツッ！！ とやはり上から音がする。ミナが力強く何かを  
踏み潰すように段を蹴った音だと分かった。

踏み潰したのは恐怖じゃない。多分、自分を踏み潰したのだ。  
…なんでも出来ると決め付けていた自分を。

「私、馬鹿だったのよ！ 確かに、前までの私は恐怖を知らなかつ  
た！ なんでも出来ると信じていたから、出来たいと思っていた心  
がからっぽだっただから！！」

出来ると信じるのは自分、出来たいと思うのも自分。ならばそこ  
にはそこまで偏らせるような思いがなかったらおかしい。

おかしいのに、なかった。一応は思っていたのが、おかし過ぎて  
いる。矛盾しているのだ。

「そう、矛盾よ！！ 私はこの矛盾に今まで気づけなかった、これ  
以上求めるものはない満たされるものはないって甘んじていたから  
！！ 仮面ライダーたちを見てやっと気づいたわ……！！」

ミナは「だって、おかしいでしょう！？」と続ける。

「恐怖がない人間なんて、いないわ！！ 勇敢に見える仮面ライダーたちにだって恐怖はある、みんな全力で戦っているんだから！！ 戦う理由のために、立ち上がる理由のため……に一生懸命で！！ 私……それがなかった……ツツ！！」

ミナの息が若干切れてきた。階段を猛ダッシュしながら出せる限りの大声で叫んでいるのだから、普通一分ともたない。

だが、血反吐を吐いても構わないとミナは叫ぶ。まるで今までの自分が二度と出てこられないようにトドメを刺すかの如く。

「理由がなかった、熱いものがなかった！！ それはただただ大きいだけ、で、物凄い……軽、くて無知……だった！」

「私は……人からよく思われたいってだけだったんだ！！」

人によく思われたい。

その思い自体はよくあるものだ。例えば自分が凄いものを作ったとする、その時他者から褒められたいと望むのは当たり前だろう。高い評価を貰えれば嬉しいし、低い評価をつけられればやはり悲しい。

これは広義においては自分の身を顧みず他者のことを考えるという善意と取れる。けれども、もし他者のこと“だけ”考えるという狭義であったならかなり危険だ。

「愛してほしいと思ってた、嫌われたくないって思ってた！！ だけど、何かを愛したいとは今まで思えていなかった！！ 愛したところが一度もなかったのよ！！」

期待されるのが嬉しくて堪らなかったのだろう、ミナにとっては。

だから、なんでもやってきたしなんでも出来ると信じこんだ。おそらくミナにとって災難なことになったことはほとんど全て上手くいったか、出来なさそうなことを無意識に避けてきたのだろう。

出来ないことがあるから人間なのに。また、出来ないことでも時に一生懸命になれるのが人間なのに。

出来ることでも時には避け、出来ないことでも時には挑む。

何故か。それは人間は愛を持てるからだ。

愛は人を変える。上手に出来ることであっても愛がなかったらやる気は起きない。下手くそなものでも愛があるならそれに熱中する。

影虎の場合、旅と絵だ。前者は上手下手もないので置いておくとして、後者はよく言えることだ。

馴れ初めといえば大袈裟に聞こえるかもしれないが、影虎は絵との出会いは運命だと思っている。やはり好きになったものだから大きく言いたいところがある。

最初は下手くそだった。自信満々で書いてみせたのだが、やっぱり名だたる名画と比べると所詮落書きに過ぎず深く落ち込んだ。別



に評価してくれた人がいたわけじゃなかったが、それでも影虎は傷ついた。

きつと、ミナは出来ないことに出会ったとき笑ってごまかして上手くないやと捨てたのだろう。悔やみも対抗心もないままに。

影虎はくじけず再び筆を持った。悔しかったのもなにくそと思えたのも愛があったからだ。

仮面ライダーはたおすことが出来ない怪人たちを前にしても戦うことが出来ていた。それは戦う理由があるから立ち上がる理由があるから戦っていたからだ。どう結果が転ぼうが、今戦えなかったら嫌だから。

どんな結末を迎えても構わないとまではいかない。上手いかなくとも、思いがあるからこそ戦う。

愛があるから戦うのだ。

ミナも人を助けたいと思っていたのは本当だろう。ただ、理由がからっぽだった。愛なくして人から愛を受けていた。

結果が伴わなければ、ミナは嫌だった。だから無理矢理にでも根拠のない自信を味方につけてまで人を助けようとした。

それでは……仮面ライダーにはなれない。愛を知らないミナには仮面ライダーにはなれない。

だが、今は違つんだとミナはまず示したかった。

「だから……私イは……戦、う……！ 私は……変わったん、んだ  
……か、ら……ッッ」

バタツと、

今度は上ではなく影虎の前の方で倒れる音がした。ミナが呼吸困難を起こしているような荒く不規則な呼吸をして倒れている。

「ミナ……！」

影虎は駆け寄ってミナがリラックスできるように背中をさすってあげた。

ミナは女の子だ。体力も筋力もさすがにハードな旅を経験してきた旅人であり男である影虎よりは劣る。

こういうときはゆっくりと水分補給してあげるのが一番だったが、ゆっくりなんてミナは選ばないだろうなと影虎は思う。

「なんでも……ないわよ……！！」

しばらくすると息も整いはじめ、ミナはようやく苦し紛れの虚勢を張って自分の背中に触れる影虎の腕を払う。

「ふう……なんだかなあ……」

影虎は優しく介抱するのを拒絶されたため息つく。

無茶苦茶だし、落ち着いていったほうがよかったし、攻撃的すぎるし、すごく心配だ。止めることが出来るかどうかもわからなくて

不安だった。

だが、今の彼女は無茶をしたい気分なのだろうと考える。何年ぶりに芽生えた愛は一直線だった。

だから影虎はミナの肩を担いで、階段を登り先へと進む。

「な、なななな……………ツツ!？」

ミナは動揺して顔を赤らめ影虎を跳ね退けようとする。好きか嫌いかではなく、異性とこれほど密着すれば動揺するのは当たり前だ。

だが、影虎は離さない。変態だのスケベだの言われても、絶対に支える。

ミナを助けたとき。影虎は逃げたいと思っていたが、結局は助けた。直感というものが手助けしたからでもあるが、助けたいという気持ちもあった。

助けて、俺達は出会わなければならぬと惹かれた。どうしようもなく理屈じゃなく、助けたい気持ちが怖いという気持ちを何故か上回ってしまった。

まだまだ助けたいという気持ちに終わりはやってこない、終わりはないように思えた。

からっぽだったけど愛を知って生まれ変わった、いや今誕生したこの少女を助けなければ。仮面ライダーという力を得てしまったこの少女を支えなければ。指命というものを与えられた少女に指命だなんて思わせたくないから、少女を救い続けなければ。

そうならば、これは運命だ。

大袈裟に聞こえるかもしれないが、自分の好きな子だ、やはり大きく言いたいところだった。

4

ビルの屋上に立つ。隠匿なんてもう嫌だったから機能を停止させた。

さて、戦う前に言っておきたかった一言を言っておこう。

すう、と深呼吸して。何よりも醜かった以前の自分の鼻柱を叩き折るつもりで

「私は、仮面ライダーだツツツツ！！！！」

叫ぶ、私の宣言を。

影虎は「よっ、待ってました！」と冷やかす。私はいい場面なのにとちよつと腹が立ったけどおかしくもあつたので、振り返って影

虎に笑顔とウインクを送る。

蟻に似た空中要塞、ハイパークライシス要塞は特別なレーダーを持っているようで私と影虎に気づき、近づいてきた。

近くで見るとかなり大きい。ちやちな街なら覆い隠せるくらいのサイズだ。全長はざっと十キロメートル。

どう見たってこの世の産物とは思えない。得体が知れなさ過ぎる。

だが、恐怖は表に出てこなかった。もちろん、怖くて堪らないのだが脚はそれに反してまっすぐ立てている。

ハイパークライシス要塞はビーム砲などを放って攻撃してきたりはしなかった。代わりに顎を開き、なにやら怪しげな光を私たちのいるビルの屋上に。

その光が降りた場所に、怪人がウワツと現れた。あの光はワープするための光であるらしい。

つくづくもって、この世のものとは思えない。

「貴様、仮面ライダーと言ったか？」

現れた怪人軍団の先頭にいる怪人の姿ではないが金色の顔をした人間とは思えない男がミナにそう聞く。

それは黒い服をきて、ステッキを持っている。加えて後方に黒装束を着た女性や気高そうな紳士然とした怪人、古そうな型の拳銃を構えるロボット、小柄でよく動き回る怪人を引き連れている。

なにより貫禄があり、この金色マスクの男こそがこの怪人たちの指揮官だと分かった。

「そうよ、私は仮面ライダーディハーツ……新米でもないけどね」

そう自嘲の意味も込めた挨拶をすると金色マスクの男は「ハハハハハハハハ……ッッ!!」と笑い出す。

「馬鹿を言うな。貴様のような小娘が仮面ライダーだなどと。それに我々の目的は仮面ライダーブラックRX・南光太郎のみ、失せろ！ 貴様などが仮面ライダーの名を騙るでないわ！」

吐き捨てるように言つと指揮官らしき男はステッキを掲げ、雷を放った。

私は冷静に判断して動かない。雷は私の足元に落ちて、火花を散らしたが、なんてことはない、ただ怖いだけだ。

「用はないなら、なんであんな酷いことをしたのよ」

「RXをおびき出すためだ。この世界にもまだ仮面ライダーブラックRXは生きている……。地球を脅かした組織と手を組みパワーアップした我々は南光太郎を必ずこの手で倒すのだ」

今度は私が笑う番だった。

これ以下だったんだ、今までの私は。この敵はそんな目的のためだけにこれだけ傾けている。

この敵も自分の目的をしつかりとつけて多分自分の部下たちをきちんと愛しているからこそ、こうやって行動できている。

これ以下だ。

ただし、この行動は頂けない。かなり、腹が立つ。そんな理由のために全然関係がないこの街が破壊されるだなんて、かなり腹が立つ。

この街が私は大好きだ、お父さんとお母さん、私が愛している人々と暮らした街だから。

どうしてくれようか。

一発じゃ足りないな、何千何万発と殴ったってきつと気が収まらない。

それでも、とりあえず。これ以上街を壊されてたまるかとは確かに思った。

「わたしは誰がなんと言おうと仮面ライダーよ！ それに、そっちに用はなくてもこっちはあるの！！ ちよつとあなたたち、倒されたくない？ 私すつごく怒ってるから！！」

トランクボックスからレシーブレイガンをつけたライダードライバツクルを取り出し、腰に巻く。

あとは時計型ツール・Dウォッチを変形させそこにディハーツーを差し込んで変身準備は完了する。

いよいよなるんだな……よし根性見せてやる。

弱い自分……わたし恐怖に負けてしまおうとする私も頑張っ、お願い。

今までごめんなさい。あなたの言うことはもっともな事だったのに、いつもいつも無視してひどいことをしてごめんなさい。

あなたは支配していた高慢ちきで無知な空っぽの私よりもずっとずっときれいだわ。私にとってはあなたも私なんだから。ちゃんと綺麗にしてプライドを持ってかわいい服をきて。

私と一緒に行きましょう。

戦うのよ、私は私のすべてを総動員して全力で！

「もう一度言っとくわ！ 私は、仮面ライダーだッツ……！」

デイハーツールの『HENSIN TOOL』を押す。すると、マークがざつと百近く表示される。

立花さんや鴻上さん、村上さん、おじいちゃんは仮面ライダーデ  
イハーツの開発には仮面ライダーに関わった人々が携わったと言っ  
ていた。ここにあるマークはそれぞれの仮面ライダーを表すものな  
のだろう。

こんなにもたくさん仮面ライダーがいて、私を支えてくれる。  
これは頼もしい限りだ。

それに、影虎もいる。ちょっと頼りないが、転んだときは引き上  
げてくれるだろう。



私は今の私を表すのに一番相応しくおもえたマークを叩くように  
押した。

「変身……ッッ……ッッ……」

【HENSIN!! RIDER DE-HEARTS!!】

ディハーツールが電子音を鳴らし、それに呼応してライダードラ  
イバツクルの描かれた紋章が輝きだす。

仮面ライダーを表す百近くの紋章が実像となり私の回りに現れる。  
それは上空へと昇り結集し光の塊になった。

光のタワーか、いやこの形はアンテナのようだ。光のアンテナは  
私の身体に降臨し身体の各部に定着する。

私の変身するという強い思いでか、全ての仮面ライダーの意思を  
受信したのか、アンテナは輝きを増して私を包んだ。

ああ、変身している。

私は今から本気で仮面ライダー！。仮面ライダーディハーツなんだ。

> i i 3 3 8 8 0 | 3 3 7 3 <



## CHANGE WAKE UP!!! (後書き)

どうでしたか？ミナの決意の場面は平成仮面ライダーのキャッチコピーなどのアレンジです。フォーゼが厳しかった……宇宙キターと書けませんし……！！

けど長い。やっぱり読了時間440分になったよ……

挿絵もありましたが、やっぱりへたくそのままです……

次回は続き……ではなく、ちょっと第0章の方を投稿したいと思います。舞台は

の世界。ほぼすべての仮面ライダーと絆を結んだ時点のデイハーツの物語です。

## キャラクター紹介（前書き）

デイハーツの戦闘の前に複雑となっているのでキャラクター紹介を挟みます。

因みに影虎のイラストは以前に投稿したのではなく、書き換えた  
ものです。ありがちなデザインになってしまいましたか ……  
… まあいいか、影虎だし。

ではどうぞー！！

## キャラクター紹介

かくつが  
赫塚ミナ

> i 2 6 1 1 3 — 3 3 7 3 <

本作の女性主人公。仮面ライダーディハーツに変身する。

年齢〓十六(？)歳(あと二時間弱で十七歳)

身長〓160cm

スリーサイズ〓バスト87(E-F?)・ウエスト58・ヒップ85

好きな物〓これから見つける

嫌いな物〓これから見つける

腰まで伸びた金髪に、黒い瞳を持つ少女。学校のアイドルと呼ばれてきた美貌を持つ。

最初は品行方正、友人関係良好、文部両道と絵に描いたような優等生で完璧超人。人に褒められるためなんでもやっつて、努力してきた。

だが、それは数多くの人に愛されるためだけにやっつて来たことで、愛されたいという感情が前にあるせいで「これが好き」という個性が無かった。影虎曰く「色がない」。

仮面ライダーに関する人々、祖父・紅音也、そして影虎に会うことで自分の間違いに気づき、自分の色を持つため考えを改め何かを愛せるように努める。

変わったあとのミナは少々天然ボケのある活発な少女へ変貌。スキップが激しく、強く抱きしめ過ぎたり結構頻繁に手が出る。

あまのじやくな性格であり、ついつつかりと心ない毒を吐くこともいわゆるツンデレ属性。

リクリエイティブ・ミナ曰く全ての仮面ライダーへ変身する力があり、

アギトに変わるための光のオーヴァーロードの力、

ファイズに変身するためのオルフェノク因子、

ブレイドに変身するための高いアンデッド融合係数、

電王と失われた記憶の本棚にリンクするために必要な特異点、

キバに必要な高い魔皇力、

キバ飛翔態に必要な人間とファンガイア両方の血、

オーズに必要な底知れぬ欲望の器を持つ。

当然、身体を鍛えることにより、鬼の身体も手に入れることが出来るのだが、ディハートドライバーにより様々な姿の鬼になれる。これはアギトも同様である。

また、不可能とも思えるカリスへの変身さえ可能とし、全ゼクターに好まれる体質でもある。

本人自身の運動神経や反射神経も高く、厳しい旅を乗り越えてきた影虎を抱きしめで昏倒させられるくらいである。

さらに、幼き頃「しゅじゅつ」を受けたらしく、一瞬だがクウガへの変身をしていたり地球の本棚を無意識に使っていたりするところを見ると …… ガイアプログレッサーやアマダムが体内にあると思われる。

それゆえ、全ての仮面ライダーが背負ってきたものを受け止めなければならぬので、ミナの苦悩と謎は続いていく。

恐怖心を認めようとしなかったミナはようやくそれを迎え入れ、様々な葛藤を経て仮面ライダーディハーツへと変身した。

はるつめかけとら  
春梅影虎

> i 3 4 1 2 3 — 3 3 7 3 <

本作の男主人公。ミナのサポートに徹し仮面ライダーへの変身はな

い。  
年齢〓 17歳

身長〓 181cm

体重〓 82キログラム（意外にガツシリとしており、肥満体ではない）

好きな物〓 絵、旅、ミナ

嫌いな物〓 ナマコ、盗っ人、自由を奪われること

焦げたような色合いの黒い茶色の短髪をしており、瞳は少し異形な

金。キヤーキヤー言われるタイプではないが、かなりの美形。

ミナの父親・紅渡がミナの“最後の一年”のために用意した世界を旅していた少年。

性格は自由気ままなもので熱い心も持っているだが、その反面世界の汚い部分も見てきたので悲観的な考えも持ち、少年にしては悟っている。

九年前、画家である両親がどこかへ失踪し影虎は小学校も卒業せず旅に出る。その旅は両親の死を知ったあとも続く。

一年前風都の鳴海探偵事務所を訪れ左翔太郎と鳴海倉吉に、一年と半年前に紅渡と火野映司に会っている。余談だが、実はほぼ全員の仮面ライダーたちと何らかの形で会っている。

自分の気持ちが揺れ動くのが怖いという恐怖を持ち、責任を取り切れないものには手を出さないことがある。

しかし、ここぞというときには“直感”を味方につけて行動する。最初のミナとは正反対の“人間くさい人物”。

渡の本来の計画では影虎を自宅へ招き、最後の一年を通してミナに影虎の持つ人間くさを身につけてもらい、その上でミナに真実を伝えるという予定であった。(ホームステイ自体さえミナは知らない)

ある意味、仮面ライダーではないが仮面ライダーらしい少年であり、渡や音也も「ミナの婿候補」として一定の評価をしている。



ミナと違って、特別な力は一切持たないが第六感が優れるのか異常に鋭い勘を持っており、それにより怪人の軍団から逃げられたり、ミナとの邂逅を果たしたり、見えないはずのミラーモンスターやキヤッスルドランの姿が見えたりする。

ミナのが好きになったのだが、気づいてもらえていない。

リクリエイティブ・ミナ

現在の役目はナビゲーション、ということ、ミナからナビと呼ばれるているディハーツール内にいる謎の人物。

リクリエイティブとは「再創造的な」という意味であり、十二年前、ミナが記憶の泉に落ちたときに生まれた擬似データだという。

擬似データということ、ミナに近い容姿をしているかと思われるが、詳細は不明。

ミナや影虎には優しい言葉をかけるよう自分をプログラミングしているものの、実際は現実的で心が欠けている。自分やオートディハダーを物として考え、卑下している。

今は機能を失っている記憶の本棚だが特異点を持つ彼女は機能が失われる前の記憶の本棚を閲覧出来る。

紅渡

ミナの父親役。ミナを子供とし、育ててきた。怪人たちからミナを逃がし、現在行方不明。だが、ミナは自分が見つけ出すまで無事であると信じている。

現在は紅の名前を隠し父親の芸名赫塚を名乗っており、世界中を巡りながら、仮面ライダーたちをキャツスルドランに集めていた。

また、仮面ライダーキバでありキバットバット？世などを従える。

## 紅深央

ミナの母親役。ミナを子供とし、育ててきた。怪人たちからミナを逃がし、現在行方不明。だが、ミナは自分が見つけ出すまで無事であると信じている。

昔はさる名家の一人娘で家業を継ぐことが決められていた。家出している時渡と出会い、恋に落ちる。

“化け蟹”などを知る・次狼という本名不詳の男などがかつての従者とする。

## キャラクター紹介（後書き）

かくなり、ネタバレになっていきますね。うん、ヤバイような気もするけど勘の良い方はとっくに気づいていると思うんで、載せました。

影虎にも何か秘密があるのでしょうか？ それは私にもわかりません オイ（ ; ）

今回は0章 キャラクター紹介ときてようやくバトルとなります。

ああそうそう、割り込み投稿って投稿にならないみたいらしいですね……。

## HENSIN〜DEHEARTS〜（前書き）

キャラクター紹介に続き、二日連続投稿。うーん、6時間あれば一万文字はかけると判明。モチベーションにもよるけど。（書き進めてたのにデータが消えたあとなんか最悪……）

仮面ライダーディハーツのシステムは……すいません、ディケイドとは別物だと思ってください。“万能な555”だと思ってください。

スペックは低いですが、それはもうクウガグロイーニングフォームを笑えないくらいに。ファイズ以下かも知れませんが。ミナと同じくあと一年がなかったせいで未完成なんですよね。

それでも、ミナの戦いは始まります。では！

## HENSIN〜DEHEARTS〜

「もう一度言っとくわー!! 私は仮面ライダーだッツー!!」

仮面ライダーデイハーツへの変身ベルト、ライダードライブバックルを腰に巻く。ドライブバックルとはドライバーとバックルの合成語であり、全てのベルトを継ぐという意味が込められている。

デイハーツルのサブプログラムと呼ばれるのが変身機能（HENSIN TOOL）だ。選択されたライダークレストの仮面ライダーに変身する機能である。

登録されているライダークレストは百以上。初代の仮面ライダー一号・二号から四十年以上もの間に生み出されてきた仮面ライダー、ライダークレスト全ての紋章が登録されている。

ミナはその中からアンテナの縦の線で描かれたハートマークのライダークレストを選択。

そのライダークレストは仮面ライダーデイハーツのもの。これからミナが背負っていく仮面ライダーの名前だ。

「変身……ッツー!!」

ミナは抱擁を受け入れるようなポーズから誓いをたてるかのように腕で胸の前に十字を作る形に変え、デイハーツルを拳の側で殴る。

身体が自然に動いたことにより生まれたものだろうが、これがミナの変身ポーズだった。

【HENSIN!! RIDER DE・HEARTS!!】

ディハーツールがそう叫び。ミナは変身する。

ディハーツールはミナの周囲に全ての仮面ライダーのクレストをホログラミングし、そのクレストをミナの頭上で結合させ、十字架にも似た金のアンテナマークを浮かばせる。

それはミナへと降り立ち、ミナの頭部と胸部、肘から先と脛から先に黄金のアンテナ・ゴルドレシーバーが現れる。

続けて黒のプレート・ライドプレートが頭部と胸部にアンテナの電波のように現れて、頭部と胸部を中心に仮面ライダーのスーツを作り出す。

スーツ自体は仮面ライダーディケイドを基にしているが、胸部を守る堅牢な鎧・ディヴァインアーマーは存在せず、ミナの身体にフィットしておりディケイド・ディエンドよりも比較的軽装だった。

ディヴァインスーツの色は両ライダーと同じ黒だったが、胴体部分は白となっており、肩や脇腹、脚、腕を守るディヴァイングループはマゼンタやシアンではなく綺麗な黄色。

一番両ライダーと異なるのは複眼・ディボンドヴィジョンが蒼いこととシグナルポインターに変わってピンク色のハート型の宝石のようなものが額と胸にあることだ。

この宝石に見えるものは『フルハートオーヴ』。

仮面ライダーディハーツの“本当の意味”メインプログラム『最上の絆』の発動時に効力を発揮する、完全にディケイド由来ではないオリジナルのもの。

九年間という月日はほぼこのために費やされたといっても過言ではない、ディハーツそのものとも言つべき魂<sup>ハート</sup>の結晶だ。

「ほう少々面妖だが仮面ライダーだというのは偽りでは無かったらしいな。この世界にはRXや十人ライダー以外にも仮面ライダーがいるという情報があったが貴様のようなライダーもいたとはな」

ジャーク將軍は仮面ライダーディハーツの姿をじっくりと品定めするかのように見ながら評価する。

【初戦<sup>ファーストオペレーション</sup>闘行動です。しかし、油断はしないように忠告しておきます。敵はクライシス帝国、強敵です。しかも、何やらパワーアップしているようです】

ミナの右手首にある世界軸計測器・D(DISTINCT-READER)ウォッチに取り付けられているディハーツールから“リクリエイティブ・ミナ”の忠告が飛ぶ。

「油断？ 出来るもんなら苦労はないって……！！」

恐れを捨てず自分の中に永遠に秘める彼女<sup>ミナ</sup>は脚を広げ、拳を構える。

【良い心構えです、オリジナル。百パーセント勝てる戦いなどこの世にありませんから】

ミナの当面の敵はクライシス帝国。この世界で最も偉大と称される

12人ライダーの一人、仮面ライダーブラックRXが戦ってきた強大な敵だ。

この地球とは双子の惑星であったという異次元・怪魔界に存在するクライシス帝国は数ある悪のなかでも特に巨大な力を持って地球侵略に乗り出してきたのだ。

しかし、怪魔界は度重なる地球の人間たちによる環境汚染の影響を過度に受けてしまうことによりクライシス皇帝がRXに倒されたのと同時に大爆発して滅んでしまった。当然、クライシス帝国も滅亡してしまっただけのことになる。

だから、ミナの目の前にいるクライシス帝国はこの世界の存在ではない、これも虚構だ。

しかし……虚構とは言え全く安心が出来るものではない。リクリエイティブ・ミナの言う通り、クライシス帝国はパワーアップしていた。

クライシス要塞はその巨大さをさらに規格外なものにしており、ジャーク将軍やその後ろで従っている四大隊長の装いはかなり変わっていた。

ジャーク将軍だけでもその強化はかなり見て取れるものだ。赤茶色の衣服は漆黒となっており、手に持つステッキはまがまがしいものに変わっている。

マリバロンは赤と黒のカラーリングが逆転しており、頭の金の羽はやや機械的な物に、



ガテゾーンは蒼いボディーに銀色が交じりモノアイは白色に変わって  
いて、

ボスガンは緑の礼服を黒に変え怪魔稻妻剣と電磁波剣の二刀流とな  
っている。

なかでもゲドリアンの容貌は特に変わっており全身に青緑色の斑点  
を浮かべ、緑色の血液が流れるチューブのようなものを通して

クライシス帝国はRXだけではなく十人のライダーの力も集結させ  
ようやく勝てた巨大な悪。ミナの初戦闘の相手には少々厳しい相手  
だ。

ミナは冷静に構え、睨み合いを続けさせる。

というのは、この仮面ライダーデイハーツの情報が入り込んで  
きており、ミナは今それをゆっくりと飲み込んでいるのだ。

この仮面ライダーデイハーツの状態では使えないのはデイハーツの  
機能のみ。その数は決して少なくはなく膨大な数なのだが、その効  
力をゆっくりと吟味して選ぶ。

デイハーツの主な武器は両腰に装着させてある可変式万能受信機・  
レシーブレイガン。これは四つの形態に変形できて、様々な攻撃手  
段となる。

この力をなんとか駆使してあの恐ろしい怪人たちを相手にしなけれ  
ば  
.....！！

ミナがそう生唾を飲み込んで決心し、西部劇のガンマンの決闘よろ

しく構えていると、なにかが聞こえた。

【ファイディング、ファイディング……！！ RX発見、場所はここから十七キロ離れた山中 ……………！！】

ジャーク將軍や四大隊長の頭上を何かの機械が飛び回る。クライシス帝国の官房長ロボット・チャックラムだ。クライシス帝国の地球侵略についてのデータが大量にある。

その情報を聞くとデイハーツの姿を興味深そうにみていたジャーク將軍は急に興味を失ったかのように踵を返す。

「ならば、そちらへ向かおう。全兵、クライシス要塞へ帰頭せよ」

ジャーク將軍はステッキを上空に向けて、現れた怪人たちに命令する。

「え ……………??」

すっかりと戦う気になっていたミナは肩透かしを食らったようになり、肩の力が抜けてしまった。

ミナの戦いたい気持ちを裏切るかのようにジャーク將軍から帰頭命令を受けた怪人たちは次々とワープして消えていく。

なんだか、自分の扱いがひどく悪い気がしてミナは怒った。

「ちよつと！！ どこに行くのよ！？ まさか、女の子相手に怖じけづいて尻尾を巻いて逃げる気！？」

ミナは加えて「恐怖の怪人たちが聞いて呆れる」とはつぱをかけ、挑発する。

ジャーク将軍はミナの口を黙らせるように軽くステッキを振り、ミナに光線を放ってきた。ミナはいきなりで驚いて飛び上がったことによりジャンプして避ける形に。

「自惚れるな、今貴様のような訳の分からぬ者に時間を割くわけにはいかんだ」

相手にされていない。いや、相手にするのは意味がないとミナは思われていた。

何かが頭に衝突したように頭を動かし、ミナは解いた構えを再び取る。直接的な言い方を取るなら「ムカついた」だ。「カチンと来た」という表現もなかなかあっている。

しかし、そのジャーク将軍の決定に意外な人物が異を唱えた。

諜報参謀のマリバロン、百目ババアを師とする妖術使いでジャーク将軍に最も強い忠誠を誓っている四大隊長唯一の女性。

マリバロンはジャーク将軍の前にひざまずき、意見する。

「恐れながら！ RXではないとはいえあの女は憎き仮面ライダー！！ 仮面ライダーは敵でございます、ここで倒しておかねば……わが顔を傷つけられた怒りは……！！」

「余の命令に従えぬか？」

「いえ、しかし……!!」

「くだいッツ!! マリバロン、貴様は自分の怒りにとらわれすぎておる。我々がこの世界にやってきたのはRXの亡きがらを見たいという皇帝陛下の御意思であるということをお忘れでないわ!!」

ステッキの先を剣先のようにマリバロンに突き立て、ジャーク将軍はマリバロンを叱責した。

マリバロンは自分が怒りにとらわれすぎていることによつやく気づいて恐縮して下がる。

「しかし、ジャーク将軍。マリバロンの言うことももつともでございませぬ。ここで放っておけば、我々の邪魔となるかも知れませぬ」

黒い礼服に着替えた貴族風の怪人、海兵隊長・ボスガンがジャーク将軍に提案を持ち掛ける。

ジャーク将軍は「うむ」と頷き、満足げに笑った。

「ならば、足止めをしておけ。ただし、我々の最終目的はこの世界でもこの世界のRXでもなく、十二人ライダーどもの世界だ。戦力の浪費はするな」

その台詞を待っていましたとばかりの小柄な怪人、牙隊長・ゲドリオン。彼は周囲を落ち着きなく駆け回ったあと、ジャーク将軍に立案する。

「ならば、この私にお任せを!! ちょうど腹を空かせた奴がいる

んだ〜!!」

ゲドリアンは派手なパフォーマンズをして怪人の名前を叫ぶ。

「やれ、怪魔異生獣バルンボルン!! あの仮面ライダーを倒せ!!」

ゲドリアンが名前を叫ぶと同時にミナは「キャアツツ!!」と叫び、倒れる。

ミナの背後に黄色い光がやってきて、それが怪人となりミナの背中を強く殴ったのだ。

怪人はギョロリと身体のかなりの部分を占めるほど巨大で不気味な一つ目でピンク色の体皮に象のような長く緑色の鼻を持ち、耳にあたる部分には触覚を生やしていた。

怖い、というか気持ち悪い。気持ち悪い、というかグロイ。そんなイメージの怪人だ。

ジャーク将軍とマリバロン、ボスガン、ガテゾーン、ゲドリアンの四大隊長はその怪人に仮面ライダーデイハーツを任せ、クライシス要塞に戻る。

「……………最初の相手はこんな馬鹿面の怪人啊……………ツツ!!」

何となく、急にグレードを下げられた気分ではむしろしゃくしゃくとする。本当に自分は舐められていると思った。

【クライシス帝国、ゲドリアン率いる怪魔異生獣・バルンボルンで

す。戦闘力はそれほど高くありません】

リクリエイティブ・ミナはこの気味の悪い怪人にも全くと喋ってはいくらいに動じず、スラスラと解説する。

戦闘力は高くないというが、ミナを襲った奇襲攻撃は厄介だった。恐らく、瞬間移動の類の能力だ。

「というか、なんであなたそんなに色々知っているの？」

【私は三年間、地球の記憶の中をさ迷っていましたから。それに、あのバルンボルの話はバイオライダーの反則度<sup>チート</sup>がまた跳ね上がった話でしたし】

「は？」

【よそ見は禁物ですよ、オリジナル】

怪魔異生獣・バルンボルの巨大な瞳からどういう原理からか稲妻状のビームが放出され、ミナを襲う。

また叫びながら、ミナはそれを屈んで避けた。

そうだ、余計なことは気にするな、目の前の敵といつ死んでしまってもおかしくないギリギリな“戦い”に集中しなければ……………

ミナは戒め、バルンボルを敵として見る。初めての敵にしては役不足感が半端じゃないが、えり好みはしてられない。

ディハーツのことを知ったときのように、ミナの頭のなかに怪人の

情報が入ってくる。

あのバルンボルンは仮面ライダーブラックRXと戦い、敗れた怪人だ。人間に化けグレートマスクと名乗りスポーツの各チャンピオンを倒しクライシスユーゲント計画を進行していた。

だがリクリエイティブの言う通り、クライシス帝国の怪人の中ではそれほど強力ではなく、子供を人質に取ったもののRXのリボルクラッシュで撃破されている。

格闘戦はそれほど得意ではなく、攻撃は主にビーム攻撃を主体にしている。

間合いを詰めようとミナは考え、右腰のレシーブレイガンを手に取りバルンボルンのビームを避けながら変形。

レシーブレイガンはブレイモードへ。それは剣のような形をしており、アンテナの分岐点部分を押し込むことで作動する。

「えいッッッ!!」

ガンッ!! とミナはレシーブレイガンのガンマスイッチを地面に突き刺すように押し込んだ。

【ATTACK TOOL・SLASH!!】

綺麗な赤みの強いピンク色 ……マゼンタ色のエネルギーが  
レシーブレイガンに纏わり、レシーブレイガンは伸長して長剣に  
変わる。

これは仮面ライダー電王のデンガツシャーの技術を応用したもので  
あるらしい。そして ……

「ふんツツ!!」

バルンボルンがまたビーム攻撃を仕掛けてきた。しかもこれはかな  
り広範囲を狙ったもので、避けることは難しい。

ミナはとっさにレシーブレイガンを盾のように前に突き出した。意  
図してやったことではなくて。

だが、正解だった。

バルンボルンが放った電撃のようなビームはレシーブレイガンに吸  
い取られるかのようになったのだ。

「え〜と……ハイツツ!!」

ミナはちょっと動揺したのだがすぐに補填されてきた知識により、  
動く。

ミナがレシーブレイガンをバルンボルンに向けると、吸収されたビ  
ームがバルンボルンに跳ね返るかのように先端から放たれたのだ。

「ぐ、あああツツ!?!」



バルンボルンは自分が放った強力なビームを全身で受け火花を散らす。

このレシーブレイガンは電王、そしてブラックRXのバイオライダーのものを参考にしている。つまり、デンガツシャーとバイオブレードだ。

エネルギー変換形式をデンガツシャーから、そして材質と切れ味はバイオブレードから。

とりあえず、今がチャンスだとミナは考え、レシーブレイガンブレイモードを手にバルンボルンに接近する。

「タアツツ!!」

ブレイモードで斬るミナ、バルンボルンの大きな目玉と長い鼻を切り裂くつもりでの一撃。

バルンボルンは縦一線を切り付けられ、また激しく火花を噴き出した。

だが、ミナの頭には不安観念が浮かぶ。

「ムグ……ッツ!!」

バルンボルンの身体を一闪、また一闪と続けざまに斬りつけていく。反撃などさせられなかった。一息いれる間もなくなだれ込むような素早さで斬る。

それがミナの戦い方 …………… そう言うわけでは残念ながらもなかった。

弱いのだ。レシーブレイガンブレイモードで切り付けたにしては。全然、全く期待できる威力に達していない。

レシーブレイガンはバイオブレードを参考に作られている。しかし切れ味はその上を行き、仮面ライダーブレイドの重醒剣キンググラウザーにも劣らないはずなのだ。

そのわりに威力が小さすぎる。バルンボルンは怪魔異生獣で防御力には秀でていないというのに。

仮面ライダーディハーツ自身のパワーが弱すぎるのだ。レシーブレイガンには釣り合わないくらいに。

だから、ミナの胸中には焦りが生じる。恐怖が戦いを加速させ、ミナは反撃を許さないくらいに続けざまの攻勢をする。

「ぐがあツツ!」

「ツツ!」

だが、それは裏目に出た。切り付けたレシーブレイガンをバルンボルンが掴み、ミナの身体を組み伏した。

バルンボルンはミナを地面にたたき付け、踏み付ける。

「が …………… ツツ!」

ミナはバルンボルンに繰り返し踏み付けられ、仮面ライダーディハーツのマスク内で嗚咽を漏らす。

反抗したかったが、パワーが全く足りない。立ち上がろうとするたびに踏み付けられ、力に負けて倒れてしまう。

幸い、ダメージは少ない。ディハーツの身体はディケイドと同じデイヴァインオレで作られており軽装とはいえ堅牢だ。

だが、このままではいけないとミナは思った。踏み付けられながら、必死に起死回生の策を考える。

ディハーツに登録されているツールは七つ。戦闘用の攻勢機能（ATTACK TOOL）は八つある。

これを使えばこの状況は如何様にも変えることが出来る。パワーで劣っていようが、仮面ライダーはそれだけで諦めたりはしない。

だが、ミナはディハーツに手を伸ばしたときに見て考えを変える。

影虎。助けには入ってこない、応援をしているだけ。それは非情に見えるかも知れないが、彼なりの絆だった。

ミナは今戦いたがっている。ならば、少々のピンチがミナを襲つていようとそれを邪魔しては駄目だ。そう信じてくれている、これもまた勘なのだろうけれども。

ミナは変わった。ここで影虎に助けられているようではなんにも変わらなかったのと結果は同じだ。

安心してね ……私、全然大丈夫だから。あなたは傍観者を演じてなさい。

ミナはデイハーツールに伸びかけた手を一度コンクリートを殴った後再びレシーブレイガンへ、戦うための剣へ。

つかみ取った瞬間、仮面ライダーデイハーツの額と胸にある宝石『フルハートオーヴ』は輝き出す。

デイハーツの本当の意味、その光が絆によって片鱗をみせた。

【仮面ライダーデイハーツ、メインプログラム稼働率20%。出力五百%アップ……いけます】

デイハーツールのリクリエティブ・ミナのその微かなアナウンスはミナの耳には入ってこなかった。

関係がない。ただ、影虎は信じてくれているのに自分は情けなく地べたにへばり付いているというのはおもしろくない。

おもしろくないから、真っ向からやってぶちのめしてやるうとミナは思った。

レシーブレイガンを持って、ミナは立ち上がる。途中で背中に踏み付けるバルンボルの脚がズシリとのしかかってきたが、真っ向から力をぶつけて打ち勝った。

「ザアイツツ!!!」

立ち上がったミナは逆にその脚を怨念を込めてレシーブレイガンで切り付ける。

「ぐおおあッッ!？」

その一撃は強大。脚を掬われたようにバルンボルンはバランスを崩す。いや、バランスを崩すどころではなく、バルンボルンの巨体は空中で烈しくスピントした。

地面に倒れたバルンボルンを、ミナは「お返しよッッ!！」とやはりこれも怨念を込めて蹴りつける。

バルンボルンは吹き飛び、数メートル先のベンチを粉々に砕く勢いで激突する。

「さて、女の子の恨みって怖いわよ？」

レシーブレイガンの刃を指先でなぞり猟奇的な笑顔をマスク内で浮かべるミナ。

ミナは影虎にはあんなみつともない姿を見られたくはなかったのだ。見られるとなんだか無性に悔しいから。

【決めましょう、アタックツール攻勢機能のライダージャンプ、ライダーヒツサツを選択してください】

ミナは右手首のデイハーツールを操作し、七つあるツールの中からアタックツールを、また八つあるアタックツールの中からライダージャンプを選択する。

【ATTACK TOOL・RIDER JUMP!】

ミナが選択した途端、ブレイモードに変形させたレシーブレイガンが瞬時に元に戻り、二つのレシーブレイガンが両足に自動装着される。

レシーブレイガンのマゼンタ色のエネルギーが今度はレシーブレイガン自体ではなく脚に宿った。

「なるほど、理解理解……」

脚に宿るエネルギー。そしてツールの名前。今回は知識がミナになだれ込まなかったが大方の見当はついた。

直感だ。

直感でミナは脚にレシーブレイガンを装着したままコンクリートの床を蹴り飛び上がった。

限界を超えた跳躍。限りなく高く飛ぶつもりで挑んだミナのそれは見えなくなるくらいに高くまで。

その跳躍、大きさは二百メートルに届くもの。

ビルを一息で飛び越えてしまう大ジャンプをしたミナは大空の真っ只中。風がミナに強く吹き付け力をくれた。

【ATTACK TOOL・RIDER HISSATU!】

ディハーツールが電子音を鳴らす。

今回は【SLASH】や【RIDER JUMP】とはどこかが違っていて、その機能は発展する。

ブアッ！！ とレシーブレイガンが放射するエネルギーの量が爆発したように増大し身体を包む。ミナが落下する速度がありえないくらいに速まった。

マゼンタ色のエネルギーは両足と首元に大量に集まる。首元に集まった心をイメージさせるピンクに近い色は仮面ライダーの象徴の一つ、マフラーのようにしっかき煌めきながらはためく。

そして、その姿。

それはまるで赤く燃え上がりながら飛来してくれ隕石のようだった。

【RIDER METEOR KICK!!】

「メテオライダーキック!!」

マゼンタ色のエネルギーで加速もした仮面ライダーディハーツ・ミナの必殺キック。

少し昭和な（むかしの）言い換えをするならライダー隕石キック、その強烈で無比なるキックがバルンボルンを捉える。

仮面ライダーの象徴ともいえるライダーキック。すべてを受け入れ戦っているミナのその一撃を受けて、バルンボルンが立ち上がれるわけはなかった。





「私は…… ツツ戦えて、勝った…… ツツ！ 私の、手で…… 思いで……！」

嬉々と喜ぶ。勝てたことに、ではない、思いを通すことが出来たことにミナは喜びを感じていた。

あれをしなさいこれをしなさいとか言われたという理由からではなく、これをしたらみんなが喜ぶ喜んでくれる、または自分はこれが出来る絶対出来るだとかいう理由からでもなく、自分がどうしたいこうしたいという思いから、自分はやり遂げられたのだ。

ミナは自分の欲望のままに生きていいのだ。当たり前かもしれないが、ミナは感動した。

「ミナ、やったな……！」

影虎は見事に勝利を飾ったミナに近づく。

近づいてすぐそばまでやってきた影虎は「ほら」と行ってミナに手の平を見せるかのように手を挙げた。

ミナは何故影虎が手を挙げたのか三秒くらい分からずポケットとしてしまったが、ハイタッチだということに気づく。

すごく照れ臭いイメージがある。握手の方がまだマシな感じがした。握手なら、単なる挨拶だ。ハイタッチは仲が良い人通ししかないから。

ミナはハイタッチを経験していないわけではなかったが、本当の意

味は知らなかった。

人を本当の意味で愛していなかったミナにはなかった経験の一つだ。  
……………友達の“絆”というのは。

「やり方は分かるよな、手をこうやって一緒に合わせてだな……………」

「……………ツツ、わかってるわよ!!！」

ミナは手を出す。

しかし、影虎の手の位置は思いのほか高かった。ミナと影虎は影虎がボコられているせいであまり感じられないが、結構の身長差がある。意外に影虎は背が高いのだ。

生意気な、と思ったミナは無理矢理影虎の腕を胸の高さあたりにまで下ろさせて突き飛ばすように、ハイタッチ。

「おうわツツ!?!」

影虎は後ろに倒れ込みそうになった。別に影虎の背後にミナがメテオライダーキックで空けた大穴が広がっているわけではなかったが、ちよつとあんまりかなと思ったミナは影虎の手を掴む。

「……………」

と影虎は無言で、

「……………」

とミナも無言だった。

だがやがて、どちらともなく「プツ」と嘖き出してしまい、大笑いをする。何かおかしいのか、それは当の本人である二人には分からなかったが、それをミナが聞くと二人はさらに笑う結果になった。

ミナは「きつと、私はこういう人を好きになるんだろうな」と考えて、笑いを締め括る。

ミナが見上げるはクライシス要塞。

やはり大きくて勝ち目がなさそうだった。一体だけにあんな苦戦を強いられたのだから、単純計算だと勝率はほとんど0。

けれど、結果が伴わないからといって考えを即時取り下げるほど、ミナは大人しい性格をしていなかった。

そんな打算だとかで消える希望は抱いていない。

それに、今のミナはなんだって上手くいきそうな気がしている。

………影虎の言う“直感”にミナは力をもらっていた。

HENSIN〜DEHEARTS〜(後書き)

なぜにこんなビミョーな怪人を初対戦相手にしたし、俺……。まあ、  
噛ませという意味では役不足ではないけど。

ゲドリアンが結構好きな私はゲドルリドルとか出したかったんですが……ゲドルリドルは登場予定があるし、登場予定がなくレシーブ  
レイガンのためにビーム攻撃が強力な奴となると……ああいうのし  
か。

インパクト強かったしね、あの話!!(どんだけチートなんだよ、  
バイオライダー)

え? 百目婆ア? ……………あッ…………(くそ、話作りやすいじ  
やねえか…………!!)

本当なら他ライダーの変身までいく予定でした。しかし、焦っても  
始まらないし、書いてたらいいかんじで纏まったしで、今日はここ  
まで。

多分、次の投稿は火曜日の深夜になると思います。

## HENSIN〜BELT RIDER〜（前書き）

更新が遅れてすみません。ちょっと重大なことをどうするか決めていたら遅くなってしまうました。

その重大なことというのはズバリ章割り！！ これはどうということかと言いますと、タイトルに「NINTH BIRTHDAY」がついているでしょうか？ この世界ミナの世界はもうすぐで終わります。それで一旦連載を終わらせ続きを新連載で書くというものです。

このディハーツは始めが肝心なので、随分と始めの世界で止まっています。もう読了時間は五百分を越え、六百分まで行こうという状態です。出来るだけ巻いて書くつもりですがね。

これでは新規で読む方が読みにくいと思うんです。よって、章で分けることにしました。

新連載の名前は「仮面ライダーディハーツ〜絆の旅〜」です。まだ一ヶ月は先ですがね。

では、本編！

ディケイド系ライダーとしては今日こそが誕生の日となります。ど  
うぞー！！

パワーアップした様子クライシス帝国の といっても、捨て駒に近い扱いだったが 敵、怪魔異生獣・バルンボルンを倒したミナは次なる目標、空に浮かぶクライシス要塞を見つめる。

クライシス要塞はかなり高い位置に浮かんである。ミナと影虎のいるこの場所は二十七階ある高層ビルの屋上で、高さは百メートルはあるはずだったが、さらに高い。

ライダージャンプでさらに二百メートル以上も飛び上がり、三百メートルの上空に達したミナだったが、それでも足りていなかった。

どうやれば、あの空飛ぶ要塞を止められるだろうかミナは知恵を振り絞って考える。

ライダージャンプだけ使ったのでは到底届かない。渾身で跳んでみせたとして、よくてあと五十メートルのプラスだ。

推進力以外の得体の知れないエネルギーで浮遊してみせているように、風などもここまで届いていない。だが、また直感でミナはだいたい五百メートル辺りだと思った。

「ナビ。あのクライシス要塞……だっけ、一応聞いておくんだけどアレをぶっこわしたり出来る？」

「いえ、流石に。スーパークライシス要塞よりも更に巨大になりビーム砲なども強力となっています、ハードマンモシャーでも太刀打ち出来ないでしょう。キングライナーならまだ勝負になるかもしれ

ませんが、撃墜される危険性と可能性の方が大きいですね】

「ハードマンモシャーだとかキングライナーとか……それはよく分からないけど、つまり破壊は厳しいわけね？」

ナビは【肯定】と返事する。しかし、ミナはそれほど気落ちはしなかった。

クライシス要塞は遙か上空にあるというのに、視界に収まりきれないくらいに巨大だ。しかもただ大きいだけではなく、ちやちな街なら一撃で跡形もなく消し去れるような武器の数々を搭載している。

あんなものと正面きって戦って勝てるのなら、仮面ライダーはあそこまでの英雄ではない。

出来ないこともやっぱりあって、それでも知恵と勇気を使って仮面ライダーは悪と戦ってきたのだ。

「じゃあ、あのクライシス要塞に乗り込むことは出来る？　なんとかして乗り込むだけ乗り込みたいんだけど」

ここからクライシス要塞まではミナの勝手な目測だが約四百メートル。さきほどのライダージャンプが二百メートルだったので倍以上飛び上がらなければならない。

それでも、何か必ず手はあるとミナは信じていた。仮面ライダーも諦めるという事はしたくないと決めていただろうから。

乗り込んで何か出来るという確証はないし、あの数の怪人を相手にしてしまったら勝ち目は薄いとわかっていたが、それでも動き出さ

なければ。

ミナはもう止まることを許さない、誰がじゃなく自分が。

【“仮面ライダーディハーツ”でなら今のところは不可能ですね、将来性を考えれば一概にも言えませんが】

四百メートル以上の大ジャンプ。それは今のところは仮面ライダーディハーツには不可能。

今のところ、は。

それはつまり仮面ライダーディハーツは進化していくというのを暗に含めた言い方だった。

ミナはそれを聞いて落胆するどころか「やってやる」という思いが奮えた。

それに、ディハーツはこれだけじゃない。語りかけてくる記憶という名の知識がこんなもんじゃないぞと言っているのだ。

「じゃあね、“仮面ライダー”でならどうかしら」

そう、この仮面ライダーディハーツは全ての仮面ライダーに関係した人々が力を結集させて作った力。

“仮面ライダー”という力の結晶だった。

【軽いです。私の方でも“スカイライダー”が。オリジナルの方でも“ファイズブラスターフォーム”“ブレイド・ギャレンジャック



フォーム” “カブトハイパーフォーム” “キバ飛翔態”、少し危険ですが“オースタジヤドルコンボ”などがあります。ナイト・オーデインでアドベント、カリスでフロート、バースでカッターウィング、フォーゼでロケットモジュールを使ってもいけるかと】

方法はあるとは思っていたが、これほどの数あるとは思っていなかったミナはちよつと目を丸めた。

しかし、仮面ライダーは頼もしすぎる。彼らの力はこごぞという時、ミナの背中を押し翼を与えてくれる。

ちよつと子供の頃にかえつた気分になって、ミナは「他にはない？」とちよつと興奮ぎみにナビに聞く。

【オートディハーダーを使用すればタービュラーと合体して飛行が可能です。ディハーツールを挿入し起動機能マシンツールを使えば、ゴウラム、マシントルネーダー、ガタックエクステンダー、デンライナーなどを使うことができます。武具機能アイテムツールを使えば更に】

「すっげえなあ」

感激していたのはミナだけではなく影虎もだった。

ミナはディハーツールとドライバックルを見つめ、自分はどうやらとんでもないものを託されてしまったらしいと認識する。

とりあえず、方法があるなら試してみる。やれることがあるならやってみる。

ナビは【変身機能を選択してください】とミナに指示する。オート

ディハーダーを使えば様々な飛行機体を操ることが出来るそうだったが、撃墜されてしまう危険があるのだという。

ミナは言われるままにディハーツールの変身機能をまた指で触れる。浮かぶ百を越えるライダーのシンボルマーク。先程はアンテナで出来たハートマーク。ただのハートマークもあったが、に触れると仮面ライダーディハーツに変身出来た。

今度はギリシャ文字の「」のようなマークを押すようにナビは言う。

なにぶんたくさんありすぎるのでミナは数秒間そのマークを探して、『カテゴリー555』という列にあるのを見つける。

ナビ曰く主な仮面ライダーは『LEGEND』の段を見ればすぐに見つかるらしい。

今度ほかの仮面ライダーのマークを探すときのためにミナは心にメモをしておいた。早くディハーツールの扱いに慣れなければならぬいなと考えて。

【押してください、記憶の本棚から情報を読み取りドライブバックルは“ベルトライド”いたします】

記憶の本棚という単語がまたナビから出る。今日何度目となるかミナは数えられなかった。

きっとそれも自分と少なからず関係している言葉なんだろうなと考えながらミナは“ファイズ”のマークを押す。

その直前だった。

「クヴグアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

ミナたちのところに何かがやって来た。いや、下から何者かが飛んできたのだ。

「へ、変身ツツ……！」

いきなりだったのでミナはファイズのマークではなくてまたディハーツの紋章を押してしまう。

瞬時にディハーツールは【HENSIN!! RIDER DE HEARTS!!】と電子音を鳴らし、ミナの身体を仮面ライダーディハーツのスーツが被う。

急に襲ってきた空を飛ぶ怪人はチョップするような一撃をおくってきた。ミナは腕を交差し、それを防ぐ。

「く………ツツ!?」

パワーは向こうの方が上を行っていた。なんとか受け止めながらも、ミナの腕はビリビリとする。

現れたのはコウモリに似た怪人だ。夜の闇がよく似合っており、身体は茶色をしていた。

「ジョグジャブリツベダゾ、ゴラゲ グ ザナ クウガ（ようやく見つけたぞ、お前がクウガだな）？」

コウモリの怪人は意味の分からぬ人間のものではない言語を使って挑発的にミナに話し掛けてきた。

ミナはこの言語を理解出来たわけではなかったが、聞き覚えはあった。

ショッピングモールで会った人々を上空から槍で打ち抜いて殺していた秃鷹の怪人や黄金のオーロラから現れた二人の男女が使っていた言葉と雰囲気似ているのだ。

この怪人はグロンギ。人殺しをゲームのように考えている怪人の一人。

【グロンギ、ズの怪人……ズ・ゴオマ・グですね。会話を訳すると「見つけたぞ、お前がクウガだな」となります。操られているわけではないと思われませんが、オリジナルがアマダムを所持していると何者かに吹き込まれているようですね】

ミナは「どうでもいいわよ!!」と力強く言って、コウモリのグロンギ怪人、ゴオマの腕を弾く。

レシーブレイガンを変形させる時間はない。かといって、ミナの後ろには影虎。引くわけにもいかなかった。

ミナは武器を持たず拳一つでゴオマに立ち向かう。

茶色の肉体をミナは殴りつける。どういうわけだかゴオマはまるで反撃してこず、殴られるばかりだった。

「ハアツツ!!」

ミナはゴオマの胸をことさら強く殴りつけた。バルンボルンを倒したときのパワーならゴオマの身体は数メートル吹っ飛んだことだろう。

だが、ゴオマの身体はびくともしない。それほど強力そうな怪人には見えないというのに、ミナの一撃は届かなかった。

避けなかったのではない、避ける必要がなかったのだ。

胸を殴るミナの拳をゴオマはガシツと握る。口元には不敵な笑顔があり、目も笑っている。

「ダンチデデンザ ボググスンザジヨ（パンチってのはこうするんだよ）!!」

ゴオマはミナの拳を左手で封じたまま逆襲し、仮面ライダーディハーツの顔面を殴る。

ゴオマの攻撃は凄いとは言えなかったが仮面ライダーディハーツを上回るものだった。

ディハーツは耐えることはできずに大きく吹っ飛ばされ、転落防止用に作られたフェンスに激突。

怪人のパワーで吹き飛ばされたミナをフェンスが受け止めきれぬわけがなくて、フェンスは止め具が外れてガシャンツと倒れた。

「う……」

ミナはと言うと、フェンスにしがみついた状態だ。倒れたフェンスはぎりぎりでも留まり、ミナを放り投げはしなかった。

頭がクラクラとなりながら、ミナは急いで戦線に復帰する。

「ガアッ!」

続くゴオマの攻撃。コウモリなどに見られる皮膜を広げ、空中を滑空しての突撃。

ミナはなんとか転がりこんで回避した。影虎を守るため、彼のもとへ向かう。

グロンギは人を殺すのになんら躊躇いを持たずゲームをするように楽しんでるかのような下劣な怪人たちだ。

危険なのは戦うことが出来仮面ライダーディハーツに変身しているミナではなく、生身でいる影虎の方だ。

「ゾグギダ ザジャブバセ ビ クウガ(どうした、早くクウガになれ)。ゴボグガダゼザ ロボダシバギゾ(その姿では物足りないぞ)」

クウガ。仮面ライダーの中にそんな名前の戦士がいた。仮面ライダークウガだ。

「くっそ……ッッ!」

ミナはレシーブレイガンに手を伸ばし変形させる。ブレイモードで

はなく、今度は銃器のような形態『ガンモード』だ。

ゴオマはまた空を飛んで突進してくる。それを迎え撃つためミナはまたガンマスイッチを手の平で押し込む。

【ATTACK TOOL・BLAST!】

アタックツール プラスト  
攻勢機能の銃撃。意味はもちろん銃による攻撃だ。レシーブレイガンの先端に銃口が現れ、トリガーも現れる。

銃など当たり前に取り扱ったことがない。何年か昔祭でやっていた夜店の狙撃ゲームなどカウントに入らないだろう。

それでもやらなきゃどうするとミナは引き金を引く。

レシーブレイガンからマゼンタの光弾が放たれてゴオマに命中する。

「ギャツツ!？」

素手での攻撃はてんで効果がなかったが、これは効いたらしい。ゴオマは空中で銃撃を受け、バランスを崩して地面に転がる。

だがやはり威力が足りない。ミナに入ってきた記憶によればガンモードの威力はもっと高いはずだった。

放たれる光弾のエネルギー量が最低量なのだ。デイハーツのエネルギー量自体が最低状態となっているせいで、ガンモードのエネルギーが弱まっている。仮面ライダーデイハーツのスペックも、それにより落ちてしまっている。

「ハア~~~~ツ、ヒヤア~~~~…ツツ!」

地面に転がったゴオマはそれでもたいしたダメージではないというように、涎を腕で拭うような仕種をした後、また突撃してくる。

今度はミナに迎撃する隙はなかった。突進を受け、脇腹部分に噛み付かれる。

ディハーツはエネルギー問題でスペックが落ちてしまっているが、装甲は堅牢だ。ゴオマの牙は鎧が防いでいる。

しかし防いではいるものの、ドラキュラに噛まれている心地がしたミナは不気味に思い、踏み止まって振り払おうとする。

だが、それすらできなかった。

ミナの足がコンクリートの地面から離れる。ゴオマはミナに突進して、そのまま空に運んだのだ。

「~~~~ツツ!? ちょっと、放していや放さないであのやつば放して!?!」

ゴオマはミナがクライシス帝国に挑戦した屋上を離れ、ぐんぐんと飛ぶ。ここは高さ百メートル。仮面ライダーに変身しているとはいえ、高さの恐怖はリアル。

ミナは動転して、バタバタとした。

この高さから落ちても、仮面ライダーディハーツには平気なはずだ。ライダージャンプの跳躍力は二百メートルなのだから、それでどう



にかなってしまふのなら設計ミスだ。

だが、これ以上の高さ……………例えば上空一千メートルなどから落ちたなら、果たして仮面ライダーデイハーツは耐えられるのか。

「あ、放した方がいいのか。うん、やっぱり放せエ~~~~~ッ  
ッ!~!」

自分の脇腹に噛み付いて放さないゴオマをミナは何度も殴る。自分を掴む腕から必死に逃れようとした。

だが、駄目だ。抱きつかれたような状態ではうまく殴れなかった。ゴオマの身体は硬くて、ろくに通じない。

ミナの奮闘も虚しく、高度はどんどん上がっていった。

だが、二百メートル地点を過ぎた辺りで。

「ギイ……………ッッ!~?」

無数の弾丸が、ゴオマとゴオマの皮膜を射抜いた。

オートデイハーダーだ。またあの万能マシンオートデイハーダーが人型のバトルモードとなっている。後ろにおんぶされる形で影虎も乗っている。

オートデイハーダーはミナの周囲五百メートルの有効範囲内で自立運転が可能となっている。

ただ、あの銃撃をしたのは影虎の指示によるものだったらしい。ミ

ナに当たらないようにしながらゴオマに正確な攻撃をして見せた影虎はミナにピースをおくっている。

いい？ 支えなさい、全力で。私が沈みそうになったら引き上げて、優しい言葉の一つや二つかけてやるのよ、拒否権はないから。分かった？

ミナが壮絶な勢いで一方的に押し付けたこの問いと要求。

影虎には従う義務などまったくなくて、背負うべき負い目などもない。つさいない。

「勝手に決めるな、俺はやだね」と打ち捨ててしまっても、本来なら構わないと言わざるを得ない。

というのに、影虎はそれを自らの誓いとするかのように、ついて来てくれた。

怪人たちに挑むとって戦おうとするミナについて来てくれて、肩を貸してもくれた。

ミナはあの時、嬉しくて嬉しくて、そっと「ありがとう」と囁いていた。

恥ずかしくて堪らなくてとてもじゃないが影虎に聞こえてしまうような大きさにはできなかつたけれど。

良い、影虎なら。

特別な力もなく、戦えなくなつて、影虎でいてくれるのなら、良い。

影虎がそばにいてくれるのがミナはなにより嬉しいから。

「影虎 …… ツッ!」

ミナの救世主様は影虎だった。今はミナが仮面ライダー……ヒーローの立場にいるけれど。

ヒーローにだってヒーローがいたって良いだろう。

「ア~~~~… ツッ!」

息を吐くような威嚇の声。ゴオマは上昇を中断し、ミナに噛み付きながら影虎の方を睨みつけた。

間違いない、このコウモリのグロンギ怪人は影虎を先に殺しておくとうと決めたのだ。

最初に会ったときのイメージとアンデッドをまとめて倒したオートディハーダーの破壊力を考えれば、ゴオマを楽に葬っていただろうが、影虎はミナのことを考えて威力を落としたのだろう。

ミナのことはどうでも良いとしてしまつても構わないのに、影虎は自分の身だけを守ればそれで良いはずなのに。

その結果、怪人に狙われることになってしまふ。自分のことを選択しなかったから、影虎は殺されてしまふかも知れない。

いや、やらせない。

ヒーローだけの選択じゃなくて、もっともっと好きなように影虎は生きていて欲しいから。

ミナを救ったヒーローは自由の中で生きているから。

(私のヒーローには指一本触れるな!!)

フルハートアクセラー、フルハートラングがピンク色に点滅発光する。バルンボルンに逆襲を仕掛けたときよりも若干点滅の区間が短くて強く発光している。

あの輝きが二十パーセントなら、今回の分は四十パーセントくらい。兆候とも言える絆のレベルだった。

ゴオマはドラキュラのように光に極端に弱いらしい。流石に蝙蝠だ、今は夜だから活動できているが昼間は自由に動けないと予想される。

ゴオマはフルハートオーヴの輝きを見て苦しそうに身じろぎ、力を弱めた。

「あなたなんか私に抱き着くんじゃないわよッッ!!」

生まれた大きな隙でミナはゴオマの腹を蹴り、脱出。

自分が優位に戦っていたときとは比べ物にならない強力な蹴りが腹

に減り込み、ゴオマは空中でワナワナと痙攣する。

「ム力つくわ。消し去るわよ、アイツツツ!!」

【ATTACK TOOL・RIDER HISSATU!!】

機能解<sup>ツールオン</sup>放させていたレシーブレイガン・ガンモードがメテオライダーキックのときのようにエネルギーを増す。

レシーブレイガン自体が赤く発光するくらいに退魔の力が内から溢れ出てミナの手元に。

よく狙って撃つ。

【RIDER SHOT!!】

「ライダーショット!!」

レシーブレイガン・ガンモードの銃口から放たれたエネルギー弾がまずハートの形を作りだし、それを<sup>キルベック</sup>天使の矢が貫くようにして膨大なエネルギーの流撃<sup>るけき</sup>が岩を砕く瀧のように噴く。

射抜くなんてものではない。直径一メートルもあるエネルギー光線はゴオマの胸の部分を通り消し去る。

残った身体の大穴から輝が広がり、ベルトに到達すると大きく爆発した。

まさに成す術なくといったように。

よしやったぞ二勝目だ、とミナはガッツポーズを取る。

取るのだが、“ミナより遙か上空で、はなれた位置で”

「あ、ちょっと、ミナ!？」

オートデイハーダーの背中中で影虎が身を乗り出そうとしてオートデイハーダーに制止させられた。

「……………?」

空ってここまで広がって近いものだったかな、とミナは考える。背中には妙に強すぎる風が吹き付けている。

風が当たるのは吹き付けているのではなく自分が高速で移動しているから、背中にかかるのは下向きに移動しているから。

ミナは落ちているといやがおうでも判断させられてしまった。

ゴオマを倒したのはよかったが、威力があり過ぎた。空中で支えるものもなく強大なエネルギー光線を一方方向に放出したミナはそれがロケットエンジンのようになって、大きく移動した。

デイハーツには飛行能力はないらしい。だが、影虎の乗るオートデイハーダーがまだいる……………

【ア、スイマセン。ダイジョウブ ナノデ イッタンハ オチテク  
ダサイ】

そう言ったのはオートデイハーダーご本人。間に合わないと判断し

たのдарろつ。

「キヤ~~~~~……ッッ!! 落ちる落ちる落ちる落ちる落ちる落ちる落ちてえ~~~~ッッ!!」

グシャアン、と

影虎を乗せるオートディハーダーも彼が乗っているせいでスピードが出せないのか僅かに間に合わず、ミナはある建物の屋根に突っ込んだ。

2

「何が大丈夫か!？」

変身を解除したミナは遅れてゆっくりとやってきたオートディハーダーを殴る。運悪く特に硬い装甲部分を殴ってしまつてヒリヒリした。

【スイマセン、カゲトラサマヲ ノセテイタノデ アマリスピードヲ ダセナカッタ ノデス】

片言の機械的な口調。だが、ミナにはすぐ問題が分かった。

「じゃあ 影虎が悪いつてことで、ファイナルアンサー……?」

「理不尽だ！？ お、俺はミナを助けたい一心で……だな、その〜」

「そ、それは分かってるわ。一応……礼は言っておくわよ。もー、これでお終い！！」

礼を言いたかっただけなのにこれはちょっと天の邪鬼すぎるなと自分でも思いつながらミナはオートディハーダーが間に合わなかったことについての話を打ち切る。

【ディハーツの装甲はディケイドと同じディヴァインオレで作られています。それに衝撃吸収に関してならディケイドを遙かに上回っていますのでたかだか二百メートル落ちたぐらいではダメージはありません】

ミナはそういうえばそうだった気もした。落ちるといふ恐怖が痛みを倍加させていたが、実質走った痛みは少ない。

怪人たちにやられたときもそうだった。出力が低くて押されればなしになった局面もあったがダメージは小さかった。

キャッスルドラムが出る前に立花老人はミナにディハーツについて「まだ未完成」だと言って取り扱うときはバランスが悪くなるかも知れないと忠告してくれていた。

安定しない出力に反して強固な装甲。なるほど、扱いはかなり難しい。

バルンボルの踏み付けを弾き返して反撃したり、ゴオマから逃れることが出来たりと出力がかなり上昇した瞬間もあったのだが、ど



うして上がったのかはミナにはサッパリだった。

「まあ、早く出ようぜ。いつ崩れたっておかしくねえぞココ」

影虎が汗をかきそれを袖で拭き取りながら提案する。ミナもオートデイナーも影虎の意見に同意した。

ミナたちがいる場所はサンマルク教会というよくある名前の教会だった。ミナは中まで入ったことはなく両親たちの結婚式場というわけでもなかったが、週末には多くの信者が訪れていたのは知っている。

ただし、クライシス要塞の攻撃の余波をもらってしまったのか怪人の破壊によるものなのか、あちこちから炎が上がっている。もうすぐ崩れてしまいそうだった。

ミナたちは急ぎ足で出口へ向かう。

神に祈っている暇はないし意味もない、もうすでに火の手が上がっているからか倒すべき怪人もいな

……………

「『ギヤギヤギヤ……！！』」

かったのだが、ミナたちが脱出しようとした矢先にそうでなくなっ  
てしまった。

前方に入口の重いドアを蹴破って入ってきた怪人が一体、左右から窓ガラスを割って侵入してきた怪人がどちらも一体ずつ。

計三体の怪人がこの教会へと現れた。

しかも、虫は火や明るい光につられてやって来るといだが、なんの偶然かやって来た三体の怪人は全員蜘蛛の怪人だった。

「うへえ、蜘蛛って苦手だ……。なんで、ここの最悪のタイミングで来るかな……」

影虎は三方向の怪人の動きをしつかりと見ながら中腰で構えた。盗塁を狙う野球選手のようにだったが、残念ながら出口はなかった。

飛んで火にいる夏の虫。虫は向こうで季節はまだ厳しい冬だったが、火に囲まれ絶体絶命だったのはミナたちの方だった。

「くう……」

また戦うしかない。三体を相手に早めに勝負を決められるか分からないがとにかくやるしか。

【良いシチュエーションですね。そっくりです】

「はあ？ 何処が良いってのよ……ッッ!？」

ミナはディハーツールの中にいるというリクリエイティブ・ミナ、ナビの言うことを悪い冗談として受け取る。

【前方はグロンギ、ズ・ Gumn・バ、右方はワーム、アラクネアワーム……白と黒なのでニグリティア、左方はイマジン、スパイダーイマジン。蜘蛛の怪人がズラリと。やはり初戦は蜘蛛怪人ですか】

「え？ 初戦って……あの変なピンクの奴でしょう?」

あれが一番初めの敵だというのはミナ自身もなんとなく嫌だったが、事実だから仕方ない。一応攻撃もされたのでジャーク將軍もカウントしてほしいものだった。

ミナはディハーツへ変身するため、変身機能を押した。

【ああいえ、“他のライダー”の話ですよ】

ディハーツのマークを押そうとするミナの指が止まった。

“他のライダー”……ディハーツではない、他の仮面ライダーの戦い。

世界を守ってきた歴代の戦士の熱き闘いの始まり。

その中の一つにこれに非常に近いものがある。炎に焼かれていく教会 ……背後には守るべき人 ……そして、その涙でくすまない笑顔。

仮面ライダーとなるとという意味ではやはりあの屋上での戦いが最初。

だが、仮面ライダーを継ぐという意味ではこの燃え盛る炎の中

………この場所こそ相応しいような。

ミナがなれる“始まりの仮面ライダー”。人の笑顔のために戦った青空を見上げる戦士。

仮面ライダークウガ。

「私の……変身……!!」

ミナはディハーツのマークではなく『伝説（LEGEND）』の欄から一人の仮面ライダーの………“戦士”をしめすマークを選ぶ。

【HENSIN!! RIDER KUUGA!!】

選んだのはそう、仮面ライダークウガのライダークレスト。

レシーブレイガンがオートディハーダーに収まり、ドライバックル近くにある金のアンテナが輝く。

輝いた後、それはゆっくりとベルトの周囲を巡った。

アンテナが一周すると、ライダードライバックルはプラチナのような透明感のある輝きを見せて、消えてしまったようになる。

ただし、消えてなどはない。仮面ライダーの力が完全に消えてしまふなどありえない。

ミナの中で確かに息づく。

どうすればいいのか血の脈動が教えてくれた。鼓動がやけに存在感を増し、ミナの聴覚をドクンドクンという確かな音が充滿した。

手をベルトがあつた部分へ。

仮面ライダーの力は蘇る、今度こそ正しくて強い戦うという思いで、  
ディハーツのサブプログラム、変身機能。それはこの世界を継ぐ意  
味では、決して予備などではない。

現れたのはライダードライバツクルではない、超古代の戦士の力、  
霊石アマダム。

仮面ライダークウガの力をもたらすベルトだった。

ミナは思いに従って左手を前に。ゆっくりと動かし、顔の右側に来  
るように。

「ボセバ デスド ン クウガ（それはクウガのベルト）……！！」

蜘蛛の姿をしたグロンギ ナビの説明ではズ・グムン・バとい  
う怪人 はそのベルトを見ると襲い掛かってきた。

それを睨み、ミナは言う。やはりあの言葉を、戦うという宣言であ  
る言葉を。

「変身！！」

ベルトのサイド、左側を右手を添えながら左手の甲で固いスイッチ  
を押し込むようにして触れる。

ズ・グムン・バは飛び掛かってくる。ミナは依然仮面ライダーの姿  
ではなく生身の姿だ。

仮面ライダーディハーツは防御力には秀でていたため怪人の攻撃を受けても多少大丈夫だったが、生身のまま怪人の怪力を受けてしまえばどうなるか。

影虎はミナの名前を叫び、庇おうとしたのか伏せさせようとしたのか動く。

それは後押しとなった。

影虎も案外捨てたものではないのだ。ミナから見ても結構精悍な顔立ちをしていると思えるし、なかなかどうしていい笑顔を作る。好きなことを存分にやっているという陰りのない澄んだ笑顔を。

彼はヒーローでいてくれる、守ってくれようとする。生きたいという気持ちもあるのだろうに、彼はミナを守る方を選択する。

別にそれに甘んじている訳じゃない、信頼しているのだ。ミナが自分らしく行動している限り、影虎はいつもそばにいてくれる。そう信じる心がとめどない。

危険な怪人との戦いにまで引っ張ってきた形になっておいて勝手だが、だからこそ守りがある、影虎だからこそ生まれる守りたい気持ちだ。

「ハアツツ!!」

ズ・グムン・バの鋭利な爪のついた拳をくぐり抜け、ミナは腹に一撃殴る。

普通の人間の動体視力まずなら捉えられないズ・グムン・バの凶悪な拳撃。ズ・グムン・バ……怪人の人間の力では何も響かないはずの強靱な肉体。

だが、ミナはその二つの定説を捻曲げ抜切り、ズ・グムン・バに決して笑えない強力な一撃をお見舞いしていた。

ズ・グムン・バは反撃に出る。打撃ではなく手に付けられた爪を使つての斬撃。コンクリート片にも軽々跡を残すような鋭利で無慈悲。ミナはそれすら避けてみせた。怪人をミナが振り回してように見えるくらいに何発も殴りつけて、倒れても殴りつけて。

ミナは仮面ライダー ……世界の平和を守り悪を倒す。生まれる思いは数多く、込める思いは無限大。

(私はツツ!! 仮面ライダーだツツ!!)

ズ・グムン・バに胸に刺す一撃の拳。その中に込められた一つじゃない戦う意思。

ミナの身体が変身する ……。

「ウラアツツ!!」

つかみ掛かって投げ飛ばす。ズ・グムン・バは左側の窓から入ってきた赤い目をした蜘蛛型のイメージン怪人、スパイダーイメージンを巻き込む。

「ミナ……変わった……!? デイハーツじゃ、ない!?!」

影虎は焼ける炎の灼熱さを忘れて、あんどりと口をあけてその新たな戦士の姿をみた。

ミナの姿と身体はもう人間のものではなかった。だからといって、仮面ライダーディハーツでもない。

同じ仮面ライダーでも、装甲はは赤くディハーツよりも筋肉の隆起がよく見られその鎧のようなアーマーの縁淵ふちづちが金となっている。頭は金色の角が眉間から生える形となっており、この姿は人々が象徴としたある文字とよく似ていた。

「戦士」・クウガ。人間を襲うグロンギたちから愛するものたちを守るため、あえて彼らと同じ修羅の道に踏み込んだ戦士の名。

仮面ライダークウガ。それが今のミナの名前だった。

『 邪悪なる者あらば、希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり 』

これはクウガのなかでも赤き戦士と呼ばれる形態に究極の力の一端が込められた姿。

仮面ライダークウガ ライジングマイティ。闇に一步近づいた戦士



の姿だった。

## HENSIN BELT RIDER (後書き)

不法侵入教会(?)でのクウガへの変身!! この作品にはディケイドとは違い、ライジングが登場します。

ミナも“別のクウガ”もアルティメットへの到達の危険性を孕んでいます。特に“別のクウガ”はチートなくらい。

次回からは他ライダーに次々と装着ヘルトライド!!

HENSIN KAMEN RIDER (前書き)

もの凄い長いです。空白とかも合わせると二万七千文字ですよ、ひでえ……。

だけど、同時に短くもあります。戦闘を流れるようなスピーディーなものにしたかったので説明を控え、この話で一応は戦闘は終了。

つかれたあゝゝゝ、こちとら説明文を書き連ねるのだけが取り柄だったのに、それを封じられたら地獄ですよ。もどかしい、もどかしすぎるう……

多分私「長つたらしく書かないと気が済まない病」なのだと思います。短く書くともどかしくてしゃくないんです。

他の方の小説を見てもそうです、描写が少ないと読む気にならない。

「俺ならこのストーリーで三倍の長さに出来る」と訳分からんこと言い出して長いのが偉いと勘違いしている救いようがない馬鹿。その馬鹿が私です。

寧ろ読了時間八百分とかは俄然気合い入る。短い小説よりも時間をかけて読む。ストーリーが重厚なのに描写が雑な作品とストーリーは薄いけど描写が丁寧な作品なら同じ量でも前者の方が三倍は早く適当に読んでしまっ。

じゃあ、私にとっては短いけど普通の人にしたらやっぱり長すぎる最新話スタート……！



## HENSIN KAMEN RIDER

ミナは仮面ライダーデューターではなく、他の仮面ライダーへの変身を遂げた。

ミナが変身したのは仮面ライダークウガ。超古代の文明が作り出した霊石アマダムによって殺戮種族・グロンギと戦うための肉体へと強化された仮面ライダーだ。

この姿はライジングマイティ。通称「赤と金のクウガ」だ。基本的なマイティフォームよりもライジング      アルティメットの力  
の一端が雷のエネルギーで顕現してきた力      があるぶん強力と  
なっている。

ミナの頭に仮面ライダークウガに関する記憶が入ってくる。ステータス・スペックから特殊能力、超変身機能まで。

行けるとミナは思った。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

ズ・グムン・バとスパイダーイマジンはまとめてかかってきた。種族はともかく利害は一致したらしくミナに襲い掛かる。

クウガ・ライジングマイティは二人の怪人と渡り合う。

仮面ライダーデューターは外部から身体を補強するという外殻強化<sup>スライ</sup>効果<sup>スライ</sup>が強かったが、仮面ライダークウガは内側から強くな<sup>パワー</sup>ったようだった。

感覚が何倍も鋭くなり、怪人たちがミナを攻撃しようとする動きがはつきり見える。肉体が何倍も強化されそれを避けるために動いてくれた。

だが、二体を相手にするとなるとこちらにも隙は生まれてきてしまう。善戦はできているが、もっとなんとか出来そうだった。

【オリジナル。敵は二体です。青ブルーでいく方がよろしいかと】

ナビはそう進言する。ミナもそれはわかっていた。

イメージするは「水」、「高く跳ぶ」、「薙ぎ払う物」。

「超変身!!」

ミナは二体の怪人を回し蹴りで吹き飛ばすとそう叫び、再び仮面ライダークウガの変身ポーズを取った。

ミナが装着するクウガのベルト・霊石アマダムが炎を司るような赤色から水を司るような青色へと変わる。

『邪悪なる者あらば、その技を無に帰し、流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士あり』

今度は「青と金のクウガ」と呼ばれる戦士。仮面ライダークウガライジングドラゴンだ。

この姿はジャンプ力とスピードに秀でており、多人数を相手するのに適したフォームだった。

それに引き換えで、アーマーはスピードを発揮するためにかなり薄いため防御力は低くて、また攻撃力もマイティフォームの三分の一と弱い。

しかし、それを埋め合わせることが出来る力がドラゴンフォームにはある。ハンドコントローリングを使用して「長き物」を再構成して作り出す、『ドラゴンロッド』だ。

ミナは教会を訪れる信者たちが座る長い椅子から木材をむしり取る。それはミナの本来の身長ほどある「長き物」だ。

それをカンフーアクション映画のパフォーマンスのように振り回すと、ハンドコントローリングがそれを再構成。

青い柄をして先端に金に輝くライジングパワーが込められた矛がある、ライジングドラゴン専用武器『ライジングドラゴンロッド』だ。

ライジングの力の影響で長槍のようになったロッドを持ち、ミナは二体に挑む。

振る度に錫杖ウチゴウのように清らかで耳に心地好い水の音ねのような音を鳴らすライジングドラゴンロッド。

それを強力な武器としてミナは扱い、二体と渡り合った。

ズ・グムン・バの攻撃をなんなく受け止めて水の流れを彷彿させる緩やかな、しかし素早い動きで流す。

赤い目のスパイダーイマジンは蜘蛛らしく糸を吐いてミナの動きに制限をつけようとしたのだが、ミナはライジングの刃でそれを凌いだ。

「グ、クウガアー!!」

今度はズ・グムン・バとスパイダーイマジンの同時攻撃だ。

両怪人が吐いてきた糸がライジングドラゴンロッドの両矛を封じ、かつライジングドラゴンロッドを掴む。

「う……ッッ!!」

ズ・グムン・バとスパイダーイマジンは糸を手繰りよせライジングドラゴンロッドを、それを持つミナを引きずりこもつてきた。

ミナも踏ん張ってみせるのだが、ドラゴンフォームはパワーに劣る一面がある、ライジングが付与されたからといってそれは変わらない。

ズリズリと引きずりこまれていく。防御力に劣るドラゴンフォームで攻撃を喰らうのは非常にまずかった。

「な……ん、ちゃってねッッ!!」

ミナは瞬時に赤いマイティフォームに戻り、ライジングドラゴンロッドをただの木材に戻し、蜘蛛怪人の糸が縛っている部分を折る。

すこし短くなってしまった木材だったが、まだ再構成するには十分な体積を持っていた。



また、超変身。ライジングドラゴンへ。

木材をロッドに変換しながら、ミナはズ・ Gumn・バに接近。ズ・ Gumn・バは突然の攻勢に対応できなかった。

「ダアアア~~~~~ツツ!!」

ビリヤードのボールをキューで撞くような形でライジングドラゴンロッドの矛で敵を突き刺す。

ズ・ Gumn・バに流れ込む封印エネルギー。ゴの怪人すら堪えられる者は少ない一撃にグロンギの中では低位の階級であるズの怪人ズ・ Gumn・バが堪えられるわけがなかった。

ミナは突き刺したままロッドを振るい、ズ・ Gumn・バの身体を自分が落ちた時に出来た穴へと飛ばす。

ズ・ Gumn・バの身体はその穴を通って、高く投げ飛ばされ、遙か彼方の上空で爆破スイッチが作動して大きく爆発した。

危機感を持ったのは緑目のスパイダーマシンだ。なりふり構わずといった感じでミナに突進してきた。

ミナはその突進をライジングドラゴンロッドと蹴りでなんとか抑える。

「いいからお前、倒される……!?! 『全部ぶっこわせ』ってのが契約なんだよツツ!!」

「全部……ぶつこわせつて……？ 契約……！？」

【自暴自棄になってしまった人間がいるみたいですね。それでイマジンとやけになって契約してしまっただらしいです】

怪人たちが現れ人間たちが次々と殺されていきビルや家、街が跡形もなく破壊され焼き付くされていく。

そんな状況にほり込まれたら、正気ではいられない。とてつもない恐怖できつとおかしくなってしまう。

『どうせもう自分は助からない、もう終わりだ、自分は死んでしまふんだ。なら全部滅んでしまえ』

中にはそんなことを考えてしまう人も出てきてしまうだろう。それはしょうがないようなことで、人間には罪はない。いや、あるのかもしれないがそれはこれから十分に償えることだ。

本当に許すことができない罪があるとしたら、それを見下すように受けとって“願いを叶えてやる”と履き違えたこの最低な怪人だ。

【今度はパワーでいってみましょう。タイタンです】

ナビの提案はもっともだとミナは考える。この怪人は真つ向から捻り潰してやらねば気が済まなかった。ミナはスパイダーイマジンを蹴飛ばして、木材を剣を握るように持ち替える。

「超変身……！」

「靈石アマダムの色が今度は青から紫に。クウガのアーマーは軽量の防護服といった風から一変、西洋風の強固な鎧といったふうになる。」

その堅牢さも確かなものでスパイダーイメージンが殴り掛かってきたのだが、ビクともしない。さきほどとは打って変わり、絶対の防御力を持っていた。

「ミナはスパイダーイメージンを殴る。攻撃力も上昇しているようで、スパイダーイメージンは大きく後ずさる。」

『邪悪なる者あらば、鋼の鎧を身に付け、地割れの如く邪悪を斬り払う戦士あり』

「ミナがなったフォームは「紫と金のクウガ」・ライジングタイタン。アーマーは銀の生体鎧に発展し四フォームの攻撃力と防御力を持ち合わるタイタンフォームにライジングの力が加わった姿。」

「ハンドコントロールリングが木材を巨大で黄金の刃を持つ物に変換する。ライジングタイタンの「切り払う力」・ライジングタイタンソードだ。」

「スパイダーイメージンの攻撃をライジングタイタンはものともしない。糸を吐いてきたのだが、その糸をパワーで打ち破る。」

「フンッッ!!」

「ミナはスパイダーイメージンに詰め寄って、持つタイタンソードで腹部を貫いた。」

グロンギを倒すときに出る「封印」の文字はでない。単純な威力に変換されたライジングの力がスパイダーイマジンの命を串刺しにした。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

ミナのすぐそばで爆発。しかし、タイタンの鎧に守られたミナは吹き飛ばずその場で剣を握っていた。

これで、四体目となる。一体目はかなり苦労したのだが、続けて二体。これが仮面ライダーの力、仮面ライダークウガの力だった。

「ん?」

ミナは上を見上げる。教会の崩壊が激しくなってきた。今のスパイダーイマジンの爆発の爆風が炎の勢いを増してしまったらしい。

教会は今にも崩れ落ちそうだった。一刻も早く脱出しなければならぬ。

「影虎、掴まんなさい!!」

ミナは自分でそう言っておいて自分から影虎を掴みにいった。胸に腕を回してしっかりと持って、ドラゴンフォームの跳躍で窓を破って脱出。

オートディハーダーも自律運転でミナに続いて教会を出る。

ミナが振り返ったちょうどそのときに教会は一気に上から潰されたように崩壊した。



「一体、何が……………」

【クロックアップです】

ナビはそう解答した、ナビにはほとんどなんでもお見通しであるらしい。

ミナの前には三体目がいた。ズ・グムン・バとスパイダーイマジーンと同時にやってきた白と黒の蜘蛛型の怪人、アラクネアワームニグリティア。

ナビの説明ではワームとか言う存在であるらしく、そういえば学校で会った虫の怪人に似たところがあるなとミナは思い当たった。

【クロックアップとはタキオン粒子の流れを操り時間流を自在に移動できる能力です。言ってみると超高速移動能力ですね。ファイズアクセルフォームと互角でしたので、1000mを0.0058秒、つまり秒速17241mのスピードで走ることができます。もつとも、デイケイド版であるならの話ですが】

「なによそれ!? 勝ち目ないじゃない!?!」

秒速17241mというのは音速が340mであるからその約五十倍、マッハ50だ。このクウガの姿でもかなりのスピードが出せるのだが、桁違いにも程がある。

【勝ち目がないことはありませんよ。ペガサスです。あのワームがデイケイド版であることを願いましょー】

「ああ、ハイハイ理解理解……………」

ミナは影虎にオートディハーダーに預けさせているガンモードにしたレシーブレイガンを渡すように言う。

レシーブレイガンは投げられ、放物線を描いてミナの手元に渡った。

【オリジナル。少し神経が鋭くなりすぎて混乱するかもしれません  
が、堪えてください】

ミナは「分かっている」ではなくて「知っている」と答えてまた  
仮面ライダークウガの変身ポーズを取る。

今回イメージするのは「風」「遠くの敵」「射抜く物」。

アマダムの色が今度は緑色に光る。複眼とアーマーも同様に緑色  
となって、左肩にはシオルダーアーマーのようなものが現れた。

『邪悪なる者あらば、その姿を彼方より知りて、疾風の如く邪悪を  
射抜く戦士あり』

「緑と金のクウガ」と呼ばれる戦士仮面ライダークウガ・ライジン  
グベガサス。

このフォームの特徴は人間の数千倍と言われる超感覚能力。

ミナは聞こえすぎる、見えすぎる、感じすぎるといふ現象に襲わ  
れた。特に聴覚だ、様々な聞こえない音が耳に入ってくる、その中  
の二つに。

「そこー!!」

ミナはライジングペガサスボウガンを影虎のいる方へ向けて放った。ライジングパワーの込められた圧縮された空気弾が物凄い速度で放たれる。その速度は銃器の類よりもずっと早く、それだけはワームに通用する。

ボグツッ!! と空気弾がアラクネアワーム ニグリティアの背中を喰う。

きつとアラクネアワームは、ズ・グムン・バとスパイダーイマジンの戦いを見て自分を倒す力はないと判断したのだろう。だから油断して背中をさらし、影虎を先に倒そうとした。

だが、大きな誤算だった。今の見えすぎているミナにはしっかりとクロックアップしたワームの姿が映っている。

ライジングブラストペガサスを受けたワームは影虎に手をかけようとする一歩手前で緑色の爆発をして果てた。

「おつわぁツッ!?!」

まあワームは自分がクロックアップも使えない相手に倒されたと知る間もなかったろうから、一番驚いたのは影虎だったろうか。

いきなり自分の目の前で爆発　しかも緑色　があつたのだから、腰を抜かすのも無理はない。

「大丈夫?　殺されてない?」



ミナは普通の赤いクウガに戻って影虎に声をかける。影虎は一応無事だったがワームの体液なのか緑色のゲルがところどころにかかっていた。

それをミナが指摘すると、影虎はオートディハーダーを鏡がわりに使って急いで払う。取れそうになかった頑固な塊はオートディハーダーになすりつけて取る。

【……………】

オートディハーダーは無言でいるしかなかった。

「って、立花さんやおじいちゃんが言っていた、仮面ライダーが私に託したものっていうのがこの力なのね？」

【ハイ。すべての仮面ライダーに変身出来る“ミナ”に全てのライダーの力を与えるのが“ベルトライド”です】

ミナはためしに仮面ライダークウガの状態からディハーツールの変身機能を選びもう一度仮面ライダーディハーツのマークを押してみた。

すると、アンテナがまたクウガのベルト・アークルを一周しプラチナ色やプリズム状に輝いてもとの仮面ライダーディハーツの変身ベルト・ライダードライバツクルに戻る。

姿も仮面ライダークウガから仮面ライダーディハーツへと移り変わるように変身する。

このベルトを回る金色のアンテナがベルトをさっきのドラゴンロ

ツドやタイタンソードなどの武器のように再構成させているのだ。

「デイハーツは全ての仮面ライダーに変身出来るライダーってことでいいのかしら？」

ミナは変身を解除して生身の状態に戻りデイハーツの中に入るナビに尋ねる。

【いいえ、それは違います。デイハーツにはデイクライドのように世界の因果を捻曲げる力はありません。それはこれからの旅において障害にしかありませんから。全てのライダーになれるのは“ミナ”です。デイハーツは……サブプログラム・ベルトライドはその助力をしているに過ぎません】

「ミナと言ったり、オリジナルだとか言ったり、やけによく知ったり……あなた一体何者なの……？」

【先程言いませんでしたか？ 私はリクリエイティブ・ミナ。あなたが創られるより三年前に ……】

「しい〜〜〜……」とミナは自分が聞いた話題だったというのに口の人差し指を添えてナビの発言をやめさせる。

デイハーツを見ずに、じつと道路の先を見るミナ。

影虎は「こいつらは……」と以前見たことがある、しかしもう見たくはなかったものを見るような目をしてらしくもなく落ち着いて冷静な調子をしていた。

道路の向こうから四人の怪人がやけに強い威圧感を引き連れて歩

いてきた。

四人の怪人はそれぞれ特定の種類の動物をイメージさせる意匠をしており、右から昆虫怪人、猫系怪人、重量系怪人、水棲系怪人という風だった。

クライシスの怪人軍団より数は全然少ない。だが、感じる“ヤバさ”はかなり近い。四人全員からジャーク將軍やマリバロンと似た力の強大さが臭う。

少なくとも、燃え盛る教会の中で相手にした怪人たちとは質が違う、明らかに。

「あ、お前は……あの時のガキか……！？」

クワガタ虫のような角が特徴的な昆虫怪人が影虎を指差して憤る。

影虎は「やつべ、顔割れてた」と言っていまさらオートデイハーダーの影に隠れる。どうやら、ミナに会う前にこの怪人たちと会っていたらしい。

影虎のことだからあの昆虫怪人をバイクで撥ねたりでもしたのかも知れない。

「いいじゃない、あんな人間なんてさあ」

猫系怪人が伸びをしながら言った。髪をドレッドヘアのようにしており、鋏の入った黒い鎧をしているのが特徴だった。

「あら、強い欲望を感じたから“この世界の”アंकかオーズの坊

やだと思ったのに、お嬢ちゃんとあの時の可愛い子だったのね」

水棲系怪人      タコなどの意匠が脚に見られた      が女性的な口調で言う。姿こそ異形だったがスリムでなまめかしさをもった怪人だった。

「アレ？　　そういえばアंकがいないや。どこいったんだあ？　　メズールウ、アंकはどこお？」

サイヤゾウなどの重量系動物の意匠を持つ怪人が水棲系怪人に聞く。その怪人は少し幼い感じがして、その様はお母さんに甘える小さな子供というような印象を浮かばせる。

「あいつなら『興味ない、勝手にやってる』とか言っただけかに行っちゃったよ、ガメル」

その重量系怪人の問いに答えたのは“メズール”という水棲系怪人ではなく猫系怪人だった。

「カザリ、本当か？　　……ふん、八百年前と変わらず勝手な奴だ。色々変わっているはずなんだがな」

昆虫怪人が猫系怪人の話に乗っかる。もう影虎には興味がないようだった。

「まあいいさ、好きにやらせておこうよ。僕たちはこの世界でありつたけ稼ぐだけさ」

猫系怪人・カザリがそういうと。

ミナは自分の額辺りに違和感を感じた。なにか巨大なデキモノが出来て、それがパツクリと開いたような。

ミナの額にジューズなどの自動販売機に見られるようなコインの投貨口が現れていた。

「ツツ!? !? !?」

ミナは自分の身に起きた超高速や擬態などよりもずっとキテレツな事態にどうしていいのか分からずアタフタした。

「その欲望、解放しなよ」

猫系怪人・カザリが何かを取り出し、それをミナに向かって投げる。

その何かとは銀色のメダルだった。五百円玉の倍くらいの大きさがあり、表面に動物の模様が書かれた物だった。

メダル …………… 古来から欲望の象徴とされるもの。

欲望。人間の生きる<sup>エネルギー</sup>原動力。生きるためには欠かさないもの。

彼らはそれを叶える力がある。叶えてくれる。

嫌だ、いるかそんなもの。

ミナは心中でそう鼻で笑うかのように言い放ち、その入り口であるメダルの投貨口を閉じさせ、投げられたメダルをバシッツと打ち

払う。

「なに……!?!」

ガメル以外の怪人がミナのその行動を見て驚愕した。

叶えてくれる、なんていらなかった。望みならある、いくらでも今は戦うことだし、父親と母親を救いたいし、影虎と一緒にいたいという気持ちもちよつとある。

だが、人に叶えてもらうより自分で叶えてみせる方がいい。だからミナは仮面ライダーの力を受けとった、仮面ライダーとなった、仮面ライダーの力を受け継いだ。

イマジンの時と同じだ。願いを叶えてやろうと薄気味悪い笑顔で迫ってきてもらって悪いが、余計だった。

希望は自分の手の中にある。

「こんな人間が……いるとはなあ、力に手を伸ばさない人間が……」

「まあいいわ、“破滅”という欲望のはけ口になりなさい」

メズールがそう言うのと四人の怪人たちの後ろから、新たな怪人たちがぞろぞろと現れ出てきた。

数は二十程。姿はそれぞれ様々で、アンモナイト、マンモス、ゴキブリというような生物の姿をした者もいればダイヤモンドのような宝石をイメージさせる個体も見られる。

四人の怪人とはどこことなく違った印象が受けられた。

「うっわ、やな奴ら思い出しちゃったよ……」

影虎はまたもこの怪人らに見覚えがあるらしく、頭を抱え目頭の部分を押さえた。

一方、今まで冷静に怪人たちの説明をしていたナビだった初めてミナたちと同じように　しかし、厳密には違う　動揺する。

「ナビ、あいつらは　………?」

【“率いているのは”欲望の王・グリードです……。しかし、“率いられているのは”記憶配合体・ドーパントです。屑ヤミーに更にガイアメモリを挿しているものと思われます】

「それがどうかしたの?　というか、それがどういことなのか知らないし入っても来ないんだけど」

【カテゴリーが全く違うんです。グリードがガイアメモリを所持しているとは……虚構の世界でよほどおかしなことが起きていると思われます】

つまりはこの世界ではバラバラの勢力で別々の仮面ライダーが戦っていた悪が一つに結集してしまっている、と。

それはかなりまずそうだった。ナビの動揺も分かる。

「グガゴガグガギグ……ッッ!」

人の言葉ではない、そして意思もないような言葉を発しながら、蝙蝠の怪人が突っ込んできた。

「うぐ……ウ……ッッ!!」

ミナは攻撃を受けてしまう。変身もしていない、生身の身体で。

幸にも殴りつける形ではなく投げ飛ばす形で、それほど力もなかったのでダメージ自体は少なかった。

ミナはなんの偶然か炎の上がる崩れた教会に落ちる。背中を打ち付け、仮面ライダーごしではない痛みが走る。

【蜘蛛の次はコウモリ。これも定石ですね】

ナビは冷静さを取り戻して話す。コウモリ怪人なら先程ズ・ゴオマ・グという怪人を倒したのだが、どういふことなのかミナには分かった。

ベルトライド、ディハーツではなくほかの仮面ライダーへの変身だ。

相手は多数、出力の安定しないディハーツでは相手するのは危険だ。ここはこの怪人たちを倒すのに適切な仮面ライダーで行かなければならない。

【私でも知らないドーパントも多数いるようです。ここは、検索をスムーズにいかせるため“ダブル”でいきましょう】

ミナは「ダブル？」とナビに聞いた。ダブル、つまりは二つ。二



人の仮面ライダー同時になろうということなのだろうか。

ナビは否定した。だがそのあとであなたが間違えてもありませんが、とも。

突如デイハーツールから何か漏れ出た。コンピューターのデータ情報のような「0」と「1」の配列で緑色に似た光を放っていた。

また不可思議なものなのだろうと考えていたミナだったが、仰天する。もしかすると、今日で一番の驚きだった。

ミナがもうひとりいる。

デイハーツールの中から出てきたデータは積み重なり存在や体積さえ持ち、やがて人の形を持った。

そうして完成したものがミナと瓜二つな人間だった。髪の色も身長もスタイルも全くミナと変わらない。違っているのは長髪ではなく短髪で、オカッパ頭だということくらい。

「え？ あなた ……！？ ええツツ！？」

ミナは驚きに驚きに驚きに驚いた。手がなんだか分からない動きをミナの意識外で行っており、妙にカクカクしていた。

【何度も言っているでしょう、オリジナル“原作”。私はリクリエイティブ“再創造”だと。さ

あいきましよう、シチュエーションもそっくりです。変身機能から「W」を選んでください】

口では「いやいやいや、説明になってないのよ分かる!？」と言ったのに訳が分からなさ過ぎていて頭についていていなかった身体は言われるがままに動いた。

変身機能の『伝説（LEGEND）』からアルファベットの「W」を描く仮面ライダーのライダークレストを選択。

すると【HENSIN!! RIDER DOUBLE!!】という電子音がしてアンテナが再びドライバックルを一周した。

今度は仮面ライダークウガの時のようにベルトの姿が消えたりすることはなく純粹にベルトは変換される。

生み出されたベルトは「W」を描くように開いており、その中に何かがいれられるようになっていた。

このベルトはガイドライバー2G、セカンドジェネレーション通称ダブルドライバー。

仮面ライダーダブルへの変身に使う変身ベルトだった。

このダブルドライバーと共にミナの手に黒いUSBメモリのよななものも届く。「J」と書かれており、それは『切り札（JORKER）』の頭文字であるようだ。

【CYCLONE!!】

それをじっくりと見るミナの横でそんな電子音なる。このUS

Bメモリに似たアイテム、ガイアメモリの地球ガイアウイスパーの声だ。

「スタートアップスイッチを押してください。ガイアメモリを起動させ、ドライバーに挿します」

“もうひとりのミナ”がガイアメモリをみせる。あちらは緑色のケースをしており、ディスプレイには「C」と書かれている。これは『疾風（CYCLONE）』の頭文字であるようだ。

ミナは自分のガイアメモリにも同じように小さなスイッチがあるのに気づいて、左手の人差し指で叩く。

【JORKER!..!】

サイクロンメモリから放たれた音と同じ音がミナのジョーカーメモリからも出る。

ここまで来て、ミナの頭に記憶が入ってきた。

ミナが ……いや、ミナたちがなれる二人で一つの仮面ライダー、

仮面ライダーダブル。

身体は動く、その仮面ライダーを受け継いで見せようとして。二人のミナは「W」と見えるように構える。

「「変身」」

“もうひとりのミナ”がサイクロンメモリをガイアドライバーの

ライトスロットに挿入。<sup>インサート</sup>

サイクロンメモリは“もうひとりのミナ”の魂<sup>ソウル</sup>を連れて、ミナのライトスロットに転送される。

ミナはそのサイクロンメモリをスロットに押し込むと自分のジョーカーメモリをレフトスロットに挿入、ダブルライバーを「W」に展開。

【CYCLONE!! JORKER!!】

両手を広げ、変身を招く。仮面ライダーの装甲が風とともにミナに定着した。

「グガアガゴゴギゴガ……ッッ!!」

コウモリ型のドーパント、バットドーパントはミナに攻撃を仕掛けようとしたのだが、ミナの周囲に強烈な疾風が吹き、逆に吹き飛ばされる。

「は ……!!? また、変わった、けど……なんだこの半分こ……!?!」

影虎のリアクションは色々と折り混ざったものだった。

緑色の右半身、黒色の左半身。ソウルサイドは“もうひとりのミナ”が、ボディサイドはミナが担当する。

吹き荒れる疾風と勢いを増す炎に包まれて、仮面ライダーダブルは復活する。

この形態の名は疾風の切り札、サイクロンジョーカー。ダブルの基本的なフォームであり、右半身がサイクロンメモリの力を引き出す緑色の身体、左半身がジョーカーメモリの力を引き出す黒色の身体だ。

ミナはクウガと同様にこの仮面ライダーの戦い方について疑問はしなかった。

頭の中に入ってくる。この仮面ライダー、仮面ライダーダブルの性質やシステム、どういうものなのか ……そして“リクリエイティブ・ミナ”のことについても頭の中に入ってくる。

ミナは左半身を使って近くにいたバットドーパントを殴りつける。バットドーパントはザッツと後ずさったが、それだけでは終わらせない。

続いて、右半身の飛び蹴りをかましてやる。緑色に揺らめく風がまとわる一撃だった。

バットドーパントはその一撃自体にもそうだったが、生み出された風の強さに負け、吹き飛びドーパントの軍団のところまで転がった。

次にやってきたのは古代生物アノマロカリスのような姿の怪人だ。アノマロカリスドーパント、ミナの頭にその情報が入ってくる。

『サイクロンサイドのエネルギーが低いです、変えて見ましょう』

リクリエイティブ・ミナはオリジナル・ミナに武具機能（I T E

M TOOL)から『ヒートメモリ』を選んでくださいと言う。

それがどういうものなのか、また瞬間に入ってきたミナはディハ  
ーツールを操作し、ヒートメモリを呼び出す。

【ITEM TOOL・HEAT MEMORY!!】

そう電子音がなるとともに仮面ライダーダブルの右手に赤いケー  
スのメモリ、ヒートメモリが召喚された。

ミナの右半身はそのスタートアップスイッチを押しレフトスロッ  
トからサイクロンメモリを引き抜き起動させたヒートメモリをその  
かわりに挿す。

【HEAT!! JORKER!!】

仮面ライダーダブルの右半身は変わらず、左半身だけが緑色から  
赤い色に変化する。

ハーフチェンジシステム、それがこの仮面ライダーダブルのシス  
テムの醍醐味。

今の仮面ライダーダブルの形態は熱き切り札、ヒートジョーカー。  
右半身はヒートメモリの「熱の記憶」を發揮し、ダブルの右拳には  
熱い炎が宿る。

「ハアツツ!!」

かかってくるアノマロカリスドーパントをクロスカウンター。難  
しい攻撃だったがそれをジョーカーメモリの力が可能にし、ヒート

の力が籠った鉄拳がアノマロカリスドーパントの顔面を捉える。

「ゴガッツ!!」

しかも、一撃で終わらせる気はミナにはなく、つかみかかって何度も何度も。

「うッツ!!」

すると反撃はやはりやってきた。口の辺りから何かを発射しダブルの肉体を撃つたのだ。

すこしダメージを喰らった“両”ミナだったが持ち直す。今の攻撃は食道の内側に生えている歯を吹き出したものだと言っるのは分かっていた。

そんなもの弾けばいい。

ミナはまた　　とは言っても今度は自分自身の判断でデイハーツールを操作し、武器機能を選択、このヒートメモリの力と相性の良いメモリを選ぶ。

【ITEM TOOL・METAL MEMORY!!】

ヒートと比較的相性の良いメモリが今度はオリジナル側……ミナの担当する左半身の手の平に現れる。

それをミナはなんの躊躇なく右半身がやったようにダブルドライブからジョーカーメモリを取り出したあとで挿入。

【HEAT!! METAL!!】

またもハーフチェンジ。右半身の色が黒色から鋼を思わせる灰色へと変わる。

この形態は熱き闘士、ヒートメタル。熱の記憶と鋼の記憶を引き出す形態でサイクロンジョーカーと同じく相性のいいメモリの組み合わせ。

「グギッツ!!」

アノマロカリスドーパントはまた「歯」を散弾銃のように射出してきた。

ダブルの背後に現れる、棒状武器メタルシャフト。

ミナはそれを手にすると、アノマロカリスドーパントの攻撃をメタルシャフトで弾きつつ接近する。

アノマロカリスドーパントは銃撃は無意味だと悟り、肉弾戦を仕掛けてきた。腕をがむしゃら　　というか目茶苦茶に振り仮面ライダーダブルヒートメタルに襲い掛かる。

しかし、残念なことにパワーはこのヒートメタルが一番の得意とする分野。アノマロカリスドーパントの攻撃を軽々弾き返し、メタルシャフトで点く。

「ゴギヤッツ!!」

サイクロンジョーカーの攻撃よりもずっと強力で、しかもメタル



シャフトの先端で突かれたアノマロカリスドーパント。

本来ならマキシマムを要するのだが、この個体は耐えられなかったらしい。爆発して、メモリブレイクは完了する。

「ん？」

爆発して壊れたメモリを排出したドーパントは人間ではなく出来損ないの人形のような姿になる。

全身に包帯を巻いたミイラに近い容姿をしたこの怪人はセルメダルを破壊することで生まれる屑ヤミーだ。グリードにはなれなかった無欲の存在。

『やはり屑ヤミーでしたか。しかも屑ヤミーをドーパントにしたものは純粋なドーパントよりかなり劣るようですね』

右半身を担当するリクリエイティブ・ミナが屑ヤミーがただの碎けたセルメダルに変わるのを見ながら分析する。

もうこの口調の中に動揺は一切含まれていなかった。

ミナはこの解説から戦略を立てる。グリードとドーパントという二大怪人がその力を合わせているといっても、どうやらこの軍団は両者の上澄みだくを掬った物に過ぎないらしい。

なら、戦闘力はあまり高くない。もう仮面ライダーはいないと安心して破壊だけを残した有象無象の敵だった。

なら、こっちは全てを残したまま力で押すだけだ、複数体を薙ぎ

払うような攻撃を選ぶだけである。

ミナは武具機能からルナメモリを選び右手近くに召喚し、ライトスロットをルナメモリに入れ替える。

【LUNA!! METAL!!】

赤い色をしていた仮面ライダーダブル ヒートメタルのヒートサイドが月光のように澄んだ黄色に変わった。

ルナメタル、その戦士の称号は「幻想の闘士」。ダブルの七本のガイアメモリの内最も謎の多い幻想の記憶が込められたルナメモリの力を手に入れた闘士の形態。

「ハアアツツ!!」

巨大な雑刀を振るうように構えたミナたちはブオンツツ!!と勢いよくメタルシャフトを振るう。

ルナメモリの力によって伸縮自在、変幻自在となったメタルシャフトが鞭のようにドーパントの群れを襲った。

凧ぎ、倒し、叩き、突き、振り回し、縛り、投げ、弾き、打ち、殴り、撲る。

遠心力などを味方につけて仮面ライダーダブル ルナメタルはドーパントの群れを痛め付け蹂躞する。

「上空です」

危険信号。しかし、その声には全くといっていいくらい焦りがなく、本当に知らせる気があるんだろうかと疑問なくらい。

上空を見るとルナメタルの鞭から逃げ出せていたドーパントが一体いた。

鳥のドーパントだ、鳥と言っても体色は緑色をしており一見して鳥だと言える者はいないだろう。

【ITEM TOOL・TRIGGER MEMORY!!】

ミナは上空から来襲してこようとするバードドーパントを見つめながら器用にディハーツールを操作し、トリガーマモリを召喚する。

【TRIGGER!!】

そうガイアウィスパを鳴らすとメタルメモリをスロットから引き抜き、青いケースのトリガーマモリを代替とする。

【LUNA!! TRIGGER!!】

こうして生まれるルナトリガー。これもCJサイクロンジューカメタル、HMと並ぶ相性の良い組み合わせ。

このフォームの別名は「幻想の銃士」。少しノスタルジックな戦士の名だが、その能力はとかく強力。

「はッッ!」

胸部に現れるトリガーマグナムで上空のバードドーパントを撃つ。

銃口からは黄色いエネルギー弾が連射される。

バードドーパントはヒラリと身を翻す。だが、トリガーマグナムから放たれた弾はルナメモリの力を発揮して不可思議な動きをし、バードドーパントを打ち落とした。

「このまま決めようかしら」

ミナはルナメモリトリガーマモリをダブルドライバーから引き抜いて最初に挿入した二つのメモリをドライバーに。

電子音がしてダブルの身体が最初の形態サイクロンジョーカーに戻った。

『………すみません、心なしか暑い気がするんですが』

決め技に移ろうというミナの右半身で意見があった。リクリエイティブ・ミナがミナに話し掛けてきていたのだ。

「………あ、」

ミナは気づく。具現化したリクリエイティブ・ミナの肉体は燃え盛る教会の中にほっばらかしてきていた。

慌てるミナに当の被害者であるはずのリクリエイティブ・ミナは至極落ち着いた声で指令する。

『まとめてカタをつけるにはちょうどいいのでエクストリームになりましょう。それにやはりオリジナルとリクリエイティブではオリジナルの方が強すぎるようですし』

「え！？ ちょっとそんな場合！？ 貴方の身体灰になるかもしれないのよ？」

『はい、それより早く武具機能からエクストリームメモリを選択してください』

ミナは本当にそれでいいのかと不安になったのだが、エクストリームメモリの特性も頭に入ってきていたので従って、エクストリームメモリを呼ぶ。

【ITEM TOOL・XTREME MEMORY!!】

武具機能が発動、エクストリームメモリが呼び出される。

エクストリームメモリは生きたガイアメモリで、鳥のような姿をしている。仮面ライダーダブルを高めへと導く存在で、そこには“椅子”があった。

低くくぐもった声で鳴くとエクストリームメモリは教会のところまで飛んでいき、リクリエイティブ・ミナを自分の中におさめた。

エクストリームメモリはその後舞い戻ってミナの上空へ。それと同時にサイクロンメモリとジョーカーメモリからタワー状の光が伸びる。

それをレールにするかのように、エクストリームは降り、ダブルドライバーに追加されるように装着された。

【XTREME!!】

ダブルの中心、身体を二分するセントラルパーテーションが開き  
“中が見えた”。

この形態は全てのフォームの上位種で地球という巨大なデータベースと直結した究極の状態。

名は仮面ライダーダブルサイクロンジョーカーエクストリーム。  
縮めて「仮面ライダーダブルCJX」。

「上手くいきました。イマイチバランスが悪かったのですが私の身体も使うことで上手くいきましたね」

とリクリエイティブ・ミナ。

自分の身が危なかったのにそっちのけでそんなことを考えていたなんて、とミナはなんとも言えない気になったが、今はとにかく戦おうとする。

「敵のドーパント、グリッド全ての情報を閲覧しました。しかし、中には“カザリタイプのヤミーの親”がいる可能性もあります、プリズムで確認を」

ミナは『仮面ライダーダブル』と『ドーパント』『ガイアメモリ』についての情報は入ってきていたものの、グリッドについては何も知らなかったが一応頷いておく。

「プリズムビッカー!!」

CJXのクリスタルサーバーから攻守一体型武器プリズムビッカ

ーが精製される。

精製されたプリズムビッカーのソードのスロットに同時に現れたプリズムメモリを。

【PRISM!】

プリズムメモリの力を帯びたビッカーソードから出た光が辺りを走り敵ドーパントたちを解析する。

「出ました、一番奥のドーパント。あのドーパントを除いて攻撃してください」

ドーパントはおよそ二十。その中で一番奥にいるドーパントはドーパントでありながら同時に猫のような特徴を持つ。

ドーピングしているガイアメモリは『クラウン王冠の記憶』というもので、確かにこのなかでは抜けて戦闘力が高いようでルナメタルの攻撃も防ぎきって見せていた。

見た目は王冠を被り豪華な衣装を着る少し太ったペルシャ猫という感じで、一番後ろにいるせいで猫の王様のようなのだ。

『クラウン王冠の記憶』・クラウンメモリの力は意識のない生命体を制御下におくというもの。なるほど、欲望も何もない屑ヤミーのドーパントを操るには持ってこいのメモリだった。

「あいつは後ってことね」

ミナはプリズムソードをプリズムビッカー内に収め、四つのマキ

シمامスロットに四つのメモリを挿入していく。

【CYCLONE MAXIMUM DRIVE!! HEA  
T MAXIMUM DRIVE!! LUNA MAXIM  
UM DRIVE!!】

最後に自分の『切り札の記憶』・ジョーカーメモリをマキシマムスロットへ。

【JORKER!! MAXIMUM DRIVE!!】

「ビツカーチャージブレイク!!」

四つのガイアメモリのマキシマムドライブのエネルギーが充填され、ミナはプリズムソードを引き抜いた。

ドーパントの群れへ飛び掛かっていき、切り付けていく。CJXは地球というデータベースと直結してつねに相手の一歩先をいく形態で、しかも相手は屑ヤミーのドーパント。

止められないような勢いでドーパントたちを殺陣。切り捨てていき、最後に襲い掛かってきたバットドーパントを腹を貫くようにして、破る。

「ハアツツ!!」

一体を除く全てのドーパントにトドメとなれ『ビツカーチャージブレイク』を決めたミナはドーパントたちをバツクにビツカーソードを構える。



「カゲゴガガゲゴ…… ツッ！！！！」

その後ろで屑ヤミーのドーパントたちは爆発した。

「ふう。で、メインディッシュの猫ちゃんね」

さてと、最後の一体だというドーパントにミナは向き合う。

カザリタイプだとかヤミーの親だとかなんのканのリクリエイテイブ・ミナは言っていたが、実際はどうすればいいのか。

ミナはリクリエイテイブ・ミナに指示を仰ぐ。

「純粋なドーパントでありながらヤミーでもあるようです。『クラウンDペルシャネコヤミー』というところでしょうか。これはかなり強力な個体だと予想されます。この相手から隙を作り、親を救出するのは並ではありません」

『王冠をかぶった猫』は、フツッ！！ とこちらを睨んで威嚇の声を出していた。

よくわからない「ゴガギゴ」とかいうガ行の羅列しか口にできなかった他のドーパントとは明らかに違う。

おそらく、他のドーパントはこの王冠をかぶった猫の怪人の助力とするために作ったものに過ぎないのだろう。

「ですが、どちらか一つさえ消してしまえば話はずっと簡単になります」

猫の怪人の攻撃をプリズムビツカーで受け止めながらリクリエイタイプ・ミナは「エターナルメモリを」と言う。

その意味が分かったミナは『エターナルメモリ』を武具機能を使って呼び出し、ダブルドライバー横にあるマキシマムスロットへ。

【ETERNAL!! MAXIMUM DRIVE!!】

エターナルメモリのマキシマムドライブが発動する。

すると『クラウンDペルシャネコヤミー』の身体が変調をきたす。地に伏せた後その身体から“使用不可能”となったクラウンメモリが排出されてしまった。

エターナルのマキシマムドライブは相手のメモリの力を無力化させる能力がある。ヤミーの中にあつたクラウンメモリがその力を失ってしまったのだ。

「最初からこうすればよかつたんじゃない?」

「いえ、T2ガイアメモリなら使用しても意味はないので今まではその確認を。それに、オリジナルの精神状態では“悪”であるエターナルにはなれませんし」

リクリエイタイプ・ミナはそのあと「そして、まだですよ」と付け加えて忠告した。ミナも知っていたので動く。

ガイアメモリの効力をなくすことができはしたが、まだヤミーとしての戦闘力は残している。

ミナはヤミーの姿を見て情報を知り、リクリエイティブ・ミナが何故このヤミーだけ攻撃対象から外すように言ったのか、自分がなにをしなければならぬかを知った。

ミナはあえてエクストリームメモリをダブルドライバーから解放し、通常のCJに戻る。リクリエイティブ・ミナの肉体データは再びデハーツールの中に戻ったようだ。

エクストリームメモリを外した訳は、CJXではパワーが足りすぎるし、この方が都合が良いからだった。

【LUNA!! METAL!!】

選んだ形態はルナメタル、ドーパントの軍団を蹂躪したフォームだった。

「それッッ!!」

メタルシャフトをまた振り回し、ミナはペルシャネコヤミーを攻撃する。

倒すのが目的ではない、攻撃する手を休めはしないがそのまえにやるべきことがある。

執拗に執拗に執拗に何度も同じところを攻撃する。ペルシャネコヤミーを構成するセルメダルがその度にこぼれ、内部が拓けてくる。

そうしていくとそのメダルのなかに肌色の ……人間の手のようなものが見えた。

「見えた!！」

ミナはメタルメモリを素早く抜き、高速でジョーカーメモリと入れ替える。

【LUNA!! JORKER!!】

幻想の右半身に切り札の左半身となったダブルはルナメモリの力で変幻自在となった右腕を伸ばした。そして、ペルシャネコヤミーの中に埋まっているような形となっている人間の腕を掴み、引きずり出した。

「ギニヤア~~~~~ツツ!!」

宿り主を失ったペルシャネコヤミーは絶叫する。同時に身体から大量にセルメダルをこぼしてしまって。

“親”はなるほど、気弱そうな中年男性で全部壊れてしまえという自暴自棄に陥り易そうな顔をしていた。ミナはペルシャネコヤミーの親をその隙に伸縮するルナサイドの腕で安全そうな場所に置く。ペルシャネコヤミーのダメージは大きい。セルメダルを大量にこぼしてしまい、かつ親を体内から失ってしまったのだから。

次の一撃で、決まりだ。

「これで決まりよ!!」

【CYCLONE!! JORKER!!】

ミナはCJに戻り、必殺のライダーキックを決めるべくマキシマムスロットにジョーカーメモリーをインサート。

【JORKER!! MAXIMUM DRIVE!!】

強風に吹く風を呼び起こし、その風は上昇気流となって、仮面ライダーダブルの身体を高く、空へ。

「ジョーカーエクストリーム!!」

エクストリーム  
高揚、それが頂点に達したときにミナはジョーカーメモリーが入ったマキシマムスロットを叩く。

ダブルの身体がセントラルパーテーションを境にして二つに分裂、その上で放つライダーキック。

二つの必殺がペルシャネコヤミーに激突、ペルシャネコヤミーはまたも絶叫し果てることになった。

「フフン、やったわよ」

分離した身体がまた一つになり、銀色のマフラーをはためかせながら降り立つミナは誇る。

その後ろでは貯まっていたセルメダルが爆散し雨のように降っていた。他のドーパントを導入させていたからかその数はとてつもなく、数千ほどもあった。

「すげえ……へんてこりんな半分こなのに……」

そう評価するのは戦闘中半分忘れられたかのようにいた　戦  
いに参加しなかったグリードからも目をつけられず無視された  
影虎だった。

「ちよつと！！　半分こはないでしょ半分こは！！」

ミナはそれを聞き逃さず、怒る。ボソツとリクリエイティブ・ミ  
ナが『普通へんてこりんを怒りませんか？』と言った。

しかし、影虎の言う通りだとミナは考える。

へんてこりんかどうかは置いておくとして、一体の仮面ライダー  
が納めたこの戦績は凄い、凄まじい。

これが仮面ライダーダブルの力であり、流れ込んできた“地球そ  
のもの”が自分の味方であるのだ。

「馬鹿な……あれだけの数をたった一人で、だと！？」

昆虫系のグリードが驚愕する。ミナはこの怪人がなんなのかがも  
う分かっている、ウヴァという名のグリードだ。

雷属性の緑色のコアメダルを核とし、性格は粗暴でありながら矮  
小な部分もあるというもので、“この世界”では世界の終末を起こ  
しかけたグリード。

「なかなかやるねえ、君が“アイツラ”が言ってた運命の子……な  
のかな？」

猫系グリード、カザリが含み笑いをしながら高い評価をし、ミナ

を見る。

運命の子。それは地球の本棚を手に入れてしまったある少年が言われていた名前。

やはり、“オーズ”と“ダブル”が繋がっているらしい。グリードたちは一応はガイアメモリを操り、ミナの資質の一つを知っていた。

グリードもそれ相応のパワーアップを果たしていても不思議ではない。

リクリエイティブ・ミナは『用心を』と忠告してきたが、言われるまでもない。

強い力を手に入れた、強い力が後ろについてくれる、強い力が自分を守ってくれる。

例えそうでも、怖いのは別問題だ、どれだけ強くてもそれはついて回る、いつまでも永遠に離れない。

だが、緊張感はある意味で崩されてしまった。

ゴオオオンツツツッ！！！！

そんな轟音が仮面ライダーダブルと怪人グリード四体の睨み合い

をぶち破った。

ミナたちが戦っていた場所は教会こそあったが高いビルが建つ街のど真ん中だった。そしてすぐそばには巨大な高層ビルが立てられていた。

それが“馬鹿げた力”に根元から砕かれ、爆発したようになったのだ。

クライシス要塞の攻撃ではない、この街にやってきた怪人のいずれかで、自分の敵だとミナには分かった。

「~~~~ツツ!？」

分かったのだが、理解が追いついてこない。敵だと一目瞭然なのだが、追いついてこない、分かるのを拒否するかのよう。

体長は …… およそ十メートルというところで、体積は計り知れない。頭部には大きな角が見られ、サイに近い身体の構造をしていることは分かった。

「あれえ？ 俺こんな大きなヤミー作ってたっけ……？」

重量系グリード、ガメルは何の危機感も見せずそのサイの化け物を見る。

確かにガメルの作り出すヤミーは自分と同じくバイソン、リクガメ、アルマジロといった動物のもので、少し変わった形だがサイのヤミーも生み出していた。





標的を失ったサイのオルフェノクはミナたちのところに突っ込んできた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!?」

ミナは仮面ライダーダブルの身体でジャンプしてこれを回避し、影虎はオートデイハーダーに抱えられて逃げる。

「何だ!? 悪夢か悪夢なのか悪夢だよな悪夢であってくれ悪夢って現実逃避くらいさせてくれエツツ!!」

オートデイハーダーに抱えられた影虎は巨大過ぎる灰色の怪物オルフェノクを見て動転、顔も真っ青になっていた。

「ナビ!! あいつは!?!」

ミナにもオルフェノクだということしか入ってこなかったのもあまり期待を持ってないが聞いてみる。

【わかりません!! オルフェノクの種類で激情態になってしまっているのはわかりますが、この世界には存在しなかった个体です! 恐らくは古代のサイ“エラスモテリウム”のオルフェノクかと!?!】

鉄面皮かと思われたリクリエイティブ・ミナはグリードがドーパントを率いているのを見た時よりも明らかな動揺と絶望感を見せていた。

ようやく見せたリクリエイティブ・ミナの強い人間の感情に安堵

する時間はなかった、絶望的ながら。

白いサイの怪物、いやエラスモテリウムオルフェノク激情態は頭部から無数の針を射出して攻撃してくる。

ミナはサイクロンのもたらずスピードで何とか避けたが、一発でもまともに受ければ終わりだと直感した。

仮面ライダーダブルでは、少なくともサイクロンジョーカーでは勝ち目がない。

オルフェノクと戦うための仮面ライダーもいる。だが、その仮面ライダーに変身する時間がない……………。

そこに、オートディハーダーによるエラスモテリウムオルフェノク激情態への攻撃が入った。

空を高速で飛び回りながらマシンガンを放ち、エラスモテリウムオルフェノクを攻撃。

イマジンとアンデッドを倒してみせた力だったがエラスモテリウムオルフェノクの巨体にはあまり効果が見られなかった。

むしろエラスモテリウムオルフェノクの怒りを買い、オートディハーダーは攻撃のターゲットにされてしまう。

(いや……………!!)

オートディハーダーは故意に向けさせたのだ、エラスモテリウムオルフェノクの注意を自分“たち”に。

また、影虎の采配のようだった。エラスモテリウムオルフェノクの攻撃を避けるため超高速で動き回るオートディハーダーに抱えられていて良くは見えないが、影虎の目線がこちらに向いている気がした。

「やれ」と影虎は言う。

ミナは素早くしかし確実にディハーツールを操作。『伝説（LEGEND）』から屋上で選び損ねたギリシャ文字の『（ファイ）』に似たマークを選ぶ。

躊躇うべき仮面ライダー

の力である気がした、その力を持てば後戻りはできないずっとその深みに嵌まっていくしかないような。

だが、それが何だ。

躊躇うべきなのは分かっているがミナはもう自分は止まっていけない後ずさりしてはいけない振り返ってはいけないというのも分かっていた。

影虎が頑張ってくれている、そをな彼を見捨てていいわけがなかった。

この力を手に入れることが罪だとしても迷っている間に誰かが傷つくならいくらでも罪を背負ってやりたかった。

【HENSIN!!! RIDER FAIZ!!!】

ミナは仮面ライダーダブルの変身を解除し、リクリエイトイブ・ミナ生身に戻った状態の精神はデイハーツールに戻り、生身に戻った状態でデイハーツールを操作、ダブルドライバーをドライブバックルのアンテナが一周する。プリズム状に輝いて、一本のベルトは変換される。ベルトライド

現れたのは機械的なベルトと携帯電話のように見えるツール。名前は総称して『ファイズギア』。元はオルフェノクの王のために作られた三本のベルトの一つ。

ミナは携帯電話型ツール『ファイズフォン』を開き変身コード『555』と『決定(Enter)』<sup>プッシュ</sup>を入力。

### 【STANDING BY】

ファイズフォンを閉じ、天に高く翳し叫ぶ。

「変身!!」

ファイズフォンをファイズドライバーへセット。突き立てて、倒し、腕を構える。

### 【COMPLETE】

全身を「」をイメージさせる形に走る赤いエネルギー、フォトンブラッド。

その後スーツが転送されてミナは新たな仮面ライダーの姿となった。

オルフェノクと戦い、今のミナと同じように戦うことが罪だとしても誰かが傷つくなら背負ってやると信条に決め戦っていた戦士。

それが、仮面ライダーファイズだった。

「これじゃさすがに勝てないわよね……!!」

だが、武具機能でファイズの強化アイテムを選ぶのは時間がかかる、早く影虎を救わないといけないというのに。

よってミナは仮面ライダーファイズに常備されている腕時計型ツールファイズアクセルからアクセルメモリーを取り、ファイズフォンのミッションメモリーと引き換える。

フォームチェンジ、仮面ライダーファイズは通常状態から超高速移動が可能なアクセルフォームへ。

胸部アーマーフルメタルリングが展開し内部構造が見えるようになり、フォトンストリームを通るフォトンブラッドの色も赤から銀に。

【START UP】

ミッションメモリーをファイズショットに挿入させた状態でファイズアクセルのスイッチをオン。

【9・9……9・8……9・7……】

ファイズアクセルの秒読み（カウントダウン）が始まり、ミナは構えたあとで走り出す。

ミナの魂は加速し、突入する。千倍速の世界へと。

「ダアツツ!!」

<sup>レディ</sup>始動されたファイズショットでエラスモテリウムオルフェノク激情態の顎部分を複数回殴る。

エラスモテリウムオルフェノクの頭はその衝撃でゆっくりと持ち上がる。相手の体積がありすぎるせいでそれほど効いていないから……ではない。

ミナが感じる世界が速い次元にありすぎるのだ。実際にはエラスモテリウムオルフェノクの身体は強化されたミナの攻撃を一瞬のうちには何発と喰らって急激に上昇している。

しかしこれでは決定打にはならない。仮面ライダーファイズといえどこれというものがあつたのでミナはそれを選択し、乗り換える。

<sup>レディ</sup>ミッションメモリーを手早くショットからポインターへセット、始動したファイズポインターを脚に装着。

ファイズフォンのエンターボタンを押しつつ脚をエラスモテリウムオルフェノクに。

イクシードチャージという音がなるはずだったが千倍の世界では

流石に遅れてしまう。しかし、ファイズポインターは頭が上がったエラスモテリウムオルフェノクをしっかりと捕捉。

その赤い円錐型のフォトンのポインターは瞬時に幾つにも分裂。巨大な身体に合計八つものポインターが。

ファイズアクセルのカウントダウンはもう【3・7】と刻んでいた。ミナは畳み掛けるような決め技を仕掛ける。

「ヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

その中の一つに飛び込むミナ。自分の身体が粒子となってエラスモテリウムオルフェノクの身体を貫く。

しかしそれだけに留まらず貫いたところでまた再び貫いた先の近くにあるポインターの中に飛び込み、それを連続で七回繰り返す。

【3……2……1……】とファイズアクセルはカウントダウンする。ミナは気にせず続けるだけだったが。

現実世界なら八つの蹴りがエラスモテリウムオルフェノクの身体をほぼ同時にそれこそ0・1秒の誤差もないくらい連続で突き刺さった形になっているだろう。

ファイズ必殺のライダーキックの名は『クリムゾンスマッシュ』。これはその超高速版『アクセルクリムゾンスマッシュ』だ。

最後のポインターの役目を全うさせ、ミナは必殺のラッシュを終了。敵の背後に現れて膝を地面につける。





…!？」

エラスモテリウムオルフェノクは咆哮し暴れだす、クリムゾンス  
マツシユよりも強力となつてゐるキツクを連続かつ瞬間的に八回も  
身に受けたのに、爆発もしつかりとしたのに。

激情態、ならではというところか。怖いという気持ちも、生きた  
いという実直な気持ちもこのエラスモテリウムオルフェノクにはも  
うないのだ。

エラスモテリウムオルフェノクは騎手を弾いて落馬させようとする  
暴れ馬のように暴走しファイズの文字を掻き消した。

「キヤッツ …！」

馬鹿なと呆然とするミナにエラスモテリウムオルフェノクは襲い  
掛かり、角を使って上空へと突き飛ばす。

装甲部分に大きなダメージ。突進を受けてしまった左肩がミシッ  
ツと軋んだ。

ミナはすぐやられてしまった場所を手で押さえて転げ回りたいと  
思った。しかし、それは出来ない。ここは上空七十メートルほどの  
空の中だから。

この身動きの出来ない状態で攻撃されてしまったら ……………

「ギ、イ………ツッ!！」

胸と左腕の痛みに耐えてミナはディハーツールの操作を行う。何

故かブルブル腕が振るえて上手くいかなかったがそれを何とか選ぶ。

【ITEM TOOL・FAIZ BLASTER!!】

ミナの左手にファイズ専用強化ツール、ファイズブラスターが。左手でそれを掴み 持ち上げるだけで強烈な痛みが駆け抜けた

もう一度ファイズブラスターに打ち込む変身コード『555』と『Enter』。

それで【STANDING BY】となったファイズブラスターにポインターに入っていたミッシュンメモリーを戻したファイズフオンをセット。

【AWAKENING】

ファイズブラスターが完全に起動。仮面ライダーファイズはノーマルの状態から『転身』を果たし、最強の形態である仮面ライダーファイズブラスターフォームへとなった。

この姿のスペックはノーマルのファイズとは比べ物にはならず、全身を赤いフォトンブラッドが通っているので並みのオルフェノクならば触れることさえできない。

エラスモテリウムオルフェノクが上空のミナ、仮面ライダーファイズブラスターフォームを狙い頭部の毒針を射出しようとする。

空中にいるファイズは自由には動けず回避することは難しい。このままでは蜂の巣にされてしまう。

ミナは「う……ッッ!!」と早くしなければならぬプレッシャ

ーがかかって唸るとファイズブラスターを操作。

コードは『5246』と『決定(Enter)』。

【FAIZ BLASTER TAKE OFF】

電子音とともにファイズブラスターフォームの背部にあるユニットが展開。

フォトン・フィールド・フローターというユニットだ、今のファイズブラスターの操作によりそれが飛行状態に。

「ゴアッツ!!」

エラスモテリウムオルフェノクはやはりミナを狙って毒針を放ってきた。

しかし、その毒針はミナに迫りはしたが当たりはしなかった。飛行(TAKE OFF)状態にあるファイズは先までの自由に動けない状況を打開している。

空を自由に駆け巡るミナ。エラスモテリウムオルフェノクと距離を取りつつ、“絶対に影虎を巻き込まない位置”にまで誘導する。

誘導が終わるとミナはファイズブラスターにまたコードを入力、今度のコードは『5532Enter』。ファイズといえばというライダーキックの強化型。

【FAIZ POINTER EXCEED CHARGE】



テリウムオルフェノクの全身を震わせる。

何メートルもある質量が浮かび、彼自身がめちゃくちゃにした倒壊したビルに。

「ウオオオン……ウオオオアアン……」

倒れたまま古代のサイ“エラスモテリウム”のオルフェノクはもかくように脚を動かしながらサラサラと灰に帰す、悔やみの青い炎に焼かれて。

これがオルフェノクの死に様だった。死んで生き返った彼等は等しく生き物であるのに長くは生きられず生まれ変わっておきながら死ぬ運命にある。

「……ツツ!!」

ミナは胸の中を引っ掛かれたようになった。苦しい、これは苦しい罪だった。

オルフェノクがどういうものであるかミナは倒す直前、ファイズブラスターにコードを入力して倒そうとした直後に知った。

オルフェノクも人間だった、姿下達など問題ではなく彼等は間違いない人間だった。

それを倒して殺すこと。それは仕方がないとする事が出来たとしても許されてはならないことではないとミナは分かった。

だがその罪をどんな形でもいいから償ってみせようとは思わない、

人は生きるために一生懸命で自分を曲げないために努力を惜しまない。

背負いはする、重くて潰れそうだけどその分だけ自分は自分でいられる気がした。

「さあ……やり続け……ましようか」

ミナはうずくまった態勢からしっかりと背を伸ばして立ち上がる。

ミナの前方でオートバイハーダーが着地、影虎がちょっともたついたあとミナに手を振って走り出す。

どうあっても自分たちにはしっかりと生きていくだけしかできない。それで充分だとは言えないけれど、戦い続けなければ。

恐怖や罪悪感もあるが、守りたいものもあるし、愛したいものもあるのだから。

死ぬのが怖くない人間なんていない、死ぬときに後悔して悲しげに死んでいくのは絶対に嫌だから、一生懸命に人は生きている。

だからミナはこの戦う力をつかみ取った、仮面ライダーという力を、その名前を。

ミナはもう確かに、一人の仮面ライダーだった。





## HENSIN KAMEN RIDER (後書き)

……自分で書いて何だけど……チートすぎる……。

ほぼ無敵です、最強フォームにも自在になれるとなると。ただし、響鬼には身体を鍛えなきゃなれません。アギトも進化していくのはあくまでミナ本人の成長が鍵となります。

またオーズのコンボやアギト・バーニングなどといった暴走の危険性がある力も扱うときに同様に危険があります。

しかも、いつでも使えるわけでもありません。

システムは地球の巫女、生きたガイアメモリ製造機の発展版で、地球の本棚よりも遙か奥深くの“世界”と繋がっていることにより、情報の複製を可能にしている感じですね。

エターナルメモリは「T2以降には使えない」という他にダブルで使用する場合「使用は一体のみ」という制限をつけています。活躍するかと思いきや意外に使う機会は以後ありません。

エクストリームについて「二人の絆が強くないとなれないのでは？」と思えるのですが、これは二人は“同じミナ”であるので“そもそも一人”なので可能です。

ちょっと「うーん……」となりますが……それについては物語が進むにつれて解決させていくことにします。

今回は「変身するのが難しいライダー」を出しました(クウガ 体

内にアマダム必要、ダブル フィリップ役、ファイズ オルフエノ  
ク因子)

次は“リクリエイティブ・ミナ側”を出したいと思います。リクリエイティブ・ミナはちよつと仮面ライダーを愚弄しているといわれ  
ても仕方ないですかね……

仮面ライダーディハーツのシステムについての解説もあります、よろしく願います。

## HENSIN〜IMPERFECT〜（前書き）

今回は短いです。というか、反省しました。一気に書いたっていいことなんてないんだぞ、と。まあでも充分長いのか。

今回は影虎視点。エラスモテリウムオルフェノクを倒したあと、ミナたちの前に現れる男とは？

伏線を回収するのが大変です。影虎のアレもそうだし、クウガの変身もそうだし、RXを残したのも理由があるし。最後にファイズブラスターフォームになったのもちよつとした意図がありました。

## H E N S I N 〱 I M P E R F E C T 〱

ミナがギリシヤ文字の『 』をイメージさせる丸い模様が特徴的な仮面ライダーで巨大なサイの怪物を倒す。

もの凄い力だ、何十トンとあろうキックがサイの怪物を仕留め、こちらも何トンもあるだろう質量を吹き飛ばしてしまった。

本当に凄い力だった、仮面ライダーの力というものは。

敵をすべて倒してみせたミナに影虎は近づく。奮闘を褒めたたえ元氣付けようとして笑顔で手を振りながら。

近寄るとマスクで見えないがミナは落ち込んでいる風だった。灰になったサイの怪物のいる方を見て、勝手な受け取りだが悲しそうな目をしている。

「ミナ、どうかした？」

影虎は不安になって聞く。ミナに何かあるのなら自分がなんとかしないといけないから。

「どうもしてないわ、大丈夫よ私なら」

ミナは　これも推察に過ぎないのだが　笑って、何でもないと手を振る。

なんとなく、「私なら」という言葉に引っ掛かりを感じる影虎だったが、ミナが立ち上がれているということは決着はついているよう

だった。

影虎も笑って「ならいいんだ」と返した。ただし念のため「無茶はしないでくれよ」とミナに言うておく。

ミナは「もう、分かってるわよ」と強気な返事をした。

戦いが一旦終わると辺りはやけに静かになっていた。あのサイの怪物が暴れ回っていたせいで怪人たちはここに寄り付けずにいたのかも知れない。

小さくコツコツといくのはもついいだろう。そろそろでっかい火花がみたいところだ。

「あとは……」

ミナは空を見上げる。

高層ビルの屋上から見られたクライシス要塞はもうかなり遠くまで舵をきっているのに相も変わらず巨大に見えていた。

戦闘が落ち着いたら次は最初に標的と定めたクライシス帝国の番だ。

多分、ミナの今の姿はリクリエイティブ・ミナとか言う「もつひとりのミナ」が言っていた仮面ライダーの一人。

“ファイズブラスターフォーム” “ブレイド・ギャレンジャックフォーム” “カブトハイパーフォーム” “キバ飛翔態” “オーズスタジアムコンボ”。このなかの内の一つというならファイズブラスターフォームなのだろう。

今のミナならジェット噴射で空を飛びクライシス要塞まで一飛びだ。影虎もついていこうと意を決した。

あの力なら百パーセント勝てるという確証がなくなつて、希望は確かに存在する。希望があるなら賭けてみてもいい、影虎だつてしようもない理由で人々を殺す怪人たちを許せないのだ。

(いけるよな、ミナなら……)

そう思つてミナを見ると、ミナも影虎と同じようだった。

しかし、ミナは苦しそうでもあつた。さつきサイの怪物に跳ね飛ばされた怪我があるのかも知れなかつた。ちよつと息切れもあり、頭が痛むのか軽く押さえている。

「行ける、か？」

本当は「それでも行きたいと思うか？」と聞く場面であつたが影虎はミナに気をきかせてそう言う。

「あ……………大丈夫大丈夫。ちよつと頭が痛むだけ、それほどダメージはないわ」

ミナは肩をほぐすように上下に動かしグルグル回した。

先程サイの怪物の攻撃をもろに喰らつてしまったのだが、仮面ライダーという鎧はダメージを軽症に押さえてくれていたのだろう。

ミナの澁刺とした動きは言外にまだまだ行ける、行きたいと言って

いた。

影虎ははにかみ笑いをしてクライシス要塞を見る。クライシス要塞は空を飛び、ある方向に向かっていった。あれから10分も経っていないのにもうかなり遠くだ。

そう言えば「ブラックRX」がどうこうと言っていたのを影虎は思い出す。そして、クライシス要塞が飛んでいく方向を見て……影虎はある不安を感じた。

「おい、ブラックRXって何なんだ？」

「へ？ なんなの急に……私に聞かれても知らないし、そんないきなり入ってはこないわよ……」

「ミナじゃねえって、“もうひとり”の方だよ」

影虎は自分の右腕の手首をトントンと叩いて指差す。

ミナはああと理解して腕に付けられているディハーツールに「どういうことなの？」と聞く。返事は案外すぐに帰ってきた。

【仮面ライダーブラックRXとは南光太郎が変身するライダーでクライシス帝国に仮面ライダーブラックの変身機構を破壊され宇宙空間に投げ出された時、太陽のエネルギーを体内の神秘の石キングストーンが吸収した結果生まれたライダーです。その力は十二人ライダーの中でも特に強く、最強に最も近いと言われるライダーです】

なるほど、とミナと影虎はブラックRXの誕生のいきさつとよくわからないがとにかく強いというのは知った。

だが、影虎が感じた不安はもつと別のところにあるような気がした。そう、聞くべき質問は生い立ちやスペック、特殊能力などではなく“今”である。

影虎は「今、その仮面ライダーはどこにいる」とリクリエイティブ・ミナに聞く。これで影虎が頭の中で浮かばせている場所を言われたなら最悪だ。

ミナも気がついたらしい。「あ……！！」と口元に手をやる。

【仮面ライダーブラックRXはこの世界に残された数少ない仮面ライダーの一人です。オリジナルと影虎様がいたキャッスルドランの警護に回っていたのを最後に確認しています】

影虎とミナは悪い予感的中して思わず眉間にシワが入ってしまう。なんとも、気が悪くなるふざけたシナリオだった。

クライシス帝国の目的はブラックRXのみで、ミナには目もくれなかった。なんでも皇帝陛下とやらがブラックRXの屍が見たいと言ったのだそうだ。

変なロボットが言うところによると、「ブラックRXはここから十七キロ離れた山中にいる」らしい。

その場所とはさつきまで、ほんの数十分前まで影虎たちがいた赫塚音也邸キャッスルドランがいる場所だった。

確かにキャッスルドランを守っていた仮面ライダーの中にはシヨウ



リョウバツタをモチーフにしたような黒い仮面ライダーがいた。戦闘力もあの中では高かったのできつとあれが仮面ライダーブラックRX。

あのロボットの分析は正しいのだろう。

しかし、まずい。あのキャットスルドランの中にはまだ何人もの人々がいる。ブラックRXを始めとした仮面ライダーたちもいるが、その中にはこれ以上戦ってはマズイという負荷があるライダーもいた。目標はブラックRXただ一人というのは本当のようで、もう街を不用意に破壊したりはしていなかった。だが、クライシス要塞をキャットスルドランのあるところまで行かせるわけにはいかなかった。

今すぐ行かなければ、止めなければ、間に合わない

……

「ミナ!!」

影虎はミナの名前を叫んで急かす。ミナは慌てて、トランクボックス型のツールを操作しようとした。

“操作しようとした”。

だが、その指が最初の『5』を押す前にピタリと止めてしまった。

異変。ミナに起こったことではなくミナの指に起こったことでもない。だが、異変が起こり、ミナは入力を中断した。

異変が起こったのは巨大なクライシス要塞の方だった。エンジントラブル、とかでもない様子の異変だった。

クライシス要塞の姿が“霞む”。文字通りに、光がおかしく屈折してクライシス要塞の姿がぶれて見えた。

「は……………!？」

そして、その“ブレ”は徐々に　　といっても加速度的に急激に大きくなっていつてしまう。

やがて、許容範囲を超えるところまで行ったらしい。

クライシス要塞の巨大さを上回るような大規模のオーロラがクライシス要塞の前方に現れる。まるでクライシス帝国が作り出したかのようなタイミングだった。

しかも、そのオーロラはたびたび目にしてきた不思議なオーロラとはどこか違い、黄金ではなく、灰色に近いような“銀のオーロラ”だった。

クライシス要塞はその銀のオーロラに突入する。我慢が出来ずに飛び込んだ　……………それがピッタリなようだった。

銀のオーロラに突入していったクライシス要塞は消えていく。この世界からいなくなっていく。

クライシス要塞が全て銀のオーロラの向こう側にいくと今度は銀のオーロラ自体がスウとバツクして消えてしまった。

「き、消えた　……………だと!?　あんな馬鹿みたいデカイ要塞が!？」

影虎は“黄金のオーロラ”から怪人が出入りするのを見ていた。立花老人の話に合わせて考えるとあの“オーロラ”は別の世界とこの世界を繋いでいるようだった。

あの銀のオーロラも同じ物なのだろう。両者の差というのは全くわからないがそれで終わらせるよりほかはなかった。

しかし、何故クライシス要塞は消えたのか。ブラックRXを倒すためだけにこの世界にやってきたという彼等が。

「耐えられなくなったのですよ、完全さに。不完全であるが故……ねエエ」

悩んだ影虎とミナの両者に解答がポンと出される。

影虎はもうひとりのミナ、リクリエイティブ・ミナの言葉だと思った。解説や分析、または情報提供はこのところ彼女の役割だったから。

しかし、違う。この声は男性の物だった。それにリクリエイティブ・ミナは現在デイハーツールの中だったのに、これは現実の声だった。

ミナたちの前方、サイの怪物の出した灰を踏みにじる位置に『人間』が一人立っている。

髪は黒で角縁の眼鏡をつけ、その眼鏡が隠れそうなくらい陰気な感じに前髪を伸ばしている。そのせいで口元くらいしか見ることができなかった。

服装は魔法使いのローブのような黒い服に、古代文字とおもわしき文字が刻まれたマフラーをいくつも肩から垂らしているというもの。生き残った人間ではなさそうだ、怪人たちに襲われるかもしれないのにこんなに堂々としていられるはずがない。

だとすると、残るは“別の世界から来た人間”だ。

「初めまして、赫塚ミナ・仮面ライダーディハーツ。おっと、今はファイズのブラスターになっているようですねエエ」

語尾がやけにネットリとしたしゃべり方だ。相手にこれでもかといくらい嫌悪感を持たせてくるような陰湿感がある。

影虎は腹が立った、気持ち悪い容姿と釈にくる喋り方、そしてミナをなめ回すような下劣な目線が一番気に入らない。

あと影虎は眼中にないという無視シカトの態度がなお腹立たしさを増大させていた。

一生分の時間をかけたって相手が変わらない限り絶対友達にはならないタイプだ。

しかし男の台詞で確定した、この男は普通じゃない。仮面ライダーに関係した人物ならミナのことを知っていたとしても不思議じゃないがそれはどう感じて見ても無理だった。

「あな……………」

「ミナ、お前が話してやる価値なんてあいつにはねえよ」

影虎はミナの口を押さえる。ミナがあの男と話してしまったらミナが汚されてしまうような気がしたのだ。

影虎は自分がミナの変わりになって、あの男を突き詰めることにする。

「よう、テメエ。えらく色々知っていそうだな」

「ええ、知っていますよ。凡人の貴方よりずっとネエ、春梅影虎ア君」

影虎は「舐めきった奴だ」と吐き捨てる。てっきり自分のことを評せず知らないでいると思っていたが、自分のことまで知っているというのはちょっと意外だった。しかし、今はどうでもいい。

「耐えられなくなった……ってどういうことだ？」

「言葉通りの意味ですよお、まあ貴方は言葉も知らないし“調べられない”でしょうが」

「あ？」

「ミラーワールドというものがあるんですよ。多分どちらかは見たでしょうが」

「ミラー……ワールド……」

ミナにはなかったが影虎には思い当たるものがあった、ものがあったというよりは“その光景があった”というべきか。

その言い回しを使うしかない。なにしろそれらに“リアルな質量”があるとは思えなかったし、ありえるはずがない存在であったのだ。鏡の向こう側。普通なら鏡なんて光を反射するだけの物質だ、なにも変なところはない。だが、彼等はそれをもう一つの世界として成り立たせ鏡を繋ぐ境界として使い人を襲っていた。

鏡の中の世界、簡単な英訳をすると「ミラーワールド」。

「それを使って説明しようと思いますかねエエ。ミラーワールドと現実世界、この二つの世界は決して交わることがない。異なる世界に踏み込んだ者は世界に適応できず消えてしまうのですよ」

鏡の中の世界の住民、それは様々な空想を抱いたモンスターだった。彼等は人間を次々に鏡の中に引きずり込んでいた。

そしてその引きずり込まれた人間は彼等・ミラーモンスターの手を逃れられたとしても世界に耐えられず絶叫して即座に消えてしまう。行方をくまらますことを蒸発というが、まさにそんな風に。

「私たちはねええ、まだまだ不完全なのですよ。上つてえも上つてえも上つてえも上つてえも、完全には程遠い……。不完全な私たちは完全に近いこの世界には長く居座れないのですようお」

男はわざと人を馬鹿にするように泣き真似をして、それから笑った。

「色々してみたんですよ？ 完ッ全になるための努力をねええ。私たちと同じような不完全な世界を呼び寄せ結合させたりいいい…

…、ああ……そうそうそうそうそうそうそう……」

男はクツクツクツと笑い、腹を痛めたように抱えながら身をくねり、口角を引き上げ歯を見せてこちらを横目で見てきた。

「この世界の仮面ライダーの記憶も少々拝借いたしましたよ。世界の融合の“主導権”を我々が握るためにねえ」

「なに!？」

この世界は九年前から急速にある記憶を奪われてしまっている。記憶を失った者はいかに沢山の人が覚えていてもその姿や働きを失ってしまう。

失われていつているのは“仮面ライダーの記憶”。四十年以上前から悪と戦い続けているという偉大な戦士たちに関わる大事な記憶だ。記憶を失われていつているせいで、残っている仮面ライダーの数は残り少ない。ほとんどの仮面ライダーはもうその姿になることが出来なくなってしまうのだ。

その姿に誇りを持つているライダーだったはずだ、その力で人を助けることになによりも充実感を持っていたライダーだったはずだ。

それなのに。

「お前たちかあああああああああッッ!！」

そう吠えたのはミナ。持っているトランクボックス型のツールに

103Enter』を入力する。

【BLASTER MODE】

ツールをガバツと開いて巨大な銃器のようなものが完成する。ミナはそれを構えて撃つ。

「ハアツツ!!」

銃口部分から赤いエネルギーの固まりが弾として発射され、謎の男に向かった。

「危ないですねえ、もう」

謎の男は黒いローブのような服と肩から垂らした帯をはためかせ、青い炎球を手の平から生み出して対抗。

青い炎球と赤いエネルギー弾は空中で激突して相殺、お互いに打ち消し合う。

「く、オルフェノク……!?!」

ミナがそう推察する。オルフェノクという存在、それがあの男の正体であるらしい。

そう言えば、キャットスルドランの中から見た仮面ライダーとイマジン・アンデッドの戦いの中で“カイに似た少年”と立花老人が呼ぶ『人間』が同じような青い炎を操っていたのを影虎は思い出す。

あの人間もオルフェノクという存在なのか。



「まあ、一応はその通りです、一応はね」

「一応……?」

「それより、ひどいじゃないですか。いきなり撃ってくることはないと思いますがねえ、下手したら死んでしまっじゃありませんかあ」

そうは見えなかった。あの男はそつとやちよつとでは殺すことなど出来ない。怪人たちと違って人間の姿を取ってはいるものの、それが伝わった。

もしミナの攻撃を無抵抗で受けたとしても、それでも倒すことは出来ず有効打にもなっていないかったろう。

「うるさいッッ!! なによ、被害者ぶって!! 貴方たちがそんなことしたせいでどれだけ多くの人が……ッッ!!」

「心外ですねえ、私たちはどちらかと言えば“憐れな人々”なのですよ? 生まれた時から不完全で、完全ではなくて。そうですね、ちょうど“オルフェノク”と同じような……悲しい存在なのですよ?」

「……………ッッ!! そ、それは……………ッッ!!」

「仮面ライダーは正義の味方………そうですねえ? ならば憐れな私たちを救うためにそれくらいの代償………払ってくれて当然ですよね?」

男の言葉にミナは揺れ、葛藤していた。鵜呑みにしかかっている、完全に相手のペースに乗せられてしまっている。

ミナが心を揺らすのも分かる。確かに不完全な世界で生まれた人々は不憫かも知れない。偽りばかりがついてくるからつぼの世界なんて嫌だ。

完全を望んでの略奪。脱却への仕方ない背徳。完全を求めての歩み。男の話す内容からはそう取れてしまう。

「あ、貴方……いえ貴方たち一体何者なの……!？」

影虎はいけないと思った。なんとなくこれも直感で、この話の流れはマズイような気がした。今戦えているミナにとってはこれ以上ない禁句が出てくる気がしたのだ。

だから影虎は無理矢理に「あいつの言うことに耳を傾けるな」とミナに言い、彼らの正体に関わる話を中断させる。

男は残念がって悔しがる動作をした。

「凡人の癖に私たちの会話に水を差しますか」

「水を差すつてのは良い雰囲気をぶち壊すつて意味だ。お前とミナのどこの良い雰囲気だ、野獣ならともかく美人にウジムシは似合わないぜ」

影虎は逃げることにした。あの男の言うことは嘘ではないだろうし、やっている悪事ではあるだろうが人を憐れみさせるくらいの事情もしっかりある。

自分勝手とは言い難い、世界を高く持ち上げるための行動。

それを横から攻めて鼻で笑ったりなどしたらこちらが悪だ。しかし真っ向から立ち塞がることも出来ない。

説教なんて出来る立場にいるとは思えない。したいとは思わない、なぜなら自分たちは彼らのことを何も知らないから。

この世界の情報を盗み、世界から仮面ライダーたちを消してしまっている。

これはほんの上辺の部分だ、実際はもともとも深い。不完全から完全にまで上りつめたいというのもまだまだ上辺の部分だろう。

上辺だけ見て、それに至るまでの経緯や感情も知らずただただ否定する。そんなものに正義などは宿らない。

説教なんて出来る義理じゃないしまだ出来る権利はない。出来るのはせいぜい衝突しあうだけだった。

「どこに行くんです？ まだまだ話は終わっていませんよ」

「話は分かった。お前らはまだ不完全で、怪物や怪人たちはもうここにはいられない………だろ？」

さつきから妙に静か過ぎると影虎は思っていたが、理由が分かった。

この世界を襲ってきた怪人たちはクライシス要塞のように不完全であるが故、完全なこの世界に居られなくなってしまったのだ。

きっと怪人たちは帰りの銀のオーロラを使って元の世界に帰ってしまった。

真つ向から勝負をかけて全部倒してやるというミナの闘志に反した結果になってしまったが仕方がない。

もう、戦いは終わったのだ。

「いえ、まだ怪物は残っていますよ。それもずっと前からどびっきりのがねええ」

「なに……!？」

ずっと前からいた怪物。ファイズブラスターの攻撃を人間の姿でらくらくと凌いでしまった男がいう“どびっきり”。

だが、立花老人の話では確かに仮面ライダーたちは消えてしまったが、仮面ライダーたちが戦っていた悪も同時に消えたのだそうだ。

いや、あの男の話では男のいた世界は怪人たちの世界でこの世界の情報を奪っていた。なら怪人たちの情報を優先的に奪うだろう。

それなのに、この世界にはとびっきりの怪物が残っているという。

影虎はミナを見た。多分、ミナはその“どびっきりの怪人”に標的を変えるだろう。

世界にはもう仮面ライダーは少ないし残っているライダーもいずれ奪われていく。なら、ミナはそれと戦ってから旅立たなければなら

ない。

「……ッッ！　　ッッ！　　ううあ……ッッ！　　……くう……ッッ！　　」

だが、影虎の目に映ったミナはマスクで見えないのだが、“明らか”がついてしまう感じに傷ついたようだった。

いや　　……傷ついたではなく　　……気がついたという  
ような。

「み、ミナ　　………？」

影虎はミナに触れようとする　　………が、駄目だ。直感が『この仮面ライダーの赤い身体に触れてはならない』と言っていた。

こんな時になにをと思った影虎だったが、この赤い身体は危険だというのは知れた。さつきからミナが一見分からないくらい自然に影虎との接触を避けているからだ。

くそ、と影虎はなんで触れなきゃならない時なのに触れられないのかと激怒して悪態つく。

触れられないが、影虎は「大丈夫か」と声をかけるのを途切れさせない。

「大丈夫、貴方が教えてくれたでしょう？　私は私だから……ッッ！　　」

ミナはそう言った。恐怖は増大したようだが、かるうじて負けては

いなかった。

そして……また頭を押さえている。

「知った……いえ“入ってきました”か？　そうですねええ、“世界”とこれだけリンクして察せられないほど……馬鹿じゃありませんよねええ……」

男は今度は影虎ではなくミナに話し掛けている風だった。なんのとどか影虎には分からなかったが。

「影虎くん、怪物は誰なのか教えてあげましようかねええ。ヒントは貴方のすぐそばです」

それはもう答えのようなものだった。この場にはリクリエイティブ・ミナを除いて三人しかいない。

影虎ではないし、あの男でもない。

ミナしか該当する者はいなかった。

## HENSIN〜IMPERFECT〜（後書き）

一度脳内シミュレーションしてみたのですが、今のところ放送なら四話目くらいですね。

デイハーツはチートですが、敵はもつとチートです。大シヨッカーなどは出ません、だってそんなの単純過ぎるでしょう？

シヨッカーとかバダンとか財団Xとか、そんなん出してりやいってもんじゃないっしょ。

夢は……スタッフさんの誰かの目に留まり「すごいなコレ」と言ってもらふこと……。そうだったら、もう死んでもいい……。「よく考えられてるね」でもいいや。

思うんですが、面白いと言われるよりすごいなと言われた方が何倍もいいですよね。

だから、すごいなコレと言ってもらえるように頑張っていきたいと思えます。

## HENSIN MONSTER (前書き)

メガレンジャー、キターッ

ジェラシット馬鹿話とかじゃなくて、マジに来た!! タイトルは『  
どうして? 俺たち高校生』。メガレンジャーっぽいタイトルだ!!  
メガシルバー求む~~~~~……

よかった……バスコに奪われる形でなかったらと思つと夜も眠れず  
……毎日8時間“しか”寝てないよ!!

で、本編。すいません、デイハーツシステムの解説は入りませんでした。  
次回、次次回になると思います。



## HENSIN MONSTER

ミナは仮面ライダーだ。

単に強いだけじゃない、人間らしさの全てを持った戦士。

いっぱい悩んで葛藤して、超えるのが難しいまたは超えられるわけがないような障害や大きな壁にぶち当たって、死ぬかもしれないという恐怖にもぶち当たって。

それでも自分のやりたいように身体が命じる儘ままに動き、希望を持って全てをかけて自分が定めた悪と戦う。

それが、仮面ライダーだ。

ミナは確かにからっぽだった、他人のためにしか動くことのない空恐ろしい存在だった。きつと何一つとして実践できてなかったし、それを邪魔なものとして排斥しようとしていた節も見られる。

自分のためじゃない欲望なんておかしい。誰かを愛しているからこそ誰かに愛されたいという気持ちが生えるものなのに、彼女は前者の行程をすつ飛ばしてきたのだ。

そんな彼女には色はなかった。個人を示す感情の形である色がなかった。

そんな人間でありながら人間ではなかった彼女は確かに怪物と言えるかも知れない。いや、今の彼女にしてみれば完全に怪物だった。

だが、今の彼女は自分に足りなかった全てを手に入れようとしてもがいている。先に両親を助けにいきたい気持ちはあるしその方が賢明であるというのもわかっている。

彼女は今、全てを動員して恐怖や理屈に立ち向かっている。

間違いなく彼女はもう、仮面ライダーだ。

「なのに！！ てめえが知った口を叩くんじゃねえよ、ウジムシ野郎オツツ！！」

影虎はミナをいたわりながら目の前の正体不明の男を怒鳴りつけた。

男は威圧された様子もなく、ただ影虎を見ていた。それは何か失笑を呼ぶようなものを見るような目。

影虎は余計腹が立った。今すぐにあの男を殴り掛かりにいきたいという欲求が彼の中で高まっていく。

だが、彼女を悪く言うあの男の口を黙らせることがミナにとって一番いいことか、と考えて拳をしまう。

影虎がミナに対して出来ること、それは見守ってあげることだと本人は考えた。

影虎は何も好き好んであんな男の所までいくことはない。ここにいてミナを支えることが、彼女にとっても影虎にとってもベストだった。

今、離れてしまって彼女が傷ついてしまったらそれは一番嫌なこと

だから。

「知った口……とはいいますが、影虎アくんは一体彼女についてどれだけ知っていると？ 貴方と彼女は今日初めて出会ったはずなんですけどねえ？」

言い返せはしない。確かに彼女とは一切の面識がなく、三時間くらい前、学校で襲われているのを助けたのが初めての出会いだった。

危機的状況下だからか、もうほとんどの時間、それこそ幼い頃からずっとの仲であると錯覚してしまうが、実のところはまだ知り合っていないと経っていないのだ。

悔しいが、そこはあの男のいう通りだと影虎も認める。こればかりは揺るがしようなない事実だった。

「それで、俺がミナの何を知らないって？」

「そうですね、“全てを”ですかねえ。貴方、仮面ライダー全員になれるってどういふことかわかります？」

「知らん、カッチョイイってことでいいんじゃないのか？」

そういえば、ディハーツになる前に“もう一人のミナ”がある特定の仮面ライダーになるためには資質がなければならぬと言っていた。

きつと、ミナにまつわる話というのはそれらに関係しているのだから。

だが、この男の質問に馬鹿丁寧に答えるのも気に障ることだったので、影虎は男の質問にそう反発しておく。

「チツチツチイ……。ほらやっぱりなにもわかっていないじゃありませんか」

そう馬鹿にしたように指を振る謎の男だったが、影虎は「舌ならしさえ気持ちの悪い奴だ」と考えるに留まる。

馬鹿にしてくれて何なのだが、実はなんとなくは察せられているのだと頭で笑っておく。

「全ての仮面ライダーになれるというのはですねえ、つまり全ての仮面ライダーになれるだけの資質を持っているということなのですよおう。それはどれだけ稀少なことなのかか解りますう？」

それは聞いていた。どれか一つだけでもかなり稀少なのにそれら全てが揃うことなど普通有り得ない、ともう一人のミナは説明してくれた。

普通は有り得ない、だがそれがどうした。例えどれだけ少ない可能性だったとしても裏を返せば可能性は0じゃない。

ミナがいてミナは全ての仮面ライダーを継ぐことが出来るというのは事実。有り得ているのだから仮面ライダーに関係した何人もの人々はミナに希望をかけたのだった。

実際、ミナはディハーツ以外にの三人の仮面ライダーに変身することができている。

仮面ライダーは正義の味方、ちょっと古臭い言い方だが彼らの正義を志す気持ちが世界にミナという奇跡を生み出したのだ。

そう信じて何が悪い。

仮面ライダーは正義の味方、もう立派に仮面ライダーの称号を継いでみせているミナも正義の味方だ。怪物などでは決していない。

「分かっていますねえ。仮面ライダーはかならずしも正義の味方であったわけではないんですよ。仮面ライダーのライダーシステムの中には“怪人のために作ったライダーシステム”というものもあるんですよええ」

「なに……ツツ!？」

「例えばですねえ、今ミナさんが変身している仮面ライダー、仮面ライダーファイズも元はと言えば敵怪人が自らの王の護身用として開発したものですよねええ」

影虎はほんのちょっと動揺。

仮面ライダーは……正義の味方だとは限らないと言う。謎の男はさも当然のように言った、それは影虎たちを動揺させようとしてとかではなく、偽りも感じられない。

本当のことだった。仮面ライダーの中にもいたのだ、悪しき心を持ったライダーが。

影虎が見たキャッスルドランに集まった仮面ライダーたちは皆、キャッスルドランの中にいる人々を助けるために戦ってくれていた。

あの場にいた仮面ライダーたちは間違いなく正義の味方だった。

だが、仮面ライダーの数は百を超えるのだという。影虎が見た仮面ライダーは十三人、全体の一分にも満たないのだ。

だが、それはすぐに振り切ることが出来た。人というのは本当に色々な人種がいる。

力を得たらそれを善行に生かそうとする人もいれば、悪行に生かそうとする人も出てくる。それは当然なことだ。

力の良し悪しなんて結局は使い手によっていくらでも変わるものなのだ。その点ミナは心配いらぬ、影虎はミナをずっと見守っていてくれているし、ミナの心は真つすぐ前を向いている。

「違うんですよ、使い手の精神について言うつもりはありませんよおう。だいたい、そんなものに意味などありませんね。私がいいっているのはですねえ、彼女の存在自体のこと何ですよねええ。」

「存在……自体……!?!」

「はぁいい。ファイズ、カイザ、デルタ、サイガ、オーガ。この五本のベルト……いえ仮面ライダーはある怪人の王を守る、もしくは王自らのために作られたんですよねええ。つまりは怪人のための力アイジンによる仮面ライダーというわけですねえ……」

「……………」

いやな予感がする、影虎の直感がそう警鐘をならしていた。残念なことに彼の直感というのは馬鹿に出来ないもので、よく当たる。

怪人“による”仮面ライダー。怪人のための仮面ライダー。それは、つまり。

「その怪人はオルフェノクといいまあしてエえ、そのベルトは彼ら・オルフェノクにしか使えないんですよねええ」

やはりそうきたか、と影虎は苦虫をかみつぶしたような顔をつくった。

直前の謎の男の話よりずっと前、もう一人のミナの話を知っていた時から……いいや、キャットスルドランでミナの祖父と父親、そしてミナがファンガイアという怪人であると聞かされていた時からずっと秘めていた悪い予感、それが的中してしまった。

ファイズという仮面ライダーは特別で、オルフェノクという怪人にしか使えない仕様になっている。

なのに、ミナは何の支障もなく自由自在にその仮面ライダーファイズの力を使いこなすことができていた。

それが示すところの意味とは。ミナは人間ではなくオルフェノクという怪人である、しかも同時にファンガイアという別の種類の怪人であるのだ。

「他にもたあくさんです。オルフェノクなどはまだまだ優しい方で、絶望的なのはカリスなどですね。アンデッドとの融合係数が高すぎる余り、肉体がジョーカー化しているということになるんですからねええ」

「……………」

よく分からない、影虎は仮面ライダーのことにについて何も知らないと言っているのだから。

だが、良いことではないということくらいは分かる。百人の仮面ライダーに変身できるということできっと、この他にもあるのだろう。もしかして、ファンガイアも何かの仮面ライダーへの変身への通行手形なのではないか。ファンガイアであることにより、仮面ライダーの変身資質がクリアーされているのではないか。

「私から言わせれば、なんと愛おしい存在であるかというくらいですなええ。私たちも“核束”<sup>かくつか</sup>となるために挑んだ道ですがあ……………“ナンバー01”ですら達成出来なかったことなのですよ？ 怪物と言わずになんと言いましょうかツツ！！」

影虎は「黙れ！！」と怒鳴ることはしなかった。知りたくはなかったが知らなかったら始まらない気がするし、知らなくて済むことではなくミナはもう察してしまっていて手遅れだ。

それに、それは真実に違いないだろう、影虎は否定する気にはならなかった。ついに知る時が来たかというくらいだった。

彼女が傷ついてしまうからミナのことを悪く言うあの謎の男を黙らせる、という選択肢はやはりない。あの男にそこまで構ってやる価値などないし、それがミナのためになると考えるのは大きな過ちだ。

ミナは遅かれ早かれその事実を知り、悩まなければならなかった。それを邪魔することは正義ではない、ただの我が儘な自己満足だ。



「……よな……やっぱり、よお……」

影虎はミナの事実をゆっくりと受け止めながら、もう一つの可能性を思慮していた。

ミナは「普通の人間」じゃない。普通ではないと言えはもう一つあった。

全ての仮面ライダーへの変身資質を備えた人間など“普通”有り得ないというものだ。

普通じゃない、偶然に偶然が重なっておきたことではない。全ては必然であつたとしたら。

「影虎アくん、一つ聞いておきたいのですが……世界の仮面ライダーの情報が消えはじめたのは……九年前。確か最初は……“神の力”でしたねええ、カスのような力は残しておきましたが、この世界からアギトは消えたはずです」

「わりいな、よく知らねえんだよ」

「おやおやおやあ……残念残念残念……。貴方のような無知な凡人ではなく立花藤兵衛あたりに聞くべきでしたか。小沢澄子もそのことは把握しているでしょうかねええ」

「てめえはいちいち、そんなこといわねえと話せられねえのかよ？」

「失礼、育ちが悪いものでしてねええ？　そして、ディハーツの前身となるハーツシステムの開発が始められたのも九年前……。ハ―

ツシステムは赫塚ミナを使って全ての仮面ライダーに変身できるデ  
ィハーツ計画にすぐさま発展。ここで……違和感が起こりませんか  
？」

違和感。それはすなわち普通ならば考えずらいこと。

謎の男の説明で「え？」と口に出してしまう箇所が一つある。

九年と九年だ。世界から仮面ライダーの情報が消えてしまったのは  
九年前。ただし、仮面ライダー全体はそれに気がつくのにしばらく  
時間がかかったに違いない。

デンライナーのオーナーによれば仮面ライダーたちが世界の異常に  
気がついたのはデンライナーで時を渡ることが出来なくなったこと  
から気がついたのだそうだ。

だが、全ての仮面ライダーたちに何か異常がないか聞いて回るのは  
大変だったに違いない。確かな確証が得られるのは長くて一年ほど  
かかる。

そして……ディハーツもといハーツシステムが作られ始めたのも九  
年前。

少し、タイムラグが発生してもおかしくない。いや、発生していな  
ければおかしい。ピッタリだなんておかしすぎる。

それが違和感だった。

仮面ライダーの情報が世界から消え始めているというのを調べ確証  
つけるのはしばらく時間がかかる。

何が起きているか真かではない段階から仮面ライダーを甦らせるハーツシステムを開発するのは……気が早いとかそんなレベルじゃない。

まるで事前にまたは直後に何が起きているのかを予測していたかのようだった。

デンライナーで時を超えることが出来なくなった、それだけではそんな予測はできないはずだ。もっと確かな“兆候”の登場がなければ。

更に言うと。

全ての仮面ライダーに変身できる存在というのはものすごく稀少な存在であるというのは何度も取り上げた通りだ。

そんな存在をすぐさま見つけだすことが可能なのか？

見つけだされるものなのか。一年以内に見つけだせるものなのか、もっと言えば九年以内で見つけだすことが可能であるのかどうか。

きっと、無理だ。この世界の人口は60億人超。その一人一人を調べあげることなんて出来ないし、実践しようとする者もない。

なら、何故見つけた。それもすぐさまに。

そして ……極みつけはミナの誕生日と幾つもの虚構世界が生み出され、世界から仮面ライダーの情報が奪われ始めたXデー。

『二月十二日』だ。

それで完成する、ある仮説。

“ミナの誕生とともに世界に仮面ライダーが必要とされた”という説だった。彼女の誕生が仮面ライダーたちに絶望と打開するための希望を示したのだ。

ミナはそのため生まれてきた。最初から世界を救うという目的のために。

ミナが全ての仮面ライダーに変身できるのも当然のことだ。何しろ、世界からそういう風に作られたのだから。

影虎は勘が良すぎる。謎の男が話す前に真相に気づき、「ああ、そういうことかくそつたれ」と妙に納得してしまった。

最初、彼女は個性がなく“ただ優しい”という人間だった。それはこれからの旅のためだ、全てを繋げなければならぬ彼女は無色である方が都合がよかった。

全ての人に愛されるため順応するため、なんの不自由なく交友でき



おそらくプラスターフォームの身体に強いエネルギーが巡っている。これに触れたら敵味方関係がなくサイの怪物のように灰になってしまふ。

ならばどうすれば良いだろう。直接は触れないが手袋をしめてからならばいけるだろうか。

そう考えて影虎はバイク用の革のグローブに手を伸ばす。

だが、

(優しさを与えるだけが……………ミナに出来ることなのかよ?)

影虎の手はピタッと止まる。考え直して、思い出して。

ミナはもう、大丈夫だよ。

そうだ、そうだった。と影虎は今ミナはなんのために仮面ライダーになっているかを思い出す。思い出して、影虎はミナから一歩下がって彼女が戦うべき悪を見る。

今彼女は戦うために

仮面ライダーになっている。仮面ライダーとなって沢山のものと戦っている。

その戦うものというのはあまりに多い。怪人たちもそうだし、死ぬかもしれないという底冷えする恐怖もそうだし、両親を探しにいった方が断然良いという理性もそうだ。

今、彼女はなんのために戦っているのか。

人を助けるため、それは一つの理由。それに繋がる事が出来れば僥倖だ。これ以上この街を破壊させたくないから、それも一つの理由。この街で暮らしていたミナは沢山の思い出があるだろうから。

理由なんていくらでもある。その中で一番強いであろうこと、それは決別だった。

今のミナは昔のミナとは違う、怒りで行動することも出来るし、その怒りは『愛』の印、『人間』の印。

大きくてもっともらしい理屈があるとしても彼女は時に感情でそれを揜伏せ屈服させる。

影虎は前に出る。

仮面ライダーファイズブラスターフォームになっているミナに、今は触れることが出来ない。影虎はミナに触れ合えない。

だが、支えるというのは優しい言葉をかけたり触れ合ったりすることだけを指す言葉じゃない。

この触れることが出来ないという状況が影虎にミナにとって一番の支えとなる行動を導きさせた。

『ついて来いよ』

これが影虎のもので、

『ついて来なさい』

これがミナのも物だった。



HENSIN MONSTER (後書き)

影虎、男らしいねえ……。プラスターフォームを最後に持ってきたのは『ミナはもう大丈夫』というシーンをやりたかったからなんです。ねえ。

うわっ、あいつの喋り方が移った!! 謎の男と言ってもダディバナさんじゃありませんよ(汗)

## H E N S I N 〱 K A K U T S U K A 〱 (前書き)

短いですよ、今回は。

注意！ この話はデイケイドの最後を自分なりに考察し、『こうだったら面白いな』と広げに広げたものです。

鳴滝の正体もこの作品では説明(でっちあげ?)しています。最終的に謎のまま終わった 何故破壊による再生をしようとしただけのデイケイドを止めようとした？ 鳴滝ですがこう考えるなら納得がいくかなあと。

多分誰かは考えただろうけど、超設定ツツ！！

## H E N S I N 〱 K A K U T S U K A 〱

“核司”<sup>かくつか</sup>・ミナは世界によって生み出された。

雌雄の一对<sup>つがい</sup>により愛を受けて誕生したのではなく、死に逝く生命がこの世に残しておいた置き土産でさえない。

彼女、核司<sup>かくつか</sup>・ミナの生い立ち……特に出生の背後にはなんの愛もない、信念もない、希望もない、ありとあらゆる感情がない。

必要だったから創造された、ただそれだけの話だった。重要な役目で縛っている分、取るに足らない存在とまではそれ以上でもそれ以下でもなかった。

彼女は人間であって人間でない。言うなれば世界、世界と直結する存在。

天<sup>せかい</sup>からの使いと詠んで天使と呼ばればまだ耳障りはいいが、そんな高尚な存在ではないように設定されている。

悪い言い方だが「駒」だった。歯車でも当て嵌まるかもしれない。重要であるが、抜けることは許されていないその選択の余地が与えられていない存在だったのだ。

神に作られた核司だが、その背後に両親の愛や生存本能などがない分、シンプル過ぎて平らな出生とは裏腹にその役割、存在意味、使命、性質、特質などを説明するとなると困難を極める。

まずは世界の在り方と広がり方から説明しなければならぬ。世界

の神秘的な部分から。

世界は一つではない、核司という存在を創造した世界の他にも沢山の世界が存在する。その数は膨大すぎて数えようなどしても成し遂げられるわけはなく、その努力は徒勞にくれ試みるだけ無駄である。

そして、世界はつねに発展し新たな世界も次々に生み出されていく。これは人間の提唱する他次元解釈理論だ。

そしてある時、核司を創造した世界を包み込むような形で世界がいくつも新たに創造された。これ自体はなんらおかしいところのないよく見られる現象で、これらも順当にいけば新たな世界の一つとして成立するべきものだった。

ただ異常だったのはその桁外れの数と個々の不完全さ、その異様なまでに執着するある特性だった。

まず、第一に数。

世界が生み出されること自体はよくあることだ。だが、世界が持つべき完全さを手に入れて成り立つのは大変なことで同時に生まれるというのは多くて十や二十。

今回生み出されたのは数千兆にも及ぶまさに天文学的な数字だった。

第二にその不完全さ。

世界と言っても「物語」や「空想」と言った不確かなものから生み出されるものがある。それはひとまとめにして『虚構世界』と呼ばれるものだ。

今回生み出された世界は全てこの虚構世界に分類されてしまうものだった。人のイメージ上の物くらいでしかなく、想像した人物が死去したり忘れたり、捨てたりするだけで消えてしまうものだった。

この二点だけで考えると、確かに核司を生み出した世界の周囲に現れた世界の数は莫大なものではあったが、そのうちに自然消滅してしまうはず。

しかし、この虚構世界たちにはこの二点以外にもうひとつある特殊な性質があった。

生き抜こうとするその執念のようなものだ。虚構世界たちはバラバラだったが共通する意思や意識があったのだ。生きたいと、完全になりたいと各々の世界が望んでいた。

虚構世界は実践した。お互いの足りない部分を補強しあうかのようになんか世界融合が進められたのだ。

本来、世界が融合すると双方から反発する力が生まれしだいに拒絶しあい最後には消滅、破壊されてしまうはずだ。

しかし、虚構世界は寧ろ逆。世界の融合が進めば進むほど世界は安定に向かっていっていた。完全に近づいていた。

それが今から九年前……核司を生み出した世界が人間の定めた時間把握法でいうところの西暦2005年の二月十二日だった。

この現象が核司を生み出した世界にとって悪影響となったのは世界の情報が虚構世界に奪われていってしまったからだった。

虚構世界は自らが完全となるために完全な世界からも情報という存在を吸い出していったのだ。

吸い出された情報に関する存在は世界から姿や機能などを失ってしまい、世界はみるみると虫食いだらけになっていく。

情報を奪われ、自身が不完全になって最悪虚構世界に飲み込まれてしまうのではと世界は危惧した。

完全世界は虚構世界に何らかの手をこっじむ必要があった。最初の手は仮面ライダーディケイド。彼に虚構を破壊させる計画があった。

しかし、仮面ライダーディケイドに虚構世界を渡る力はない、何しろまだ世界として成り立てていない世界なのだから。

彼に虚構世界を破壊させることはできなかった。

それに虚構世界は如何せん数が多過ぎ、一つ一つを破壊してもキリがなく寧ろ状況を悪化させてしまう。

破壊では達成出来ない。それを知った世界は逆転の発想を用いた。

虚構世界が完全世界から情報を略奪する理由は完全に近づくためこの一つのみ。だから、虚構世界同士の融合を早め完全に近づかせればいい。

つまり、『不完全だからいけないのだから、完全にさせればいい』という考え。完全世界が虚構世界の手助けをするのだ。

そして、十三年前。

世界は融合を加速させる“引力”である存在、『核かくを司つかさどる者』・核司を生み出した。

これが後に『赫塚ミナ』となる少女の原形だった。

そもそもこの虚構世界が特殊なのにはある理由があった。

仮面ライダー・ディケイド・門矢士だ。

虚構世界は仮面ライダー・ディケイドのせいで生み出された世界だった。

全ての仮面ライダーの世界を破壊という融合で繋ぎ、再生させる役割を持つ彼・ディケイドには物語を持つことは本来なら出来ないはずだった。

だが彼を信じて忘れずにいた人々たちの手により、仮面ライダー・ディケイドも自らの物語を持つことができた。

しかし、弊害もある。

『物語を持たないはずのディケイド』が物語を持ってしまったことにより、世界が混沌の時代を迎えた。

それで生まれたのが『仮面ライダーの想像から生み出された世界』、  
完全世界を取り巻く虚構世界たちだ。

消えるはずなのに『ディケイドが物語を持てた』ことにより、虚構  
世界が物語を持ちたいという意味を持つてしまった。

虚構さえ世界に成り得る。これが完全世界の住人『鳴滝』が危険視  
した『混沌』だった。

核司は虚構世界の核の役割を担う存在だ。

全ての仮面ライダーになれる核司は『仮面ライダーの想像が生んだ  
虚構』を引き寄せる巨大な引力を持つ。

核司は虚構を巡ることで世界を引き付け合わせやがて一つにするの  
だ。

これが核司・ミナの生まれるにあたるまでの経緯だった。彼女は虚  
構を絆で繋ぎ、一つにするために生み出されたのだ。

これまでのことだけでもミナという存在がいかに異形なモノなのか  
分かってしまう。

だが、それだけではなかった。彼女が異形であるという経緯はまだ  
ある。

十三年前、ファンガイアの次期キング後継者第一候補・紅正夫が死くれない まさお  
去したのと合わせて創造された“第一次の核司”は全ての仮面ライ  
ダーにはなれなかったのだ。



世界は仮面ライダーの全てを知っていたわけではなかったのだった。  
全ての仮面ライダーになれるというのは並のことではなく、世界は  
その一年後、“第二次の核司”として『再創造のミナ』を地球の記  
憶を利用して創造<sup>コピー</sup>。

世界よりも多くの情報を貯蔵する地球の泉に“第三の彼女”の初期  
原型を投入し、その体内にありとあらゆる仮面ライダーに対する情  
報を書き込ませる。

そうして、九年前。世界は虚構世界が誕生するのに合わせて総まと  
めにかかる。

仮面ライダーの全ての情報を知った世界はその情報を基に『再創造  
のミナ』を管理・利用することで全ての仮面ライダーに変身できる  
第三次にして完璧な“<sup>オリジナル</sup>原点のミナ”を作り上げる。

そう、この三番目に作られた核司こそ息子・正夫を失った紅渡、紅  
深央に育てられた『赫塚ミナ』だった。

人々もミナも全ては世界の手の平の上で躍らされた。

神様とやらの定めた運命のシナリオ通りに赫塚ミナは成長し、生き  
ようと抗う仮面ライダーに関係した人々の手により仮面ライダーデ  
イハーツは作られたのだから。



## HENSIN KAKUTSUKA (後書き)

おかしいところがあったら言うてください。感想で『てめえディケイド見てねえだろ、バアカ』とかなんとか……

非難中傷どんと来いッッ!!

ちょっと解説すると、ディケイドが物語を持ってしまった影響で、人間の想像に過ぎない虚構世界（例えば漫画や小説）に物語を持ちたいという意味が生まれてしまったんです。

鳴滝が危険視していたのはまさにミナの世界のように世界が虚構の世界に飲み込まれてしまいかも知れないことだったんですよ。

そのせいで世界は“混沌の時代”を迎えた、と。“再び”って言葉の対処に困っています。

え？ちなみに鳴滝はミナの世界出身って設定に……

してもいいですよ？

この仮面ライダーディハーツにも一応出てくる鳴滝ですが、普通に味方ですし、活躍もしないのでね。

オーロラで呼び寄せていたダークライダーたちも“ミナの世界のライダー”という風にすればじじつまが合う。ほら、ミナの世界は原作に忠実でしょ？

あまり掘り下げても話にならないのでそこらへんはフワツとした感

じにしますが。

ミナは『仮面ライダー』という塊なんです。仮面ライダーを求める世界に対してある種引力を持ち、世界は彼女に引き寄せられるのです。

ディケイドとは真逆のストーリーだな、本当。

でもミナの運命と人々の意思を逆手にとって利用する世界の意思つつが神様が一番の悪役ですね、やっぱり。

仮面ライダーディハーツはそれさえも知り、神様の考えを上回るシステムとなってます。

## HENSIN〜JUST NOW〜(前書き)

今回のヒーロータイム……ぶっちゃけフォーゼ、メガレンジャーパ  
クったろと思ってたのを思い出した。宇宙×学園と言えばメガレン  
ジャーですよねえ……初の超電磁合体シーンは伝説ですよ……。

メガレンジャーの回良かったよう〜。シルバーの中でも一番の  
いいとこどりのメガシルバーが敗北したのと大いなる力がなかった  
のは不服だけど、あのバスコ相手にあれだけ善戦できたからいいと  
するか。マルチアタックライフルは嬉しかったなあ……。

バスコ……やっぱりお前も仲間思いなんじゃねえか。一番好きなキ  
ヤラがバスコなので、あの人間らしさは良かった。(二番目は八カ  
セ ver・ルカ)

「月にはなんにもねえ」だと弦太郎？　メガレンジャーの基地があ  
るぞ、ゴラア(破壊されていますが)。

最近シンケンとパトストライカーが忘れられてね？

あと……フォーゼ、完全に慣れたよ……。

今回のタイトルは(多分)訳すると『今からだ』です。何がなんで  
しょうかね？

次の次の次で最終話となります、多分。長かったよお……。ちょっ  
と、波に乗ると変な描写ばかりになるとこは反省しました。

では!!



## H E N S I N 〽 J U S T   N O W 〽

「……と、ここまでが第三の核司、赫塚ミナが生み出されるまでのプロセスですね」

「……………」

影虎は謎の男からのミナが生み出された説明を受けていた。

なんでも「知らないだろうから暇潰しに教えてやろう」という気が起きたらしく根絶丁寧に。

語る男は話の節々要所所で話を聞く影虎の反応をチラチラと覗き見てきた。

きつと絶望や恐怖の色を謎の人物は期待したのだろう、それくらい性根が腐っていたのだからその予想は簡単だった。

この掠りきつた最低最悪な薄気味悪い根暗な人物は人々の恐怖といったあらゆる負の感情を慈しんでいる。

そんな奴を喜ばせるような行動を取るのは御免だった。

影虎は死んだって表情を崩すものかと腹に決め、なんとわれようがどれだけの事実を言われようが決して、相手を睨みつけることをやめはしなかった。

敵意を、影虎はしっかりと持ちそれを保っていた。

影虎の表情を見るたんびに「予想通りではなくてつまらない」と眉間にシワを寄せながら、それでも話す。

影虎は一言も声を発しなかった。ミナのことをもつと深く知らなければいけない、もつと詳しく知りたい気持ちは強くあったのだが、こちらから質問をすることはなかった。

その必要はなかったからだ。謎の男は影虎にミナに対する大きな動揺と恐怖と嫌悪感を引き出させようと、頼んでもいないのに詳しく丁寧に教えてくれた。

影虎はそれだけで充分過ぎるくらい分かった。なにしろ、教えてもらう以前から少なからず予想出来る事が起こっていたからだ。

例えば、ミナを灰色の怪人の軍団から助けた時だ。実は助けた、というのは少し齟齬がある。その言葉より「連れ出した」というのがあった。

ミナは灰色の怪人に囚われていた。四肢に怪人の触手が絡み付き、動きを拘束されていた。だが、その行動そのものがおかしなものだ。怪人は人間より圧倒的に強力な腕力や脚力を持っている。どういう原理でなにが起こっているのか判別し難い不可思議な事をやってのける特殊な力も。

その怪人がなぜ一人の人間に対してわざわざ触手を使って拘束するなどしたのか。

逃げられないようにするためだけじゃない。あの数の怪人に囲まれたら人間の脚で逃げ切るのとは不可能だ。



もうひとつの意味がある……………。影虎はミナが囚われている光景を見た時変なイメージを頭に浮かべた。

あの怪人たちにまるで祭壇に神仏の像を置くかのような恭しさが見て取れたのだ。

決して危害を加えようとするようではなく、神々しいものを高く掲げようかのような行為に見られた。

影虎は最初にその光景を見た時にその掲げられているモノが人間の女の子であったことに驚いたくらいだ。

まだまだ例はある、キャツスルドランのことを知っていたり、ミナがミナでなく電子辞書の一種のようにスラスラと解説したり、ミナとそっくりな顔と体格、スタイルをした『リクリエイティブ・ミナ』がいたり。

ミナに好意というものがなく個性がなかったのも何よりの証拠となる。

人とコミュニケーションを取る際、時に個性というものは邪魔になっってしまう。好きなものが他人と違う場合ふとしたキツカケで拒絶しあい、「反りが合わない」となってしまうこともある。

世界はそれを考えてミナを作った。個性がなく如何様にも自分を作

り替えられるからどんな相手にも対応できる、好きなものがないから他人の言う意見にも問題なく障害なく同調できる。

まさに「自分はどうでも良く他人のことしか考えない」というちょっと聞くと漫画でありがちな主人公のような優しさ。

好意を最も良く寄せられて世界にとっては最適な、魂の抜けたからっぽの存在だ。

ミナは世界にとって都合の良いように作られたカラクリ人形も良いところだった。

しかし、影虎はそれを知ってなお動揺しない、ミナから離れないミナの前からどかない。

「影虎アくんンン……少し報告と違いますねえ……。キミは優しい少年のはずだったのに……ずいぶんと非情な男なのですわええ。わたアし、ちょっと失望しちゃいましたよ？」

「……………?」

疑問を実際に口に出したりはしなかったが攻め方の変化に影虎は反応を示す。

謎の男は影虎がミナに並々ならぬ好意と信頼を寄せていることを

今までずっとストーリーキングしていたのか 知っているよう

で、今まではミナを悪いように言うことで影虎に揺すりをかけていた。

しかし、今度は影虎に対する悪口や中傷だった。影虎は別に自分の

ことを美化して見ているわけではないのでどうともないのだが。

謎の男は話す。

「キミは大切な赫塚ミナがそんな工場で作られるアンドロイドのよ  
うな魂の抜けた冷たい操り人形のだと言われて、なんとも思わない  
のですかねえ？ これからも赫塚ミナには不幸しか訪れないとい  
うのに、嘆かわしいと思わないのですう？」

ああ、成る程そういう意地汚い手できたか

そう影虎は冷静な思考で相手の意図を判断した。

自分のことをいくら非難されようが平気だしお前に何が分かるとい  
うものだが、影虎の中でミナを大事に思う気持ちだけは美化してお  
きたい特別なものだった。

男はそこを突き攻めてきた。

ミナを大事に思う気持ちが偽りだと中傷してきたのだ。

「何がいいたい？」

初めての発言だった。

「いえ、わたアしにとっては別段どうってことのないことなのです  
があ……あなたの赫塚ミナを思う気持ちがその程度なのかと思いま  
してねええ……。この話を平然に聞いているのはこれから赫塚ミナ  
に起こる悲惨なことは自分には関係がないと思っっているのかと……」

核司たるミナには虚構の世界を回り、全ての虚構をまとめあげ仮面ライダーたちと絆を結ぶことで世界を一つにする指命がある。

その旅自体も過酷なものだろう。全ての仮面ライダーに変身できるとは言え、それは仮面ライダーと戦った悪の怪人たち全てを敵に回すということなのだから。

仮面ライダーにも色々いると謎の男は言う。中には極悪な殺人鬼のライダーや影虎たちの目の前にいる男のように性根の腐ったライダーもいるかも知れない。

そんなライダーたちと絆を結ぶのは大変で、ライダー同士で戦いあいになる可能性だって否めない。

だが、一番に残酷なのは核司である限り、ミナにはそれしかないということだ。

嘘のような空想から生み出されてしまった世界を絆で繋ぎ、一つの真実に至るまで救世してあげる。

それは大層な指命かもしれないが、それだけしか出来ないというのは……度を越えて残酷だった。

そんな彼女をかわいそうだとは思わないのか、と謎の男は言いたいわけだ。

もし、もしもだ。ミナじゃなく他の誰かがそんな悲しい運命に翻弄され、成すがままにされていながらもそれに疑問さえ感じず、ただそのレールを走り続けていたとしたら。

それは影虎も人の子だ。かわいそうだと思うし出来る限りのことはしてあげたいと思う。

自分の人生をふいにするまでやる気はさらさらないが、少しずつでも変えていこうと試みるし、困ったり悩んでいたりしたら手を差し延べてあげたい。

だが。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハッツ！」

影虎は笑った。自分が思っていた反応と真逆の、それこそ180度違う影虎の行動を見て謎の男は戸惑う。

謎の男は影虎がおかしくなってしまったと考えるだろう。

しかし、影虎は彼にとっては正常そのものだ。おもいきり笑えている。絶望や恐怖、履き違えの罪悪感や使命感に囚われていない。

実際問題、影虎はミナを見捨てていいのだ  
………望むのならば。

影虎にはミナを救わなければならないという責任や義務はない、たった二時間くらい前にあった少女に少年は人生をかける必要などない。

だから影虎はつねにしなければならないという義務ではなくしたいと望む希望で動いている。

やらなきゃいけないようなことでも気に食わなかったり気が進まな

いのならやらない。やりたいと望める物のために頑張ってみるだけだ。

それが影虎の生き方だ。

そして、もうひとつ。謎の男に対して「何がしたい」と言ったのは“発言”であって“質問”ではない。

ゲスなああの意地汚い男の言おうとしていることやあの男が思い描く安っぽいシナリオなんて、影虎には手に取るように分かっていた。

いちいち聞くまでもない。力を貸してくれなくてもこちらの力だけで事足りている。

影虎は盛大に笑ってやろうとして乗っかってやっただけだったのだ。

あの男は影虎の名前を言ってみせたりミナの出生の謎を明かしてみせたりと、なんでも知っているような態度を取ってはいるものの、なんにも分かっちゃいなかった。

一体、何時の話をいまさらしてくれてるんだ？

という挑発が言葉に込められた影虎の真意だった。

ミナはもう、からっぽじゃない。ミナはもう、一人の力で立つこともみんなの肩を借りることも知っている。

ミナはもう、大丈夫だ。

泣きたいときは泣いていいし、怒りたいときは怒っていいし、笑い

たいときは笑っていいし、愛情を感じたらもう、愛してもいいし愛せる。

親ならぬ世界の敷いたレールにミナは抗えるだけの心を持つことが出来た。

ただ、これから大変だろうということも確かに事実だ。ミナはきつと多くの苦難を味わうだろう。

それはきつと心を持つ者には耐え切れなさそうに思えるものだ、それならばいつそ心なんて捨ててしまった方が楽かも知れない。

その代わり、ミナはもうみんなの絆を信じられる。全幅の信頼をみんなに。ミナという“人間”はこれからいくらでも広げられるのだ。

だから、影虎もミナならみんなと一緒に乗り越えられると希望をかける。乗り越えてみせると決意する気持ちに嘘は生まれぬ。

支える………。どんな手を使っても、くじけそうなきは手を差し延べたり、躊躇してしまっているときは背中を押してやる。

それだけじゃない。彼女のために、どんな手を使っても。

それは例えば、“やっかいな敵に遭遇した時、敵の目を引き付けた”とか。

影虎は「ミナ！！」と彼女の名を呼び、前を譲る。ミナも「ついて来い」という気分だっただろうから。

ミナは踊り出る。今までずっと頭を押さえて苦しんでいたのだが、それが嘘だったかのように……………

いや、このプレイが影虎とミナの絆だった。

#### 【EXCEED CHARGE】

フォトンバスターモードに変形させていたトランクボックス型ツール・ファイズブラスターのEnterを押してイクシードチャージを発動。

ファイズブラスターにエネルギーが充填される。狙いは当然あの汚らしい謎の男。牽制だったり変化球だったりはしない、ど直球の『攻』だった。

ミナの「ハアツツ！！」という気合いと共に超エネルギーの塊がまっすぐにあの謎の男に向かった。

さっきまで余裕の表情でいた謎の男だったが、これは全く予期していなかったようだ。さっと血相を変えて慌てたが、何もできなかった。

「ぐうあツツ！！」

青い炎球に相殺されることも、“カイに似た少年”が使っていた黄金のバリアで防がれることもなく、『フォトンバスター』は謎の男に命中した。



強力な個体を相手にしても勝ちを取り、無敗を誇る仮面ライダーアイズのプラスタフォーム。その必殺技の余波は大きな風を生み出す。

「ぐ……くそ、女があ……ッッ！」

謎の男はまだ生きていた。バリアなどを張るのは本当に無理だったらしく、ダメージはあった。右腕部分のみが獣をイメージさせる怪人の物になっており、シューシューと白い煙を吐いている。

これを喰らって生きているのはハッキリ言って驚きだが、一応は成果があった。

それによりミナは上機嫌になって、ファイズフォンを操作して変身を解除した。

「チエ……ッ、上手く不意はつけたと思うんだけどなあ……」

ミナは気楽な調子でそう言っただけ、デイハーツールに手を伸ばす。仮面ライダーファイズは出力が低い。これはあの男を相手するのはかなり厳しかった。

今度はもっとパワーがあり、勝利を約束されたような仮面ライダーで挑む。今度は、いや今度も容赦する気は起きなかった。

「く、何故……何故戦えている！？ 普通なら絶望しその仮面ライダーという力に嫌悪し拒絶してもおかしくないというに！！ 何故、戦えているんです！？」

理解が出来ていないようで謎の男はうるたえる。

やはり、人の心をつきまわして弄ぶのが大好きという腐った性をしているくせして何もわかっていない。

ミナは世界から生み出された。仮面ライダーという力を全て受け継ぐために、世界を救うという“善”だけのために。

しかし、そんなものはずっと前の話だ。もうミナはそんなものを始まりとはしていない。

ミナの始まりはこれからだ。これからもずっと、ミナは始まっていく。

「酷いとは思わないのですか!? 私たちはむしろ被害者!! 哀れみられるべき悲しい存在なのですよ!? それなのに、正義の味方・仮面ライダーは私たちは邪魔だから消すと言うのですかねええ!?」

「言わない、今のところは何も言えないわよ」

ミナたちはまだ見れていない、虚構という世界の姿をこの目で見てはいない。謎の男がいくら語っても『百聞は一見にしかず』だ。

本当に哀れみられるべき悲しい存在なのかどうかも知らないし、本当にこの世界に害をもたらしているのかどうかも分からなかった。

知らないミナたちが何を言っても耳障りがいいだけで、なんにも筆っていない。だから、言うことが出来ない。

ただ、今のミナは。

「スツゴクム力ついているのは確かなのよね。だから、噛み付かせてもらっただけ噛み付かせてもらっつよ。理由があるんでしょうけど、こっちにも生きたい理由は山ほどあった。だから、これだけ言っておくわ」

ミナは比較的爽やかな　しかし同時に脅すかのような凄みの籠つた　笑みを浮かべ、髪を肩から払って言う。

「間違っつたことを愉しむな。どんな理由があつてもそれだけは認めないから」

影虎は感慨深くミナの台詞を受け止める。

この怪人たちによる大進攻には理由があつたはずだ。不完全でありながら消滅の危険があるのも承知でこの世界にやって来たのだからなんらかの理由があるのはわかっている。

それはとても大きな理由であるのだから、絶対にやらないと仕方ないくらいの。

しかし、それと愉しむことは別だ。自分が不幸だ不憫だと言うのは個人の自由だが、間違っつたことをしなくてはならない際に愉しむのは許されない。

こちらにも生きる意思がある。それを持っている限り、噛み付かせてもらっつ。相手が愉しんでやっているのなら、容赦は出来ない。

謎の男は忍び笑いをした。その笑いは次第に大きくなっていき、最

最終的には高笑いにまで発展する。

「ククク……ッ、これは上手くいきませんねえ。デイハーツになったばかりの今なら一番上手くいきそうだったのですが、致し方ありませんねえ」

「一番……何が上手くいきそうって？」

きっとこの男の言っていることはこの大進攻に隠された理由の一つだった。ミナは慎重にそれを聞く。

「貴方をこちらに招き入れることですよ、核司・ミナ。貴方がいれば私たちの“主導権”は盤石のものになる……。それには貴方が進んで私たちの元にやって来る必要があるのですがねえ……」

謎の男は「まあいいです」とあっさりした感じに言って話し終えた。

ミナが進んであの男たち 他には“カイに似た少年”などがいる組織 のところ、つまり怪人側に来ることにより主導権は盤石になる。

主導権というのは数分前に出てきた言葉だった。怪人たちはその主導権をこの世界の仮面ライダーに関連する情報を奪うことで勝ち取ったそうだ。

一体、どういう意味がその単語に秘められているのかは分からなかったが、これから知っていくだろう。

ザザザ……と謎の男の像がぼやけた。さっきのクライシス要塞と全く同じ現象だ。

やはり組織の幹部であるらしいこの男もまだ不完全であり、この世界から拒絶されつつあるのだろう。

「まだまだ完成には遠いようですねえ……ですが、あの　　となることが出来さえすれば……私も……」

一部分聞こえなかったが、男は天に祈りを捧げるかのようにしながらそうミナたちにも聞こえる独り言を言った。

拒絶され限界へと近づいていつている自分の肉体と存在。それを冷静に見て、男はパチンと指を鳴らす。

瞬時に現れる銀のオーロラ。やはり、この世界に現れた時のような黄金のものではない。ちょっと冷たいような色相をしたものだった。

黄金と銀……差はあるのだろうか。それもまだミナの知らないことだった。

謎の男は最後にミナと影虎の方に目を向ける。

「また近いうちに会いましょうねえ、赫塚アミナ、春梅影虎アくん。我が名はNo.48……第十七之席・『シグ』と申します。以後お見知り置きを……」

その挨拶をやけに見開いた目で行った謎の男　　……いや『シグ』は一礼したあとでゆっくりと後退し、オーロラに消える。

通過を確認して、銀のオーロラはスウ、と色を薄くしながらミナたちの方に向かってきた。

オーロラにいい思い出が全くないミナと影虎はとっさに目を閉じて  
身構えたが、なにも起こりせず、突き抜ける。

視界を開いてみるともう誰もいなかった。もう役目は終わったとい  
うように、謎の男・『シグ』はもうこの世界には存在しなかったの  
である。

## HENSHIN〜JUST NOW〜（後書き）

世界に生み出されたというミナ。それは人間とは言えない化け物なのかもしれない。

だけど、始まりはこれから。ミナは敷かれたレールに従ったりはしない。ミナは自分が望むように生きていきます。

まさに『JUST NOW（今からだ）』が適した話かと。

不完全に苦しむ虚構の世界……彼らとどういう付き合いをしてどんな答えを見つけるのでしょうか。

ちなみに虚構世界というのはリルバスーズからインスパイアしています、すみません……。あの、とかしませんから許して下さい。

さて、困ったことになっております。ライダー学園編も近いので書けるようにするために古今東西の学園物を読みあさりプレイしまくっているのですが……

は ちんに……。目覚めたよ……。もともと好きな方のキャラだったけど……。好きすぎて、執筆が進まん……。ずっと『台詞集めてみた』的なのをループさせて聞いている……。そして、泣いてる……。

つか、なんで仮面ライダーの話でリバスの話をしてんだ、馬鹿か俺。

じゃあ、次回……

シャカシャカヘイツッ!!



HENSIN〜RE・CREATIVE〜（前書き）

連日投稿〜〜ツツ！！ 頑張ったよ、うちは頑張ったよ……ツツ！！

今回はリクリエイティブ・ミナのことを説明したいと思います。本編では第二部からになりますが、彼女のことは縮めて「リナ」と呼んでやってくださいえ

ああそうそう。女の子が二人になりますが、三角関係とかにする気は全くないからな影虎。

ハーレムなんて作りません。うちの男キャラの扱いの悪さ舐めるなよツツ！？

## H E N S I N 〽 R E : C R E A T I V E 〽

こうして、この世界に入り込んできた虚構からの侵略者の一人は姿を消した。

組織があるらしい、あらゆる種類の怪人を束ねるとてつもなく巨大なものだ。

仮面ライダーファイズの最強形態・ブラスターフォームの必殺技でも必殺にならないどころか僅かなダメージしか与えるところまでしか至らないという前代未聞の化け物。

彼は名を『シグ』と名乗り、No.48だとか第十七之席だとか言っていた。単純に考えればそれはコードナンバーのようなものだろう。勿論本名ではなく作戦行動をするときにその名で呼び合うための。

それなら、かなりマズイ。なにしろ、敵組織の幹部は十七人からそれ以上、それどころか四十八人以上いるという可能性が大であるのだ。

あのシグが組織のトップであるという可能性は低いだろう。トップがわざわざお出ましになるとは思えないし、ミナが攻撃を食らわせられる隙を安易に作ってしまうというのはちょっと注意力散漫だった。

何より、やはり役不足感があったのだ。ラスボスにはなりえないよな。

ということはあるレベルと同等かそれ以上の幹部が大勢いることになる。怪人たちを束ねるに足る強大な組織だ。

出発を前にして、先に待つ暗雲をミナと影虎は目のあたりにしてしまった。

これからの旅がどれだけ辛いものなのか推し量られてしまい、一抹の不安を胸にしながら影虎は気持ち切り替える。

さて、これでもうこの世界に残っている侵入者たちはいないだろう。あのシグという幹部でさえ完全なこの世界に耐えられず、去っていったのだから。

だとすると、戦いはもう終わったことになる。少々呆気ない形でもうにも釈然としないが。

ミナはもう戦うことはない、この世界では。

そうとなればこの世界で残されている“ミナがやりたいこと”はあと一つだけだった。

それはまた苦勞しそうだったが、影虎は付き合うことを選択する。

「んじゃ、ミナの両親を探すとしますか」

影虎は決めて提案する。

自宅近くにファンガイアという種類の怪人が現れ、両親はそれを食い止めるために残りミナはそこで両親と離れたらしい。

また、母親のかつての従者である男・次狼も逃走途中で離れ離れになっただけで、厄介なことにその際黄金のオーロラを通過してしまったのをミナは目撃したそうだった。

両親たちももう自宅にはいないだろう。黄金のオーロラでどこに行ってしまったのかまるで分からない次狼も含めて見つけださなければ。

世界から生み出されたと分かり、ミナは両親の本当の子供ではないというのも明るみに出てきてしまった。

だが、ミナは絶対にこう言うだろう。「呼びたいから呼ぶ、会いたいから会う、子供でいたいから疑わない」と。

本当の娘ではないとなっても今までの過去としてきた時間が嘘になるわけじゃない。真実などで、今のミナの脚が止まるはずはなかった。

ミナの名前は「赫塚」、核司でありながら根本的な部分から核司ではない。

紛れもなく、赫塚ミナは赫塚ミナだった。

影虎は「ん？」と気がつく。最初に名前を聞いたときも僅かに引っ掛かったが影虎はこの赫塚という名前に聞き覚えがある気がした。

ミナの祖父だという赫塚音也の名前も、聞いたときは既視感があったりした。そう多くはないかなり珍しい苗字なのに聞き覚えがあった。

何か重要なことだ。ミナに会うまでこの街に入ってしまうまではそ

ればっかりが頭をいっぱいにしていたのだが、それがなんなのかが  
思い浮かばない。

もう少しで思い出しそうなのだが、どうにも出ずに凄くもどかし  
かった。

出ないならしょうがない。何かの拍子にふと思い出すまで待つし  
かない。

そう考えて影虎はまた思い出すのを中断させる。

「おい、ミ …………… ナ？」

影虎がミナの両親の名前と特徴を聞こうと振り返ったとき、影虎の  
呼び掛けは疑問に転じる。

ミナのおかしかった。また痛むように頭を押さえているのも  
あったし、足付きが覚束なくフラフラしている。

具合がかなり悪そうだと見受けることが出来た。

「ミナ！！」

影虎は叫ぶ。ミナが目を閉じて前に倒れ込んできたのだ。

距離が結構離れてしまっていたのでミナを受け止めてあげたかっ  
たが彼女の地面との衝突に間に合わない。

だが、彼女が顔からぶっ倒れ身体を強く打つことだけは回避された。

ディハーツールの中にいるもうひとりのミナ、『リクリエイティブ再創造のミナ』が素早く反応し、半分ずつの仮面ライダーに変身する時のように具現化してきたのだ。

ミナの身体は地面にぶつかるすんでの所でリクリエイティブ・ミナにキャッチされる。

リクリエイティブ・ミナはミナの身体を影虎の代わりにしっかりと支え、やはり女の子の身体なので力があまりないのか少々無造作とも思えるように引きずり近くの壁にミナを置いた。

「え、え〜っと……」

「心配ありません。意識を失う程のダメージは蓄積されていませんので」

リクリエイティブ・ミナは冷静に影虎の言いたいこと聞きたいことを彼の動作などから判断し、答える。

ミナは確かにヤバそうとかではなかった。多少のダメージはあるようだったが、気絶に追い込まれるようなものではなかった。恐らく初めての戦いで緊張しっぱなしで、糸が切れてしまっただけだろう。

ミナは安らかな様子ですうすうと小さく寝息をたてながら眠りについていた。

「あとは脳の使いすぎによる発熱ですかね、いくらなんでも一気に多くの記憶を見せすぎてしまいました」

「知恵熱……あ、そうか」

影虎はミナが初めて変身したのにわりとスムーズに戦っていたことを思い出した。ディハーツだけじゃなくその他のライダーの時もまるでその力の振るい方についてミナは知っていたようだった。

きつと新たな仮面ライダーになるたびにミナの頭の中に仮面ライダーの知識や記憶が入り込んできていたのだ。

「……………ちなみに、影虎の使った「知恵熱」という言葉の使い方は誤用だった。知恵熱とは生後一ヶ月程度の乳児に見られるもので……………あとは省略しよう。」

ミナは頭を時折押さえていた。仮面ライダーの知識が津波のように脳に入り込んで、ショートしてしまっただのだ。

それと疲労が重なってミナは限界を超えてしまっただけのようだと見るとミナの顔はちょっと赤みがさしており、なんとなく色っぽい。

「……………」

その姿に見とれる影虎。だったがリクリエイティブ・ミナがこちらに視線を向けているのに気づくと影虎は咳ばらいを噓くさくついで取り繕う。

しかし、不思議な光景だった。

『赫塚ミナ』と『リクリエイティブ・ミナ』は本当にそっくり、瓜二つという言葉がこれほど合う組み合わせはそうそうないだろう。

差という差はまるでない。リクリエイティブ・ミナはミナと同じく

金髪と黒い瞳を持ち、顔の作りやスタイルもほとんど同じ。着ている服が違つとか、髪型がロングではなくオカッパだったりとかそんなぐらいしか見つけられない。

強いて言うなら瞳くらいか。今のミナの瞳は爛々とした光を帯びているが、リクリエイティブ・ミナの瞳にはそれがない。焦点があつていないとかではないが、どこか押さえ付けている感がある。

しかしそれだけで、あとは生活習慣の差がもたらすような微々たるものだった。

ミナはしばらく起きないだろう。影虎が腕時計　ミラーモンスターを警戒してガラス部分は外しておいた　を見ると今の時刻は11時7分。早い者ならもう就寝につく時間だ。

もう怪人たちはおそろくないのでミナを叩き起こす必要はない。焦ることはないのだからじっくり寝て休んで、それからミナの両親を探せばいい。

ミナが起きていたならば多分反対されるだろうが当の本人は眠りの中にいるので、このままそつとしてあげるのが吉だ。

影虎はそう考えて自分の上着をミナに貸してあげた。

上着を脱いだ途端、凍えるような冷気が影虎を襲う。まだ二月で季節は冬。寒いのは当然だったが、その自覚は忘れたときにやってくるものだった。

これは寝ることは出来ないなと影虎は思い、リクリエイティブ・ミナに話し掛ける。



「なあ」

「はい、なんででしょう」

やはりと言うのかなんと言うか、ミナと全く同じ声質をしている。抑揚というものが無い無感動のものであったが。

「第三の核司……ミナのことを創るために第二の核司がなんとかかんとかってあの『シグ』って野郎は言ってたけどよ。ぶっちゃけ、どういうことなんだ？」

「それは当事者への確認と取って宜しいですか。直感に優れるあなたなら不明要素『シグ』の説明を聞いた時点で理解はしていると思われませんが」

あの謎の男・『シグ』といいリクリエイティブ・ミナといい、どうやら春梅影虎という男の情報は何処からかダダ漏れに流出しているらしい。

ただ、リクリエイティブ・ミナの評価は『シグ』と違って高評価であるらしく、影虎は「どうとでもとってくれ」と気恥ずかしく肩をすぼめた。

「オリジナルを含めた私たち『核司』は世界の意思によって生み出されました。まあ、アンデッドと同じ起源となりますね。しかし、世界の意思というのは全てを知っているわけじゃありません。運営者でありながら管理者ではありませんでしたのでね」

分かりやすい例を出したりはしてくれなかった。ただ淡々と情報を

吐いているだけで感情がない。ちょっと恐ろしく思ってしまったくらいに饒舌でスラスラとリクリエイティブ・ミナは話す。

喋り方は少々前者の方がマシであったが、この息を吐くような解説の仕方に似た感じを影虎は知っている。

世界の意思と世界の情報。これは影虎は勝手にスポンサーとプロデューサーに置き換えていた。世界の意思が資金を提供するスポンサーで、世界の情報が実際に制作を手がけるプロデューサーだ。

スポンサーは指針を決めることは出来ても詳細には手をだせない。プロデューサーはスポンサーによって指針を決められてしまうが管理は請け負う。

世界の意思は核司を作りだそうとはしたものの、仮面ライダーについてはわかっていなかった。

だから最初に作られた核司は不完全となってしまう、それを完成に導いたのが第二のミナ、リクリエイティブ・ミナだった。

「世界の意思はまず第三の核司の雛型を創り出し、それを世界の情報の塊である記憶の泉に投下しました。私はオリジナルののコピーデータ、第二の核司『再創造のミナ』<sup>リクリエイティブ</sup>として三年間仮面ライダーに関する情報を集めました。その集められた情報を基に雛型は調整され、核司として理想的なオリジナルが誕生したのです」

つまり、ミナを完成させるまでは四つの工程があったということ。

まずは試作的に第一の核司が創造される。しかしそれは全ての仮面ライダーに変身するためには不十分なものだった。

次に第三の核司　　つまりはミナの基になる雛型が創造される。  
この状態はなんの特徴もない人間であったのだらう。

更に生み出されたその雛型を記憶の泉に投入し第二の核司『再創造のミナ』をコピーという形で生み出し、三年間という月日をかけて調べあげる。

そして、虚構の世界が生み出されると同時に世界の意思はその情報を基に雛型を核司としての完成版、第三の核司創りだした。

そう言う徹底的な手順によってミナは生み出されたのだ。きっとどれか一つでも抜けていたらミナは生まれず仕舞いだったに違いない。

また、半分ずつの仮面ライダーにはどうやらこのリクリエイティブ・ミナがいなければならないようでもあるし、リクリエイティブが情報を提供しなかったらミナは戦うことは出来ない。

もしかしたら、仮面ライダーディハーツにとってはミナよりもリクリエイティブの方がむしろ重要度が高いのかも知れない。

影虎は興味を持つ。好奇心とは違う、ワクワクとしたものではない。ミナと同じ顔をしてはいるもののミナを前にした時の胸の高鳴りはなかった。

そうではなくて　　……そう、嫌な予感だった。

もしかしたら、というそれほど深刻ではないがハッキリとした悪寒に影虎は浸かり、そうでないでくれと願う。

影虎は会話を続けようとする。しかし、肝心の話題は見つからなかった。

世界の記憶に三年間浸かり続けた少女、それを相手に一体どんな話題を振ればいいのか、影虎には見当がつかない。そもそも女性と話したことが少ない影虎にこのハードルは大変厳しかった。

すると、何故か口から

「ありがとう」

という言葉が出てしまった。意図したことではないし、感謝していることもこれといってないように思われた。

影虎からして見れば「何故言った？」という感じで、言った後になつて顔をしかめながら口を押さえるという行動に走る。

リクリエイティブは影虎の方を向いて目をパチクリとさせた。彼女も何故自分が礼を言われているのか分からないらしい。

影虎にも分からないのだから当然と言えば当然なのだが。

影虎は目をつぶつて右手の人差し指と中指で眉間を押さえ考える。

あたふたはせず彼女のように冷静に。

「あ〜〜、うん。ミナにさアドバイスしてくれただろ？ 今のまじゃ何も出来ないって、戦つて置かなくちゃいけないってさ」

デイハーツとなつてまず何をすれば良いとミナが聞いた時、リクリエイティブ・ミナはこう答えた。

『仮面ライダーディハーツに変身するにあたって、オリジナルはあ  
と一つだけやらなければならぬことがあるのです』

そのヒントとして、リクリエイティブ・ミナは影虎がミナを変えた  
行動にあるとつけ加えた。

それは多分“揺らぎ”なのだろうなと影虎は考える。ミナは揺らぎ  
を手に入れ戦うことを選択することでようやく仮面ライダーになれ  
たのだ。

言った影虎は自分を自分で褒めたい気分になった。多分「ありがと  
う」という感謝の言葉が出てきたのはそのことが起因していたのだ  
ろう。

全くの偶然で浮かび、後付けの自信だったがまさに結果オーライだ  
った。

すると、リクリエイティブ・ミナは不可解なことに更に疑問を大き  
くさせたようだった。

頭を捻りボンヤリとした様子で考え、影虎に質問してきた。

こう、質問してきた。

「あの、春梅影虎。“人間”はあの行動に感謝を覚えるものなので  
すか？」

影虎が疑問符を頭に浮かべる番だった。そして、嫌な予感はずま  
す大きくなってしまふ。

感謝をするものなのか。と、聞いてきたということは“それが  
良いことでプラスに繋がる”ということをつかっていたとい  
うことだ。

リクリエイティブ・ミナはミナを良い方向に導くためにあの台詞を  
言っただけを押し付けてくれたとばかり影虎は思っていたが、違っただ  
けだ。

なら、何故あの台詞を言ったのか意図が見つからない。いや、意図  
どころか。

ここで影虎は“嫌な予感”というあまり使いたくない直感を使っ  
て聞いた。

「待て、お前……誰かに言われてやった”……のか？」

返ってくる言葉が肯定でないことを影虎は祈る。しかし、現実はや  
はり残酷だった。返ってきたのは、

「はい。オリジナルとコンタクトを取る前に立花藤兵衛様からそう  
指示がありました。春梅影虎、私が言った言葉は“優しい”の定義  
に当て嵌まらないものでしたか」

肯定。しかも“優しい”という定義についての確認も付随したもの。  
まるで、優しいという言葉が辞書で見ただけで実物に触れたことが

ないという風に。

影虎の悪い予感は見事的中してしまった。

ミナじゃなく他の誰かがそんな悲しい運命に翻弄され、成すがままにされていながらもそれに疑問さえ感じず、ただそのレールを走り続けていたとしたら。

それは影虎も人の子だ。かわいそうだと思うし出来る限りのことはしてあげたいと思う。

自分の人生をふいにするまでやる気はさらさらないが、少しずつでも変えていこうと試みるし、困ったり悩んでいたりしたら手を差し延べてあげたい。

なんと言つことだ、と影虎はつぶやきながら天に浮かぶ月の明るさを呪う。もしもが実際になつてしまった。

ミナの他にもいたのだ。世界の歯車となるのになんの疑いも持たない者が。自分の魂を持たないからっぽの人形でいることに満足すらしている者が。

リクリエイティブ・ミナのそれは自覚している分ミナよりは問題でないが、深刻度はこちらの方が上だった。

彼女も数時間前までのミナと同じだった。自分の個性いぶを持っていな

い。もうリクリエイティブ・ミナは個性を持たないことが個性というレベルにまで到達していた。

「……返答は出来ないのですね。残念です、知ればもっと貢献出来るかと思っただのですが」

、彼女は影虎が返事が出来ないことを察して残念そうでもなんでもない口調で残念がり何やら始める。

ミナに近づいてディハーツールを彼女が目覚めてしまわないように操作し始めたのだ。

「おい、どうかしたのか？」

「オリジナルが起床するまでに赫塚渡、赫塚深央、次狼、ラモン、力の居場所を割り出します。その方がスムーズに旅に入れますから」

リクリエイティブ・ミナはディハーツールの変身機能を選んだ。ディハーツやその他のライダーに変身するための機能だ。

「ミナが寝ているんだぞ、変身出来るのか？」

「いえ、オリジナルは変身いたしません。オリジナルが戦闘不可能な状態にあるときは大概の機能は使えません」

「じゃあ、何するんだ？」

「私に変身します」

リクリエイティブミナはそう言う。影虎はいまさらになって彼女が



ミナが腰に巻くディハードライダーによく似たベルトをしているのに気がついた。

彼女が装着するベルトはアンテナ型のツール、レシーブレイガンがなく、ドライバツクルだけかなり簡素な造りをしているという違いはあったが、ミナの物と同じく他のライダーの変身も可能にする物のようなのだ。

「使えるのか？」

「はい、オリジナルだけでは全ての仮面ライダーにはなれません。私は“改造人間”を担当しています。これはオリジナルが戦闘不可能状態にいても使用できる仕様となっています」

変身機能の選択画面を覗いてみると、ほとんど仮面ライダーのマークは「使用不可能」と示すかのようにバツテンが入っている。

しかし、幾つかのライダーのマークは「変身可能」と表示されていた。

リクリエイティブ・ミナはそこから「V3」と読めるマークを選択する。

【HENSIN!! RIDER V3!!】

ディハーツールがそう電子音を鳴らすのは「クウガ」「ダブル」「ファイズ」と同じだったが、ミナのドライバーは変化せず、代わりにリクリエイティブ・ミナのするベルトのアンテナが一周してベルトを変える。

ダブルやファイズは機械的なものだったが、今回呼び出されたベルトはVのマークと二つの風車があるくらいの簡単なデザインだった。しかし、それだけじゃない。アンテナはベルトを一周したのちに稲妻のようなものを放つ。

それはリクリエイティブ・ミナの上空で数枚のプレートを造り、下りてきた。上からエネルギーが降りてくるというのはディハーツの変身でもあったが、どうもこれは毛色が違う。

「……………ツツー!!」

バチバチツツー!! とエネルギープレートはリクリエイティブ・ミナを通過していった。

通過というより……………猛威を振るっていったというのが正しいか。

ディハーツと明らかに違っていたことは無表情・鉄面皮を貫く彼女の顔が苦悶に歪むほどの激痛が身体を走ったことだ。

「ちよっと、お前!!」

ミナと同じように倒れてしまいそうだったリクリエイティブ・ミナの元に影虎は駆け付ける。

息が荒い、しかし無理矢理押さえ付けようとしている。身体がガタガタ振るえている、しかし止めようとしている。

ミナの変身とはまるで違う、暴力とでも言えるくらいの変身スタイ

ルだった。

「はな、してください……。変身が完了しま……。せ……」

リクリエイティブ・ミナは強烈な寒さに振るえるかのような唇で、拙く言葉を紡いだ。

無理をしているが今にも吐血してしまいそうな危うさを匂わせている。それは到底隠し切れるものではなかった。

「何言つてんだ!! 何が、お前どうなって……。ツツー!!」

「私は……。かい、そう人間タイ、プを担当しています……。私のデータには、改造人、間のデータも書き加えられて……。デイハーツドライ……。バーは……。私のデータをそのデータで上書きすることで変身を、可能とするのです……」

デイハーツドライバーによるリクリエイティブ・ミナのデータ改竄<sup>かいぎん</sup>。データを上書きして保存することは確かにパソコンなどの電子機器ではよくやることだ。

だが、人間の場合大きく違う。そんなに便利に出来てはいないのだ、人間というのは。

肉体構造を変えられてしまうというのは大掛かりの手術を一瞬に凝縮されるようなものだ。その痛みはまさに想像を絶する。

リクリエイティブ・ミナの変身にはそんなリスクがあるのだ。普通の人間ならまず到底耐えられない。

「馬鹿か！？ もう怪人はいないんだ、ミナが起きるまで待ちやい話だろうが！！」

仮面ライダーの力ならば人を探すなど楽なものだろう。探索メカのようなものがあるだろうし、それがなくても聴力がとりわけ優れていて人の出す音を聞き取れる仮面ライダーくらい絶対にいるはずだ。ないはずがない、いないはずがない。リクリエイティブ・ミナが変身する必要はない、そんなにも苦しむことはない。

もう怪人はいない、落ち着いてゆっくりと探すことは出来る。ミナの目覚めを待てばいいだけのことだ。

切羽詰まった状況だとしても、ミナには悪いが彼女を叩き起こせばいい。

それを説明すると、またリクリエイティブ・ミナは疑問顔を作った。

「“人間”は……おかしな事をいい、ますね」

影虎は「お前が言うか」と思ってしまった。

「私は……リクリエイティブ再創造。オリジナルのため、だけに生まれ出された……存、在、で……す。私は……オリジナルにとって、便、利な存在であればいい……のですよ」

不覚にも、影虎は恐怖してしまった。そうだ、ミナよりも“ミナのコピー”であるリクリエイティブの方がずっと絶望の要素は濃いだ。

ミナは“世界を絆で救う”と大手を振るって活躍できる。対してリクリエイティブは彼女の引立て役なのだ。

まさに原典オリジナルのためだけに創られた再創造リクリエイティブ。

影虎は彼女から離れてしまった。

その時、それを待っていたとばかりに強い風が吹いた。猛スピードのバイクに乗っているかのような風力だ。

それはリクリエイティブ・ミナが装着するベルトの二つの風車、ダブルタイフーンを回転させる。

ダブルタイフーンを回した風はエネルギーとなる、仮面ライダーへと変身させるためのエネルギーに。

「変身V3……」

リクリエイティブミナがそう言うと彼女の身体が仮面ライダーのものへと変身した。

赤いマスクに緑の複眼、首には昆虫の羽根を彷彿させるマフラー、ビシッと立てられた襟、銀と赤の胸筋、緑色のスーツ。

機械的なフェイスやダブルよりもクワガタをイメージさせられるクウガに近い。こちらのイメージされる昆虫はトンボだろうか。

仮面ライダーV3 ……と言う所だろう。

「V3……ホッパー」

仮面ライダーV3に変身したリクリエイティブ・ミナは右腰部分についていた円筒を天に翳す。

何かがそれから発射されて、ヒュルル……と上昇していった。

おそらくは簡易的な人工衛星のようなものだろう。放たれたものは上空で滞空し、周囲を偵察する。

リクリエイティブ・ミナはその『V3ホッパー』なるものが映像を送ってくるのを待っているのか、しばらく制止していた。

平気な風を装っていたが、影虎の目には、心なしか彼女の脚が振るえているように見えてしまう。

これはずいぶんとまあ厳しい課題が出ちまったぞ、ミナ ……………

影虎は待っている間に頭を掻いてそう思う。リクリエイティブ・ミナがこのままではいけないというのはミナが核司ミナであってはならないのと同様だ。

これからミナと影虎の二人 ……………いや、仮面ライダーみんな  
で彼女も救っていかねければならなかった。

「見つけました。ここからおよそ四キロ離れた所です、方向は北北西」

北北西。影虎は旅人の力量を発揮して北極星を素早く見つけだす。光源が星と月しかないので都会だったがよく見えた。

影虎にとってはちょうど良かった。その方向は自分の愛車を停車という名の置き去りにしている方向だった。

ミナが起きたらそこにいくついでに回収できる。

そんなことを影虎は考えていると　　……それには続きがあった。

リクリエイティブ・ミナのアナウンスが若干焦ったような声に代わる。

「赫塚渡は依然仮面ライダーキバに変身……しかも、キバ最強のエンペラーフォームとなっています!!」

「なに……ッツ!？」

仮面ライダーに変身している。ミナの両親がファンガイアという怪人で、仮面ライダーキバに関わっていることを影虎は聞いていたのでそれ自体には驚かない。

だが、“今も”仮面ライダーキバに変身しているというのは聞き逃せない。

キバに変身するには今や相当なリスクがあるらしい。それなのに、仮面ライダーキバになっているということは。

考えられる可能性は一つ　　……。

「仮面ライダーキバエンペラーフォームは現在、正体不明の怪人……いえ“敵”五体と交戦中!!」

影虎の中に一瞬「どうして世界から侵入者がいなくなったのに敵が!?」という動揺が走ったが、すぐにその解答が出た。

『まだまだ完成には遠いようですねえ……ですが、あの　とな  
ることが出来さえすれば……私も……』

『我が名はN O . 4 8 ……第十七之席・「シグ」と申します。以後  
お見知り置きを……』

この二つは侵入者、敵組織の幹部『シグ』が残していった言葉だ。

まず、前者。少し聞こえない部分があったがこの言葉を解説すると、彼らは何らかの方法を取ることです。自らの“完成度”を上げることができるということだ。

完成度が上がれば上がるほど、完全に近づきこの世界にも長く居られるようになるのだろう。

後者はわかりやすい。敵の組織は幹部クラスが十七人以上いて、『シグ』がトップではないということが分かる。

この二つを合わせて考えてみると。

侵入者の中にはいるのだ、『シグ』よりも高い“完成度”を持ち、完全により近く、この世界に彼よりも長く居られる者たちが。化け物の中でも更に頂点に君臨せしめる強さを持った怪物が。  
トップ  
モンスター





HENSIN〜RE・CREATIVE〜（後書き）

久しぶりにちょっと長いかな。それでも必死に描写押さえたんですがね。

みんなでリナを救おうって言っていますが、リナにもちゃんとお相手がいるんですよね。なんの？って、もちろん恋愛の。

最後に一句。

海賊に ゴーカイジャー

出たらおもしろい

ケイン刑事<sup>デカ</sup> カクレブラック

出ないだろけどねー（つーかカクレンジャー自体出ないかも）。

めっちゃ爆笑なのになあ、鼻をコンセントにしてチエーンソーで牢屋から脱出したエピソードなんか他の作品にはないよ、絶対。

HENSIN〜DARK RIDER〜(前書き)

思いの他、長くなってしまったかな。

気がついたらもうフォーゼのオープニング『SWITCH ON!』  
が発売しているんですね。ANYTHING GOESは今か今  
かと待ち侘びていたのですが……

では、本編!!

## H E N S I N 〱 D A R K   R I D E R 〱

ミナは仮面ライダーディハーツに変身し、オートディハーダーを走らせていた。

寝てしまっていたミナは影虎に『なんで起こさなかったのよ!!』  
という叱責と鉄拳を見舞い、その後リクリエイティブ・ミナから両親が敵幹部五人に襲われていることを聞いたのだ。

可哀相だが、影虎は連れてきていない。オートディハーダーの最高速度は時速五百キロメートル。そんな速度で走るバイクに常人がしがみついている訳がなかった。

心苦しいが、これからは一人の戦いだ。

強大な力を持つ敵組織の幹部、しかも、仮面ライダーファイズでは歯が立たない『シグ』よりも強い怪物が五人。

申し訳ないが、影虎がやって来れなかったのは好都合だった。相手から影虎を守りきれぬ保証は出来ない。

だが、大丈夫だ。影虎が心配することはなにもない。化け物の中でもトップに行くようなものが相手でも、勝ちを取っていける仮面ライダーが何人かいるのだ。

仮面ライダーの力を甘く見られては困る。……まあ、影虎自身も甘く見たりはしないだろうけれども。

しかし、ミナは影虎が別れる寸前に言った台詞が気になっていた。

影虎の勘はよく当たる、その彼が『マズイ予感がする』と言っていた。

マズイ予感、そんなものならずとしつぱなしだった。デイハーツの力を受けとった直後でさえ、隠匿機能で完璧に隠れている時でさえ、だ。

ただ、彼が引き止めようとはしなかったのは気になる。むしろ、直感を働かせてミナを急かすようだった。

一体、彼はどんな種類の未来を感じ取ったのだろうか。

いや動いたらそのうち分かることだから、とミナは考えるのを振り切った。

ミナの両親たちがいるのはミナたちがいた所から北北西に四キロメートルの位置。ちょうどこのまちのスタジアムがある辺りだ。

ビルや家宅などの障害物がたくさんあったが、片っ端からブチ破り、ライダーブレイク。

ミナはなりふり構わず、両親たちの元へ急ぐ。

オートデイハーダーの最高速度五百キロという表記に間違いはなかったようだ。ライダーブレイクも手伝って、一分弱ほどでミナは目的地に到達した。

サッカーなどをするための大きなスタジアム。地元チームの聖地でここで戦えば勝率がいいというジンクスがあるらしい。

そのスタジアムが、

ザガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

という暴音を立て、いや立てさせられて無惨に斬り開かされた。

詳しく言えば、ホールケーキを水平に包丁で切ったようなものだ。ただし、切ったのは包丁などというものではなく、雷が集まりに集まった高エネルギーの刃で、<sup>ブレード</sup>斬られたのは鉄筋コンクリートなどで作られた頑丈な巨大建造物。

プラズマのような光を放つ高熱の刃は確かな質量さえ持っているのではと思われたのに、まったく違うものに変貌する。

暴虐な破壊の刃は吹き荒れる突風に変わったのだ。自然が生み出す驚異の一つ、ハリケーンのような。いや、これは台風を局地的に集中させたという程の猛烈な風力だった。

それが斬られたスタジアムをまるで紙屑が何かのように吹き飛ばした。数トンではきかない巨大な塊が、だ。

それでいて、不思議なことにミナのいる場所は全くと言っていいくらいの無風状態だった。

近くで建造物をまるごと吹き飛ばすような風のレベルを大きく越えた現象が巻き起こっているというのに、その余波がなかった。

余波さえも起きない程、束ねられ、完全無欠に制御されているのだ。スタジアムに六つの人影が見えた。

とはいっても、しっかりと大地に立っているのは五人。あとの一人は五人と少し離れたところで倒れてしまっている。

そして、その倒れている者の後方に守られていたような人影がさらに四人。

倒れているのは黄金の鎧と鮮血の如く赤きマントを身にまとった戦士だった。ただし、見事な美しさが讃えられていただろう黄金の鎧は今や錆びた鉄の鎧の方がまだ見栄えがあるというくらいにボロボロで、マントも途中でビリビリに破けていた。

あの倒れている戦士は仮面ライダーキバ、それもその最強の形態・エンペラーフォーム。ファンガイアのキングのために作られた第二のキバ、その真の姿だった。

加えて、その傍らには一振りの剣が。赤くエネルギ魔皇力に染められているこの剣は『ザンバットソード』。この世で唯一無二の魔剣であり、これもファンガイアのキングに代々伝えられてきたもの。しかも、使い手が真正正銘のキングを継ぐべき男であるが故、力を抑えるためのザンバットがない。

つまり、キバは望める限り最強の状態でした。しかし……………この状況を見るとこれは間違いなく敗北している。それも完膚なきまでに。

「ガハッ……………！！　す、スマネエ、渡……………！！　あいつ目茶苦茶過

ぎるぜ……勝負にも……ならねえ……ッッ!!」

奇妙でへんちくりんな蝙蝠のような姿の、キバへの変身をもたらずためのモンスター、キバット族『キバットバット?世』がそう呟き、変身者から弾かれてしまう。

「渡さん……本当に申し訳ないです……ッッ!!」

続いて、カテナを解放してエンペラーフォームへと究極覚醒させるファイナルウエイクアップ小型のドラン族『タツロット』も弾かれてしまう。

キバは変身を強制解除される。その変身者はミナにとってはとても身近な存在だった。

「お父さん!!」

ミナはオートデイハーダーを降り、仮面ライダーデイハーツの跳躍力と速力をもつて仮面ライダーキバ・赫塚渡の元へ。

渡に守られているかのようなだったのもやはり屋敷で別れたミナの義母親・赫塚深央とラモン、力。そして黄金のオーロラに突っ込んだせいでミナと離れ離れになった次狼も彼らになんとか合流出来たようでちゃんと姿があった。

生身の姿になった渡にミナは近づく。渡はかなりボロボロな姿に成り果てていた。着ている服は引き裂かれて服としての役割をほとんど失ってしまった。全身には打撲傷や切り傷といったものが見られ、筋肉の節目辺りからは夥しい量の血が流れていた。

敵からもらった攻撃によるダメージも無視出来ぬ相当のものだろう。



だが、それ以上にキバへの変身による負荷は深刻そうだった。筋肉が破断したような傷はその負荷によるものなのだろう。

ダークキバに変身した音也もこれほどまでのダメージは受けていなかった。渡は彼よりも長い間キバとなって戦っていたのだ、それこそミナと別れてから今の今まで。

「み……な……？ 良かった、ちゃん……とみんなからディハーツを受け取れた……んだね……」

「う、うん！ それはそうだけど、お父さんは今は動かないで！」

ミナは自分の頭を撫でようとする渡の手を押さえて安静にしておくように言う。ちょっとした動作が今の渡には激痛をもたらすものだった。

愛情を受けることへの拒否。昔のミナならばまずしないような行動だ、昔のミナなら非情なほどに喜んだ行動を今のミナならば拒むことが出来た。

今やミナは愛されるだけを欲するのではなく、愛することを欲する力を手に入れていた。もうミナは昔のミナではないのだ、もう赫塚ミナであるのだ。

渡は少し驚いたが、何かを察したように引き攣りながらも満面な笑みを浮かべ、ミナの愛情に従った。

時と場合というのはミナもわきまえている。愛情を向けられても、この場面では仕方がなかった。

ミナは屈み込みながら、“彼ら”から見れば赫塚渡の前に移り、相手を睨みつける。

ミナの義父親、仮面ライダーキバエンペラーフォームを沈めたのであろう五人の敵がこの場面にはいた。

何か威圧感を放つような行動やポーズをとってはいなかったがどうにも立っているというよりは“君臨している”という言い方がしっくり来過ぎる。

五人の敵は明らかな“別次元”を背中に率いていた。

その姿は異形でありながら人間に近いものがある。秘めているであろう力はダイハーツやキバエンペラーフォームと比べても桁違いであるのに、どうもそれが“管理・習得”された力であるように見えた。

メダルで作られた欲望の王・グリードや古代のサイのオルフェノク、エラスモテリウムオルフェノクのような哀しさが全くない。

まるで自らの意思でこの姿を掌握し、それを完全に制御して見せているような。

その姿を“武器または兵装”としている戦士というような。

「仮面ライダー……??」

そう、彼らの姿は怪人というより戦士・仮面ライダーに程近い。グロンギ、アンノウン、オルフェノク、アンデッド、ワーム、イメージン、ファンガイア、グリード。ミナが会ってきた全ての怪人たちの

傾向と比べると、かなりスマートで人間に近いスタイルをしていた。右から、黒いライダー。その姿は全身に羽根を摸した装飾があり眼にあたる部分はカラスのようだったが、腹部には“三本”の脚とカギヅメがある。

ヤタガラス  
八咫鳥

……………日本の神話上の生物によく似ている。

名付けるなら『仮面ライダーヤタ』。

次に紫色のライダー。このライダーだけ僅かに人間離れしている。右腕が異様に隆起しており、左肩には人間の顔と思わしきものが大量にある。

その姿は面妖で、<sup>スパイト</sup>怨念のようなものが後ろにあった。

名付けるなら『仮面ライダースパイト』。

次に黒ずんだ茶色のライダー。このライダーはミナが山で見たライダーの一体に良く似ている。頭に角が生え、堅牢な鎧で身体を補強させている。

小型の刀を構えていた。その刀にはまだ力が循環し、漲っているように見え、このスタジアムを斬ったのはこのライダーだと分かった。次に深い黄色のライダー。これはこの五人のライダーたちの中でもライダーらしく見える昆虫をモチーフにしている。頭から生えた長い角が特徴だ。

その長い角や独特の紋様からモチーフにしているのはカミキリムシ

だと思われる。

その複眼には何か特殊な粒子が流れているようでどんな速いものでも見逃さず、また必ず仕留められそうだった。

次に、頭の大きな銀色の角が眼を引くライダー。このライダーはある種類の仮面ライダーに属した物だろう。ただ、身体のうちこちら開かれた眼のように宝玉が迫り出している。

異様さはよく見れば小さく点在されている。だが、その一つずつがコンパクトに納められているせいで、見た目はスタンダードなように見える。

細かい部分をピックアップしていけば、このライダーの体積は何倍にも増幅するはずだ。

最後。ギリシャ文字の『Ω』を模したマスクをし、特に巨大な赤黒い複眼をしたライダー。

これはすぐに分かった、ミナが寝てしまう前まで変身していたライダー『仮面ライダーファイズ』によく似た特徴をしている。間違いなく、その種カテゴリーのライダーだ。

この中で一番細身で人間らしい体格をしていたが、まがまがしさはピカイチだった。全身にエネルギーを供給させるストリームは幾つにも枝分かれしていて、人間の皮を剥いだように見えてしまう。

その中にはザラザラした砂鉄のようなエネルギーの塊がジャギ、ジヤギギギギ……と音を立てて流れており不気味で脅迫的だった。

名前もおおよそ分かる。『仮面ライダーグザイ』というところだろう。

この中ではどうもリーダー格であるように見えるが動作の一つ一つにおちゃらけたような軽さがある。

「あつれえ？　もしかすると、核司様のご登場かなあ？　あつぶなくない、わたしら？　どうなの、危ないかなあ？」

合成獣と呼ぶべき不気味で珍妙な姿をした紫色のライダーは言う。  
どうにも問いが多く、声から判断すると変身者は女性であるようだ。

それに反応したのは深い黄色をしたカミキリムシの仮面ライダーだ。

「もしかしくなくても、だ。どうする、不可抗力、であつても、我々が、核司の乙女と、接触することは、禁じられて、いるではないか」

一応は伝わり、話していること自体は『シグ』や『紫のライダー』よりまともである。きつと、この中では至極普通であるのだろう。

しかしどうにも話のリズムを掴みにくいしゃべり方だ。このライダーだけ時間の進み方が断続的でないように思える。

「いいじゃない？　別にんさ、なんかやっちゃったわけじゃないんだから。まあNo.01に知られたらおっかねえんけど」

それを言うのは『秘めたる異能』のライダーだ。声の感じや雰囲気は高校生くらいの年齢をしたちょっとチャライイメージの男といった感じ。

口調も軽すぎて、少し訛ってしまっている。一見すれば彼が一番人間らしいように思えるだろう。

だが ……この男はおそらくは“アギト”の一種だ。その力を持ったことがすでに一つの悲劇なのに、彼には“抱えているもの”が見事になかった。

「……………」

極め付きはこの刀を侍然に構える男か。彼には微塵も人らしさが無い、当て嵌まる言葉の内『戦闘ロボット』という比喻がまだマシな方に位置付けられるくらいだ。

彼はミナを見ずにただただそこにある。仮面ライダーキバとの戦いは自分の放った強烈な斬撃により終わっているというのに、まだ戦いの構えをとかない。

話を聞く分だとミナに襲い掛かってこないのは会うことさえ何者かに禁じられているからであるそうなのだが、その命令がなかったら一直線にミナへ向かってくるにちがいない感じだった。

「かつたるいなあ、お前さんらはよお？ 頭が堅すぎるんだわ、上も、式の奴もどいつもこいつも……。会ったんならしゃあねえのよな、後は成り行きに任せればいいんだわ」

ギリシャ文字の「（グザイ）」をモチーフとしたライダーはそう言う。

ミナが思った通り、この仮面ライダーの変身者が リーダーで

あるかどうかは置いておいて　この中では優位に立っている存在であるようだ。アギトが言っていたのもあり、そういう方向で話が固まった。

「俺はよお、目指してるんもんがあんたらとは違うんだわ。ぶつちやけ言つと今回の進攻もどうだっていいんだわな。分かってるって、逆らう気はねえよ。あれだろ、“最悪の事態”は避ければいいんだろ?」

さらりと、組織は一枚岩ではないことを暴露するような発言をする  
と、仮面ライダーグザイは気だるそうに面倒臭そうにミナの方を見た。

「あれだろ。核司、あいつを殺しちまわない限り、最悪何したっていいわけだろ」

ミナはその台詞を聞いた途端、背中を急に誰かに叩かれたように臨戦態勢を取った。

仮面ライダーグザイに変身する人物　……………この人物はこの世の誰よりも危険な男であると予感した。

この五人の仮面ライダーの中で力や立場関係だけじゃない、“狂っている度合い”も一線を画している。

「No.02、軽薄な、発言はよせ。殺さなければ、大丈夫、などとは言うが、もしものことが、あったらどうする。我々、虚構には、あの核司と、ディハーツが、必要なのだ」

カミキリムシの仮面ライダーが前に出て、早まった行動をしないよ

うにと仮面ライダーグザイの胸部分を叩く。

力や立場はグザイの方が上を行っているようだったが、意見は合っていないらしい。

この組織はなんとも形容しがたい構造をしているように見られた。例えるなら蜘蛛の糸のように多角的で、広く、頑丈な。

グザイは「目的は違う」と言っていた。それに、ミナに会うことを禁じられているというのに『シグ』はわざわざ会いに来た。

これらとこの口論からこの組織が一枚岩の元に集結し、同じ目標のために動いているものではないと分かる。わかりやすい悪の組織ではなく、徹底した犯罪シンジケートと置き換えて考えるといいかも知れない。

目的も信条もてんではばらばら。共通してあるのは悪の意思のみだ。

カミキリムシの仮面ライダーは仮面ライダーグザイの肩を引いて「引くぞ」と命じた。これは組織全体の指示であり、グザイが如何に力と権力を持っていても逆らえないはずだった。

しかし、彼は鼻で笑うかのように微かに顔を動かして、自分の肩を掴むカミキリムシのライダーの腕を払う。

「ああ……テンメエらは分かってないのよなア。さて、ここでおひとつクイズの時間だ。悪ウいことが起きました、さて、それをどうすれば一番いいでしょうか？」

人差し指を立てて、仮面ライダーグザイはおちゃらけた調子でそん



な問いかけを出した。

もし『計画』を実行している最中に禁止事項とされている『悪い事』が起きてしまった時のベストな行動は。

それをどう繋げれば一番良い結果になるか。

それがもうすでに答えだ、と言わんばかりに紫色、鬼、アギト、そしてカミキリムシの四人のライダーは動く。

ライダーはこの場に残っている正義の仮面ライダー、仮面ライダーデイハーツに殺意には至らぬ敵意を向けた。

「ここで、『直ぐに止めて反省します』とか言う弱虫チキンちゃんはお呼びでねえのよな。正解は勿論『良い方に転ばせる』なんだわ」

メリットがあれば、デメリットもある。デメリットがあれば、メリットもある。これはこの世の大抵のことに言えることだ。

つまりは『怪我の功名』を狙うわけだ。計画に支障をきたすような障害が発生した時、直ぐさま障害を排除または避けようとするのが普通の手だ。だが、それを逆手に取ることでプラスに繋がる事が出来る場合がある。上手い具合にデメリットを生かす事が出来るかどうかは本人たちの腕次第。

今回もそれが言えてしまい、更に悪いことに……………彼らは優秀だった、残酷なレベルに昇華されていた。

「それにさ、正当防衛ってのがあるわな。『こいつらは私を殺せない、今の内に一泡吹かせてやるんだから』って息巻いて襲い掛かっ

てくる気満々でいるんじゃない、少々やりすぎちまうのかもしれない話だわ」

「……ッッ!？」

ビクッとミナは身体を　　特に腕を大きく　　無意識に震わせ  
てしまい、相手がテレパシーでも使えるのではと考える。

ミナは一言一句違わないことを考え、この五人の仮面ライダーたちと戦うために先手必勝、とディハーツールに手を伸ばしていたのだ。勝てるとは思っていない。だが、戦っても負けが見えているんなら止めておこう、などと考える程今のミナは大人しい性質をしている。

相手は自分に会うことさえ禁じていたのだから、殺すなどは以つての外であるはずとミナは勘繰り、調子に乗ろうと決めたのだ。今回のほどのチャンスというのはもう巡ってはこないだろうから、噛み付けるだけ噛み付いて一泡吹かせてやりたかった。

なにより、父親をこれだけボコボコに痛めつけた彼らをミナは許すつもりはなく、ハラワタは煮え繰り返っている。

もう、勝てないという理屈で気持ちを押しさえ込むミナではなかった。

「み、ミナ……ッッ止め……ッッ!!　どのライダーでも、あの五人に勝つのは無理、だ……!!」

渡が必死に戦おうとするミナを止めようとした。仮面ライダーキバエンペラーフォームとなり戦って、彼らの実力を表面だけとは言え

知ったのだろう。

だがミナは礼だけ言って、その忠告に反することを決めた。

怖い気持ちは大きくある。かなり大きい。死なないだろうかも知れないけれど、大怪我してしまったり半殺しの目に合わないという保障はない。

だが、それでも戦うことを選びたい。

遅すぎた気もするが、反抗期ということ勘弁してもらいたかった。対する相手もグザイの提案に乗って　　鬼は除いて　　構えなどの戦闘態勢を別に取りつていないものの、いつでも戦える状態にしていた。

言うなれば、獲物を用意周到、虎視眈々と狙い上空で何度も何度も巡回して相手の隙や絶好のタイミングを見計らう能ある鷹のように。その敵意たるや、それだけで吹き飛ばされそうくらいだ。これはもちろん、気持ちの大きさによるものではなく、彼ら自身の戦闘力が規格外であることから発揮されるものだ。

相手が仮面ライダーの姿でも怪人の姿でもなく、普通の人間の姿をしていたとしても帯びる圧倒感は隠せない。姿が見えなかったとしても、それは生存本能を容赦無く震わせる。

「……この世界の、キバを狙ったのは、最初から、これが狙いか、No.02。やはり、食えない男だ」

カミキリムシのライダーが鼻持ちならないという様子で仮面ライダーグザイ、No.02と呼んだ男を睨みつけた。

この方が結果的に良いとはなるかもしれないが、No.02の口車に乗り言いなりになってしまう形になることに苛立っているのだろう。

「考えすぎだつてえ。俺はよお、No.51がキバをぶちのめしたがつているかなと思っただけなのよな」

「楽しければどーでもいいじゃない？ つて私は思うんだけど？ あいつも色々混ぜてるけど、ファンガイアなわけでしょ？」

No.02の言葉に紫色のキメラ仮面ライダーが疑問形が多い文章で返した。『色々混ぜてる』という部分に「私たちがそれを言うか」とカミキリムシの仮面ライダーは反応する。

この仮面ライダーに変身する人物はNo.51と呼ばれているようだ。『シグ』がNo.48であったことを考えると、やはり敵組織の幹部の数は十七ではきかないようだ。

「自己紹介、つてわけんな。面白そうじゃん、虚構で何が起きているのか知ってもらうのも良いかもね。つーわけで、ちわーす核司のお姉ちゃん。No.11つてえまず、核束の結合役リンクをかってんまあす、ヨロシクつすね〜」

仮面ライダーアギトの一種である仮面ライダーが若者のノリとチャライ口調でミナに自己紹介をしてきた。

安易に自分の情報をさらけ出してきたように思えるが、やはり教え

てくれていることの内容はミナには理解不可能なことだけだった。

「……………」

鬼は相変わらずの無言でいて、刀を中段に構えている。その様はもはや戦人の領域を越えて、戦いを司る神仏の像をその身で体現しているようだった。

この者にも『シグ』のような愛称や個体ナンバーのような物があるのだろうか、それを軽薄にしゃべりはしなかった。

「ふん、今はまだ我々は、貴様の諸行を、見逃してやっているが、何か企てているようならば、ただではおかんぞ」

「おおう、怖いよな。だけど、テメエに何が出来るつつうかな、No.79?」

この中で秩序などにも気を配っているのはカミキリムシの仮面ライダーくらいだった。

仮面ライダーグザイはNo.59を見透かしたように鼻で笑う。

「第十八之席、No.51。名は『スパイト』、仮面ライダースパイト」

「第五之席、No.11。名は『デイバイナー』、仮面ライダーフオーチューンアギト」

「……………」

「第二十二之席、No.79。名は『アルセス』、仮面ライダーロ  
グ」

「第二之席、No.02。名は『マリオネット』、仮面ライダーグ  
ザイ。せっかく、仮面ライダーになって、希望に満ちてるとこ悪い  
が、いっちょ絶望に染まってくれよな、核司様」

仮面ライダーは確かに正義の味方だった。ただ、緑川博士が洗脳手  
術を施される前に彼を救出しなければ、彼は悪の組織シヨッカーの  
尖兵になっていたかもしれないのだ。

それを表すかのように、全てのライダーが正義を胸に戦っていたわ  
けじゃなかった。

それらは仮面ライダーの中でも敵として位置付けられ、仮面ライダ  
ーたちはお互いに対立しあったりした。

悪の心を持って仮面ライダーとなった者たち …………… 彼らは正  
義のライダーたちと比較され『ダークライダー』と呼ばれている。

今や正義を大きく上回る巨大な組織に属しているダークライダーた  
ち。

仮面ライダーを軽く凌駕する、絶望という名を冠するに相応しい圧  
倒的力が、ミナに襲い来る。



HENSIN〜DARK RIDER〜(後書き)

先に言っておきます。

バトル部分はネタバレになるので排除です!!

え?一番良いところなのに?となるでしょうが、ぶっちゃけ言つと「書きたくない」んですよ……

現状で、彼らに勝つのは不可能です。チートと呼ばれるライダーたちでも次々に……

では、次回!!



## HENSIN INTEGRATER (前書き)

今回で、敵組織の名前が明らかになります。それは悪を掲げるようなものではなくて……………。

しかし、組織ではありませんが、幹部たちは結構好き勝手にやっています。今回の「ミナに会ってはいけない」というような禁止事項はありますが、基本自由です。

まあ、中にはそれさえ守らない野心家もいたりするのですがね。

では、スタート!!

## HENSIN INTEGRATER

やはりと言うか。

五人のダークライダーの力たるや、常軌を逸して、とてつもなかった。

ミナとリクリエイティブ・ミナは両者が変身出来るライダーの内、最強のライダーに変身して挑んだ。

仮面ライダーカブトのハイパーフォームと仮面ライダーブラックRXの二体である。

どちらも反則級チートと呼ばれる最強に最も近いと呼ばれるライダーだ。  
『ハイパークロックアップ』と『バイオライダー』の力について言えばもはや無敵と言っても過言ではない。

だが、五人のダークライダーたちはこの最強のライダーを完膚なきまでに沈めた。

時間を自由自在に越えられるというハイパークロックアップは仮面ライダーログに破られ、カブト最大技『マキシマムハイパーサイクロン』も鬼に破られてしまった。

自分の肉体を水晶の輝きを持つ水に変え、どんな攻撃でも透過させてしまうバイオライダーも仮面ライダースパイトと仮面ライダーフオーチュンアギトの連携により、敗れた。

このハイパーカブトとブラックRXは百人以上いるライダーの中で

もトップクラスの實力と能力を持っていることは間違いない。

だが、五人のダークライダーたちはそれを悠々と上回ってきていたのだ。

ミナも確信に近い形でそれを予測していたが、渡が言っていたことは本当だった。彼らは仮面ライダーを超越するために作られているのだ。

どんな仮面ライダーでも、彼らに勝つのは不可能なのだ。

それを、ボロボロに痛めつけられ敢え無く倒れてしまい、地面に横たわった状態でミナは嘔み締めていた。

敵がミナを狙ってきていたわけではなく、会うことも禁止、殺すなどは以つての外としていてくれたのは幸運以外の何物でもないだろう。

もし敵がミナの命ないし身柄を狙ってこの世界に攻めてきていたとしたら最悪だった。ミナはこれからだというのに、物語が始まる前に終わってしまう。

敵は強大過ぎる。仮面ライダーが束になっても勝てないかも知れないくらいに。

「はあい、アピールタイムは終了なのよな。どう、核司のおじよちゃん。ビックリしちゃったでしょ、俺達はもう仮面ライダーなんて見てもないくらいに“ぶっ飛んで”んのよ」

仮面ライダーグザイ、コードナンバーを02として愛称を『操り人マリオネット』

形』とする男は遠くからツカツカと歩いてきながら話す。

この仮面ライダーグザイは戦いが始まってからミナやリクリエイティブ・ミナに直接は手を出さず傍観者でいた。

だが、やはり、それでもこの男がこの中で一番危険であることは変わらず、向かい合うことで更にハッキリと分かる。

『ぶっ飛んでいる』。成るほど、この男の言ったこの表現は言い得て妙だった。

この五人のダークライダーたちは力の巨大さ特異さもさることながら、一番に異様で恐るべきことだと思ったのは精神の奥深い所まで及んでいる人格の歪みだった。

どいつもこいつも、戦いを心の底から楽しんでいるか何の感情も入っていないかのどちらかなのだ。両極端の二つだったが、異常さという面ではどちらも似たようなものだ。

この敵組織の幹部の一人一人がとんだ食わせ者だった。およそ、組織として成り立つとは思えないくらいに、一人一人の自由が強すぎる。

「俺らの名前は『インテグレイター』。まあ、長いから縮めて“グレイ”でいいか、結構かかっているとこもあるのよな」

「インテグレイター……“統合者”……??」

インテグレイター

統合者。それが彼らの総称であるらしい。虚構を一つにまとめ、世界を真実に導く者たちというそのままの名前だ。

「ノンノンなのよな、正式には“核東”だ。どうでもいいことだけんどな。で、一つ相談なんだがよ。お前さん、こっちに来る気はな  
いかね？」

「は？」

突然の提案だった。さっきまでミナをいたぶっていた敵の一人の台詞とは思えない。しかも、これと似た感じの言葉をミナはほんの数分前聞いていた気がした。

男は続ける。

「いやいや、自分で言うのはなんだけどさ、俺達の力は相当のもんなんだわ。うん、仮面ライダーじゃあ歯が立たないくらいには。だからさ、仮面ライダーに付くより俺達の方に付く方がお得だと思うのよな」

そうだ、最初から『シグ』もミナを勧誘するつもりで接触してきたのだった。彼はディハーツに変身したばかりで精神的に不安定であるミナを追い詰めてあちら側に引き入れようとしていた。

ミナが自らの意思で彼らの軍門に降ることが、彼ら全体にとってプラスに働くらしい。

「降参しろって言うの？ それとも、世界を半分くれてやるつて奴？」

まだ敵の真意を知らないミナはせせら笑い、相手から情報を引き出そうとした。

「そういうことじゃないのよな。そっちのほうがお得ですよってことだあな。世界融合の主導権はすでに俺達が握ってるのよ。俺達に付いたほうがより早く虚構を一つに出来るのよな」

「虚構を一つに……」

それはリクリエイティブ・ミナによると核司の使命であるらしい。核司は虚構の世界を一つにするために世界によって生み出されたのだから。

ミナは頭の中で「理解、理解……」と繰り返した。順をおって解析し自らの理解を広げていつているのだ。

核司は『絆によって虚構を一つにする』という存在意義を持って生み出された。ミナが虚構を巡ることにより虚構世界の融合の速度は早くなつていくのだ。

それは敵の組織にとつてもありがたいことなのだろう。なにしろ、世界が真実に近づけば近づく程彼らの存在も確かなものになっていくのだから。ミナを殺してはいけなと言われてるのはそのような思惑が背景にあるからだろう。

だが、ミナを強引に組織に引き込んで仕方はない。なぜなら彼女は絆によって世界を繋ぐ存在であるから、それは彼女の意思でしか効果を発揮しない。彼女が望むことで初めて核司としての働きになる。強要することは意味がなかった。これがミナを連れ去ろうとはしなかった理由だ。

世界融合の主導権はもう握っている。ミナはこの言葉に注目してみ

た。この台詞は実は『シグ』もさりとらっている。彼らはこの世界から情報を奪うことでそれを手に入れていたのだという。

それがどういふことなのかは今のところ分からないが、それにミナの協力があれば虚構は融合の速度を早め、真実となることが出来るらしい。

『シグ』は不完全であることを嘆いていた。完全な世界では姿を保つことが出来ない自分を悲しんでいた。もしかしたら、この敵組織はそれを悲願としているのかも知れない。

『私たちはむしろ被害者！！ 哀れみられるべき悲しい存在なのですよ！？』

という、『シグ』の叫び声をミナは思い出す。あれはミナを揺るがすための台詞だったが詐りではない。不完全な彼らは可哀相で哀れみるべき存在であると捉えることが出来るのだ。

核司の使命はまさにそれであるし、良心が痛む所もある。

彼らに協力すれば、虚構世界をいち早く完全な世界にしてあげることが出来る。ミナは使命を遂げられるのだ。

だが……………

「馬鹿言ってるんじゃないわよッ！！」

ミナは仮面ライダーの変身も解けたような状態で倒れたミナを上から見ている仮面ライダーグザイの顔面へと両足でのキックをかます。小娘の蹴りだ、ダメージがあるとは思えないが、仮面ライダーグザイはよろけたように後ろへ退いた。

「なに？ 必要悪だとも言っているつもりなの？ だとしたら絶対にお断りだわッッ！！ 私を舐めないで貰えるかしら！？」

ミナは勢いづけるために仮面ライダーグザイの顔面を意識して地面に平手打ちを決め、その反動を利用して立つ。

時には悪が正義となってしまう場合もあるにはある。

それは人間の歴史を見れば分かることだ。古今東西において英雄と持て囃されている人物でもほとんどの人物は『人殺し』である。

この罪に触れないで大きな栄誉を勝ち得た人物は人類成立から今までそうはいない筈だ。

『人殺し』は罪である、例え殺した人物が世界を滅ぼそうと画策した大悪党でも。

この怪人たちや幹部たちを使った大進攻は仕方ない理由のもとやっているものなのかも知れない。必要悪であるのかも知れない十の命を救うため一の命を奪うような行為なのかも知れない。

そこは、ミナもまだまだ知らないから何とも判断することが出来ない。決めつけてやることが出来ない。



だが、しかし。

この後は『シグ』に言って、一矢報いてやった通りだ。

間違っただことをしているのに、誇るな愉しむな。

自分たちが哀しい存在であると思っっているなら、それを正当化してはならないとミナは自信を持って言えた。

やむを得ない理由があるのなら、遠慮せず話してくれたらいい。無理な相談であればちょっと期待には添えないかも知れないが、分かってくれないと決めつけることはない。分かってくれるかもしれないのだ。

頭の中で『どうせ駄目だ』何て言う理屈に負けてしまっている。やってみないと本当の所はどうか分からないというのに、彼らはその可能性を自らの手で潰してしまったのだ。

もう、彼らは引き返せない。ミナが絶対に引き返させない。

弱い立場であるのなら、頼ってくれたらいい、意見してくれたらいい。こちらは何の理由もなく突っぱねたりなんてしない。そんな事をしたらこちらが悪党だ、責められても仕方ないと言える。

ここは断言だ、ミナは自分たちの住む愛する世界に踏み込み大切なものをいくつも奪っていった彼らの罪を許す気はない。

この世界に生きる人々が彼らの意見を何の理由なく拒否してのけたとしたら、彼らと同じだ。ミナは自分が自分で憎く思うだろうと確

信を持てる。

弱い立場であるのを傘にして、好き勝手に暴れ回りそれでもなお被害者ぶるのは許せない。それを交渉の材料に使うなどは言語道断だ。

それに、ミナが彼らの仲間となるのを拒んだ理由がもう一つある。これが最大の理由だ。

彼らは何一つとして信じていないのだ。

この世界の人々とコンタクトを取り、救済を求めなかったというのも一つの判断材料として十分な事実だったが、ミナはもうひとつ感じ取っていた。

戦いの最中にだ。彼らは今のミナからして見れば驚愕ほどにそれが明らかだった。

彼らは今共に戦っている幹部たち、仲間たちにさえ信頼を寄せていない。この幹部間には絆や信頼というものが無いのだ。

戦っている様子を見ると一目瞭然だ。確かに連携は取れていた、自分の役割をきちんと認識し絶妙な攻勢を有していた。完璧としか言いようがない光景ではあった。

ただそれは絆が生み出すものによるものではない。頭に組み込まれた機械的な思考回路による賜物に過ぎなかった。

彼らは戦ってコンビネーションが求められている場面にすら、相手に毛ほどの信頼も寄せていない。それどころか、敵意さえあるかのようにだった。

対抗心だとか生温いものではない、相手を人間でないように、相手を邪魔な障害物としか見ていないように、冷たい。

そんな彼らが手を差し延べてきても、正直信用が出来ない。しろと  
いうのは無茶な注文だ。

相手が信用や期待を乗せて頼んできているのならその方が良いわけ  
であるのだし、考えるだけの価値はある。

だが、彼らに味方する気にはならない。なにしろ相手は味方と同じ  
くこちらにも信用していないのだから。

彼らには悪いが、ミナは断らせてもらう。

大体、悪の組織を率いるどこかトチ狂った彼らに加わるといのが  
少しミナには抵抗があったのだ。彼らに正義と正当性と信頼があっ  
たなら目をつぶるが、影虎は絶対嫌そうな顔を作るだろう。

やはり、ミナは晴れ晴れした気持ちで、堂々と胸を張り誇れるよう  
に動いていきたい。

勝ち目が薄くたって、結果がどうであろうとも、

ミナは仮面ライダーたちと絆を結びたかった。本気で生きている彼  
らと共にありたかった。

「……というわけなの。分かる？」

ミナは仮面ライダーグザイに自分が考えたことをスラスラと言い連

ねた。

仮面ライダーグザイは頭を掻く動作を三回繰り返した後、腕を組んで唸った。

「うーん……どうも報告と違うつつつか、真逆だつつつかなのよなお前、本当に世界から生み出された“核司”なわけなのかね？」

成るほど、仮面ライダーグザイはミナが数時間前のミナのままであるというのを計算に入れて交渉してきていたらしい。

数時間前のミナだったならば、この交渉に乗ってしまったかもしれない、その可能性は大だ。

世界の操り人形として他人のことしか考えられない状態では彼らの異常さに気づくことさえ出来ず、「そっちの方がいいのなら」となってしまう。

ミナはそれを「美味しいお菓子があるからおいで」と言う怪しい大人にトットコついていってしまう小さな子供に重ねて考え、吹き出しそうになった。

だが、彼らにとっては残念なことにミナはもう生まれている。世界の操り人形“核司”などではない。

自分のことも必死に考え、悩み、葛藤できる。核司などという大きな存在などでは決してない、小さなしかし自分を信じられる確かな存在だった。

「私は赫塚ミナよ。お父さんは天才バイオリニストでお母さんはそ

の妻、私は赫塚渡と赫塚深央の娘で……」

「「仮面ライダーだッッ！！」」

ミナは自分の口から言ったつもりだった。だが、それはミナだけの宣言ではない。

ミナを変え、ミナが決意するのを見て、ミナが仮面ライダーディハーツとなって戦っているのをずっと見守ってきた影虎もだった。

オートディハーダーに乗ることができなかった影虎だが、必死にここまで走ってきたのだ。ミナは「ナイスタイミング」と影虎を指差す。

彼からのお墨付きを貰い、ミナは更なる自信を持ってインテグレイター……“グレイ”の幹部であるという敵に向き合う。

「あああ、困ったことになっちまったのよなあ……。勝ち目がないと分かってくれたなら、すんなり仲間になってくれると思ったのに、これじゃあすかんぴんのよな……」

至極ガツクリ来た様子の仮面ライダーグザイ。

これで彼らに戦う必要がなくなった。どれだけの力の差を見せ付けた所で、ミナは折れはしない。かといって、殺すことも許されていないのでミナにこれ以上手を下すわけにもいかない。

彼らはミナと遭遇してしまった罪だけを残して立ち去らなければならなくなった。

「……………時間も、来てしまったようだな、帰るぞNo.02」

カミキリムシのライダー、仮面ライダーログが言う。No.02を除く四人の幹部たちの姿が少しぼやけていた。

『シグ』よりも強力な力を持つこの四人の幹部でさえまだ完全ではないようで、この世界での限界が来てしまったのだ。

「しょうがないのよな、本当にこれはしょうがないのよな……………」

No.02とナンバリングされている仮面ライダーグザイもミナに背を向ける。

が……………

「本当、しょうがないのよなアアアアッ！？」

仮面ライダーグザイは帰ろうとするそぶりをちらりと見せただけで、即座に身を翻しミナに襲い掛かってきた。

「え……………ッ！？」

ミナは驚いてそれだけ口から出した。ディハーツの変身は解けてしまっている、しかも仮面ライダーグザイの攻撃は敵意のさらに上の殺意も含められていたものだった。

避けられないし、逃げられないし、助からない ……………！！

【アブナイッツ！！】

その攻撃運動に反応して見せたオートディハーダー。シングルモードからバトルモードへ移り変わり、タツクルしてミナをその突進から逃がす。

「ガハ ……ッツ！！」

仮面ライダーグザイの攻撃からは逃げられたミナ。だが、オートディハーダーの必死ぜんそくりやくのタツクルを受けて転がる。

オートディハーダーはミナを逃がしてすぐさま仮面ライダーグザイに攻撃をして牽制。

「ギャハハハハハハハハハハアアアアアアアアッツ！！」

仮面ライダーグザイは狂い死に寸前かのような狂喜を口に出し、オートディハーダーの攻撃を防御しきる。

「No.02！！ 貴様、血迷ったか！？ 核司を殺しては、我々の計画に、大きく差し支えるぞ！！」

仮面ライダーログがグザイを激しく責め立てる。彼だけではない、他のメンバーもグザイの勝手な行動に難色を示し、仮面ライダーフ

オーチューンアギトや『鬼』はグザイに攻撃を仕掛けようとしている。

だが、グザイはととても狂ったように返答した。

「あまアいのよなア、どいつもこいつも!! 従わないなら生かしておく価値はねえ!! ここで殺しておくのがいいんだわッ!!」

「何を言って……!!」

「殺してしまっても、“俺達のように”扱えばいい!! それに、最初からムカつくのよなあッ!! なんの努力もなしに全てを手に入れやがってエエエエッ!! 死ぬ死ぬッ、ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

仮面ライダーグザイは超高速で飛行するオートディハーダーの位置を精確に捉え、何かの光線を浴びせた。

【……………ッッ!!】

途端にオートディハーダーの機械の身体が麻痺<sup>ショート</sup>してしまったかのよ  
うに止まる。何らかのエネルギーがオートディハーダーの位置を固  
定してしまったのだ。

仮面ライダーグザイはオートディハーダーにトドメを刺せるのにそ  
れをせず、ミナの所へ突進する。

「止める、No. . .……………」

「どいてろや、ゴミがッッ!!」





と後退した。

渡、深央、次狼、ラモン、カ、キバットバット？世、タツロット、そして影虎。

彼女の“家族”と呼ぶべき人々が彼女の命を奪おうとする仮面ライダーグザイの前に立ち塞がる。

ディハーツやこの世界に存在する全ての仮面ライダーの誰にも倒すことが出来ないというのに、渡や次狼は怪我をしているというのに、彼らはミナを守る壁となる。

「み、みんな……」

正常で冷静な思考がミナに「危ないから下がっていてくれ」とみんなに言わせようとした。

だが、心の芯に近い部分は真逆でみんなが自分を守ってくれたことに暖かい気持ちを覚えている。

自分はこんなに素晴らしい人々の「家族」なのだ。そう思うと彼らを愛し、彼らと共にありたい、一緒に乗り越えていきたい立ち向かって生きたいと思う気持ちがとめどない。

抑えることは出来ず、また抑える必要がない溢れ出す強い気持ち。

それは彼らが仮面ライダーグザイからミナを守ろうとしているのと同じように、ミナにもう一度立ち上がる力を与える。

「家族」一丸となり立ち上がり、ミナはダークライダーに再び挑ん

だ。

やってやる、勝ちは出来ないかもしれないだろうけど根性を見せて踏ん張ってやるとミナは誓った。

相手は五人から一人に減り、しかも相手はおそらくもうすぐで限界がやって来る。限界がやって来たらさすがに帰るしかなくなるだろう。そうすれば、ミナの勝利だ。

粘って粘って、食らいついてやる。

ミナはそう考えて、ディハーツールに触れた。

意外にも、『操り人形』トレッネジメの男はそのミナを守るうとする人々の姿を見て動きを止めた。

そして、感慨深げにこう言うのだ。

「成るほど成るほど、こいつらの仕業だったわけってことなんだあな。俺と同じように壊れた操り人形でいたら楽だったのに、めんどくさいのよな」

おあいにくさま、という感じだった。

ミナはミナだ、それが何よりも相応しいのだ。それ以上でもそれ以下でもない、ミナがこの男の思う通りでいる必要など一切存在しない。

「やっぱりやくめた、なのよな。こんだけ強い絆を繋ぐ力があるなら何もこっちに引き込むこともないのよな。殺してもし上手かいか

なかつたら、それこそ最悪だわな」

ふ、と男から戦意が消えた。構えていた腕は下ろされ、武器は自動的に彼のベルトに戻る。

「え？」とミナはデイハーツールを押す指の動きを止めてしまった。戦いにならないのなら、それに越したことはない。ミナが勝てる確率はきわめて低いし、先程までとは違って敵が本気なのだから命を落とす危険がある。

戦いにならないなら全てが丸く収まってくれる。あの『操り人形』マリオネットの男は個人的に腹が立つのだが、命を危険に曝してまで戦いを挑みたいとは思えない。

それが、一番良い終わり方だ。

いや ……だが、安心は出来ない。気を許してはならない。

相手は殺しても仲間に入れると襲い掛かってきたというのに、この心変わりは怪しい。さっきも元の世界に帰ると思わせておいて襲い掛かってきたのだ。

相手の男は礼節も協調性もプライドもあつたものではない、『操り人形』だった。

一瞬たりとも気を抜けない。ミナはいつ自分に襲い掛かってくるかわからないと、相手の敵意を感じ取る。

「でもなあ。腹立つのよなあ、その恵まれた境遇には」

敵意はやはり現れて来なかった。

ミナ、には。

敵意もなにもないままに仮面ライダーグザイは瞬間移動ではと思えるような速度で肉薄してきた。

あんまりにも自分を狙おうとしている殺意が事前に感じ取れなさ過ぎたせいでミナはその行動に度肝を抜かされた。

咄嗟に腕をクロスさせて、防御の姿勢をとってしまう。

ブシューアツツ！！ という音が聞こえた。ナニカが何かに突き刺さり、何かが吹き出してしまったような、そんな音だ。

ミナの身体には変化がない。どこも痛い所はなかった。

当然だ。

仮面ライダーグザイが標的としたのは、仮面ライダーグザイが敵意・殺意を向けたのは、仮面ライダーグザイが五本の指で腹を突き刺したの、

全てミナではないのだ、よってミナがそれらを感じ取れるはずはないのだ。

ミナの横 ……次狼の後ろに隠れてしまつような位置にいた  
のはミナの母親、赫塚深央だった。

……その、赫塚深央の腹部に深々と仮面ライダーグザイの  
指先が沈みこみ突き刺さり、命を刈り取っていた……。

HENSIN INTEGRATER (後書き)

カブトファンの皆様、すいませんでした。気がつくとその作品、カブトのみならずワームもかなり不遇ですね。(龍騎やミラーモンスターもか)

違うんですよ、私カブトも大好きです。一番好きな主人公はと聞かれたらまず天道か翔太郎、たっくんの三択になりますから!!

あと、バイオリダーさえこの五人には勝てません .....っ  
てどんだけチートなんだよ。

そして、次回。ディハーツのエネルギー源が明らか!! ヒントはまだこの姿のことを説明していないということと、核司という名前です。

あと、タグです。もう分かりましたよね。クウガになって、ダブルになって、ファイズになって~~~~?

では次回!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8665t/>

---

仮面ライダーディハーツ ~NINTH BIRTHDAY~

2011年11月27日01時45分発行